25年のあゆみ

京都大学総合人間学部
大学院人間・環境学研究科

25年のあゆみ

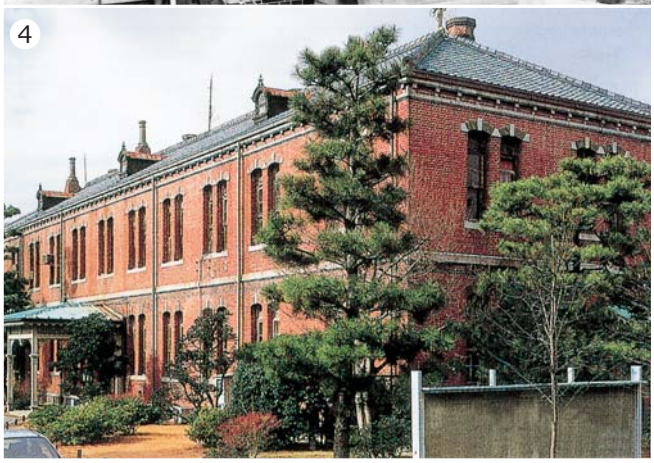
京都大学総合人間学部
大学院人間・環境学研究科

① 吉田分校の正門（現在の正門）。旧第三高等学校の正門を引継ぎそのまま使用した。

② 1967（昭和42）年頃の教養部構内。教養部正門、正面はＡ号館（現在の吉田南総合館）、正門を入った右脇には、現存する門衛所、左手に1989（平成元）年に全焼した尚賢館。

③ 設立当初の人間･環境学研究科。医学部構内の旧生理学教室（現在の南部生協の東側）に置かれた。

④ 人間･環境学研究科があった旧生理学教室（1902（明治35）年竣工）の外観

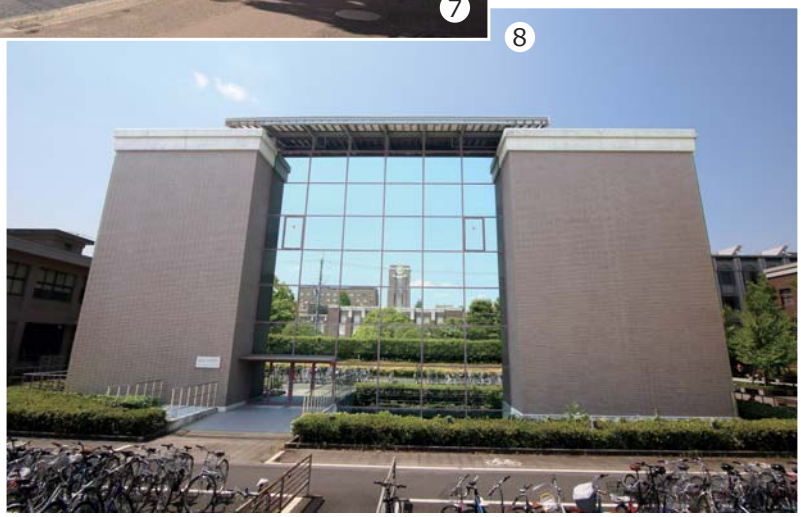


⑤ 総合人間学部の門標

⑥ 設立当初の総合人間学部。A 号館（現在の吉田南総合館）に置かれた。

⑦ 現在の人間･環境学研究科棟（1996（平成8）年竣工）

⑧ 現在の総合人間学部棟（1998（平成10）年竣工）



⑨ 記念式典で祝辞を述べる山極壽一京都大学総長

⑩ 記念式典で挨拶する杉山雅人人間･環境学研究科長

⑪ プレ・ シンポジウムの様子

⑫ シンポジウムの様子

人間・環境学研究科関係建物配置図

ご挨拶

京都大学大学院人間・環境学研究科は平成3年（1991年）4月に、京都大学総合人間学部は平成4年（1992年）10月に設置されました。それぞれが平成28年、平成29年に相次いで設立25周年を迎え、次の四半世紀の道を歩み始めました。

人間・環境学研究科は京都大学における最初の独立研究科として設置されました。当初は人間・環境学専攻のみで構成され、学生定員も30名と少数でした。しかしその後、平成4年に文化・地域環境学専攻が、平成9年に環境相関研究専攻が設置され、平成12年には学生定員が修士課程で144名、博士後期課程で85名を数える研究科となりました。この間、一時期、アフリカ地域研究専攻（特別専攻）も併設されていました。

総合人間学部は、昭和35年の薬学部新設以来絶えていた新学部開設を果たす京都大学10番目の学部として設置されました。人間学科・国際文化学科・基礎科学科・自然環境学科の4学科から構成され、130名の学生定員を有しました。

総合人間学部、人間・環境学研究科は設置の当初から互いに密接な協力関係にあり、双方の教員が協力教員として他方の教育研究に深く協働してきました。そして平成15年（2003年）に両部局は一体化し、教員は人間・環境学研究科に籍を置いて大学院での教育研究を進めるとともに、総合人間学部での教育と研究指導も担当するようになりました。学内他部局からの協力教員、学外機関からの客員教員も教育・研究指導にあたっています。また、このとき同時にそれぞれの学部・研究科の組織を再編成して、総合人間学部は人間科学系・認知情報学系・国際文明学系・文化環境学系・自然科学系からなる総合人間学科のみの5学系・1学科制（学生定員：120名）に改めました。人間・環境学研究科は共生人間学・共生文明学・相関環境学の新たな3専攻制（学生定員：修士課程164名、博士後期課程68名）の構造としました。

総合人間学部では、人間と文明と自然の結び付きに新たな次元を確立するために、人類が直面する様々な問題を人間活動の広範な諸領域を通底させる形で問い直し、これまでの人文科学、社会科学、自然科学を融合した新しい学問の体系を構築することを、すなわち、新たな「人間の学」を創出することを目的としています。

人間・環境学研究科では、環境、自然、人間、文明、文化を対象とする幅広い学問分野の連携を通じて、人間と環境のあり方についての根源的な理解を深めるとともに、人間と環境のよりよい関係を構築するための新たな文明観、自然観の創出に役立つ学術研究の推進を目指しています。

総合人間学部、人間・環境学研究科は、学部・大学院での教育・研究に加え全学にわたる教養共通教育の実働の中核を担うというもう一つの特徴を捉えた新たな試みも始めています。「教養教育に自負と責任感をもち、初学者や一般の人々にも研究成果を分かりやすく伝えることのできる専門家」の養成に注力するというものです。

こうした目標に向かい、これまでに培った基盤に立ち、学生と教職員が互いに切磋琢磨して総合人間学部、人間・環境学研究科の教育と研究の更なる発展を目指しています。これまで総合人間学部、人間・環境学研究科に様々なご支援、ご協力をいただきました皆様に、25周年の機会をお借りして改めて御礼を申し上げますとともに、今後ともより一層のご支援・ご鞭撻をお願い申し上げる次第です。

平成30年9月

京都大学総合人間学部長

大学院人間・環境学研究科長

杉山　雅人

目　次

1．沿革 …… 1

2．25周年記念事業の記録 …… 3
⑴ プレ・シンポジウム …… 5
⑵ 記念式典 …… 32
⑶ シンポジウム …… 38

3．教育・研究を振り返って
⑴ 卒業生・修了生 …… 69
⑵ 名誉教授 …… 100

4．論文等の題目一覧
⑴ 卒業論文・卒業研究 …… 119
⑵ 修士論文 …… 211
⑶ 博士論文 …… 337

5．統計
⑴ 学部 …… 375
⑵ 人間環・境学研究科 …… 379

6．教員一覧 …… 384

1．沿　革

1869（明治 2）年 5月　舎密局開校
1869（明治 2）年 9月　洋学校開校
1886（明治19）年 4月　第三高等中学校開校
1894（明治27）年 9月　第三高等学校開校
1897（明治30）年 6月　京都帝国大学創設
1949（昭和24）年 5月　新制京都大学設置、第三高等学校が京都大学所轄へ
　　8月　吉田分校および宇治分校を設置
1950（昭和25）年 3月　第三高等学校を廃止（以後、京都大学分校と称せられる）
1954（昭和29）年 3月　教養部規程を制定し、学内措置により分校を教養部と改称
1963（昭和38）年 4月　文部省令により正式に分校を教養部と改称
1977（昭和52）年 5月　教養部に教養部改善検討委員会設置
1978（昭和53）年11月　教養部改善検討委員会、独立研究科として科学基礎研究科の設置案を総長へ上申
1984（昭和59）年10月　教養部にかかわる大学院問題検討委員会の発足
1985（昭和60）年 7月　教養部にかかわる大学院問題検討委員会、独立研究科として学術総合研究科の設置構想を総長へ上申
1987（昭和62）年 3月　教養部にかかわる構想検討委員会設置
1989（平成元）年 1月　教養部にかかわる構想検討委員会、教養部改組に向けての具体的構想を総長に報告。総合人間学部新設、教養課程教育の改革、学術総合研究科の基本構想を提示
1991（平成 3）年 4月　大学院人間・環境学研究科が設置され、人間・環境学専攻（第1専攻）を開設。第1期生入学
1992（平成 4）年10月　総合人間学部が設置され、人間学科、国際文化学科、基礎科学科、自然環境学科の4学科を開設
　　10月　人間・環境学研究科に文化・地域環境学専攻（第2専攻）を設置
1993（平成 5）年 3月　教養部廃止
　　4月　人間・環境学専攻に博士後期課程を設置
　　4月　総合人間学部第1期生入学
1995（平成 7）年 4月　文化・地域環境学専攻に博士後期課程を設置
1996（平成 8）年 3月　人間・環境学研究科棟竣工
　　4月　5年一貫制の特別専攻としてアフリカ地域研究専攻を設置
1997（平成 9）年 4月　人間・環境学研究科に環境相関研究専攻（第3専攻）を設置

1998（平成10）年 3月　総合人間学部棟竣工
4月　大学院アジア・アフリカ地域研究研究科設置に伴い、アフリカ地域研究専攻及び東南アジア地域研究講座を移管
1999（平成11）年 4月　環境相関研究専攻に博士後期課程を設置
2003（平成15）年 4月　総合人間学部との一体化に伴う研究科の改組により、共生人間学専攻、共生文明学専攻、相関環境学専攻を設置
4月　総合人間学部の4学科を廃止し、総合人間学科1学科に改組。人間科学系、認知情報学系、国際文明学系、文化環境学系、自然科学系を設置
2004（平成16）年 4月　国立大学法人京都大学設立
2008（平成20）年 4月　人間・環境学研究科に学際教育研究部を設置
2014（平成26）年 4月　「人間・環境学研究科総合人間学部図書館」から「吉田南総合図書館」に改組

2．25周年記念事業の記録

2018（平成30）年3月25日、総合人間学部、人間・環境学研究科の設立25周年記念式典を以下の通り開催いたしました。

1．プレ・シンポジウム …… 午前10時30分～12時

於　京都大学百周年時計台記念館　百周年記念ホール

パネルディスカッション

テーマ：総人、人環の教育経験から得たもの

パネリスト：大淵　和憲　総合人間学部1期生

松本啓二朗　人間・環境学研究科1期生

コメンテーター

学　生：近藤　望　博士後期課程3回生　金澤　木綿　学部3回生

杉谷　和哉　博士後期課程2回生　菊辻みやこ　学部3回生

教　員：阪上　雅昭　教授

司　会：小島　泰雄　副研究科長

2．記念式典 …… 午後1時30分～1時50分

於　京都大学百周年時計台記念館　百周年記念ホール

式　辞：杉山　雅人　研究科長

総長挨拶：山極　壽一　総長

来賓祝辞：江島　義道　名誉教授

司　会：小山　静子　副研究科長

3．シンポジウム …… 午後2時～4時

於　京都大学百周年時計台記念館　百周年記念ホール

パネルディスカッション

テーマ：文理融合・連携の学際・教養教育が目指すもの

パネリスト：浅野　耕太　教授　桂山　康司　教授

石川　尚人　教授　酒井　敏　教授

コメンテーター：

梶丸　岳　助教　佐野　泰之　助教

司　会：安部　浩　教授

4．祝賀会 …… 午後4時30分～6時30分

於　京都大学百周年時計台記念館　国際交流ホールⅡ・Ⅲ

研究科長挨拶：杉山　雅人　研究科長
総 長 挨 拶：山極　壽一　総長
理 事 挨 拶：北野　正雄　教育・情報・評価担当理事
乾　　杯：木下　冨雄　名誉教授
挨　　拶：豊島　喜則　名誉教授　　山田　孝子　名誉教授
謝　　辞：宮本　嘉久　副研究科長
司　　会：小山　静子　副研究科長

以下に掲載しますものは、プレ・シンポジウム、記念式典、シンポジウムの記録です。

(1) プレ・シンポジウム「総人・人環の教育経験から得たもの」

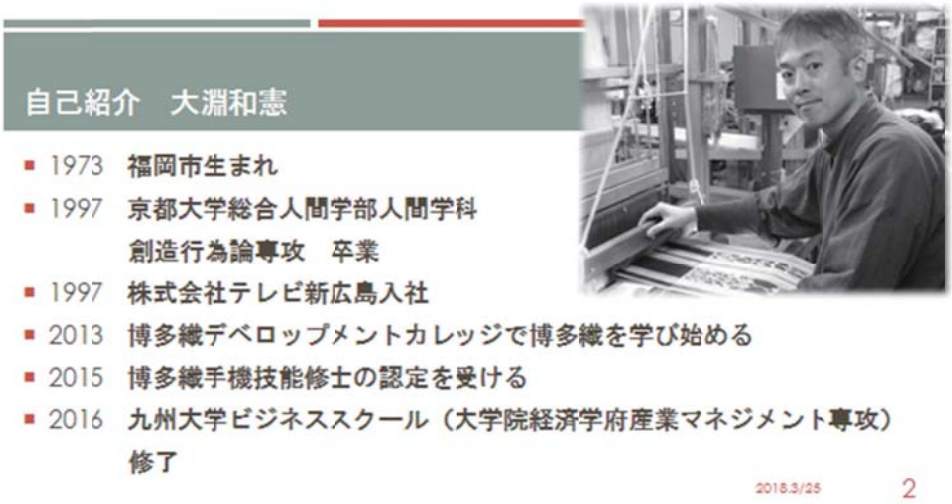
小島：ただいまから、京都大学総合人間学部、人間・環境学研究科、設立25周年記念のプレシンポジウムを開催いたします。司会をします小島です。よろしくお願いいたします。本日のテーマは、総人・人環の教育経験から得たものです。この25周年を振り返るようなお話と、そこから、これからの25年というものを見通すような、少し大きな課題というものも秘めながら、今日のプレシンポジウムは進めていきたいと思っています。具体的には、2名の卒業生の方。ご紹介しますと、まず総人の1期生になります大淵和憲さん、それから、人環の1期生になります松本啓二朗さんにご登壇いただきまして、そうした人環、総人での教育の経験と、25年たってみると、まさに社会の中核で活躍する時期になるわけですけども、総合人間学部、人間・環境学研究科での経験がどう活きてきたのか、あるいは、どうそこに位置づけられるのかということをお話しいただくことになるかと思います。続いて、そうした先輩たちのお話を聞いて、現役の学生たちは何を考えるのか。コメントとしてお話しいただくのが、まず大学院の博士課程の学生さんの近藤望さん。それから、同じく大学院の博士課程の杉谷和哉くん。そして、総合人間学部の学部生の菊辻みやこさん、それから金澤木綿さんにお話をいただきます。そこから議論はより活性化していくのではないかと期待しております。

まず最初に、スライドも出ておりますので、大淵さんからお話を、少し講演形式になりますけれども、いただきたいと思います。教育経験から得たものというお題はお示ししましたけれど、もっと自由にお話をいただくことにいたします。少し内輪話もご紹介しますと、事前に登壇する8名で何をしゃべるかというところまでは打ち合わせをしておりません。ここからどんなふうに展開していくのか、少しはらはらしながら、多分、杉山研究科長は、特にはらはらしながらお聞きかと思いますけれども、そのはらはら感を、ぜひ活かしていきたいと思っております。

今、簡単にご紹介しましたけれども、お話しいただく最初に、少しだけ自分の略歴というか、こんなことをしているんですというのを、お二人、それから現役の学生さんにもお話しいただければと思います。

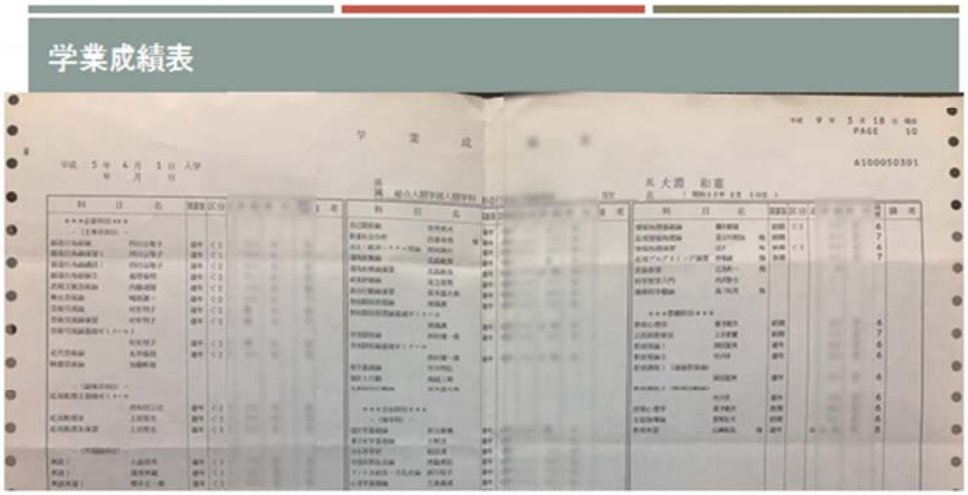
大淵：皆さん、おはようございます。本日は25周年、もう早いですね。設立25周年のイベントということで、大変おめでとうございます。こういった機会に私がこちらでお話しさしていただくという、貴重な機会をいただきまして、本当にうれしい限りでございます。テーマとして総人、あと人環とよく言ってましたが、総人、人環の教育経験から得たものというテーマを伺っていましたので、それについて、改めてどういったことをお話しできればいいかなというのを考えたスライドを作りましたので、それを見ながらお話しできればなと思ってます。

私は総合人間学部を平成5年に入学しまして、平成9年3月の卒業になります。大淵和憲と申します。今、私、実は和服着ておるんですけれども、実家というか出身が福岡市でございまして、福岡にあります伝統工芸品の博多織という織物ですね、これを作る学校に勤めております。そこで手織りの織物を実際に制作する、そういったものを志す皆さんに、織る実技の研修とか、そういったものの授業をする、そういったお仕事に携わっております。スライドの左側がちょっと柄をアップにしたもんですけども、2種類の縞といいますか、献上柄という柄がモチーフになってます。例えばお相撲さんが男帯で締めてるものとかでも、恐らくこの献上柄が入ってるんですけど、この献上柄というのが、博多織の一番の代表的な柄になると思います。



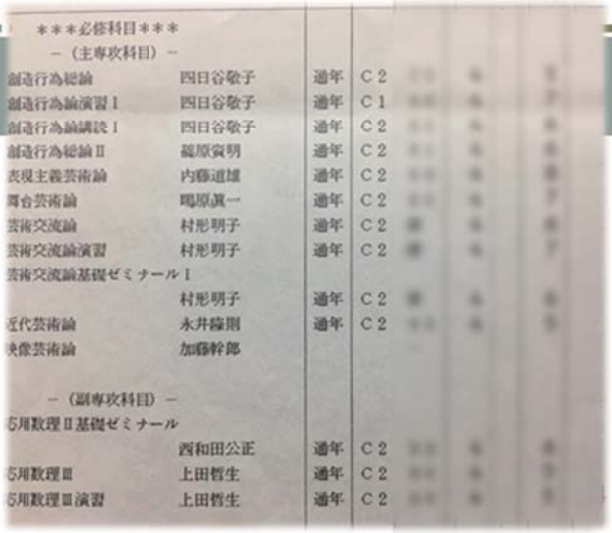
改めて自己紹介をしますと、福岡で生まれまして、総合人間学部の人間学科、文系のほうでして創造行為論専攻という、今もあるのかな、創造行為論の卒業です。当初、もう私はマスコミに入りたいっていう思いが強かったもんですから、広島にありますローカルの局なんですけど、テレビ新広島というところに就職が決まりまして、16年間テレビの世界で、うち9年は報道ですね、報道記者をずっとしておりました。ただ、報道とか、そういった

ものでいろんなものを見聞きすることがあり、ああ、工芸っていいなというか、工芸品というものをよく取材する機会が増えまして、その中で、ちょうど40歳になった頃、2013年、地元に帰るかたちだったんですけども、博多織のデベロップメントカレッジというところで博多織を学び始めまして、手織りを、このように手織りの機があるんですけど、こういったものを習得し、その中で、また改めて今の学問ってどうなってんだろうっていうのも思った次第で、九州大学のほうでビジネススクールに行ったり、ちょっとまた学に近づきたいなという思いを持ちながら、工芸の世界で今、頑張ってるところです。で、今日のような、この総人の教育経験といわれると、私はこちらで教育に携わってる者というよりは被教育経験、ある意味、修学経験という言い換えを、僕は読み替えをしました。ここで学ばしていただいた経験から得たものという立場になると思います。その中で考えると、いろんなこと、思い出は学生生活なんでいろんなものがあるんですけど、飲みに行ったり、いろんな議論をしたり。で、ちょっと言うと、今回のお話をいただいたのは、私の同級生である戸田先生、戸田剛文くんが1期生、同期なんです。今度こういったものあるよというお声かけいただいて、戸田くんどうしてるかなということがあったり、今もういろんな分野で、やっぱり20年以上たってるので活躍してる中で、どうかなと思って学部のことを考えると、ふと出てきたのがこれなんですけどね。



もう成績表が出てきまして（笑）、ああ、こういうのを頑張ったなという、得点もそのまま映してますけれども（笑）。ただ、これを見て、こういった授業あったし、今もあるんでしょうし、教育経験、被教育経験という中を考えるうえでは、こういったこと頑張ったっていうのをどんだけ思い出せるかなというのを、ちょっとトライしてみました。もう赤裸々ですけれども、いくつか映しちゃいますね。平成5年4月1日入学で、卒業するときにもらった成績表です。結構二百何単位取ったんですよね。頑張ってやりました（笑）。単位数じゃないというのはありますけど、本当いろんなものが学べるなという思いは強く持ってました。

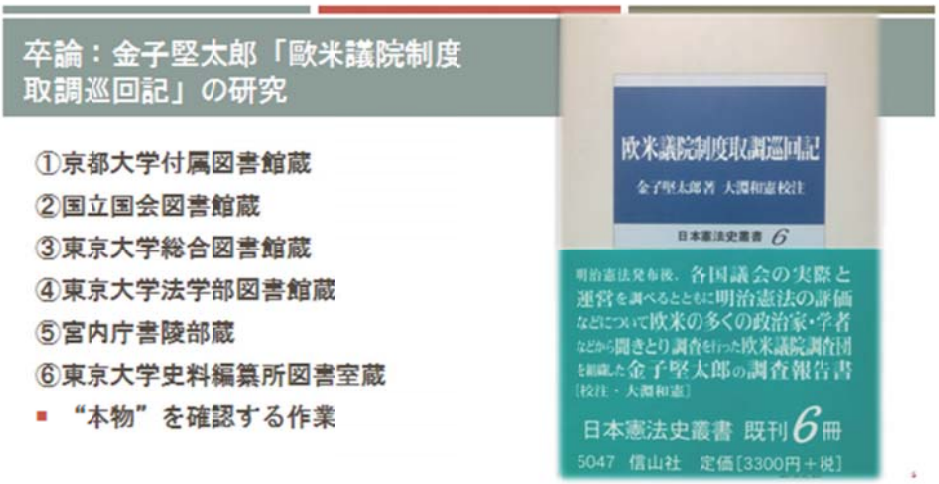
主専攻・副専攻



＊＊＊必修科目＊＊＊						
－（主専攻科目）－						
創造行為総論	四日谷敬子	通年	C 2			
創造行為論演習Ⅰ	四日谷敬子	通年	C 1			
創造行為論講読Ⅰ	四日谷敬子	通年	C 2			
創造行為総論Ⅱ	篠原資明	通年	C 2			
表現主義芸術論	内藤道雄	通年	C 2			
舞台芸術論	鳴原眞一	通年	C 2			
芸術交流論	村形明子	通年	C 2			
芸術交流論演習	村形明子	通年	C 2			
芸術交流論基礎ゼミナールⅠ	村形明子	通年	C 2			
近代芸術論	永井隆則	通年	C 2			
映像芸術論	加藤幹郎					
－（副専攻科目）－						
応用数理Ⅱ基礎ゼミナール	西和田公正	通年	C 2			
応用数理Ⅲ	上田哲生	通年	C 2			
応用数理Ⅲ演習	上田哲生	通年	C 2			

これ、もうそのまま点数が出てますが（笑）、特にこの創造行為論の専攻ということで（笑）、主専攻、副専攻もそのまま出しちゃいました。ただ、80点以上はあっても90点はなかなか。むしろ副専攻のほうが90点いただいたりしましたが。まあ点数のことはさておき、主専攻、これ創造行為論の演習Ⅰ、四日谷先生、ドイツ語の哲学の先生っていうか美学の先生でした。ずっとハイデッガーの美学、ヘーゲル美学、そういったものもドイツ語をとおしてやらしていただく。そういったものに一つは没頭しました。篠原先生はフランス語で、2年目にいらしたので、僕もう講義だけだったんですが。ちょっと下がると村形先生の芸術交流論。イギリスとか、英語の授業でした。あとでもふれようと思いますが、村形先生、昨年もう鬼籍に入られたということで、新聞記事で僕知ったんですけど、今はそういった話ができないなというのはとても残念なんですが、すごく勉強さしていただいた先生です。当初は僕、映像芸術論っていうのはもう落としましたけど、映画をしたいなと思って京大きたんですね。それまで、東京にしか映画の学科がないと思ってたんですけど、総人で映画ができるっていうふうに、それで入ったんですけど、やっぱり映画ってもっと見てないとだめだったなというので、ちょっと途中で失望しまして、失望っていうか、僕がもう自分にですね。自分が、ああ、もうちょっと難しいなと思って路線変えた思い出があります。あと、もう単純にふれますけど、副専攻は逆に数学です。数学の応用数理というところ。数学は数学で、私、文系で入ったんですけど、もちろん微分、積分してないし、何か後ろめたい気持ちがある中で、この上田先生の授業とかは集合論とか論理学とか、そういった話をしていただく先生で、こういった部分で数学にはすごい広い世界あるんだなというので、応用数理の基礎ゼミナールも、英語の文献で数学をちゃんと読むっていうもの。こうして思うと、外書講読ってすごく印象に残ってる。本物の原典にあたるってこういうことだなって、20年たったけど、ああ、何かああいう分野の話したなっていうのを、すごく思い出しました。外書講読って、私は今でも大事な授業じゃないかなと思ってます。

そのほかは、もういろいろありましたが、もう懐かしいと言うとあれですけど、ドイツ語、イタリア語もよかったですね。すごく充実してました。もう1個、ちょっと言いたいのは、真ん中の列の真ん中のほうに環境政策論、北畠先生のものがあって、これにのめり込んで、フィールドワークとかいろいろ行ってましたね。北畠先生は社会システムの講座（社会システム論専攻）っていうことで、今申し上げました四日谷先生の美学の授業と、この環境政策論、北畠先生の授業と、文化交渉史の村形先生の授業。これを、ある意味、三つずっと並べてやってました。3回生終わって、うわ、どげんしようかなって思ったんですが、ずっと迷ってたまま3回生の終わりまできたところで、ああ、やっぱもう文化交渉史にしようっていうふうに決めたんです。そこまでいろいろ選択肢を持ったまま、3年間はずっと過ごしてた思い出があります。その文化交渉史で一応書いた論文が、金子堅太郎っていう人に関する研究でして、これ実は刊行されたんですね。卒論はちゃんと本になったんです。



スライドの右側に憲法史叢書ってありますが、卒論はその6に入れていただいて、刊行されました。この帯の内容がわかりやすかったんで、宣伝という意味じゃなくて載せまし

た。明治憲法発布以後、各国議会の実態と運営を調べるとともに、明治憲法の評価などについて、欧米の多くの政治家、学者などから聞き取りを、この金子堅太郎が行ったんですね。これは、調査を行った欧米議員調査団を組織した金子堅太郎の調査報告書です。金子堅太郎という人は、私の出身高校である福岡の修猷館の先輩です。そういった縁もあって、ぜひやってみたら？というふうに言っていただいたのが村形先生でした。実際にそういう一次史料を、実際に手で書いた史料とかを読み進める、探し求めるっていう作業は、実は3回生までにやってませんでしたので、うわ、確かに面白そうだけど、どうするんだろうっていうのは、すごく思いました。手探りではじめたんですけれども、京大に、附属図書館にガリ版刷りで写した、硬い筆で書いた、つまり鉛筆みたいなので書いたガリ版刷りの本が1個あった。同じようなガリ版刷りで刷られたのが、その2番、3番、4番ですね。国会図書館とか東大の図書館にも2冊あった。こういうのをどんどん本物を求めて探していったんですね。結構交通費がかかって（笑）、こういうのにお金を使うっていうのは、何かすごいなと思ったんですけど。ただ、それはガリ版刷りの本でしたんで、全部原本というか稿本がある。稿本があるっていうことで、そのガリ版刷りの元っていうのをやっぱ見なきゃいけないんじゃない？っていうことで、私の伝手では全くそれはかなわなかったんですが、宮内庁にある筆で書かれた本があるということで、もう先生がいろいろ、本当にありがたいことに宮内庁にも連絡をしていただいたりとかして、それがお盆で出てきましたね。お盆に載って本が出てきたんですけど、そういったのを実際見さしてもらったり。ただ、その宮内庁の本にも原本があって、最終的にはこの6番目の東大の史料編纂所にある本がそうなんですが、いろんな付箋がついてるんですね、もう。この付箋を全部並べて書いたのが1から5の本だったっていうのがわかった。これをもう夏休み終わってからやったんですが、卒論なんで、もう半年あったら、もっとできたんでしょうけど、すごく没頭してやった思い出があります。それは、マイクロフィルムとか見てもわかんなかったんですね。やっぱ本物を見て、あ、付箋の色が違うとか、墨の色がここだけ違うとかいって、その前後がわかるっていうのを。言いたいのは、本物っていう話なんですけどね。本物を見るっていうことでした。卒論はそういった中で終わった中で、テレビ局に入りたかったんで、進学っていうのもすごく思ったんですけれども、結局、テレビ局で16年間、うち9年間が報道だったので、ニュースを、取材を担当しました。広島の局だったので、割と被爆者の方のお話とかを聞く機会が多くありまして、そういった昔に生きた方のお話とかを聞く中では、その方本人に聞くっていう、そういった機会が、あ、こんなに昔のことを知っている方に会うって、あるようでなかなかないし、今逃したら聞けないんだなとかいうのも、すごく感じました。

その中で、いろんな工芸とかの話を、工芸品とか地元に、広島にもあったので、取材をするうちに、ここ①に書いたんですけど、カメラで工芸品を撮るんですけど、ぴかっと光ったり、そういうものを撮るためには、すごい照明を当てたりして、何とか絹の輝きとか、

いろんな色のものを写そうとするけど、どうしても写んないんですね。まあ当然です。3次元のものを、ある意味2次元のフィルムに、フィルムっていうかビデオに映すっていうのは限界はあるんですけど、わ、やっぱ本物じゃないと伝わるもんないなっていうのは、すごく思いました。その中で、私もそういう歴史の話とか、あときちんと書かれたニュース原稿だったり、そういう昔の文章は読んでたつもりなんですけど、この織りの世界にも、多分皆さんご存じだと思うんですが、杼とか、この織りの独特の用語があります。きへんに予と書く杼ですね。これ、スライドの右の柄の織ってるところにあるものでして、要は、杼ってシャトルですね。横糸入れる、あの道具のことを杼っていうんですけど、あ、これヒって読むんだって（笑）。読めない漢字がまだあって、糸に忍って書いて綛っていいますね。かせ繰りっていうんですけど、あの真ん中におっきく丸い状態になってるものを、下の小さい木枠に巻き取るっていう、それを、一かせ、二かせっていうふうに数えて、そのかせを枠に巻くっていう。ああ、また工芸っていうのも、すごいいろんな世界があるなっていうことにちょっと興味を持った。あと帯はそろばんで織るっていうのは、博多織の人間国宝の先生で、小川規三郎先生という先生にいただいたお言葉なんですけど、いろんな色を使う中で、実は緻密に本数を数えて、ここからここまでは糸を数える。そういったもので本物はちゃんとできてるんだよと。あの右側の柄の帯も、絹糸、細い糸を大体7800本使ってます。それを細かく通して、で、横糸を13本ずつ通していくんです。ああ、こんなふうにできてんだなというのが、現実をきちんと見たらわかってくる。ニュースってどうしてもそういのをふんふんとわかっても、軽く取ってしまってそれで終わってしまうので、やっぱり本物を見たくなってしまった。伝統と伝承を、こういったものを受け継ぐっていう人、この世界にはなかなかいなかったっていうのがあって、自分も40歳になったんだけど、ちょっとやってみようかなということで、この、今、博多織の世界5年目です。5年前まで着物を着たことありませんでした。そんな中で今やってる感じです。ここでも、本物を確認して記述する作業っていうのは、まだ、もしかしたら総人でやったことに、何かそういった延

長線にあるのかなというふうに考えた次第です。

じゃあ最後になります。改めて総人での教育経験っていうのは、ちょっと私、そういう学的用語もあったかなって思うんですが、教職の教育学部の授業でも、そういったのちょっとなかったんで、単純に言い替えて修学経験というふうに思って話してますけど、今後に生かすためにどうするか。やっぱりいろんな意味で本物を見る。本物を見るっていうのは、教育する立場から言うならば、さあ、今回この外国書講読の授業をしましょう。この外書が本当に授業時間をずっと使って読むに値する本なのかっていうのは、実は教えられる側はわかんなくて、ただ、先生は、いや、これは今、読んどくべきだっていう本物さを、本物の価値っていうのを理解されたうえで外書講読の本に示されてたんだなと。そういうのを、すごく今思いました。で、そういう学生からすると、本物に出会う機会、これは、いろんなところでいろんな授業が、もうさっきもいろんな授業並んでましたけど、実はもうないよっていうことだったのかなというふうに思いまして、本物に出会う機会っていうのは、京都にいるといろんなお寺があって、いろんなもの見れますけど、なかなか実はいろいろ見れない。ていうか見れるんですよ。見れるチャンスはあるんだけど、実はもう努めて見に行かないと見れないのかなということをすごく思ったりしてました。そんな中で3番目が、謝恩のない人間は人間ではない、というのは金子堅太郎が母校の修猷館で講演をしたときに話した言葉なんです。何事についても、ありがたい。もう本当に声かけていただく、いろんなお話をしていただく、いろいろもう厳しく教育に対して話していただく。そういったことをいただくっていうのは、もう謝恩以外でも何でもない。そういったことで、半ば私にとっては村形先生、もう就職して以降あまり会う機会もなくて、学びを一緒に過ごさしていただいた先生に、どう謝恩の思いを表すかってすごく大事だなと思いますし、今いらっしゃる学生の方には、もう本当、先生とは長いつき合いをして、一生懸命頑張ったあとでも、またそのおつき合いを続けることで、幸せな豊かな学的経験というのを膨らますことができる。そういったことをお伝えしたい。そういったことをすごく感じたので、そういっ

た思いを持って臨んでいただいたら、総人で学ぶっていうのが、より充実したものになるんじゃないかなというふうに思って、それをメッセージとしてお伝えしたいなと思った次第です。本物っていうキーワードと言うと変ですけども、そういったことで、このお話、以上になります。ありがとうございました。

小島：ありがとうございました。

会場　（拍手）

小島：それでは、続いてお話をいただきたいと思います。松本さん、お座りになったまま、こちらでも、どちらでも。

松本：こちらで話します。

先ほどご紹介にあずかりました松本と申します。私がどんな経歴で、現在どんなことをしてるかということは、お話の中で申していきたいと思います。

私は人間・環境学研究科、人環の1期生でありまして、人環は総人よりも2年早くできていますので、私が人環に入ったのは27年前になります。今日は総人、人環について、私が経験してきた個人的なこと、個人的な考えしかお話しすることができませんが、そこから少しでも皆さんのお役に立つようなことを言うことができたらと思っています。どうぞよろしくお願いします。

まず、私が人環に入った頃のことを思い出してみますと、人環に入る前に、私は文学部の学生でした。文学部の学生で、哲学を専門として深く勉強していこうと思いまして、大学院に進学することを考えていました。ところが、当時の文学部の大学院入試というのは大変厳しいものでありまして、大学院の学生定員というものがあっても、それが埋められるということはなくて、将来研究者として十分にやっていけるような、ごく少数の人しか合格できませんでした。文学部はそうでしたし、恐らくほかの学部でも当時は同じような感じだったと思います。ですから、私の文学部の先輩などを見ても、大学院に入るために浪人して、必死で勉強してから進学するという方が結構多くいたように思います。それで私も、数年は浪人することを覚悟して、大学院進学を目指していました。

そんなときに、教養部が改組されて新しい大学院、人間・環境学研究科ができるという話を聞きました。それで私は、今から考えますと、それまで文学部の大学院にいこうと考えていたわけですから、どうしようか、どっちにしようかと迷ってもよさそうだと思うんですけれども、当時、私はあまり迷うことはありませんでした。というのも、私が文学部ではなくて人環にいこうと考えたのは、自分の勉強したい専門分野の研究をしている先生が人環におられたからでした。哲学といっても、いろいろなタイプの哲学がありまして、私が関心を持っていた分野の先生は、文学部ではなくて人環のほうにいたのです。それで私は純粋に、自分の勉強したい分野だからという、そういう理由で人環に進みました。

それで、最初の人環の1期生というのは人数も非常に少なく、確か32名だったと思いますが、まだ人環の独自の建物もなくて、事務室や大学院生の勉強部屋なんかは、医学部構

内の古い小さな建物を借りているような感じでした。そんなふうに人数が非常に少なかったものですから、院生同士も学問分野が違っても仲よくして刺激し合いましたし、先生方にも大変丁寧に指導してもらいました。また、今ではちょっと考えにくいかもしれませんが、事務職員の方々とも非常に仲よくなって、しょっちゅう飲み会をして、いろいろなお話を聞かせてもらいました。今となってはとても楽しい思い出です。

そのように、初期の人環はとても活気がありましたので、院生はよく勉強して、就職の状況も随分よかったのではないかと思います。私自身も指導教官に尻をたたかれながら、――私の指導教官は人環の初代の研究科長でもあった竹市先生でありまして、非常に厳しい先生でありましたから、怖い思いをしながら――必死に勉強しました。それで就職としましては、まず人環の助手になりました。助手の間は半分学生のような感じでしたが、もとの教養部の頃から続いていた助手会というのにも参加させていただきまして、自然科学系の助手の方々とも、懇親会の席などでよくお話しさせていただきました。今日の午後のシンポジウムでお話しされる石川先生も、その頃の助手会の仲間でありました。これもよい思い出です。

そうして5年間人環の助手をしまして、そのあとで大阪教育大学に就職しました。そして現在に至るわけですけれども、教育大学に就職したのは、特に私が教育に関する研究をしていたというわけではなくて、たまたまなんですけど、実際に教育大学にいってみて、教育大学というところは、ある意味で総人や人環に、とても似ているような感じがしました。といいますのも、教育大学には総人や人環と同じように、文系、理系さまざまな分野の学生、教員が、同じキャンパス、同じ建物の中で勉強、研究しています。文系、理系だけでなく、美術や音楽の分野もあれば、スポーツの分野もあります。そうして同じ場所にいるわけですから、違った分野の方々と一緒に仕事をする機会も多く、そうすると、自然に異なる学問分野の方々とお話しをして、考え方の違いを感じたり刺激を受けることも多くあります。教員はそうですし、学生のほうも、一応自分の専門分野というのは決まってるんですけれども、専門分野だけではなくて、それ以外の分野も、文系の学生であれば理系の分野も、理系の学生であれば文系の分野も、広く勉強しなければなりません。

そういう意味で、教育大学と総人、人環はとても似ていると感じました。似ていると思うんですけれども、しかしながら同時に、大きな大きな違いも感じます。それは何かといいますと、専門教育、より正確に言いますと、職業教育があるかないかということです。大学の教育には、大雑把に言いますと、広い意味での教養教育と職業教育とがあると思うんですが、教育大学では、教養教育と並んで職業教育をきちんとしています。教育大学での職業教育というのは、もちろん学校教員という職業、小学校、中学校、高等学校の教員になるための教育ということです。カリキュラムを見ても、半分以上はそういう職業教育の授業です。それに対して総人、人環、特に学部である総人の教育は、特定の職業に直結しているものではないと思います。これは、京大のほかの学部と比べてみればよくわかると

思いますが、例えば医学部では、医師を養成するという職業教育をしっかりしていますし、工学部では、専門的な技術者を養成していますし、経済学部でも、広い経済界のさまざまな分野で活躍する人材を養成しています。ところが総人の教育は、そういった何か特定の分野の職業に直結しているものではありません。教育大学と総人は似ているのですが、教育大学の学生は「学校教員になるために勉強している」のに対して、総人の学生は「勉強するために勉強している」、「学問するために学問している」といった感じでしょうか。ここに大きな違いがあると思います。

ただ、こうした特定の職業に直結していない、職業教育がないという総人の特徴を、私は悪いとは思っていません。むしろ、「学問をとおした教養教育」という大学教育の本質を、純粋な仕方で実現できるところではないかと思っています。

大学は、研究機関であるとともに教育機関でもあります。京大では研究者になる人が多いですが、全員が研究者になるというわけではありません。ですから、研究者という職業人の養成ということをメインにして、研究ばかりしているわけにはいきません。大学院の人環ならばそれでいいでしょうが、学部の総人ならば、そういうわけにはいかないと思います。やはり大学は教育機関として、学生をきちんと教育しなければなりません。そして大学での教育の特徴は、「学問をとおした教養教育」ということにあると思います。単なる職業教育ではありません。また教育大学に関係させて言いますと、教員になるための職業教育だけをしてるのでは、それは大学ではなくて教員養成の専門学校だと思います。教育大学が大学であるためには、職業教育だけではなくて、「学問をとおした広い意味での教養教育」、それは文系の学問でも理系の学問でもいいと思っていますが、学問をとおして自分でものごとを根本的に考えることができるための教育が必要であると思っています。そうした広い意味での教養教育が、大学の中心にあるべきだと私は思っていますし、総人はそういうことができる学部で、その意味では、大学教育の中心にあるような学部だと思います。

ただ、このように総人は最も大学らしい、大学の中心だといっても、そこに属している学生にとっては、自分の職業については、あらかじめレールが敷かれているわけではなくて、自分で開拓していかなければならないので、大変な苦労をすると思います。しかし、こうした苦労があるのは、何も総人だけではありません。京大の中でも、職業教育がメインになっていない文学部や理学部、あるいは他大学での教養学部のようなところでは、どこでも同じです。ですから総人の学生は、職業選択という点では大変な苦労があるとは思いますが、自分が将来就く職業については、大学でいろいろなことを学びながら、早いうちからいろいろな可能性を考えていったほうがいいだろうと思います。専門的な研究を深めるために、人環や他学部の大学院、あるいは他大学の大学院に進学してもいいでしょうし、あるいは、職業教育に特化したような法科大学院とか教職大学院とか、そういうような大学院に進学してもいいでしょう。そのほか、いろいろな可能性を早いうちから自分で

考えていくのがいいだろうと思います。

最後に、このプレシンポジウムの趣旨として、「25周年を機に改めて自分たちのアイデンティティを考えてみる」ということがあるようですが、私個人の考えとしましては、今お話ししたような総人の特徴は確かにあるとは思いますが、ことさらほかの学部との違いを強調して境界を設ける必要はないし、自分たちのアイデンティティということを、それほど気にする必要もないのではないかと思っています。例えば、総人でやっていても理学部でやっていても数学は数学ですし、総人でやっていても文学部でやっていても哲学は哲学です。ただ、同じ学問でも、その中には、研究者によってより細かな専門分野というものがあります。初めにお話ししたように、私が人環にきたのも、私の関心ある分野を専門としている先生が人環におられたからであって、その先生が文学部におられたら、私は文学部にいってました。私と違って学部から総人に入った方は、この学部はどういう学部なんだろうということをより強く考えるんでしょうけれども、そこは先ほどお話ししたように、職業のための教育をするのではない、大学の中心、最も大学らしいところで学んでいると、そういう自負を持って、あとは自分の将来のいろいろな可能性を自分で考えていけばよいのではないかと思います。参考になるようなお話ができたかどうかわかりませんけれども、以上です。

小島：松本さん、ありがとうございました。

会場　（拍手）

小島：総合人間学部の学生さんの一つの特徴というのは、自主性というのが非常に強い。その象徴が、総人合宿と呼ばれる新歓行事を自主的に運営していることがあります。その総人合宿を再興された細川由貴さんに登壇いただいてお話しいただく予定だったんですけれども、お仕事の都合で、ご本人も大変残念がっておられましたけれども、今日ここに来ていただくことができませんでした。その残念な気持ちをお伝えしたいと思います。

で、ここからは、現役の学生さんが先輩たちのお話を聞いて何を考えたのか。先ほど少し聞いたところでは、ノーアイデアで来ているというような話もありましたけれども、本当に自由に何でもしゃべってもらう時間にしたいと思います。当然学生さんからは、今日お話しいただいた2人の先輩に対する質問だけではなくて、部局の特徴とか、あるいは、期待であったり不満であったり、問題提起というのもあると思います。そのために私たちも強力なメンバーを1人、こちらに準備しておりまして、阪上先生に、組織を代表というわけではなく、教員からお話しいただく役をお引き受けいただいております。あと、今のお二人のお話の中にも出てきましたように、総合人間学部の特徴というのは、教員との結びつきが非常に強いんだと。どの先生と、一つの授業であっても出会いというものが学生生活の中に生きていくというお話があったと思いますし、あるいは、大淵さんのほうからは「本物」という言葉が出てきました。私はそれを、松本さんが「教養」という言葉で言い替えられたようにも思いました。こうしたことを考えながら、これからのディスカッション

を進めていければというふうに思っています。では、口火を杉谷さんから切っていただければと思います。よろしくお願いします。

杉谷：人間・環境学研究科、博士後期2回生の杉谷と申します。私、実は学部が京都府立大学に所属しておりまして、大学院から京都大学の人間・環境学研究科に進学させていただきました。その私が最初ということで（笑）、こっちも先生からのご指名なので。学部が一応京都府立大学の公共政策学部というところでして、そこも新しい学部ではあるんですけれども、どちらかというと公務員を養成することに力を入れるというような学部でしたから、どちらかといえば学生の大多数は、入った当初は公務員になりたいなというふうに考えていたと思います。大学院にきてから、ちょっと総人の学部生と接してみて、人数が多いということもあるんですけれども、皆さんすごく多種多様というか、本当に皆さんいろいろで、総人の学生ってこうって言うのも難しいというぐらい、本当にいろんな問題意識、価値観、夢を持ってる学生さんがすごくたくさんいて、そのあたりは、ああ、なるほど、これが総合人間学部というところかというふうに思った記憶がございます。あともう一つ思うのは、総合人間学部の学生さんとしゃべってると、自分のやりたいことが結局わからないというか、何をなせばいいのかわからないということを、すごく悩み相談で聞かれるところもありまして、特に院生にもなりますと、それ一本でやっているというふうに見られるし、実際そういうところもありますから、なぜそんな熱心に一生懸命になれる熱いことがあるのかと。研究っていうのは、そんなに面白いのかということを率直に聞かれることも少くはありません。なので、そこは常に問題になると思うんですよね。

今日は最初の大淵さんのお話で、自由にやっていく中で本物というもののキーワードを見つけて、そこが教育のいいところだったというふうにおっしゃっていただきました。そのあとの松本先生からは、広い意味での教養教育というものをやっていったことによって、今現在のご職業にもいろいろつながるところがあったというお話だったと思います。で、あえてちょっと挑発的な言い方をさせていただきますと、ここに登壇されてるお二方は、多分総合人間学部、人間・環境学研究科の教育の成功例だと思うんですよ。ただ、常にものごとの上には政策、私、専攻は一応公共政策なんですけど、政策のうえには常に成功と失敗というのがつきものでして、なかなかうまいこといかなかったというか、ずっと迷い続けてどうなったのかっていう人も、きっといなくはないとは思うんです。つまり、そういった人たちを今後どういうふうに考えていけばいいのか。で、ますますそういった方々も増えていくということも考えられますので、そういった方々にどうやって教養教育というのを通じて手を差し伸べていくとか、あるいは、かかわっていくという姿が必要なのかなっていうのを、つらつらと考えていたりしました。すいません、ややまとまりのない話でしたけども、とりあえずは以上になります。

会場　（拍手）

小島：ありがとうございました。特定の質問が出た場合には、すぐにお答えいただこうと思う

んですけれども、今の杉谷さんの話だと、成功例とかいう話がありましたけれども。これにどう答えていくのか、ほかの方の質問を聞いた後で考えていければというふうに思います。それでは、続いて近藤さんからお願いします。

近藤：人間・環境学研究科の博士課程3回生の近藤望です。私は、専攻として地球科学、アースサイエンスをやっておりまして、理系ですね。ただ、私は総合人間学部から京大にきたんですけれども、最初は文化人類学をやろうと思って文系入学しました。もともと人間の歴史とか生命の歴史、地球の歴史、そういう歴史、どうやってわれわれがここにいるのかということに興味があって、いろいろと理系の授業も受けた中で、2回生で理系に転向して、今は地球科学の博士課程を卒業して、これから研究者としてやっていきたいなと思っているところです。今回のお二方のお話ですが、最初の大淵さんのお話に、織物の話がありましたね。私自身、大学で勉強をしてきた根底には、いろいろな見方で世界を見て、世界を再構築し理解したいという思いがありました。織物というのも、いろんな色糸、縦糸、横糸を組み合わせて世界を一つ作っていく。で、大淵さんがおっしゃっていた本物というのは、緻密にちゃんとあるもの、手ざわり、光、見えるものというものを緻密に構築していって作り上げる自分の世界というものなのかなと、私自身はそう解釈しました。

そういった中で、じゃあ京大の中で教養教育、そういった世界観を作るという取り組みはどうかというと、総合人間学部は文系、理系いろいろありますね。なので、見方としてはいろいろと提示されると思います。そういった、いろいろな色の糸があるなということはいえます。ただ、そういったいろいろな見方を提示されたあとに、どうやってそれを自分で解きほぐして構築していくか。そこまでのところ、つまり伝統的な織り方というのはもちろん教えられますが、ただ、自分でどうやって自分の世界観を織っていったらいいかというのは、教えられるものではない。だから、杉谷くんがさっき言いましたけれども、ずっと何をしたらいいか迷っている。でも、それは大学の期間っていっても人生の中で短い期間なんですよね。だから、その中で自分の中で消化しきれなくてもいいし、大淵さんも大学を卒業されてだいぶ経ってから織りの世界に入ってるわけですし、そうやって人生の一つの見方なり世界観なり、そういった糧となるものを大学で提示して、学生の方でも、それを糧として吸収できるような下地があることが重要なんじゃないかなと漠然と思いました。私の場合は、よく杉谷くんにも成功例と言われてしまうかもしれないんですけど、ある程度自分のやりたいことをできたという例ではあります。ただ、自分のやりたいことが見つからない、あるいは完成しないということを不満として捉える学生がいるのは事実で、そういった学生に、大学の期間内で完成することが一つの成功なのではないと伝えることが必要かなと思います。教養教育というのは人生を作っていくものだと私は思っているので、長いスパンで勉強、研究などを捉えるようなことが大事なのではないかなと思いました。何か感想になってしまいましたが、すみません。

会場　（拍手）

小島：ありがとうございました。教養というのは教えられるわけではないという近藤さんの言葉は重いですね。じゃあ私たちは何を教えるんだろう、午後にそのあたりは先生方が熱い議論をしていただけることになっています。先生方はきっと教えられると思っているのかもしれませんが、このあたりは、私も午後を楽しみにしたいと思います。

近藤：教えられるものはあります。伝統的な考え方とか先生方のやってきたこと、そういったものは教えられるものです。ただ、そういったものを教えられて、教えられた本人は自分でちゃんと作らないといけないというふうに考えてます。もちろん、私も教えられた立場です。教えられて、これから育てていこうと思っている立場です。

小島：ちゃんと「謝恩」の気持ちがあるということは大切かと思います。では、続いて菊辻さんからお願いします。

菊辻：総合人間学部3回生の菊辻みやこと申します。私は文系入試で総合人間学部に入りました。ですが、1回生の頃は物理に傾倒しておりまして、それをずっと学んでいて、2年生からはプログラミングをやろうと思って学んでいました。今は音声学をやろうと思って、もうあっちこっち行ったり来たりしてる身で、やっと行き着く場に来たかなって感じはしてます。それでほかにやってることは、京都大学、変人講座というのを皆さんご存じでしょうか。あまり、え？知らないかな。結構有名だと思うんですけど、それの司会を1年間ずっとやってて、4月からも引き続きやっていけたらなと思っています。今日は変人講座でずっと着てた服で来て、これも変って書いたネックレス着けてるんですけど、これが私の衣装だと思っています。

変人、変人じゃない、総人の、総人のいいとこと悪いところっていうのを、2人の話を聞いてずっと考えてたんですけど、総合人間学部のいいところっていうのは、大淵さんが本物に出会う機会を大切にするって言ってたのが、まさに総人のいいところかなと思っておりまして。ていうのも本物、リアルな場、リアルな研究者の姿とか、研究にふれることができるのが総人の最大の魅力だと思うんですね。私も1回生の頃、物理やったり、2回生の頃プログラミングって言ったんですけど、そのときに自分でやったんじゃなくて、先生に近づいて、先生と仲よくなってって言ったら変な言い方ですかね。先生の力を借りてやらせていただいたっていうのは結構あって、自分から、先生、私こういうことやりたい、やらせてくださいって言ったら、それを包み込んで、やりたいだけやらせてくれるっていう環境が整ってるのが総人だと思います。ほかの学部の人から聞いた話なんですけど、例えば自分が、工学部の何々学科っていうところの出身で、でも、僕はその学科じゃなくて別の学科の先生のところに、ちょっと話を聞きに行きたいんだとか、そこの別の学科にあるものを使わせてもらいたいんだっていったときに、先生、僕、何々学科なんですけど、ちょっとそちらの何々を使わせてもらえませんかって言ったら、君は別の学科だからだめだって言われたっていう話があるんですけど、総人はそんなこと全然ないんですね。私が文系出身だろうが物理の先生は受け入れてくれるし、別の学問にちょっと興味があって話を聞き

たいなと思ったら、もう朝から晩まで話を聞かせてくれる。そんな感じにオープンな場、開かれた場であるのが総人だと思ってて、総人固有だと思うんですね、これは。それがいいところかなって思います。やる気がある学生に対しては、与えてくれるものは最大限に与えてくれるのがいいところです。逆に悪いところは何かなって考えたら、松本さんは、人数が少なかったから、みんなで仲よく集まってお話しができたみたいな話をしてたんですけど、今の総人にそれは全くないです。人数少ないから集まってっていうのなくて、本当にそれぞれが孤立してる気分ですね。もしかしたら、仲のいい数人で集まって何かコンパとかやったりしてる人たちもいるかもしれないんですけど、私の周りで集まってる総人生っていうのは、そうやって集まってわいわいするみたいな人はいなくて、知り合いだけど、集まったりしないけど、友達だけど、クラスメイトだけど、うーん？みたいな感じだから、もうちょっと総人として集まれる場があればなって思うんですけど、これは私自身が孤立しているからなのでしょうか。どうですかね。そこがもうちょっと学部として何かできたらなっていうのが思います。本当にコメントになってしまいしました。ありがとうございます。

会場　（拍手）

小島：ありがとうございました。最後に出た孤立というのは、私たちも教員としてどう向き合うかというのは、考えるところがあるかもしれません。実際に先輩たちが大学生活において思い浮かべる、例えば友達というのが25年たつと、どういう状況にあるかとか、こんなこともお話しいただけるといいのかもしれません。続いて金澤さん、よろしくお願いします。

金澤：はい。総合人間学部、現3回生で、金澤木綿と申します。今は国際文明学系に所属して、日本史のほうに進もうかなというふうには考えているんですけれども、ほかの皆様方がすごく志を持って入ってきていらっしゃる中、私は何の志もなく、総人を選んだ理由も、何かいっぱいいろいろなことができそうだからという理由で、高校から大学を入る時点で興味の範囲を絞り込めなかったので、全部できる総人に入ったらいいんじゃないかという非常に安直な考えで入ってしまったがため、今、杉谷さんが最初におっしゃられてたように、何をすればいいのかわからないという苦悩を1回生の頃からずっと今も持ち続けている（笑）、という学生です。で、やってることを、菊辻さんが変人講座のお話をしたので、私もちょっと、やってることについてふれようかなって思うんですけども、京大生協から1回生向けに提供してるX-academyという講座の実行委員を2回生の頃からずっとやってまして、1回生の人たちと、教員であったりだとか院生さんであったりだとか、そういう人たちとの出会いの場を設けているということをやらしていただいてます。

興味を絞り込めないというところで、先ほど菊辻さんが、やる気のある学生にとっては、先生はいろいろなものを与えてくれるみたいなことをおっしゃってくれてたんですけれども、私はあまり自主性があるほうの学生ではないかなというふうに思っていて、やる気、勉強をしたいなという気持ちはあるんですけど、なかなか先生に近づいていけなかった人間なので、そういう意味でも、1回生に出会いの場を与えようと思ってX-academyに参加したっ

ていうところはあるんです。自主性はないけれども、やる気はあるんだみたいなところをすくい上げてくれる制度として、結構理学部だったら先輩とのつながりだったりだとか、ゼミに入ってとか、そういうところがあったかなと思うんですけど、総合人間学部は、いまいちそういう横も縦もつながりが緩すぎるせいで、路頭に迷ってしまう学生が出てしまうっていうところが結構弱点としてあるのかなっていうのは、今まで出てきたお話を聞いてるうえではありました。でも、悪いことばっかり言っていても、あまり仕方がないかなと思うので、よいことも考えたんですけども、いっぱいいろいろな学部の専門家、隣の研究室の先生が全然違うことをやってたりするっていうところは、非常に本当にそのとおり面白いことがあるなと思っていて、私がやりたいと思っている日本史は専門科目の数がとても少ないので、確か2か4くらいのものしかなかったので、もう必然的にほとんど強制的に別の授業を取らなければ卒業単位がそろわないという状況なので、もう無理やりにでも違う興味に開眼させられていく感じが、ある意味、人間性を育ててもらっているなという感じはしました。という感じで雑駁になってしまったんですけど、こんな感じでいいんでしょうか。ありがとうございました。

会場　（拍手）

小島：ありがとうございました。金澤さんが、いろいろできそうだと思って総人を選んだ。これは総人の正当な選び方だと思うんですね。その一方で、多分今までの4人の現役学生から出てきたのは、どう選んでいくのか、むしろ迷いながら選ぶことの大切さみたいなことも出てきたのかもしれません。まず論点を絞らずに、今の現役の学生さんの話を聞いて、25年たつと、違ってるなと思ったのか、あるいは、いや、25年たっても、同じようなところはあるなというのか、どのように考えられたのか。あとはもう個別に思いついた点を、松本さんから、よろしくお願いします。

松本：総合人間学部の学生の特徴として、何でもできそうだからというので総合人間学部に入学して、学部の間も、自分の勉強したいことを決められないような学生がいるということを、総人の教員の方々から、たびたび聞くことがあります。私はそれを聞いて、非常にもったいないなと思います。学問をしていくと、いろいろなことを考えることができるようになっていく、いろいろな風景というのが見えてくると思うんですが、そうやって自分でいろいろな景色を見るためには、まず自分で歩いていかなければならないんですよね。だから、何かやってみる。主専攻、副専攻っていうのがあれば、それをやって、途中で迷ってもいいわけです。迷って引き返して別の道を歩んでいくこともできると思う。まずは歩いてみないことには迷うことすらできないわけであって、ですから、もったいないなっていうことを思います。

それで、総人の特徴として挙げられていた、もう一つ、各専門間の垣根が低いということは、確かにそういうところがあると思います。ただ、そういうことが可能になるための条件といいますか、それは恐らく教員の側にあると思います。教員同士が、平たく言うと、

仲よくなければそういうことができないと思います。あそこの研究室、あそこの分野の学生にこういうことを言ったらちょっと問題が生じる、などということを感じてしまうといけないのであって、教員同士の理解といいますか、そういうのが学生に多様な選択というものを可能にする条件になっているだろうなということを感じました。

小島：大淵さんからお願いします。

大淵：いろいろな今の状況を、すごいなって思いながら聞いてました。本当（笑）、いろんな状況がですね。特に何が、じゃあ、ここで何をやればそれこそ成功なのか。これじゃだめやったな、失敗やなっていう、何が成功であるのかっていうふうに自分を今考えると、その都度その都度、あ、これ成功したな、これだめだったなっていうのはあるけれども、まだまだこれから成功することもっとあるだろうし、ああ、またこんなことは起きたくないけど、起きるんだなっていうのは、その時点時点は成功、失敗あるんだけど、まだまだそれを総括する時期ではないなっていうふうに私は思ってる次第です。それをトータルで判定するには、まだまだ私の今の時点で頑張らなければ、やんなきゃ、いろいろトライしなきゃだめだなっていう、まだその判定はできない、それは思いました。ここで取り組むにあたって、私は、だからローカルの会社、テレビ局辞めて、収入的にはもうほとんどゼロになりました。それは成功でしょうか、失敗でしょうか。ただ、今やってること、すごく充実してます。前の会社に行って、そんな笑顔は会社では見れんかったねって言われたら、何が成功なのかなって思うことは、すごく日々あるんです。だから、今そういう意味では、また自分にとって幸せは何なんかなという、そこを考えること、それは別に今の時点でもそうだし、学生時代のときにも、ああ、もうちょっと幸せっていろんな、まあ、いろんな議論は日々されるとは思うんですけれども、改めて幸福論とかいう言葉になると、ちょっとまた学的になっちゃいますが、改めて自分にとって幸せって何だろうなと思うことを、よく思いました。

その中で、私もいくつかの専攻内の授業とか並行してやってましたけど、総人でできたことっていうのを今思うと、1個のぶんに絞るにあたって、二つの授業、お二人の先生には、すいませんが、学問をやめますってちゃんと言いに行ったんです。あ、つまり学問をやめますじゃない、その授業を取るのを終わりにして、こっちで卒論を書かしてくださいっていう、なかなかそういうふうに、途中までやってたものに、ちょっとけじめつけさせていただくっていうようなことって、あまりないんじゃないかなと思うんですね、単一の学部であると。そこの3回生まで、それぞれの授業の先生、ゼミまでやって、そこで卒論書いてほしいっていう思いで教えてくださってたんだなと思った中で、すいませんが、ちょっとやめますっていうふうに。つまり卒論はちょっと別で書きますっていうときは、そのときの私にとっては、すごいもう残念な経験でした。でも、それだけのけじめをつけて何か一つ絞ってやんなきゃいけないっていう決意ですね。それを持つっていうのは、その時期にできたのは、学部生ではあるんですが、学部生でもこんだけできるんだぞっていうのを、ついてる先生

にもそうですし、それまでほかの授業を取ってた先生にも、別にうわーって見せるわけじゃないですけど（笑）、こんだけやりましたよというふうに、卒業のときにちょっと言える。そういう思いを、この学部ではそういった経験さしてもらったなっていうのは思ってるんで。それも残念なことなのでしょうか。自分にとっては貴重な経験だと思ってたりします。総人ならではの経験だったのかなと、ちょっと思い出しました。

小島：ありがとうございました。大淵さんのほうから、成功について少し語っていただいたので、松本さんのほうからも、成功について。

松本：それはわかりません（笑）。何をもって成功というのかっていうことですよね。それはわからないです。というか、何とも言いようがないですね（笑）。

小島：これが多分正解ではないけれども、重要な答えではないかと。阪上先生からも何かお話しになりたいことがあるかと思うんですけども。

阪上：ここで若干話の流れを変えようかなと思います。大淵さんと松本さんのお話を伺っていて、懐かしかったです。ちょうど僕が着任したのが1996年で、ですから大淵さんのような、総人1期生がちょうど卒業する年だったんです。その頃のことを懐かしく思い出しました。例えば大淵さんの成績表とか見ていると、あの当時の、懐かしい先生方のお名前も出ていました。あとは、あの頃のカリキュラムも、一応それらしいかたちを作っていたんだなとか、そんなことを感じながら拝見させていただきました。個人的には、その頃と今の総人、いわゆる黎明期の総人、人環と、それから現在の総人、人環って、僕としては何となく雰囲気が変わっているような感じがあるんですね。大淵さん、松本さんは、いわゆる1期生ですから、ご苦労もされたと思うんですが、同時にその時期しか体験されてないわけで、当時1期生ならではの、いろんな貴重な体験とか、あるいは悩みとかあったと思うんで、その辺のことをお伺いしたいです。

それからもう一つは、具体的な話になるんですが、こういう質問です。なぜ総人を選んだのかという問いについては、今の現役の学生さんたちも常に投げかけられています。当時の総人では、もう一つ、総合人間学ってあるのかとか、そういうことを、よく教員も学生も議論していたと思うんです。そういうこともかなりまじめに。だから、総人って何なのか、それは例えば総合人間学ってあるのかと。そういうことについて、例えば総人、人環の1期生である大淵さんとか松本さんが、当時、学生とか院生の間でどんな話をしていたのかというのを伺いたいと思います。それは、多分、今の現役の学生さんにとっても、とっても有益じゃないかと思うので、その辺のお話を伺いたいと思います。よろしくお願いします。これは余計なことなんですが、当時の特に総人の学生は、かなりそういうことを、ある意味でまじめに考えて、あるいは揶揄したこともあったようです。お面白いエピソードとしては、多分1期生の卒業式のときですけど、これでやっと私たちは総合人間になりましたというような横断幕が卒業式に出たということまであるらしいですね（笑）。だから、多分そういう意味で、いい意味でも悪い意味でも、総合人間学どういうものなのかについ

て、1期生っていうのは、もう人環も総人もそうで、考えざるを得なかったようなので、その辺のことを現役学生にお伝え願えると、とっても貴重な話になると思うので、よろしくお願いします。

大淵：ありがとうございます。総人というふうに、まだ短縮にするとあれですけど、総合人間学部っていう、まず言うのが恥ずかしかったのがありましたし、通じなかったのは、すごく当時もう極めてありました。ただ、そんな中で私たちのクラスとかで、むしろ響きがいいねっつったのは、もう本当 Integrated Human Studies っていう、その言葉のほうがみんな、それならわかるねっていう。だから、確か夏過ぎて僕らトレーナーを作ったんですね。そこも総人って書かずに Integrated Human Studies っていうふうに書いて、あ、これならみんなそろいで意思統一と言ったら変ですけども、これでみんな呼び合えるねみたいなのを（笑）、ちょっとそういった過ごした時期がありました。実際に総合の人間学なのか、切れ目の話もあって、総合人間っていうのはつながって、人造人間じゃないですけど、そういう人間の種類なのかっていう、そういうふうに響くことがすごくあって、いや、でも当時、総合的な人間学だっていうふうな捉え方よりは、総合人間っていうふうにまとめた言葉で聞いたのが、すごく多かったと思います。今はちょっとどうなのかなという。

松本：私は人環ですから（笑）、総人ではなかったわけで。困ったことっていうのは、あまり経験してないと自分では思っています。ただ、自分の経歴を、学歴なんかを紹介すると、人環って何？ということはよく聞かれて（笑）。でも、それを、むしろ説明してお話しするチャンスだなというふうにして考えていまして、そのようなときによく言っていたのは、この人間・環境学という名前を考えた方からも聞いた話なんですが、「人間・環境学」だと。実はこの「・」が重要なんだという話はよくお聞きしました。それで、私もそれを受け売りして、「・」こそが重要なんだと。つまり、人間と環境というもの、人間と自然、主観と客観というようなもの、それらを最初から分けたものとして、文系の学問は人間を研究する、自然科学系は自然を研究するというのではなくて、人間と環境というものが分かれていく、その根源というもの、そこを見据えて、それぞれの学問分野での研究をするんだと。そういうところに、この人間・環境学研究科というものの独自性があるということを、人環って何？って言われたときに、時間のあるときは、そういうことをお話しするチャンスだと思って、むしろそれを積極的に生かして、お話するということが多かったですね。ただ、人環ができて、そのあと総合人間学部という名前の学部が2年後にできて、この総合人間学部という名前に関しては、── こんなことをここで言うのは申し訳ないかもしれませんが、── うーん、人間学っていうのは、あんまりよくないんじゃないかなというふうに、今でも思ってます（笑）。まあ、こんなこと言っては申し訳ないですね。

小島：ありがとうございました。今、阪上先生に流れを変えていただいたので、さらに流れをこちらも変えようと。大体教員はこのレベルの仲のよさなので（笑）。せっかくですから、お二人から現役の学生に聞いてみたいことというのがあると思うので、ちょっとお考えい

ただいてる間に、今、総合人間学って何かというのは、学部生の中で話し合うことってあるんでしょうか。菊辻さん、何か。

菊辻：学部生の間で総合人間学部とは何かですか。私たちの学部のやってることは何かということについて、話し合ったことはないです。でも私自身、総合人間学部は何をやっているのかなって思ったときに、総合人間学を学んでるんじゃなくて、総合的にいろんなことを学んだ人間になれる学部だっていうふうに理解しています。私が総合人間学部に入ろうと思った理由は、いろんなことをやれるからっていうのじゃなくて、一つのことをやりたくて、この学部しかできないことがあるって思ったから入ったんですけど、ちょっとこれ話したら長くなっちゃうんですけど、いいんですかね（笑）。私が総人に入ろうと思った理由は、小学校6年生の頃に遡るんですけど、そのときに、私には好きな男の子がいました。その男の子の似顔絵を家に帰って思い出しながら頑張って描くんですけど、なぜか絵が下手で、どうして私の頭の中にはこんなに鮮明に彼の笑顔があるのに、私は描くことができないんだろうと。で、もし自分の脳みそとコンピュータをつないで自分の想像が画面に出るような仕組みがあったら、もうそれで印刷ボタンを連打すれば彼の笑顔は量産されるわけですから、もうどうしてもそれを作りたいと思って。で、コンピュータと脳科学と心理学を融合して学べる学部はどこかなと思ったら、京都大学の総合人間学部しかなかった。だから、私は総合人間学部を選んで、そこを受験して入ってきて、いざ脳科学をやろうと思ったんですけど、なぜか物理に浮気をしてプログラミングやって、今、音声学に流れ着いちゃってっていう、結果的に総合的に学ぶ人間になっちゃいそうなんですけど。ていう感じで、何を言いたかったんやったっけ（笑）。

小島：いやいや、私たちの学部教育の可能性を語っていただいたというふうに思っています。例えば松本さんが言っておられたような、人間・環境学の「・」は重要なんだというのは、知識のレベルではもちろん知っているかと思うんですけども、近藤さん、人間・環境学というものを今の学生さんも議論しますか。

近藤：学生の間の議論というか、私も「人間・環境」の「・」が重要なんだというのは、結構ご高齢の先生から聞いたことがありまして、私もそのときに、あ、そうなんだ、それが重要なんだ、そういうコンセプトで人間・環境学研究科があったんだなとは思ったんですけど、それで私自身、話し合うというよりは、じゃあ自分がやってることはどうかということで考えたときに、さっき主観と客観、人間と自然とおっしゃったんですけど、私たちの周りには自然とか環境とか物理現象とかいろいろあるわけで、ただ、あるものを理解するのは人間で、ある程度主観であったり歴史的な要素であったり、そういうのが絡むっていうのは、どうしても考えることですね。で、そういうのをいろいろな視点から研究しているというので「人間・環境学」なのかなと、ぼんやりと考えていたっていうことはあります。学生の間で、その「・」が重要らしいよというのを飲み会の席で話したことはあります。だから、そういうコンセプトというか、人間・環境学がどういった経緯で、どういった思

いでできたのかというのを、今の学生も知っている人は知ってると思いますし、ただ、それを全員で共有する、積極的に共有していこうっていう動きはないのかなと思います。

小島：ありがとうございました。多分これで質問を考える時間は取れたかと思うんですけれども、じゃあ松本さんのほうから。

松本：これもよく総人の教員の方から聞く話なんですけども、人環の人気がない、総合人間学部から人環に進む人が意外に少ないというのを聞くんですね。何でなんだろうかと思います。先ほど最初のほうで、総人、人環では教員と出会う機会が非常に多くあるという話がありましたけど、京大の総人、人環は、教員の数が多く学生の数が少なくて、非常に恵まれた環境にあると思います。教員のところを訪ねていってゆっくりと個人的にいろいろと話ができるということは、人数の多い私立大学だと、とても考えられないことだと思います。だから、自分で勉強しようと思えば、いくらでも深い勉強を、親切に指導をいただいてできるはずなのに、総人の学生は学部で学んだことを深めて、もっと専門的により深く勉強できる人環に進む人が意外に少ないっていうのは、どうしてなんだろうかなと思いますけど、どう考えますか。

小島：それでは金澤さんに、この総人の学生から見た人環というのは、どんな距離感なのかについて、そんな複雑に考える必要なく、自分の視点からお話しください。

金澤：その言葉がすごく私は意外で、人環の人たちが2人ともうなずいてるのを、学部生として見ながら、えー？って思ってたんですけど、私が総人から今、人環に進もうとしてるので、そんなに人気ないんですかって逆に聞きたいくらいで（笑）、でも、私は日本史をやりたかったので人環か文学研究科ですごく悩んで人環にしようと思ったのがあって、やっぱりフットワークが軽いんですよね。文学研究科に進んでしまうと史学という見方で固定されてしまうので。でも私がやりたいのは、史学もやりつつ考古学もちょっと見つつみたいな感じで、いろんなところに足をかけていきたいなと思ったときに、言い方は悪いんですけど、縛られるのがしんどいっていうのがあって。そういう意味でも、人環にいったら、もうちょっと楽にやれるんじゃないの？みたいな話を聞いて、あ、じゃあ、もう人環にいこうというふうに、文学部からの、人の話も聞きつつ決めたので、そんなに人気、逆にないんですか（笑）。

小島：ありがとうございました。少しデータでお話をしますと、今、総人から人環に進学するのは大体30名前後ですので、大体2割強から3割ぐらいの間ですね。ほかの大学院にいくのがプラス10名程度ということですので、この数値自身は、あまり昔から変わってないのかなと、思います。教員側からは、もっときてほしいけれども3割だよねというのが、そういう話につながったのかもしれません。そういう意味だと、金澤さんは、別に特殊な例ではなく、それなりに大学院に進学はしていただいているということかと思います。では、大淵さんから。

大淵：また若干突然かもしれませんが、今の総人、人環を色で表すと、自分にとって何色かな

というのをちょっと思いました。もちろん、いろんなものが集まってる中で、いろんな色があると思うんです。どうですかね。いや、もちろん、すいません、ホームページとか、そこまでじっくり見てないんですが、もしかしたら学部の、ファカルティのカラーがあるかもしれない。もう一つ言いますと、色に加えて、今の時点で、4人の皆さんがどの風景を写真に撮っておきたいですか。あるいは、どの対象を写真に撮っておきたいですか。私いたとき、まだスマホはおろかケータイもなかったんで、パシャパシャ撮ってないんですね。だから、なぜか折田先生像の写真は撮ってたけど（笑）、いろんなかぶりものとかしてたのを面白いなっていうのは撮ってたけど、肝心な研究室でこの本を読んでる風景とか、こういう実験してるなとか、今だったらそれ、すごい撮れるんですね。いろんな場所でいろんな授業を受けてたり、自分で読んでたりする中で、どんな色を感じながら、どんな風景を自分はここで過ごしてたというふうに残したいかなと思ってるっていうのが、今の時点であれば教えてほしいなと思いました。いかがでしょう。

小島：これは大変面白い質問なので、ぜひ全員にお答えしていただきたいと思います。一言ずつ杉谷さんから。

杉谷：ありがとうございます。めっちゃ難しい質問が（笑）、私の中では、総人、人環の色は黒ですかね。黒というのは、つまり色っていろんな色が混ざったら虹色になるって小学生とかは言うんですけど、実際に混ぜたら黒になりますよね。ちょっと汚いかもしれないんですけど、でも黒っていい色だと私思って、黒好きなんです。実は裁判官の法衣とか黒色なんですね。あれ理由があって、何者にも染まらないから黒なんです。なので、それだけ強い個性を持ってるという意味で、黒というのは地味とかって言われるかもしれないですけど、私はすごい好きな色で、強い信念があるというか、強い芯に持ってるものがあるとい意味で黒かなというふうに、今の段階では思わせてもらっています。で、どういう風景、写真撮りたいかっていうので、私はもちろん一人で研究してる写真も撮りたいんですけど、人としゃべってるときの自分っていうのを、本当は写真に納めたいなって思っています。私も口が（笑）、もう口ばっかりが立っててもしょうがないんですが、人としゃべってるときの自分の表情っていうのを、どんな表情かというのはすごい見てみたいし、それが多分私の中で結構生き生きしている瞬間なので、そういった瞬間をぜひちょっと見てみたいと思います。それはだから、人環で同じ研究科だけど違う研究をしてる近藤さんであるとか、いろんな人たちと研究の話をしているときとか、あるいは、学部生と学問の話をしているときとかっていったときの風景というのは、ちょっと撮ってほしいなというふうには思っています。

近藤：色と写真ということなんですけど、難しいですね。色といって杉谷くんは黒って言ったんですけど、これを色と言っていいか私わからないんですけど、私の場合は万華鏡ですね。万華鏡って結構いろんな色合いが散りばめられていて、ただ一つの見方ではなくて、くるくる回すと、どんどんと形が変わっていく。その中で、自分の好きな位置であったりとか、

ただ回してながめるのが楽しいとか（笑）、そういうのがあって、何となく万華鏡のような世界だなと、世界っていうか研究科だなと思ってました。で、写真は、私は京都の自分の研究室から見た空ですね。もともと私、東京出身で、京都に来たのが、あ、空が広いなと思って、こういうところで勉強してみたいなと思ったのもあったので。で、実験室から空が見えるんですけど、その空を見ながら、朝、朝焼けであるとか夕焼けであるとか、いろんな変化の空を見て、きれいでもあるし、この空の色の移り変わりも、突き詰めればいろいろな説明ができるんだよなというのを思っていて、そういった京都の空っていうのが感慨深くて、それを写真で撮っておきたいなと思います。

菊辻：私から見た総人はピンク色です。恋愛の色です。工学部とか決められたカリキュラムのところは、もし工学、自分の学ぶ学問が嫌いだとしても、その学問と一緒にいなきゃいけない。嫌いなパートナーとずっと一緒にいなきゃいけないけど、総人だったら、物理やってみて面白いって。最初は面白くて、この物理好き好きって一緒にいるけど、ちょっと嫌になったらぽいって捨てて、捨ててって言っちゃだめだね、ごめんなさい（笑）。あと、プログラミングやりたくなったら、そっちにふらーっと行って、プログラミング、プログラミングってやったらいいし、それもちょっと、うーんってなったきたら、じゃあ音声学、音声学って、いろんなパートナーと恋愛できるっていうか、もう私は総人をそういうふうにしか見ていません。すいません（笑）。私の撮りたい写真は、1年生の頃、物理を朝から晩までやった、先生の隣の部屋の研究室の写真と、2年生の頃、朝から晩までプログラミングをやってた部屋の写真を撮りたいなと思っています。

金澤：色って考えて1色に絞り込めなかったので、万華鏡とおっしゃられた近藤さんスタイルをまねて、私もものに例えようかなと思うんですけれども、大学に入ってきたときからずっと、総合人間学部は白い画用紙をまず入ったときに1枚渡されるんだと思っていて、その中で学んでいく。例えばここの研究室で1本その研究室の色クレパスをもらって、別のところにいって、別の研究室の1本クレパスをもらって、4回生になったときに、手元にそろったクレパスで、初めて自分は何か総合人間学っていう絵を描くんだろうなというふうに思ってたので、色に例えるという発想がなかったので、こんな感じでもいいかなと。あと写真に関してなんですけれども、私、総合人間学部に所属してるくせに、総合人間学部の教員の方よりも、他学部の教員の方のほうが知り合いが多いんじゃないかっていうくらい帰属意識が薄くて、総合人間学部の写真っていっても、あんまりぱっと思い浮かばなかったんですけれども、研究室とか、そういう写真を思い浮かばなかったんですけれども、授業終わりに有志の総人の学生みたいな友達と集まって、これも吉田食堂じゃないのが申し訳ないんですけど、北部の1階で話ししたときが、とてもいろんな観点で話が出てきたりして、恋愛とは何かみたいな話をしたりしたときに、ああ、面白かったな。これが総合人間学部なのかなと思ったので、その写真を撮っていただけたらなと思います。

大淵：いろんなことをイメージされてるのがすごくわかって（笑）。ちなみに、ちょっと伺った

ので、私で言えば、私は茶色でした。附属図書館通ったんです、もう図書館ばっかり。で、撮りたい写真っていえば、あんときもう図書カードばっかり繰っていました。何の本があるかOPAC（オンライン蔵書検索）がなかったんです。あったんだろうけど、そんな出てこなかった。だから、そういういろんな風景があって、あんときパシャって撮りたかったなっていうのは、今、僕は思いますが、今できるんで、努めてそれはされたほうがいい。で、また20年たって、こういったことを何事で思い出すかわかりませんし、そのときにまた自分が、あ、こんなことできてたなっていうふうのが実感ができる一つの材料だと思うので、あのとき自分何色を思ってたなっていうのが、すごく今、ぜひ考えていただければなと。ちょっと色を扱う（笑）、お仕事をしてるので、すごく思います。ありがとうございます。

小島：　与えられた時間が、もうそろそろ終わりにきているんですけれども、いろいろ先輩方からエールをいただいたようにも思いますし、あるいは学生さんたちからも、もう少しこんな不満がというのもあるかもしれません。ただ、いくつかの交流の中から、教員として思うところもあるかと思いますので、このプレシンポジウムをまとめるにあたって、阪上先生から、教員代表みたいな高いところではなく、阪上先生の視点からお答えいただければというふうに思います。

阪上：　私はこのプレシンポをまとめるには全く不適切な人材だと思うので、個人的な意見を言わせていただくことにします。でもその前に、大淵さんの質問にも一応答えておこうと思います。色はちょっと難しい。色についてはよくわからないのですが、僕はモザイクだと思います。いろんな色があるんだけど、混じり合っていないというようなイメージがあります。それで、写真ですね。写真については、皆さんのおっしゃってくださったものが、それぞれ自分なりの学生生活を切り取っていて、とっても面白かったです。それで、僕にとっての総人の写真って言われると、実は圧倒的に…これを言うと多分1期生のお二人にわかって、向こう側の現役学生わからないと思うんですけど …A号館ですね。A号館っていうのは、今の総合館に立て替えられる以前の建物で、別にそんな立派な建物でもないんですけど、とっても雰囲気があって、しかも、とっても怪しかったです。特にA号館前の広場っていうのがあって、もうそこがすごくて、ある意味で殺伐として自転車があふれていて、もう何か大変で、とってもカオティックだったです。それがいかにも昔の京大、三高の頃からのある種の京大らしさみたいなものを表していて、とっても懐かしい思い出があります。定年退職前の教員のきわめてノスタルジックな心境でもあるんですけど、京大というか総人にきた頃のA号館の雰囲気を、僕はけっして忘れられないです。だから、まとめの前にもう少しA号館について語らして下さい。A号館がなくなったのは西暦二千数年だと思うんですけど、その頃の学生とこういう話をしていました。A号館を見たことのある総人生と、A号館を見たことのない、そのあとの総人生では、多分気質が変わるでしょうねと当時の学生が言っていたことをよく覚えています。もちろん、こんなことを今の現役学生に言うのはとっても酷なことかもしれませんが、A号館そしてそれが表していたものはとっても思

い出深いです。

それで、何かまとめないといけないですね。まずは、松本さんがおっしゃってくださった、「自分でいろいろ歩いてみましょう」についてです。これは、僕もいろんな総人生に言っていることで、とても共感します。大淵さんや松本さんもそうですし、それに現役の学生さんも、何をやっていいかわからないと悩む。いろいろ悩むことはいいことなんですけど、そのときに悩むだけじゃなくて、いろんなところに行って、いろんなことにまず挑戦して欲しいです。それからもう一つ。これも、僕がそういう悩みのある学生にはいつも言ってることがあります。それは、「やってみて自分に合わないと思っても、しばらくは続けましょう」です。例えば、それは3カ月でもいいし半年でもいい。それぐらい、じっくりとやってみないと見えないものがある。これはある種の筋トレです。それをしないで、自分に合わないなと思ったら、すぐにまた元のニュートラルなポジションに戻るんじゃなくて、自分で歩いてどこかで何か経験してみたら、しばらくそこにとどまって、じっくり見てから帰って来て欲しい。結局自分に合わなくて帰って来たとしても、そこでの経験が無意味になるわけではないんです。そこでの経験って、その後、絶対生きるんです。そういうことを、自分でいろんなことを挑戦してみるってことを是非やっていただきたいと思います。

それから最後になりますが、実は総合人間学部に学際教育研究部という部門があります。総人、それから人環の学際的な研究や教育をいろいろと考える部門で、私も所属しています。今日、皆さんのお手元にも配らしていただいてるんですが、卒業生、修了生インタビューという企画を学際教育研究部でやりました。ちょうどいいタイミングでした。この企画で、まだ7名と少ないですが総人出身者にインタビューをやりました。これがとっても面白かったんで、最後に、それについて少し述べて、まとめにしたいと思います。このプレシンポでも、現役学生から、総人で何やっていいかわからない、そういう迷ってるという側面が出てきたんですが、それはこのインタビューでも赤裸々に語られています。でもそれに加えて僕にはとても意外だったことも語られていました。例えば近藤さんは、在学中にやりたいこと、地球科学を見つけて、今、人環に進んで活躍されています。もちろん近藤さんのような例もあるんですが、すべての総人生が在学中に何かやりたいことを見つける必要はないんですよということです。とっても面白いんですけど、総人生っていうのは、就職してからもいろんなことを探してるんだ、ということがインタビューを通じて見えてきました。だから、卒業研究や大学院進学などで、いったん何らかの選択を迫られることありますけど、だからといって、そのあとは一つのレールに乗って、それに邁進しないといけないというわけでは必ずしもないんです。そのあとでもいろいろ迷ってもいいし、いろんな可能性っていうのは探し続けてもいいんだと、教えられた気がしています。僕にとってはそれが、総人、人環の一番面白いというか、可能性のあるところじゃないかなと最近感じているんで、それをもって私のまとめとさしていただきたいと思います。

小島：ありがとうございました。25年という月日は、ここに並んでるパネラーの景観的な違い

に表れているわけですけれども、その中で総合人間学部、人間・環境学研究科というものの連続と不連続、そのあたりが少し見えてきたかなというふうに私は感じています。少し視野を広げて考えてみると、25年前、お二人が学生だったときには、携帯電話、あるいはインターネットというのは、学生の道具ではなかったと思うんですね。この25年の社会の変化というのは、そのほかにも、例えば阪神大震災、それから原発事故、ある意味いろんな神話が崩れてきた25年ではないかと。この次の25年は、私たちが今、思ってもみなかったような25年がくるんだろうと。で、その25年先というものについて見通したような議論は、今日の午後に教員のシンポジウムの中でと、私は期待をしております。今日は1時間半という限られた時間ではありますけれども、熱心な討論をいただいたパネラーの皆さんに、ぜひ大きな拍手でこたえていただければというふうに思います。どうもありがとうございました。

会場　（拍手）

(2) 記念式典

司会（小山静子）：

ただいまから、京都大学総合人間学部、大学院人間・環境学研究科、設立25周年記念式典を開催いたします。司会は小山が務めさせていただきます。初めに、杉山雅人総合人間学部長、大学院人間・環境学研究科長よりご挨拶を申し上げます。

会場　（拍手）

杉山雅人研究科長：

本日ここに、京都大学総合人間学部、大学院人間・環境学研究科設立25周年の記念式典を開催するにあたり、多くのご来賓並びに関係者の皆様方にご臨席賜りましたこと、心から厚く御礼申し上げます。

総合人間学部と人間・環境学研究科はそれぞれ平成4年10月、平成3年4月に京都大学に設置されました。総合人間学部は昭和35年の薬学部新設以来絶えていた新学部設置を果たす京都大学10番目の学部として、人間・環境学研究科は京都大学における最初の独立研究科として、文理融合・連携の教育研究の遂行を目的に歩みを開始しました。

総合人間学部、人間・環境学研究科が文理融合・連携の教育研究を目指したのは、その歴史的経緯からの必然であり、両部局が京都大学の教養共通教育・基礎教育を担っていた教養部を母体として生まれたことにあります。そしてひいては、教養部が第三高等学校を、さらに遡ればともに明治2年に設置された舎密局と洋学校を起源とすることも、この流れを当然のものとしたと言えます。

総合人間学部、人間・環境学研究科は設置の当初から、互いに密接な協力関係にあり双方の教員が協力教員として、他方の教育研究に深く協働してきました。そして平成15年に両部局は一体化し、教員は人間・環境学研究科に籍を置いて大学院での教育研究を進めるとともに、総合人間学部での教育と研究指導も担当しています。加えて学内他部局からの協力教員、学外機関からの客員教員が教育・研究指導にあたっています。

総合人間学部では、人間と文明と自然の結び付きに新たな次元を確立するために、人類が直面する様々な問題を人間活動の広範な諸領域を通底させる形で問い直し、これまでの人文科学、社会科学、自然科学を融合した新しい学問の体系を構築することを、すなわち、新たな「人間の学」を創出することを目的としています。

人間・環境学研究科では、環境、自然、人間、文明、文化を対象とする幅広い学問分野の連携を通じて、人間と環境のあり方についての根源的な理解を深めるとともに、人間と環境のよりよい関係を構築するための新たな文明観、自然観の創出に役立つ学術研究の推進を目指しています。

しかし、こうした文理融合・連携の教育研究が設立当初から順風に進んできたわけでは決してありません。いや、設立の当初から学生も教職員も懊悩に満ちていたと言ったほうが正しいに違いありません。未だ十分にはなされざる文理融合・連携の現状と掲げる理想との大きな隔たりの中で、学生も教職員も絶え間ない奮闘を続けてきましたし、そして今もその奮闘は続いています。

設立当初の体制を変更して、総合人間学部は人間科学、認知情報学、国際文明学、文化環境学、自然科学の5学系からなる総合人間学科のみの1学科制に、人間・環境学研究科は共生人間学、共生文明学、相関環境学の新たな3専攻制に構造を組みなおしました。これらの取組こそ、その懊悩の結果と言えるでしょう。

連綿と続く奮闘の中で、全学にわたる教養共通教育の実働の中核を担うという総合人間学部、人間・環境学研究科のもう一つの特徴を捉えた新たな試みも始まりました。「教養教育に自負と責任感をもち、初学者や一般の人々にも研究成果を分かりやすく伝えることのできる専門家」の養成に注力するというものです。

このために、総合人間学部では、的確かつ柔軟な解説力・対話力の養成に重点を置いて卒業予定者が自身の卒業論文・卒業研究を異分野の教員に向けて発信する「研究を他者に語る」の制度を導入しました。人間・環境学研究科では、博士後期課程の学生がその専門領域に近い全学共通科目で、教員の指導のもとに授業を行う「教養教育実習」が試みられています。これらの試みが、総合人間学部、人間・環境学研究科に新たな方向性を築こうとしています。

今後も、様々な試みを通して総合人間学部、人間・環境学研究科をその理想に近づけるべく、学生・教職員が協力して不断の努力を続けてまいりたいと思います。

最後になりましたが、これまで総合人間学部、人間・環境学研究科に様々なご支援、ご協力をいただきました関係者の皆様方へ、改めて御礼申し上げますとともに、今後もより一層のご支援・ご鞭撻をお願い申し上げます。有難うございました。

平成30年3月25日

京都大学総合人間学部長、大学院人間・環境学研究科長

杉山　雅人

会場　（拍手）

司会：続きまして、山極壽一京都大学総長よりご挨拶をいただきます。

会場　（拍手）

山極壽一総長：

本日、京都大学総合人間学部、大学院人間・環境学研究科、設立25周年記念式典の開催にあたり、ご来賓並びに関係者各位にはご多用中のところご臨席を賜り、誠にありがとうございます。

さて、京都大学には三つの使命がございます。一つ目の使命は、高い倫理性を備えた研究活動により新しい知見を創造し、学際的に深く真理を探究することでございます。二つ目の使命は、高度な教養と知識を培い、その伝承をとおして、教養豊かで人間性が高く、責任を重んじる人材を育成することでございます。つまり、独創的な学術研究は多様な教育を実現し、それらは、私たちの社会が抱える多元的な課題の解決に挑戦する、世界的に卓越した人材の育成につながってまいります。事実、本学は数多くの優秀な研究者や教養人を輩出し、本学出身の多くの方々が、国際社会において目覚ましい活躍を果たしております。この研究と教育を通じた社会貢献こそが、大学の三つ目の使命でございます。

本学では、大学を世界や社会に通じた窓と位置づけ、その窓を開け風通しをよくし、野生的で賢い学生を育て社会に送り出すことで、よりよい未来の創造に寄与するため、WINDOW 構想を掲げているところでございます。今回、設立 25 周年を迎えた総合人間学部においても、本学の使命を果たすべく、人間と文明と自然の結びつきに新たな次元を確立するため、人文科学、社会科学、自然科学を融合した新しい学問体系を構築し、新たな人間学の創出を目指しております。また、大学院人間・環境学研究科においても、環境、自然、人間、文明、文化を対象とする幅広い学問分野の連携を通じ、人間と環境のよりよい関係を構築するための新たな文明観、自然観の創出に向けた学術研究を推進しております。このように、総合人間学部、大学院人間・環境学研究科では、さまざまな学問分野を持ち、文理融合、連携の学際、教養教育をとおした、未来に向けた人材育成に取り組んでおります。

このたび、総合人間学部、大学院人間・環境学研究科が設立 25 周年を迎えたことは、大学にとっても社会にとっても喜ばしいことではございますが、今後も急速に変化していく、社会におけるさまざまな複合的課題に対応していくため、教職員の一層のスキルの充実や運営面の充実も図っていく必要があり、各教職員におかれましては、今後も一丸となってさらなる努力をされることをお願いいたします。

終わりになりますが、今後も総合人間学部、大学院人間・環境学研究科が、京都大学の特色ある教育、研究を担う場として広く社会に貢献していくことが期待されるとともに、本日ご出席の皆様の益々のご健勝とご活躍を祈念いたしまして、私のご挨拶とさせていただきます。本日はまことにおめでとうございます。

平成 30 年 3 月 25 日

京都大学総長　山 極　壽 一

会場　（拍手）

司会：どうもありがとうございました。なお、本日は山極総長をはじめ、4名の理事の方にもお越しいただきましたので、ご紹介いたします。まず、川添信介、学生・図書館担当理事。

会場　（拍手）

司会：北野正雄、教育・情報・評価担当理事。

会場　（拍手）

司会：佐藤直樹、財務・施設・環境安全保健担当理事。

会場　（拍手）

司会：森田正信、総務・労務・人事担当理事。

会場　（拍手）

司会：また、ご来賓としてお越しいただきました江島義道名誉教授、元人間・環境学研究科長。

会場　（拍手）

司会：木下冨雄名誉教授、初代総合人間学部長。

会場　（拍手）

司会：ではここで、江島名誉教授よりご祝辞を賜りたいと存じます。

会場　（拍手）

江島名誉教授：

祝辞。本日、ここに、京都大学総合人間学部、人間・環境学研究科の設立25周年記念式典が挙行されるにあたり、一言お祝いの言葉を申し上げます。この25年を振り返ってみますと、我々を取り巻く社会は、国内外ともに、激動の時代でありました。世界では、1991年の湾岸戦争、ソビエト連邦の崩壊、2001年のニューヨーク同時多発テロ事件、2003年のイラク戦争、そして、2011年のシリア内戦など、戦争、民族対立、紛争が激化し、深刻化しました。今、なお、解決の糸口もつかめていない様々な課題が存在しています。

さらに、自然界では、1991年のフィリッピンピナツボ火山の噴火、2004年のスマトラ島沖地震とインド洋津波などが起こりました。これらは、世界を震撼させる大災害でありました。大災害は、我が国でも起こりました。1993年の北海道南西沖地震、1995年の阪神淡路大震災、2007年の能登半島沖地震及び中越沖地震、2011年の東日本大震災と福島第一原子力発電所事故、2016年の熊本地震などです。

このような状況は、人間の相互共生、文明の共生、自然と人間の調和を目指す研究を通して、社会的課題の解決に貢献することを目標にしている総合人間学部、人間・環境学研究科にとっては、眼前に、解決すべき大きな具体的課題、例えば、人種差別、宗教的民族的対立、温室効果ガス排出の削減などの諸課題が付きつけられている状況であります。この意味では、総合人間学部、人間・環境学研究科の社会的責務は、設立時に比べて、格段に大きくなっていると言っても過言ではありません。

この25年間は、総合人間学部、人間・環境学研究科にとっても、大きな変革と激動の時期でありました。それは、大きく三つにわけることができます。第一段階は、全学共通教育の質を高めることを目的として、教員が自らの専門を深める研究を行い、その成果を全学教育に反映させることを可能とする組織の設立を目指した時期で、「学術的総合」を目指す教育研究組織の設立のための準備作業が進められました。1980年頃から1990年ま

でがこの時期に当たります。第二段階は、1991年から2002年までで、人間・環境学研究科と総合人間学部がそれぞれ、1991年と1992年に設置され、それぞれの組織で、教育内容を充実発展させるための様々の事業が実施された時期です。人間・環境学研究科は、設立時は1専攻のみの研究科でしたが、最終的には3専攻からなる研究科に拡充、充実されました。第三の段階は、2003年から現在に至る時期で、別組織であった総合人間学部所属の教員を人間・環境学研究科の組織に編入し（一部の教員については、理学研究科等の他の組織の移籍）、統一組織として円滑で効率的な運営体制を実現して、人間・環境学及び総合人間学を目指す教育研究が実施、展開された時期です。統一前は、学部と大学院という立場の異なる組織体制に起因する意見の対立もありましたが、統一によって、意見対立が解消され、円滑なコミュニケーションによる運営ができるようになり、教育研究の質の格段の向上が実現されました。

この最後の時期には、国立大学が法人化され、大学の運営体制が大きく変わり、現場の教職員には大きな意識改革が求められました。また、京都大学では、全学共通教育の実施体制が変革され国際高等教育院が設置されました。この結果、全学共通教育は、国際高等教育院を中心に、人間・環境学研究科及び理学研究科のみならず、全学の協力体制で行われるようになりました。総合人間学部、人間・環境学研究科は、この25年間に、教育研究の質を高めるための様々の改革を実施して、大きく発展してこられました。

私は、15年前に大学を去りましたので、総合人間学部、人間・環境学研究科の最近の状況は、正確には知りませんが、教育研究における成果については、様々な形で知る機会があり、素晴らしい成果を上げておられることを確認しております。ここでは、その中の2つの事例について紹介させていただきます。一つめは、公立大学のある学部での事例です。その学部は60名程度の専任教員数で構成されていますが、そこで、人間・環境学研究科を修了された3名が活躍されているという事例です。いずれも、公募による厳しい審査・選考で多くの応募者との競争に打ち勝ち、着任され、そして、教員として優れた教育研究実績を上げておられるということです。これは、私が、その公立大学の先生からお聞きしたものです。二つめは、人間・環境学研究科の教育・研究活動の自己評価に関する資料（人環レビュー）に掲載されている事項です。そこには、学生・修了生の教育研究成果の一端を示す受賞状況が記載されています。2014年度から2016年度の3年間に90名の方が、学会の論文賞などを受賞していると報告されています。これは、学生・修了生が大きく成長されていることを示すもので、教育効果を示す一つの証左だと思います。先生方の学術的栄誉や社会へのオピニオンリーダーとしての提言等については、テレビや新聞等でも、しばしば、報道されているところであります。これらは、誠に素晴らしいことであります。

終わりに、総合人間学部及び人間・環境学研究科が、設立時に掲げられた崇高な目標に向かって、さらに一層の飛躍を達成され、課題山積の国際社会に対し、ますますの貢献を果されることを期待して、私の祝辞といたします。京都大学総合人間学部、人間・環境

学研究科の設立25周年、誠におめでとうございます。

平成30年3月25日

京都大学名誉教授　江 島　義 道

司会：どうもありがとうございました。以上をもちまして、京都大学総合人間学部、大学院人間・環境学研究科、設立25周年記念式典を終了いたします。引き続き、記念シンポジウムを14時から開催いたしますので、どうぞよろしくお願いいたします。

なお、シンポジウム開始まで若干お時間がございますので、人間・環境学研究科の学生による歌をお楽しみください。歌いますのは、人間・環境学研究科博士後期課程の須田珠生さんです。須田さんは学校で歌われる校歌の研究をされていますが、研究の傍ら声楽の演奏活動もされています。京大病院でミニコンサートを開催したり、コンクールに出場されたりしていまして、第4回いかるが国際音楽コンクールグランプリや、第5回東京国際声楽コンクールの歌曲部門第3位など、いくつかの賞を受賞されています。今日歌ってくださるのは、『アニーローリー』『ローレライ』『埴生の宿』です。では、どうかよろしくお願いします。

(3) シンポジウム
「文理融合・連携の学際・教養教育がめざすもの」

安部　皆様、お待たせをいたしました。ただいまから、京都大学総合人間学部、人間・環境学研究科設立25周年記念シンポジウムを開催いたします。司会は私、人間・環境学研究科の安部浩が務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は文理融合、それから文理連携の学際、教養教育が目指すものというテーマで、皆様にご臨席いただきまして、計4名のスピーカーとともに、そのテーマについて議論をさせていただきたいと存じます。大まかには2部に分かれておりまして、前半は今申しましたように、4名のスピーカーから話題提供をしていただきます。そして、そのあとにパネルディスカッション形式で引き続き議論を行っていく、そのような仕方で進めさせていただきたいと存じます。どうぞよろしくお願い申し上げます。なお、このシンポジウムの趣旨を簡単に申し上げます。午前中のプレシンポジウムでは、創立からこんにちに至るこれまでの25周年の回顧といいますか、レトロスペクティブな反省、これがプレシンポジウムの主眼でありました。対しまして、この午後の、これから始めさせていただくシンポジウムは、いわばプロスペクティブに今後の25周年をどのように考えていくかということを問題にしたく存じます。それから、その25年後から振り返って、いわばバックキャスティングといいますか、未来から現在を振り返ってみた場合に、われわれは今何をすべきなのだろうか、こういったことがこのシンポジウムの主題でございます。どうぞよろしくお願いいたします。では、時間も限られておりますので、さっそく第1スピーカーであられます、石川尚人教授より、「総合人間学部、人間・環境学研究科のこれまでの歩み」という題で、25周年の歩みを、まず総括的に振り返っていただくお話をいただきたいと存じます。では石川先生、どうぞよろしくお願い申し上げます。

石川　石川と申します。今日のシンポジウムではこのあと3人の先生方から話題提供、それからそれに基づいたディスカッションが行われますが、それに先立ちまして、そのための話題提供ということで、総人・人環のこれまでの歩み、それから現状についてお話しさせていただきたいと思います。会場には、これまでのさまざまな経緯、この二つの部局の立ち上がりから組織改編のことについて

図1

深く携わった先生方がおられるところで、私が話すのは大変恐縮いたしますが、私の理解の範囲で皆さんに話題提供させていただこうと思います。何か間違い等あるかもしれませんが、ご容赦いただきたいと思います。

では、まずは沿革からですが、既に先ほど杉山研究科長から紹介がありましたように、教養部を母体として二つの部局が立ち上がります（図1）。人間・環境学研究科は平成3年4月に1専攻が立ち上がります。そのあと専攻、それから博士後期課程を追加していきまして、平成11年に修士、博士後期課程を持つ3専攻からなる独立の研究科という組織になります。総合人間学部は平成4年10月に設置をされまして、平成5年に第1期生を迎えます。2つの部局は平成15年、大学院重点化という流れに乗りまして、一体化をします。その際には、人環は新たな3専攻、14講座からなる研究科となり、総合人間学部はそれまで4学科であったものが、1学科・5学系という組織になって、新たにスタートをします。

教育研究上の目的ですが、先ほど申しましたように、教養部を母体するこの組織は、多様な、多彩な学術領域の教員群を資源にして、その連携、それから融合により、新たな領域を生み出す人材を育成するということが、この両部局の目的としています（図2）。人環では、よく、専門知、統合知ということがいわれます。また、研究科名にある中黒を乗算的な意味合いに捉えて、飛躍的な創造性をもたらすということを目指しています。総人も同様で、人文科学、社会科学、自然科学を融合した新しい学問体系を生み出そうということを目的としています。そして、従来の個別の科学の枠を超えて、より多様で総合的な学問の場を提供することを目指したものになっています。その一つの現れとして特徴的なカリキュラムが、副専攻制度というものでした。これについては、またあとでふれたいと思います。

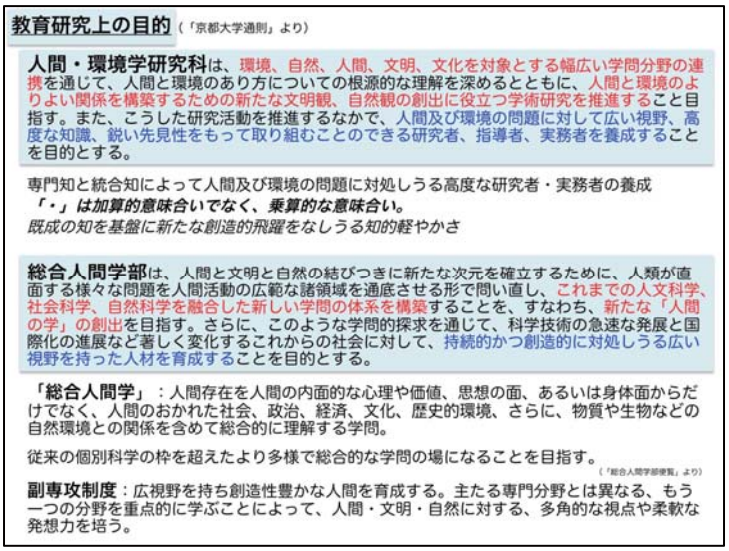


図 2

いくつか組織替えをしながら、平成15年に総人・人環は一体化をすることになります（図3）。組織に関する詳しい話は、ここでは割愛させていただきますし、それにかかわる問題点も省略させていただいて、卒業単位を見ながらカリキュラムについてちょっと紹介します（図3）。いずれも、例えば総合人間学部ならば副専攻、人環ならば他専攻科目を取ることによって、専門科目以外の他領域の素養を深めることを目指す、そういうカリキュラムになっています。それと、総人では学系入門科目、それから人環に基礎科目とありますが、所属する講座、または他の講座の学問

領域を俯瞰する意味合いで、このような基礎科目が置かれております。ただ、これにはいくつかの問題点が指摘されまして、例えば基礎科目はその後なくなることになります。そういう中で、最近は単なるリレー講義として断片的な情報を提供する科目というよりは、もう少しさまざまな視点から一つのものを見るという、分野横断型の科目が提供されています。例えば「分野を横断する自然科学」、「地球生命の起源と進化」、また「総合フィールド演習」というような演習科目も提供されています。

総合人間学部［1学科、5学系、18関係］		人間・環境学研究科［3専攻、14講座、38分野➡39分野: H28］		
総合人間学科				
学系	関係（授業科目グループ）	講座	分野	専攻
人間科学	人間形成論 社会行動論 文化社会論 人間存在論 創造行為論 文芸表象論	人間社会論	人間形成論 人間共生論＊ 社会行動論 文化社会論	共生人間学
		思想文化論	人間存在論 創造行為論 文芸表象論	
認知情報学	認知・行動科学	認知・行動科学	認知科学 生理心理学＊ 行動制御学 身体機能論	
	数理科学	数理科学	現象数理論 数理情報論	
	言語科学	言語科学	言語情報科学 言語比較論 言語情報システム論＊	
	外国語教育論	外国語教育論	外国語教育論 言語教育研究開発論＊	
文化環境学	比較文明論	比較文明論	多文化複合論 地域文明論 文明交流論	共生文明学
	文化・地域環境論	文化・地域環境論	文化人類学 地域空間論 環境構成論 文化遺産学＊	
国際文明学	歴史文化社会論	歴史文化社会論	歴史社会論 東アジア文化論 西欧文化論 博物館文化財学＊	
	社会相関論	現代文明論	文明構造論 現代社会論 国際社会論	
		共生社会環境論	共生社会環境論	相関環境学
自然科学	物理科学 化学・物質科学 生物科学 地球科学	分子・生命環境論	分子環境相関論 生命環境相関論	
		自然環境動態論	生物環境動態論 地球環境動態論	
		物質相関論	物質物性相関論 物質機能相関論	

学部・研究科の構成 H15以後

総人 卒業単位	H15 (H28) 128 (140)
卒業論文・研究	12
主専攻科目	48
副専攻	20
（他学系副専攻科目）	
学系入門科目	4
（他学系2）	
外国語科目	12 (24)
自由科目	32
（全学部）	

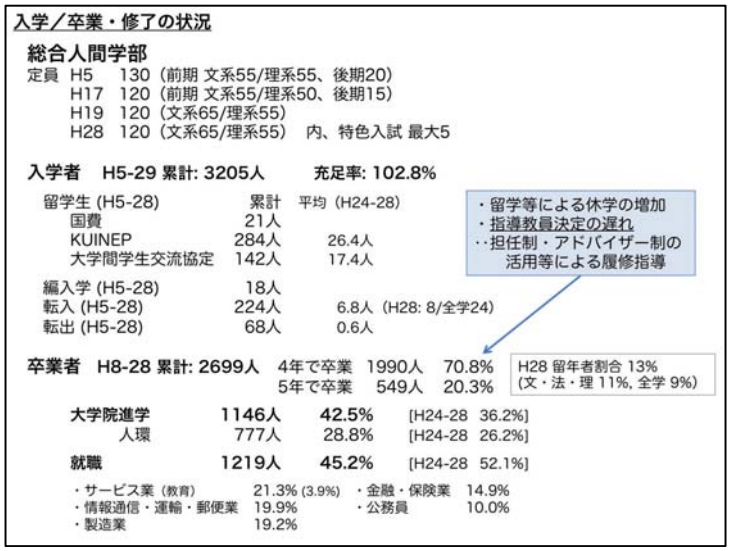
人環 修士課程 30単位

H15
- 基礎科目 2-4（講座毎、教員オムニバス）
- 研究指導科目 8（修論ほか）
- 自専攻科目 8
- 他専攻科目 10（他研究科・他大学）

H29
- 研究指導科目 8
- 自専攻科目 12
- 他専攻科目 10（他研究科・他大学）

図 3

それでは、25年間のデータを見ながら現状を紹介していくことにいたします。まず総合人間学部ですが、これまで入学者は3200人を迎えています。留学生が多いということが特徴になりますし、転入者が今までに224人で、他学部からこちらに転入してくる学生がこのぐらいの数がいる、これも特徴になっています。さて、次、卒業に関してですが、これまでに約2700人の卒業生を輩出しています。4年で卒業する人の割合は大体70％ぐらいになっています。平成28年度の留年率は13％で、学生さんは居心地がいいのか、割と長くいることになっています。ただ、この点は部局の問題として捉えて、現在考えているところです。留年率が高い理由としては、留学等によって休学が増えているということもありますけども、もう一つの問題は「指導教員の決定の遅れ」で、なかなか自分の専門として突き詰めようとすることが見つからずに、指導教員の選択が遅れていく状況があることです。このことが、留年率が高く、4年間で卒業していく人数が70％程度である状況をもたらしていると考えられています。それに対しては、担任制、アドバイザーの



入学／卒業・修了の状況

総合人間学部

定員 H5 130（前期 文系55/理系55、後期20）
H17 120（前期 文系55/理系50、後期15）
H19 120（文系65/理系55）
H28 120（文系65/理系55） 内、特色入試 最大5

入学者 H5-29 累計: 3205人 充足率: 102.8%

留学生 (H5-28)	累計	平均 (H24-28)
国費	21人	
KUINEP	284人	26.4人
大学間学生交流協定	142人	17.4人
編入学 (H5-28)	18人	
転入 (H5-28)	224人	6.8人（H28: 8/全学24）
転出 (H5-28)	68人	0.6人

- 留学等による休学の増加
- 指導教員決定の遅れ
- 担任制・アドバイザー制の活用等による履修指導

卒業者 H8-28 累計: 2699人 4年で卒業 1990人 70.8%
5年で卒業 549人 20.3%

H28 留年者割合 13%（文・法・理 11%, 全学 9%）

大学院進学	**1146人**	**42.5%**	[H24-28 36.2%]
人環	777人	28.8%	[H24-28 26.2%]
就職	**1219人**	**45.2%**	[H24-28 52.1%]

- サービス業（教育） 21.3% (3.9%)
- 情報通信・運輸・郵便業 19.9%
- 製造業 19.2%
- 金融・保険業 14.9%
- 公務員 10.0%

図 4

活用などによって、履修指導を綿密にしていくというようなことが、最近行われているところです。さて、卒業生は、約42％が大学院に進学し、そのうち30％ぐらいが人環に進むという状況です。就職は45％ぐらいで、ここにありますように、さまざまな業種に就いています（図4）。

入学／卒業・修了の状況

人間・環境学研究科

定員

	H3	H5	H6	H7	H8	H9	H10	H11	H12	H15-29
修士課程	30 (1専攻)	125 (2専攻)	129	129	126	150 (3専攻)	144	144	144	164 (3専攻)
博士後期課程		31 (1専攻)	31	78 (2専攻)	78	78	75	91 (3専攻)	85	68 (3専攻)

入学者累計　**修士課程**(H3-29) **3750 人**　**博士後期課程** (H5-29) **1799 人**　進学 1399 人 [77.8%]　編入学 400 人 [22.2%]

充足率　**96.2%**　**103.6%**
H25-29 91.7%　96.5%　(68.3%)　(31.7%)

留学生 422 人 (10.8%)　282 人 (15.7%)
H25-29 16.0%　25.0%
社会人 89 人 (2.4%)　108 人 (6.0%)

修了者累計

修士課程 (H4-28)
学位取得 **3180 人** 92.3% 入学者数に対して
2年で取得 2703 人 85.0% 学位取得者数に対して

博士後期課程 (H5-28)
課程博士 **813 人** 51.1% 入学者数に対して
3年で取得 323 人 39.7% 学位取得者数に対して

論文博士 **49 人**

進学 **1474 人** **46.4%**
就職 **1282 人** **40.3%**
・製造業 36.1%
・サービス業 28.0%
（教育）(11.6%)
・情報通信 12.5%
・公務員 8.4%

H24-28 167 人
・教員 43.1% (大学 34.7%)
・研究者 37.7%
・事務職 6.6%
・技術者 3.0%

図5

人環のほうです（図5）。入学者は修士課程で3700人、博士後期課程で1800人を迎え入れています。充足率については修士課程において定員割れを起こしているという現状になっています。特に最近、修士課程で91％、博士後期課程でも96％ということで、少し定員に満たない状況が続いています。修了生に関しては、今までに修士の学位を約3200人が取得し、それから博士の学位では、課程博士約800人、それから論文博士約50人を出しています。修士課程修了者の進路は、進学が46％、就職が40％で、製造業や教育関係のサービス業に就いて、博士後期課程からの就職の場合は、教育や研究に携わる方を80％ぐらい出しているというのが現状です。

さて、先ほど申し上げた総人を特徴づけるカリキュラム、副専攻についてご紹介します（図6）。副専攻分野というのは主専攻とは別途に特定の分野を系統的に履修するという制度で、これによって主専攻以外の分野にも深い知識と広い教養及び総合的な判断力を養うということが期待されています。設立当時は副専攻枠44、卒業単位数は12単位でしたが、整理されていって、現在では、副専攻数は12、卒業単位数は20単位になっています。どのような主専攻と副専攻の関わりで捉えているかといいますと、平成16年では、文系主専攻として副専攻理系、また理系主専

副専攻

主専攻分野とは別に特定の分野を系統的に履修する制度。これによって主専攻以外の分野にも深い知識と広い教養及び総合的な判断能力を養い、豊かな人間性を身につける高度一般教育の実現が期待される。（平成29年度総合人間学部便覧）

	副専攻数	卒業要件	
H5	44 (37: H10)	12単位	主専攻分野以外から科目指定 講義・演習・基礎ゼミ 各1科目4単位以上
H11	25	20単位	主専攻分野以外の分野毎に規定した科目群 演習・基礎ゼミ各4単位以上を含む
H15	12	20単位	所属する学系以外の副専攻科目表から自由選択 講義以外4単位以上を含む

慶應義塾大学日吉キャンパス特色GP第2回シンポジウム報告書, p4-15, 2006
西井正弘（京都大学総合人間学部教務委員長）「京都大学総合人間学部『副専攻』制度の変遷」

H16卒業生151名
人間科学科・国際文化学科（文系）⇔ 基礎科学科・自然環境学科（理系）：66人（44%）
（『人環レビュー2006』）

主専攻・副専攻の文理分布

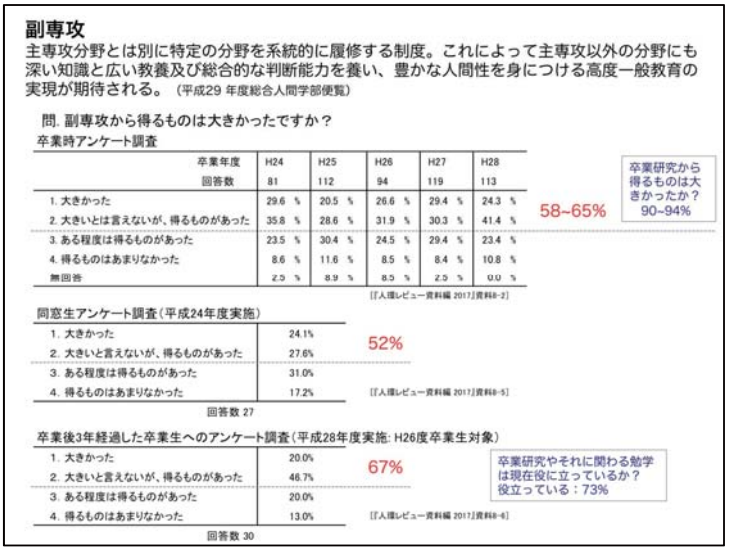
主専攻	副専攻	24 人数	24	25 人数	25	26 人数	26	27 人数	27	28 人数	28	
文系	文系	41	33.6%	51	39.8%	32	28.3%	51	38.6%	44	32.8%	
	理系	31	25.4%	27	21.1%	32	28.3%	36	27.3%	37	27.6%	25.9%
	小計	72	59.0%	78	60.9%	64	56.6%	87	65.9%	81	60.4%	
理系	文系	37	30.3%	34	26.6%	36	31.9%	29	22.0%	36	26.9%	27.5%
	理系	13	10.7%	16	12.5%	13	11.5%	16	12.1%	17	12.7%	
	小計	50	41.0%	50	39.1%	49	43.4%	45	34.1%	53	39.6%	
	総計	122	100.0%	128	100.0%	113	100.0%	132	100.0%	134	100.0%	

[『人環レビュー資料編』資料2-16]

図6

攻として副専攻文系というように取っている学生が44％でした。最近の5年間を見ても、主専攻文系で副専攻理系、または理系主専攻で文系副専攻という学生が約52％になります。このような学生が、いわゆる文理にまたがる履修をしているということになっています。

この副専攻に関して、学生がどういう印象を持っているのか、これは卒業時にアンケートを取ったものでが、「大きかった」、「大きいとはいえないが得るものがあった」、「ある程度得るものがあった」、「得るものはあまりなかった」という項目で聞いております（図7）。自己点検評価する場合は、「ある程度得るものがあった」の数値を含めて「90％の人が満足している」と絶対書くのですが、今日は「大きかった」、「大きかったとはいえないが得るものがあった」という項目への回答数でみると、そのような人が大体60％ぐらいになります。同様の質問を同窓生、また、卒業後3年たった卒業生にしたアンケート調査の結果を見ると、同窓生52％、卒業後3年を経た卒業生では67％という状態になっています。この数字がいいと取るのか、悪いと取るのか、微妙なところです。例えばここに「卒業研究から得るものが大きかったか」いう質問に対して、同様の答えをする方は、卒業時には90％以上になりますし、卒業後の3年たった卒業生に聞いた場合、卒業研究が役立ったかということに関して、役立っているという肯定的な答えを返してくれる方は73％おりました。この副専攻の今後のありようについては、このあとの議論になるところだと思います。



副専攻

主専攻分野とは別に特定の分野を系統的に履修する制度。これによって主専攻以外の分野にも深い知識と広い教養及び総合的な判断能力を養い、豊かな人間性を身につける高度一般教育の実現が期待される。（平成29 年度総合人間学部便覧）

問. 副専攻から得るものは大きかったですか？

卒業時アンケート調査

卒業年度	H24	H25	H26	H27	H28
回答数	81	112	94	119	113
1. 大きかった	29.6 %	20.5 %	26.6 %	29.4 %	24.3 %
2. 大きいとは言えないが、得るものがあった	35.8 %	28.6 %	31.9 %	30.3 %	41.4 %
3. ある程度は得るものがあった	23.5 %	30.4 %	24.5 %	29.4 %	23.4 %
4. 得るものはあまりなかった	8.6 %	11.6 %	8.5 %	8.4 %	10.8 %
無回答	2.5 %	8.9 %	8.5 %	2.5 %	0.0 %

58~65%

卒業研究から得るものは大きかったか？ 90~94%

[「人環レビュー資料編 2017」資料8-2]

同窓生アンケート調査（平成24年度実施）

1. 大きかった	24.1%
2. 大きいと言えないが、得るものがあった	27.6%
3. ある程度は得るものがあった	31.0%
4. 得るものはあまりなかった	17.2%

回答数 27

52%

[「人環レビュー資料編 2017」資料8-5]

卒業後3年経過した卒業生へのアンケート調査（平成28年度実施: H26度卒業生対象）

1. 大きかった	20.0%
2. 大きいと言えないが、得るものがあった	46.7%
3. ある程度は得るものがあった	20.0%
4. 得るものはあまりなかった	13.0%

回答数 30

67%

卒業研究やそれに関わる勉学は現在役に立っているか？ 役立っている：73%

[「人環レビュー資料編 2017」資料8-6]

図7

さて、この25年の歩みにとって、やはり一つの大きな出来事は、国際高等教育院の件です。それは、おそらく私たちに自部局をより真剣に考える機会を与えてくれた、そういう事柄ではなかったかと思います。そういう意味合いで、平成25年以後いくつかの試みをなされます。その一つは「学生自主研究プロジェクト」で、総人の学生から、あるテーマについて意欲ある研究プロジェクトを募集して、それに助成するというものです。これは、人環院生がアドバイザーに就くことで、総人と人環が学生の中でかかわり合いを持つ仕掛けを作るということも一つの目的とされました。また、この国際高等教育院の件から、部局の将来検討にかかわる取り組みもなされて、企画ワーキンググループが提言を出します。そこで挙げられた教育目標というのは、「高い専門性を前提とした知の越境により、自身の学問を相対化して捉えることのできる人材の育成」、「他者に自らの専門を語る言葉を獲得することにより、自身の学問を社会に「ひらく」ことができる人材の育成」、これが本部局の目指すべき教養教育を支える2本の柱であるという提言がなされます。

同じような内容のことを、当時の高橋研究科長の書かれたものを参照させていただいて紹介しますと（図8）、高橋研究科長は、「部局の抱える問題として、「他部局との差異」に関し、「学際」は部局を特徴づける切り札にはなり得ない」、「学部と研究科」「総人と人環」の関係についての問題点を指摘しています。それで、新たなコンセプトとして、部局の目的として「教養教育ができる第一線の研究者を養成する」ということを打ち出します。このようなコンセプトに基づいてなされた取り組みが、学部においては「異分野教員へのプレゼンテーション」で、卒論生が卒業研究を異分野教員へプレゼンするということが試行され、また研究科においては「大学院生の教養科目の教育実習」が試行されました。これらは、平成28年度から「研究を他者に語る」、「教養教育実習」となり、制度化に向けて今、動いているところです。「研究を他者に語る」は、専門外の人にわかりやすく語る、コミュニケーション能力を身につけることが目的で、また、異分野教員との議論を通じ、自分の研究を相対化し客観視することで、多様かつ総合的な視点でものごとを見る能力を養おうという目的で行われているものです。また、人環の「教養教育実習」は、初学者や一般の人々に研究成果をわかりやすく伝えることができる専門家の育成を目指したものです（図9）。

H24 「国際高等教育院」構想への反対運動　　H25 「国際高等教育院」の設置

H25 「学生自主研究プロジェクト」（総人・人環活性化委員会／学際教育研究部）
2回生以上の総人生が代表者となり、提案するテーマについての意欲ある学生研究プロジェクトを助成する。3～10名の研究チーム。人環院生がアドバイザーとしてつく。
研究テーマ：H25「みる」（3件），H26「きく」（3件），H27「はかる」（2件）

H27 総合人間学部・人間・環境学研究科企画WG
「総合人間学部・人間・環境学研究科の将来構想に関する提言：最終答申」

基本理念：学部・研究科のこれまでの理念の堅持
教育目標：**(1) 高い専門性を前提とした知の越境により、自身の学問を相対化して捉えることのできる人材の育成**
(2) 他者に自らの専門を語る言葉を獲得することにより、自身の学問を社会に「ひらく」ことができる人材の育成
‥‥*本部局が目指す「教養教育」を支える二本柱*

高橋良典研究科長（総人広報No.56より）
＊他部局との差異：「学際」は部局を特徴づける切り札になり得ない
＊学部・研究科の関係：総人「ジェネラリスト養成」 vs 人環「専門家養成」
➡ **「教養教育ができる第一線の研究者」の養成**

	H27		H28
学部	**「異分野教員へのプレゼンテーション」**の試行（異分野教員への卒業研究のプレゼン）	➡	**「研究を他者に語る」**
研究科	**「大学院生の教育実習」**の試行（博士後期課程院生による全学共通科目の授業）	➡	**「教養教育実習」**［H29 学際教育研究部が実施母体］

図 8

総人：「研究を他者に語る」
卒業予定者が、自身の卒業論文・卒業研究の内容を異分野の教員（聞き役教員）に「説明的に語ることを通じて、学術の知とその意義を専門外の人にわかりやすく語るコミュニケーション能力を身につけるとともに、異分野の教員との議論を通じて自分の研究を相対化し客観視することで、多様かつ総合的な視点で物事を観る能力を培うことを目的とする制度。原則としてすべての卒業予定者が対象。（『平成29年度総合人間学部便覧』より）

人環：「教養教育実習」
教養教育に自負と責任感を持ち、初学者や一般の人々に研究成果をわかりやすく伝えることができる専門家の育成を目的として、自らの研究内容・専門知識を踏まえて初学者に対しわかりやすく伝える能力の向上を目指し、全学共通教育科目において「教養教育実習」を実施する。
（2017.3.9. 研究科会議資料）

学際教育研究部

H20 設置		H28 体制・役割の見直し
広範かつ多様な研究分野の特性を活かした、専門かつ学際的教育研究活動のソフトな受け皿としての部局内センター（大学院人間・環境学研究科学際教育研究部に関する申合せ） ［目的］ ・院生のさらなる育成を図る高度な教育実践 ・大型プロジェクト研究や共同研究の推進（学際教育研究部HP）	➡	［目的］研究科及び総合人間学部における学際的な教育研究活動を推進すること、及びその活動を支援すること ［業務］ 1. 学際的な教育研究プロジェクト等の推進事業の企画、立案及び運営 2. 学際的教育研究の推進に係る支援策の企画、立案及び運営 3. 学際的な講演会等の企画、立案及び運営 4. 学際的教育研究活動の情報発信 5. その他学際的教育研究活動の推進及び支援（京都大学大学院人間・環境学研究科学際教育研究部の組織に関する内規）

図 9

それとまた、この二つの試みを動かしていく機関として、学際教育研究部の体制、役割の見直しがなされました（図9）。学際教育研究部は平成20年度に部局内に設置されたもので、研究科の院生を対象とした、また研究を対象としたセンターとして立ち上がったものです。それを見直して、

研究科及び学部において学際的な教育研究活動を推進すること、また、その活動を支援するということを目的として、「研究を他者に語る」「教養教育実習」を実質的に運営しています。恐らく、今後この学際研究部が主体となりまして、「学際」、「多様な分野の連携・融合」ということが進められていくものと思います。

安部　石川先生、どうもありがとうございました。では、続きまして、桂山康司教授より、「教養教育が目指すもの」と題して、二つ目のお話をいただきたいと存じます。桂山先生、どうぞよろしくお願い申し上げます。

桂山　桂山です。私は、共通教育では外国語教育にかかわる者です。今、外国語教育といいますと、コミュニケーションの道具としての外国語運用能力の涵養という点に焦点があたるわけですが、外国語教育はそれだけにとどまるものではありません。言葉というものは、まさに文化を担う器であり、文化の箱舟です。とすれば、外国語教育を行うということは、異文化と取り組む、異文化とぶつかることであり、そのことを通じて、思考の道具としての言語である母語を鍛える―それはわれわれにとっては日本語です―つまり、対象となる外国語の運用力の鍛錬といった目先のことを越えて、言語による表現力や発想力それ自体を鍛えるという目的もあるわけです。そういった教育を実践する立場にある者にとって、教養というものを学問の重要な部分として位置付けている総合人間学部の在りようがどのように見えるのかについて、私なりの考えをこれから簡単に述べさせていただきたいと思います。

まずタイトルについて一言お断りします―『プロジェクト X（エックス）』というテレビ番組がございましたが、「X」をローマ数字ふうに読みまして、「X（テン）」、要するに総合人間学部は京大にできた10番目の学部であるということと、また、これがちょっとばかし他学部とは違う、極秘の使命を帯びた集団であるという意味をも込めて、このようなタイトルとしております。

本日の発表の流れですが、まず語学教員として、教養教育というものを総括し、次に、その教養というものを学部の目標とどう関連づけるか。そこから、最終的に、それを実践している総合人間学部の特徴を、魅力というかたちで提示させていただきます。まず、教養教育ということですが、教養とは何かということですね―何か、教養というと、何でもものをよく知っている、例えば、クイズ王だとか、オタクだとか称される人が教養のある人と誤解をする人たちがいるのですが、もちろんそんな人たちのことではありません。教養のもともとの意味は何なのかということを、歴史を通じて―私は英語の教員ですので、英語にある “culture” という言葉の成り立ちに立ち戻って―考えてみようと思います。

日本語では「カルチャー・センター」など、いろいろな表現となって現在も使われていますが、英語の “culture” という語は、「文化」とも「教養」とも訳されることがあり、この二つの、ニュアンスの異なる意味が一つの言葉の中にあるというのは一見不思議と思われるかもしれませんが、それを合点することこそ、この “culture” という語、「文化」、「教養」という言葉の本義を知るうえで重要なことになると考えています。もちろん、日本語の「文化」というのは翻訳語でして、英語の “culture” という言葉の示す元の概念は、日本にもともとあったわけではなく、大正期に、

英語の “culture” に相当するドイツ語の “Kultur”（クルトゥーア） の訳語として使われるようになったものです。そして、英語の “culture” も、ドイツ語の “Kultur” も、元を正せばラテン語の “cultura”（クルトゥーラ） にまで遡ります。実は、西洋古典文学のなかに、この言葉を含む有名な典拠（locus classicus）がございまして、とある有名な言い回しの、要するに、省略形なのです。つまり、英語へ “culture” という言葉が借入されそれが定着したのは、主として、“cultura animi” というラテン語のフレーズの翻訳語として “culture” という言葉が英語に取り入れられました。 中英語（Middle English）にはすでに別な意味で用いられた “culture” の用例があるのですが、初期近代英語の用例ではほとんどがそうなっています。これは直訳すると「魂の耕作」という意味の、ラテン語では大変有名なフレーズでして、キケロ（Cicero）がギリシア哲学の精髄というものを、譬えで説明をする際に用いたものです―精神というものは鍛えないとだめだ、そのためには「魂の耕作」が必要だといったのです。つまり、どんなにいい種（いい発想のことです）であっても、それを蒔く畑（人の精神のことです）が耕されていなかったらだめだということです。どんなにいい種であっても、荒地に蒔いたのでは、いい実りとして結実しない。それと全く同様に、どんなにいい発想を持っていても、そもそも精神自体を鍛えていなかったら、そこからいいものは生まれて来ないということで、まずは魂を耕さないとだめだ―つまり、精神を鍛えなあかん―ということを比喩でもって説明をしたのです。その「魂の耕作」とは具体的には何のことかといったら、これこそソクラテスが実践したまさに哲学という行為に他ならないんだ―ギリシアで始まった哲学という営為に他ならないんだ―と説明を加えています。

というわけで、このフレーズは大変有名な言葉となっており、これが英語に翻訳されて、“culture of the mind” だとか、“culture of their minds” などと訳されて、“culture” という言葉が英語に入ってきたのですが、次第に、“of the mind” だとか、“of their minds” は言わなくてもわかるということで、“culture” だけで「（魂の）鍛錬」という比喩的な意味となりました。“culture” という言葉は、基本的に、耕作という意味なのですが、このフレーズの比喩的な意味「鍛錬」が、 “culture” という言葉に移っていったのです。つまり、 “culture” という言葉は、現在の、我々が知ってる「文化」という意味とはちょっと違っていて、むしろ、魂を「鍛えること」「鍛錬」の意味であったわけです。英語においては、長らく―19 世紀の真ん中ぐらいまでは― “culture” という言葉は「鍛錬」という意味でした。まだ「文化」という意味はありませんでした。ここで興味深いのは、この語は、元来、「耕すこと、耕作；（精神の）鍛錬」という動的な、ダイナミックな意味であったということです。そこから、その「鍛錬」という行為の結果として生じたものの総体という意味で、「文化」という意味が生じてきました。このことは、「歴史（“history”）」という語の発達に関しても言えることですね。「歴史」という言葉も、（もとはギリシア語の「ヒストリエー」という言葉ですが）もともとは「探求」という動的な意味でした。ところが、時代の推移とともに、それが何かを探求した結果の報告書みたいな意味に変わってしまうのですね。それで、歴史は暗記ものとみなされるようなものになってしまう。 静的（スタティック） なものになるのですが、文化に関しても同じようなことでして、本来は 動的（ダイナミック） な批判精神のことを意味する言葉だったものが、 批判精神の結

果として精神が生み出したものの総体を表す言葉として、今は使われるようになっているわけです。ここでのポイントは、この精神を鍛えるという動的な営みが、この “culture” という言葉にはもともとあるのだということです。そう考えると、文化、教養という二つの意味が、この “culture” という言葉の中に共存していることもよくわかるのではないかと思います。

ここが、実は、非常に重要な点で、私は、教養というものを研究科の基盤として据えているというのは何なのかですが、先ほど、外国語を学ぶということは—私の場合は英語ですけども—単に、英語がそれ自体としてしゃべれるようになるということではなくて、英語と日本語をぶつけあうことを通じて—ぶつかりあいから—それぞれの言語の限界を知って、そのことが、自己の限界を超えていこうとする契機となる、そこに意味があるといった趣旨のことを申しました。全く同じような意味で、総合人間学部というのは多様な学問があるわけですが、それは、決して、多くの領域にまたがって、薄く広く平板な知識を増やすということではなくて、多様な人たちが話し合う—いろんな学問がぶつかり合う—そうやって、自分の行っている学問の枠、限界というものを超えていく。つまり、自分の学問内容に一人で悦に入り、その中にとどまる—つまり、オタク的な発想にとどまる—ということが学問上非常に深刻な問題となっていて、それを乗り越えるために、多様な視点から議論を戦わすことを通じて初めて身につく能力—批判能力—を涵養することを他ならぬ学部教育の目標として掲げているのが総合人間学部ではないかと、私自身は考えています。

ただ、だとすれば、次に、そのことを—これは、何というか、あくまで理念、絵に描いた餅、理想でしかないわけですから—現実化する仕組みが絶対に必要である—その理想の現実化を保証するためには、いったいどういう体制、組織が要るのかということを、次に、お話しさせていただきます。固定化された事実をただ暗記するというのではなくて、むしろ問うということ、これが重要であるということ—これが教養ということの内実です、クイズ王やオタクとは全く違う—で、これを実現するための制度的保障として、総合人間学部はいったいどのような体制を取っているかということに関して、お話をさせていただきます。現在、日本の大学は、基本的に、多様な学問をそれぞれ個別に追究する学部が、複数、集まって構成されていますが、世界全体では、これがそもそもの仕組みというわけではありません。もちろん、この在り方は、効率論からいくと非常にいいものでして、ある一つの学問を目指す人たちが一か所にまとまっていると、効率よくその学問というものを遂行することができます。つまり、現在の学部という考え方は、一つの学問を共通に追究する集団というのが基本で、経済学部とはその名のとおり、経済学を目指す集団です。ただ、こういう学問の追究の在り方というのは一つの在り方でしかないわけで、ではほかにどんな、いわゆる学部的な集団があるのかといいますと、私の専門はイギリスですので、イギリスの代表的な大学を例として取り上げたいと思います。学部という名前ではないのですが、別の在り方として、例えばケンブリッジ大学ですね—これは、さまざまな学寮（カレッジ）というものからなっています。ちょうど学寮（カレッジ）が日本でいうところの学部に相当するものなのですけれども、その中で由緒ある有名なものを挙げますと、コーパス・クリスティ・カレッジ（Corpus Christi College）だとか、モードリン・カレッジ（Magdalene College）だとか、トリニティ・カレッジ（Trinity College）などがありま

す。もし、追究する学問名が組織名に冠されているのでしたら、「コーパス・クリスティ」というのは「キリストの御体（おからだ）」のことで、モードリンは「マグダラのマリア」、トリニティは「三位一体」という意味ですから―何か、イギリスの大学というのはキリスト教の教義ばかり研究しているのかということになりかねません。もちろん事実はそうではありません。最後のトリニティ・カレッジを例に挙げますと、例えばどんな出身者がいるかといえば、詩人のバイロン（George Gordon, Lord Byron）、テニスン（Alfred, Lord Tennyson）とか、哲学者のフランシス・ベーコン（Francis Bacon）―彼は政治家でもあります―他、科学者のニュートン（Isaac Newton）といった人たちがこのカレッジの出身です。つまり、学問別で組織されているわけではないのです。多様な学問の人がそこにいるわけで、つまり学寮名と学問がイコールではないのです。分野は違えども、そもそも学問とは何か―博士号は、英語では、“doctor of philosophy,” ラテン語では、“philosophiae doctor” といいますが、この場合のフィロソフィーとは哲学という狭い学問領域の意味ではなくて、もっと広く「学問」という意味です―そういう意味での、知を愛することを追求する共同体としての在り方―実は、この在り方を（これは今日では学際的ともいうことができるわけですけれども）総合人間学部という学部は採用しているわけです。つまり俗に寄せ集めなんていわれますけど、そうではないのです。一つの学問を極めようというのが目的ではなくて、分野の垣根を超えて、そもそも学問とは何かということを追求している集団なのです。

私は、この学部にいてとてもうれしいと思うのは、分野の違う仲間が本当にたくさんできて、また、これが、仲がいいんですね！一杯入ったら激論になることもあるけど、すぐに、けろっとして前と同じように楽しくやっている―次にまた飲んだらまた言い合いするけど、それはむしろ、けんかというより、学問の内容でいわば本音でぶつかり合っているわけですね。決して悪意じゃない。お互いにそれぞれ信念があるからぶつかるのです。そういう人たちと絶えず議論を交わすことができているということ―全く、これは私にとってはありがたく、刺激的であり、これは、総合人間学というものが目指す、あるべき一つの方向性というものを示唆しているのではないかと思っています。

もうすでに、結論部分の、総合人間学部の魅力に関するところ、特徴を思わず言ってしまいましたので、以上の点以外の、残りの三つの特徴をさっと挙げさせてもらいます。第一は、多様な領域にまたがる多様な人材がいるということです。1学年の入学定員が120人で、教員は約125名。1学年の学生数よりも教員の数のほうが多いということは、教員が学生と1対1で、日常的に対話を行うことができる。京大の理念の中に、「対話を根幹として云々」とありますけども、先ほど、教養とは、いわば哲学という行為にほかならない―これはもちろんソクラテスが創始者で、プラトンが『対話篇』を通じてその実際を書物に著しましたが、方法論としてどうやって学を極めるのかといえば、それは対話です。総合人間学部では、まさにそのことが可能となる体制になっているのだということです。

次に、二つ目ですけども、総人の教員は必ず全学共通教育を担当することになっております。これは人によっては嫌な義務だとか、させられているだとか言う人がいますが、私は、決してそうは思いません。私は外国語教員であることについては、強い誇りを感じていますし、同時に一方

の信念として、教育と研究は一体であると信じています。1回生に―つまり、あまり学問的にはまだ素養がない学生に対して―しかも専門が異なる―私は工学部も教えますし、いろんな学部を教えますけれども―専門的知識に関して何の素養もない学生に、一から、英語というのはおもしろいよ、僕の専門はイギリスの詩だけれど、詩というのはおもしろいよと―何でおもしろいか、何でこんなに楽しいか、何でこんなに俺を惹きつけるのかということを―全くもって専門的な知識のない人に一からそれを伝えるということですね―そのことを絶えず、毎年、新しい若い精神に向かってすることが許されている！こんなありがたい職場はないのですよ。要するに、毎日、自分自身の足元を見つめることを―言葉に対するセンスを磨くということです―自分の職務としてさせてもらっている。そういう教養教育のプロの集団であるというのが、総合人間学部の一番大きな魅力ではないかと、私は思っています。そしてもちろん、学問研究の第一線に立つ専門家でもあるわけです。そのことを、先ほどもお話がありましたように、単に教員だけが行うのではなく、学部の卒論というものに関しても、これからは義務化して、卒業論文の発表内容を、自分の指導教員ではない全く分野の異なる先生に向かって、自分の学問的立場を一から説明するということを行う予定でおります。これはまさしく、学際的なことを制度として実践していこうという方向性、試みであるということで、私はこの方向性が非常によいことだと思っていますし、先ほど、大学院においても、院生が教養の授業を行う経験をさせてもらえるという話がありましたが、それもまた教養力、要するに自分の学問というものを独善的に主張するのではなくて、他領域とのかかわりの中において絶えず自分の専門を見つめる姿勢というものを研究者には持ってもらう、そういう機会であるととらえて、意義があるものと考えております。

それと、第3番目に、これはあとで浅野先生からもっと大々的にお話ししていただけると思うのですが、自由な精神の中でできた卒業論文のテーマとして、実はこんな多様なものがあります。

卒論のバラエティとユニークさは京大随一！

- 道徳的感情が顔記憶に与える影響
- 英国におけるシティズンシップ教育の実践
- 近代京都と社交ダンス
- 仮想空間において高度推定を行った際の実際の高度と推定高度の関係
- コオロギの摂食選好性を利用したオオバギの非アリ的防衛強度の評価

京大的自由を体現！

実はこれ、実際にあったテーマですので、ひょっとしたら会場の方で、「あっ！それ俺のや！」という人がいるかもしれませんけど、見るからにいったいどの分野の論文だろうかと思うようなテーマがあり―これを先生方は、やっぱり指導されてるということで、また、こういったテーマというものを見いだしてくる学生さんの豊かな発想力というものにも感心をします。これは総人の非常に重要なところではないかと思っています。というわけで、先ほど総合人間学部の4年間で卒業する比率

が今、7割を切っていて、これは大問題で、私自身もそう思う一方で、しかし、それはある意味、理由のあることだとも考えています。つまり―ここからが、まとめですけれども―普通、二兎を追う者は一兎をも得ずというわけですね。実際得られない場合もあるかもしれませんが、あえて二兎を追うのが総人生であると。やっぱり二つ追っかけたら、それは大変ですよ。4年ではなかなか大学出られません―むしろ、4年間で7割も卒業している！大したものですよ。慰めにはならないかもしれませんが、5年であればほとんどの学生が卒業しています。すばらしいことです。

ということで、一言でまとめますと、批判力をつけるという点で、まさに総人の教育というものは、「現代のソクラテスを育てることにある」となります。これこそが総人の目指すものであるということです。最後に、重要な課題として、これを、いかに制度的に保障しながら、どう実践していくかということについてですが、私には、その実現に向かって総合人間学部は四半世紀の間、一歩一歩前進してきていると思っています。その確かな証言として25年間の歩みを現実の卒論として体現してくれている総人のすべての卒業生に、ここであらためて、敬意の念を表したいと思います。

安部　桂山先生、どうもありがとうございました。では、引き続き第3講演といたしまして、酒井敏教授より、「カオスな世界を生きる総合人間学部、人間・環境学研究科」と題するお話をいただきたいと存じます。では酒井先生、どうぞよろしくお願い申し上げます。

酒井　酒井です。ちょっと今日は堅い話が続いていますが、私の話はざっくばらんに、ちょっと本音を語らせていただこうと思います。もう25年前に総合人間学部、人間・環境学研究科ができたわけですが、当初からこの理念というのは、いろいろ語られてきました。で、時代によって微妙に表現は変わるのですが、ざくっと言うと理念は、「世の中行き詰まった」と。で、「われわれが救世主である」ということがずっと書かれていたわけです。この後半のとこはちょっと置いときまして、とりあえず「世の中行き詰まった」というこの背景を、私なりにお話をしたいと思います。まず、行き詰まった原因といいますか、大きな要素は、カオスというものが発見されたということだと思います。それまでは、まじめに何でもやればちゃんと計算できるというふうに考えていたものが、どうもそうではないよと。で、ちょっと簡単なカオスの例をお見せしたいと思うのですが、簡単な計算を電卓でやります。

電卓カオスと呼んでいます。ある数字を2乗して2を引くという、非常に単純な計算です。この答えをまた2乗して2を引くというふうに繰り返していきます。初期値を決めてあげれば、そのあとずっとすべての値が決まる決定論的方程式です。ですから、どんな計算機を使っても

同じになるはずなのですが、これを六つの電卓で計算をします。いろんなメーカーのいろんな機種のものがあります。ただし、四則演算しかできないものがありますが、これには2乗キーがない。ですが、そういうものは、かける、イコールといきなりやると2乗になりますので、それを使いまして、かける、イコール、マイナス2、イコールと。

五つのキーを繰り返すということは、5拍子ということですね。1小節ごとに値が変わります。左のところに値が出ていますが、今、全部そろっています。サビに入ったら、水色のBに注目してください。どんどん、ずれていくのです。

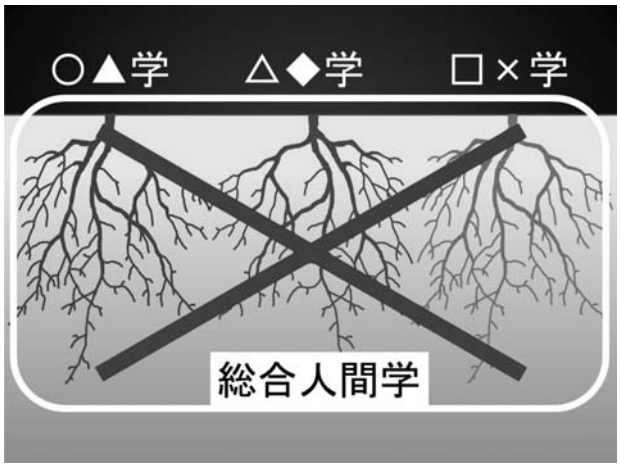
全部ばらばらになってしまいました。ここでちょっと切らさせていただきます。カオスというと、制御不能でむちゃくちゃな世界というふうな印象があるかもしれませんが、このように、1回2回はちゃんと計算できるのに、これ繰り返していくことでばらばらになってしまうというようなものがあります。

こういうやつを決定論的カオスと呼びますが、60年代、このカオス発見されまして、簡単な問題でも予測不可能であるということがいわれました。これはかなりショッキングなことで、簡単な問題であればちゃんと計算できるだろうと思っていたのが、そうならなかった。でも、やっぱり人間、希望を持ちたいわけでありまして、こんなもんは特殊ケースだと思いたかったわけです。その淡い期待さえも打ち砕いたのが次のマンデルブロが発見したフラクタルです。このフラクタルも一つ、例をお見せします。

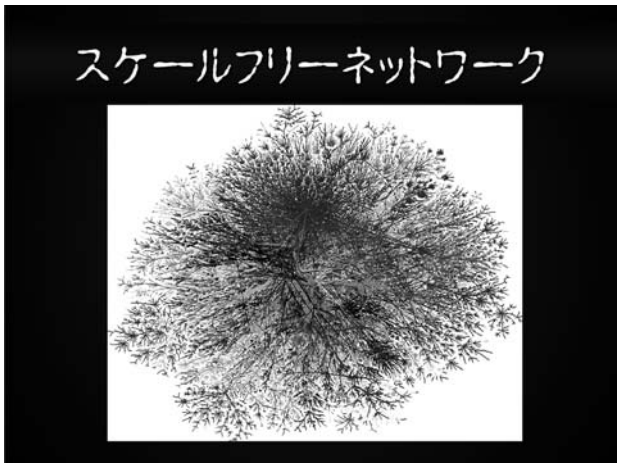
山極先生ですが、山極先生のこの写真をお借りしまして、山極先生のコピーを取ります。4枚取ります。

ちょっと小さくなった山極先生と、あと2枚少し傾いた山極先生。最後の1枚は、文科省からいろいろ言われてやせ細っちゃった山極先生なのですが、この4枚取って貼りつけるという作業を繰り返す。先ほども、出てきた答えをもう一回計算をするということを繰り返しましたが、それと同じようなことを画像でやっています。これ全体また同じことを繰り返します。今、山極先生が4人ですが、これで16人、64人、どんどん増えていきます。

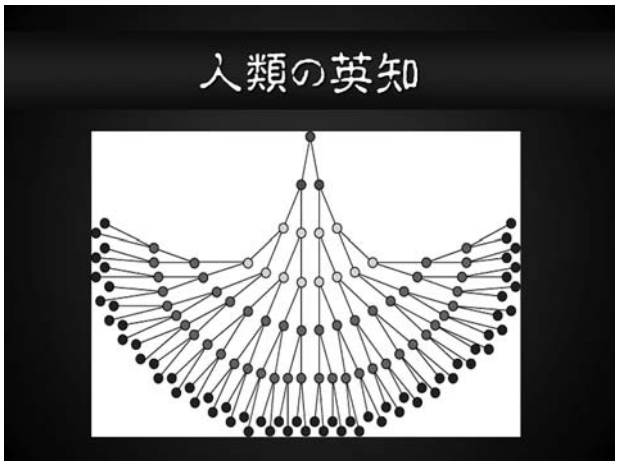
あっという間に山極先生は見えなくなって、何か本物より本物っぽいシダの葉っぱができてしまいます。マンデルブロは、自然界はこういうフラクタル図形だらけであるということを示しました。しかもこういうものは非常に複雑に見えていて、実は単純な法則でできているということがわかったわけです。このフラクタルは、先のカオスと密接に関係していて、ある意味表裏一帯の関係にあります。つまり、自然界がフラクタルだらけだということは、カオスだらけだということを意味します。これは要素還元主義の限界だということで、ここが行き詰まったという心の一つだと、私は考えています。このあと総合人間学部、人間・環境学研究科ができているわけです。当時、ここまではわかった。まじめにやったってうまくいかないっていうことまではわかったのですが、じゃあどうするか。実は、作戦ない。ですから、当初から、1期生から詐欺じゃないかというような声も上がりました。その頃からいろいろ議論されていたもの、個別の何とか学というものが行き詰まった、だから総合人間学部を作ったのだと。じゃあ総合人間学って、これ全部やれってこと？んなもん、できるわけないじゃないですか、1個だけで大変なのにと。



これだめですよね。だったら、1人の人間でできることは限られているので、この上だけですかね、ってことになるのですが、こんなもんやったってちっとも面白くない。で、これもだめですよね。じゃあ、総合人間学というものを作りましょうという話も出てきました。いや、もともとタコつぼがいかんと言っていたのに、もう1個タコつぼ作ってどうすんだというので、これもだめですよね。こういう話を延々とぐるぐるやっていたわけです。そうこうしているうちに、2000年ぐらいに、バラバシという人が、スケールフリー構造というものを見つけています。

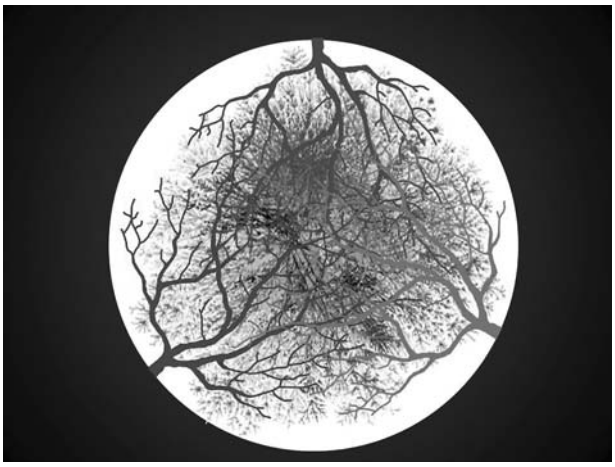


これについて説明すると長くなっちゃうので、割愛しますが、要はカオスの中の秩序みたいな。これが多分何か、われわれの研究科、学部にとって非常に大きなヒントになるのではないかと、私は思っています。このスケールフリーネットワークという、これは自然界のいろんなところにかなり普遍的に出てくる構造です。ランダムでもないし、かといって規則的でもないという、微妙なところで。こういう構造に対して、われわれ人間が作った学問体系も含めて、人間が考えたものというのはこういう樹形図構造をしています。

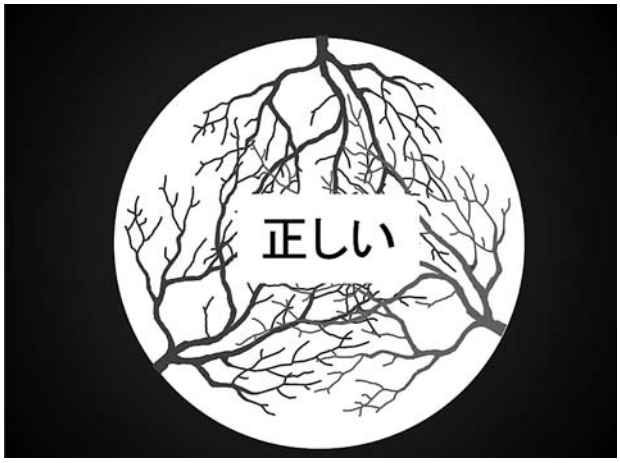


これと非常に対照的な、ある意味、形をしている。これ、何が違うかというのをぶっちゃけて言うと、この（樹形図）構造だと、勝手なことをすると怒られるのです。ところが、このスケールフリー構造は勝手なことすると新たな世界が見えてくる。大体、研究っていうのはこういう世界にあるのだと思うのですが、こういうことをどんど

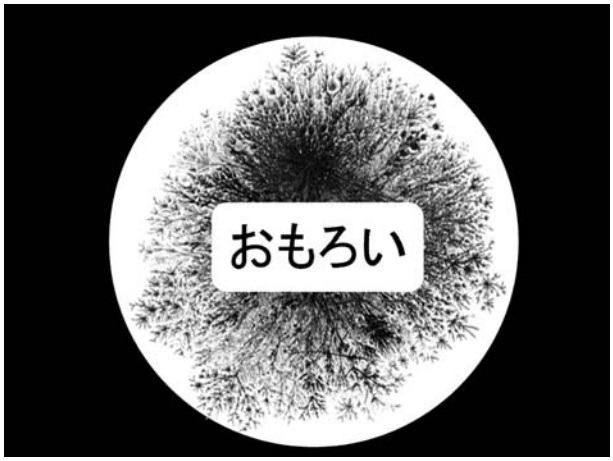
ん突き進んでいくのが本来、大学っていうとこではないかなと思っています。先ほど出てきた、こういう模式図、こういうのをすぐに書きたくなるのですが、多分これ、書き方が悪いのだなと最近思っています。いろんな分野があるわけですが、いろんな分野が独立にあるわけじゃなくて、実は世の中こんなふうに、入り口は違うのだけど、入ってくと重なっちゃってごちゃごちゃっとしていると。



そしてその奥には、今のスケールフリーネットワーク的なぐちゃぐちゃしたものが、実は重なっていると。こういう世界観を持つと、少しわれわれ総人人環の立場というのを説明しやすくなるのではないかという気がしています。こちら（樹形図構造）のほうは、いわゆる基礎知識であったり、各分野の専門知識であったりするわけですが、この（スケールフリー）構造は、いわゆる教養といわれるものに相当すると、私は思っています。教養といえば教養部時代、森毅先生という大家がいらっしゃいまして、今日お配りしたバッグの中に木のコースターが入っていますが、これは昔のE号館の前のヒマラヤスギ、先日台風で倒れまして、それから作ったものですが、森先生、そこの下でよく講義をされておりました。で、森先生の言葉、私非常に好きな言葉があります。「正しさは伝わらない、おもろいは伝染する」。



要は樹形図構造っていうのは正しいとか間違っているとはっきり言いやすい。そういう意味で、正しさを追求するとこういうことになるのですが、一方で、これ（スケールフリー構造）はおもろいと。



多分こういうこの世界を見る基準といいますか、何か見方というの、おもろいかどうかということでものを見なきゃいけないのだと思っています。今日お見えになっている木下先生が、初代総合人間学部長になられたときに「われわれの基準はおもろいかどうかだ」とおっしゃったのを、私は今でも覚えています。まさにこれがわれわれのキーワードであると思っているのですが、25年たって、そのときは、おもろいというのをどう表現したらいいのかっていうのがよくわからなかったのですが、だんだんと、こういうことをビジュアルにも、論理的にも、なぜこういうものが必要なのかということが、語れるようになってきたのではないかなという気がしています。というわけで、今後の25年は、多分このおもろいをどう表現するかということになるのではないかと思います。

安部　酒井先生、どうもありがとうございました。では、最後の第4講演になります。浅野耕太教授より、「学際教育の事例紹介」と題してお話をいただきたいと存じます。では浅野先生、どうぞよろしくお願い申し上げます。

浅野　皆さん、こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました浅野でございます。前2人の先生が、総合人間学部大学院人間・環境学研究科を代表する面白い先生方お二人だったのですが、私はどちらかというと普通の大学教員でございまして、なぜこの場に呼ばれているのか、ちょっとわかりにくいと思いますので、私がこの学際教育の事例紹介をなぜしなければいけないかっていうことを、自己の経歴と関連づけてお話しさせていただこうかと思います。

実は、私はほかの先生方よりすごく違った、ジグザグ人生を送っておりまして、高校生のときは生物の先生が大好きで、理系として理数科で勉強してきたわけですけれど、私のとき共通一次試験というのがございました。その3年目でございまして、共通一次の試験がものすごく悪かった。その結果、もともとは理学部を狙っていたのですけど、とても理学部には通らないということで、同じような科目でいける農学部を受験しました。そうすると、農学部は第一志望から第十志望まで10学科書けるわけです。そしたら、第四志望のところに農林経済学科っていう、小規模農家の生活を助けるための農業経済の学科がありまして、どうしてここに合格したかはよくわからないのですけど、ここにやっと拾ってもらいました。この学科っていうのは、北部キャンパスで唯一の文系でございまして、そこで大学生生活を始めることになりました。その後、やってみるとどの学問でも大概面白いもので、経済学が面白くなってアメリカに留学しました。そのあと、農政学講座っていうところで就職できたのですが、今度は新しく文理融合の新学部ができるからいきなさいって言われて、地球環境学堂へいき、最終的に人間・環境学研究科に2005年にたどり着いたということです。そのたどり着いた先においても、実は専攻内で私の講座だけが文系でございまして、

ほかは全部物化生地の自然科学の皆さんがいらっしゃるところ。そこで環境経済学を教えております。併せて全学共通科目は、経済学を担当して、総合人間学部では公共政策論を担当するということで、気がついてみると、私の遍歴っていうのは、最初は理系だったのにどんどん文系になって、だけど理系の中の文系っていう役割をずっと背負っているということになりました。

私の専門の環境経済学というのは、その学際教育の一例としてふさわしかろうと思うのですが、私が2005年から今年まで13年間、総人の歩みで言うと約半分の期間のうちに、81名の学生を卒論指導してまいりました。年間平均6名程度っていうことで、今日、先ほどのスライドを見られた方はおわかりだと思うのですけれど、総合人間学部の教員は130名ぐらいいて、生徒は120名しか1学年いないわけですから、1人は1人学生を担当すればいいというふうになっているはずなのですが、私は毎年6名、着任した年なんて普通は卒論生いないはずなのに、その年から1名紛れ込んできた学生がきて、卒論を書かせ、それがだんだん増えていって、最終的に2010年には13名になって、もうさすがにこれ以上は卒論指導無理だと思って、それから少しずつ学生を絞ってきたのですけれど、それでも大体年平均6名ということで、研究科長に申し上げたいのは、私6倍仕事していますよと、この部分では。ぜひ、昇給なんかの点で少しご配慮いただいたらうれしいなと思っております。ただ私、総合人間学部にはそれ以外の仕事もたくさんございますので、卒論やっただけではそうは簡単にいかないこともよく存じ上げております。私の研究室は多分、一種の駆け込み寺になったのではないか。総合人間学部でいろんなところにいくところがない、だけど理系、文系両方やっている先生はなかなかいないから、浅野さんとこいったら、最後どうにか卒論を書かせてくれるのじゃないかっていうことで、今の事態になったのではないかと思っていますが、一方で、うまくいったこともあります。例えば、卒論を書かせたあと、その結果が学会誌に掲載されたということもございますし、あと、大学全体に対しては、この時期になると卒業生向けのリサイクル市っていうのをやっていると思うのですけど、このリサイクル市をもともと提案したのは、「耐震改修工事等における移転に伴う不要物品処分の現状とリユースシステム、京都大学吉田キャンパスを対象とした調査と大学への提案」という卒論で、これを前総長の松本先生にお見せしたら、面白いからやってみたらどうかと言われて、システムとして実施することができたということもございます。

次に、卒論の内容ですけれど、私の専門が環境経済学ですから、環境経済学に関する卒論は大体42％です。それと、環境経済学が寄って立つ経済学の応用っていうのがございます。例えば一つ例を挙げさせていただいたのは、バレンタインデー。これはゴディバが義理チョコにものを言う前の話です。バレンタインデーって勝手にプレゼントするわけですから、もらう人もうれしいかどうかわからないし、大きな社会的損失があるのじゃないかっていうことをちょっと計算してみようという卒論を書いてくれた学生がいます。あるいは、就職活動の不思議というテーマで、平服で来てくださいというのにみんなリクルートスーツでやってくる。何でそんなことするんやろうとか、あるいは美術品ってゴッホって名前がついたらなんぼぐらいで売れるんやろうとか、そういう研究を経済学の応用としてやった学生もいます。一方で、あとは公共政策論も教えているので、経済学

にとらわれないような公共政策論のさまざまな研究。私、大学を退職したら少し競馬で食べていこうかとも思っていますので、私自身がデータ解析をやるものですから、競馬をもうちょっと科学的にやれないか、実はこれ、経済学の世界では投資行動を理解するために競馬を研究するっていうのは、結構大きなフィールドであって、まじめな研究なのです。毎年、競馬でやってみない？って学生にすすめるのですけど、今までやってくれた学生が3人いまして、まだ必勝法にはたどり着いていません。あと10年いくと、私の退職までにはどうにかなるのではないかという目算を得ています。

もともとの私のテーマに戻りたいのですが、私の指導した環境経済学的な内容としては、こういうものがございます。例えば養蜂及び野生ポリネーターの農業生産への貢献度とか、あるいは人々に選ばれる日本の山々とか、実は私自身が経済学者としてのキャリアだけではなかなか扱わないような問題を取り扱ったものがだんだん出てきています。こういった、実は環境経済っていうのは、経済だけじゃなくて経済と環境の相互関係をやらなければいけないので、経済の知識だけでは卒論が書けない。あるいは環境の知識だけでも書けない。両方やるっていうことで、こういう卒論が出てくるわけです。そう考えると、先ほどの酒井さんの図ではないですけれど、三つのオリジンを持った知識っていうのが環境経済学では非常に重要で、一つは経済学の知識。もう一つは、それを解析するためのデータ科学。もう一つは、自然に対する深い理解である生態学。この三つを、できたらトレーニングしてほしいし、身につけてほしいというふうに、私は1年生の学生がくると、こんなこと勉強してよって言います。ところが、なかなかうまくいきません。それについて最終的に私が思っているのは、今日、総合人間学部の一つの特徴は副専攻制度っていうことです。もし副専攻制度がうまくいっているのであれば、例えば経済学を勉強しながら生態学を勉強する、あるいは経済学を勉強しながら数理科学、アルゴリズム科学をやる、こういうことを同時に身につけられるはずです。ところが、なかなかこれ、一緒にできる人がいない。もう一つは、実際に学生の実態を見てみると、石川先生から報告されたアンケート結果と違うのですけれど、学生にとっては副専攻っていうのは卒業要件である、だから仕方なく最小単位を修めるだけの対象になっていないかっていう問題があります。あるいは、その20単位のために無理して取っている、形骸化してないかっていう問題があります。だから、せっかく総合人間学部ぐらいに柔軟なカリキュラムだったら、副専攻だってメジャーとマイナーっていうことで、取らなくても卒業できるようにしても、本当はあんまり問題ないのじゃなかろうかっていうことを思います。もう一つは、既にご指摘ありましたように、うちは卒論生がなかなか卒業できずに、留年っていうのが多い。ただ、5年以内には卒業できています。ということは、どういうことかっていうと、みんな卒論書けないわけじゃなくて、なかなか指導教員を最終的に決定できてない。4回生になってまでつまみ食い的な学習に終始しているような学生、要するに行方不明の学生が結構出ているということになります。行方不明になることも私、大学で許された自由の一つだと思うので、別に大きな問題かなというふうに思うのですけれど、一つ総長の立場になって考えると、そう長いこと大学におられても困るっていうことになりやしないか。そうしたら総合人間学部としては、本当にやりたいことを、学生自らが自分の力で探

索できるような環境を、総合人間学部がきちんと作れているのかどうか。あるいは、やりたいことを十分に深められるような学習環境であるかどうか。こういうことを、やっぱりわが身を振り返って見直してみる必要があるのではないでしょうか。

最後ですけれど、総合人間学部、人環の強みっていうのは、全学共通科目をやっていることです。全学共通科目、私、農学部地球環境学堂を経てここへきたわけです。そこにいたときに、教員同士の話で、教育の話っていうのは、実は一度もお話ししたことはないっていう経験を持っています。これは多分、他部局の先生方でも同僚と教育の話ってあんまりしないのではないでしょうか。ところが、総合人間学部にくると、みんながやっぱり全学共通をどうやってやるかっていうことについて、すごく時間を使っているので、お互いにノウハウの交換とかができます。プラス、それだけではなくて、教育っていうのは15回の講義の間に、京大生として知るべき学問をどれだけコンパクトに教えるかっていうことを、結構一生懸命やります。その中に取捨選択が存在して、うまい取捨選択をすれば、新しいタイプの学問のスタートとして非常にいい出発点を示すことになるのではないでしょうか。例えば、かつてはオックスフォードとケンブリッジの先生方が、自分の研究の時間を割いて教科書を書いていることを、私、不思議に思っていたのですが、実はそういう教科書ができることによって、初めて学問の世界が再整理されていく。それによって新たなブレイクスルーが生まれるっていうことが実際に起こっているので、教育をやれるっていうことは、そういうよさを発揮できる可能性があるのではないか。そのよさを、もっともっと学生諸君に使ってもらえるような総人人環の姿っていうのを、これからどうやって作っていくかが、現役の教員のわれわれの課題ではないかと思います。

安部　浅野先生、どうもありがとうございました。これで、4名の先生にそれぞれお話をいただきました。これからパネルディスカッション、つまり先ほど申し上げた後半の部に入らせていただきたいと存じます。準備が整いますまで、どうか今しばらくお待ちくださいますようお願い申し上げます。

安部　お待たせいたしました。それでは準備が整いましたので、これからパネルディスカッションを始めさせていただきます。改めて、パネリストの登壇者をご紹介申し上げます。まず、石川先生、第1講演者です。それから、第2講演者をお務めいただきました、桂山先生。安部 それから、第3講演者をお務めいただきました、酒井先生。そして、今第4講演者をお務めいただきました、浅野先生。

それに加えまして、助教の若い先生お二人をお迎えして、これからコメントを、そしてもしあれば御質問をも含めて、パネルディスカッションの口火を切っていただこうと思います。では、自己紹介をちょっとご自身でやっていただくことにしまして、最初に佐野先生から、コメントをお願いしたいと存じます。よろしくお願いいたします。

佐野　人間・環境学研究科で特定助教をしております、佐野泰之と申します。僕は2007年に総合人間学部に入学して、そのまま人間・環境学研究科を出て今のポストに就いたので、登壇されている先生方の中では一番若い部類になります。とはいえ、大学の人事に詳しい方は「特定」助教という肩書きからお察しいただけると思うのですが、いわゆる任期つきの身でして、今の僕の

立場に象徴されているような、大学が置かれた財政的・政治的な難局の中で、一人の駆け出し研究者・教育者としてどのように振る舞うべきかという問題と今まさに向き合っている、あるいは、否応無しに向き合わされている最中です。今回はそのような立場から少しコメントをさせていただければと思います。

僕はもともと、人工知能に興味があったのと、大学を卒業するまでにプログラミングのような仕事に役立つスキルを身につけたかったという理由で、大学では情報科学を勉強しようと思っていました。それで、現役で大学受験をしたときは京大の工学部を志望していたのですが、前期試験で落ちてしまって、後期試験で大阪大学基礎工学部情報科学科に一度入学したのです。けれども、入学してからわかったのですが、基礎工は必修科目がガチガチに決められていて、選択の余地がほとんどないのですね。例えば文系の授業を少し受けて勉強したいなと思っても、金曜1限に心理学の講義を一コマ入れられるか入れられないかみたいな状況で、非常に窮屈なカリキュラムでした。そんなところで半年くらい授業を受けているうちに、「もっと大学では自由にいろいろなことを学べると思ったのに、こんなはずではなかった」という不満が強まって、そんな折に、現役のときは知らなかった総合人間学部の存在を知ったのです。それで、ここならもっとのびのびと、いろいろなことを勉強できるのではないかと思って、いわゆる仮面浪人をして総合人間学部に入り直しました。すぐ辞めたとはいえ一度は情報科学科に籍を置いていたという自負もあって、入学してしばらくは脳科学や数理科学などの方面に進もうかと漠然と考えていたのですが、だんだんと、自分が人間を理解しようとする際に求めているのは、いわゆるサイエンス的な精密性とは違う意味での厳密性なのではないか、そのような厳密性の要求に応えてくれる学問は哲学以外にないのではないか、と思うようになりまして、今の専門は哲学ということになっております。

さて、そのような個人的体験も踏まえつつ、先生方のお話から見えてくる総人の強みと弱みというものを改めて僕なりにまとめ直してみますと、総合人間学部は多様な分野の先生がいて、学生にも科目選択・分野選択・分野の変更などに関して非常に強い裁量を与えている、やる気のある学生であれば、いろいろな分野を行き来しながら自分のやりたいこととじっくり向き合うことができる、そういう環境であるという点はやはりほかの学部にはない魅力であると感じています。例えば、桂山先生のご発表の中で、イギリスのカレッジ制度についての話がありました。そこで個人的に思い出したのが、「学部」というのは日本独自のガラパゴス的な制度であるという話です。日本の学部制度は、一般教育があるとはいえ、基本的には一つないし若干のディシプリンの枠内に学生と教員をともに囲い込んで、その中で教育を完結させてしまう。それに対して、一つの学部にほとんどすべての分野がある総合人間学部というのは、日本の旧来的な学部制度に対するアンチテーゼのような面があると思います。それがむしろイギリスの伝統的なカレッジ制度とつながっているのだ、という桂山先生のご指摘には、なるほどなと思うと同時に、総人のような場を今日改めて発展させていくことの意義というものを考えさせられました。

しかし、総合人間学部はこのように既存の学部制度を乗り越えるような強みを持っているという点は僕も重々承知しているのですが、一方で浅野先生がおっしゃったように、分野を決めきれず

に迷ってしまう学生がたくさんいるという点は、やはり現状では弱みと言わざるをえないと思います。もちろん、分野選択という点では、文学部でも文学か哲学か心理学か歴史学か社会学のどれにするかとか、理学部でも生物学か化学か物理学か地学のどれにするかとか、そういう選択はあるでしょう。けれども、総人の場合はそもそも文系にするか理系にするかという大きな選択がまだ学部の段階で残っているうえに、その中でもさらに多様な選択肢があるわけですから、分野選択という課題を前にしたときに学生が受ける負荷はほかの学部とは比べものにならないほど大きいと思います。そういう中で、分野を決められずに迷ってしまう学生がたくさんいるということは、僕の学部時代の知人などを見ていてもそうでしたし、今の学生の話を聞いていても感じるところです。

今回、シンポジウムのテーマとして、安部先生がこれからの25年間をどうしていくかという未来志向の話をしたいと最初におっしゃっていたので、今お話しした強みと弱みを踏まえて、どういうことが今後総人の課題になっていくだろうかということを、僭越ながら問題提起のようなかたちでしゃべらせていただきます。学部から合わせて10年ぐらい総人・人環の学生をやって、教員という立場になって少しずつ内々の事情なども知るようになって改めて思うのは、今後の総人には、教員同士のチームワークが必要とされるだろうということです。総人の先生方は皆すばらしい研究をされていて、学生に対しても非常に教育熱心な方が多い。けれども、他の教員との連携という点に関して言えば、他人への遠慮からか自分のエゴからかは人によると思いますが、他の分野や先生の教育に対してはアンタッチャブルという態度をとる人がほとんどだと思います。でも、学士課程教育のカリキュラムをより良いものにするには、学生が4年間で総体としてどういう学習経験を得るべきかということを考える必要があります。そのときは、教員がそれぞれ個別に自分の授業に出席した学生に語りかけたり、自分の研究室に所属する学生を指導するだけでは限界があるわけで、やはり教員同士がもっと連携して、総人は4年間全体を通して学生にどういう教育を施していくのか、そのためにはどんな科目が必要なのかといったことをもっと話し合って、制度的に実装していく必要があるというふうに感じています。そういう意味で、総合人間学部のこれからを見据えていくにあたって、先生方にそのような取り組みを行なっていく心算はどこまであるのか、仮に心算があるとして、どのようなカリキュラムを今後デザインしていく必要があるとお考えか、そういうことをぜひこの場で先生方にお伺いしたいと思っています。

安部　佐野先生、どうもありがとうございました。では、お隣にいらっしゃいます梶丸先生に、引き続き第2コメントをお願いしたいと存じます。どうぞよろしくお願いいたします。

梶丸　ただいまご紹介にあずかりました、人間・環境学研究科助教の梶丸と申します。私は、佐野先生よりも若干年上でして、99年に総人に入学して、2003年に卒業して、そこから人環のほうに入って、2012年にドクターを得て、そのあと6年ぐらいポスドクと非常勤講師で飯を食っていくというありがちなスタイルを経て、去年のちょうど今時分に採用されたというわけでして、ですので戻ってきたときは割と浦島太郎みたいな感じでした。それで、今が昔と全然違うのかなと思いきや、一応カリキュラムとかを見てみると、こういう感じで積み上がっていくのですよみたいな図は一応存在するのですけれども誰も把握してないみたいな感じで、実際よく見てみると、言うほど私がいた

頃とは変わっていない気がします。

私がどういうふうに入ったかということを先に一応申しますと、私もやりたいことが文系と理系にまたがっていたので、総合人間学部を志望しました。私が入ったのは99年なので、午前中のお話を聞いてらした方はわかると思いますが、まだA号館が存在していた頃です。A号館っていうのは現在吉田南総合館という大変美しい建物になっている建物で、今は大変美しくてかっこいいのですが、あれが極めてぼろくて、トイレなんか隙間風が大変つらいとか、汚いとか、大体机が壊れているとか、壁面には謎の壁画が書いてあって、地下室はサークルとかがいろいろ入っていたと思うのですが、そこの入り口には、「迷うならやめとけ」という言葉が非常におどろおどろしい字で書いてあって、そういう大変カオスな、いいのかどうかわかんないけど、大体古きよき京大の香りが濃縮されている空間でした。そういうのを一応4年間味わった、多分最後ぐらいの世代だろうと考えています。それで、総合人間学部というのは「私は文系で入ったんですけど」「理系で入ったんですけど」ってわざわざ自分で言わない限り誰も知らないような、文系理系の出自がすごく曖昧なところなのです。しかしながら、入って半年ぐらいのところで、文系理系なり割と大枠を、どこを選ぶかっていうのをまず言わなくちゃいけない。私は当時選ぶのが早すぎじゃないかって思っていたのですが、結果的に生物学を選びました。生物学で卒論を書いたのですが、非常にいろんな理由があって副専攻だった文化人類学で大学院に入りました。私は今の専門は一応、文化人類学です。文化人類学というのは実によくわからない分野で、要は何をやってもいい、人間のやっていることだったら何でもありという非常に総人っぽいところなのです。そこで、私はさらに歌のかけ合いというよくわからないものを選んで、何の分野やっているのだかさっぱりわからないことになっていて、いかにも気がつけば総合人間な者になっているという、そういう感じの人間です。

そういうわけで総人っていうのは非常に変なところなのですが、今回先生のお話もいろいろ伺って、ああ、そういうつもりだったのかみたいなことがいろいろわかったというのが、割と正直なところであります。特に印象に残ったのは、桂山先生の、教養教育って批判精神を育てるところだということです。これは教養教育の文脈では、割と言われたりしています。あと市民性を涵養するであるとか、そういったキーワードもよくいわれたりします。これはつまり、ものごとの現状を追認するのではなくて、批判的に見るというところが大事なのである、それを育てるのが教養教育である、ということです。あと非常に京大っぽいなっていうのは、酒井先生がおっしゃられた、面白いっていうことを極めて重視するというところです。私も先生から、「その研究は面白くない」とよく言われていました。僕がいた頃の先生はほとんどもう退職されていて人が変わっているのですが、やっぱり同じように、学生にその研究はオモロいんちゃうかとか、これはオモロいかっていう話ばっかりしています。これが非常に京大っぽいなと思います。ただ、そういうよさはありますが、やはり個々の先生が非常に独立している感じを受けます。佐野先生もおっしゃいましたとおり、チームプレーがまるでないように見える。そういうところは組織としてもう少し何かあったらいいのにというところは私も思いました。特に学生の目線から見ると、先生たちがつき合っているところってほとんど見ない。特に学部生には見えません。リレー講義は存在するのですが、リレー講義って基本的に事前

の擦り合わせとかは、あんまりしないのです。先生同士がもっと何かやり取りをしているであるとかを学生の前で見せるとか対話が大事なのだっていうことを桂山先生がおっしゃいましたけれどもその対話しているところを見せるっていうのが、大事なんじゃないかなっていうことを思いました。あと、それから面白いっていうのは実は結構難しいところがあり、先生のセンスが非常に重視されます。先生的に面白くなくても、実はほかの人からしたらすごく面白いかもしれないものを潰すという可能性が常に存在するので、面白いっていうのは非常に扱いが難しいのです。あんまり枠にはめちゃいけない感じのものという気もします。あと、オーディットカルチャー（監査文化）という言葉があるのですが、ものごとは管理しやすいように成形されていっているのだというふうによくいわれます。何でも点数化しやすいようなかたちになるとか、カリキュラムを必ず管理しやすいかたちに押し込められていくというかたちが世界的によく見られるみたいなことを、イギリスの人類学者が言っていたのですが、そういうふうなかたちをあんまりやりすぎると、オモロさが死ぬというところがあり、これも非常に難しい案配だなと思うのです。

私のほうの質問としては、オモロいをどう表現するかっていうのは非常に重要だと思うのですが、オモロさをどうやって手綱を握ったり、締めたり、緩めたりするといいのだろうかということがまず一つ。あともう一つは、先生同士が対話しているのを学生の前で見せるというのがどのようなかたちで実現できるか、お伺いしたいと思います。ちなみに、私はここに入ったばかりでしかも助教なので、ほとんど授業を持たないので、教育に関してはあんまりよく知らない人として、現状をよく知らない人として質問しました。

安部　どうもありがとうございました。では、お二人の先生にコメントいただきましたので、これからパネルディスカッションに本格的に入っていきたいと存じます。佐野先生からは、教員同士でのチームワークが足りない、特に教育面で、4年間で学部教育をしていくうえで、どのような教育を行うべきかを考え、それを教員同士が相互連携して進めていくにはどのようにしたらいいのか、こういう問題提起をいただいたと理解いたしました。続いて梶丸先生からは、二つご質問がありますが、主たるご質問として私が受け止めたのは2番目のほうでして、教員同士の間での、つまり個人商店になっているような独立性の高い教員同士が、お互いに対話をして見せる姿を学生さんに見てもらう、そのような対話促進にはどのような工夫が要るだろうか、こういうことを問題としてご指摘いただいたのだと理解いたしました。そこで、これからは時間の関係もあるので、いろいろとこちらで勝手に仕切らせていただきますけども、多分二つの論点がありまして、一つは制度化、あるいは組織化といったハード面、制度設計の問題が一つです。もう一つは、その制度設計をソフト・ランディングというか、実際に上手く実現していくうえでは、いわゆるソーシャル・キャピタル、簡単に言うと良好な人間関係だとか、お互いの間に信頼性があるだとか、制度を単に導入するというわけではなくて、その制度が存分に機能するための素地となる社会資本というものも必要になると思うのです。ですから制度及び社会資本、できるならばその2面お考えいただいたうえで、ちょっと勝手に割り振らせていただきますけども、文系代表ということで、まず桂山先生に現時点でのお答えをいただき、そして理系代表で酒井先生にも暫定的なお答えをいただきたいと思います。そ

のうえで石川先生、浅野先生には桂山先生、酒井先生のお答えに対し、さらにコメント及びご自身の見解を仰っていただく、このような仕方でまず第1問、設定させていただきます。では桂山先生、よろしくお願いいたします。

桂山　教員のチームワークということですけども、実はあるんですよ。私はむしろ、総人の教員ほどチームワークに溢れているところはないと思っているぐらいです。ただ、問題なのは、それが外から見えているかということです―見えてないんですよね。学生さんにちゃんと見せなければだめだと思うわけです。いくらかでも見える機会といえば、修論や博論の公聴会となります。博論の場合はちょっと参加者が少数ですが、修論というのはかなり大々的に広くやっていますので、このときには、先生方のコメントがずいぶん異なり、例えば、ある先生がきつい言い方で滅茶苦茶貶(けな)した場合、それなら、僕は助け舟を出そうという具合に、役割分担が自然と決まってくるわけです。その意味で教員間での意見の違いというものは出しているのですけれども、ただ、そのようなときに、私が前にコメントした先生に向かって「先生、それきついで、それは言い過ぎやわ」とは言いません。せいぜい、その先生が言い終わったあとで、私は、今までとは打って変わりまったく異なる口調で学生に語りかけ、フォローする程度です。ということは、教員同士は直接語り合っていません。だから、それはどうなのかなということです。そこでやっぱり学生さんも巻き込んで、教員同士の姿勢の違いとか、意見の違いを、やっぱり自由に議論できる雰囲気というところにまで、もう一歩踏み込んでいくことが必要です。そのために、例えば時間も今のようなかたちではなくて、もう少し長くしなければいけないかもしれません。今のところ、教員間の議論が見られるところは、僕は、修論の公聴会かなと思っていますが、それを、今度は、総合人間学部のほうで、卒論に関して、「他者に語る」という取り組みが出てきました。これは非常によい取り組みで、要するに、学生さんとその指導教員のみで行われているのが原則であった卒論指導の場に、全く違う分野の教員が出かけていって、その学生さんの発表を聞くという試みです。この場合、学生さんのみならずその指導教員も参加するときは、教員間の議論にも発展します。実際、私の個人的な例ですが、試行の段階で、ある生物の先生のところまで出かけていっていろいろコメントしたら、それに応じて当該の生物の先生もいろいろ言うわけです―非常に面白い会話になったのです。さらに、そこに、学生さんも加わってくる。これはとてもいいなと思ったのですが、ただ残念ながら、今、提案されている制度的枠組みでは必ずしも指導教員が参加ということにはなっていなくて、学生が専門外の教員と話したらそれでよいという、学生主体のシステムになっています。教員間の議論を見せるというのではなくて、学生さんが、自分の普段話している指導教員以外の先生にどう説明するかというところが主眼となる制度設計になっています。そこをもう少し、教員同士がぶつかり合うということも含めたかたちでの制度になったほうが、僕はよいのではないかと思っているのですが、今後、どうなるかはわかりません。教員同士がさらされる、学生さんの前で自分自身というものの意見をはっきり言う場面があるということは、非常によいことだと僕は思うし、教員にとっていい機会になると思います。だから、その生物の先生と話したときも、本当、楽しかったのです。「あっ、こんな共通点もあるし、こんな発想もあるんや、面白いな、総人って！いろんな

ことやっとんな、この先生、面白いわ」と思えたのです。そういう機会を大いに作るべきである、と私は考えております。

安部　ありがとうございました。では酒井先生、お願いいたします。

酒井　教員同士のつながりという話ですが、実は二十何年か前、総合人間学部ができた頃、文理融合という看板掲げてできたものですから、文理融合しなければならないということで、何かいろいろ会議じゃないけど、話し合いをしたり、いろいろしたことはありますが、ぶっちゃけて言うとそのときの感想は、無理やり文系の先生と理系の先生合わせて一緒に話しても、全く話にならない。正直なところ、隣のおやじとして、今日天気いいですねって挨拶するのはいいけど、同じ釜のめし食いたくないなと思ったのは、正直なところです。ですから、当時やっぱり文系、理系というのは非常に離れてしまっていて、話す糸口がないというのが、僕から見ると正直そういう気がしたのですが、25年たってみると、やっぱり面白いのです。文系の先生。これは僕自身が変わってきたということもあると思いますが、やっぱりそれ、相当時間がかかって、制度を作ってポイっとやったらできるものでも多分ない。何かそういう文化ができてこないと、文化ができてないとそこでいくら制度作ってもだめなんじゃないかなという気がします。幸い今から、これからはかなりいろんなことをやれる時代にはなってきたと、相当時間はかかりましたけど、内部の人間の何となくそういう文化的なものはできてきたかなという気はしています。

安部　どうもありがとうございました。では、先ほど申しましたように、石川先生と浅野先生からも、今のお二人の先生の御発言に関するコメントをいただきたいと思うのですけれども、もしできればということで、ちょっと注文をつけさせていただきます。午前中のプレシンポジウムのときにも、学生さんの間での相互のつながりが、われわれの学部では希薄ではないかという問題提起がありました。同一学年の間でもそうですし、学年が違う場合、1回生と4回生ですとか、そういう学年をまたいだ場合でも同様に、人間関係が希薄というか、個々人がばらばらになっているのではないかという懸念です。そこでその対処策になる制度的な工夫がないだろうかというお話がありました。ですから、ケースはもちろん違うのですが、ご無理のない範囲内で、教員間の「ばらばら問題」プラス、学生さん同士の「ばらばら問題」についても、もしお考えがあればお聞かせください。では浅野先生から、お願いいたします。

浅野　私、カリキュラム上のいろんな制約をこれ以上研究科に課すことは、やめたほうがよい、あるいは総人でもシステムはもっとシンプルにしたほうがいいと実は思っていて、だから副専攻も本当に必修にする必要あるのだろうか、ぐらいの意見ですけれど、一方で、総人、人環で一番驚くのは、イベントがほとんどないことです。要するに教員同士でのイベントもあんまりないし、教員と学生のイベントも、あんまりない。例えば、昔だったら夏の暑いときに草引きとかして、草引きのあとビール飲んだりとかいろいろありました。だから、今のこの夏のすごく温度の高いときに草引きするのはどうかとも思いますけれど、一方で外国なんかだったらハッピーアワーっていうかたちで、例えば、金曜日の午前中はすべての教員が集まってよくて、またお菓子代を研究科長に請求するようで申し訳ないのですが、研究科長がコーヒーとお菓子は出しますと。そのときの世話人の教員が回

りの順番でやってきて、5、6人の教員は必ずそこに順番で出ていくというのを、毎週例えば金曜日の午前中やるとかいうことになると、学生も教員も一緒に集まれるんじゃないか。だから私はカリキュラムをいじるよりも、イベントなんかでみんながもっと顔を合わせるようにして、結果としてソーシャルキャピタルを高めて、それによってみんながばらばら、つぶつぶになってる状況を変えるべきじゃないかなと思います。そのハッピーアワーは当然のごとく学生にも公開して、学生の皆さんにもその時間に来てもらったら、そこでお茶飲みながら、コーヒー飲みながら、クッキー食べながら3時間ぐらいみんながだべっているっていう。外国の研究機関行くと、この3時間ぐらいしゃべっているのがすごく新しいアイデアを与えるのにもいいっていうので、それをやる場所として総合人間学部、人環ってすごくよいとこじゃないかなと、皆さんのご意見聞いていて思いました。

安部　浅野先生、有益なサジェッションをありがとうございました。では石川先生、いろいろと注文をつけて恐縮ですけど、よろしくお願いいたします。

石川　先ほど、教員の連携、チームワーク、そういうものに基づいた何かカリキュラムっていうようなご提案がありましたけども、最初のときに説明がおろそかだったのですが、いくつか始まっていることがあります。というのは、先ほどもちょっと話題に出ましたけども、昔あった基礎科目とかの、今の学系入門科目っていうのが、無理やりそういう科目作って教員がリレー講義をするってもんでしたけども、全くリレーするときに教員間のつながりがないっていうものになってたのですが、そういうところはやっぱり改めましょうということで、紹介した分野横断型の授業っていうのを提案してきています。ただ、今まであったのがあかんから、さあ作りなさいってまた教務委員会が立ち上がって、みんなで作れ作れ、こう作れっていうのではなく、教員自身がこういうのは必要だよねっていうことから始まって、総合フィールド演習っていうのもそうですけども、一つのフィールドに物化生地またはほかの方も行って、そこで教員がさまざまな手法を使って、そのフィールドから情報を得ようとしている、そういうものを学生に見せ、学生に体験させるということで、共同作業っていうものを見せるっていうことが必要で、そういう科目も出てきます。一つ言いたいのは、カリキュラムって結局そういうもので、何かするよりは、ちょっと話飛びますけど、みんなで教員と仲よくしなさいっていうのはちょっと僕には無理なので、やっぱり気の合った仲間から始めるってことになるかと思うのです。もう一点、今度は日常の学生さんを指導する面での共同作業ですけども、これは理系の僕らにとっては、ある意味自然で、合同ゼミをしています。といっても、いきなり私が生物の人と話したりとか、日常的に生物の方と合同ゼミをやったり、物理の方と合同ゼミをするってことはないですけども、何かのテーマあったときに、どこから人を呼んできて一緒にゼミをしたり、そこに学生さんは一緒に来る。私と酒井さんは同じ地学なのですけども、この地学にも幅が広くて、私は石を扱う分野、地質学になりますけど、酒井さんは大気、海洋といった柔らかい関係の人で、かなり幅があります。でも一緒に合同ゼミをする。また、それはある意味僕らにとっては当たり前になっているのだけど、そういう場でいろいろ議論し、学生も交えていろいろ議論するっていう雰囲気があるのだけど、そういう機会が逆に文系のほうではあるのかなと。もしかしたら本当に個人商店で、その先生と一対一で皆さんしゃべるしかないという、本当に個別の先生としかつき合ってないとしたら、

多分それは不幸じゃないかなというふうに思います。それはやっぱり、もっと皆さんにもっと広げたかたちで合同ゼミ、そういう場で議論する機会を持つっていうことをしたほうがいい。ただ、これはもう既に人環のほうの制度、これはカリキュラムとして分野を超えたゼミを持ちましょうというのが、もう来年から始まることになっていますね。来年度から。そういう中で、できているものはいくつかあるのだろうなというふうに思います。

安部　どうもありがとうございました。次に、フロアの皆様方からご質問やご意見を承るべきところなのですが、私の司会の不手際もありまして、何しろ時間が押しておりますので、それから定刻に祝賀会を始めることも、遠路から来ていただいている方のためには必要ですので、恐れ入りますが全員の方からご質問をいただくことは、ここでは断念させていただきます。その代わり、皆様には是非懇親会においでいただいて、引き続き議論を深めることができればと存じ上げます。そこで、ご臨席の皆様を代表していただきまして、山極総長からお話をちょうだいできればと存じます。山極先生、申し訳ありませんがよろしくお願いいたします。

山極　僭越でございますけれども、私からちょっとコメントをさせていただこうと思います。4人のパネラー、それから2人のコメンテーターのお話を聞いて、総人、人環という組織が非常に京大らしいところだなということと、まさに文理融合ということで、時代の要請に合った、そして未来を切り開く先端的な意識をお持ちなのだなということが、よくわかりました。ただ、文理融合というのは非常に難しいです。今もお話しいただいているように。私、先日総合生存学館のことを話しているときに、ちょっと総人、人環のことを例に出して、例えば思修館、総合生存学館は、総合生存学という学問を確立しようとしています。そこで、そういう学問はできるのですかって聞いたのですが、できますって皆さんおっしゃるので、できるのだろうと思うのですが、人間・環境学とか総合人間学っていうものを作ろうと目指しているわけではないということが、酒井先生の言葉でわかりました。でも、何かすごいだまされたような気になっているのです。

いわゆる、フリーネットワーク、簡単に言ってしまうと、今、人環の先生方はそれぞれの専門分野を持ちつつ、それを相互に文理の境界を乗り越えて、あるいは文系でも、その中の境界を乗り越えてさまざまな知識を吸収しながら、総合的な観点に立ちつつ、それを学生とともに高めていくということをおっしゃられたような気がします。それはよいのだけど、その理念を最初に唱えた人々は去っていき、また新しい人が入ってくるわけです。佐野さんとか梶丸さんとか、若い世代が入ってくるわけです。そうすると、やはり自分の専門分野、まあお二人とも総人の出身だからそういうことはよくわかってらっしゃるかもしれないけど、ほかの大学からくる、普通は自分の専門分野を持ってやってくる人たちが、また酒井さんとか桂山さんとかと、浅野さんとか石川さんとか、同じように、幅を広げていくには時間がかかるし、まさにネットワークと、ある意味では教員同士のチームワークってことをおっしゃったのですが、そういうプロセスを通じて、まさにソーシャルキャピタルを作りながら自分の幅を広げていくっていうわけです。そうすると、やっぱりそれにはまた時間がかかるわけじゃないですか。そういう文化がだんだんと醸成されてくるのはわかるのだけど、それを維持していくことができるのか。つまり、人環は総合学術という学位を出すわけです。だからある

意味、たとえば博士（理学）っていう専門分野があるわけではない。そうすると、教師と学生がどういう専門分野を練り上げていくのかっていうのは、常によくわからない未来に向かって突き進むようなものです。だから、すごく個性的な学生がそろったのはわかるのだけど、学問分野を作れるわけではない。そのちょっと矛盾というのがどっかにひそんではいないかって気がするわけです。それが、多分学生たちの悩みにもなっていると思います。

ほかの学部から大変たくさんの学生が総人に転部してくるっていうのはわかりますが、それは先生の魅力によってくるのじゃないかという気がします。非常にユニークな先生方がそろってらっしゃるから、この先生のもとで学問をしたい、あるいはそういう雰囲気の中で学問をしたいと思ってくるのじゃないかと思います。僕は逆に、理学研究科の教授をしているときに、総人から何人か学生を大学院で育てました。彼らは非常にユニークな学生です。でも彼らは、やはり文理ということに非常にこだわっていて、私がやっている人類学というのがもともと文理にちょっと足を入れている学問だったから、そのモティベーションというのは非常に生きました。そういう学生をどう育てていくのかっていうストラテジックなものが、まだ総人や人環にはできていないような気がします。

先日、京都大学同窓会で鼎会という組織がありまして、そこで文理融合着想コンテストの優勝者たちが来て話をして、その中に総人の学生がいました。彼女が言うには、京都大学に入ってきて自由の学風を感じましたけども、シーズをどうやって育ててくれるのかっていう、教員とのインストラクションがあんまりないような気がするって、それがすごく不安ですって言っていたのが印象に残りました。僕はどう答えたかっていうと、京都大学の文化っていうのは手取り足取りじゃない、自分で好奇心を燃やして、こういうことやりたいですって先生のところに直接行かないと、いろいろ話ができないよ。ただ、行ったらどんな先生だって時間を惜しまず一対一で向き合ってくれる、それが京大の文化なのだと答えたのですが、ちょっと心の奥底で、申し訳ないなって気がしました。今の学生たちは随分昔の学生とは変わってきていると思います。将来に非常に不安があるのです。さっき、学生同士がばらばらのような気がするっていうのもその一つだと思うのですが、学生にどうつき合っていくのかっていうときに、それぞれの先生方は専門分野を持ってらっしゃる。しかし、その専門分野に直接入ってくるのではなく、もう少し広い、違った観点で学生を育てようと思ってらっしゃると思います。それがまさに総人と人環のミッションだと思うのですが、それは学生にとってなかなか難しいのじゃないか。学生を不安に陥れるのじゃないかっていう気がどっかでしてしまいます。そのあたりのことをどう思ってらっしゃるのか、お聞きしたいと思います。

それからもう一つ、浅野先生が最後におっしゃった教科書を作るというのは、これまでの学問を整理し、新たな道を見つけ出すために非常に重要だとおっしゃったのですね。私は理学研究科で育ってきて、あそこの研究者はあまり教科書を書きません。教科書を書かないのが京大の伝統だと言っていたような気がするのですが、つまり教科書っていうのは20年前、30年前に確立した学問だから、そんなものを世に出してどうするんだよと。とくに私がいた動物学教室では今やっている研究を学生に直接伝えることが、京大の教育のやり方なんだっていうことをみなさんがおっしゃっていたし、私もそう今まで思っていたのですが、そういう観点からどう思われますかということを、

ちょっとお聞きしたい。

安部　どうもありがとうございました。今、山極先生にはいろいろ、本当に大事な論点をお挙げくださいましたけども、僭越ながら論点を絞らせていただきまして、学問領域の境界を相互に乗り越え合うような文化の醸成には時間がかかるであろうという、時間の希少性の問題に主に焦点を当てさせて頂きたく存じます。それから、それを次世代に対してどう継承あるいは維持していくかということも問題です。それが、ひいては留年率の問題、要するに専門や指導教員の決定が遅れてしまう問題の解消にもつながると思うのですね。こういったところに的を絞らせていただきますが、生憎全員の先生に伺う時間はないので、我こそはと思われる方がいらっしゃいますならば、どうか挙手をしてお答えくださいませんでしょうか。では、酒井先生。

酒井　学生が非常に迷うのではないかというお話ですが、まさにそれは私たちもいろいろ四苦八苦しながら、悩みながらやっているところではあります。ただ、やっぱりレールのないところに何か自分たちで切り開いていく力を、学生に持ってもらわなきゃいけないと。それには体系だったこれをこういうふうにしなさいというだけでは恐らくできないだろうなと思います。だから、そこのところは何か学生に勇気を持ってやってもらうということを、何か考えなきゃいけないのだろうと思ってます。ただ、漠然とそうは思っていますが、具体的なあれは、今まさにもがいてるというところです。

梶丸　私が言うの忘れていたなと思ったことを、見事に山極先生に言われてしまったのですが、ちなみに私一応、中小企業診断士ですが、企業とかだと大体理念とかがあって、人事の人が、わが社はこういう人が欲しいですとかいって、そういう人を募集するわけです。ただ、私、去年採用されましたけど、採用されるときに総合人間学部のビジョンについて、こういうとこですけどいいですかとか、採用の中に書いてあったという覚えがありません。たとえば公募のときにもっとビジョンについて説明してそれでいいかちゃんと聞けばいいのにというのがあります。つまりいろんな分野との交流にためらいを覚えない人を求めますとか、あと学生さんに対しても、自分でちゃんと歩いていける人を求めますとか、歩くのを手伝いはしますけど、歩かせはしませんよみたいな、そういうのをちゃんと最初から募集のどこかに書いておく、そういう全体の意思統一を図るために必要なポイントっていうのはあるのんじゃないかと思います。そういうところを最初から出しておくっていうのが、やっぱりフェアなやり方なのではないでしょうか。それから、中のシステムとして、実際移り変わっていく教員って比率としては少なくて年に何人とかですから、そういう人たちが入ってきたら、ああ、ここはこういうシステムで回っているのですね、こういう場所があって、人々の交流っていうものが大事なのであるとか、他分野についても、行くのを阻まないとか、そういう態度が大事なのですよとかいう、ここがどういう組織かわかってもらえるような体制、雰囲気であるとかいうものが最初からあるとよいのじゃないかなっていう気はします。最初から人がくるときにそういうのを示しておくっていうことが大事なんじゃないかなと思います。

安部　どうもありがとうございました。それでは、司会という悪役の特権を使わせていただきますけれど、所定の時間になりましたので、申し訳ございませんがこれにて終了とさせていただきたいと存じます。どうもありがとうございました。

以上をもちまして、京都大学総合人間学部、人間・環境学研究科設立25周年シンポジウムを終了させていただきます。恐れ入りますけど、登壇者の皆さんにもう一度拍手をお願いいたします。

皆様、本日は大変ご多用のところ、遠路よりご光臨くださいまして本当にありがとうございました。また、長時間にわたり記念式典にご参加いただきましたことに、心よりあつく御礼を申し上げます。また皆様にお会いできますことを楽しみにさせていただいております。では、皆様にはお荷物など、お忘れ物のないようにお気をつけてお帰りください。なお、ご存じかもしれませんが、このあと4時半から記念祝賀会を開催させていただきます。祝賀会においでくださいます方は、4時半から始まりますので、適宜この建物の2階の国際交流ホールのほうへおいでくださいますよう、よろしくお願い申し上げます。今日は、本当にありがとうございました。

3．教育・研究を振り返って

(1) 卒業生・修了生

総合人間学部について考えること

泉田（海道）　由妃（1996年度卒業）

私は総合人間学部の１期生です。入学当初、同級生の中には、何か変わったことができるかもしれない、と期待を多かれ少なかれもっているものが多く、「何か」やりたいね、という話をよくしていました。最初の1年くらいは、新しい学部を何とかしようと、様々な集まり（飲み会など込みで）が行われていました。とはいえこの壮大な理想を掲げた新設学部に先生方も戸惑っておられたと思います。大学とは自分の専門の研究するところである、という方が多く、専門を超えて研究し、人材を育成するということにあまりなじみがなかったのかと思います。若かった自分は、せっかくできた新しい学部に対する教育環境、研究環境に物足りなさを感じるだけ、何かやりたいと思うだけで、何もできないまま、2年3年とすぎ、そのまま卒業しました。

依頼文に、「教育、研究の経験が現在の生き方や仕事に与えた影響」とありましたが、正直、自分は京大の大多数の学生と同じように、授業にも出ず、単位だけ集めて卒業してしまいました。さらに、京大には自分よりすごい人ばかり、研究でも、サークルでも挫折を味わいました。そんな中、京大で過ごした時間は、自分の人生にとって大変意味あるものになっている理由は2つあります。１つは、確かに大学で学んだことは何かと言われれば答えに窮するのですが、当時の最新知識も、この変化の激しい現代社会においては、数年たてば陳腐化し、5年、10年もたてば基礎に立つ理論も変化します。前述の壮大な無駄遣いと、自分の周りの優秀な教官や同窓生に接することにより、変化に対応できるだけの根本的な心構え、ものの見方を身につけたことがあります。とはいえ、もう１つの理由は、壮大な無駄遣いをしたため、逆説的に、2度とああいう目には遭わないようにしたい、と自らを奮い立たせるということができるようになったということなのですが。

ところで、今の仕事の市役所職員というのは、3年ごとに異動し、全く違うことを仕事にしなければならないのですが、これが意外と総合人間学部出身者にあっていると思うのです。どのような部署に配属されても、その分野に興味を持って取り組める、そして、それを専門にこだわらずに、トータルで市民のためのまちづくりをするために検討し実践につなげる、自分自身が「総合人間」になること、卒業後20年を過ぎて、ようやくこの結論にたどり着き、実践的に活動することができています。

〝総人〟懐旧録

大淵　和憲（1996 年度卒業）

アメリカ赴任中に、出身学部が「Integrated Human Studies」だ、と総合人間学（以下“総人”）の英訳を伝えた際の外国人同僚の反応は、概ね「なんだかすごそうな学問だね」と褒め称えてくれるか「結局何を修めたの？」と懐疑の念を示すかのどちらかであった。また、長く勤めた広島にある流川の歓楽街で、出身大学や学問の話をした際、「大学ではないけど、私もこの街で総合的に人間学を学んでるわ」と話す店員には妙に親近感が湧いたものであった。

結局、総人での学びの内容とは何だったのだろうか。もちろん私は当時の既存の学問で云う所の「文化交渉史」の分野で卒論を書いた、とは言える。しかしその学問は総人におけるほんの一分野であり、その他にもあらゆる学問分野を包含するのが総人であった。ただ、間違いないのは、私が研究対象とした金子堅太郎という同郷・福岡の政治家に“出会う”ことができたのは、そういう広い間口を持つ総人にいたからこそであった。

総人で修める学問は学生各々で異なり、それぞれが作り上げていくものなのだろう。学部内の組織構成や教授陣、教育内容は絶えず変容を繰り返してきたのではないかと想像する。総人という言葉から想起される学生像が昔と今とで変わっていても何ら不思議ではない。少なからず設立当時の総人の雰囲気を知る私としては、その変容は当然なものであり、必要不可欠なものとさえ感じる。一方で一般社会から見る今の総人とは、はたしてどんなイメージなのか。やはりつかみどころのない、はっきりしない学部とされているのだろうか。

総人在学中に同級生らで集まり、それぞれがのめり込んでいる学問分野を背景にしながら、夜中まで議論することが何度もあった。哲学、四次元、社会学、ジェンダー、環境学、ベンチャー、宗教、死生観、歴史学、等々…。入院した一人を皆で見舞いに行った際も、この議論が続いたため、共同部屋の他の患者から奇異の視線を受けたことも今では良い思い出である。

卒業生が社会のどこそこの分野でどれだけ貢献しているかを世間にわかり易く誇示することが重要である、とは決して思わない。ただ、設立から四半世紀経った今、総人の卒業生たちがどんな考えを持ち、どんな意志を持って一般社会と対峙しているのか。その奮闘ぶりを知りたくなる時期になった。総人がその人的連環を大いに発揮する段階であり、その繋がりが今後の卒業生の人生をより佳きものにするに違いないと感じる次第である。

総人マインドを忘れずに

村上　正行（1996年度卒業、1998年度修士課程修了）

京都大学総合人間学部に1期生として入学したのが1993年で、もう25年たったのかぁ、というのが正直な気持ちです。学部のときは、文理とか専門分野とか関係なく、みんなと夜な夜ないろいろなテーマについて議論したことを思い出します。自主ゼミとかもやっていましたし、面白いな、と思ったことはなんでもやっていたような気がします（といいながら、体育会ソフトテニス部だったこともあり、卒業は本当にぎりぎりだったのですけどね、、、）。

基礎科学科の数理情報論専攻を卒業、人・環の修士を修了した後、情報学研究科の博士課程に進んで、2002年に京都外国語大学に教員として就職しました。就職当時は、教員100名強の中で、理系教員が1名（今でも2名ですが）。本当にいろいろカルチャーショックだったのですが、総人時代にいろいろな分野の人と話していた経験などを活かして、積極的に話をするようにして、自分の役割を見つけたかな、という気がします。

研究者の専門分野としては、教育工学、大学教育学で、今は教育におけるデータ分析に関する研究を中心にしています。情報工学系の研究者と一緒に授業映像や学習データなどを分析し、教育系の研究者と一緒に分析結果をどのように教育改善に活用していくか、ということを考え、私自身が分野をつなぐハブになるような形で研究を行っています。研究者として、ニッチなところで生きていこうと決めているのですが、このような研究スタイルや考え方も、総人時代の経験がすごく活きているな、と思っています。

近年、世の中がどうしても直接的、即効的な成果を求めがちなこともあり、大学も自由な雰囲気で研究や教育をしていくことが難しくなりつつあります。競争的資金を獲得した上での短期間での研究成果を求められたり、大学として卒業時の就職率などを求められたりすることもあります。私は、大学教育の改善に関わるFD（Faculty Development）という仕事もしていて、いろいろな講演や研修などを行ってもいるのですが、昔と変わらないといけないところは当然あるものの、その一方で、大学でもっと自由闊達に議論できるような状況を作っていく必要があると思っています。

総合人間学部の教育研究上の目的に「（前略）これまでの人文科学、社会科学、自然科学を融合した新しい学問の体系を構築することを、すなわち、新たな「人間の学」の創出を目指す。（中略）持続的かつ創造的に対処しうる広い視野を持った人材を育成することを目的とする」とあります。大学時代に学んだ“総合人間学”に基いて社会で活躍していくことで、総人、人・環のアピールをしていきたいな、と思います。面白そうだったら何でも学び、何でもやる、という総人マインドを忘れずにこれからも頑張っていきたいと思います。

文理融合が、社会を変える力に

村木　真紀（1996年度卒業）

私は茨城県で生まれ育ったが、地元では生きていけないと感じたので、地元を離れる大義名分になり、格安の寮があり学費も安い国立大学、ということで、京都大学を選んだ。将来どうやって生きていけばいいのかイメージが湧かなかったこともあり、総合人間学部の幅広さが魅力だった。地方では生きていけない、未来なんて考えられない、と思っていたのは、自分が同性愛者だったからだ。

入学当初は法律関係に興味があったのだが、加藤眞先生など、自然科学系の授業が刺激になり、最終的には専攻：生物、副専攻：地理にして、卒論では「西表島のエコツーリズム」をテーマに、観光業が自然環境に与えるインパクトを論じた。個体の多様性（ダイバーシティ）が種の存続にプラスになる、生き物の多様性が環境にとって大切、そうした生物学の考え方は、マイノリティである自分自身の存在をも肯定してくれるように感じた。

卒業後、いくつかの民間企業を経て、現在は、社会起業家として、LGBT等の性的マイノリティも働きやすい職場づくり、生きやすい社会づくりをミッションにしたNPO（特定非営利活動法人 虹色ダイバーシティ）を運営している。多くの企業や行政で講演の機会を頂き、「日経ソーシャルイニシアチブ大賞」や日経ウーマンの「ウーマン・オブ・ザ・イヤー」等で入賞しているが、この活動の基盤になっているのは、LGBT当事者5千人の声を集めたアンケート調査のデータである。多くの声を集め、データを読み、事例と照らし合わせて分析し、メディア等で広く届ける工夫をし、他の分野の人たちとコラボし、人の行動を変え、社会を変える。これは、理系的なチカラと文系的なチカラ、両方ないと難しい。

総合人間学部に入学したのは、前述のように、あまり積極的な理由からではなかったが、今にして思えば、必然だったのかもしれない。境界なく学び、それを応用しようという姿勢は、先生方と総合人間学部1期生の同期たちから学んだことだ。心から感謝したい。

総合人間学部と私

城井　崇（1997年度卒業）

総合人間学部との出会いは、北九州予備校在学中にチューターからいただいたある雑誌記事、学部設立準備を進めていた青木先生の学部紹介を載せた某教育雑誌の記事コピーがきっかけだった。変な先生と変わった学生の宝庫である、「あの」京都大学が作る新しい学部。中間領域・学際分野への挑戦、学部段階での副専攻制度。答えが出ていない社会問題に挑みたいと思っていた私にはとても刺激的な場が作られると感じた。私が行くべき場所だと直感し、大学進学の第一志望を総合人間学部に切り替えた。栄えある第一期生の末席に加わりたかったが、残念ながら入学試験では前期・後期とも届かなかった。もう一度だけ挑戦しようと二浪を決意。多くの皆さんの支えもあって第二期生の末席に加えていただけた。

第二期生は130名いたが、皆異なる主専攻・副専攻の組み合わせだった。最終的な進路もそれぞれだ。海の物とも山の物とも分からない学部創設時期に飛び込む勇気と覚悟を持った友人たちを誇りに思うし、この縁を大切にしたい。

当時の全学共通科目はつまらなかったが、専門分野の勉強は面白くてしょうがなかった。当時の私の主専攻は「社会システム論専攻」。国際関係論、特に国際政治と国際法に食らいついた。国際法の西井正弘先生には「君にはリーガルマインドがない」と厳しくご指導いただいた。国際関係論との縁は、総合人間学部初の学部公認サークル「京都大学国際関係論研究会」への参加のきっかけともなった。卒業論文の指導教官、国際政治の中西輝政先生からは政治の道を志すきっかけを頂き私の人生そのものが変わった。いずれもかけがえのない出会いだ。当時の副専攻は「アメリカ政治文化論」。大国アメリカとどう向き合うか真剣に考えていた私は、移民政策等アメリカ合衆国が形作られていく場面を掘り下げて学ぶ機会がありがたかった。

学部に出会って25年、卒業して20年。4回生の時に立てた「人様のお役に立つ仕事をする」という初志を貫き、現在私は当選三回の衆議院議員の重責を担っている。二期目の折には文部科学省の大臣政務官として、三期目の現在は衆議院文部科学委員会の理事として、国立大学法人京都大学を「監督」する役割を担おうとは誰が予想しえただろうか。世界が振り返る教育・科学技術立国日本の実現は、私のライフワークの一つだ。我が国の発展と国民の幸せに少しでも貢献して、母校の恩に報いたい。

演劇理論と舞台芸術の融合－京都大学での経験を生かして－

日髙　真帆（1997年度卒業）

文理融合と学際教育に惹かれて総合人間学部の門戸を叩いて以来、母校との関係は形を変えながらも絶えることなく、京都女子大学文学部英文学科教授として演劇教育・研究活動に勤しむ現在の仕事にも正に生かされています。

学部時代には、卒業単位数を意に介さずに、好奇心の赴く儘に日々教養を広げ、専門性を深めることができました。英仏独語を修得し、主専攻・副専攻以外の科目や他学部の提供科目も多数履修して倫理学や心理学から映画学、言語学、文化人類学、植物学に至る迄自在に学び、気付けば200単位以上修得していました。知的な刺激が絶えない日々を過ごした経験は今の学生指導にも反映されています。

総合人間学部卒業後は演劇の舞台制作について学ぶべく、大学院で演劇の理論と実践双方を学べる海外留学の道を選び、エディス・コーワン大学西オーストラリア舞台芸術アカデミー（WAAPA@ECU）に進学、修士論文に取り組むと共に、修了制作として英語で執筆した二作の戯曲 *Cul de Sac* と *Requiem* をパースの舞台芸術祭で上演、創造芸術分野の修士号を取得しました。また、総合人間学部在学中同様に分野を越えて研究を深め、演技法、演出法、発声法、脚本術に加えて、音楽科ではクラシック・ピアノを、ミュージカル科ではミュージカルの伴奏法を学びました。

帰国後は人間・環境学研究科博士後期課程に編入学し、学部時代に卒業論文で取り組んだオスカー・ワイルドについて研究を進め、原作研究と翻案研究に取り組んで論文博士号を取得すると共に、京都大学総長裁量経費人文・社会系若手研究者出版助成を頂いて *Oscar Wilde Reappraised: Fiction and Plays* を上梓しました。

この間、大学教員として英語による演劇の上演指導に従事し、現在、京都女子大学で卒業研究として英語論文と英語の演劇公演に取り組むプロダクション・ゼミを担当し、毎年学部生約50名がキャスト・スタッフとして参加する英語のミュージカル公演を演出、ピアノ伴奏も行っています。近年は大学の演劇舞台からも文化を発信すべく、海外の名作を発掘して日本初演公演を行っています。

毎年約3時間に及ぶミュージカルを全編生演奏・日本語字幕と共に上演し、学生達は、キャストのみならず音響・照明・舞台美術・道具類・メイク・衣装・字幕制作等多様なスタッフワークを担っています。理論と実践を融合させ、演劇研究と連動させた英語での演劇上演に求められる英語力、表現力、翻訳力は勿論のこと、総合芸術である演劇ならではの多面性や異分野融合への対応力、既成概念に囚われない発想力は、京都大学で慣れ親しんだ自由の学風と学際・教養教育によっても培われたものと思います。

今後も京都大学での経験を生かして、教育研究活動で、演劇舞台で、更に豊かな学びへと繋げて行ければと願っています。

総合人間学部の中で育まれたもの

仲野　純章・松浦　哲郎（1998年度卒業）

総合人間学部設立25周年、誠におめでとうございます。学部時代から共に過ごしてきた我々2人、この節目をお祝いさせて頂くと共に、在籍当時を振り返ってみたく筆を執った次第です。

我々は、それぞれ自然科学を志す理系学生と文化人類学を志す文系学生として、まだ設立3年目の前途洋々たる京都大学総合人間学部に入学致しました。入学後は、A号館を始めとする総合人間学部校舎内で、多くの時間勉学に費やしました。と、申し上げたいところですが、誠に不真面目な学生で大変ご迷惑をお掛けしました。母校の「自重自敬の精神に基づく自由な学風」をいいように捉えて、座学はそこそこに、山や海への小旅行、あるいは繁華街や百万遍周辺での夜遊びと、まさに四六時中、自由を謳歌しておりました。単に遊んでいた、といえばそれまでですが、それぞれの関心分野において非常に意識の高い学友と、様々な場所で時を共にすることで、人生観の確立にも寄与する大いなる学びを得ていたのかもしれません。

そのような自由奔放な学生生活を送りながらも、留年せず進級できたというのは、母校の懐の広さゆえでしょうか。定期試験では、寝過ごし防止のため、前夜からA号館の試験会場教室に居座り続けて一夜漬けをしたこともございました（写真左）。また、受験したものの全くまともに記入できず、慌てて担当教官にお饅頭を持参したこともございました（その甲斐あってか「優」を頂いたのも、懐かしい記憶です）。別の試験では直前に大病を患い受験できず、後日担当教官の研究室を訪ねたところ、「君がその病から学んだことをレポートにまとめ提出しなさい」という温情をいただきました。最先端の学問を様々提供頂きながら、十分学びきれず、それでも寛大に捉えて頂いた懐の広さも、現在我々が感じる母校愛の一因になっているような気が致します。

2回生の夏、我々は体育会カヌー部に途中入部するという転機を迎えました。学生生活のあまりの自由度の高さゆえ、ずるずると怠惰な方向に向かわないように、との思いで下した判断であったかと思います。琵琶湖やそこから流れ出る瀬田川で、我々の青春第二幕が始まりました（写真右）。カヌーは予想以上に忍耐の側面が大きい運動であり、風がきつく白波が立って

カヌー部 仲野・松浦ペア（場所：瀬田川）

試験前夜の会場教室にて

いる時や気温が低い時などは、正直憂鬱なものでした。自然の猛烈なエネルギーを感じながら、懸命にパドルを入れ続ける日々。その一漕ぎ一漕ぎの記憶が、今我々が地道な一歩を歩み続ける上で、大きな励みとなっております。

教員・学生の専門性・関心分野も様々な総合人間学部というカオスに身を置き、全方位的に過ごした日々。そうした環境の中で、興味の対象を一つに絞らず、広範な分野に足を踏み入れ、それらを組み合わせていく好奇心と行動力が、知らず知らずのうちに醸成された気が致します。卒業から年月が経った今でも、事あるごとに自らが総合人間学部出身であることを意識し、それに見合った「総合人間」的な発想・思考・行動を実践したいと考えることが多々あります。母校総合人間学部の今後益々のご発展を祈念致しますと共に、我々自身も、総合人間学部出身者らしさを追及しながら、一漕ぎ一漕ぎ挑戦し続ける所存です。

環境問題の学びと実践

山崎　幸一（1998年度卒業）

私は、大学入試前に、この先何を学び、将来どう生きていくべきなのかを真剣に考えた。その答えとして、第一志望に総合人間学部・自然環境学科を選んだ。この理由は、日々深刻化する環境問題、エネルギー問題に対し、文理融合の新しい切り口で学び、将来、その問題を解決する仕事をしたいと考えたためである。数学や化学など自然環境に関係する理系分野と、環境政策や環境経済などの文系分野の両方が学べると考えた。

入学してみて感じたことは、本当にいろいろな分野の授業があるということであった。政治、経済、心理学、生態学、文化人類学など、様々な分野の授業や人に触れ、刺激を受けた。もちろん、充実したカリキュラムに加えて、先生方がかなり熱心に指導してくださるため、専攻の化学についても、深い知識を身に付けることができた。

1997年12月に地球温暖化防止京都会議（国連気候変動枠組み条約第3回締約国会議）が開かれ、外務省が募集したアルバイト人員として現地に駆け付けた。これに合わせて京都では様々な環境イベントが開かれ、日本中・世界中が環境を意識した経済活動へと切り替わっていくことを感じた。

1999年3月に卒業し、4月から家電メーカーの生産技術研究所に勤務することとなった。家電メーカーも環境法令、省エネ規制、リサイクル法令に対して、社会要請に応えるための活動が始まっていた。私自身、入社数年目の若手の時に、環境に配慮したリサイクル商品設計を推進するような全社プロジェクトに携わる機会を得て、多くの設計者とリサイクルプラントの情報を結んで、新たな価値を訴求することができた。まさに、大学時代で培った、環境関係の幅広い知識の実践であった。

その後、工場内のマテリアルロス（資源ロス）を明確化して、削減するようなプロジェクトを推進したり、工場の省エネ診断をグローバルに展開したりと、比較的、環境にまつわる技術系の仕事を希望し、実践する機会に恵まれた。商品でも、Liイオン電池や冷蔵庫、省エネ家電用デバイスなど、世の中への環境・エネルギー側面で影響の高い商品において、その生産技術面で貢献を果たすことができた。現在も真空断熱材という省エネには欠かせない素材にまつわる仕事を推進している。

「環境」といった、当時はまだはっきりとした学問が確立していなかった領域において、総合人間学部の文理融合の教育は、私自身に、その後の社会で役に立つ幅広い知識と大いなる自信を与えてくれた。そのことを誇りに思い、今後も挑戦を続けていきたいと思う。

理系＋文系の総合人間力が培われた大学時代

羽生　祥子（1999年度卒業）

私は1996年に京都大学の農学部に入学し、2回生の春に総合人間学部へ転学部しました。理系の学問が好きで農学部に入学しましたが、同時に幼少のころから文学への興味も旺盛でした。文学や情報メディアへの興味は大学生になっても衰えず、その先の進路を考えに考え抜いた末、総合人間学部に転学部したのです。

主専攻は英米文学、副専攻は認知科学。この、「理系と文系のちゃんぽん」が、その後の人生に大きく影響しました。大学を卒業した後、渡欧し帰国後にアルバイト・フリーランス・契約社員など多様なスタイルの勤務を経て、編集工学研究所へ入社。松岡正剛氏に師事しました。2005年に現日経BP社へ入社し、夢であった「メディア」の仕事をするように。女性誌（日経WOMAN）、デジタル誌（日経ゼロワン）などを経て2012年『日経マネー』の副編集長に就任。その後2013年に、出産の経験を活かし働くママ＆パパを応援するノウハウ情報サイト『日経DUAL』を企画立案、創刊編集長となりました。

私のこれまでの約20年のキャリアを振り返りますと、雑誌や書籍、ウェブサイトの編集者として、文芸論で培った学問知識や技能が大変に役立っています。言葉を産業にするメディアの中で、同じ取材をしてもどんなワーディングで記事発信するかで影響度が違ってきます。同時に、農学部の生物機能学科で身に付けた知識や、総人の認知科学論で経験した実験などが、科学分野での取材や企画立案にとても役立っています。女性誌におけるコスメ（美容化粧品）やヘルス（健康）分野、デジタル誌における商品開発分野、金融誌における株価理論・決算書読解などなど、文系出身が多いメディア業界においては、私のような「文理ちゃんぽん人間」が希少価値のある存在となる、というわけです。まさに「総合人間」のパワーです。

最近は、2児の母として「働き方改革」「女性活躍」というキーワードで、2015年内閣府少子化対策大綱有識者メンバーや、2016-17年厚生労働省イクメンプロジェクト有識者、2017年内閣府子供と家族・若者応援団表彰選考委員会有識者などに就任させて頂いております。大変貴重な機会と捉え、次世代に向けた情報発信を今後も旺盛にしていきたく思います。最後に、この場を借りて、在学中にお世話になりました教授や同窓の友に心から感謝を申し上げます。

結局総合とはなんなのか

大野　史郎（2001年度卒業）

5期生として入学してからもう20年余りが過ぎた。入学前から在学中、そして卒業後も「総合人間学部では、結局何を学ぶのですか」と何度尋ねられたか分からない。その都度何かを答えたのだろうが、その内容は殆ど覚えていない。今の在校生の皆さんも同じ質問を受けているのだろうか。

僕の同期生は「就職、大学院、留年がちょうど3分の1ずつ」だったと聞いた。ちなみに僕は留年組だった。4回生の始まりの時点で、どう計算しても単位が足りなかった。「まあ1年余分に講義を受けるのもいいかな」と開き直ったが、それまで講義を受けてなかったから単位が足りていない訳で、もう1年いたから別人になる訳でもあるまい。結局5年で卒業した。大学院進学も考えたが、考えているうちに気づいたら願書の締切が過ぎていた。そのまま卒業したが、「これを学んだ」と胸を張って言えるものはなかった。確か卒論は「自閉症と精神分析」、副論文は「アメリカ文化論」か「ユーゴスラビアの内戦」がテーマだった。まるで関連のなさそうなテーマだ。

時間は下り、現在は郷里で医師として働いている。所属は「総合診療科」である。これまた「専門は何ですか」としばしば聞かれる。やっぱりうまく答えられないのか。いや、違う。僕もそれなりに年をとったので、自分なりの答えを用意できるようになった。

僕にとっての総合とは、「解き方が決まっていない問題を、手持ちのありあわせの素材をかき集めてなんとか解決しようとする」という態度のことだ。正確な語義は知らないが、こう考えることにしている。学問体系が先にあり、その方法論で対応するのではない。総体のみえない問題、もしかすると他の誰もまだ問題と認識していない事柄に対して、自分の興味（もっといえば使命感）だけを頼りになんとか答えを出そうとする態度、といいたい。

総合人間学部はまさにその態度を身に付けるための学びの場である、と今になって思う。現在そして未来の学生のために、その場を確保し続けなくてはいけない。

この文章はパキスタンの病院への途上で書いている。現地で何をするかはまだ分からない。行ってからすべきことと出来ることを探すことになる。ユーゴスラビアはなくなってしまったが（僕が学生の時も既になかったけれど）、結局同じようなことを考え続けているみたいだ。これが僕の総合の形である。皆さんもそれぞれのやり方で「総合人間」を体現してください。

25周年おめでとうございます。この間、学びの場を守り続けてこられた先生方に敬服します。そして総合人間学部、人間・環境学研究科という、昨今では珍しくなってしまった場が末長く続くことを願っています。

モラトリアムから研究支援者になりました

斎藤　知里（2004年度卒業、2007年度修士課程修了）

総合人間学部に進学したのは、「興味が拡散して専門が絞れない」という少し消極的な理由だった。英米文学、美術史、美学、英語教育、宗教学、歴史と様々な教えを受け、異なる領域を専門とする先生方や学友から刺激を受けながら、2年ほど研究テーマを模索した。その間、幅広い科目が単位として認められる特権と自由の学風を享受した。一方、他学部であれば一回生から身に着けていたであろう基礎知識の習得が遅れていたので、大学院入試に備え「文学史」「アカデミックライテイング」など複数の授業に潜った。同窓生の多くが同じような経験をしていると聞く。副専攻をおさめ、教職免許科目も揃えていた私は、専門領域を深めるために3倍以上の自助努力が求められたように思う。

その後、人間・環境学研究科に在籍中、イギリスの大学院の正規課程に留学をした。多量のテキストを読みこなし、文献収集をし、短時間でレポートを仕上げなければならなかった。「自主独立と創造の精神」を涵養していなければ、到底対応できなかったであろう。また、異分野・異文化から来たクラスメイトと越境分野について自由闊達に議論し、友情を結ぶことは難しかったであろう。

学生時代から国際会議などを手伝う経験を積んだことで、学術や文化の支援に携わりたいという夢が生まれた。応募した殆どの企業に落とされたが、縁あって、日本学術振興会および東京工業大学にて研究推進と国際交流を行う仕事に巡り合った。対象は、教育学から化学、生物学、数理・計算化学、宇宙物理学まで多岐に渡るが、どの学問分野・国籍の研究者に対しても真摯に対応するよう心掛けてきた。（全く内容が理解できないことも多々あるが…）自分にとって未知で斬新な研究を行う相手を理解しようとする寛容な姿勢は総人・人環で培われたと思う。また、少人数や海外で研究する苦労を痛感した故に、孤立しがちな研究者に親身に寄り添えるようになった。

現在は、京都大学学術研究支援室の国際グループに奉職している。久しぶりに母校に戻ると、フィルドワーカーや学際研究者など、オリジナリティ溢れる先生方が活躍しておられ、心が躍る。話が弾み、出身を聞かれると「総人・人環ですが（何か）」と微妙な冷笑を浮かべる場面も多いが、ご愛敬。

これまで、進学、留学、就職の折々に、総人や人環の関係者に多くの助言を貰ってきた。論文指導はもちろん、各種応募書類を懇切丁寧に見て下さったことに感謝している。この場を借りて、恩師である鈴木雅之先生、水野眞理先生、藤田糸子先生、同級生らに改めて御礼申し上げたい。今後とも、教職員・学生・卒業生みなさまが、自分だけの素晴らしい道を歩んでいかれることを祈っている。モラトリアムであっても、周りと違うように見えても、気にせず自信をもって、心の窓を世界に開いておきたい。

総合人間学部での学びが私の現在に与えた影響

松永　篤（2004年度卒業）

総合人間学部設立25周年、人間・環境学研究科の設立27周年おめでとうございます。簡単ではありますが、寄稿させて頂きたいと思いました。

大学を卒業して13年になり、紆余曲折はあったものの、現在父親が所長を務める会計事務所に勤務して10年になります。在学中の専攻は、国際文化学科文化原論でした。特にキリスト教を専攻していました。在学中を振り返って役に立っている教育・研究の経験につき、まず最初に思い浮かぶのが、卒論の指導もして下さった、カール・ベッカー教授のある授業でした。授業名は忘れてしまいましたが、「10年後、あなたはどのような職業についていたいか」「どのような人と暮らしていたいか」「どんなことに幸せを感じていたいか」などという質問を真面目に考え、書き出す、ということを指導してくださいました。「ベッカー先生、真面目に人生について考えればよかった」、とそれ以前にある卒業生から言われた、とその授業中に、先生がおっしゃっていたと記憶しています。「コンサルタントとして経営者にアドバイスをする仕事」「愛するパートナーや子供達と暮らす」となどと考えた覚えがあります。平凡ではありますが、中小企業の経営者相手に様々な助言をし、妻や子供達と平穏な生活を現在送れていることは、神様に願いを叶えて頂いたようで、ありがたく思っています。還暦のお祝いには参加できなかったですが、ベッカー先生を始め、菅原先生や、副専攻の情報科学の立木先生、その他ここでは書ききれないご指導頂いた諸先生方に感謝しております。

在学当時は、総合人間学部の黎明期（7期生）の雰囲気が残っておりました。先輩方が、IT関連の会社を立ち上げたりした、あるいは、授業がまだ決まってなかったので自分達でテキストを決めた、と聞いたりしました。いつも知的な好奇心を掻き立てられ、その行動力に感服したりしていました。私自身も熱心に勉強しましたが、2回生の終わり、専攻を決められず、スポーツ科学の小田先生のところに突然訪問し、進路に留まらず様々な相談に乗って頂いた際、「お前は宗教の話をしている時が一番生き生きしているな、その道に進めよ」と言われて、思いもよらずその一言が進路を決める後押しとなりました。卒業後、キリスト教の宣教師として九州・沖縄各地を回り、様々な経験をさせて頂きました。自分は、理論でなく、実際に信仰をもって、信じて生きていきたいと思いました。

父からは、若いうちに、悩んでも、自分の人生基盤を確立するように言われていました。その時間と、機会と、様々な友人・知人が与えられた大学生活はとても貴重でした。大学への出席は真面目であったわけではなく、私のようなケースは珍しいかもしれませんが、とてもありがたく思っています。

新しい生き方を提唱する学部

木村　瑛美（2005年度卒業）

私はグループダイナミックスを専門とする杉万研究室に所属し、当時おそらく地域おこしの最先端であった智頭町や、北海道の幌加内町にフィールドワークへでかけたことが印象に残っています。卒業後しばらくは学んだことを生かす機会はありませんでしたが、30歳で新卒入社した企業を退職し、興味の赴くままに活動していく中で、いつしか地域づくりや移住促進などに興味もち関わるようになっていました。振り返れば研究室での経験がその原点だったように思います。「地域に必要とされるゲストハウス開業合宿セミナー」を企画した際には、卒業後10年目にして久しぶりに恩師の本を読みかえして多いに活用しました。

学問以外でも、京都大学総合人間学部に在籍でき、たくさんの仲間と出会えたことは私の人生で大きな財産です。同級生たちの卒業後の生き方は幅広くて興味が尽きません。医学、設計、司法などを別の場所で学び直したものも多くいるようですし、また、離島で絵描きになったり、仕立て屋になったりと、一風変わった仕事や生き方を選んだ人間もいます。同じところで学んだ同級生がここまでの幅広い進路を選ぶというのは、他の大学や学部では考えられないことだと思います。

この進路の多様性を生み出しているのは、他の学部とは違って文系理系の幅広い興味を持つ人間が集まっていたからでもあるでしょうし、また京都大学の自由な学風が、「自分で生き方を選んでいいんだ」「好きなことを全力でやっていいんだ」と無言で伝え続けてくれたからであるようにも思います。

もはや大学を出て大企業に入れさえすれば安泰という時代ではなくなりつつあるこの世の中で、総人の卒業生は新しい多様な生き方の選択肢を示せる可能性があるのではと感じさせられます。彼らには自分らしい生き方を創造する力や、その助けとなる人間関係などがすでに備わっているのではないかという気さえします。

未だに日本の多くの学生たちは「卒業したら企業に就職し、定年まで過ごす」生き方しか知らず、その型にうまく適応できずに苦労している人たちも多く存在するように思います。そういった学生や若手社会人が、生き方の多様性を知り、自らの人生を切り開く参考とすることができるようにという思いから、最近になって同級生と2人で京大生漂流記（kyodaihyoryu.com）というサイトを立ち上げました。総人の多様すぎる人材資源を埋もれることなく活用し、少しでも後輩たちが人生を切り開いていく助けになればいいなと思っています。

私の社会的使命を支える4年間の学びと、先生方のお言葉

長嶋　祐成（2005年度卒業）

総合人間学部で学んだ4年間が、その後の人生を方向付けた。高校生の頃まで「学びとは既にある答えに正しく辿り着くこと」だと考えていた私にとって、「未だ答えの見つかっていない問いに日夜たゆまず取り組んでゆく学問の場」としての京都大学は鮮烈に刺激的だった。入学初年度、折しもアメリカ同時多発テロ事件が発生し、学内はこの世界規模の社会的難題にいかに立ち向かうかという議論で沸き立ったようだった。よりよい社会の実現のため、われわれはいかに振舞うべきなのか。その探究に惹かれ、国際文化学科に進み現代文明論を専攻した。

そこではお二方の先生の言葉に特に影響を受けた。まずは大澤真幸先生。その研究室のWEBページには、「われわれが学ぶ意義は、この文明の前進に多少なりとも寄与することにある」とはっきり記されていた。大澤先生の講義ではいつも、アクロバティックなほどの華麗な議論の展開に心を奪われていたものだったが、その根底で常に社会的な使命を意識されているのだと知り、この大学で学ぶ機会を得た人間の一人として襟を正す気持ちになったのをよく覚えている。

もうお一方は、卒業論文をご指導くださった岡真理先生。4年次も夏を迎える頃、卒論の進捗報告の時間をいただいた。私は資本主義論絡みの書籍や論文を読み漁り、それをひとつにまとめ上げるような論文を構想していたが、岡先生の反応は芳しくなかった。その後180度方向転換し、現代社会における禁煙・嫌煙のあり方について身近な事例を積み重ねて考察することにしたのだが、そのことを報告した際に岡先生はホッとしたような笑顔でこう仰った。「前の構想を聞いた時、『人間の生きているという現実を何だと思ってるんだ』と思って腹が立ったよ」。論文の継ぎ接ぎで人間の生きるこの世界を理解しようなどと思うな、「知識」に驕らず現実をつぶさに見よ。岡先生のそのメッセージは、今に至るまで私が他者やこの社会を知ろうとする際の大切な指針になっている。

4年間の学部生活を経て、私は自分の社会的な役割を「学問の探究」そのものではなく、そこから人類が得た知見を「学問以外の場」に広めることだと考えた。卒業後は専門学校で洋服のクリエイティブを学び、アパレル業界・広告業界を経て現在は絵描きを生業としている。そのモチベーションは常に「表現する、伝える」ということであり、それを支えているのは総合人間学部での4年間と、上に挙げた先生お二方の印象的なお言葉である。

第一線の研究と教養教育をつなぐ懸け橋

伏見　裕子（2006年度卒業、2008年度修士課程修了、
2013年度博士後期課程退学）

京都大学総合人間学部、大学院人間・環境学研究科設立25周年を心よりお慶び申し上げます。

わたしは、2003年4月に総合人間学部に入学してから2015年3月に博士号を取得するまでの12年間にわたり、総人および人・環のお世話になりました。現在は、大阪府立大学工業高等専門学校の一般科目（社会科）教員として勤務しております。

総人では、興味関心のさまざまに異なるユニークな友人や先生方に出会え、自由な発想で物事を見つめる基礎を養いました。そして人・環では、ゼミでの議論やご指導を通じて、自らの問題関心を研究に高めていくための力をつけていただきました。また、2012年度に浮上した国際高等教育院構想によって人・環が解体の危機に瀕した時には、教員のみならず学生たちも立ち上がり、学年や分野の垣根を超えて教養教育および総人、人・環の意義について語り合いました。

こうした経験は現在、理系の学校で文系の教養教育を担う立場となったわたしの根幹を支えています。エンジニアを目指す学生たちとともに「正解」のない社会問題について考えることは、お互いにとって新鮮で刺激的です。学生たちには、自身の技術や学びを社会的文脈のなかで捉えられるようになって欲しいと思いますが、そのためには、教員自身が常に自己の知見を新たにし、生き生きと研究を進めていることが不可欠であると感じます。

また、わたしは在学中に2人の子どもを出産し、その経験が博士論文および現在の研究テーマに取り組むきっかけとなりました。ゼミ内には、他にもさまざまなライフイベントを迎えた学生がいましたが、指導教員の小山先生はそれぞれの事情を理解したうえで、研究には決して妥協することなく厳しく指導してくださいました。昨今の社会状況のなかで、既存の分野や常識にとらわれず、徹底的に自分の問題関心と向き合い、丁寧に研究を続けることは決して簡単ではありません。そんな今こそ、総人、人・環での学びの真価が問われているような気がしています。今後も、第一線の研究と教養教育の懸け橋である総人、人・環のますますのご発展を祈念いたします。

時代に求められる総合人間学

田中　一将（2008年度卒業、2010年度修士課程修了）

総合人間学部、人間・環境学研究科（以下、単に「総合人間学部」と記載）こそ、現代の時代環境に合った機関であると言える。

時代はめまぐるしく変化していっている。自分が在学していたのは7年前だが、当時はスマホや人工知能も騒がれていなかった。人工知能の登場によって今後なくなる職業もあり、社会で求められることも変わっていく。以前は長い年月をかけてノウハウを会得することが主流だったが、情報革命によって未経験の分野も短期間に情報を収集しやすくなった。長年の経験により一つのことには習熟したが、逆に他のことができない・対応できない人間は、時代の変化についていけず、置いて行かれてしまう。

総合人間学部では、まさに時代の変化へ柔軟に対応する人間としての総合的な力、「総合人間学」の力を育ててもらった。主専攻科目と副専攻科目を修めるカリキュラムによって、一つのことに固執するだけでなく幅広い興味・視野を持つことを助成している。私自身は物理学を主専攻としながらも、興味があったので副専攻として哲学の授業も受けた。全く異なる複数の分野を学ぶことで新鮮な刺激を得ることができた。この勉学を通して幅広い分野へ柔軟に対応する力が養われた。

会社員として社会に出ると、経験のある仕事のことなら詳しいが、経験のない新しい事となるとスムーズに参入できない大人も多く見られる。そんな中、自分は環境が変わって新しい仕事を任されても素早く適応できている。自分では当たり前のことに感じていても周囲から見るとそうではないことを言われ、改めて総合人間学部で受けた教育に感謝の念が堪えない。また、日本では「働き方改革」政策の下、会社での勤務時間を減らし、収入を増やしたい人には副業が促進される時代へ向かっている。副業には本業と全く異なる分野を選ぶことも少なくないであろう。ますます幅広い対応力が求められる時代となる。

さらに総合人間学部は、教員と学生の間の敷居が低いのが大きな特色である。自分が求めればその分野で一流の教員陣から教えを請うことができる。また、今振り返っても、能力の高い同級生にも囲まれていた。在学時に得た刺激を今でも思い出すことが多い。京都大学で過ごした日々は卒業後も財産となっている。

以上のように、総合人間学部は、これからの社会で求められる幅広い対応力を積極的に助成してくれる貴重な機関である。時代の要求に適った総合人間学部、人間・環境学研究科の益々の発展を心よりお祈りし、私のご挨拶と代えさせていただきます。

京都における融合学習の思い出

島田　幹男（2008年度博士後期課程修了）

今となっては全然違うが、高校までの私は堅実な考え方（？）を持っており、大学を卒業したらすぐに就職するのだから、人生最後の自由な時間である大学生活は住みたい場所、または旅行に行きたい場所で選ぼうと考えた。徳島で生まれ育った私は遠く北海道に憧れを持っており、同時に京都の伝統的な雰囲気にも魅せられていた。ただ京都は修学旅行で訪れたことがあったが北海道は私にとって未開であったため、大学は北海道の帯広畜産大学に進学することになった。その後研究室に配属されて、まだ勉強が足りないと感じた私は大学院に進学しようと思い立った。大学院進学のために色々参考本を読んだら大学院は学部とは違う大学へ行くべし、とあったのでそれに従うことにした。

すでにこの時点で大本命は京都の大学であったのだが、念のために本州の大学院の研究室を色々と見学させていただいた。もともと心に決めていたせいか京都大学の先生方はみな生き生きとして研究を楽しんでいるように感じたので、京都大学の大学院人間・環境学研究科に進学させていただくこととなった。帯広畜産大学が単科大学で受講できる教科が限定されていたのに対して、京都大学の人間・環境学研究科は総合大学でかつ文系・理系を問わず様々な分野の授業を選択できるために学習意欲に燃えていた私には魅力的であった。私自身は理系の研究室で医学部構内にある放射線生物研究センターの小松賢志教授のもとで研究を行わせていただいたが、文系授業にも興味があったのでイギリス現代文学などを聴講した。

また、京都は人口に対する大学の数が多く、まさに文化と歴史の町である。博物館や美術館、趣のある寺社仏閣がこぢんまりとした範囲内にそろっているために、常に文化的な雰囲気を肌に感じながら過ごすことが出来る。私はランニングが趣味であったので住んでいた高野のアパートから歴史を感じる街並みの南禅寺の方まで走りながら色々と研究の考えをまとめるという、贅沢な時間を過ごさせていただいた。京都大学で得られた経験は私にとっては至上の宝であり、学問の楽しさを存分に味わわせてもらえるものであった。

現在は東京工業大学に職を得て放射線生物学に勤しんでおり、こちらが学生たちに学問の楽しさを教える立場となったが、あのころの京都で得られた自由でのびのびとした研究の雰囲気を伝えられたらと思う次第である。

創立25周年に寄せて、学生時代の経験が仕事に生きている点について

城本　由希（2009年度卒業）

総合人間学部25周年おめでとうございます。

卒業後、分野違いのITベンチャーに飛び込んだので、大学で学んだ歴史という学問が直接生きる場面は少ないのですが、小さいところでは、朝礼での一言で歴史のネタを織り込んでみたりと、身に着けたことは今でも役立っています。

大学時代の経験でいえば、まずは何を調べればよいかを一通り押さえておく、ということを学べたのが大きいと思っています。3回生の際にチューター的な役割をお願いした江田　憲治先生の部屋に、ハンコをもらいに行き、雑談ついでに、「中国近現代史に興味を持ち始めたところで、まだあまり知識がありません。何から手を付けたらよいでしょうか？」とオープンな質問をしたことがあります。

その時の先生の行動は、非常に印象的だったので今でもよく覚えています。その足で中央図書館に一緒に行ってくれ、基本的な文献の検索の仕方、昭和10年代の新聞記事も検索できるデータベースなどを教えてくださいました。まずはどう調べたらほしい情報にたどりつけるか、を伝えてもらえたのがこの後の大学生活でも今でも役に立っています。歴史分野では京大図書館の情報量が非常に多く、宝の山である反面、たどり方が分からないと情報に溺れてしまうことになりかねません。この時、情報のたどり方が分かったのは、研究生活で助かりました。現在の仕事でも、自分にとって新しい分野の仕事の担当になった際は、まず何を読んだり調べたりすればよいか、社内の有識者に聞いてみる、というところに役立っています。

京大の自由な学風の中で学べたことも、仕事を決める際に後押しとなりました。現職のベンチャーは、自由に色々チャレンジしてみる社風で、京大の学風に似ているため、飛び込むきっかけの一つになりました。大学時代に好きなことを学べたおかげか、ITの分野の中でも好きな分野を見つけ、そこを主として仕事をしています。学生時代の専攻と異なるITを仕事にしていますが、勉強を続けて、シンポジウムでワークショップを担当させてもらったり、会社がミャンマーに作った支社で現地スタッフを対象に品質の勉強会をやらせてもらったりと、色々チャレンジしています。そこにも大学時代の経験が生きていると感じます。

自由なフィールドで学ぶということ

高木　孝介（2009年度卒業）

はじめに、総合人間学部、および人間・環境学研究科が設立25周年を迎えられたこと、心よりお慶び申し上げます。私は30歳になり、走りながらも考える余裕ができ、将来何をしたいのか改めて考えています。そして自分にとって新しい分野の勉強を始めたわけですが、ふと総合人間学部での日々を思い出しています。大学に入ったばかりの自分も、同じく新たな学びの門の前にいたのだと。この機会に、少し私の考えをお話しできればと思います。

総合人間学部ほど、京都大学のキーワードである「自由」を体現している学部はない。在学時から今に至るまでそう思っています。高校3年の夏、当時別の大学を狙っていた私を引き込んだのも、総合人間学部の制度的な「自由」でした。順当に行けば工学部という流れに、実はちょっと腹落ちしていなかったのだと思います。入学してから専門領域をじっくり決められる、後出しジャンケンが許される、と言われて飛びついてしまいました。

この自由というのは、「自主的な選択の自由」と「強制されない自由」、英語なら「Liberty」と「Freedom」の二面性を有しています。自分の興味に導かれどんどんコアな勉強をする人もいれば、最低限の履修だけして課外活動に専念する人もいた。正解はありませんが、例えば工学部を卒業すればそれなりの工学系のスキルがつく保証があるだろうに、総合人間学部でそういったものはない。文理問わず雑食して自由を謳歌しながらも、どこか不安な気持ちだったのを覚えています。

結局は、工学系の大学院に進み、自動車会社のエンジニアになりました。色々やってみた結果、ものづくりがしたいと改めて確信したのです。ただ、社会人として6年を経る今、そうしたものづくりの現場に集中すること以外の可能性に気づきました。情報技術によって、世の中のお客さんの生活や価値観が変わり、自動車が果たせる役割も変わってきています。しかし、良くも悪くも現場は目の前の部品を必死に改良し、守ろうとするので、外の世界と繋がっていないような危機感を抱いています。だから、自分が世の中のことを分析し、柔軟に吸収し、現場に刺激を与えようと画策しているわけです。

自動車会社だけでなく様々な場所で、従来の領域を飛び出した新しい企てが必要だと思います。不安はつきまといますが、これまで色んな学問領域をふらついてきた経験で、学びへの抵抗感は全くありません。自分の価値は自分で決めねばならぬリスクを抱え、将来像を自由な発想で描いてみるということ。総合人間学部が、これからもそのような学びのフィールドであればよいと、強く思っております。

遅れて来た女学生にも寛容な学究研鑽の場であった人間・環境学研究科

奥野　元子（2009年度修士課程修了、2015年度博士後期課程修了）

人間・環境学研究科設立25周年おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

私は共生人間学専攻・人間社会論講座・社会行動論分野に在籍し、修士課程および博士課程を修了しました。在籍中は、専攻・講座・分野を横断して様々な講義を拝聴し、知の世界の醍醐味をタップリと味わい、人生最良の時を過ごさせて頂きました。

実は私は遅れて来た女学生、つまり社会人を20年余り経験（金融機関勤務）してからの学び直しの輩で、フレッシュで頭の回転が迅速とは言えないスローなオバサン学生でした。

この年齢差のある頭の硬い私を、カール・ベッカー先生はじめ高い専門性をお持ちの著名な先生方は、若い学生さんと同様に講義へ引き入れ、多方面から質問を投げ掛けて研究指導して下さいました。私はこの寛容な学究環境を通して、思考の整理、論理の発展、帰結の導入、研究者としての倫理観などを研鑽しました。ここでの学びは、私の生き方に深く反映し、社会生活の様々な場面において、問題解決の行動指針となっています。

研究室の仲間や研究室間の交流からも、論理解釈や討論の方法などを切磋琢磨しました。書類手続きでは、大学院掛の職員さんに何かとご相談し、親身になって対応して頂いたことを懐かしく思い出します。

私の修士論文は、ストレス関連疾患に関する瞑想の医学・生理学的実証効果をメタ分析したものでした。博士論文では修士論文を発展させて、ストレス過多と言われる医療者や金融機関職員などを対象に、ストレスに対する瞑想の効果を実証しました。この研究には、医学・生理学・生化学・宗教学・哲学・心理学・文学・文化人類学・社会学・教育学・運動医科学・認知行動学・統計学・語学など様々な分野を横断した学際的知見が必要でした。

この繁雑な研究が成就しましたのも、高い見識に基づいた先生方のご指導のお蔭であり、多分野の横断を許容した寛容な研究環境でありました。まさに本研究科の文理融合した学際的な教養教育の環境下でこそ行えたもの、本研究科でなければ到底実現し得なかった研究であったと非常に感謝しております。

現在、非力ですが、京都府教育委員会の授業や病院・企業での講演活動などを通して、本研究科で得た知識を一人でも多くの方に還元し、学習する楽しさや喜びを伝授できればと活動しています。教え授け、研き究めて四半世紀、本研究科の価値高く意義深い教育・研究のますますのご発展を祈念しております。

≪最後の道楽≫

中西　之信（2009年度博士後期課程修了）

46歳から56歳まで、10年間かかりましたが何とか博士後期課程を修了までたどり着くことができました。遠方からの通学でしたので、修士課程の時は週2日（木・金）休暇をとって1泊2日で授業を受け、博士後期課程になってからは確か週1回休暇をとり通いました。途中、数年休学をしたり、単位取得後の論文提出猶予期間をぎりぎり使っての終了でした。今私は66歳となった高齢者ですが、この10年間の「中年の青年期」は私の生物学的青年期よりもはるかに充実した最高の10年でした。何しろこの期間のおかげで、その後の人生も「何とかこれで生きていけるだろう」という確信めいたものを手に入れることができたのですから。修士課程に通い始めた最初の頃、同業の親友に「これは俺の最後の道楽だね」とつい口から出たのもそのためでしょう。生物学的青年期の不全がこの10年を必然として出現させたともいえるかもしれません。

46歳時の私はリハビリ病院で言語聴覚士として働いていました（現在は開業しています）。失語症など「言語の障害」を治療・リハビリすることが仕事ですので、この領域では、言語を（人間が）治療・操作し得る対象としてみる見方が支配的になりがちです。「障害された言語」を治さなくてはならない…。人間が言語をもののように見立てて治そうとする …。しかしこうした見方にのみ基づく「言語訓練」はどこか窮屈で、患者さんが拒否することも少なくありません。こうした「限界」を見直し、言語を異なる視点から見なおせないか。「人間」も「ものとしての言語」も根本のところでは言語の作用がつくり出すものだとしたら？

こんなことを考えている中で、新宮一成先生に、学会発表の抄録を添えて手紙を差し上げたところ、先生が「おもしろそうなので受験してみたら」と言って下さいました。このことが端緒となり、新宮研究室に入ることができたのでした。長い間一貫してご指導下さった新宮先生にここであらためて感謝申し上げます。それほど頻繁とはいきませんでしたが、当時の新宮研究室の皆さまと共に時間を過ごせたことも貴重な経験となりました。また、当時の院長岩田清二先生が、勤務しながらの大学院通学を許可して下さらなければ、そもそも始まりませんでした。有難うございました。最後に、京都まで通うことを心よく？許してくれた妻がいなければ、私は「最後の道楽」を手に入れられなかった。有難う！

教養を軸とした文理融合と学際連携の教育へ

佟　占新（2010年度修士課程修了、2017年度博士後期課程修了）

京都大学大学院人間・環境学研究科（以下、人・環）の教育研究上の目的は、人間及び環境の問題に対して広い視野、高度な知識、鋭い先見性をもって取り組める研究者、指導者、実務者を養成することにある。また、専門性に力点を置きながら、狭い専門の殻に自閉しないことを教育方針として、人文科学・社会科学・自然科学を横断する幅広い知識と教養を備えていることを入学希望者に求めている。こうした教育研究の目的、教育方針を有した人・環が、実り豊かな25年を歩んできたことを考えると、感無量である。

創立25周年を機に、2度にわたって人・環を修了した者として、私見を述べさせていただきたい。共生人間学、共生文明学、相関環境学の3専攻から成り立ち、文理の融合・学際の連携こそが人・環の存立の本であり、目指す頂点であることは言うまでもない。ただ、文理の融合も学際の連携も、言うのは簡単だが、実現が難しい。文理を融合するには文系も理系もある程度できることを前提にしており、学際連携には専門外の学問に興味関心を持ち、一定の知識を有しなければならない。高校までの教育体制や受験制度などを根本から改革しないかぎり、文理ともに精通する人間の養成は極めて難しい。人・環では、修士課程において、専攻内と専攻外の科目をそれぞれ履修することを義務付けているのは、文理の融合、学際の連携を図るための有効な手段だと思う。少なくとも共生人間学専攻に在籍していた私が共生文明学専攻の科目を履修し、非常に勉強になっただけでなく、仕事上にそれらの知識を実際に運用することもあった。しかし、理系を中心とした相関環境学専攻の科目を履修したことはなかった。学際の連携がある程度できたと言っても、文理の融合はできなかった。これは決して私一人だけの経験ではなかろう。

文理の融合を実現するには、共生人間学、共生文明学、相関環境学の3専攻の教員が共同で開講する人・環独自の共通教養科目を開設するのが有効だと考える。試みに「人間・環境学」という名前を付けて、人・環入学者全員の必修科目にすればよかろう。勿論、これは教員・院生の両方にとって負担になると考えられるが、重要なのは3専攻院生に共通した知識の基盤を築くことであり、評価を行わず、皆が気軽に参加できる科目にすれば、教員や院生の負担が軽減もできると考える。要するに、京都大学教養部を母体した人・環では、文理共通の知識を有し、教養のある人間を育てることは大切だと考える。そのためには、現在実行している履修制度や専攻を超えた院生による共同プロジェクト等を一層強化するとともに、全院生に共通した教養科目を開設し、人・環修了生ならではの教養と知識を築かせていくことが望ましいと筆者は考える。

最後に、人・環では留学生担当の専任講師、事務員をおかれ、年に1回の留学生旅行も実施しており、留学生教育に力を入れている。グローバル化がますます進んでいる現在、留学生への手厚い対応も必ずや人・環のさらなる発展につながると確信している。

人環での学びが役立っている現在の分野融合的な活動

安藤　哲郎（2010年度博士後期課程修了、2013年2月～2014年3月 助教）

人環の地域空間論研究室で10年間お世話になり、その間、多くのことを学び、役立っていることもたくさんあります。その中で主に分野融合的な活動に積極的に取り組もうとしている点が、最も意義があった点と考えていますが、その例として2つ挙げたいと思います。

現在、全学共通科目で「地理と古典を活かした京都の旅の創造,提案A／B」という科目を担当しています。2014年から担当しておりますが、滋賀大学に転出いたしましたので、非常勤講師として授業を行っています。これは京都大学が採択された「大学COC事業」に関連し、地域貢献を目的とする科目です。助教であった2013年度に授業の学内募集が行われたのですが、地域空間論研究室で学んできたことを活かして貢献できることは大きいと考え、企画書を作成して、受理していただきました。

地理を基本に、古典も活用しながら、京都の通史的な理解を目指す授業として構成し、歴史地理に関するレポートと、独自の京都の旅のプランの作成を課題としています。フィールドワークを行う入口としての科目と位置づけ、京都の歴史地理的な学びを活かして実際に歩くことができるようにすることを目指しており、これまでに複数の学部の多くの学生に受講してもらいました。もともと融合的な要素の強い地理学の強みを活かしつつ、より多角的な京都の捉え方ができるように目指しています。またくじ引きで班分けをして各自のプランを共有するグループワークも行っており、教養的な授業の良さも活かすように努めています。

もう1つですが、文理融合的な出前授業を行っています。理学研究科の常見俊直先生と工学研究科の後藤忠徳先生と、高校等に出かけて一緒に授業をしています。2人か3人で、しかも文理融合の内容で掛け合いをしながら授業を行うというものです。上記のお2人は物理や地学的な分野のお話をされる中、私が地理の立場から様々な話をするのですが、それらをつなぐ内容として主に「京都」を題材として、毎回の授業内容を構成しています。お互いに質問し合いながら進めるので、こちらがいつも勉強になっています。

これらの活動は、人環で学んだからこそ可能になったことではないかと考えています。人環は様々な分野の融合を日常的に目指すという、大変ありがたい環境だったかと思います。少しずつですが、人環での学びをさらによい形での実践につなげられるように、今後とも頑張っていきたいと思います。

その眼差しの先に

日高　悠登（2011年度修了）

寄稿するにあたり、2年前、旧日本陸軍の戦闘機「飛燕」を神戸まで見に行った時のことが思い出されます。展示会場には、たくさんの見学者が写真撮影に来ており、復元された銀色の機体に魅了されていました。そんな見学者の中から、私は車椅子に乗った90代ぐらいの男性のことが、気に留まりました。男性は会場に着くなり、機体の操縦席を真っ直ぐに見つめたまま、まるで若い頃の自分と再会したかのような表情を浮かべていたからです。彼の眼差しは、何ものにも替え難く、それは機体以上の価値があるように感じられました。

この時のように、人が見せる眼差しには様々なものがあり、強い意思のようなものを放つ瞬間を何度か見かける機会がありました。どれも私の中では決して忘れられず、いつまでも心に残り続けています。では一方で、私が人環を見る時の眼差しは、どのようなものなのでしょうか。こればかりは、自分であろうと他の誰であろうと、正直わからないものです。ただ言えることは、思い残すことがあるも多くの学びに加え、教訓を得られた場所であったということに違いありません。

在学中に受けた演習と講義では、研究の第一線でご活躍されている先生方の研究成果に触れることで、知的刺激を受けて来られました。自身の専門分野を超えて、映画学、精神分析学から、歴史学においては平安時代の遺跡の発掘現場まで、様々な研究に接する機会に与りました。詳細は割愛しますが、どれも共通して言えることは、新鮮で魅力的だったということ。そして何より、「社会的にも学術的にも、自身の研究がどのように貢献できるか」という、この一言を達成する為に、研究を行なう意義を学べたのも大きな成果であったと実感しています。ちなみに、修士論文の執筆中、先行研究の少なさから関連文献収集に精を出して、洛中を南北に奔走した為に、足腰が鍛えられた「成果」もありましたが。

そして、今だからこそ言えることもあります。それは、研究とは常に出会いに満ち溢れているということです。もちろん、人との出会いであるとは限りません。それは、「何か」との出会いであることも多いと思います。ただ、どのように出会っていくのか、こればかりは未知の領域と呼べるものです。先ほどの「再会」が、いつかどこかで、私のような誰かに対して意味を与えるように、研究においても「再会」が起きていくことを確信しています。研究科の名が冠した人間にも環境にも、私は縁がありましたが、その縁はいつも奇遇でもあるからこそ、ここまで研究が行なって来られ、自身も支えられてきたのだと思います。

では、よく通った附属図書館の消毒液の匂いを思い出しつつ、ここで稿を閉じます。

半径50メートルの世界

和崎　光太郎（2012年度博士後期課程退学）

修士課程に入学して、博士学位を授与されるまで、かれこれ10年もかかってしまった。学位論文は、加筆修正してなんとか翌年に刊行できたが（『明治の〈青年〉──立志・修養・煩悶──』ミネルヴァ書房、2017年3月）、その時にはもう博物館に勤めて6年目が終わろうとしていた。

なので、刊行時にはすでに他の研究にも手を伸ばしており、しかもその手はどれだけ少なく見積もっても2本あった。1本は、地域と学校との関係史であり、もう1本は、学校に関する歴史資料をどう保存・活用するかといった博物館学芸員らしい「手」である。他に、年間10回を超える講演などの活動や、大学非常勤講師、たまに研修会の講師や街歩きのガイドもしたりする。学芸員なので、当然ながら企画展の担当もする（そこそこの規模で年2回開催なのでかなりキツイ）。このような手の広げ方は、年中〆切に追われる日々を招いているが、結果としてなんとかなっているような気がする。「気がする」程度にでもなんとかなっているのは、フォローしてくれる周りの人たちのおかげと、あと間違いなく、博士後期課程の院生生活のおかげである。

とはいっても、「人環で自分の専門領域にとらわれず広く学ぶことができたことが今に活きています」と言いたいのではない。むしろ、多種多様な領域を学ぶことができるという研究科の長所を、博士後期課程に進学してからはまったくと言ってよいほど利用しなかった。

ではなぜ、院生生活のおかげなのか。うまく表現できる自信はないが、あえて表現すると、「上手に隠遁していたから」となろうか。博士後期の3年間は、自宅と院生研究室との往復、たまに連日図書館に引きこもり、という生活を2年少々して、あとの半年少々は週1でゼミに出席するだけの人になっていた。多種多様な研究室があるというのは、逆に自分の研究が自分の研究室だけで完結し得るという意味で、隠遁的院生生活をするにはうってつけの環境でもある。私が所属していた研究室は、大学院事務室の横の階段を3階まで上がってすぐなので、そこから生協にも図書館にも思い立ったらすぐ行ける。この、西端が事務室、南端が生協、東端が図書館、北端が食堂北の自販機、およそ半径50メートルの世界が、私の心やすらぐ空間だった。

今でもたまに人環に行くと、用事は院生研究室か図書館で済むのだが、たいてい残りのどちらかにも立ち寄って、生協（当時の面影がほとんど無く寂しいが…）で飲み物を買う。院生時代とは置かれた立場も環境も随分と変わってしまった私は、きっとあの半径50メートルの世界にいた頃の自分を思い出し、その「自分」と会話をしたいのだと思う。帰る場所があるということは、そこから巣立った人に、他には代えられない勇気と強さを与えてくれる。

教育現場に生かされる幅広い教養と経験

野坂　卓史（2013年度修士課程修了）

京都大学総合人間学部、人間・環境学研究科設立25周年おめでとうございます。私が、人間・環境学研究科に所属していたのは、 修士課程を修了してからまだそれほど時間は経っておらず、今からちょうど4年前になります。当時は物理教育に関する研究を行っておりました。現在、福井県の県立高校で教職の現場に就いております。私の専門である物理・情報の科目を教える以外にも、生徒の進路や生活指導など、これからの日本の未来を生きる生徒たちの指導を行っております。人間・環境学研究科の研究生活で学んだことは、今就いている教職の仕事に直接つながっている要素がたくさんあります。1つは、私が物理教育の研究をしていたことにあります。物理教育研究は現在も行っており、当時行っていた仕事の延長線上にあります。どのようにすれば、学習者が物理現象に対して興味を持ち、科学の原理や原則について楽しく学んでもらえるのか。その研究方法については研究科在学時の方法と同じです。実際の生徒を目の前にすることで研究科に在学していた頃よりも自然科学を生徒に楽しんでほしいという思いがより強くなったように感じます。この起源となったのは人間・環境学研究科での研究生活にあったと感じております。次に、研究科内に様々な物理学の研究だけでなく、化学系・生物学系や自然科学系以外でも様々な研究分野があったことです。大学院の講義では、物理学の専門科目だけでなく、専門と異なった分野の講義にも顔を出していました。そこで知り合った教授と学問に関する内容だけでなく，研究する意義や就職に関すること、様々なことをお話したことも記憶に残っています。現在、教職現場で生徒の探究的な活動（研究活動）を受け持つ際に、様々な研究テーマを設定や研究手法についてのアドバイスをする機会がありますが、研究内容や研究意義について生徒に指導する際にその話をした内容が生かされています。実際に生徒の研究活動を見て、当時私の研究指導をしていただいていた指導教官の気持ちも今だからこそ分かる気がします。研究活動以外でも、人間・環境学研究科で得た教養や経験が進路指導や生活指導においても教職現場で生かされることが多く感じております。在籍していた2年間は大変有意義であったと私自身感じております。京都大学 総合人間学部・人間・環境学研究科のこれからの益々の御発展をお祈りしております。

総合人間学部、人間・環境学研究科への期待

新井　翔太（2014年度卒業、2017年度修士課程修了）

総合人間学部、人間・環境学研究科25周年おめでとうございます。こうして25周年を迎えられたことを誠に喜ばしく思います。

さて、総合人間学部（以下、総人）、人間・環境学研究科（以下、人環）に対して思うことは、京都大学を引っ張る立ち位置になっていってほしいということです。

自由が大きな流れの中で損なわれつつある中で、京都大学（以下、京大）には独自の格式があったように思います。可変的な多様さを受容し醸成するという芯を持ち続ける、そんな格式が。

しかし、吉田寮との非対話・立て看板の禁止・学外活動の制限・カリキュラム制の束縛等に代表される一元的価値観の強要…時代、時流、流行などの時の流れの中で、京大は全体としたら或いは取り返しがつかないかもしれません。

しかし少なくとも総人・人環において希望の炎は依然として灯っているように思います。2012年に端を発する国際高等教育院騒動(総人・人環解体騒動)において、総人・人環では実に多元的な運動が興りました（私も一つの又は複数の当事者として関与していました)。総人・人環には見えない権力に対抗し新たな何かを生成するポテンシャルはあると信じてもいいのではないかと思っています。

総人・人環には“これが総人だ、これが人環だ”というものが不在であるという構造的な逆説的強固さがあります。あらゆるものを許容し、創造の場として機能することが出来るからです。京大がかつて持っていた―今でも持っていて欲しいと願うばかりですが―自由な格式は総人・人環にはまだ息づいているはずです。

個々人については、面白い方向性を持った様々な人がいます。私自身については、人間的な普遍に対する希求と、広範な世界へのアクセスの保持が近頃の個人的なテーマとしてあります。大学にいた頃は、我武者羅に“高み”を目指しそれが何であれとにかく向上していたかった。今は上への矢印から、下の根本に降りていく方向性と横目に見過ごしていた別次元へのまなざしに変わってきました。それが成長なのか老いなのか単なる変化なのか分かりませんが、〝総合的に面白い視座を探る意志〟は今も昔も共通しています。一貫してその私自身の傾向と総人・人環の特長は分かち難くリンクしています。

総人・人環の京大らしい文化から充実した刺激を受けて来ました。これからも善き刺激の溢れる場所であり続けてほしいと期待しています。そして卒業生として、私側からも総人・人環に何かしらの"意味"を付加できる存在でありたいと思います。

総人での学び

細田　文武（2014年度卒業）

卒業論文を書いた部屋

この文章では、大学での学びが今の仕事にどう役立っているか、について書いてみたいと思います。

私は今、証券会社で仕事をしており、日々株式市場と向き合っています。マーケットはとにかく変化が常態で、毎秒毎秒世界が変わって行きます。高度な金融知識はもちろん必要ですが、それが有ったからといってどうにかなるわけではありません。何が正解かは必ず後にならないと分からない世界です。

学生時代に学んだことの中で、哲学や歴史が意外にも今の仕事に役立ていると思います。たしか経済学や金融の講義に出席したのがきっかけとなって今の職業にいますが、この仕事を続ける上では哲学や歴史のほうが大きな助けとなっています。――どこがどう役立って良かったのかを書くと冗長になるので、一言でいうと、自分で考えることを学べたことが役に立っている、これに尽きます。

2018年度京都大学二次試験の時期に、以下のような一節が書かれた立て看板を見ました。

「人の言ったことを安直に信じるのではなく、自分の力で真理を探求し、自分の考えで物事を判断してほしい。真実は自分の目で確かめるものです。大学とはそういう場所」

私は「金融村」にまだそれほど長くいるわけではないですが、「人の言ったことを安直に信じ」ていたら生きていけないな、と思ってしまうような市場の出来事を、ほぼ毎日のように目にしています。金融村でさえそうですから外の社会はもっと分からないと思います。

立て看板は京都大学とはそういう場所であるべきだと言っていましたが、その通りだと思います。殊に総合人間学部はその良さが凝縮されているのではないかと思います。真理は当然、簡単に探究できるものではありません。だからこそ、各分野でそれをひたむきに探求されていらっしゃる先生方から学び得たことは、私の人生の中で非常に貴重なことだと思っております。

研究室から見た総合館の中庭

今の仕事において、1秒先のことも分からないマーケットと対峙することは、少しばかりこれと似ているかもしれません。分からないからこそ面白く、先がどうなっていくのかを見たいからこの先もやめられないと思います。ここで真理と言っていいのかは分からないですが、金融村での、私なりの探究を続けて行きたいと思います。

自由の目、人・環世界の目

釜屋　憲彦（2014年度修士課程修了）

修士課程の2年間、人間・環境学研究科の月浦研究室（認知科学）に在籍していました。修了後は飲食や小売りの店舗を運営する企業に入社。店舗の現場を経験した後、「一冊、一室」というコンセプトの森岡書店へ出向し、一冊の本の内容を空間であらわし、体験していただくことを書店員として試みました。

この春より独立し、在野で研究しながら、生物の「環世界」を探求しています。環世界とは、一言で言えば「生物が体験する独自の現実世界」です。他の生き物の立場に立ってこの世界を眺め直すことは、人が他種・他文化との共存を目指す上で不可欠だと考えています。環世界に関する企画をひらけば、動物行動学をはじめとする研究者だけでなく、作家や教育者、一般の方も強い関心をもって参加下さり、環世界を普遍的なテーマとして議論する機会が増えてきました。卒業から4年ほど経ちましたが、いままさに大学での学びと研究、出逢いが繋がり、横断的で自由な道を拓いているという実感を掴みつつあります。自身の気づかない無意識のところで人間・環境学を続けていたのかもしれません。

修士課程での2年間を振り返れば、「自由人たれ」とうたい、実践する総人・人環の人たちとの思い出が印象深く残っています。何といっても指導教員だった月浦先生からは、「理論のために実例を探すのではなく、実例から理論をつくりだす」眼差しを体得しました。月浦研で学び得たこの眼差しは、ある現象をみる際に、いつも新しい発見と感動を私に与えてくれます。

例えば、私が住む東京を人工的で機械的な都会と見ればそこで思考は止まりますが、ところどころにある自然に目を向ければ、隙間を縫って力強く織りなす東京特有の生態系に驚かされます。自宅から下北沢の方へ向かう馴染みの散歩道、北沢川緑道には少し水温の高い再生水が常に流れ、そこには住民によって放流されたであろう熱帯魚、繁殖し過ぎたアメリカザリガニが棲息。それを学習したコサギは特定の餌場に通い、狩りに来ています。景観を良くしようと造られた緑道沿いの植物菜園は、やわらかい土で施され、川にはタニシが棲んでいます。実は、ホタルが暮らすことができる環境が渋谷の大都会にほど近いエリアに潜在していたのです。これは都会の暮らしの中に見つけた感激するような発見でした。

これからも自由な目で、暮らしの中から、新しい発見を紡いでいきたいと考えています。そして、時には総人・人環に係わりある皆さまと熱い議論と妄想、「おもろい」企てをしかけることが出来たならば、望外の喜びです。

俯かずに済むこと、研究を育て合うこと

谷川　嘉浩（博士後期課程在学中）

「研究を他者に語る」というあまり知られていない教育課題が人環・総人にはある。それをめぐるシンポジウムを企画したということもあり、それについて友人に水を向けたことがある(2018/3/2「「研究を他者に語る」の先へ：教養と学際の未来を考える」於京都大学)。友人は、正直に「へぇ、こんなのあったんですね」と言った。恐らく、人環の平均的な院生の反応だろうと思う。

知られていなくとも、こうした理念がないよりはあった方がずっといい。しかし、それは、労働問題を語るとき、単なる搾取（やりがいのないブラック企業）よりは、「やりがい搾取」（やりがいのあるブラック企業）の方が、当事者としてはまだ救いがあるというような話でしかないのではないかと、適度にシニカルな視線を送ることも必要だろう。

学際という理念を実質化することはできるだろうか。思うに、現状のままでは難しい。学際をどう思い描くにせよ、他者との交流が必須だけれども、総人・人環の実情を見ると、そうした交流の機会は乏しいからだ。学部生については、縦のつながりが生まれる機会が特段設けられていないし、学部生内での横のつながりが生まれる機会すら、1年目の「語学のクラス」くらいだ。大学院については、研究室単位で縦のつながりがあるとしても、学部生とのつながりは薄いし、研究室や分野を横断して人と知り合う機会は制度的にはほとんどない。私個人としては、学外で催された研究会や、学外者からの紹介を通じて、人環の院生と知り合うことの方が多い。

本心を言えば、誰もが学際研究をする必要はないし、ましてや学際的な共同研究に参加する必要もないと思う。ただ、学際的な態度を身につける必要はあるだろう。ここで、学際的な態度というのは、部分的には「研究を他者に語る」に表現されているような、ある種の構え――少なくとも他者（＝非専門家）に接したとき、他者の（学問に限らない）専門性との距離感を意識しつつ、自分の研究を位置づけながら、自身の研究を語り、あるいは、他者の営みを聞くことができるか――だというのが、私の暫定的な考えだ。

そして、総人・人環が「教育の場」である限り、こうした態度を身につけるために、他者と接触するという偶然の出会いが、必然的に確保されるものとして設計されねばならないのではないか。誰の配慮もないまま、たまたま達成されたものを「教育の成果だ」と述べることに、少なくとも私はためらいを覚える。ばらばらの建物で研究する私たちが本当の意味でばらばらにならず、互いの他者として出会い、研究を育て合うことのできるような場として、現実の総人・人環が機能するのであれば、私たちは、学際教育という高邁な理念を前に俯かずに済むだろう。

(2) 名誉教授

「象牙の塔」惜陰奇譚抄

稲垣　直樹（2017年退職）

「象牙の塔」TOUR D'IVOIRE とは何とも美しく、何ともはかない響きを宿した建築を想起させる言葉ではないか！

これは近代においてはもともと Vigny についての Sainte-Beuve の評語であり、俗世と隔絶した精神のありようを意味する言葉だった。我が吉田南キャンパスには、まさにこの言葉そのものといった、まぎれもない「象牙の塔」―― かく申す私――が存在していた。私はある種、魑魅魍魎といかないまでも、ネズミとゴキブリと壁一面の貼り紙に籠もる想念・疑念・雑念・執念・妄念・怨念の生態系を成していた。天井の異様に高い3階建てで、大きめの「中央室」と称する教師のたまり場にはほぼ必ず、人ひとり入れる大きさの金庫（給料袋を大量に収納しておいて、五月雨式にご出勤の「先生方」一人ひとりに渡すため）があり、19世紀末のオペラ座の地下2、3階のように、研究室等に寝起きする人間たちがおり、怪人たちが我が物顔で跋扈していた。

「休講掲示」ならぬ「出講掲示」が出る伝説の教師がおられた。一年に一回、それが出ようものなら、逃しては「一年の不覚」と、学生たちが押し寄せる。決して講義をなさらない伝説の教師もおられた。業を煮やした学生数人が、午後7時に必ず出現されるという噂の先斗町の飲み屋で待ちかまえた。杯を交わすうちに、ついに酔いつぶれて、聴講かなわなかったという。

判で押したように、毎朝、午前8時にマイクロバスを正門に乗りつける一団があった。ヘルメットと角材と手拭いで身を固め、私の一階、正面玄関横の教室に陣取り、窓という窓を目隠しし、立て籠もる。ここを拠点に、各教室に演説に出かける。午後6時、判で押したように、陣地の教室を元どおりに清掃して、マイクロバスで引きあげてゆく。

かく語る私は、2004年、パリはエトワール広場に鎮座する凱旋門のようなアーチを抱えた建築に取って替わられてしまった。厚みのない凱旋門！　パリの凱旋門には、ルーヴル宮からカルーセルの凱旋門、コンコルド広場のオベリスクを経、シャン=ゼリゼ大通りを通って、エトワール広場の凱旋門のアーチを潜り、デファンス地区の Grande Arche に至る8キロメートルのパースペクティヴ（一直線の見とおし）が確保されている。だが、それもない、メタセコイアの茂るどん詰まりの中庭が控えた圧縮凱旋門になりはててしまった。

せめて、しばし懐旧に浸ろうではないか！　あと10年、20年、30年……、いつの日か、今出川通りから近衛通りに至る学内パースペクティヴが完成する頃には、私の記憶、思い出は雲散霧消、跡かたもなくなっているにしても……。

総人・人環創立25周年に寄せるの辞：人環・総人の陽と陰を思い出す

伊從　勉（2015年退職）

総人・人環の陰面

人環・総人の教職を辞して3年が経過した。その間、幸い研究補助金を得て研究を続けることができ、遙か40年以上も昔の大学院生時代のように自由に研究できる境遇に戻ってみると、責任や負担を抱えた多忙な現役時代を、複雑な思いと共に思い出す。京都大学では職務内容に厳然とした格差が存在するのではないか。そのひとつが全学共通教育担当の有無に関わる。1991年の教養部を廃止して大学院化した人環・総人の発足は、それを条件に全学に許容されたからである。それは、国際高等教育院の発足後もかわってはいないだろう。

このような職務格差を押しつけたまま運営される大学の共通教育とは、公正な制度といえるのだろうか。発足時の事情を記憶する現役教員はまもなくいなくなる。このような格差を背負った部局が、齢25年を数えるのである。これは2018年2月現在、国会で問題とされている裁量労働制の罠に等しいものではないか。

とはいえ、以上のような陰面をもちながら、それを上回る陽面がこの部局にあることに触れないわけにはいかない。

総人・人環の陽面

総人・人環には、本学のほとんどの学部と関連のある教員がいるから、ミニ大学の趣があり、それを生かし、学部では副専攻制、大学院では、身近な学際性のメリットがある。単一分野の教員の不足は、アドバイスの上で他部局の単位取得を一定範囲で認める卒業単位の認定によって、勉学と研究の自由度を大きく保障している。総合大学にあることのメリットを最大限利用して、この部局がカバーする広領域の専門性が維持できるのである。ここが他部局の存立基盤と大きく異なる所である。

他部局の教員たちがこのメリットに気付くまでは、京都大学の中で総人のひとり勝ちが続くであろう。総人のメリットである4年制教養課程は、ICUの戦後68年の実績が示していることである。

教員にとっては、自分の分野が学内の他部局にもあって、自分はそのオルターナティブであることから、それを逆手に執った自分の学問分野の相対化を自分の研究内容に反映できるメリットがある。しかも、それを全学共通教育の中で全学の学生を前に試すことができる特典は何としても大きな魅力であった。そして、大学院では、新たな観点から既存の定説を崩すための演習やゼミナールを院生諸君とともに試みることができたことも、また思い出すことである。

こうして、食べ散らかした様々な学問的アイデアは、教職を辞した今、私のファイルの中にしまわれている。そのなかから、どれを完成させるかが、これからの私の仕事のひとつとなっている。であるから、10年後に人環・総人が存続していることを願う反面、同時に、複雑な感情に浸されることは、冒頭に書いたとおりである。「みなさん、死ぬなよ」、と祈るばかりである。

真実を記録し後世に伝えることの大切さ

金坂　清則（2012年退職）

教養部を抜きに大学史は語れない。その終焉前後を正確かつ多彩に描き大学激動期の諸相を浮かび上がらせる記録が望まれる。その思いあって、自らの経験に則しこれを綴る。

周知のように教養部の解体・改革の道は2つに分かれた。前任校大阪大学は既存学部への分属の道を採った。大阪大学に人文地理学講座が誕生したのはこれに関わる。本来あり得ないことだった。事実、1993年6月17日に教養部教官の分属受け入れを決めた文学部教授会が決定した人文地理学担当教官＝私の移籍先は、日本学科比較文化学講座だった。非実験講座である。これに対し、森田敏照教養部長は私達の考えを是とし、週明けの21日、大阪大学豊中地区部局長会議において「このような決定では、人文地理学担当教官が教養部において実験講座の教授である実績を分属に当たって生かせないことになり、文学部にとって大きな損失である」との問題提起を行った。塚嵜智文学部長と馬場章事務長はこれを真摯に受け止め状況を即刻本部事務局に伝え、糟谷正彦事務局長は直ちに文部省と相談した。この結果、24日には、文部省から「人文地理学担当教官を名目上かつ暫定的に考古学講座に移籍させることによって人文地理学に関わる部分の実験講座化を図ってはどうか」との示唆が得られた。考古学講座都出比呂志教授も私の予算定員上の考古学講座への受入れをOK下さった。かくして、翌94年4月の分属時に私を日本学科比較文化学講座に属させつつ予算定員上は実験講座である史学科考古学講座の教授に遇してから1年後の95年4月には、学部組織を5学科制から1学科制に改める改編の下、人文地理学講座が11の大講座の1つとして誕生した（記録は大切であると同時に、根幹となる事実を闇に葬ってはならない。大阪大学人文地理学教室編『大阪大学人文地理学教室の歩み：大阪大学大学院文学研究科・文学部人文地理学教室講座化21周年記念』2017, 47p, 参照）。

こうして恩師矢守一彦先生の生前の夢の実現にも関われた私は、翌96年4月、1年間は大阪大学教授との併任として京都大学に着任した。以後16年、大学の激動期に関わる、特に独立の道を選んだ組織故の授業その他公務の多さに驚きつつも、人環・総人の理念の実現に関わって教育と研究を行った。その際、何よりありがたかったのは、足利健亮先生の提案（97年）による『地域と環境』の発刊（98年3月）だった。翌年には先生が逝去され私達は深い悲しみの中、そのNo.3を「足利健亮先生を偲んで」という追悼号として発行したが、本誌のおかげで、No.10として「特集 地理学者 青木伸好先生の世界」を出せた。また、対応を間違えば取り返しのつかない事態が予測された考古遺物問題も、本誌があって初めて完全に解決できた。

私が着任した年の夏、足利先生は、研究室の人環棟への移転を機に、F号館地下廊下の突当りに置いてあった藤岡謙二郎先生収集遺物の問題解決を図らんとされ、遺物をE号館の人文地理学準備室に移した。だが12年後にはこの部屋も研究科に返還せねばならなくなった。この時私は、すべての遺跡について、遺物を地元の公的機関に受け入れていただく他ないと考えた。

そして、この考えを首肯下さった客員教授松井章先生と宇野隆夫国際日本文化研究センター教授のご教示とご援助の下、遺物の整理を同僚や院生らと進める一方、北は北海道の奥尻島から南は鹿児島県の甑島列島まで全国18に及ぶ遺跡に関わる機関に事情説明とお願いを重ねた。その結果、甑島列島の遺跡の遺物を除いて受け入れていただき、ここの遺物に関しては鹿児島国際大学考古学ミュージアムで受け入れていただけるという奇跡のごとき「僥倖に恵まれ」（松井・宇野報告）た。

そして『地域と環境』のおかげでこれをさらに膨らませることができた。すべての機関から提出いただけた精細な報告や両教授による総括などによって、膨大な収集遺物と遺跡の特質を記録に留め得た上、遺物に混じっていた古写真を生かした共同調査を甑島列島で行いその成果も収載できたのである。No.11「特集　藤岡謙二郎先生収集遺物特集号」は258頁の大冊となった。古写真の価値の証明は、これが私のイザベラ・バード論の礎をなすツイン・タイム・トラベルの手法と概念の応用でもあっただけに一層嬉しかった。

激動期ならではの様々な出来事はより長い歴史を編む際の要。正しく記録されねばならない。実名表記もそれ故のことであり、故人を除くすべての方々から賛同を得ている。

京都大学教養部、人間・環境学研究科時代の思い出

北畠　能房（2005年退職）

研究職から教育職に転じた私の生涯の友は、社会現象の実証研究といえます。環境問題の実証研究の一端は、人間・環境学研究科設立10周年の英文記念誌に寄稿させていただきましたが、検証可能性を担保するために、対象とする事象を抽象化して統計分析を含む数理モデル分析にかけるという手順を私は踏みました。この抽象化の過程には、対象事象にかかる学問分野の知見が不可欠になります。この意味で、実証研究にとって、学際性は不可欠の素養になります。特に、環境問題のように、純粋な市場経済下で生起する現象でない問題を定式化し、資料を収集・理解するためには、自然科学的知見、制度的枠組や公会計の仕組みにも熟知することが必要になります。この意味で、私が京都大学教養部の法政研究室に所属させていただけたことは忘れ得ぬ出会いでした。赴任当時に割り当てられた研究室が法政研究室の書庫でしたが、そこは環境判例を勉強するには最適な場所でした。長年にわたる水俣病事件判例等をじっくりと勉強させていただけたことが、総合人間学部第二回公開講座での予防原理に関する原稿（有福孝岳編著『環境としての自然・社会・文化』に所収）をまとめるために、また、環境政策論基礎ゼミナールでの環境判例勉強にも大変役に立ちました。第二回公開講座後は、予防原理を操作可能なものにするために、実物オプション理論を用いた過去の大型公共プロジェクトの再評価研究に取り組み、授業などでもとりあげました。国立公害研究所時代に取り組んだ南アルプススーパー林道の費用便益分析の再考察を英文学会誌に発表したのが、京都大学での最後の研究になりました。

退職後は、実家の神職家を継ぎ、40年来の懸案であった河川改修工事の完成を見届けるのに忙殺されましたが、京都大学教養部法政研究室での経験や仮想評価法に対するアマルティア・センの批判といった人間・環境学研究科での研究経験が大変役に立ちました（その一端は、人環フォーラム28号に寄稿）。現在は、地元の文化協会長を委嘱されていますが、教養教育や学際研究や文化活動に親しむことは、長い人生を生き抜くために大変有意義であるとの感を深くしています。

総合人間学部創設のころ

木下　冨雄　（1993年退職）

総合人間学部は旧教養部を母体として1992年に設置された。私はその初代の学部長である。この経験を元に学部創設に纏わる想い出を簡単に記したい。

京都大学で教養部の改組や新学部への移行に関する議論が全学レベルで開始されたのは、古く1980年代のことである。教養部を解体して学部に分散吸収する案、新学部に改組する案、独立大学院を設置する案、前期2年に配置するのではなく後期2年に配置する案、4年間に傾斜配分する案など、さまざまなモデルが時間をかけて検討された。

このような案を全学で一般論として議論している間は和気藹々であったのだが、話が具体化してくると学部間で齟齬や対立が目立ち始める。積極的に支援してくれる学部と反対する学部、表には出ないが裏で足を引っ張る学部などである。意外なことに研究所やセンターは、ほとんど例外なく学部化を大歓迎してくれた。

反対する理由は「学部内に小京大を作るのはいかがか」「小人数の単位で専門分野を数多く設けるのは困難」「教養というのは学問ではない」などいろいろあったが、その背後にある本音は、新学部が誕生することによって奪われる「自分たちの既得権益の損失」「新学部への妬みや恐怖」「差別意識」などであった。京都大学は自由・自治の砦として私自身誇りに思っていたのだが、それは所詮タテマエであって、自分の利害に関わり出すと京大の教員も突然エゴイストに化身することが分かりとても寂しい思いをした。

ただ幸いなことに文部省は極めて好意的であり、彼らが長年目論んできた教養部改革の先導者としてわれわれの案を高く評価してくれた。日ごろ対立することも多い文部省なのだが、この時ばかりは心強い「戦友」だったといえよう。本省の薄暗い建物の中で、彼らと白熱した議論を戦わしたことが懐かしい。

最後に一つだけカリキュラム戦略に関するこだわりを述べておこう。私たちが考えたのは人文・社会・自然というあらゆる学問分野を内包する新学部の利点を、カリキュラムの上でいかに反映させるかということであった。「総合」とか「学際」という概念は当たり前のこととして、それを具体化するカリキュラム設計の問題である。そこで採用したのが主専攻・副専攻という制度であった。これは外国では極めて普遍的なシステムであるが、日本の国立大で採用しているところは多くないと思う。この制度がどの程度有効に機能しているか定かでないが、リスクを怖れず、柔軟な思考力を持つマルチ人間が多数育ってくれればそれに勝る喜びはない。受験産業側の調査によると、総合人間学部の人気は京大の中でもトップグループにあるようで、これも嬉しいことの一つである。

山を持つことのすすめ

相良　直彦（2001年退職）

2012年から、こんなことを言っています。いささかこじつけではありますが、人間と環境をめぐって当事者であり続ける道として、ここでもこの提言をします。

1.「山を持つ」とは

山林を所有すること。登山で言う「山」や鉱山の「山」ではない。

2. なぜ今こんなことを言うのか

a）山を持てば一味違う人生と愉しさを経験できると伝えたい。b）山は価格的に多くの人の手の届く存在になった（素地10~30万円/ha）；今や「山持ち」は「厄介持ち」の時代（山は銀行融資の担保にならない、自治体は寄附として受け取らない）。c）資産価値下落の主因は1964年の木材輸入完全自由化；TPPの先例ここにあり？ d）山は買い時？（取得には行動力・決心力が要る）；銀行に預金するよりマシ？（税務資料によれば、スギ林ヒノキ林の立木評価額の上昇率は銀行利率よりはるかに良い）。e）放棄地を増やすな、外国人に買い占めさせるな。f）お金の使い方を変えよう！ g）ウオーキングなどするくらいなら、大地で働けば？

3. 所有した山とどのように向き合うか

a）スギやヒノキの山にしなくてもよい、雑木林にしてもよい。b）木はちょっと手を添えてやると、真っ直ぐに育つ（人を育てるよりいい）。c）しかし、今は獣害に消耗する（獣のはびこりは、日常的にヒトが山へ行かなくなって、プレゼンスが低下したことによるところが大きいと思う；おおいに山へ行って獣を威嚇しよう）。d）労賃を山からは回収できないので、作業に人は雇えない；自ら働こう（3食、米のメシを腹いっぱい食って）。e）怪我の危険はある、しかし危険は感性も磨く；一人作業の方が安全かも。

4. 山を持つことによってもたらされるもの

a）逃げ場、癒し、蘇生感；資源を持つ安心感、ふるさと感、気持ちのゆとり。b）行動圏の変化、思考・発想の軸足の変化。c）自分の大地・大きな空間で身体いっぱい働くことができる喜び、自信。d）山が育つのを見る喜び、山に育てられる実感。e）固定資産税（例：2,830円/ha）ほか、私有に伴う面倒も；しかし、悦びがそれらを上回ることも。f）まれに収益。

5. まとめ

a）確実なこと－木は大きくなる（黙って成長する、人間はやかましい）。b）「大地の私有」の実感と「自然との闘い」の体験を！ c）自分は山を買ったか？－「はい」

参考文献：丸山徳次・宮浦富保編『里山学のすすめ』 昭和堂、京都、pp. 308-339。

人間・環境学、その「・」の内景

新宮　一成（2016年退職）

人間・環境学という言葉は、人間と環境を学問するということではなく、人間と環境の「関係」を学問するということである。あのパスカルの名句が忽ち生き返る。「人間は考える葦である。宇宙がそれを滅ぼそうと思えば一吹きで足りる。しかし人間は考えることによって宇宙を包む」。宇宙から人間への関係を、吹き来る激風で、人間から宇宙への関係を思惟の尊厳で結んだこの関係は、相互内包的でそれ自身の実質を持たない空である。

人間と環境のこのような関係を学問の中心に据えることが、この「・」の意味である。たとえ立脚点が空であっても、そうすることによって、どんな学問の風景が開けるか、それを草創期の研究科の配置の中に見て、心が躍った。はじめ独立大学院として、哲学、精神医学、化学、生物学の専門家の集まりによって起動し、すぐにそこに、大勢の各方面の専門家が加わった。遠くから来られた参加者も含め、多くの人々のお話を聞いて、この「・」に身を置いてみることから、我々はパスカルのように人の心を語れるだけでなく、経済や社会の動きも、そして宇宙と生命の起源まで、見渡すことができる、そのことを知った。このようにして「人間・環境学」はけっして並列的なごたまぜではなく、一つの独立の学問の立場として純粋に存立してゆくべきだと観念した。

「環境」との「関係」を考えなくてはならない。その責務感に鼓舞されて、人・環の初代の棟となる予定の、医学部構内の旧生理学教室棟に、まだ改装がなされる前に、潜入してみた。長く放置された明治期の建物の内部には、埃まみれの廃墟の室内空間が広がっていた。しかしそこには何か動くものが…。それはたぶん外来種の巨大なムカデであった。「環境」との関係を結ばなくてはならないとしたら、この存在も無視してはならない。自分はそれに耐えられるだろうか。

この棟は僅か1年で取り壊され、新棟ができるまで、私はツタに覆われたやはり古い病院構内の棟に入居した。入居したその日、床板と壁板の間から、雲のように湧き出てきたのは、孵化したシロアリの大群だった。先ほどの疑念は再燃し、ずっと晴れず続いていったが、新棟に入って、何もかもが綺麗になったはずのときに、「トイレが汚い」と何回も指摘された教授がおられた。その先生は、吉田山にキノコの観察のために学生を連れて行かれていた。その言葉で頭の中に見えたのは、土の中から何かを創り出す生命活動、それを救い上げている植物の根、そしてそれを食べる自分という人間であった。

その後このような有り難い発見がさまざまな方面で何度もあって、人間・環境の「・」の内部風景が、精神の医療をめぐる私の研究の原風景となっていった。それは今、奈良に職場が移り、日本の歴史を遡行することで、ますますはっきりしてきている。

宗教には救いがあるが、宗教学に救いは無い？

薗田　稔（2000年退職）

すでに定年退官してから、実に18年の歳月を重ねて、もうすぐ82歳を迎えるという老残の身ではありますが、この度は、お世話になった総合人間学部と人間・環境学研究科が設立25周年という節目の秋を祝うとの吉報を賜わったことに深い感慨を覚えて、一筆啓上する次第です。

近年は、とかく物騒な天災やら人災が頻発して、しきりに「想定外」と評される深刻な世相に翻弄されがちですが、その片隅の人生にも思いがけない転機があって、小生の場合には幸運にも、本学の教養部が斬新な総合人間学部に生まれ変わるという、まさに大変革の最中にお招きを頂いて、それこそ理非をわきまえずに東京の一私学から転任したのが平成3年度からの教官就任でした。

それ以来9年のあいだ、元来の宗教現象学を専攻する立場から、学部では宗教学基礎論と日本宗教史論を講じ、大学院では日本文化論の講義と演習を担当して、毎年度多くの学生と院生とに接して、まことに楽しく思い出深い教員生活を味わうことができたこと、当時同僚の諸先生をはじめ多くの事務官の皆さんのお蔭と心から感謝しております。

個人的には、累代神主家を継ぐ身のため週末には帰郷して田舎の神社祭祀を奉仕するかたわら、学会やら研究活動やら、今から思えば超多忙な日々を送りましたが、何とか無事に平成11年度の定年退官まで勤め終えたことにほっとしています。

退官後は関東に立ち戻って、数年のあいだ二、三の大学の特任教授を勤めたり、NPO法人の理事長を引き受けたりして今に至っておりますが、やはり京大に奉職した時代の自由な学風を満喫した学究生活の思い出は、何ものにも代え難い我が人生の一コマです。

駄文を弄するに当たって、久しぶりに当時の講義ノートを9冊ほど目通しした挙句に、稍々不謹慎ながら二つほどのエピソードを書き添えることにしました。

一つは、有難いことに新築間もない研究室棟4階に広い部屋を拝領したのを幸いに、国際色豊かな多くの院生に出入り自由のサロンにし、ある年末のクリスマスにはパーティを催して夜を明かしてしまった、という怪しからぬ始末に及んだこと。

二つには、新学期の全学部共通科目であった「宗教学基礎論」の開講時には、決まって大教室に溢れんばかりの新入生が詰めかけるのに恐れを成して、開口一番「宗教には救いがあるが、宗教学に救いは無いゾ」と啖呵を切ると、次講からは程よい学生の数に落ち着くという顛末でした。ただし本当にその通りであるか否か、実は未だに迷っているところです。

「出題ミス」雑感

冨田　博之（2007年退職）

阪大・京大と2017年度入試・物理の出題ミスが相次ぎ忸怩たる思いであるが、ついつい近年目立つようになった基幹製造部門における深刻な工程ミスと重なってしまう。組織やカリキュラム改変の連発と、法人化に伴う近視眼的な評価主義の蔓延による、組織的な疲弊が顕れているのではないかと案じている。失礼ながら今や中堅どころの先生方は、落ち着いて大学教員としての自己研鑽を積む余裕がなかったのではないだろうか。

加えて、両大学に共通するのは題材が「音波」であったという偶然。実は、現行のカリキュラムでは理工系教員のかなりの部分が、音波については大学入学時の知識以上の教育を受けていない可能性がある。某大学のミスは、まさにそのことを如実に物語る稚拙さであった。災いに乗じて穿ちすぎかも知れないが、この数十年間の大学改革の結末として、人類文明の重要な構成要素たる学術を継承するという大学の機能の一つが失われつつあるのではないかと、不安さえ覚える。「音波」は、19 世紀から20世紀にかけて確立された、現代科学の礎となっている古典物理学の範疇である。古典物理学の大部分は、今や知らなくても最先端の科学研究に携わることができ、現に京都大学においても日に日にめざましい成果が挙げられているのである。

私が教養部に着任した1977年には、すでに教養部改革の検討が始まっていた。着任してみると、多くの扶養家族を抱えた理学部の研究環境に比べれば天と地の差に眼が眩んで、「教養部差別」というキャッチフレーズに嫌悪感を露わにし、改善運動のシャドーキャビネットを自称されていた人達から「今どきの若い人は...」と白い眼を向けられたものだった。しかし日を追うにつれ、4回生時の指導教官であった井上健先生の「科学基礎」の理念に感化され、京都大学の中に新たな研究科を創るとすれば、先ほど述べた人類の文明の継承という大学の重要な使命を具現する組織以外にはないと、自己流に解釈するようになった。

しかしながら、周知のように実現性との擦り合わせから風向きが変わり、「人間ナカグロ環境学」独立研究科という、教養教育解体の時流に阿ねる改革に急転した時点で、私は抵抗勢力と化した。物理教室に上から持ち込まれた研究科構想人事をひっくり返してしまったし、先輩である川﨑辰夫さんが「われてもすゑにあはむとそおもふ」と崇徳院を披露したときには「上の句わかって言ってるんか！」と本気で詰った。理系教員に「地環かエネ科か理学研究科を各自で選べ」とお達しがあったときには、改革の理念も何もない性急なリストラクチュアにすぎないと、研究科教授会であからさまに抗ったこともあった。

しかしながら、学科長・評議員と管理職に携わるようになると、組織の方針の片棒を担がざるを得なくなっていった。あげくは最後の3年間の研究科長。1年目の新年懇親会の席で大先輩から、「これで君もA級戦犯の一人だ」と笑われ愕然とした。教授会の再投票で選出されたとき、さすがに七息思案とはいかず数分間逡巡したが、江島研究科長の「冨田先生はおやりになりますか」という助け船になぜ乗らなかったのかと後悔したのであった。あとは城を開け渡した高等教育研究開発推進機構との間の屈辱外交の連続であった。

30年の昔

冨田　恭彦（2017年退職）

第二の母校である京都教育大学から京都大学教養部に移ったのは、35歳のときでした。ちょうど西島先生が総長をされていて、4月1日、赴任した最初の日に依頼を受けた仕事は、大学入試のA日程B日程制に対して西島先生が示された批判的見解を文書にしたものを、学内に配布するお手伝いでした。その西島先生と、私の恩師の一人である西洋古代哲学史家の藤沢令夫先生が中心となって、数年後に教養部は人間・環境学研究科と総合人間学部になりました。最初に研究科長を代行されたのは、西島先生ご自身でした。

赴任から間もなく、私は学部の創設を進めておられた先生方から「総合人間学部」という名称を（当時の）文部省にご理解いただくための説明文の作成を依頼され、総合とは異質のものの接触によって新たな次元が開かれる動きであって、単なる加算的な寄せ集めを意味するものではなく創造的な意味合いを含むものだという考えを文章にすることになりました。その考えは今も変わらず、だから、総合人間学部の教員は自身の専門の切り口を鮮やかに示し、同じ平面に並ぶ異質な他の営みに対してその異質さを際立たせる高いレベルを維持されれば、自ずと総合は進む（総合は本来恣意的に進めようとするものではない）と、今も考えています。とびきり優秀な先生方がご自身の専門を極める努力をされていれば、あとは異質の分野に積極的に触れるシステムが十分に機能するだけで、質の高い総合は自ずと始まるものである、しかも、学問と称されるものは本来そういうものだったと思っています。

あれから30年、いろいろありました。1970年に京大に入学し、吉田二本松で授業を受けた頃の、私にとっての古き良き教養部は制度上はなくなりました。けれども、その後私が所属した総合人間学部と人間・環境学研究科が教養部を母体として設置されたものであり、その教養部が京大の自由の学風のもとを作った第三高等学校を母体としたものであって、さらにそのルーツが明治2年の舎密局と洋学校にまで遡るというのは、私が常々誇らしく思っていることの一つです。

なんて、昔話をするようになると、若い人たちに笑われそうですね。退職はしましたものの、もう少し、自分が若い頃からそれが仕事と思っていた教養部的な教育と研究に関われればと思います。30年を一緒に過ごしてくださった多くの皆様に、感謝感謝です。ありがとうございました。

「自学自習」の大学におけるカリキュラムと学生の自主性

西井　正弘（2010年退職）

京都大学吉田南（旧教養部）構内にある総合人間学部（以下、総人）と大学院人間・環境学研究科（以下、人環）の創設25周年に際して、その前身である教養部と総合人間学部の教育と学生サークルに関連して述べたいと思います。

私が京都大学で教鞭をとりましたのは、1982年から2010年までの28年間です。その前半1992年度までは、教養部で「法学」と「法学ゼミナール（当初、2回生配当）」（通年科目）を担当しました。法学ゼミは、1969年からの京大「大学紛争」の結果、「自主ゼミ」として誕生した科目で、教養部の正規科目ではありましたが、法学部では卒業に必要な単位とは認定されない「増加単位科目」の扱いでした。学生がクラス単位で希望する内容のゼミで、授業紹介は、現在の詳細なシラバスとは異なり、法学の主要な1分野を挙げて、「具体的な内容は受講生と協議の上決める」程度でした。初年度の学生の希望は「刑法」だったのですが、田岡良一先生の『大津事件の再評価』（有斐閣）をテキストに選び、司法権の独立や、罪刑法定主義、国際約束と国内法の優劣の問題など、学生と遅くまで議論していた記憶があります。決められた時間と教室の中だけの教育ではなかったと思います。

1993年4月に総合人間学部1期生が入学してきました。私は、当時米国のヴァージニア大学に在外研究中でしたが、帰国後は「国際関係論」を担当することになり、「基礎ゼミナール」「講義」「演習」を、学年別に開講していきました。熱心な総人の学生達がもっと学びたいと相談に来ましたので、サークルを作ったらと勧めて25年前に誕生したのが、「京都大学国際関係論研究会」（SIRKUS、サークス）で、その顧問になりました。2010年に顧問を法学部の奈良岡聰智教授に交代していただき、現在では全学部生で構成されるサークルになりました。

総人教育の特色として、学際的な教育と教養教育の重視が挙げられると思います。「国際関係論」も学際的な学問分野ですが、その裾野は大変広いものです。また、総合人間学部の教育の特色として、「副専攻」制度も取り上げるべきだと思います。主専攻と副専攻の二重の選択を学生に委ねており、副専攻制度が、内容の変更はあるようですが、狙い通りの成果を上げられたかどうか、卒業生の皆さんの意見を是非聞いてみたいと思います。

卒業論文・修士論文のテーマ設定と論理展開の切り口を見つけ出すことは、学生にとって重要な意味があり、また指導教員の役割も重要です。学生自身が論文を書くことによって、精神的な成長を実現する、あるいは後になって、自分の問題意識が人生にとって意味をもっていたことを実感できるよう支援するのが教員の役割でしょう。人環で主査あるいは副査として、博士論文の審査した当時の院生が、その後各分野で活躍しておられ、出版物の著書紹介に、総人・人環の卒業・修了の記載を見ることも多く、大変嬉しく思っています。研究者以外の世界で活躍しておられる卒業生からも、この部局に対する評価を伺いたいと願っています。

原点を語り継ぎ、さらなる前進を

丹羽　隆昭（2008年退職）

総人・人環の、大学内における、また社会における存在意義とは何か？これはこの学部・研究科に籍を置く者は誰しも、決して忘れてならない原点的問いである。

四半世紀前、われわれは、「総合人間学」を実践し、「人間・環境学」を追究する、という看板を学内外に向けて掲げ、希望と不安が相半ばする中でスタートを切った。この看板が意味するところは、要するに、「文系」だの「理系」だのという既存の学問的区分を乗り越え、両者にまたがるユニークで、昔から京大人が口にする「おもろい」研究に従事する場だ、ということであったし、今もそのはずである。

総人・人環の強みは、「文系」から「理系」にわたる幅広い分野の研究者がひとつの部局内に同居していることで、部局内の様々なイベントや日常的交流を通して、一見自分とは無縁のように思われる知見や研究手法に触れ、それらが実は自分の研究にとっても有効だと気付く機会に富んだ場となっていることである。こうしたユニークな環境を活かし、個人ベースであれ団体ベースであれ、旧来の専門領域に捉われない、分野横断的で自由闊達、そして「おもろい」研究に従事し、積極的にその成果を世に問うてゆくことこそ、内外から期待されている総人・人環の存在意義なのではあるまいか。こういう研究には自ずと京大らしいカラーも備わってくるはずである。

こうした分野横断的研究は、既設の学部・研究科同士の提携によっても不可能ではないが、実際には難しい。その点、総人・人環は当初からそういう方向性が内包された環境なので、これを活用せぬ手はない。「文系」と「理系」の融合が難しければ、同じ「文系」同士、「理系」同士で、これまで研究協力が行われてこなかった分野間での「融合」の成果も期待できよう。

スタートから四半世紀。総人は、高い受験競争率が目を引く人気学部となっているし、人環も優れた人材を大学等の研究・教育機関へ多数送り出して、高い評価を得ている。しかし、原精神を刻んだ看板が放つ光はまだ少々弱い。世間での認知度も高いとは言えまい。分野横断型研究教育機関としての、インパクトのある具体的成果を、より多く、より鮮やかに示し、大学内外における自らの存在意義をいっそう強固なものにすることが肝要であろう。看板がより一層強い光を内外に向けて放つべくさらなる前進を、と願うものである。

〈総合〉ということについて

林　哲介（2006年退職）

オルテガ（西1883－1995）の主著 『大衆の反逆』の中に次のような記述が見出される[1]。

> 純粋科学の研究室は、学生にとって魅力を失いはじめている。しかもその現象は、産業が最高の発達を示している時代、科学によって創りだされた道具や薬を使うことに、人々が最大の意欲を示している時代に起っている。……科学の原理の豊かさが、科学に驚くべき進歩をもたらしたが、その進歩は否応なく専門化傾向を押しつけ、その傾向によって科学は窒息しかけている。……専門化は、科学者から総合的文化を追い出し始める。……科学は自分自身の成長を有機的に調整するために、ときに再編成を必要とする。その再編成は、総合への努力を必要としているからである。

これは1930年に書かれたものではあるが、現代においてもなお古びたものとは思えない。

1978～1979年のころ、京都大学教養部は「科学基礎研究科」の設置を構想して全学に働きかけていたが、当時の教養部長 井上 健 が総長宛に書いた『〈科学基礎〉ということについて』という手書きの長い説明文があった。その中では、

> 現代世界の学問をめぐる状況として、学問の進化に伴う学問の個別細分化の進行とそれに応じての情報の飛躍的増大とその処理・操作方法の厳密化ないしは「科学化」の可能性の増大ということが一般的に言われている。この傾向は自然科学に限らず人文社会科学についても言える。……その結果「科学は世界の部分を理解しようとしてきたが、その全体を理解することが問題であろうに」という状況が産み出されている。要するに、学問の対象の全体性の回復、それを包む世界観の包括性への指向が現代の世界的課題としてあることは多言を要しない。……近代日本、殊に戦後日本の学問の特徴の一つは、その技術的な面での著しい進歩とその思想的な面での貧困との対照である。……この学問の技術性と思想性の分極ということは、言語の上では「科学の用語と日常の言語」との分離として、仕事の上では「専門家と非専門家」との固定化した分業として、知識の上では「専門家的知識と非専門家的視点」との距離として現れる。そして、それらの統一を目指す努力は、これらの課題の意識化にはじまるほかはない。

と述べていた[2]。このオルデガと井上に通底している思想がその後、現実の諸事情を呑み込んで「総合人間学部、人間・環境学研究科」に行きつく土台となっていたことは確かである。

とはいうものの、これらのいずれも、〈総合〉の実像がどのようなものなのかまでは語ってはいない。25年という短い時間においてはまだ〈総合〉の姿は明確ではない。これが科学の全体を牽引するまでにはさらに4半世紀以上を要するのかもしれない。レトリックに堕することなく、〈総合〉化というアクティビティを駆動していくには、学生たちと語る教養教育というフィールドが不可欠であることは確かであろう。

（1）オルテガ・イ・ガセット・Ｊ/桑名一博[訳]（1985）『大衆の反逆』白水社、pp.64-166.
（2）林　哲介（2013）『教養教育の思想性』ナカニシヤ出版、pp.27-33.

頭の中の十円玉

宮武　義郎（1988年退職）

私は今O（オー）病院の脳神経外科の病棟に居る。理由（ワケ）はこうである。右脚に続いて右手にも麻痺が出始めたので、ケアマネージャーに相談したところ、一度脳神経外科で診てもらった方がよいのではと言われた。そこで脳神経外科のK先生の診断を仰いだところ、たび重なる転倒が原因で脳内出血が見られるとのこと。しかし約1時間位の簡単な手術で血を抜けばよいと言うので執刀してもらった。手術は成功で、暫く入院ということにになった。更に歩行などのリハビリも院内で行う予定だが、「頭に10円玉位の穴」を開けたので絶対安静のこと。そして執筆や絵画制作などしたければ、おとなしく言うことを聞くようにとの忠告を受けた。それから年末年始はたぶん入院の筈。年賀状も恐らく来ないでしょうし、次にまた転倒して頭を打ったら、死は免れないでしょうから、今年は自宅とリハビリ入院との繰返しです。……かくしてわが人生は、何の因果かこのような御託宣のもとに運命づけられたと言うわけである。

所で話は少々堅苦しくなるかもしれないが、“永遠の生は死へと視線をまっすぐに向けること、死に勝利することから始まる。おそらく生とはこの「勝利」にほかならないだろう”とは、哲学者ジャック・デリダの言葉である（ジャック・デリダ『死を与える』ちくま学芸文庫、2004年）。90歳を越えた今の私にとって、この言葉は当然のようでありながら、何か一つの新しい啓示を与えてくれるようにも思えるのである。特に今置かれている状況のもとでは。それにしても脳神経に対して死に到らしめて勝利するとは何と力強い言葉だろう。しかしその勝利は、頭の中に10円玉位の穴を開けられ、絶対安静を強いられた「死」との戦の中で、「永遠の生」を獲得する時のそれでなければならず、それはまた西田幾多郎によると、死に勝利して人間が人間の本性を現じた時で、その時はまた頂点に達した美、即ち最高の倫理たる神に通じるであろう。

さてこの私は、脳神経外科という現実世界から、最高の倫理の世界への精神の高揚へと、知らずの中に白昼夢を見ていたのだろうか。

研究科・学部創設1990年頃の追憶と裏話等

山崎　和夫（1991年退職）

私が1968年春ドイツから教養部に着任したころ、学園紛争が西欧諸国で吹き荒れ、東京ではすでに全共闘が暴れていた。それに対して当時は京大等では、教養部で学生をほったらかしておくからだという他学部等の批判も多かった。やがて全学的に教養部などの組織的な改善を目指す全学委員会が、総長の下で作られ後に藤沢委員会と委員長の名前で呼ばれる委員会が1970〜80年代に何度か教養部改善案を纏めたが、なかなか結論に至らず文部省も首を縦に振らなかった。その種の記録は京大広報や京大教養部報に詳しいが、中でも私の前任者の新田元教養部長が京大教養部報No.205（改組特集3、1992年9月号）に書かれたものが要を得ていると思うのでそちらをご参照いただきたい。

1990年4月改組問題に素人の私が教養部長に選出され、1年間その問題と苦闘した。他大学でも同じような改革が盛んに論議されたが、文部省は東大教養学部型の改組には否定的であった。その頃よく話題にされたのは、時代の流れを反映して、情報、環境、学術総合、文理融合、学際・・・などの学部名であった。最初のものはすでに工学部系で使用済みだった。そこで約20年に及ぶ積年の計画案を、紙に書いた餅でなく形のある実体にすることが私のなすべき仕事だった。

新任の挨拶その他を済ませて4月末ごろ文部省で国立七大学の教養部長会議があり、教養部改善委員長の竹市さんや事務長とその会議に出席して各種の情報交換がなされた。その時文部省のこの件のキーパーソンの課長補佐T氏と知り合いになり、文部省では東大に手を付けないのだから、まず京大からというようなことを仄めかした。そして別れ際にT氏が私に耳打ちして、来月末七大学某学部長会議が京都の岡崎のホテルであるので、それに出席するからと囁いた。私に関係ない会議のことを何故T氏が私に知らせたのか、私は迷ったが、私はそれまでに2度の人生の大きな転機に、その種のサインを見落として失敗してきたので、それは何か意味深長なサインでありそうに思えた。そこで私は文部省のT氏にすでに提出済みの京大の改善案を説明しようと何度も電話をしたが、いつも忙しいT氏は国会答弁に行っているとか、会議中とか、或は居留守か？どうしても電話が通じなかった。しかし先方にはこちらの熱意とやる気は伝わっていたのだろう。鉄は熱いうちに打て。私は先日彼から教えられた日に岡崎のホテルへ正午頃に出向いた。そして会議を終えて出てきたT氏をキャッチして私の公用車で、彼の次の出張先へ飛ぶ大阪空港へ送ることにした。その車中ではたして彼は大筋で京大の改善案の線で事を運ぶ事にゴー・サインを出した。大阪空港から私は竹市さんに電話でそのことを知らせ、京大の総長と事務局長にも連絡した。もちろんその後細部はいろいろ変転したが事は一気に加速され、来年度からいよいよ実体が姿を現すことになった。私の事務的仕事としては一世一代の大仕事はこうして意外にうまく運び出した。

翌日さっそく私は竹市さんと共にN総長に事の次第を報告に行き、全学的なサポートをお願

いしたところ総長も大変喜んでくださり、部局長会議で早速議題にされることになった。総長は元々学術総合研究科という名称を提唱されていた。私達はそこで翌日から各学部長と関係のありそうな研究所長に、協力をお願いに回った。中にはかなり厳しい注文なども頂いたが、総長以下大勢はとにかく教養部の案をたたき台にして文部省と交渉を進める方向にあった。こうして部局長会議で本年度の京大の概算要求に載せることになったが、総長が研究科の名称にこだわられ、人間・環境学研究科（仮称）とすることを主張された。そこで翌日事務局長と謀って、彼と2人で総長と膝詰めで、概算要求案に仮称はふさわしくないと談判して，やっと仮称を取ることを了承していただけた。さらに教養部を改組する学部の方は事がさらに大きいので、次年度に総合人間学部という名称の学部に改組する案になった。こうして総合という呼び方を入れることになった。

私は良くは知らないが、ヨウロッパの古い大学では、先ず最初に作られた組織は広い意味の哲学、自然学、神学・・・などを包括する学問が目指されていたと思う。例えば物理学を専攻する私の理学博士の肩書は今でも英語では Dr. Philosophy（略して Ph.D）である。確かドイツでは die Philosophysche Fakultaet は我が国の文学部に相当する学部であり、哲学学部ではなかったと思う。哲学或いは“学”に絡めて私見を述べてみよう。それは直接的な利害得失を超えた人類にとっての世界・人間・事物・・・の根源の在り方の“叡智”にかかわる学問ではなかろうか。時代の流れでそれが環境や総合や人間学や・・・と呼ばれるが、広い意味での哲学で、我々のこの新研究科も新学部もその種の人類の叡智を学習する場と成る事を念じている。

総人・人環の教務について思い出すこと

山田　誠（2009年退職）

1988（昭和63）年に教養部に着任し、2009（平成21）年の定年までお世話になった。総人・人環の発足後はさまざまな委員を仰せつかり、中でも教務関係の委員の期間が長かった。ここでは、その折の思い出を二、三記すことにしたい。

まず学部の教務委員は、途中間を置いて2期務め、その間、委員長を半年ずつ2回務めた。初期の総人では卒業判定がなかなか厄介で、3月初めに開かれるそのための委員会では、かなり時間をかけて実質審議（成績表のチェック）をしたと記憶している。とくに私の所属した人間学科では、学生数は多かったのに教官数は少なく、そのため他学科からは2人ずつ出ていた教務委員が1人しか選出されていなかったこともあって、その卒業判定にはとりわけ神経を使わざるを得なかった。委員長在任中の教務委員会の難問としては、卒業判定とも関係する「特別休学」の問題があった。「特別休学」とは、卒業要件を満たしていても意図的に卒業を遅らせる場合の休学を意味し、資格試験に挑戦する学生などによく利用された。これを公平に運用できるようルールを定めるという課題であった。一応成案は得られたものの、そこから派生して「卒業を3月以外にいつ可能とするか」も決めることになり、結局、9月だけでなく6月や12月の卒業もありうることにした。しかし、これはやや行き過ぎであったと反省している（後に改められたかもしれない）。

人環の学務委員長を務めたのは1998年前後である。当時の私は、学内措置で増設された「広域文化地域論」という協力講座の所属であった。協力講座の教官が人環の何かの委員会の長というのはあまり例がなかったと思う。学務委員長在任中の審議事項で記憶に残っているのは、一つには他大学との単位互換協定の締結、もう一つは博士論文中に含まれる既発表共著論文の扱いである。前者は阪大の国際公共政策研究科との協定が最初で、奈良女子大の人間文化研究科との協定がそれに次いだ。阪大との協定が西井先生の提案を契機としたのに対して、奈良女子大との協定は先方からの希望を受けてのものであった。これらの協定の締結は、学務委員会、研究科会議とも審議が順調に進んで一安心であったが、学位論文中の共著部分の扱いは難航した。学務委員会で相当慎重に審議して作られた原案に対して研究科会議で強い反対意見が出され、結局、その時は結論先送りとなったはずである。人環の間口の広さゆえであろうが、研究科全体に通じるルールを一律に定めるのがいかに難しいか、あらためて痛感せざるを得なかった。

京大退職後9年近く経過し、在職時の記憶は日に日に薄らいでいる。文中の誤りなどはご海容いただきたい。

京大初の寄附講座が拓いた健康長寿への道

家森　幸男（2001年退職）

基礎研究から世界研究へ

脳卒中は1960年代には、日本人の死因の第一位となり、加齢現象で避けられない病とみなされていた。その研究の為、京大医学部病理学教室で開発されたばかりの遺伝的に高血圧を発症するラットから、脳卒中を発症するモデルの開発には10年をかけた。実験を重ねて分かったのは、遺伝的に発症する脳卒中でさえ栄養で予防出来るという事実で、この成果を基に、WHO（世界保健機関）の専門委員会で国際共同研究を提案した。研究の為に必要な基金は、当時、経済大国になりつつあった日本で集めて欲しいとの要請を受け、2年をかけ全国30万人の方々の協力で100万ドルを集め、WHOに寄附（1985)、世界61地域での「循環器疾患と栄養・国際共同研究が開始出来た。

人々の善意の寄附で世界の為の研究を

この世界研究は、当時教授であった島根医大の病理学教室で開始したが、主要死因の脳卒中などの遺伝・環境因子の解析をして予防を目指す研究は、新しく文理・融合連携を基に創設された人間・環境学研究科で発展させることが可能となった。それは、この世界研究の為にWHO研究センターとして京大で最初の寄附講座“国際予防栄養医学講座”を認めて戴けたからである。予防の為には、薬より栄養が重要であるという私共の熱意に共鳴して善意の寄付（合計5億円）を7年に渡ってなされた大塚製薬の故大塚明彦社長には深甚の謝意を捧げたい。

若い研究者が世界に飛躍

この寄附講座が創設され、助教授1人、助手2人の方々が研究に従事出来たお蔭で、合計7人の研究者が新たに育ち、米国の大学を含め全員が大学教授や国立研究所（循環器センター、国際医療センター）の部長として現在大活躍しておられるのは真に喜ばしい。

24時間尿分析で分った健康長寿への道

30年以上かけたWHO研究で栄養には遺伝を超える、“ゲノムプラス”の疾患予防力のある事が証明された。丸一日の尿を簡易に採取し、栄養のバイオマーカーを分析し、日本人の世界一の平均寿命は、大豆と魚介類の摂取により、寿命に影響する心筋梗塞死が少ないからだが、この両方を世界一多く食べる日本人は、残念ながら食塩摂り過ぎの為高血圧が原因で脳卒中になり、いまだに寝たきり、認知症により健康寿命が平均寿命よりも10年も短いのが現状である。

人間・環境学研究科創設のお蔭で、研究者が育ち、国際研究が遂行出来、「適塩・和食」の健康長寿への道が拓かれた事を心から感謝したい。

4．論文等の題目一覧

(1) 卒業論文・卒業研究科目一覧
平成8年度

人間学科

阿　江　伸　也	企業活動　―投資活動と金融活動の関わりについて―
旭　　義　晴	京都における景観と開発
阿　部　大　輔	現代社会に於ける雇用形態の変化とその課題　―外部労働市場の整備について―
井　上　千　春	中国の朝鮮戦争参戦の要因とその背景
大　井　孝　信	『カイエ・デュ・シネマ』批判とアンリ・ジョルジュ・クルーゾー監督作品『密告』分析
大　橋　美　穂	清潔症候群
大　淵　和　憲	金子堅太郎「欧米議院制度取調巡回記」の研究
小　川　幸　夫	原子力行政のあり方
海　道　由　妃	大学進学に関する京大生の意識
北　　江利子	創造行為としての劇作　―アーサー・ミラーの『セールスマンの死』の場合
是　永　和　也	精神分析と科学に関する一考察
合　田　祐　三	1920年代不況を通して見た90年代　―鈴木商店倒産
榊　原　理　恵	地方自治体の環境影響評価条例：住民・行政・企業の制度に対する認識のギャップから明らかになること
坂　口　博　紀	ビデオゲーム論
塩　原　嘉　男	「性」の意味と意識
高　井　たかね	国民性から見た中国の外交政策
高　崎　正　有	ニクソン＝キッシンジャー外交の本質：アメリカ外交の「変革」
高　田　英　明	政治家としての高橋是清
多々良　一　郎	冷戦後のヨーロッパ安全保障体制に関する研究
谷　口　光太郎	国内避難民に対する救援活動
野　村　宗　平	労働者の引退過程における雇用の確保と所得保障
藤　村　佳　代	家族内殺人の精神分析的理解
松　永　　淳	「人格の多面性と自己実現をめぐる一考察」　―アイデンティティの探求という名の旅
村　山　貴　彦	ケネディ政権の外交　―危機をもたらしたもの、危機がもたらしたもの―
渡　邊　雅　之	NGO活動

国際文化学科

安　部　健二郎	V.M. ゴロヴニンの『日本幽囚記』における日本とヨーロッパ
井　上　実　緒	聴覚空間論　―経験に基づく空間記述のための一試論―
大　友　　文	民話におけるタブーとその侵犯　―ヨーロッパのメルヘン・伝説との比較から―

大　橋　　均	「学習塾は民間の教育を担えるのか」　―学習塾の現状と展望
坂　元　正　樹	感情表出の意味作用　―対人コミュニケーションにおける感情
仙　崎　裕　右	Old English “g”　―Mainly on the Palatalization（古英語における “g” について　―硬口蓋音化を中心に）
田　淵　敦　美	ホスピスの前に立ちはだかるもの
椿　谷　友　希	創られるエスニシティ　―アイリッシュ・アメリカンのアイデンティティの考察―
津　守　　亙	アメリカン・デモクラシーと現代合衆国における諸問題
中　畠　俊　彦	中国近世における史学思想の展開　―李贄『蔵書』を巡って―
藤　原　敬　介	エスペラントの受身についての一考察　前置詞 de と per の比較をめぐって
真　野　祐　子	ガブリエル・シャネルにおける女性の身体の解放
南　　秀　聡	バスクの孤立性と柔軟性
遊　間　あゆみ	教育の視点からみた社会化　―政治的・経済的要因の与える影響―
西　内　純　子	ロシア人にとってダーチャとはなにか？

基礎科学科

赤　澤　洋　樹	インターネットにおける情報発信と価値判断　―インターネットのメディアとしての特性から―
雨　森　賢　一	Lorentz 変換の下での Dirac 方程式の性質について
井　坂　信　彦	一次元写像力学系の分岐と普遍定数
一　宮　正　義	半導体 PbI_2 における励起子の 2 光子吸収
大　石　　創	非中性円柱電子プラズマの静電波固有振動に関する実験
岡　　定　紀	色知覚の階層的情報処理構造の研究
小　原　快　章	宇宙における粒子生成
川　口　昭　彦	電磁場の量子化と Casimir 効果
壇　上　　恵	障害をもった子どもにおけるパーソナリティの形成について
榊　原　明　弘	分散処理を目指した GUI による対話的な言語処理系
沢　　正　人	過疎地域活性化運動における人的ネットワークの拡大過程に関する考察
鈴　木　　良	$Pc(z) = Z^2+C$ の充填ジュリア集合の面積
関　谷　勇　司	GUI を装備した Lisp インタプリタの実装と応用
高　柳　　優	阪神大震災による被災分譲マンションの復興過程におけるコンフリクトの分析
田　中　大　介	コンピュータネットワーク上の情報セキュリティ
寺　島　茂　雄	愛着理論から見た青少年の恋愛態度
西　谷　昌　紀	Gödel の第一不完全性定理に関する考察
平　林　美　佐	青年期における自己イメージに関する一研究
廣　田　敦　信	非中性回転楕円体電子プラズマの固有振動および加熱の実験
藤　田　悦　央	半導体 PbI_2 における励起子の共鳴反射スペクトル
藤　田　志具麻	都市パターンの Grid Cell による図形的分析

松　岡　弥　生	線形縮小写像に対する Mandelbrot 型集合
村　上　正　行	インターネットにおける対話的教育環境の研究と開発
村　山　邦　彦	核磁気共鳴法による磁性体のスピンダイナミクスの研究　―ハルデンギャップ系反強磁性体における $Ni(C_2H_8N_2)_2NO_2ClO_4$ (NENP) における端スピン効果
森　本　　創	超対称量子力学と超対称性の破れについて
安　田　宜　仁	公開鍵暗号と素数判定法、および擬似素数について
山　口　和　宏	言語理解のメカニズム　―意味論的アプローチからの再考察
前　川　和　俊	多項式写像族 Z^d+C と Z^d+CZ の connectedness locus について

自然環境学科

有　島　康　夫	有機金属化合物とキノリニウム塩との反応における対アニオンの効果に関する研究
稲　葉　臣　哉	ミズキ科（サンシュユ）とウリノキ科（ウリノキ）の果皮にできる異形細胞の相同性の研究
大　石　哲　雄	非水溶液からの非晶質シリコンの電解析出に関する研究
大　倉　定　之	Ghana と Jamaica から分離された HTLV-1 株の遺伝子系統解析
岡　村　英　幸	ブナの虫えい群集の生態学的研究
木　下　紀　道	種々の溶媒環境下におけるニトロキシドフリーラジカルの高速回転ダイナミクス　―電子スピン共鳴法を用いた回転相関時間の評価
木　村　真　紀	エコツーリズムの考え方に基づく、西表島のツーリストの意識調査と古見のサキシマスオウノキ群落生態系の現状に関する研究
工　藤　浩　司	HIMU 玄武岩の化学的特徴　―斑晶輝石を用いた解析―
柴　田　晃　宏	小笠原における野生化セイヨウミツバチの生態
田　中　資　也	回転系における対流
佃　　誠　玄	農産物貿易の持続性に関する総合人間学的考察
西　村　洋　一	健康と運動
藤　井　信　彰	バナジウム酸化物系化合物の水熱合成と生成因子
藤　原　秀　樹	河口域の底生生物ヒモイカリナマコ類の分類と生態
松　田　友　彦	有機金属化合物を用いる不斉反応の開発に関する研究
三　好　ゆかり	肥満の診断と病態に関する研究　―体脂肪計とエルゴメーターを用いて―
安　原　二　良	Expression of Chicken Na^+/K^+ATPase Subunits in Transgenic *Drosophila melanogaster*: A model system for the study of protein sorting mechanisms（蛋白質の細胞内輸送機構研究におけるトランスジェニック＝キイロショウジョウバエの利用）
山　本　一　隆	能動喫煙、受動喫煙が脳波に及ぼす影響
横　山　慶　一	能動喫煙と受動喫煙における心臓自律神経系の動態
吉　村　成　弘	Ion-sensitive Mechanism of the Na^+/K^+-ATPase: Functional significance of the amino-terminal region（ナトリウムポンプのイオン感受性におけるアミノ末端領域の役割）
張　田　裕之助	マススペクトロメトリーによるスパッタ粒子の挙動解析

平成９年度

人間学科

油　木　元　彦	アメリカの対イラン政策の考察
池　淵　一　平	京都における建築物の高さと景観の問題について
池　邉　展　行	子供の発達のために現代の学校教育に対して家庭がはたす役割について
石　井　大　介	バックパッカーからみた観光都市京都
石　丸　弘　之	人間形成とコミュニケーションについて
伊　藤　宏　光	都市とその生活環境の整備について
上　場　啓　司	環境税　～その効果・実態および可能性～
牛　田　　宣	石川三四郎の思想　―ニヒリズム克服の可能性の一例―
牛　見　信　夫	日本型能力主義の現状とその問題点に関する考察
江　口　康　弘	趣味の終わり
大　木　響　子	フッサールにおける現象学的還元の意義
大　野　裕　之	チャップリン論　―「チャーリー」の誕生と死
城　井　　崇	自由と秩序、そして人間…　―21世紀の世界秩序のパラダイムを考える
小　原　丈　明	ツーリズムに関する地理学的考察　―岡山県におけるグリーンツーリズムの事例から―
櫻　木　達　也	日本の人口構造と少子化問題
進　藤　眞　人	巨大開発の民主的コントロール　―諫早湾干拓事業を例に―
菅　井　聡　子	都市遊歩空間の歴史と現在
千　田　順　司	損害賠償の経済分析
髙　野　育　哲	総合安全保障戦略の再検討
高　村　光　雄	長期雇用システム下の労働組合組織と経営管理
長　畑　健　作	日本映画史における「鞍馬天狗」の再考察
野　中　清　史	都市問題から見た日本
初　田　繁　紀	高齢者雇用と年金問題
服　部　泰　幸	日本人と将棋　―ゲームと人間の関係をめぐる一考察―
早　川　　洋	学生新聞の研究
林　　信　長	ドゥルーズ＝ガタリとラカン　―ラカン理論の内的転倒による「アンチ・オイディプス」理解の試み―
日比野　葉　子	ユーゴ解体の序曲　―危機の80年代
星　子　敏　郎	企業名変更の意義について
望　月　卓　也	京大生のマンガの読み方
山　本　英　雄	中国の民主化問題
安　田　　毅	デカルトの形而上学が前提としたもの
筏　　万州彦	芸術面からの都市開発の可能性　―京都における活動を事例として―

上　中　智　之	ニーチェの思想について　―現代日本の漫画における考察―
大　利　一　郎	様式市場の形態の変化とその影響
甲　斐　史　香	地域自治会を中心とした市民主体のまちづくりのあり方について　―京都市上京区春日学区の事例を中心に―
河　島　泰　斗	構造物のデザインと地域構造のかかわりについて
木　南　陽　介	環境問題におけるNPOの重要性　―現状分析と今後の課題―
桑　原　壽　己	ドゥルーズのベルクソン論についての一考察
佐々木　　一也	少年非行の現状と家庭の役割
鈴　木　貴　彦	ヴィトゲンシュタインの「論理哲学論考」における独我者
戸　田　剛　文	バークリーにおける人間の知識の対象の問題
西　田　健　祐	我が国の高速道路投資の社会経済評価
平　井　純　一	地域研究：タンザニア　―開発の可能性
藤　江　成　夫	ベルクソンの記憶論
八津川　博　史	内戦への国際社会の取り組み　―国連のソマリアでの活動を事例として―
山　本　　稔	第三国の一方的行為による経済制裁措置の合法性　―第三国（米・日）によって行われた対イラク経済制裁の合法性について―

国際文化学科

甘　蔗　勝　宏	懐中時計がもたらした市民社会への影響とピューリタニズム　―Samuel Pepys の日記に見られる対価としての時間―
石　井　大　輔	社会における女性の位置付けとガブリエル・シャネルによる「服飾革命」
板　垣　知　子	「延喜式」における鳥獣の奉献に関する考察
伊　藤　徹　也	東欧ユダヤ人の中の革命家たち　―ローザ・ルクセンブルグに即して
上　野　みな子	精神障害者と社会の境界に関する文化人類学的考察　―小規模作業所のエスノグラフィー
氏　家　正　人	アンドロイドと共同体　―ディックの小説世界の現象学的論考
小　田　　涼	フランス語のコピュラ文についての一考察　―Ma plus belle histoire d'amour, c'est vous.
木　村　浩　之	A Study on the Peculiarity of "The Cask of Amontillado"（"The Cask of Amontillado" の特異性についての考察）
高　橋　茂　幸	19世紀パリのファンタスマゴリー
中　西　公　子	Information Status and Connective Function in English Inversion（英語倒置文における情報地位と連結機能）
長　原　優　子	Japanese Americans' Assimilation to the Society: World War Ⅱ and the Transformation of Ethnicity（日系アメリカ人のアメリカ社会への適応を巡って　―第二次世界大戦とエスニシテイーの変化）
春　成　　学	日本ザルとヒトの共生について　―猿害の文化人類学的研究―
日　髙　真　帆	叶わぬ救済　―救済を求める罪深き行程としての『ドリアン・グレイの肖像』
堀　田　修　二	映画と記号　―「アトラクションのモンタージュ」の諸問題について―
本　常　　環	フランス語付加形容詞の語順について　―談話構造上の視点による分析
森　　あ　い	〈性〉にどう対抗するか　―〈女性性器〉を出発点として―

ROMELIZA PITA VILLEGAS
Marital Satisfaction in Cross-Cultural Marriages（異文化間における結婚満足感）

歌　友　純　「てんかん発作自己統制の重要性」

遠　藤　克　哉　フルトヴェングラーにとっての音楽

大　本　愛　弓　尚侍について（『源氏物語』の尚侍観）

工　藤　貴　史　日常会話における協調と失敗

白　髭　圭次郎　『フランケンシュタイン』の恐怖の分析

関　根　真　保　港町の精神史　―ユダヤ思想と日本・アジア

堀　川　佳　子　宗教的治療における心身の変容　～高知県石峰寺でのフィールドワークより～

基礎科学科

淺　原　正　幸　項書き換え系の処理系の実装と応用

足　立　　渡　自己相以集合の Hausdorff 測度について

阿津川　智　洋　明るさ知覚の視環境輝度分布依存性に関する研究

池　田　竜　太　非中性電子プラズマの軸対称静電波固有振動の観測

石　井　敬　子　感情的発話の理解：「声の調子の優位性」

稲　田　龍　成　空間周波数変化率の奥行き知覚に与える影響

梅　村　舞　子　アラベスクの立体的考察

惠　濃　信　也　阪神大震災で被災した分譲マンションの復興過程

大　倉　得　史　自我同一性の機制についての研究　―新たな理論的枠組みの確立に向けて―

岡　原　良　和　言語理解のための情報コーディングモデル

上　口　高　司　コミュニケーションにおけるイメージと言語

北　川　慎　二　現代社会における説得術

河　野　靖　子　分散型データーベースおよびデータからの知識獲得

佐　谷　　恭　日本人の自己批判的傾向：文化心理学的検討

鈴　木　岳　大　障害者に対する大学生の態度について

田　中　浩　也　建築形態の 4 次元デジタルデザインに関する研究

田　村　岳　洋　間接的発話行為の機能論的研究

常　包　昌　宏　高齢化社会における医療を軸とした地域づくり

轉法輪　浩　昭　マルチエージェント環境における交渉モデル

中　溝　　聡　恒星の内部構造と星団の年令決定法

西　口　貴　史　日本人の自己向上動機づけに関する実証研究

藤　田　都志行　パルス法核磁気共鳴による二重スピン鎖系 NH_4CuCl_3 のスピンダイナミックスの研究

宮　本　百　合　社会的関係性のあり方：周囲に影響を与えるか、周囲に合わせるか

森　本　佳　延　画像への情報の埋め込み方法の研究

山　田　晶　夫　微分方程式系による流行現象の解析

頼　木　大　地	交友関係といじめに対する態度についての研究
梅　野　淳　史	述語論理の完全性について
岡　村　浩　明	「動く鏡」による粒子生成
佐　藤　　亮	量子力学における経路積分と観測理論について
橘　　英　輔	高分子結晶化の速度論的解析
田　中　麻　純	散乱した吸着点による 2 次元ランダムウォークの遮蔽効果
深　井　隆　至	実2次体の類数について
堀　田　　聡	情報化社会におけるパスワード・セキュリティ

自然環境学科

浅　沼　直　樹	炭素循環から見る地球温暖化現象　―人間活動の起源 CO_2 濃度収支―
池　田　武　史	京都大学ボート部の新人期におけるトレーニング効果について
石　塚　佳奈子	喫煙の糖代謝に及ぼす影響
植　田　慎　吾	沈み込み帯モデルの検証のための流体実験とその妥当性
大　島　行　雄	孤立状態におけるカルボニル分子の電子状態とその置換基効果の研究
大　園　哲　也	準安定相 $Rb_2V_4O_{11}$ の生成と結晶構造
岡　田　覚　丈	視床下部スライス温度受容ニューロンの c-Fos 発現
木　邑　奈　美	水圏における物質循環　―沈降粒子による除去と輸送―
向　田　　卓	光増幅器としての Yb，Pr　―共ドープテルライトガラスの光物性
酒　井　尚　子	酵素を用いる分子変換に関する研究
志　原　伸　幸	糖尿病性腎症の成因について
内　貴　章　世	Pollination system and evolution of dioecy from distyly in *Mussaenda parviflora*（Rubiaceae）（コンロンカ（アカネ科）の送粉様式と二型花柱性から雌雄異種性への進化）
中　村　忠　貴	銅イオン触媒下における亜硫酸イオンの酸素酸化プロセス
華　岡　光　正	コムギ葉緑体 DNA の部分配列決定（12.6kbp）と RNA ポリメラーゼ σ 因子の大量発現の試み
稗　田　美　香	The construction of polyclonal antibodies against muscarinic acetylcholine receptors（アゴニストに誘導される細胞膜受容体エンドサイトーシスの分子機構の解明）
藤　井　芳　和	禁煙による心臓自律神経活動動態および呼吸循環器系システムの機能的変化
松　田　純　治	Effects of Hindlimb Suspension and Neurotoxicant on Soleus and Bulbocavernosus Muscles in Rats（ラットのヒラメ筋および球海綿体筋におよぼす後肢懸垂ならびに神経毒の影響）
光　田　展　隆	Sequencing and structural analysis of the Arabidopsis thaliana H^+-PPase gene : The first step to knock out the specific gene in plant（シロイヌナズナ H^+-PPase 遺伝子の塩基配列解読および構造解析　―植物におけるジーンターゲッティング法確立に向けて―）
宮　脇　ゆう子	運動技能の習熟過程に関する生理学的解析
山　本　美香子	アミミドロ遊走子に特異的に発現するタンパク質の解析
吉　村　幸　浩	糖尿病ラットにおける自律神経障害の検討
来　田　宣　幸	筋出力と節電図活動の関係
飯　澤　　功	パソコンを用いたネットワーク上の 3 次元数値データ可視化技術に関する研究

栄　木　利　文	体育とは何か、比較体育論的考察
圓　戸　恭　子	ヒキガエルの年齢査定
坂　下　克　宏	運動能力と選択反応時間の関係について
仲　　光　則	目視観察による奈良公園のニホンジカ Cervus Nippon の秋及び初冬の食性

平成10年度

人間学科

青　木　　一	平成10年厚生省年金制度改正案の検討と今後の年金制度改革のあり方
赤　池　知　生	RV ユーザーのエコ意識
今　井　隆　介	「他者」の探検・採集と植民地経営　―「エイリアン」新解釈の試み
植　村　哲　士	炭素税導入時に予想される問題点についての一考察
岡　田　理　樹	兵庫県三木市における第三セクター鉄道の存立基盤
尾　﨑　純　子	子どもが求める父親
鍵　本　　優	90年代のクラブ・ミュージックについての1考察　―細野晴臣のアンビエント・ミュージックを中心に―
金　子　宗　徳	金子彌平　―ある明治ナショナリストの軌跡―
加　納　裕　子	気候変動枠組み条約京都議定書における森林の取り扱い　―地球温暖化防止における森林の位置づけに関する考察―
川　口　美　紀	私のペニス羨望　―精神分析と女とがとりうる関係について
河　野　辰　巳	近代国家における社会経済統計の成立　―特に各国の人口センサスを中心にして―
桐　原　浩　子	甲府市を中心とする生活圏の拡大と市町村合併
小　林　英　仁	ヴィットゲンシュタインにおける深さの所在　―ネミからベルテーンへ
薦　田　　淳	アメリカの雇用差別に対する取り組み
佐々木　雅　也	電子ネットワーク・コミュニケーション　―つながりの感覚―
篠　原　雅　武	ドゥルーズ的問題論
杉　浦　直　洋	CS デジタル放送の未来
瀬　川　大　樹	核兵器使用に関する国際司法裁判所勧告意見の再検討
竹　中　智　子	現代における「私塾」　―松下政経塾を中心に―
田　中　宏　明	地域銀行によるベンチャーファイナンスの必要性とその手段
谷　口　卓　也	産廃の不法投棄ゼロへ向けて
檀　上　伸　郎	オープン・ソース・ソフトウェアの文化史
中　馬　憲　朗	戦後国際秩序の模索と英米関係　1919-1924
寺　尾　待　子	イラン・イスラーム共和国の外交政策
中　野　大　輔	千里ニュータウンの交通計画とその実状とのずれ
西　村　元　一	日米安全保障同盟の改変の動きに伴う問題点
百　田　牧　人	在来馬の存続と活用：特に医学的療法としての乗馬に注目して
山　口　　浩	全体論宣言　―分析と総合の観点から

和田山　竜　一　　日本の土地税制

KANAI, JUAN MIGUEL
「世界都市・関西」と大阪　―世界都市論でみた大阪市の都市政策

新　井　泰　広　　「スタートレック」の面白さに関する考察

岩　瀬　　聡　　近年の中台関係

喜友名　　裕　　公債発行による将来負担について

黒　見　周　平　　湾岸戦争における空爆の法的根拠　―多国籍軍が採用した軍事目標主義原則の検討―

小　高　美　咲　　香港のアクション映画における人物像と思想

佐々江　陽　子　　これまでの音楽の歩みと音楽療法

瀬戸山　　健　　韓国の民主化

西　田　充　邦　　アチソンの中国政策　―与えられなかった政府承認をめぐって

根　本　真　一　　戦後日本経済と金融構造

野　崎　伸　一　　日本の公的年金の現状と課題

本　澤　圭　介　　アメリカの食糧戦略とその対外的影響

浅　井　未　倫　　冷戦の終焉と中東のパワーポリティクス

大　田　英　昭　　形而上学批判としての『日本イデオロギー論』

岡　田　茂　彦　　マルクスの宗教批判　―ニヒリズムという意識―

嶋　本　慶　太　　H.アーレントの判断力理論　―カント「判断力批判」との関係において―

庭　本　秀一郎　　日本への愛　～出光思想の淵源～

国際文化学科

新　井　淳　一　　フィクションとしての奇形

石　関　　亮　　1960年代におけるモードの多様化とオートクチュールの変革

佐々木　　亮　　サッカーと記号　―サッカーを記号学的にみる―

柴　　那　典　　南北朝から隋唐における亀茲と中原王朝の音楽文化の相互交流に関する考察

新　熊　有加里　　「食われる心臓」から「痛ましき心・心臓」へ　―コンラート・フォン・ヴェルツブルグ『心の臓の物語』の一解釈

神　保　　諭　　戦後アメリカにおけるケインズ主義の受容と性格

杉　森　雅　美　　An Essay Concening *The Sound and The Fury* : The Compson's Understanding（『響きと怒り』　―コンプソン家の人々による現実の理解）

鈴　木　良　隆　　明末遼東における軍閥李成梁について

滝　本　浩　明　　ねぶた祭と日本の民間信仰　―その行事と伝説―

坪　井　伸　樹　　初期レヴィナスの時間イメージについて　～『実存から実存者へ』と『時間と他者』を中心に～

堂　畑　雄　一　　何がロングハウスを成り立たせてきたか　―イバン族の地域社会―

内　藤　尚　志　　自我－国民－歴史　―方法としての「インドネシア文学」―

縄　田　玲　子　　茶会記考　―四大茶会記にみられる表具について―

早　崎　永　治　　日常生活における「参加」と「統合」　―国民社会主義への基底からの『支持』の理解

林　　謙　志	現代における正義の意義　―ロールズを中心に
藤　原　辰　史	ナチスの内地植民政策
松　浦　哲　郎	世界遺産のある村　―伝統の保存と住民のアイデンティティとの関わりについて―
井　関　光　晴	三元里闘争とその社会的背景
宮　脇　基　良	中世西ヨーロッパにおける肉欲の罪について
吉　田　治　夫	妖怪受容の歴史と問題点　―明治から現代まで
駒　田　大　輔	ラフガディオ・ハーン「日本海の浜辺で」の箱庭世界
近　藤　宏　美	インドネシアにおける観光活動と伝統文化の創造について
章　　偉	日本語の中の漢字

基礎科学科

秋　山　茂　雄	自己高揚的動機づけと自己向上的動機づけに関する実験
江　井　美也子	Exact Real Arithematic の計算機上での実現
大　庭　真　人	ゲシュタルト性からみたイディオムの認知的考察
金　　賢　得	Large and small time-scale friction in sheared granular materials（ずりを加えた粉体層における長時間・短時間スケールの摩擦変動）
栗　田　泰　生	相対論的量子力学における水素原子のエネルギー準位とその周辺
坂　上　貴　洋	NMR による分子スピンの量子トンネル効果の研究
佐　藤　恵　子	高次元立方体による建築的デジタルデザインの研究
下　田　悠　平	通信ネットワークでの顔文字の使用状況とその影響について
恒　川　直　樹	保育におけるコミュニケーションのパラドックス性　―ダブル・バインド理論による捉え直し
徳　永　俊太郎	NGO から地元住民への農業技術の伝播　―ネパール・ムスタン地区におけるフィールド研究
徳　永　裕　己	量子コンピュータのアルゴリズムの計算量
中　間　由　起	青年期における感性的経験の消化に関する研究
平　井　太　郎	注意と感情　―ストループ課題による検討
松　本　　徹	モンテカルロ法の応用例
三　宅　陽一郎	Lie 群の軌道分解
村　瀬　さおり	英語圏幼児におけるゼロ主語という文法特性について
内　山　博　之	核磁気共鳴による二重スピン鎖系の量子多体効果の研究
奥　田　有　一	かごめ格子反強磁性体候補物質 $Rb_2Ni_3S_4$ の磁性と NMR
小佐野　祐　吾	高分子による乱流抑制の効果
栗　田　周　子	ある二歳児の生活において親しみのある玩具が果たす役割に関する研究
白　井　俊　道	重力レンズ効果を利用したハッブル定数の決定法について
田　嶋　重　人	メタファーとメトニミーに関する認知言語学的考察
波々伯部　宏彦	宗教的態度の深化の過程について　―回心をめぐる考察―
三　輪　　信	運動競技空間の平面パターンに関する研究

矢ヶ﨑　　響　　CdI_2 における間接励起子によるエネルギー移動

山　本　真理子　　超対称性理論とその拡張の可能性について

CHULEEPORN PORNRATTANASORON
A Study on Image Binarization Technigues（画像の二値化についての研究）

遠　藤　章　洋　　軽度の知的障害を持つ A の妹、S との関係から

真　砂　輝　男　　不完全性定理

自然環境学科

安　藤　創　一　　中心視野と周辺視野における反応時間の比較

石　井　　直　　高等植物のプラスチド遺伝子の人為的発現制御技術の開発を目指して

上　田　順　子　　アミミドロ遊走子の網状群体形成過程における糖タンパク質と 34KDa タンパク質の解析

植　前　康　平　　キラル分子触媒の合成と利用に関しての研究

氏　家　　拓　　糖尿病性腎症における Hepatocyte Growth Factor（HGF）の役割について

大　島　明　子　　有機常磁性液晶の合成

片　山　淳　史　　結晶中ラジカルの電子スピン緩和に関する研究

木　本　行　俊　　キブシ（*Stachyurus praecox* Sieb. & Zucc.）の形態学的研究

齋　藤　武　士　　由布－鶴見火山群の池代火砕流に伴う火砕物の残留磁化

齋　藤　布美子　　新規有機金属錯体の合成と蛍光特性に関する研究

佐々木　秀　樹　　心臓自律神経活動動態と脳波の α 波との関連

繁　宮　悠　介　　カノコガイ類における色彩多型と繁殖様式

枚　山　友　茂　　ミミズハゼ属魚類の分子系統と間隙生活への適応

中　田　淳　子　　地球規模の炭素循環における森林の役割と大陸地形

仲　野　純　章　　銅イオン存在下における亜硫酸イオンの酸素酸化反応機構の研究

橋　本　健　志　　Tenotomy と模擬無重力による骨格筋萎縮の組織化学的解析

畑　　啓　生　　イバラカンザシの色彩多型

林　　英　明　　希土類含有透明結晶化ガラスの作製と蛍光特性

福　田　　斎　　ミトコンドリア DNA によるウスバシロチョウおよびヒメウスバシロチョウの分子系統解析

森　阪　匡　通　　父島と御蔵島におけるハンドウイルカのホイッスル音の比較

山　口　久美子　　構造類似ホストのつくる結晶包接空間の制御に関する研究

山　崎　幸　一　　銅系酸化物の水熱合成

好　野　奈美子　　浮草類の生態学的研究

渡　邊　か　よ　　西表島におけるニッパヤシ *Nypa fruticans* Wurmb. の生育の現状とその遺伝的変異

相　川　　創　　磁場中の対流と水銀対流の可視化

笹　原　智　生　　マイクロフロー系におけるオルトリン酸の連続観測に向けて

武　田　暢　生　　岩屑流の研究の展望について

田　吹　貴　史　　ラット脊髄後根神経節の温受容ニューロンのパッチクランプ解析

平成11年度

人間学科

荒　井　政　徳	ビール会社の環境対策の比較・分析
安　　泰　勲	自由権規約第12条４項「自由に戻る権利」の意義
上　田　浩　喜	愛知県三河地方における地域構造
大　岸　亨　啓	「平成不況」　〜消費からアプローチ
岡　部　宗　吉	ヴィンチェンツオ・ガリレイ、音楽を科学する
小　玉　嗣　人	観光と市況とにおける明治二十八年の歴史的意義についての考察　―第四回内勧業博覧会と平安遷都千百年紀年祭の開催をめぐって―
合　屋　正　虎	「演技的人生のすすめ」　―役割とキャラクターの関係について―
佐久間　秀　謙	中曽根政治の検証　―ゆらぐ世界と日本の中で―
四　宮　知江子	美術史の方法論
新　城　麗　子	現代日本のインテリアに見られる色彩感覚
鈴　木　禎　明	行政の広域化　―市町村合併の限界と自治体間の連携の可能性―
辰　野　博　一	電力負荷平準化と電気料金制度
長　澤　俊　和	職能資格制度および職能給の今後の行方
牧　野　直　史	WTO における EC バナナ輸入制限事件の評価
松　川　充　康	精神障害者の自己決定権と法制度
松　田　めぐみ	中国の対外政策について　―ポスト冷戦期を中心に
森　本　哲　郎	京都市内における中小小売店の現状に関する地域構造論的研究
山　中　大　輔	ハイデガー「存在と時間」に於ける死の思想
梅　津　直　明	農産物の産地直送における現状と課題　―山形県庄内地方を事例として―
橘　川　協　平	現代学生の旅行意識
久　世　龍一郎	アメリカの北朝鮮政策
久保田　　崇	環境問題と個人の成長
阪　本　英　二	学校空間の体験のされ方とその教育的意義についての現象学的アプローチによる考察
高　谷　将　徳	長江中流域の河岸都市の発展に関する地理学的研究（湖北省・四川省を中心に）
中　川　由　宇	日本と韓国の企業集団
中　山　晋　介	石炭・LNG 火力の発電単価
長　友　文　史	記号の習得に関する一試論　―ドゥルーズの美学思想―
林　　慎一郎	小劇場演劇について　―京都の小劇場演劇―
林　　奈　々	「衝動買い」における消費の興奮
福　田　浩　司	理想と現実　―国策映画会社・満州映画協会―
藤　谷　旬　生	サーフィン論
山　崎　和　雄	株式公開を焦点としたベンチャー企業の成長可能性

山　火　真　穂　　モーリス・ペジャールのバレエ　―初期作品についての一考察―

DE VERA, MARIA ANNA LILIA
The Dramaturgy of Tennessee Willlam's *A Streetcar Named Desire*（テネシー・ウィリアムズの『欲望という名の電車』の劇作術）

江　頭　千　絵　　神戸空港建設問題に関する経過分析

田　村　拓　之　　ニーチェにおける「ディオニュソス的」の概念と芸術

中　　治　人　　ハリウッド映画における古典とマニエリスム　―スクリューボール・コメディーを中心にして―

細　川　圭　太　　危機管理とアメリカ外交

前　田　　亮　　サッカーの社会学

清　水　　祈　　ヒッチコック映画におけるしぐさ、ありきたりの事柄

前　田　　信　　映画美術と人生劇場「シェルブールの雨傘」のセット論

国際文化学科

今　岡　聖　暁　　フットボールとそれによって呼び覚まされた英国らしさ

宇　都　浩一郎　　リアリティの在りか　―日常会話と演技の会話―

小　杉　俊　介　　「新新宗教」の成立にマスメディアが与えた影響について

柴　田　大　輔　　『政基公旅引付』にみる村の交渉と自立

清水谷　吉　郎　　インセスト・タブーの意味と現代におけるインセスト

常　法　　建　　もののけ　―『源氏物語』論をめざして―

杉　政　周　之　　『狂乱のオルランド』における女性像

田　原　　陽　　『水滸伝』における梁山泊の強さと最期に関する考察

中　村　恒　志　　自転車と自転車競技　―日本とヨーロッパの文化比較―

畑　　百合子　　水道化以前における生活用水の利用　―滋賀県高島町畑地区の事例から―

羽　生　祥　子　　An Essay concerning Toni Morison's Beloved : The Bonds of Black Slaves（黒人奴隷男女に見られる連帯意識）

藤　田　亜　矢　　フランス語における職種名詞の改革について

安　野　正　樹　　棚田の保全に対する地元の視点からの一考察　―大津市仰木地区の事例から―

TOCAN　VLAD　　神仏習合の初期的現象

伊　藤　理　恵　　音楽と人間行為　―M．ウェーバーの音楽社会学をもとに―

尾　堂　美　穂　　食文化からみたフランス　―フランスパンの社会史―

左　古　将　規　　マチャ＝オモロの村社会における相互扶助の組織　―エチオピア西部、ジンマ地方におけるシャニとラガの研究―

立　石　純　也　　大平天国の律について　―とくに『賊情彙纂』にみえる条文を中心に―

松　村　圭一郎　　共同放牧をめぐる資源利用と土地所有　―沖縄県・黒島の二つの組合牧場の事例から―

望　月　幸　治　　エチオピアにおけるメディアの受容　―〈ビデオ・ペット〉のフィールドワークを通して―

丹　羽　純　子　　古代人の夢　―平安時代末期の古記録から―

橋　本　純　平　　多（他）言語性のダイナミクス　―J・コジンスキー『異端の島』とA・クリストフ『悪童日記』比較研究―

基礎科学科

大　西　恭　一	カイヤニエロ型神経方程式の連続化
阿　部　雄　介	過疎地域における住民自治力の自発的成長システム　―鳥取県八頭郡智頭町における集落活性化運動―
石　田　　靖	日本における暗黙の自己愛着
岩　橋　照　美	多項式写像から生ずるカントール集合とそのハウスドルフ次元
梅　田　真紀子	高分子液体薄膜の dewetting（非ぬれ）
黒　田　嘉　宏	画像に対してデータを埋め込む手法の研究
近　藤　祐　次	言語による笑いのメカニズム
後　藤　真一郎	マクスウェルの悪魔について
嶋　田　有希子	障害児と音楽コミュニケーション
高　橋　　亮	多種の local ring の性質に関する Nagata Criterion（各種の局所環の性質に関する永田判定法）
谷　内　勇　介	図―地分節の脳イメージング法による解析
坪　井　香代子	きょうだい関係と性格形成について
鶴　谷　祥　太	青年期の友人関係における葛藤について
手　島　　寛	奥行き知覚における単眼性・両眼性手がかりの統合過程に関する研究
成　田　泰　士	視覚誘発電位による運動視情報処理の並列経路に関する研究
早　瀬　賢　一	箱型ポテンシャルにおけるトンネル効果の量子波動関数の伏見表示
東　村　知　子	療育施設に通う幼児の生活世界　―身体論的考察
樋　口　久美子	重大な経験により揺さぶられた自我の再構成　―価値体系の変化を通して―
福　本　圭　祐	平方剰余の相互法則の証明とその応用
細　川　隆　史	弱い重力レンズ効果
宮　澤　純　一	日本人における他者行動推論様式　―コレスポンデンスバイアスの消失―
宮　野　喜　和	近視の矯正に関する調査研究
三　好　理　香	脳機能部位データベースの構築
阿　部　一　彦	日本語教育への言語学的アプローチ　―主題性をめぐる問題を中心に―
飯　田　信　介	「公設・住民営」の地域医療システム構築過程に関する研究　―京都府美山町における試み―
加　納　良　行	ワイドギャップ半導体 GaN における発光スペクトルの励起強度依存性
川　中　儀太郎	自由市場経済における生産関数モデルによる合理的選択の可能性
竹　居　正　登	Percolation on The Square Lattice （２次元正方格子上のパーコレーション）
長谷川　　勝	Secure Shell (SSH) ポートフォワーディング機能におけるアクセス制御機能の拡張
藤　林　　潤	ガウス和とヤコビ和の数論への応用
渡　邉　　亮	ワイドギャップ半導体 GaN における発光スペクトルの温度変化
荒　牧　英　治	自然言語理解のアルゴリズムの手続き的アプローチ
高　橋　裕　明	市場経済における生産者行動モデルに基く生産関数と費用関数の双対性

自然環境学科

青　木　美穂子	本学学生における自律神経活動に関与する遺伝子に関する研究
青　木　靖　仁	Study on the excited state of isolated azabenzenes（孤立状態における窒素複素環式化合物の励起状態の研究）
今　井　必　生	免疫系から神経系への情報伝達機構
植　村　知　博	Expression of syntaxin homologue, AtVAM3p, in enlarging cells in *Arabidopsis thaliana*（シロイヌナズナ液胞形成遺伝子 *AtVAM3* の伸長成長への関与）
長　瀬　美　香	本学学生における肥満関連遺伝子に関する研究
蝦　名　晋　一	西表島に生育する絶滅危惧植物ニッパヤシ（Nypa fruticans wurmb.）の生態、遺伝的多様性及び保全
大　庭　良　介	DNA relaxation promoted via dual function of initiator protein（複製開始タンパク質による DNA の構造変化：AFMを用いた解析）
荻　田　佳　孝	Search for the Inter- and Intra-Subunit Interaction within the Na^+ / K^+ ATPase（酵母系ツーハイブリッド法を用いたナトリウムポンプにおける分子内相互作用の探索）
河　目　直　之	単結晶 X 線構造改造解析による構造未知単結晶の構造解析
北　田　　亮	振動刺激による運動錯覚の研究
小　西　嘉　典	ドロップジャンプのバイオメカニクス研究：着地動作に着目して
須　田　恵理子	岩屑なだれの流動プロセス　―動圧モデルと St.Helens 山・御獄山への適用―
高　井　祐　介	マングローブ植物の花蜜分泌構造
髙　松　美　和	Aerobic Exercise and Cardiovascular Response to Stress（運動習慣と神経的ストレス反応）
田　熊　邦　郎	電子スピン共鳴から見る分子の内部運動
土　井　健太郎	岩手山における融雪型火山泥流の対策の検討
中　川　政　治	絶滅危惧植物アマミヒイラギモチ（Ilex dimorphopylla）の保全に関する基礎研究
中　熊　大　英	イリジウム錯体触媒を用いるアルキンのヒドロアミノ化に関する研究
中　田　真　紀	$ZnCl_2$-NaCl 系溶融塩を用いた活性ニッケルの作成
梨　本　洋　志	アオキの解剖学的研究
西　川　和　香	Cell Body Size and Oxidative Enzyme Activity of Motoneurons at the Dorsolateral Region of the Ventral Horn in Rat Spinal Cords After Spaceflight and Recovery（宇宙飛行およびその後の回復期がラット脊髄の前角外側後部ニューロンの細胞体サイズと酸化系酵素活性におよぼす影響）
布　居　久美子	膵灌流を用いたインスリン分泌機構の研究
野　田　邦　雄	二酸化窒素の固定と固相反応への応用
坂　東　君　香	ソメワケハモグリミバエの生態と潜孔様式
堀　　勉	酸化第一銅の形状を異にする結晶の水熱合成とその性質
森　本　将　史	酵素を利用した光学活性とヒドロキシルアミンの合成
山　田　　雪	アミミドロの網状群体形成過程における細胞接着部位に局在する分子および 34kDa タンパク質の解析
脇　谷　草一郎	水圏における物質除掃を担うマンガン酸化物の構造と機能
越　智　正　樹	オヒルギの花に寄生するハマキガの生態とそのオヒルギの繁殖に与える影響
門　田　　宏	運動と性格に関する研究　―動きの解析と心理テストの関係について―

宮　本　直　和　　一側肢の筋力発揮が引き起こす反対側肢における随伴動作

齋　藤　貴　裕　　粉体上を滑走する円盤の滑走形態に関する考察

山　西　　修　　京都府下におけるモグラ亜科動物の存在記録

清　水　知　広　　京大生のライフスタイルについて

平成12年度

人間学科

石　川　雄　久　　近代京都の都市計画と街路樹

石　谷　治　寛　　19世紀フランスの近代化とクロード・モネ

上　尾　真　道　　ジョン・ケージの沈黙、死と快の交錯点について

植　野　仙　経　　離人症の成因についての精神分析にもとづく研究

川　村　晃　英　　空間的相互作用モデルに関する一考察

木　下　貴　文　　社会保障の二つの財源について　―社会保障方式と税方式の比較・検討

木　原　　真　　地方都市広島における交通に関する一考察　―新交通システムアストラムラインを中心として―

小　菅　一　徳　　松岡外交と日米交渉

西　願　公　登　　「社会問題に対する主体的組織活動」の当事者的意義

柴　田　悠　道　　感覚的ボクシング論　―ボクシングにおける動機の社会学的・人間学的考察

下　川　こころ　　不登校をめぐる二つの世界　―学校とフリースクール―

世　羅　元　保　　特撮とヒーローについて

高　間　圭　介　　日本における総合的な湿地保全行政の創設に向けて

滝　川　聡　史　　過疎地域の現状と地域政策　―島根県を事例として―

竹　田　佳　彦　　対人地雷禁止条約にみる非政府組織の貢献と問題点

橋　　由美子　　変わる新卒一括採用の現状

角　田　　文　　自由権規約第14条における公正な裁判

手　塚　太　郎　　第三世界における人口移動に関する地理学的分析　―トルコを事例として―

中　西　雅　子　　現代家族の親子関係

中　野　晶　子　　パリ平和会議における自決原則の適用　―委任統治制度対象地域に関する考察

中　野　元　雄　　ロック「市民政府論」における所有論

長　友　宏　達　　日米投資摩擦

西　下　陽　子　　ボランティアについて　―参加者にとってボランティアとはどのような体験であるのか―

野　田　善　之　　経済安定化における財政の役割

橋　本　慎　也　　ODAと（社会）環境破壊　―円借款開発プロジェクトの意思決定及び実施体制に対する考察―

原　田　千　春　　地域振興策としてのグリーン・ツーリズム

日向寺　みづほ　　ヒューム『人間本性論』における外的世界の問題について

平　田　良　治　　市町村合併と地方分権　―地方分権とリンクした市町村合併の必要性―

福　岡　静　哉　Rising China : China's Threat and the Rugged Way toward Democracy（中国の台頭　―中国脅威論と民主化への険しき道）

福　田　孝　一　聴覚障害者の「情報アクセス権」確立運動

細　川　隆　正　自治体政策評価のネクストステップ　―コミュニケーションツールとして機能させるために―

松　野　さやか　カール・ヤスパースにおける『限界状況』の思想について

元　木　　晃　地方財政の展開と問題　―地方分権一括法を端緒にして―

山　口　　尚　スピノザの『エチカ』における自由の問題

吉　田　新　也　地方自治体における公会計改革について

LAIREL, MA. ISABEL MERCADO
21st Century Philippine - Japanese Relations : On to Greater Heights（21世紀の日比関係　―より高い次元をめざして）

相　原　　祐　カントの時間論について

麻　田　　弦　スティーヴ・ライヒの音楽における具体音の特徴と意義

朝　日　弘　行　北朝鮮の主体思想と外交

市　岡　実　幸　京城の空間変容

岡　野　由紀子　西陣地域における町家型借家の動向について

柿　花　章　宏　Wilson's Diplomacy and the Mood : is it still now living?

川　崎　修　良　反復の遊戯

權　田　容　子　脱魔術化のアポリア　―ホルクハイマー・アドルノとウェーバーとの二つの視点から―

秩　父　啓　輔　フロイトの著作の英訳版における歪曲とその影響

堤　　辰　彰　人間存在から見た世界秩序

勅使川原　　学　「遊び」の意味と自己の存在の不合理について

野　村　夕葵子　環境会計の現状と課題

丸　山　元　気　資産と負債の総合的リスク管理序論　―オフバランス会計による銀行金利リスクマネージメントから―

横　山　泰　之　1993年からの日本における格闘技ブームの考察

PORTEOUS, JAMES ELLIOTT
東ティモールにおける住民投票時に起きた暴動の背景及びオーストラリア・ニュージーランドの反応

小　島　恵美子　現代社会におけるペット飼育　―主体と対象の関係についての考察―

平　澤　　望　カント『純粋理性批判』における超越論的観念性について

水　田　可奈子　資本主義の広告術

佐々木 ダニエル 良英
瀬戸内海沿岸の港町における地域構造の変化と動向　―室津を事例に―

国際文化学科

渡　邉　　慶　The Regional Variation of Wakayama Emigrants in Early Meiji（明治期和歌山県出移民における地域性）

麻　生　奈津子　現代フランス語の動詞時制の機能論的研究

五十嵐　聖士郎　都市の神社が担う役割について

上　岡　圭　吾	娯楽とスリル　スポーツ観戦とギャンブルを中心に
川　辺　麻希子	グリム童話における森と他界
黒　田　嘉　彰	ハンガーストライカーは何を目指したのか　―IRA 服役囚のイギリス政府に対する挑戦―
澤　田　裕　子	日本古代における恩赦の政治的意義
綱　島　　謙	日本古代の運上物輸送と安全確保策
林　　由　紀	A Derivational Approach to there and Other Expletives（there とその他の虚辞についての派生論的研究）
原　田　史　博	ルートヴィヒ・クラーゲスと筆跡学　―筆跡学においてリズムが果たす役割とその思想的背景―
福　澤　　進	コロンブスの探し求めたアジアの楽園
藤　田　麻　衣	パリにおける広場の表象
松　居　奈　都	他者としての沖縄　―異なるものに目を向けるということ―
松　山　　司	イギリス植民地支配がインド社会に与えた影響　～19世紀農村の変化を通じて～
水　野　史　土	The Syntax of Modality（モダリティの統語論）
飯　島　　健	郷土食の流通変化に関する文化人類学的研究　―島根県東部にみられる「ダキズシ」の事例から―
窪　田　恭　子	街と音　音環境のいくつかの場面を辿る
重　田　真　希	スポーツの人類学
森　　俊　樹	学生の環境活動の意味　～関わる者の視点から～
安　池　威　志	リプセットの例外論の視点とその妥当性を探る
吉　岡　雅　之	国民国家論再考
河　合　俊　明	ウクライナの民族問題
高　見　　誠	英語受動態における情報構造とその流れ
中　塚　奈　緒	オーストラリア・アボリジニーの点描画について
橋　本　秀　一	ヘンリー・ジェイムズのストラテジー　―『鳩の翼』論

基礎科学科

秋　枝　千　絵	幸福感と文化　―感情経験からの検証―
宇田川　敦　史	インターネット社会における情報の身体化
加　藤　英　明	地域発・社会システムの「伝播」過程　「ひまわりサービス」を事例として
川　村　　匡	文化と知覚：「線と枠」図形を用いた検討
小　林　　達	ウェブのユーザビリティに関する諸考察
竹　本　尚　正	広告コミュニケーション　～関係付け概念からの広告再考～
日比野　愛　子	バイオテクノロジーの社会的受容に関する国際比較研究　―新聞記事の分析を通じて―
福　島　和　将	ネットワーク社会の問題点　―デジタルデバイドとメディアリテラシー―
福　水　隆　夫	白金抵抗型走査熱顕微鏡による高分子結晶の観察
藤　岡　真　生	コミュニケーション・トラブルの回避に向けて　～電子メールとメーリングリストの相互比較から～
藤　原　康　之	金融派生商品の価格付け理論

前　島　貴　史	EPR 相関
松　田　晶　子	濃淡画像における人間の目の抽出法
松　本　寛　道	組織内外の情報の流れ
三　村　千　尋	科学における真理と客観性について　～クーンのパラダイム論を中心に～
森　岡　大　智	小説の地と会話文に対するテクスト言語学的アプローチ　～登場人物への Reading Response に与えるテクスト配列順序の影響を中心に～
山　尾　裕　美	ポリエチレンテレフタレートにおける構造形成
山　本　謙一郎	運動知覚過程の fMRI による解析
米　田　隼　人	NMR によるナノスケール分子磁性体 V_{15} のスピンダイナミクスの研究
金　丸　敏　幸	言語習得についての理論　～言語獲得研究の認知言語学からの見直し
佐　野　光　昭	感情的情報についての選択課題を用いた検討
芝　野　健　一	旅における青年の自己形成について
廣　瀬　千　尋	「中山間地域と都市部の交流事業」　―鳥取県智頭町新田集落と大阪いずみ市民生活共同組合の交流―
狩　野　禎　宏	音韻構造と音楽の相互関係に関する日英語比較研究
下　庄　秀　生	２次元多項式のジュリア集合
藤　本　康　仁	データフローグラフエディタによるビジュアルプログラミング
江　頭　建　哉	非侵襲的脳測定法による主観的輪郭線知覚過程の解析
竹　内　雅　樹	超関数に対する局所消滅定理
米　島　淳　介	アイデンティティー時間性／歴史性

自然環境学科

赤　尾　雄一郎	Comparison of the Response to Spaceflight and Recovery on Cell Body Size and Oxidative Enzyme Activity of Motoneurons in Different Portions of the Dorsolateral Region of the Rat Spinal Cord（宇宙飛行およびその後の回復期がラット脊髄外側後部の異なる部位に分布する運動ニューロンの細胞体サイズおよび酸化系酵素活性におよぼす影響）
安　藤　秀　信	Functional role of a putative chromatin remodeling complex, CHD1, in *Drosophila melanogaster*.（ショウジョウバエクロマチン再構築因子の機能解析）
伊　熊　直　彦	キラルなニトロキシドラジカルの合成と性質
市　川　陽　平	キシレノールオレンジを用いた色素増感型太陽電池の研究
井　出　裕　介	内分泌撹乱化学物質（環境ホルモン）の膵インスリン分泌への影響
井　上　　渉	発熱時にプロスタグランジンE合成酵素は脳血管内皮細胞に発現する
江　波　和　彦	Analysis of nuclear localizing proteins using monoclonal antibodies（モノクローナル抗体を用いた核内分子の探索とその機能解析）
尾　関　尚　宏	有機イリジウム錯体を用いた新しい触媒反応系の開発
北　村　尚　斗	リン酸塩系固体電解質におけるプロトン伝導
佐々木　淳　也	陸水における微量元素分布の地域比較研究　―樹脂濃縮を併用する微量元素の同時定量法の確立―
鈴　木　菜緒子	α2B アドレナリン受容体遺伝子変異と代謝疾患の関連についての検討
多　門　啓　子	膵ランゲルハンス島におけるニコチン受容体の発現とインスリン分泌との関連についての検討

堤　千絵	ハマボッス（Lysinachia mauritiana）の南西諸島における地域的分化
能田洋平	フェノール類の抗酸化作用およびそれを利用した新規スピントラップ剤のESRによる研究
橋本敏宏	経頭蓋磁気刺激を用いた反応課題中の皮質脊髄路の興奮性変化の解析
福田淳子	大型植食動物の摂食がハイイヌガヤの生育に与える影響
正村祐介	Analysis of higher-order structure of Escherichia coli genome by using atomic force microscopy（原子間力顕微鏡を用いた大腸菌ゲノムの高次構造解析）
町田弘明	プロスタグランディン E_2 は EP3 受容体を介して末梢冷細胞に選択的に作用する
宮澤洋晃	CH基をCF基に置換することが結晶構造と熱的安定性に与える影響
村宮正修	Er^{3+}含有ビスマス酸化物ガラスの発光特性
養父昌平	The Analysis on Human Voluntary Equibrium Maintenannce（人間における随意的平衡感覚の解析）
山口幸治	Hemodynamic Responses to Smoking（喫煙時における循環応答）
池田　健	指タッピング運動のリズム形成とその運動中断時間の変化
碓井隆行	ハナイカダの解剖学的研究
金澤英樹	分子軌道法による炭酸の挙動に関する研究
篠塚　淳	The Assessment of Recommended Exercise Intensity Determined by Karvonen Formula in Young Sedentary Men.（運動習慣の無い人に対する運動処方について　―カルボーネンの式による強度設定の検討―）
新田統昭	前頭連合野に於ける情報処理について
小松冬彦	筋活動と消費エネルギーの相関について
前野　純	Molecular biological identification of the mycosymbiont in ectomycorrhiz as colonizing mole latrines, with reference to genetic variations among related *Hebeloma* species（モグラの排泄所跡に増殖した外生菌根の共生圏の分子生物学的同定と、近似する *Hebeloma* 種の間の遺伝的変異）

平成13年度

人間学科

今井貴予	プロジェクト評価におけるリスクヘッジ手法の検証　～リアルオプション・アプローチの適用～
大城てぃいだ	沖縄の生活空間における井泉の考察
小粥千寿	地方中心都市の機能と都市圏の地域構造　―浜松地域を事例として―
片岡孝介	付随的審査と憲法保障の関係について
小林洋文	微兵制を維持するドイツ、廃止したフランス
斎藤博史	高坂正堯の国際政治思想
坂本里沙	夏目漱石における「自己本位」と「則天去私」理解の試み　―J. Lacan の理論に依拠して―
清水道成	地域産業政策の今後のあり方
城月　周	IWC 決議は国際捕鯨取締条約上の権利を規制しうるのかについて　―調査捕鯨自粛要請決議を例に―
鈴木宏典	19世紀末帝国主義とアメリカ
田中綾音	パレスチナ政策におけるイギリス外交の再評価　1914～1948
田中裕士	現代芸術と現代の崇高　―宮島達男《Mega Death》研究

谷　口　直　彦　　排出権オプション取引　―その先駆的な取組の意義と可能性

千々岩　　妙　　「華夷秩序」と「西洋近代国際秩序」の接触とその波紋

柘　植　朋　紘　　アメリカのアフガニスタン攻撃の正当性と武器使用問題

徳　成　　滋　　TRIPs 協定で認められる締約国の協定違反　～エイズ治療薬を題材にして～

内　等　すずえ　　モントリオール議定書における多数国間基金の成立要因

渚　　み　を　　平時における人道に対する罪の成立可能性

橋　本　直　子　　京都市市街地における緑地環境に関する考察　―都市公園を中心に―

長谷川　和　樹　　アメリカ極東政策の問題点　―石井ランシング協定を中心として―

畠　中　奏　子　　「小京都」における水辺景観を活かしたまちづくりの可能性　―水の小京都・郡上八幡の事例を通して―

服　部　有　希　　ジャコメッティの作品における他者

福　田　敬　史　　陪審制度についての研究

堀　瀬　　靖　　銀行　規制産業から競争産業へ

松　枝　啓　至　　『省察』における＜確実性＞について

松　本　愛　子　　「聴方」　―奥野庄太郎の理論と実践

見　山　晋　一　　医療制度とその問題点　―医薬品費を契機として―

村　田　正太郎　　シェタイナー教育とその思想

籔　田　有紀子　　ジョージ・オーウェルの植民地観と大英帝国

弓　場　直　子　　日本の行政評価制度改革の必要性とその在り方　～イギリス VFM 監査に学ぶ～

脇　木　恒一郎　　京阪沿線における都市形成と人口移動・人口流動　―大阪大都市圏のセクター性との関わりにおいて―

阿　部　歩　未　　摂食障害の心理に関する精神分析的一考察　―母娘関係と女性性とをめぐって―

石　川　健一郎　　居合道の社会学的考察

浦　野　　敦　　長野冬季五輪に伴う地域・施設整備とその後の展開

大　野　史　郎　　転移から考える自閉症の主観世界と治療への展望

軽　井　晴　美　　今日の母親と、その母親を取り巻く育児情報（主に育児雑誌）に関する一考察

川　本　琢　也　　損害保険業界における改革

西　門　正　聡　　オートバイの反社会性

藤　浪　恵　介　　わが国の企業年金制度の構造と変遷　―「リスク」は薬―

山　下　　薫　　環境問題の本質的解決を目指した学びのあり方

和　田　　浩　　芸術文化創造の場＜ミニシアター＞　―映画と社会との架け橋として

梅　津　岳　城　　芸術作品の受容

葛　谷　敦　史　　精神分析による貨幣の考察

小　林　幸　帆　　日本アマチュアスポーツの崩壊　―日本とドイツにおけるジャンプ競技を通じて

後　藤　亮　平　　古典的ハリウッド・ミュージカル映画研究　―1940年代後半から50年代の MGM 作品を中心に

竹　鼻　直　行　　近代国家論

野　田　謙　介　　＜同化＞と＜異化＞について

花　田　直　樹	幕張新都心開発に関する一考察
藤　本　賢　吾	『スターウォーズ』旧3部作から新3部作へ　～「現代の神話」への考察
堀　内　　献	アメリカの大学学部課程の問題点からみる日米大学の共通点と相違点
渡　邊　貴　宏	1960～1970年代におけるベルナルド・ベルトルッチの政治的メロドラマ映画について
赤　井　あずみ	1920年代から30年代にかけてピカソの作品に関する一考察
寄　田　純　生	地上波民放テレビニュース番組の映像テクニック分析
佐々木　端　士	「生活」と「協力」　野村芳兵衛における「生きる力」の涵養について
椹　木　健　一	若年層における無業者・フリーターの増加
村　松　　周	労使間における支配・従属関係

国際文化学科

岡　田　崇　志	安曇川流域におけるシコブチ神の分布と特徴
加　藤　　幹	ミシェル・フーコー「性の歴史」研究　―主体論の見地から―
小　西　賢　吾	観光土産物が表示するイメージとその成り立ち　―京都の事例から―
田　中　克　尚	「作業所的」文化・生・存在論　―知的障害者・自閉症者の社会から―
田　村　うらら	振売りのエスノグラフィー　～何が残り、変容し、滅びゆくのか～
恒　木　健太郎	他所者（よそもの）と無記名証券による隠匿　―ゾンバルトのユダヤ人論を巡る一考察―
友　納　仁　子	アイリッシュコミュニティに見る、移民のアメリカナイゼーション　―アルフレッド・スミスが大統領候補になるまで―
坂　東　亮　太	インフラ・ライフラインの不平等是正と環境問題に立ち向かえる自由な社会の考察
松　下　　晶	ボンゾ・ドッグ・バンドに見られるダダ的態度の考察
村　橋　　勳	カジキ・海人（ウミンチュ）　―もう一つの「老人と海」を描く―
石　岡　　学	「ドラえもん」に対するイメージの形成および変遷に関する一考察
川　元　博　行	日本古代の民衆と仏教　～仏教受容期における死者の行方について～
島　田　具　子	記憶という名のナショナリズム　―旧ユーゴスラヴィア紛争長期化の要因とは？―
白　木　健　介	日本におけるトリックスター　―トリックスターの定義とその現代的意義
徳　田　めぐみ	ブルガリアにおける死者供養のエスノグラフィー　―ポメン（記憶）の表象としての新聞記事と街頭ポスターの事例から―
道　次　　督	アルコールの薬効と社会における需要性
杉　野　拓　司	「倫敦塔」論　―塔の内と外と―

基礎科学科

青　木　　順	非中性プラズマの実験的研究
犬　飼　久美子	グローバルモーション検出に関与する脳活動性部位　―fMRI による解析―
井　上　　大	なぜ物語に「引き込まれる」のか　―読者による「意味構成」、およびそれを支える比喩の理解について―
大　澤　政　生	コンピュータによる楽譜の自動認識の研究

大嶋元気	大学生の就職活動の実態　―就職活動をめぐる心の動き―
岡橋一輝	Tricolour Marking の正当性保証から Incremental GC を構成する試み
久保佳弥子	文体論の方法
栗橋哲郎	カルノーサイクル使わないエントロピーの導出
杉原佳次	濃淡画像中の物体へのデータハイディング
髙尾知則	stream derivation による微分方程式を解くアルゴリズム及びその関数型言語による実装
竹本聖隆	VEP による中間特徴抽出機構の特性解析
崔　春浩	コード・スイッチングに対する認知言語学的解釈　～「LS：言語の安定状態」批判～
鳥居勇人	Sarkovskii の定理について
中邨勇一	変分原理と測地線
仲本正訓	バイオテクノロジーの社会的受容の国際比較研究　―フォーカス・グループメソッドと意識調査の分析を通じて―
馬場英俊	Hamming Code について（ハミング符号について）
福住英美子	並列論理型言語の実行の視覚化
舩越智之	中心力場のもとでの運動について
前田青広	フィリングイン過程の fMRI による研究
松野　響	メタコントラストマスキングに関する脳内視覚情報処理過程の研究
和田由可	成功と失敗がもたらす動機づけ　―北米と日本における検証―
太田裕之	多ヘッドに拡張されたストリーム通信及びそれを用いた実数計算の実装
岡　正人	音楽聴取としてのサンプリング　―創造と受容のあいだ―
金指光宏	過疎地域における集落自治システムとそのネットワーキング　―鳥取県智頭町「ゼロ分のイチ村おこし運動」
川西陽一	Perfect Codes（完全符号）
塩田浩貴	大学留年における青年の心理
田崎泰如	IT 業界における知的財産権の開放戦略が社会に与える影響について　―関与者の行動選択肢に着目して
塚崎崇史	認知プロセスと分析的・包括的知覚　―画像判断課題を用いて―
山口公男	コーポラティブ・ハウスにおける新しいコミュニティの可能性
山瀬正覚	音声情報処理研究の動向と今後の展望　―音声対話システムに着目して
横田慎介	日本における態度の極化現象　―関係性と態度―
曽我之泰	非中性プラズマ物性の実験的研究
柴田　悠	「サポート校」における生徒－教師間コミュニケーションに関する研究

自然環境学科

安達竜太郎	ラット視床下部から急性単離した温・冷感受性ニューロンの解析
井口　亮	毅の形態が類似した、深海性エゾバイ科エゾバイ属 3 タイプの識別

稲　葉　大　祐	Study on the Lower Excited States of Aromatic Carbonyl Molecules in Supersonic Jets（超高速ジェット中での芳香族カルボニル化合物低励起状態の研究）
内　田　真由美	酵素反応を用いる立体選択的物質変換
梅　谷　和　弘	メソスケール渦の発達についての基礎的研究
大　石　明　美	二次元結晶化に向けた H^+ 輸送性ピロフォスファターゼの昆虫細胞 Sf9 における発現
嘉手苅　祐　二	電子スピン共鳴による励起三重項状態の研究
川　島　正次郎	雑種形成を通してみた絶滅危惧植物（IA類）ネブネダイオウ（*Rumex nepalensis* var. *Andreanus* Makino）の保全について
河　原　秀　樹	水溶液を反応場とする遷移金属酸化物の合成と評価
喜　多　倫　子	Effects of Aging on Bone Mineral Density in Senescence Accelerated Mice P6（老化促進モデルマウス（SAMP6）の骨密度に及ぼす加齢の影響）
木　村　哲　也	Changes in Neuromuscular Transmission and Contractile Properties Studied by Simultaneous Electromyogram and Mechanomyogram Changes during Experimentally-induced Hypothermia（筋電図、筋音図に見られる筋温度低下時の神経・筋伝達機構及び筋収縮特性の変化）
許　田　重　治	南西諸島におけるソテツ（Cycas revoluta Thunb.)の分布域拡大及び遺伝的分化について
髙　坂　恭　司	Effects of Smoking upon Cardiac Autonomic Nervous System Activity and Immune Response（喫煙時における免疫及び心臓自律神経活動の評価）
國　部　雅　大	球技経験がキー押し及びサッケード運動における周辺視野反応時間に与える影響
佐　藤　　綾	Spatial and stage-specific expression pattern of the Na/K ATPase subunits in early development of Drosophila melanogaster（ショウジョウバエ　Na/K ATPase α, β サブユニットアイソフォームの時期特異的発現と組織分布）
武　井　智　彦	Biphasic profiles of cortico-spinal excitability during Ready-go reaction tasks : a transcranial magnetic stimulation analysis in human（Ready-go 反応課題における皮質脊髄路の興奮性の2相性変化）
山　下　　潤	テニスサービスのバイオメカニクスにおける文献研究
田　中　周　作	マウスLangerinホモログのクローニングとその機能解析
出　縄　政　嗣	Bioinformatics of P-type ATPases: Evolutionaty Implication from Comparative Genomics（P-型ATPアーゼのバイオインフォマティクス：比較ゲノム学から見た進化的な意義）
楢　木　祐　介	水圏における酸化還元活性元素の循環に関する研究
平　川　律　子	有機ケイ素化合物を用いる新反応に関する研究
円　山　由　郷	Analysis of chromatic remodeling by atomic force microscopy（原子間力顕微鏡によるクロマチンリモデリングの解析）
渡　邊　　渉	絶滅危惧植物リュウキュウアセビの保全生物学的研究
鹿　倉　洋　介	熊野酸性岩類中部および南部の残留磁化の再検討
松　浦　直　毅	ニホンザルにおけるオス・メス間のつきあいの移り変わり　―繁殖相手から伴食相手へ―
中　島　徳　郎	手首運動の視覚映像の観察が観察者の手首運動の制御に及ぼす影響
村　尾　英　享	部分溶融状態の岩石のレオロジーの解明に向けた混相体の物性の計測

平成14年度

人間学科

浅　田　将　明	インターネットの匿名性　～２ちゃんねるを事例とした社会学的考察～
阿　部　康　幸	行政主体概念における一考察

伊藤　潤	廃棄物処理のあり方について　―福岡県の一般廃棄物処理を事例として―
漆尾貴義	仕事について
大野直樹	国際関係史としての第一次ポーランド分割
小原広太郎	第一次世界大戦　―間接アプローチ戦略の妥当性に関する考察―
河村浩之	ロック『統治二論』における歴史と普遍の問題
川元康一	デフレ解消策としてのインフレ・ターゲティング政策の可能性　～合理的な期待形成を前提として～
神田恵理子	政府開発援助の日米比較：評価制度を中心として
作道英文	会社批判を行った労働者の処遇　―会社批判の正当性の判断基準―
島田昌典	カルタヘナ議定書における AIA 手続きの実効的実施の可能性
鈴木祐一郎	雇用・失業統計からみた日本の雇用構造
勢島奏子	信仰プロセスの生成　―LDS 信者を事例に―
髙森　純	1861～63年の対英外交に見られるリンカーンのリーダーシップ　―主として1861年トレント号事件と1862年第 2 回ブル・ランの戦い前後の危機において―
西村麻里	現代日本の親子関係についての考察　―マザコンという語に注目して―
原田丈裕	自立支援事業の円滑な運営のために　―市民意識の改革を目指して―
船本佳代	アノミーについて
堀場貴博	雇用情勢の変化と雇用行政への課題　―労働移動の円滑化を中心に―
前山田健一	現代における主婦の社会活動と自己実現の関係
丸川智生	職業教育について
三島武之介	小ピット外交の特徴と戦後構想　―1791～1805年―
水野映美	越境環境損害の私人間解決の促進　―外交的保護の事例としてのトレイル・スメルター事件の再評価―
森　有正	UK レンダリング産業の経済史　―資源ガバナンスとしての産業の変遷―
森澤徹郎	1930年代の通貨圏と現在の地域統合との類比から見た地域通貨の意義と背景
森田由美子	ヨーロッパ人権条約における「環境権」の位置づけ　―条約8条の解釈と Lopez-Ostra v. Spain 事件を中心に―
諸田　岳	人間関係がダブルバインドの成立に与える影響
矢野　寿	哲学所感　―講義『日本の哲学の在り処』をもとに―
吉水真人	カントにおける根元悪
赤崎陽子	フランソワ・トリュフォー研究　―シネアスト的シネフィルによる「手」の演出
五十嵐　誠	メルロ＝ポンティの知覚論
上原健一	住民参加の地域づくりに関する一考察　―滋賀県における NPO 法人の活動を中心に―
貝井英則	青年期における対人恐怖に関する一青年の考察
河崎洋子	「『この国のかたち』の再構築」の考察
黒田友哉	アメリカの欧州統合観とその関与　―マーシャル・プラン、NATO、シューマン・プラン―
爾　知成	金融自由化のインパクトと金融政策　～バブル期の日本経済を通して
多田　淳	国鉄に見る公共性の考察

都　築　正　宏	京町屋利用保全の動きに見る行政と民間の可能性
中　島　克　樹	東京株式市場株価指数時系列データを用いた代表的な資産評価理論の検証と指数値変動特性の分析
槇　本　英　之	神田孝平の研究と明治初期自由主義について
森　崎　志　麻	近代オランダの住宅改革　多極化社会（verzuiling）と住宅組合（woningbouwvereenigingen）に関する考察
安　田　小梨江	現場から読みとる「しつけ」の変容
小山内　　隆	視線とイメージ　―エドワード・ヤン『ヤンヤン夏の思い出』
金　子　慎　市	琵琶湖疎水の開発とその意義に関する地理学的研究　―親水空間という視点を中心に―
野　崎　知　和	大正デモクラシーと地方自治制度
比　嘉　康　人	現代日本の合法ドラッグ使用者について　―その意識・使用形態―
菊　池　美奈子	文明論における「ルネサンス」の概念から見たアメリカ民主主義
濱　田　正　宏	小津安二郎の映画における生活空間
中　村　征　人	同人誌即売会及びその周辺のサブカルチャー（オタク文化）に関する研究と考察

国際文化学科

中　井　三　恵	現代日本における恋愛と性についての一考察
浅　見　直　希	現代の日本マンガにおけるキリスト教文化の受容について
有　元　志　保	Fiona Macleod という虚構　―William Sharp が用いた異名の意義
岩　田　　馨	《愛するものを書くために》　～ロラン・バルトと《書く行為》との関係
榎　木　　奨	フランソワー・ギゾーと自由主義
榎　本　大　祐	EU におけるイギリスのアイデンティティ
大　矢　真　弓	A 助産院にみる産みの文化
神　尾　尚　馨	無意識の中のカミ　―日本人の山の神、田の神信仰を探る―
木　綿　那　菜	エリザベス女王のイメージ戦略とスペンサー『妖精の女王』　～『妖精の女王』がエリザベス崇拝にいかにかかわったか～
阪　上　晶　子	「選択的中絶における女性の自己決定」
清　家　陽　平	銃犯罪社会アメリカからの脱却
田　中　直　子	世相を映すメルヘン　―明治から現代日本まで―
中　野　優　子	明治30年代における女性美の変質　―雑誌『女学世界』を中心に―
橋　口　恵理加	フォードとディズニーのノスタルジア　―「古き良きアメリカ」社会と大衆消費社会の接合の試み―
林　　大　輔	御嶽山をめぐる御嶽教と木曽地域の関係　―登拝と御神火祭より見る―
春　名　健　志	子どもの社会化と家族の役割
比　嘉　夏　子	屠畜からみた沖縄の肉食文化
古　川　聖　也	身体技法論再考　―武道の技法から見た身体技法の習熟過程について―
松　原　万　容	se faire / laisser + Vinf . 構文について

松　本　健　一　Santiago’s Combative Nature　—A Study of Hemingway's Idea of Stoicism（サンティアゴの闘争性　—ヘミングウェイのストイシズムについての考察）

山　下　大　輔　ガブリエル・シャネル論　—ファッションとリゾートの関連を中心に—

山　田　有　佳　棚田の「守り」をめぐるとまどいと合意形成　—滋賀県大津市仰木地区における圃場整備事業の過程より—

RIO MARIA MAJELLA BARDOS
Japan’s Cultural Exports : Karaoke, Anime and Philippine Culture（日本の文化輸出　—カラオケ、アニメとフィリピンの文化）

安　藝　英里子　二つの島の知恵　—屋久島・ガジュツと口永良部島の食生活—

草　野　康　弘　「バックパッカーとは何か」

坂　本　由　紀　差別をめぐる表徴の受容と除去　—ホルモンとニンニクを通して語られる在日韓国・朝鮮人

笹　本　康太郎　80年代テレビ CM 論　～作られた「能動的読解」～

志　鎌　さやか　サーラ・スレーリ「肉のない日」における食物と身体について

山　田　裕　英　イスラム移民に対するアメリカ、フランス

川　上　陽　子　「発話行為の倫理・序」

木　村　有紀子　現代フランス語における不定名詞句の左方遊離構文について　—遊離要素の限定性を中心に—

谷　口　太　規　「Activism－政治的実践の可能性」

加　藤　　亘　元代の官吏登用制度

青　木　　一　宋代科挙に於ける制度上の理念と運営上の実態について

木　村　　穣　「公的領域」をジェンダー化する　～試論・ホモソシャリティと法言説

基礎科学科

秋　元　頼　孝　CMC における制約の解放についての考察

石　井　信一郎　文化と認知的不協和　—自由選択による態度の極化現象—

大　西　将　徳　量子常誘電体における格子ダイナミクス

岡　田　　潤　有限群の表現

小　野　航　平　アクティブネットワークを用いた IPv6 エニーキャストの実現

佐　藤　博　厚　流体での Hawking 輻射

関　谷　圭　子　職業観から見た就職活動

仲　間　大　輔　ソーシャルサポートに関する日米比較研究　—システムとしての文化の働き—

中　本　拓　也　ブラックショールズモデルを用いた金融商品の価格付け理論

花　田　尚　之　単眼性奥行き空間における仮現運動速度知覚に関する研究

林　　豊　de Rham（ドラム）コホモロジーとベクトルバンドルの特性類

番　　浩　志　形態知覚過程の中間段階におけるヒト大脳皮質の fMRI による研究

日比野　千賀子　ヒト大脳皮質における色対比効果の fMRI による解析

広　川　朋　也　カラー画像における人物の顔の検出

福　本　勇　樹　Pricing Kernel とデリバティブの価格

松　田　一　秀	行列式多様体と冪零多様体
光　藤　哲　也	一次元非対称単純排他過程の交通流への応用
森　　晃　浩	住民参加による新しい地域医療システムの構築　―京都市小野郷における試み―
柳　田　宗　成	コミュニケーションツールとしての映像と言語
山　嵜　章　裕	手話言語の認知言語学的考察　―ダイクシスを中心に―
山　本　哲　也	両眼立対視が幾何学的錯視に及ぼす影響
渡　邉　正　規	市民ボランティアによる教育的試みの意味と可能性
小　鷹　研　理	聴覚特性を考慮した音響圧縮アルゴリズム
佐　伯　信　雄	4次元オブジェクトの CG アニメーションによる研究
頼　藤　　龍	笑いの本質について、および一般に芸術における創造性について
林　　健太郎	ベルヌーイ数と Zagier（ザギエ）級数

自然環境学科

池　田　　竜	固液混合体の流動特性測定実験
磯　野　友　美	シロイヌナズナの転写因子 AtCAMTA5 の DNA 結合領域の特定および CTMTA ファミリーの発現パターンの解析
上　田　　輔	シロイヌナズナ t-SNARE 分子の細胞内局在の系統的解析
大　元　文　香	膜タンパクの分子進化に基づく真核生物の起源についての一考察　～トランスポーター・SNARE タンパク質を題材に～
梶　丸　　岳	屋久島におけるサツキからオタクミツツジへの渓流環境に対する適応
北　辻　千　展	Cp^*Ir 錯体触媒を用いたアルコールを水素源とするキノリン類の移動水素化反応
小　山　真　史	スパッタ法による ZrO_2-Al_2O_3 系非晶質膜の作製とヤング率の測定
近　藤　秀　怜	$NdBO_3$ の高温プロトン伝導
坂　口　怜　子	色素増感型太陽電池の抵抗挙動とその原因
佐　野　奈緒子	クラシックバレエの立体姿勢における身体重心動揺の制御
鈴　村　綾　子	モリアオガエルの生態に関する研究
関　　優　子	前頭連合野の電気刺激に対する視床内側部ニューロンの応答
高　橋　　隼	京都市の気温分布に関する調査研究
茶　谷　俊　介	光学活性ニトロキシドスピンラベ剤の合成
塚　本　直　樹	超分子デンドリマーの開発の試み
仲　澤　剛　史	イサザの諸形質の長期的変動から見た琵琶湖生態系
西　河　　潤	細菌内毒素による $sPLA_2$-ⅡA の脳内発現部位
芳　賀　美緒子	製紙スラッジ焼却灰からのゼオライト合成における珪素成分の影響
細　　将　貴	分子系統から見たハモグリバエ科の植物利用様式の進化
町　田　裕　史	植物色素定量による水圏生物量の推定
宮　本　美　徳	神戸市東部での重力異常による地下構造推定

山　崎　裕　輔	含窒素芳香環への触媒的炭素基導入法の開拓に関する研究
山　田　陽　介	BIA を用いた運動選手の体肢筋体積の推定
渡　邉　岳　夫	Effets of Different Exercise Order on Physiological Responses （運動負荷過程の違いが及ぼす生理学的影響）
青　木　一　茂	The Relationship Between Musle Oxygenation Capacity and EMG Fatigue Threshold （筋酸素化容量と筋電図疲労閾値との関係）
久　澤　啓　子	酸性溶液を用いた製紙スラッジ焼却灰からの元素の選択的分離
辻　　俊　輔	Static Stretching effect during Interval Exercise （インターバル運動休息期におけるストレッチングの効果）
辻　口　大　樹	文献データベースを用いた生命科学研究の動向解析
照　沼　幸　恵	環太平洋地域におけるオウレン属 Coptis の系統進化
松　田　　彩	等間隔指タッピングと心臓の拍動リズムの関連性
山　崎　裕　史	広帯域光源のための Cr ドープ新規酸化物ガラスの研究
谷　本　一　平	貴船川における河川利用の実態　―特に川床の営業とキブネダイオウの保全との関わりについて―
平　林　泰　幸	Mn-formazan 錯体の合成と物性

平成 15 年度

人間学科

中　田　吉　弘	カントにおける道徳観に関する考察
渡　邉　浩　一	「超越論的」と「経験的」　～『純粋理性批判』における「能力」について～
佐　藤　真　澄	現代日本の親子関係
髙　木　夏　子	フリーターの社会学的考察　～「やりたいこと」と社会構造の共犯関係～
髙　須　宏　二	現代日本社会の時間意識についての試論
豊　田　崇　宏	サド侯爵と創作活動　～倒錯と創造性の観点から見たサドの作品の評価～
林　　一　喜	結婚と離婚に関する考察　～人はなぜ結婚し離婚するのか　精神分析理論に依拠して～
川　嵜　正　典	セルフヘルプグループにおける関わりの諸相と自己変容のメカニズム
二　見　　亮	人の死はどうあるべきか
大　迫　直　志	ヴィジュアルカルチャーとしてのサッカー
須　賀　睦　美	明治期における「ミュージアム」と「文化遺産」
松　岡　哲　平	ヴィークル・家族・スペクタクル　―スティーブン・スピルバーグ映画試論―
大久保　　渉	物語の構造美　―虚構と果無さ―
白　石　貴　裕	ヴァーチャルリアリティと芸術
堀　江　亮　二	デヴィッド・リンチ監督『イレイザーヘッド』の映画テクスト分析
生　方　麻　理	人の空間認識に関する研究　―山岳信仰と校歌にみる群馬県の山―
辰　巳　唯　人	甲子園における戦前期郊外住宅地の変容過程　―住宅地イメージとの関連性を中心に―
石　間　大　輔	国内裁判所による人権条約の解釈・適用　―裁判所は規約人権委員会の見解等を考慮できるか―
大　竹　玲　未	ヘルマン・ヘラーにおける世論概念　―政府・国家・社会と世論の所在―

金　田　健太郎　戦後フランスにおける外交政策について　―ヨーロッパ統合構想と近代化の関係を中心に―

北　川　雅　子　ルイ14世時代における同盟の変化

小　松　智沙子　白村江の戦い

関　　大　輔　安全保障理事会の権限と対イラク経済制裁

髙　橋　修　平　銀行の資産選択行動と金融政策　―貨幣供給者としての銀行と情報生産者としての銀行―

武　地　健　太　社会的責任投資の観点からの企業の環境社会報告

立　花　憲　治　メディアと民衆の関係　―日本の新聞紙から見るメディアの性質とその考察

田　中　美奈子　持続可能な消費社会モデル　～ブランド志向と共創社会～

戸　田　真　史　日本における外国人労働者政策の現状と展望

永　田　史　彦　就業規則を中心とした労働条件変更法理

中　永　淳　也　90年代における選挙制度改革と政治的コミュニケーションの維持

中　村　周　太　青森県「政策マーケティングシステム」にみるこれからの自治体行政のあり方

野　津　一　樹　重回帰、共分散構造分析による Image Value Network モデルとそこから得られる経営への示唆

濱　口　勝　匡　アメリカにおける ODA 評価方法の推移　―Logical Framework から Results Framework へ―

三　輪　恵　利　老人医療費抑制に向けて

森　田　泰　彰　湾岸戦争と日本外交　―吉田ドクトリンとその拘束

山　内　詞保子　国際水路の衡平利用原則の内容および越境汚染防止義務との関係について

横　川　　歩　NATOのユーゴ空爆の合法性と違法性阻却論の検討

MACARAMBON HUSSEIN LIMACO
A Study on the Role of the United States Agency for International Development (USAID) Towards Peace and Development for the Filipino Muslims (MOROS)（ミンダナオにおける平和と開発に対するUSAIDの役割）

赤　松　茂　章　1990年代の日本経済停滞におけるデフレの原因と脱却への可能性　～金融要因と構造要因からの検討～

中　野　陶　子　戦間期極東における秩序　ワシントン体制の崩壊と日本の新秩序模索

楢　崎　耕　平　抽象的人間労働は社会一般的か特殊歴史的か

疋　田　多　揚　アフリカの経済発展と農村共同体　―東アフリカの例を中心に―

水　島　晋　吾　「決定」についての考察　―多数決原理を通じて―

佐々木　信　暁　株価変動の仕組みと株価分析　―株価・地価に見るバブル崩壊の実態―

笹　川　義　弘　既存司法受験生の視点から見た新司法改革制度

国際文化学科

近　藤　由利子　処女母神：アテナ、アマテラス、マリア

採　澤　和　正　武術家による宗教体験：通史的分析による本質の解明

中　禮　　海　創価学会の集会視察　―八幡旭日圏を事例として―

村　田　稔　彦　東洋哲学の共時的構造化　―井筒俊彦の思想的世界―

柳　川　文　香　吸収されたキリスト教　―民俗宗教としての隠れキリシタン―

STROIA OLIVIA VANESA
テレビコマーシャルを通して見た日本とルーマニア　―「穏やかな売込み」vs.「強引な売込み」―

福　田　和　人　日本の外国人統合政策　―外国人参政権と帰化―

清　水　　巌　身体の価値と意義の時代的変遷とカニバリズム

大　城　佳　子　伝統的仏教寺院から「開かれた共同体」へ　―京都市・法然院の事例より―

佐　藤　せり佳　「銭湯」　―その文化誌と集まりの構造―

高　田　彩　子　現代日本女性を蝕む病理とその対処について　―摂食障害者の日常と自助グループでの経験―

大　嶋　　剛　中世人の日常感覚・気分について

宇都宮　亜規子　名曲喫茶の文化的研究　―社会的位置づけの変遷と現状に関する考察

小　木　郁　夫　現代日本の〈アジア主義〉

早　田　栄　介　炭坑住宅と炭坑集落の変遷を通してみる坑夫の労働者への変容

水　町　倫　久　「虚無感」に関する一考察　―〈窓〉論として―

門　脇　俊　輔　「演劇鑑賞教室」の意義　～演劇のある生活のために～

三　浦　　結　吉本隆明の言語論について

坂　本　麻　衣　The Price for the Pursuit of a Perfect Man（ポオの小説における完全性について）

皆　川　　剛　Toni Morrison's *The Bluest Eye* : Two Logics of a Difference（トニ・モリソン作『青い眼がほしい』：二つの差異性の論理）

荻　田　ひかり　摂関期における葬送の様態　―参列者を中心として―

辻　　浩　和　後白河院と都市民

プロンスキー，ドゥミートリイ
第一次世界大戦に当たる日本政府外交政策と参戦に関する姿勢

西之原　一　貴　古今集の研究　～古今集四季歌と万葉集巻八・巻十の比較～

山　口　佳　美　ロシア人学者クラシェニンニコフのカムチャツカ先住民へのまなざし

鈴　木　洋　仁　中村光夫のフランス留学体験

松　井　芳　樹　映画と社会　―フランスの映画助成を参考に―

基礎科学科

梅　野　祐　樹　Feynman- Kac 表現と Black-Scholes モデル

戸　田　貴　久　プログラム意味論と領域理論

中　島　慎太郎　分権社会実現のための電子自治体ネットワーク協創モデル

前　川　泰　則　二次元 Navier-Stokes 方程式の解の漸近挙動

パトラスク，ビクトル　イオアン　パウロ
コンピュータグラフィックスによる芸術作品の創成に関する研究

井　上　宏　之　インターネット上のセキュリティ対策としての法律および技術とその運用について

渡　部　哲　也　多次元基礎図形の回転と投影に関する研究

渡　邊　　剛　メディアの中のバイオテクノロジー　―新聞記事の分析を通じて―

沖　田　文　子　文化と自己概念　―特定の状況下における自己参照効果からの検討―

林　　保　美	自分史分析の試みと青年期の問題について
松　清　哲　士	形から見た太鼓の研究
池　田　瑞　恵	性によるカテゴリーとアイデンティティ　―男でもなく、女でもなく、トランスジェンダーでもなく―
今　井　政　利	視覚皮質網膜対応構造の fMRI による効率的計測方法に関する研究
勝　浦　眞　仁	子どもが主体となる場　～障碍児保育の現場視察を通して～
柴　田　慎　士	非営利セクターおよびボランティアによる地域防災・災害救援活動
永　井　健　雄	バイオテクノロジーに関するメディア言説の日欧比較
古　川　剛　史	環境に関する専門的情報と人々の認識との関係について
山　本　あかね	早期療育の意義と課題　―母親が「子どもを理解する」ということとその支援―
山　本　大　輔	文化的自己観　―明示判断と暗黙判断による検証―
湯　山　晴　久	人はどのように学生から社会人になっていくのか
横　森　大　輔	言語とパラ言語の相互依存性について：記号論と発話行為論の観点から
井　上　雄　策	市民参加による社会的防災力の強化と災害救援 NPO の役割
野　口　大　輔	出版業の発展と社会の変化との関係
岡　田　晃　典	高次元 Black Hole
長　利　一　心	Parrndo Paradoxical Game の解析　～Short term での勝ち逃げは可能か？～
山　田　浩　司	量子ゲーム理論

自然環境学科

浅　井　千　穂	9族遷移金属触媒を用いる水素移動反応と光学活性アルコールのラセミ化反応への利用
石　谷　佳　明	回転リングディスク電極を用いた電気化学反応の研究
石　橋　孝　一	新規カリックスアレーン誘導体合成の試み
内　田　幸　明	有機常磁性液晶の合成に関する研究
高　橋　禎　憲	9 族遷移金属触媒を用いたラクタム類の新規合成反応の開発
多　田　和　弘	ニトロキシドスピンラベル剤の合成とその利用
田　中　吉　隆	溶存酸素減少に伴う堆積物からの栄養成分溶出挙動
平　山　　祐	蛍光ラベル剤の合成とその利用
松　岡　永　久	機能性キラルピロリジンホストの合成に関する研究
山　田　淳　一	希土類ケイ酸塩における電気伝導特性
奥　居　　章	食の安全と化学物質　―輸入農産物の残留農薬問題について―
堀　江　陽　介	水圏の堆積物　―水界面における栄養成分の地球科学的挙動
伊　藤　　文	赤外線放射センサーによる空の観測
井　上　和　久	Aso-3 火砕流堆積物の火山地質学的、及び岩石学的研究
鈴　木　隆　史	京都府夜久野町に分布する北但層群の古地磁気学的研究
砂　本　　健	大豆種子の水分と吸水条件が発芽に及ぼす影響について

樋　口　阿里沙	山の風下に見られるカルマン渦の研究　～成層および三次元効果の影響～
山　崎　史　郎	赤外放射計を用いた地上気象観測
上　田　淳　史	貴船川周辺の水系における Rumex 属の交配様式についての研究
大久保　智　司	PCR-DGGE 法を用いた海藻付着性微細藻類の多様性解析
荻　野　莉　江	アミミドロの網状群体形成過程の細胞接着部分に局在する分子の解析
川　瀬　　翼	The carboxy1 - terminus of the Na^+/ K^+- ATPase α-subunit; Specifically interacts with the glycogen phosphorylase （Na^+/K^+-ATPase とグリコーゲンホスホリラーゼとの相互作用）
粂　田　昌　宏	モノクローナル抗体を用いた染色体関連タンパク質の同定
人　見　謙太郎	がん遺伝子発見データを用いた Gaussian Process の性能評価
細　谷　直　史	クロロフィルd を主要色素とする Acaryochloris 属における光化学系タンパク質の進化的制約
宮　　弘　幸	The centrosome : where cell cycle and ubiquitination meet （セントロソーム：細胞周期とユビキチン化の合流点）
和　田　　斉	原子間力顕微鏡による in vitro 転写の解析
石　川　冬　馬	アンジオテンシンII・タイプ2レセプター遺伝子多型の自律神経機能に与える影響
大　谷　めぐみ	単純反応時間課題中の背側運動前野に対する経頭蓋磁気刺激の影響
大　屋　知　徹	Reduced Sensitivity of Fusimotor Activity Induced by Prolonged Stretch Shortening Cycle （長時間伸展収縮サイクルによる紡錘活動感受性の低下）
清　原　夏　樹	Assessment of Cardiac Depolarization -Repolarization Process during Progressive Excercise by Means of ECG Recovery Time （心電図 Recovery Time による漸増負荷運動中の心筋脱分極　―再分極時間の変動解析）
増　田　知　彰	Poly IC（合成二本鎖 RNA）によって引き起こされるマウスの行動量と神経活動の変化
森　　容　子	2型糖尿病モデル OLETF の骨格筋にみられる成長に伴う筋繊維タイプ変化とインスリン抵抗性
石　橋　誠　一	Gene expression and disappearance of skeletal muscles following hindlimb suspension and spaceflight（後肢懸垂および宇宙飛行による骨格筋での遺伝子の発現と消失）
末　石　貴　広	他者の手運動の視覚映像が観察者の手運動に及ぼす行動学的影響　―ゴニオメータを用いた映像と運動の時間的相違の解析―
森　　崇	The Relationship Between Critical Power, Maximal Power at Neuro muscular Fatigue threshold and Anaerobic Threshold （臨界出力、筋電図疲労閾値、作業性閾値間の関係）
岡　村　里　香	脳におけるプロスタグランジン輸送体の局在とその誘導

平成16年度

人間学科

増　子　大　介	意思・身体・自由　～ニーチェのテクストにおける自由意志批判を手がかりに～
水　口　貴　義	J.S.ミル『功利主義論』における快楽の質の相違
六　車　沙弥佳	公と私のありかたについて　―リベラル・ユートピアを目指して―
渡　辺　ま　り	John　Lockeの社会思想について　―ロック「財産所有権」の権利性―
浅　野　直　樹	精神分析の治癒について　―「納得」という語を通したフロイト治療論の再検討―
窪　田　裕　典	ネットで構築される自己　―ブログ分析を通して―
高　橋　　結	未来への希望とワーキングホリデー

山　﨑　庸　右	京町屋保存・再生運動の源流
浦　川　新　平	近代的自我に関する社会学的考察
半　場　　歩	親孝行再考　―中期親子関係に見る現代的親孝行の在り方―
西　山　裕　美	娯楽映画と国策映画の曖昧な境界　―李香蘭、1939 ～1944―
林　　卓	フリーター表象の変換について
池　野　絢　子	カルロ・カッラ　1914-1921　―伝統と近代性―
石　黒　雄　一	「ターンテーブル・サウンド」の美学　―音響の交通路としてのDJをめぐって―
元　木　俊　介	ドゥエイン・マイケルズの技法の変遷とその要因についての考察
助　川　信　彰	『18人の音楽家のための音楽』における楽音の多義性
森　西　香　奈	「転向」と共同体
酒　見　和　裕	中世庭園の空間分析　―夢窓と天竜寺十境をめぐって―
曽布川　　剛	近代以降における京都寺町の変容　―商店街を中心としてー
野　田　明　宏	近代日本とコレラ　―伝播、流行に関する地理学的検討―
粟　谷　真之介	視覚体験の近代　―写真の変容と写真帖の流通―
最　所　路　子	京都における河川環境に関する地理学的研究　―鴨川の親水機能を中心として―
岩　田　ま　り	クリーン開発メカニズム　～持続可能な開発の視点から～
岡　山　宏　二	電源開発促進政策　―電源三法の変遷と問題、そして地方公共団体への影響について―
奥　田　依　里	グアンタナモ基地の抑留問題　―その法的地位と人権保護―
織　田　章　子	森林トラスト活動の成果と展望を探る　―国内森林トラスト団体活動を通じて―
笠　松　航　平	PRTR の課題・展望
片　峰　正　博	現代日本経済における消費者金融
菅　原　健　志	「外交」としての名誉革命
高　木　翔　平	貨幣への欲望と資本主義経済
高　橋　晋　司	商業化と遊びの領域
豊　久　達　郎	バーゼル条約とアメリカ
中　山　遼　一	日韓請求権協定と韓国における請求権補償
法　貴　美　恵	労災保険給付と損害賠償の調整　～労災保険制度における政府の役割～
町　田　光　弘	沖縄県の訪米活動の意義と可能性
百　木　　漠	高橋亀吉「プチ帝国主義論」の再評価
山　本　幸　作	「非典型パートタイマーの処遇問題について」
吉　川　仁　恵	循環型社会形成のための費用負担と行政の役割　～自治体のごみ減量化政策から考える～
米　山　　藍	市民参加の架け橋としての環境 NPO　～菜の花プロジェクトを中心にして～
渡　邊　大　輔	歴史における伝統と意思　―エリートの変質と E. H. カー思想の再評価―
赤　司　紘　一	WTO 諸協定下でのエコ・ラベル制度
今　井　亮　介	近衛文麿の思想形成とその政策決定とその政策決定との関連

藺牟田　泰　隆	戦後保守政治と憲法改正　―なぜ憲法は改正できなかったのか―
加　藤　周　太	コンテンツ産業振興への展望　～大企業への経営資源の集中の傾向に注目しつつ望ましい産業のあり方を探る～
川　合　秀　幸	「成功の歴史」に何を学ぶか　―日露戦争以後の日本に問題点を探る―
清　野　崇　宏	ビスマルクの政治・外交に見るイデオロギー
中　井　麻祐子	領事面会権に関する国際司法裁判所判例の妥当性　―LaGraed 事件・Avena 事件における領事関係条約36条違反の救済に関して―
水　口　恵　太	公債発行による金融政策への影響について
余　傅　典　子	日本における「民営化」とは何か
大　橋　良　二	投資家としての銀行からみた証券化のデフレ政策としての有効性
平　野　太　郎	環境問題における費用便益分析の適用の可能性

国際文化学科

大　西　　順	現代法制度の言語学的な問題点　―刑事司法の観点から―
池　田　篤　史	人・家・町を巻き込むまちづくりの様相　―福井県熊川宿の事例より―
石　井　賢　吾	John Keats　―Endymion における神話と想像力
斎　藤　知　里	ウィリアムモリスのスティンドグラス
森　　恵　子	現代における「祭り」の意味　～左京区広河原地区松上げ・ヤッサコサイの事例から～
湯　浅　智　樹	『フランケンシュタイン』の怪物像の変遷にみられる科学批判
北　島　　淳	サミュエル・ベケットのデカルト批判
清　水　芳　樹	〈われ―なんじ〉の構造　―M・ブーバーの対話観―
松　永　　篤	『消えた少年たち』の主人公家族の生活が末日聖徒イエス・キリスト教会の信条とどのように対応するか
山　内　熱　人	過疎・高齢化の現実の中をいかに生き抜くか　～鹿児島県瀬戸内町の事例から
菅　　和　志	身体装飾現代日本版　―オシャレする大学生たち―
鬼　頭　弥　生	伝統食材の流通にみる「正当性」の多様化　―加茂なすの事例分析から―
髙　尾　佳　和	回復のための新たな資源管理形態　―琵琶湖漁業をめぐる営みから―
竹　本　遥　子	海と山とを結ぶ　―玄界灘相島に生きる漁師の環境認識―
細　川　倫　央	現代社会におけるボランティアの可能性について　―京都市山科区「街の探検隊」の事例から―
森　光　順　子	過疎を乗り越える　―丹後地方における村営百貨店の事例から―
川　原　絢　子	生産者と消費者の新しいネットワークの可能性　―京都市における有機農産物流通の事例から―
田　澤　知　行	インターネット、同人社会の存在意義
野　口　輝　之	阿蘇・根子岳の猫民話をめぐる語りと記録　―民俗の経験世界から―
堀　内　彰　宏	遊びに生きる人々　―麻雀を題材として―
鈴　木　　允	東紀州における大敷網漁の生活誌　―「理由なき」漁業減少の時代を生きる―
芳　野　　舞	テキストと舞台衣装から見たワイルドの villainess について
髙　松　剛　史	ペソア、カンポスの二つの未来派風テクストと異名空間におけるペソア美学

鈴　木　和歌奈	エスニック・メディア研究　～ニューヨークの韓国系・中国系メディアに学ぶ～
長　嶋　祐　成	喫煙規制をめぐる言説分析と「禁煙ファシズム」論の射程
吉　田　沙恵子	アパルトヘイトに学ぶ　～真の人間性を求めて～
石　島　洋　輔	未成熟な人格の心理
上　野　梨　香	ヴィクトール・オルタの都市住宅　―近代都市と住環境―
川　口　　崇	「平和国家」コスタリカの実情
池　田　真　一	幼児の言語獲得についての考察
笹　尾　洋　介	第二言語獲得における文法習得について　―日本人学習者による英語の与格交替に課せられる制約の獲得
小　川　博　之	W・ベンヤミンにおける技術と集団　―映画芸術を拠り所として
木　下　雄　太	三国時代の軍隊進軍時に地形、気候等が与える影響について
田　中　宏　和	副詞の副詞
宮　崎　拓　朗	『人間失格』と太宰治の戦後
小　林　　希	チェーホンテの詩学
山　森　英　輔	ジョルジュ・カンギレムの思想
田　村　聡　美	大量消費文化と家族像　～夢と現実のリコンシリエイション～
山　﨑　雄　史	ガーヴェイ運動の宗教的側面について
松　田　淳一郎	図書館が抱える問題について

基礎科学科

内　田　裕　介	DCT に基づいた Digital Watermark の一手法
大　植　健　司	個人情報保護法と情報セキュリティについての研究
中　塚　敏　光	指数写像のジュリア集合について
松　原　誉　史	デジタルデータの誤り制御
草　川　恵　太	格子に関する問題　―最悪時と平均時の関係の改善―
霜　田　めぐみ	超越数論におけるジーゲルの補題の有用性　―ゲルフォント・シュナイダーの定理を例に―
山　城　博　幸	視覚図形の対称性と非対称性知覚の脳内過程に関する fMRI 研究
上　田　祥　行	視覚模索課題における模索戦略　―文化心理学的観点からの考察―
尾　垣　和　幸	幼児に見る「自分」のあり方に関して
宗　倉　　圭	文化的自己観と自己正当化現象　～他者想起条件からの検討～
髙　嶋　由布子	音色を表現することばと比喩
高　田　ま　り	マスク刺激とターゲット刺激の色の組み合わせがマスキングにおよぼす効果について
中　田　和　行	色対比効果の空間要因　輝度情報への依存性に関する研究
原　田　晶　子	仲間関係を通した自己性のありようの模索
三　宅　了　太	子どもの人間関係に見る感情
森　田　　藍	関係性から探る読み聞かせの意義

太田暁彦	性の様態
小黒雅貴	生態心理学的視点から言語獲得研究再考：エコロジカルなアプローチの重要性
吉野直樹	智頭町市町村合併をめぐるグループダイナミックス
坂田勇樹	青年期後期における苦しみの一様相　～内省の視点から～
奥住聡	流体による「音のブラックホール」とホーキング輻射
小沼圭介	スピン 1/2 三角格子反強磁性体 $Et_2Me_2Sb[Pd(dmit)_2]_2$ におけるフラストレーション効果の研究
河井洋輔	純電子プラズマの平衡分布に固有な軸対称波動時の実験的研究
冨田仁	核磁気共鳴法による量子フラストレート反強磁性体 $Me_4P[Pd(dmit)_2]_2$ の研究
有賀暢迪	剛体球によるアーチ構造の静力学的考察
内田裕之	核磁気共鳴法によるヘビーフェルミオン物質 YbAs の四重極秩序の研究
浦野博充	アミロイド β 蛋白質のカイラリティの統計物理学的考察
岩田哲也	ギブス補正とエントロピーの示量性
西原新太郎	ポリスチレン希薄溶液の動的光散乱

自然環境学科

上柿智生	優先富化現象に及ぼす分子・結晶構造の影響と結晶多形移転に関する研究
折笠有基	In-Zn 系酸化物の蒸着と電気的性質および熱電特性
河嶋良明	ヌクレオシド関連物質の合成研究
澁谷吉紀	紫レーザーダイオード励起希土類蛍光体の作成と 4f 電子遷移光物性
石川勇	Ga_2O_3-ZrO_2-WO_3 系ガラスの作製と熱膨張
志賀靖彦	高周波スパッタリングによる lnVo4 薄膜作製とその物性の研究
小野耕作	京都市における気温の鉛直分布観測
矢島新	京都市における連続気温鉛直分布に関する研究
新木和孝	Gloebacter violaceus PCC 7421 における「始原」的形質の遺伝子解析と光化学系タンパク質構造モデリングによる探索と検証
池田啓	高山植物ツガザクラ（ツツジ科）の分子系統地理
大山有亮	緑藻 Botryococcus braunii による炭化水素生産の至適光質の探索
栗本篤臣	イワウチワを用いた本州温帯林構成植物の種内系統地理
古賀啓一	近畿地方におけるバイカモの保全研究
鈴木聡	ニホンイタチの頭骨の変異に関する研究
山中美幸	マンサク科トサミズキ属の分子系統
吉田耕介	Chl b 合成酵素遺伝子の起源および系統関係の解明
白石透冴	Nuclear Dyanamics Detected by GFP Fusion Proteins（GFP 融合タンパク質を用いた核内ドメインのダイナミクス研究）
堤淳太	Dps の系統分類と発現制御
伊藤慎哉	投運動における球速と正確性の関係

尾　崎　禎　亮	短距離疾走時の全額面におけるキネマティクスと走速度との関係
小野寺　俊　晴	筋芽細胞と心筋様細胞の分化過程における GPCR, キー分子の発現の変化
坂　岡　　篤	Fever-related prostaglandin E_2 may be biosynthesized in a transcellular manner in mouse brain leptomeninges.（マウス脳における、発熱に関わるプロスタグランジンE_2の生産機構とその部位）
進　矢　正　宏	ステップを伴う左右方向へのリーチングのバイオメカニクス分析
田　中　斉太郎	Effect of Coffee on Anti-Obesity and Relaxation（コーヒーの抗肥満効果及びリラクゼーション効果）
土　田　正　太	高気圧・高濃度酸素への滞在による血圧および酸素飽和度への影響
野　田　武　史	カテゴリー属性を用いた Web ページのメタデータ記述と検索
藤　井　進　也	トップドラマーのスティッキングは何が優れているのか？　～最速タッピングの間隔と力の解析～
廣　瀬　智　士	Viewing muscular contraction of hand enhances grip-force in a finger precision-grip task（人の手の筋収縮の視覚情報が筋出力に影響を与える:プレシジョングリプを用いた実験）
松　田　祐　貴	α-グルコシダーゼ阻害剤の食後血糖に及ぼす影響について
米　澤　雄　士	他者の手運動の視覚映像が観察者の手運動の制御に及ぼす影響　観察者の手運動の向きの効果
光　田　直　記	静的筋ストレッチング効果の神経生理学的検証

平成17年度

人間学科

新　家　　梓	ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』における擬似命題による解明について
秋　山　　励	負の遺産の復権
石　川　り　え	〈父の名〉とパラノイア形成あるいはパラノイア準備段階としてのシニフィアン導入による世界の構造化に関する考察
高　橋　顕　也	現代社会におけるアイデンティティの変容と社会生成の遂行性
西　村　菜　美	アセクシュアリティの社会学
内　田　直　樹	「Open the Fresh Widow」　―レディメイド・オブジェと、芸術作品における開かれについて―
大　石　　晋	ハイデガーの芸術思想
原　　庸　介	日本におけるマグリットの受容　―受容者の期待によるマグリットと「だまし絵」の整理―
樋　浦　真　吾	帽子にみえるユダヤ人の自己意識
松　本　敬　弘	*A Midsummer Night's Dream* の劇中劇について
垣　畑　　陽	音楽における「印象主義」をめぐって　―ドビュッシー論を中心に―
金　　康　一	泉州地域における地域構造変容　～通勤行動からの考察
小　林　洋　介	沖縄の都市システムの地理学的研究
中　原　有　輝	福岡都市圏の拡大現象としての前原の宅地化
林　　宏　美	京都の地域イメージに関する研究
藤　原　照　沙	松江市における高層集合住宅の展開
塚　脇　　光	宇治・ウトロ地区の居住を守る運動の展開　―「地上げ反対！ウトロを守る会」「ウトロ町内会」を中心に―
田　中　祐　樹	京都の近代化政策における市域拡大：深草・伏見地域の近代と現在

芦澤　泉	地域食資源のプロデュースとブランド育成　―静岡県富士宮市「富士宮やきそば」事業の現状と課題―
春日　あゆか	EU 環境政治・政策におけるイギリス・ドイツの違いとその背景
川嶋　良典	土地の時価評価の是非
小端　あゆ美	企業の CSR 報告書はどうあるべきか
阪本　浩章	多国間環境条約の遵守手続と動態的制度発展
杉山　武彦	「予防原則」をめぐる米欧の対立の構造
田中　佑一	領域・境界紛争における国際裁判の意義　―仲裁裁判事例からの衡平概念の考察―
十時　啓	公訴時効制度についての考察
冨田　絵理	育児・介護休業制度の今後の課題
豊田　絵美子	20世紀初期におけるイギリス外交政策の転換
中村　太一	耐震強度偽装事件から考えるあるべき確認検査制度と技術者の倫理について
南河　渉	フランス革命　～ウイーン体制期にみる勢力均衡思想について～
西川　有美	退職年金の不利益変更に関する考察
原田　充啓	選択型コンジョイント分析による棚田景観の価値評価額の算出とその分析　―農政関係者における選好構造の特性について―
東原　正裕	現在の若年層世代における公的年金加入の意義　―損得論を含めた公的年金加入の意義の検証―
福島　豪	ニート問題に関する新たな理解
福西　亮太	EU 拡大に伴う中欧諸国への直接投資の変化
藤岡　陽子	ジェンダー役割意識の視点による少子化対策の可能性
藤本　有里香	クルド人保護を目的とする多国籍軍の介入の正当性　―安保理決議688による正当化及び介入の手続的不完全性―
森永　佳未	雇用形態の多様化
森宗　佳己	障害福祉サービスの利用者負担についての一考察
山田　美由紀	非貿易的関心事項に対する WTO の姿勢　―アスベスト事件上級委員会報告書の検討を中心に―
リム ポール ヴィンセント タン ミッラル	Suger Daddy or Godfather ? : Newspaper Based Image Study of Philippines-Japan Relations During the Aquino Administration (1986-1992)（パトロンかゴットファザーか：新聞を通じた日比関係のイメージ分析（1986-1992））
大石　忠雄	人道的介入に対する諸国の黙示的な承認
清水　雅史	情報サービス産業における労働環境の現状　―システムコンサルタント事件の再検討を踏まえて―
平川　敏章	19世紀ヨーロッパ自由貿易体制の成立について
山下　紀子	内部告発の在り方　～企業内秩序と社会正義～
丁　智恵	日本軍朝鮮人慰安婦問題について　―韓国・中国フィールドワークを介して―
山本　直和	日本の医療制度
平沼　夏樹	国家賠償法の役割と存在意義
藤平　健太郎	政治と文学
六宗　渉	流動化する雇用情勢に対応する、若者への職業支援のあり方について

国際文化学科

大　野　翔太郎	「表象」されない民族問題　―「語られる」チベット問題から「語られない」問題の考察
影　浦　亮　平	ベンヤミンと証言の時代　―ヴァルター・ベンヤミンの言語論を巡って
大久保　友　博	翻訳研究序論　―空白の強度と翻訳者の現象学―
横　山　元　秋	鼻高天狗像の成立に関する一考察
吉　田　城　男	われと他者　―M．ブーバーの考える共同体
駒　田　安　紀	心の変革による治病の可能性　―お蔭話の分析より―
久　山　雄　甫	世界と自己の和解のために　―ルドルフ・シュタイナー若き日の思索―
稲　垣　智　史	フリースクールのエスノグラフィー　―降りかかる「教育」に立ち向かう子ども―
是　枝　邦　洋	野外霊長類学の事例から見る科学者の「感覚」　―均質な科学観の是非を問う―
武　田　龍　樹	エスニックを取り込む　―民族雑貨屋の事例から―
田　中　葉　子	茶道における「型」のゆくえ　―志向されつつ遠ざかるもの―
中　谷　和　人	老いの居場所　―あるグループホームでの実践をめぐって―
西　谷　昌　子	刺青の現在
泉　　文　子	フェアトレード　―支援とビジネスの間で―
浅　澤　加津沙	日本における養子縁組
稲　垣　円　香	自伝の研究　―ウラジミール・ナボコフの自伝の分析―
佐　藤　由香里	広告に現実を見ることへの抵抗
高　田　敦　史	芸術を観察する　―ルーマンの芸術システム論―
川　村　真由美	構築された病理としての月経前症候群
加　藤　花　子	日英語の二重否定に関する一考察　―緩叙法を中心として―
神　谷　　建	á NP を受ける代名詞 lui と y についての一考察
太　田　由　佳	青年南方熊楠における西洋と日本
塚　本　明日香	宋代蘇州における住宅建築
于　　敦　彦	安史の乱とその時代を生きた英傑たち
吉　川　豪　介	19世紀のイギリスにおけるフットボール　―プロ化の問題について―
有　森　由紀子	ハリウッドの戦争映画とアメリカ社会
宮　脇　裕　子	Two Sides of Paradise　―Women's Roles in *This side of Paradise*（楽園の 2 つの側面　―『楽園のこちら側』における女性の役割）
渡　　寛　法	ドミニカ移民問題　―「棄民」の視点をこえて―
橋　本　裕　樹	A Study of *The Great Gatsby*　『グレート・ギャツビー』研究
シュベイゲル　エミル	'Ethnics without Ethnicity' : Hungarians in the United States（エスニシティのない民族：アメリカ合衆国におけるハンガリー移民について）

基礎科学科

岩　間　心　平	確率微分方程式の数値解析

西　海　敬　介	ホモトピー群と Hurewicz 同型定理について
加　藤　弘　通	初等・中等課程における情報教育のシステム環境改善について　～KNOPPIX を用いた学内サーバーのシステムライフサイクル構築～
折　井　公　彦	Dual Task を用いた認知様式の文化比較
門　脇　大　輔	コンピュータ学習による語彙習得の有効性の検討
川　上　大　介	親子関係についての研究　―青年の心理的自立過程について―
新　明　優　香	チームプレイによる不登校への取り組み：「内こもり研究会」の事例
玉　岡　　愛	障害児教育の転換期における親と学校の関係の変容：母親ピア・サポート・グループの事例研究
山　本　恵　嗣	評判情報生成における寛容性の役割
横　井　　隆	社会的ジレンマ状況におけるサンクションの非協力抑制効果：褒賞と懲罰の違い
木　村　瑛　美	自然環境の改変をめぐる専門家と一般市民の対話システム構築に関する基礎研究
新　納　寛　子	高齢者問題に関する世論調査のテキスト分析
塚　本　哲　史	行為的直観としての共感をめざして　―主体の二重性と間主体性の諸相―
北　畑　耕太郎	高次元宇宙論　～内部空間の安定性～
嵯峨根　多　美	反強磁性リング分子磁性体 Fe12 の研究
高　田　哲　也	非中性プラズマ渦糸内の電子エネルギー分布
福　岡　幸太郎	核磁気共鳴法によるフラストレートしたヘビーフェルミオン反強磁性体 UNi_4B の研究
藤　田　大　樹	非中性プラズマ分布の外部摂動に対する応答

自然環境学科

喜　田　泰　史	9 族遷移金属錯体の水素移動触媒能に関する研究
時　田　　智	アザカリックスアレーンの合成と配座制御に関する試み
春　木　秀　仁	亜鉛イオンセンサー分子の開発を目指した新規な金属配位場の構築
藤　原　真　人	陸水における懸濁生物ケイ酸量の評価と化学動態
眞　壁　輝　夫	カリウムに富む角閃石の X 線結晶構造解析と陽イオン席占有
三　井　雄　太	岩石破壊に伴う発光現象の実験的解明
石　田　遥　介	Localization of Na/K-ATPase beta subunit in *Drosophila melanogaster* photoreceptor cells（ショウジョウバエ光受容細胞をモデルシステムとした Na/K-ATPase β サブユニットの局在化の研究）
大　塚　正太郎	Set-up for the single-molecule measurement of nuclear transport mediated by nuclear pore complex（核膜孔複合体を介した物質輸送の一分子計測システムの構築）
小　川　睦　美	植物や半翅目昆虫と共生関係を結ぶアリ類の餌選好性について
小　倉　匡　俊	ニホンザルにおける同種・他種の画像の弁別と環境エンリッチメントへの利用可能性
児　玉　真　美	細胞核内構造のナノスケール解析
富　田　ち　え	葉緑体核様態の構造解析
林　　裕　志	大腸菌 Escherichia coli ObgE の機能解析
宮　口　雄　人	アミミドロの網状群体形成過程の細胞接着部分に局在する分子の生化学的解析
小　薮　大　輔	ベニガオザルの体毛色における集団内・集団間変異とその進化史的含意

越　智　昭　仁	細菌脂質に対する新しい免疫応答機構の解明
勝　原　洋　二	早くかつ高く跳ぶ動作におけるバイオメカニクス研究
神　原　洋　子	教師のメンタルヘルスの現状と改善に関する考察
小佐田　佳　織	皮膚に塗布したメントールが誘発する自律性・行動性体温調節反応
佐　藤　絵　理	糖尿病と医療経済　～患者教育の重要性～
清　水　瑤　平	高脂肪食負荷ラットにおける筋肉細胞内中性脂肪についての組織学的検討
田　中　豊　之	AVP によるインスリンおよびグルカゴン分泌機構に関する研究
土　屋　真　司	打者の有無および立つ位置が投球分布と投球の正確性に与える影響
則　安　梨　才	高齢者における身体活動記録表及び 3 軸加速度計を用いた身体活動量測定法の妥当性の研究
服　部　幸　子	2 型糖尿病動物における糖・脂質代謝とヒラメ筋の筋線維タイプ異常との関係
久　枝　　宏	冷刺激が誘発するゼブラフィッシのふるえ
牧　　亜紗子	筋細胞 C2C12 乳酸刺激における分化への影響および脂肪酸受容体発現の検討
松　本　幸　治	Effects of Frequency in Percutaneous Electrical Stimulation （表面筋電気刺激における周波数選択の影響）
松　本　竜　平	アカゲザルの一次運動野における介在ニューロンの密度と分布
持　田　恵　梨	酸化ストレスがインスリン分泌に及ぼす影響
山　城　　丈	Comparison and Examination of the Oxygen Saturation in the Upper and Lower Limbs under Gravity-free Condition （無動力時の上下肢における酸素飽和度の比較・検討）
大　野　真　嗣	ラット骨格筋における AMP キナーゼと筋線維タイプとの関連に関する研究
堀　　晋　也	糖尿病に関するレポートについての考察
坂　本　佳　隆	糖尿病に関する文献考察
渡　邉　文　隆	Combination Effect of Foot Bath and Hand Bath on Human Autonomic Nervous System Activity （足浴と手浴の組み合わせが自律神経活動に及ぼす影響）

平成18年度

人間学科

松　本　哲　也	芸術と心理学の方法論
宇佐美　　亮	ショッピングセンターの発展史と未来
河　合　悠　祐	株式の法的性質（平成17年改正新会社法）と株式投資法
木　下　直　樹	近代の中にみる中華の伝統　―近代清韓関係を焦点に―
後　藤　智　久	教育界におけるいわゆる「2007年問題」に関する一考察
千　賀　龍　也	心理療法の誕生・発展と神経症の発症機制に関する研究とにおける催眠現象の精神医学史的意義、及び現代の催眠療法について
田　中　美千子	現代社会の不正競争防止法
種　村　徳　也	ニートに関する精神分析的考察
徳　永　　亮	政治と文学　―群衆描写をめぐって
藤　井　　直	惹きつける魔術

松　井　　豊	植民地出身者という経験　アジア・太平洋戦争末期、京都帝国大学における朝鮮人留学生のライフヒストリーをたどって
山　越　高　志	ウィトゲンシュタイン『哲学探究』の私的言語に関する議論と、他者理解の可能性

国際文化学科

菊　井　史　裕	受け継がれる身体技法　―明珍火箸職人の事例から―
伊　東　佑　梨	『女学雑誌』からみる巌本善治の思想　―日清戦争による影響を中心に
潮　田　知　彦	美術鑑賞の現代的意義　―芸術を前にした語り―
小　野　邦　彦	現代陰陽師とその周辺
熊　本　拓　矢	イルヤース・ホーリー『太陽の門』における難民の歴史/物語　―歴史/物語の「生き延びる」あり方に注目して―
坂　本　洋　輔	悪石島、人々、盆まつり　―離島の日常と非日常―
竹　下　智　視	マス広告と検索連動型広告に横たわる断絶への眼差し　―ポスト近代人の変化した 2 つの感覚―
細　田　翔　一	表象の福沢諭吉　表象のイデオロギー性についてのひとつの考察
増　田　健　史	自分のための風景　―観光経験における「オーセンティシティ」を旅行記に探る―

基礎科学科

伊　野　麻　衣	学習障害（LD）と思われる子どもの内面の変容　―個別指導塾での関わりを通して―
一　原　理　彦	社会的ジレンマ問題解決への制度的アプローチ：ネット百科事典ウィキペディアの事例から
河　合　浩　樹	不変円板をもつメビウス変換群が不連続作用するための条件
久保田　浩　之	Yang - Mills 方程式の幾何学
小　林　義　明	ラマヌジャングラフをつくる
坂　本　泰　彦	環境変化の自然科学的評価と社会心理的評価の相互作用を取り入れた環境価値評価手法に関する基礎研究：朱鞠内湖周辺地域での関心事調査を通して
田　中　宏　和	インターネット上で消費者によって作られるメディア（CGM）の現状・問題点および今後のあり方
寺　崎　知　之	認知論的に見る時間表現
成　岡　舞　子	環境 NGO による人・物ネットワーキングのプロセス：内モンゴル沙漠化防止活動の事例
根　本　　学	青年期の対人関係について　―不適応とその経緯についての質的研究―
密　井　　浩	コンピュータ上の学習システムのインタフェースによる学習効率の違い

自然環境学科

市　川　　靖	アメリカンフットボールのスタート動作の解析およびより効果的なスタート動作についての考察
小　田　俊　之	ドビイロシワアリ（*Tetramorium tsushimae*）の CN 比の異なる餌に対する要求度の可塑性
鈴　木　克　明	バナナ型液晶化合物の合成に関する研究
田　中　　学	緑藻アミミドロにおける微小管とγ-tubulin の細胞内分布
寺　田　　聡	特定保健用食品の現状とこれから
廣　田　孝　幸	遺伝子から見たシアノバクテリア *Gloeobacter violaceus* の成立過程の解明
山　下　智　弘	ゼブラフィッシュを用いた行動性体温調節モデルの開発

人間科学系

一　枝　悟　史	新たな自己呈示の場としてのSNS
井　上　果　林	京都大学におけるスポーツ実習に関するグループ・ダイナミックス的考察
今　田　容　康	ファシズム期日本の学校に見られるテクノロジー　―御真影を中心に―
岩　田　直　也	プラトン『パイドロス』における芸術論
江　河　素　直	災害時要援護者を中心にすえた地域防災：ノーマライゼーションを超えて
奥　井　　遼	スポーツにおける精神的規範の通史的研究　～騎士道的精神と武士道的精神の比較
片　田　　晶	在日朝鮮人の若い世代の主体的な生　―アイデンティティ論を超えて―
釜　塚　信　平	大正、昭和戦前期の「不良少年問題」言説
木　下　　咲	同性愛の普遍性についての精神分析学的視点からの研究
栗　原　俊　秀	ポルノグラフィの「知への意志」
高　尾　知　憲	10年間にわたる内発的住民自治構築運動による伝統的集落意思決定機関の変容：鳥取県智頭町早瀬集落における「日本ゼロ分のイチ村おこし運動」のインパクト
高　瀬　貴　宏	青年期における「ぐらぐら」とした感じについての語り合い研究
丹　波　忠　寛	精神分析とシュルレアリスム　―ダリを中心として
筒　井　あづみ	A Study of Edith Wharton's *The Age of Innocence* : The Community and Individuals（Edith Wharton の The Age of Innocence における共同体と個人の問題についての考察）
鳥屋原　尚　美	高齢社会における生命保険事業の役割
中　村　光　宏	規範の伝達過程に関する数理モデル
中　村　亮　太	ニュータウンにおけるコミュニティ活性化に関する事例研究：京都市洛西ニュータウンにおける住民と行政の取り組み
錦　木　孝　介	環境変化の自然科学的評価と社会心理的評価の相互作用を取り入れた環境価値評価手法に関する基礎研究：朱鞠内湖周辺地域でのインタビュー調査を通して
西　村　　敦	ラッセルによるカント批判についての考察
野　瀬　佳　以	サイバースペースと身体、アート
東　田　大　志	創造行為としてのパズル　―有機的パズルモデルにおける、個々の種類のパズルが持つ作品性についての考察
肱　岡　千　泰	法律と実効性のある規範とのズレについて
福　田　貴　宏	名前と指示　―ドネラン「固有名と同定記述」を中心に―
福　原　奈　々	「日本的」衣服の模索　―「自家裁縫」と「直線」を手がかりに
松　岡　大　祐	進学塾における小学生の実態とその考察
松　山　高　和	精神病水準の病態への精神分析からのアプローチ法の研究
三　木　純　一	「学びの共同体」についての考察
水　田　裕　子	「でないもののように　hos me」　―「共同体」としての参加型アート―
宮　田　　薫	過疎地域活性化運動に対する住民意識とその変化：鳥取県智頭町「ゼロ分のイチ村おこし運動」に関するアンケート調査
渡　邊　　彩	肥満についての考察

認知情報学系

赤　松　裕　訓	Effect of Aldehyde Dehydrogenase-2 Genotype on Cardiac Autonomic Nervous and Immune Responses to Moderate Alcohol Ingestion（アルデヒド脱水素酵素遺伝子が、アルコール摂取時の心臓自律神経応答および免疫反応に与える影響）
阿　閉　宏　明	The effect of insulin and palmitate on AMPK and LKB1 activity in C2C12 myotubes（筋芽細胞 C2C12 においてインスリンとパルミチン酸が AMPK や LKB1 に及ぼす影響について）
雨　宮　さとみ	空間的に離れた色の弁別に関する研究
宇　津　亮　太	左右方向へのステップを伴う選択リーチング動作における予備ホップの効果
江　川　達　郎	加齢及び不活動に伴う、ラット骨格筋の糖輸送担体及びモノカルボン酸輸送担体の変化に関する研究
大　西　匡　明	On the Unification of Grammatical Modules ―The Case of Movement and Control―（文法モジュールの統合化について　―移動とコントロール ―）
岡　本　英　也	スピード持久力に優れる800ｍランナーは接地中の身体重心水平方向移動距離が長い
沖　川　達　哉	Mastication Induced Thermogenic Responses via Sympathetic Nervous System Activity（咀嚼が熱産生に及ぼす影響について）
上　林　　航	The Structure and Interpretation of Sentential Negation in Japanese（日本語における文否定の構造と解釈）
北　田　彩　子	肥満関連遺伝子 UCP-3 遺伝子多型の自律神経機能に及ぼす影響
久　保　広　行	CDMA セルラ方式におけるマルチキャストへのマルチホップネットワークの導入
栗　田　和　輝	確率微分方程式と数理ファイナンスへの応用
甘蔗生　　望	イソロイシンの骨格筋蛋白質合成シグナルに及ぼす影響
多　湖　真　琴	異種感覚情報の相互作用によるテクスチャーの知覚
坂　野　逸　紀	自然画像の瞬間呈示を用いた物体・シーン認識の比較研究
前　田　隆　介	見えない視覚刺激が視覚性短期記憶に及ぼす影響
宮　野　敬　士	文献データベース解析にみる生命科学史
森　　秀　俊	水平面および傾斜面におけるゴルフスイングの床反力の再現性
山　本　　剛	「スポーツ実習」によるライフスキル向上の可能性

国際文明学系

磯　部　香　名	世界銀行における先住民族政策の変遷とその評価
磯　村　真　央	ロッテルダム条約の意義と限界　―途上国の農薬管理に対する有効性―
大　竹　伸　平	国際刑事裁判所における捜査不開始決定の公開基準　―検察官による捜査の要否判定の客観性担保のために―
川　島　沙　絵	ブッシュ演説からみるアメリカ　―9・11を通して
河　村　さやか	戦後日本の「構造」についての考察　―日米構造協議を通じて―
草　間　智　子	アメリカ現代史における広告　―広告が刺激したアメリカ中産階級の上昇志向―
桑　田　清　貴	地球環境ファシリティ（GEF）の意義　―プロジェクトの持続可能性と触媒作用の評価を通して―
小　泉　俊一郎	中心市街地の不動産活用促進策に関する一考察　―堺市空き店舗対策事業を題材に―
坂　田　妃佐恵	社会に埋めこまれた資本主義経済　―K. ポランニー と P.F. ドラッカー―

阪　本　卓　哉	インターネットによる情報の民主化とそれが消費者に与える影響
佐久間　圭　介	今日の銀行批判はいかがなものか
佐々木　和　男	「讃岐うどん」を生み出したものとは
佐　野　公　美	広告がもたらす “Modernity”　―1920年代　アメリカ広告業界の戦略
鹿　内　真　弦	仲裁判決の無効審査　―制度化の試みにおける先例の意義―
柴　田　　萌	WHO における遺伝子組換え作物をめぐる措置の取扱い　―SPS 協定 5 条の解釈適用を中心として―
高　橋　玲　央	柄谷行人について
冨　田　　朗	平和維持活動における地域的機構と国連の関係　―リベリア内戦に対する ECOWAS と国連の介入の事例から―
西　村　木　綿	オーストリア社会民主党における民族理論とユダヤ人問題
廣　瀬　俊　彦	社会の維持可能な発展に向けて　～方法論としての CSR のあり方～
松　浪　早百合	戦略的環境アセスメントの発展における SEA 議定書の位置づけ　―その成立背景と意義―
村　井　大　志	粉飾決算と日本の監査制度　―日本版 SOX 法施行による内部統制改革
柳　本　大　介	スペース・デブリ低減のためのガイドランの適用とその限界　～アメリカの国内実施の評価を中心として～
山　本　太　郎	過労自殺をめぐる企業の安全配慮義務
幸　　大二郎	ヨーロッパ人権条約第 8 条における国家の裁量の範囲　―環境分野による第 8 条違反について―
涌　井　健　策	外交における長期的国家戦略の背景　―1920年代の日米英関係を省みて
渡　辺　恭　彦	自我形成過程の原理的考察　―廣松役割理論を用いて―

文化環境学系

阿　部　優　香	日常を生き抜くための布づくり　―南風原町・琉球絣の事例から―
内　田　崇　志	ゴダール映画におけるパレスチナのイマージュについて
大　澤　耕　史	ユダヤ教における「偶像崇拝」解釈の歴史　―出エジプト記32章を中心に―
黒　田　隆　太	洛西ニュータウンの地理学的考察　―ニュータウンの成立・意義・人口問題を中心に―
小　室　育　美	大人の会話から見る子ども像　―学童保育の現場から―
竹　田　亜希恵	現代塗り絵論　―変容する塗り絵の世界をめぐって―
典　略　健　佑	「ミニコミ」から「マスコミ」を考える　～水俣病報道における『水俣タイムス』の活躍と苦悩～
三　好　多　恵	持続可能な漁場の利用を目指して　―兵庫県明石浦の事例から
渡　辺　み　き	野生と家畜のはざまで　―岐阜・小瀬鵜飼におけるウミウの事例から―

自然科学系

伊　奈　稔　哲	希土類 3d 遷移金属ペロブスカイト類似酸化物の平均構造・局所構造・電子構造と電気化学特性との相関関係
伊　吉　祥　平	蛍光－分子計測を指向した新規な二官能基性蛍光ラベル剤の開発研究
歌　書　一　宏	一般相対性理論の検証
沖　　成　昭	有機ビラジカル液晶化合物の合成に関する研究
岸　本　雅　之	フラストレート磁性体 $Cs_2Cu_3ZrF_{12}$ と $Co_2(OH)_3Cl$ の研究

木　村　公　美	低分子量 G タンパク質、ObgH2 の機能解析
久保田　好　美	ノイズと遅れを含むシステム
小松原　充　夫	Cp*イリジウム触媒を用いたカルバミン酸エステル類のアルコールによるN-アルキル化反応
鈴　木　勇　輝	非中性プラズマ渦の合体における素過程に関する実験的研究
須　藤　正　彬	ガマズミ属植物における葉上ダニ密度および葉面微細構造の種間比較
手　島　大　地	高圧下核磁気共鳴法における最先端計測技術の開発と確立
平　井　悠　哉	JmjC ドメインを有するタンパク質の核小体における動態について
松　井　一　祐	パラジウム触媒アリールアミノ化反応における一時的*N*－シリル化法の開発とアザカリックスアレーン合成への適用
宮　下　奈緒子	河川中途貯水域の出現が当該水域の栄養塩の動態とその流出に与える影響
宮　原　正　明	純電子プラズマの diocotron 不安定性に対して外部摂動が与える影響に関する実験的研究
森　　涼　子	緑藻 *Botryococcus sp.* における炭化水素生産に及ぼす光質の影響
柳　原　明日輝	希土類ホウ酸塩の電気伝導特性評価とその機構の解明
山　田　朋　彦	形態比較と分子系統解析によるミミズハゼ属魚類の多様性の再評価
横　井　絵里香	生体反応をモニターするラベル剤の合成研究

平成 19 年度

人間学科

遠　藤　衆史郎	身体改造、とりわけ生殖器への自傷行為に関する精神分析的考察
岡　田　友　城	子どもの安全
小　山　竜　平	朝鮮独立のための日本の外交について
岸　本　督　司	近代建築における逆説的ないくつかの断面について

国際文化学科

青　野　慧志郎	病院における相互行為
氏　　昴　将	「文学」から見た加藤典洋の戦後認識の変遷
岡　村　　翔	山地酪農の実践者たち
染　木　ヨハネ	Some Observations on Economy and Redundancy in Language and Mind（言語と心における経済性・余剰性の観察）
高　橋　暁　彦	ロマンス語音韻体系の通時的研究
野　中　ふ　み	「ニシャン サマン」の本について

基礎科学科

佐　藤　健　夫	ブラックホールと流体のホーキング輻射
長　広　大　樹	実験とコンピュータ・シュミレーションを併用した歩行者群集行動の研究
半　田　洋　介	外国語映画の字幕は翻訳と言える

人間科学系

鈴木伸尚	中間集団論を遡る　―ニスベット、トクヴィル―
永岡明典	瀧川事件と雑誌
森　明弘	ハイデガーの「本来的実存」についての考察　―不安に耐えて生きることの意味―
青木雅子	昭和30年代の食卓と主婦の台所仕事
石原大樹	エミールから見る生きることと学ぶこと
井上　咲	日記コミュニケーションから見る自己
上西美甫	なぜ日本では物乞いが見られないのか？
大川明夏	Friedrich Schiller 作　*"Wilhelm Tell"* について　―「革命」と「悲劇」―
河井　亨	青年的なもの
北之坊公美	現代のメディア・イベント　～同時代性を喚起するメディア・イベント～
北村加奈	文科系大学院への進学行動　―大学院重点化以後の修士課程学生へのインタビュー調査から―
小石原加奈	フッサール現象学における認識の真理に関する考察　―その観念論的、実在論的性格―
篠崎麻紀	Physical Perception in Toni Morrison's *The Bluest Eye*（Toni Morrison 作 *The Bluest Eye* における身体感覚）
柴野　悠	心の病の食事療法　―うつ病は食事で治るか―
清水洋志	喫煙をめぐる公共空間での規範の決定
提中裕之	少年院をめぐる語りの変遷　―国会審議における少年院像の構築―
高橋圭一	「場面緘黙症」への精神分析的アプローチ
根無一信	ライプニッツの個体的実体
原　圭佑	夢に対する人間の態度　～『宇治拾遺物語』にみられる「民衆の信念」に関する精神分析的考察～
飯田善彦	身体性の次元を包含した新しい社会学理論パラダイムの精練をめざして　―大澤真幸・作田啓一・R.カイヨワ―
藤巻さな	沖縄・伊江島における農民たちの闘い
堀口将志	言語空間のニヒリズムを越えて　―タテマエとホンネから考える―
山中一毅	覚醒する天心　―「アジアは一つ」を超えたところの今に蘇える岡倉天心の思想―
渡邊智暁	追いつめられる者たち　―フリッツ・ラング作品の分析―

認知情報学系

牛尾淳志	フーリエ級数の収束と発散
坂田三太郎	画像の角度と背景が自然画像の瞬時カテゴリ認識に与える影響
百々貴司	日常言語の時空概念に関する認知言語学的分析
平野　謙	Effects of Chinese pepper on lipid oxidation and autonomic nergous system activity（花椒摂取がヒトの脂質代謝およに自律神経活動に及ぼす影響）
前川真彦	複数のパーツから構成される物体の視覚短期記憶における表象形成の特徴
朝倉　琢	Over の多義性　～教育的観点から第一義の重要性を問う～

浅　野　裕　基	口腔内刺激に基づく油脂の嗜好性の行動学的研究
阿　部　泰　幸	教育制度評価への数値モデルの導入
岩　田　拓　真	Electrical muscle stimulation of very low frequency is not suitable for muscle hypertrophy（超低周波による骨格筋電気刺激の筋肥大への効果）
岩　渕　俊　樹	Mental Representations of Language: Distributed Morphology and Cognitive Science（言語の心的表象：分散形態論と認知科学）
岡　澤　剛　起	Neuroethological study of the prey capturing behaviors in the African clawed toad（*Xenipus laevis*）（アフリカツメガエルの捕食行動についての神経行動学的研究）
小　河　典　子	キャッチコピーの修辞表現に関する認知言語学的分析
小　原　一　樹	手が教える物体の状態　～手の運動感覚情報と物体の長さの知識を利用した把握している物体の状態推定過程～
亀　谷　亮　輔	競技レベルの違いによるテニスのフットワークの安定性
木　林　　望	与那国方言の音韻変化と標準語化
栗　栖　芳大郎	四次元直交変換の四元数を用いた解析とその CG による可視化
後　藤　明　弘	ゾウリムシの頭部は遊泳や刺激応答行動に不可欠
近　藤　修　平	閾下刺激が行動に与える影響
櫻　場　厚　浩	トラップ・アンド・パス動作におけるバイオメカニクス研究
佐々木　俊　幸	The assessment of autonomic nervous system activities during passive training（他動運動中の自律神経活動評価）
佐　竹　優　一	Electrial muscle stimulation ellicits peripheral vasodilatation and reduces strain on the heart（筋電気刺激による抹消血流循環および心臓循環系への影響）
杉　山　さやか	「Vタイ」における格交替についての認知言語学的考察
鈴　木　一　平	日本語の類別詞における認知言語学的考察　―ホームランを数える類別詞「発」と「本」―
田　内　真惟人	ヒト前頭眼野におけるレチノトピー表象：遅延急速眼球運動課題を用いた fMRI 研究
田　中　沙　居	Vitamin D Status among Japanese Elderly: Suggestion for Higher Adequate Intake and the Effect of Supplementation（日本人高齢者におけるビタミンＤステータスと摂取目安量改善への提案）
谷　口　真　穂	視覚性短期記憶における検索手がかりの効果の検討
林　　宏　壮	TRPM8は皮膚直下神経線維に発現しており、その神経線維は低温で起こる冷感覚を媒介する
深　谷　興　士	サッカーのキック動作における右と左
堀　越　佳奈子	健康な成人における酸素飽和度と脈拍数の関係
益　冨　恵　子	等間隔・非等間隔の点滅刺激間における知覚時間長の比較
松　井　正　太	眼球運動関連領域と指運動関連領域との比較によるヒト FEE の位置の決定
松　野　泰　大	心理物理学的逆相関法を用いた視覚検索におけるストラテジーの推定
松　本　智　史	コンピュータ囲碁の序盤における着手決定方法
溝　口　佑　爾	非交差経路の数え上げとその応用　― 3 次元 Young 図形を巡って―
森　　彩　子	高気圧・高濃度酸素への暴露が後肢懸垂後のマウス骨格筋の特性と骨密度に及ぼす影響
安　田　周　平	5'-AMP は低温に抗する皮膚温度調節反射の回路を切断する
山　田　将　功	照応の理解について

吉　安　亮　介	右手および左手での他者運動の視覚情報が自己の右手運動に与える影響の考察

国際文明学系

石　垣　泰　史	「安全・安心まちづくり」と都市空間　―都市における監視カメラと公共空間―
岡　　慎　也	日本の CSR の今後　―日本企業は社会問題にも取り組むべきか―
鈴　木　博　人	ロシアの資源外交とエネルギー資源の将来
水　原　和　人	ISO14001 の現状と認証取得非継続組織の傾向
五十嵐　順　平	なぜ北海道に地域紙は多いのか
石　原　　猛	食用鯉の需要供給分析　―戦後の鯉を対象とした漁業・養殖業が衰退したメカニズムについて―
岩　瀬　繁　信	現代における「合理化」の方向性および「客観的理性」について
大　竹　祐　衣	テンプル騎士団から見る中世ヨーロッパの政治と宗教
岡　山　博　智	耕作放棄地への牛放牧による農村景観の経済評価　―東広島市福成寺地区での CVM アンケート分析と考察―
片　畑　咲　耶	ウィリアム・ゴールディング『蝿の王』について　―人間性と文明への警鐘―
川　口　紗弥香	集団的自衛権　―日本におけるそれも含めて
河　原　太　郎	都市における中古住宅市場の分析　―中古住宅市場が不活性なのはなぜか―
健　木　　篤	日本企業の CSR 経営成功の鍵　―人材活性化―
小　林　　晋	格差社会　―新自由主義における格差の拡大と「第三の道」による是正策を考える―
小　松　　玲	COOL BIZ というエコムーブメントの社会的意義
猿　渡　　葵	「型」と「無」による現代の再生　―唐木順三の軌跡をたどって―
清　水　美　幸	イギリス民衆文化に対するまなざしの変化　―18紀後半から19世紀にかけて
白　江　祐　介	アジアにおける鯉類の食糧としての可能性　―中国を中心に―
杉　田　峻　介	耐震改修工事等による移転に伴う不要物品処分の現状とリユースシステム　―京都大学吉田キャンパスを対象とした調査と大学への提案―
竹　鼻　千　尋	日本人と思想　―「武士道」の変遷から考える―
中　嶋　晃　子	観光振興における官の役割　―京都市の観光客数増加を事例として―
中　森　弘　樹	「世界に一つだけの花」とポストモダン
野　澤　貴　史	日本社会における結婚の過去・現在・未来
松　江　大　吾	信頼の役割　―存在承認の理論を用いて―
松　下　明日美	スコープス裁判が映すアメリカ社会　―歴史の中の宗教、教育、自由、民主主義―
藪　本　美　穂	民間医療の世界観　―科学と宗教のはざま―
吉　岡　早　希	現代中国の経済格差と鄧小平の「南巡講話」
若穂囲　龍　介	日英同盟の衰退
渡　邉　　中	留学費用返還請求裁判の検証

文化環境学系

石　川　真由子	なぜ日本の近代家族は守られゆくのか　―国家の視点と国民の視点―

小　堀　蓉　子	持続可能な自立生活を支えるものは何か　―今井さんの自立生活に見る生の技法―
塩　田　朋　哉	ユダヤ教、キリスト教における金貸しの解釈の歴史的変化
関　　健次郎	市街地消防団の活動と規律にみる権力性　―政令指定都市A市の事例から―
西　巻　絢　子	芥川龍之介におけるロシア文学
萩　原　宏　子	「難民」とは何か　～イランにおけるアフガン難民の「生きられた経験」から～
上　杉　昌　也	セル・オートマトンを用いた市街地拡大モデル
植　田　茉莉子	経験を共有するとは　―「ヒロシマ、ナガサキ」の記憶から
小　嶋　ちひろ	宝塚少女歌劇団のジェンダー・ストラテジー　―「男役」誕生をめぐって
冨　田　直　希	住まいと家族の変容
中　村　真　介	山村としての南会津に関する研究　―駒止峠周辺における道と生業の変遷を軸にして―
中　村　　悠	高松市における小売商業構造の変遷
水　越　敦　子	人間の生きる糧としての音楽　～占領下パレスチナの音楽実践から～
南　方　菜都子	オランダ商館の建築空間の変遷
吉　田　雄　一	記憶と証言

自然科学系

伊　藤　栄　俊	オオサンショウウオ（*Andrias japonicus*）の遺伝的変異
上　原　由　衣	極大・極小を持つ緩和と記憶効果
鎌　田　諭　紀	生物集団内における情報伝達のメカニズム：群れ全体の動きはどのように決定されるか
川　又　健　志	クマリン骨格を有するカドミウムイオンセンサーの開発研究
菊　谷　大　祐	ガーネット類似構造を有する酸化物の平均・局所・電子構造とリチウムイオン導電性
坂　本　皆　子	日本固有の微生物塊「天狗の麦飯」の群集構造解析
佐　藤　衆　一	NMR と SQUID を用いた幾何学的フラストレート磁性体 $Cu_2(OH)_3Cl$ の研究
白　川　喜　一	湖沼の自然浄化機構について
檀　　朋　美	Genetic structure of Shortia rotundifolia (Diapensiaceae) on Iriomotejima Island（西表島に生息するシマイワウチワの遺伝的構造）
椿　　玲　未	Adaptation to sandy beach environment by sand darter kraemeria cunicularia（スナバゼ *Kraemeria cunicularia* の砂浜環境の適応）
中　村　あかね	非整数階微分により見える世界　―振動子を例に―
茂　泉　　優	強震動波形記録を用いた京都大学吉田南２号館と京都大学土木工学教室本館のサイト特性の比較

平成20年度

人間学科

森　谷　　豊	丹波高原における鉄道建設と地域社会

自然環境学科

鈴　木　崇　之	最近の琵琶湖での水質変動と地球温暖化

松　井　廣　太　　運動処方の慢性疾患に対する治療効果の文献的検証

人間科学系

浅　井　友梨子　　公立学校選択制に関する一考察　―導入・運用に際して考慮すべきこと―

内　田　健　介　　フィンランドの教育について

内　田　　匠　　権威の形成とそのメカニズム

小　林　由布子　　イタリア映画における“まなざし”　―Visconti, Antonioni, Fellini を中心に―

山　本　堯　大　　日本的な登山としての漂泊

横　田　勝　己　　学校教育の場としての商店街：コミュニティの教育機能再生に向けて

阿　部　祐　希　　広告としての芸術、芸術としの広告

安　藤　英　俊　　衛生思想と近代建築

伊　藤　　惇　　精神障害に対する社会の意識と受容について

井　吹　美　音　　環境負荷を配慮したおむつの選択

上　村　祐　一　　若年層の職業意識についての考察

北　村　佳　奈　　登下校の変化に対する違和感について　―安心・安全追求の必要性と影響を考える―

小鍛治　由　佳　　Feyerabend の科学方法論 “anything goes”　―反帰納的手続きの検証を通じて―

小　林　哲　平　　日本国憲法24条の意義　―憲法制定過程と学説の整理を通して―

竹　倉　功　祐　　ポストモダン化するポピュラー音楽　―ロックフェスティバル、RADWIMPS, Perfume から考える―

田　中　郁太郎　　教育の選択と教育の公共性　―教育の公共性を社会学的に考え直し、教育格差をなくすために―

谷　中　　亨　　ロックの「実体」をめぐって

玉　置　沙由里　　社会企業家に関する社会学的考察

槻　木　祐美子　　スペインのイスラーム庭園、パティオについて　―その歴史と思想―

土　屋　智　寛　　環境影響評価を取り入れたシナリオワークショップの設計と実施

堤　　亮　太　　「普通に」家庭を持つことの偉大さと困難　―視覚障害者が家庭を作る時―

豊　川　祥　隆　　エルンスト・マッハの認識論　―素朴実在論を方法的科学論―

中　川　萌　子　　本来的実存における現存在の自由　―自由と自己、自由と被制約性という二重の観点から―

廣　重　　遼　　大都市近郊の過疎地域における地域活性化運動について　―京都市花背地域における地域ユニット再編成の取り組み―

村　上　梨　恵　　Web 書評に見る社会学

矢　部　沙　織　　解剖図にみる芸術と科学　―透徹した身体をめざして―

山　田　祐　子　　ビル・ヴィオラのビデオアートについて　―展示形態の変遷の意味―

渡　邉　洋　平　　思考の変革　―デュシャンのレディ・メイドより―

認知情報学系

丸　山　善　宏　　理論の比喩とそえに資するストーン双対性

海　野　祐　輔　　物理的認知変化による社会的行動の変化

木　村　　肇	植物性アルカロイド berberine によるラット骨格筋 AMPkinase の活性化
才　木　貞　治	顔文字の多様性　―認知言語学的観点を基に―
浅　井　　健	デジタル写真とタグに埋め込まれた秘密情報共有システム
浅　野　久美子	姿勢と認知機能の関わりを探る　―計算課題を用いた 3 姿勢間の検討―
阿　南　真由子	動詞「行く」/「来る」の認知言語学的研究
荒　木　真　徳	ラクロスの投球動作における投球分布
井　上　英　子	課題の負荷の違いが時間知覚に及ぼす影響
大久保　文　貴	メタ記憶課題中の前頭連合野神経活動の解析
金　本　祥　平	一定強度の筋活動時における運動単位の動員パターンの変動
川　上　　淳	Impact of sleep deprivation on the response to thermogenic stimulation by capsaicin-containing tablets（睡眠不足がカプサイシンによる熱産生刺激への応答に及ぼす影響）
品　田　和　哉	Effects of hyperbaric oxygenation on skeletal muscle property and voluntary running activity in developing rats（高気圧・高濃度酸素への曝露が発育期ラットの骨格筋の特性と活動量に及ぼす影響）
鈴　木　茉莉緒	西洋古典歌唱の発生時における頭部、頸部、胸部の姿勢変化
中　島　　樹	有理的中立不動点をもつ正則関数の複素力学系について
中　野　雄　史	On certain two-dimensional maps which have direct-product form（ある直積の形を持つ 2 次元写像について）
中　村　泰　子	The Contribution of Breakfast Type to Daily Nutrient Intakes　―through the Food Surrey Over the Students at Kyoto University―（朝食の種類が 1 日の栄養素等摂取量に及ぼす影響　―本学学生の食事調査を通して―）
野　村　征　史	Effects of hyperbaric oxygenation on blood pressure of spontaneously hypertensive rats（高気圧・高濃度酸素への曝露が高血圧ラットの血圧に及ぼす影響）
橋　崎　ひかり	糖尿病患者の血清脂質および脂肪酸濃度に関する研究
平　岡　　淳	コミュニケーションによる人間関係形成への影響
藤　井　慶　輔	バスケットボール熟練者のドリブル走動作における肩と腰の回転
松　良　和　奈	視覚性ワーキングメモリの発達要因に関する考察
宮　嶋　健　人	PageRank アルゴリズムおよびそれに関連する研究について
望　月　　圭	認知的・情動的意思決定における共通基盤の行動学的検討
元　林　典　子	塩素ピオグリタゾンの長期的効果と副作用の一考察
横　井　直　人	複合名詞「―もの」の〈モノ的認知〉と〈コト的認知〉
渡　部　　萌	糖尿病ラットを用いた雑穀の生活習慣病予防効果とブレンドの違いによる機能性への影響
金　津　将　庸	ヒト頭頂間溝におけるレチノトピー表象と視覚性短期記憶の神経機構に関する fMRI 研究

国際文明学系

小　山　一　輝	対中 ODA 援助の必要性の是非
遠　藤　隆　郎	JAPANESE AMERICAN INTERNMENT DURING WORLD WAR Ⅱ　～THROUGH READING *NO-NO BOY* BY JOHN OKADA～（第二次大戦後の日系人強制収容について　～ジョン・オカダによる「ノー・ノー・ボーイ」を読むことを通して～）
牧　村　　雄	都市における自転車利用促進のための自転車・自動車の車道共用の必要性

天　野　恵美理　　私という運動　―カント『純粋理性批判』における自我概念をめぐって

漆　原　愛　子　　海洋国家戦略の特性に関する史的考察

大　山　　遼　　バス事業における規制緩和政策の日英比較と今後の公共交通の課題

岡　田　友　美　　異質な他者とどう向き合うか：フランス移民統合から考える、他者への成員資格付与の妥当性

小　野　卓　哉　　地域ブランドによる経済活性化の現実　―夕張メロンと関さばの事例―

嘉　数　光　洋　　日本の難民審査参与員制度に対する批判と妥当性

菅　　龍　典　　「新古今和歌集」構造読解試論　～巻四・秋上を中心に～

佐　藤　　翔　　英語において時間を意味する語彙の歴史　～ラテン語、ギリシア語起源の名詞を中心に～

竹　村　　歩　　ヨーロッパの拡大　―バルト三国の立場から―

竹　本　伸　吾　　イギリスのインテリジェンス・コミュニティ　―JIC システムの形成過程―

塚　田　芙貴子　　福沢諭吉の思想にみる国民像

池　田　晃　彦　　日本の象牙需要に関する実証分析

出　光　啓　祐　　「楽市」の誕生　―戦国期の近江～東海地方における商業

梅　野　佳　奈　　日本のポジティブ・アクションへの示唆　―アメリカのアファーマティブ・アクションに関する平等観の対立から―

遠　藤　祥　多　　青森県つむ小川原開発が青森県の産業に与えた経済波及効果の算定

大　林　大　祐　　上代日本語の母音組織について

荻　野　仁　志　　英領マラヤ複合社会の形成　―ナショナリズムの想像を困難にする条件―

川　合　晋　平　　京都議定書不遵守手続における促進部・強制部決定　―ギリシアとカナダの事例を中心に―

川　口　敬　久　　日本の「道」　―インテリジェンス・コミュニティの連携強化のために―

北　田　優　方　　言語的観点から見た『ドラキュラ』

木　村　昌　代　　住におけるロハスの未来

坂　本　祥　二　　なぜわが国は EU 企業買収指令を採用すべきか

左　近　高　志　　リユースカップ制度が持つ環境教育効果に関する実証分析　―日産スタジアムを事例として―

佐　藤　大　樹　　離島における漂着ごみ対策の公共政策　―兵庫県成ヶ島における廃プラスチック油化装置の有用性

ザレヴァ　ボリャナ　ゲオルギェヴァ
Citizenship and Entry into Israel Law: An Attempt for Preservation of the Jewish Nature of the State or a Violation of International Law （イスラエル国籍及び入国法　―国家のユダヤ的性質の保全の試みあるいは国際法違反？―）

嶋　原　佳奈子　　WTO 紛争解決機関の裁定にみる自由貿易価値と環境価値の調整　―ブラジル再生タイヤ事件パネル・上級委員会報告書を中心として―

城　本　由　希　　日中戦争期日本側の蒋介石観　―軍・政治・民間の「評価」と和平―

宋　　偉　男　　主権論におけるカール・シュミットの思想史的位置

千　葉　知　世　　「日本の環境首都コンテスト」の意義と課題

殿　村　ゆ　り　　環境指標としてのフードマイレージの欺瞞　―ライフサイクルアセスメントとの比較を通じて―

濱　田　全次郎　　対抗措置を取りうる国と取りえない国　～大国に対して小国の取りうる措置の模索～

樋　笠　逸　人　　鳳凰の黎明

水　谷　康　真	郊外は共同性の欠如した均質社会か　―代表的郊外都市「青葉台」を舞台に―
宮　武　弘　幸	日本における廃木材からのバイオエタノール生産の可能性

文化環境学系

池　本　健太郎	リモートセンシングを利用した京阪神地域における都市的地域の研究　～衛星画像と空中写真を用いて～
井　上　晃　一	スポーツと国家　～メディアによる北京五輪報道から～
松　原　　史	海と渡った繍　―明治期輸出工芸政策下の刺繍貿易に見る繍の新たなる展開―
安　彦　文　靖	ファッション用語の社会言語学的考察　―メンズファッション誌を対象にして―
安　藤　孝　憲	宣教師がみたミヤコ　―京都におけるイエズス会の宣教活動について―
伊　藤　奈緒子	笑いにみる感情伝染　―人類学の視点から―
近　藤　章太郎	まちづくりにおける「人づくり」「コミュニティづくり」の重要性　―滋賀県近江八幡市旧市街を事例として―
櫻　井　真佑美	人はなぜハマるのか　―「ジャニヲタ」の心理と社会
佐　藤　有　華	幕末から明治初期にかけて来日した西洋外国人の日本風景の捉え方
関　崎　敬　介	情報がつくられているとき　―編集プロダクションの著者なき実践―
冨　島　真　吾	冷戦期における米国諜報活動の地理学的研究
仲　原　　敬	大正12年競馬法と馬券価格設定の意義
前　田　侑　輝	讃岐における麻の栽培・利用に関する歴史地理学的研究

自然科学系

鈴　木　　類	淡路島北部のニホンイノシシ個体群におけるブタ遺伝子汚染
横　尾　敬　行	Genetic structure among and within populations of serpentine endemic Heteropappus hispidus ssp.leptocladus (Compositae)（蛇紋岩固有変種ヤナギノギク（キク科）における集団遺伝構造）
小豆畑　逸　郎	結晶中のメルトインクルージョンの分析によるマグマ中の H_2O の測定
伊　東　秀　典	核マトリクスにおける機能未知な “Disordered Region” に富むタンパク質の解析
片　山　裕美子	Pr^3 添加オキシフロライド結晶化ガラスの作製と蛍光特性
上　城　貴　嗣	「その場」X線吸収法を用いたコアシェル型触媒の酸素還元反応機構の解明と高性能化
阪　辻　和　希	エンタルピー緩和と記憶効果
澤　　剛　生	レーザー冷却のための狭帯域・高出力半導体レーザーの開発
菅　原　可奈子	Phylogeography of Japanese horse chestnut in the Japanese archipelago based on chloroplast DNA（日本列島におけるトチノキの葉緑体 DNA に基づく系統地理）
高　取　惇　哉	「天狗の麦飯」微生物群集構造の層別比較
田　中　一　将	量子力学から見た重力下粒子のバウンドについての伏見表示を用いた考察（A quantum bouncing ball in Fushimi indication）
中　野　達　也	FeAs 系高温超伝導体の NMR
日　野　賢次郎	アゾベンゼンビラジカル液晶化合物の合成に関する研究
山　下　和　也	有機三角格子反強磁性体　$EtMe_3Sb\,[Pd(dmit)_2]_2$ におけるスピン液体状態

平成21年度

人間科学系

浅井浩介	岡田利規の演劇構造
畑中啓	映画「麦の穂を揺らす風」のテクスト分析
池野悠希	合成音声と著作権
島村和樹	逆行する美術館史
内貴悠	テクノロジーに先導される音楽体験の質的変化　―音楽体験の「動物化」とその可能性―
西尾直人	ニーチェにおけるニヒリズム、永遠回帰と運命愛
平山壮人	ブランドの変容と消費者
松井佑樹	現代における「老い」の認識について
村上祐子	精神分析的観点から見たチャネリング
青田佳子	現代女性における化粧についての精神分析的考察
飯野顕志	商店街と高等学校の連携によるコミュニティの「共育」機能創造の試み
礒谷知希	関係の連続性と不連続性を生み出す要因　―「他者に対する構え」という視点から―
上田壮志	ネット社会における検索様式の変容
卜部宏樹	意欲を支えるものは何か　―〈教えるもの〉と〈教えられるもの〉の関係性からの考察―
大西美幸	大道芸と文化創造都市　―新たなアートとしての大道芸―
河合直樹	高校数学教科書の言説分析研究　―学習者の「主体化」に向けた教科再編への提言
川端千裕	近代の普遍主義と贈与交換論　―プロパテント政策による科学と市場の関係の変化―
北村教行	ベンサムにおける私的倫理と功利性の原理
後藤直樹	見田宗介論　―ニヒリズムとエゴイズム、その超克の軌跡―
權絵理加	「自分」の変化プロセスとアイデンティティ　―今を生きる人々の語りから―
佐藤慧太	社会に点在する異様な動機づけについての考察
田口耕三	現代モード論　―「モードの終わり」の始まり
田畑麻衣	母乳推進運動の課題　―柔軟な授乳スタイルの選択を求めて―
中橋美沙	宝塚歌劇団ファンの消費形態　―データベース消費の変種をめぐって―
野嶋雄介	想起説の導入状況　―『メノン』におけるプラトンの認識論以前
長谷川潤	大都市近郊の過疎地域における地域活性化運動について　―京都市花背地域広河原地区における地域外とのネットワーキング
浜田祥治	パラダイムシフト　―アリストテレスとガリレオの運動論について
柳平亮	社会の子どもと大人の社会
山中彩	育児休業期間の変遷と母親保育論
山本由布香	「キャラ」コミュニケーションの可能性　―「キャラ」は便利な「ツール」である
吉川大樹	祖母を弔う父　―関係性から見る供養―
吉田温子	目に対する自傷行為とその背景について

認知情報学系

仙　石　　祐	ブログを用いた秘密情報の共有
居　戸　利　樹	糖尿病における血中 BNP の臨床的意義
柿　田　彩　乃	音刺激の嗜好性が記憶能力にどのような影響を与えるか
久　下　哲　寛	Je t'attendais. 型半過去との比較による「現在に関わる大過去」の機能と位置づけの検討
佐　藤　大　誉	音楽の記憶構造を探る　―旋律の場合―
地　蔵　繁　範	Identifying and automatising sound-word connection: Shifting the focus of teachers（音声―語の繋がりの発見と自動化　―教師の意識の変化に向けて―）
中　川　敦　夫	*d* 次元 *Navier-Stokes* 方程式の関数空間（$L^{\infty}((O.T), (L^{d})^{d})$）における *mild solution* の一意性の証明
原　　宏　輔	人間による「映像言語」の獲得について
二　見　隼　人	転倒防止に効果的な運動処方の文献的検証
伊　藤　　薫	演奏記号に関する認知言語学的考察
上　岸　　晶	物体フラグメントの種類が物体認識に与える影響
柿　添　康　大	Small cycles Property をもつ Cremer 点をもつ超越関数とその乗数の分布について
笠　島　靖　夫	Small Cycle Property を持つ超越関数の Cremer 点
金　澤　　悠	ラクロス競技におけるクロスを用いた走動作の技量レベルによる違い
川　口　大士郎	Effects of exposure to hyperbaric oxygen on oxidative stress in rats with type Ⅱ collagen-induced arthritis（Ⅱ型コラーゲン誘導関節炎ラットの酸化ストレスに対する高気圧・高濃度酸素の影響）
河　野　千　尋	保険数学と数理ファイナンスについて　―Esscher 変換を中心に―
後　藤　遥　介	手と体は繋がっているか　ラバーハンド錯覚が体幹の位置知覚に与える影響
志　築　諒太朗	日本語の接尾辞「ぽい」の認知意味論的分析
竹　田　　敦	主題提示の「って」
竹　本　博　紀	コンピュータインタフェースについての認知科学的研究
谷　口　善　紀	COUPLING BETWEEN CARDIAC AND UPPER-LIMB EXERCISE RHYTHMS（上肢運動と心拍リズムのカップリング）
種　村　一　識	胃運動機能、自律神経におけるコーヒーの作用
中　澤　光　平	音訳漢字における声調の機能と上代日本語の韻律に関する考察
仲　西　博　紀	気づきをともなわない視覚刺激が視覚記憶に与える影響
並　河　泰　範	談話構成におけるメタ言語の役割
野　村　祐一郎	視覚的な秘密情報の品質保持を可能とするステガノグラフィ
橋　谷　祐　司	No Free Lunch 定理の証明と考察
原　田　絢　子	女性像とそれにともなう女性服の変遷
堀　地　修　郎	ノイズ刺激による力調節能力の向上
本　多　千　夏	糖尿病治療における低カロリー甘味料の有用性について
馬　越　友　紀	テニスのサービスにおけるスタンス及びコースの違いがレシーバーの予測に与える影響
松　浦　由　樹	シンガポール英語の現状と行方

道　越　夕　葵	視覚性短期記憶における物体特徴の統合

国際文明学系

多　井　一　晃	商業演劇について
井　上　　聡	文化的天皇制
殿　村　みすず	有期労働契約における解雇権濫用法理の類推適用の法文化についての検討　―労働契約法の制定をきっかけとして―
今　村　文　香	女性の就業条件についての産業比較
大　澤　友里恵	タイの民主主義を考える
小　林　正　和	幸福と経済学　―国民生活に関する世論調査を用いた実証研究―
田　村　知　英	日独伊三国同盟をイギリスはどう評価したか　―対日政策に与えた影響
中　川　真梨子	観光における「まなざし」の非対称性とオールターナティヴ・ツーリズムとしてのスタディツアー
盛　　一　也	企業年金の受給者減額について
浅　井　航　洋	永井荷風の習作における広津柳浪「河内屋」からの影響
安　東　　宇	貨幣の電子化に関する経済学的考察
岩　木　保　樹	当期純利益と包括利益
植　田　裕太佳	なぜ経済成長が必要なのか
小　納　亜　希	愛され、結果を出し続ける地域マスコットキャラクターづくりの秘密
北　口　美　樹	就職活動における自己分析と自己　―インターネットを通して
久　野　大　樹	IFRS の受け入れについて
倉　持　直　樹	文書電子化に対する資源経済学的分析
小　泉　尚　子	リベラル・デモクラシーの普遍性について　―「アジア的価値」論の検討から
斉　藤　侑　規	日本文化の「日本らしさ」について　―現代史からの考察
佐々木　裕　則	歴史的比較から視た大学と教養教育　―総合人間学部を問い直す―
佐　藤　健太郎	『海と毒薬』論　―初期遠藤文学の映画への受容―
佐　藤　　悠	大伴坂上郎女と藤原麻呂の贈答歌群について
菅　村　　昇	占領軍は三教科停止指令を通して、日本人の歴史観・国家観をどのように変えようとしたのか
杉　原　隆　也	モバイルコンテンツビジネスから中国の若年層を洞察する
仙　波　隆　大	中国の大気及び水質汚染に関する省別分析を通じた環境対策制度についての評価と提言
武　田　真　理	シュペングラーとゲッベルス
田　中　豊　生	裁判員制度の意義とその課題
堤　　佳　奈	現代の無常の超克への道　―唐木順三の軌跡をたどって
堤　　博　樹	ワーキングプアの現状と対策
寺　谷　洋　樹	育児休業法の課題と展望
中　島　正　博	第二次世界大戦と戦後におけるインテリジェンス機関の発達
西　田　賢　二	『神仙伝』にみる古代中国人の仏教的感性

野々山　　暢	1970年代、ニクソン政権下において、なぜ日米同盟は危機の時代を迎えたのか
花　川　真　子	稲荷祭に集う都市民と蔵人所
花　田　　祐	投資銀行の資本主義経済における機能についての考察
原　　佑　輔	有機薄膜太陽電池の意義に関する考察
松　原　淳　子	島崎藤村の抽いたブラジル移民について
松　村　実　咲	太陽光発電システムと太陽熱利用機器の需要分析
百　瀬　　賢	ベトナム戦争と湾岸戦争にみるアメリカ国内世論の変化とその影響
山　口　哲　郎	テロ対策法制における治安維持と人権　―イギリス国内法と欧州人権条約との関係―
山　本　千　尋	環境系スタディーツアーの意義と課題
吉　嶺　一　輝	豊臣秀吉の対外観　―対明、対南蛮観を中心にして―
渡　部　和　隆	内村鑑三の信仰と二つの J
渡　邊　亮　輔	現代マクロ経済学の基本的フレームワークとしての Cass-Koopmans-Ramsey モデルに対する批判的考察

文化環境学系

吉　田　昌　睦	日本統治下京城における道路計画　―鐘路を中心として―
田　畑　雅　子	青年期における友人喪失経験が対人関係に及ぼす影響について
仲　西　純　一	東京における商店街の現状と課題　―東京都北区の 4 商店街を事例に―
今　川　世詩子	長浜における文化的ポテンシャルとしての庭園　―住民のための町づくりにむけて―
岩　城　悠　実	定期市と地域社会　―大原ふれあい朝市の事例―
木　部　由紀子	伝統工芸における技術の習得　―京都の金属工芸の事例から―
佐　藤　　傑	秋田方言における指小形の機能について
鶴　　朋　子	ユダヤとイスラームにおける浄穢観　―穢れと祈りとアイデンティティー
福　田　佳　恵	資生堂パーラーに映る大正モダン銀座の発展
盛　田　青　葉	シエラレオネの少年兵　―加害と被害の重層性―

自然科学系

岩　野　さやか	超好熱古細菌 Thermococcus kodakaraensis の染色体構成タンパク質およびゲノム高次構造に関する研究
梶　原　伸　吾	ニトロキシドビラジカル化合物の合成に関する研究
嶋　田　研志郎	別府温泉・小松地獄より分離・培養された単細胞緑藻の多様性
高　木　孝　介	^{87}Rb 原子の磁気光学トラップ
西　村　正　生	Homogeneous genetic structure against variation of tree architecture of *Larix kaempferi* : investigation along altitudinal gradiensts on Mt.Fuji（カラマツの均質な遺伝構造と変異を示す樹形：富士山における標高に沿った調査）
箱　川　真　吾	超高真空チェンバー内での原子ビーム生成と減速及び Rb 原子集団の蛍光イメージング
東　　広　之	Population fragmentation caused randomly fixed genotype in each population of *Arabidopsis kamchatica* in the Japanese archipelago（集団の分断化が日本列島のミヤマハタザオの各集団の遺伝子型をランダムに固定した）

細　川　由　貴	PCR-DGGE 法を用いた琵琶湖湖心における植物プランクトン群集構造の解析
松　崎　良　祐	光誘起電子移動反応を利用した二酸化炭素の固定化に関する試み
光　永　　誠	観測された雷鳴の単純減衰モデルによる考察

平成22年度

国際文化学科

渡　辺　亮　介	原ユートピアの分析

人間科学系

荒　瀬　　洸	ハリウッド史からみたスタンリー・キューブリックの特異性
窪　　靖　代	妖怪 DB からみる動物憑きの全体像　―人と動物のありかたを考えるために―
秋　田　真　澄	ベルトルト・ブレヒトの抒事詩的演劇における意図
岡　田　裕　司	“無意識に見て無意識に行為する”こと　―ある視覚障害者への考察を通して―
小　泉　智　裕	演劇の時代性　―「世界観の演劇」から「空気感の演劇」へ
中　井　直　樹	文化的資源を活用した地域活性化　―滋賀県長浜市を事例として―
林　　沙　織	「児童デイころぽっくる」からみる発達障害をかかえる子どもの支援
芳　居　美　幸	スペインにおける聖像受容　―スルバランの処女殉教聖女立像を通じて―
淺　野　　文	色彩と人間の心理　―精神分析的視点を手掛かりとして―
荒　木　郁　緒	現在の私と 0 歳の頃の私をつなぐものについての一考察　― 0 歳の頃についての家族画を基にした語りを通して―
乾　　英理子	関係性からみる共同保育「智頭町森のようちえんまるたんぼう」　―地域と保育、保育者と子ども、人間と自然―
大　谷　華　恵	明治・大正期の日本の百貨店広告について
小　河　真梨奈	ジャニーズ文化が成功したのはなぜか　～ジャニーズの戦略とファン目線の上昇と消費の形態を巡って～
木　月　二　郎	レヴィナスの〈欲望〉について　―〈女性的なもの〉を手ががりに―
黒　澤　雅　恵	指示理論の枠組みにたいする批判的検討
才　治　拓　真	組織におけるインフォーマル言説の調査方法と開発
佐　野　泰　之	『知覚の現象学』における表現の問題
島　津　史　奈	BL からみる現代女性のセクシュアリティ観と恋愛観　―既存のジェンダー秩序の相対化―
高　橋　寛　之	秩序原理としての先輩後輩関係　―機能的必要性を超えて―
棚　田　史　彦	近代における生政治と身体　―ドイツにおける体育思想の展開を中心に―
中　島　祐佳利	『視覚新論』『人知原理論』における「示唆」の仕組みについて　―「示唆」から探る触覚的対象についての主張の違い―
西　内　亮　平	因果推理において「反省の印省」が果たす役割　～「信念」を理解するために～
濱　田　修　平	行為選択の場における「困惑」
平　井　麻美子	女性ファッション雑誌『CanCam』に見るライフコースの変遷　―1982年～2009年を対象に―
増　井　秀　樹	「親になる」とはどういうことか：―組の夫婦の半年にわたるインタビュー調査から

松　岡　沙南絵	育児を通した育自　～子育てで“育つ”トキ～
丸　山　綾　子	現代日本における大学生の社会啓発活動
山　元　智　怜	『悲劇の誕生』における生への衝動について
横　山　優　樹	仏式葬儀の形骸化に対する一考察　―宗教儀礼の意味づけをめぐる教理と民俗の葛藤―
吉　松　　覚	フーコーの絵画論における表象作用の解体　―〈可視性〉の概念を中心に―
三　谷　俊　輔	高等学校における数学教育に関する一考察

認知情報学系

松　根　健太郎	確率的アルゴリズムにおける計算可能性について
森　脇　征　大	インスリン抵抗性改善薬「ピオグリタゾン」の血糖に及ぼす影響
天　野　琢　也	刺激の配置に関する空間統計情報の知覚
相　原　健　志	他者運動の情報が自己運動に与える影響
浅　田　　翔	空腹時血糖が正常高値以上の肥満者においてグルセルナ®SRを朝食代替として使用した場合の糖尿病発症リスク低減効果
有　山　宗　樹	単純接触効果における冗長性効果の視覚と触覚を用いた検討
井　上　朝　暁	落語の英訳に見られる工夫とその目的の考察
鵜　殿　淳之介	不完全情報ゲームにおける優位性獲得のための戦略
大　西　圭　介	***n*** 人ゲームにおけるNash均衡戦略の存在証明
尾　方　弘　樹	重力変化が上下肢の血流量に及ぼす影響
尾　崎　正　典	Acute effect of ballistic stretching on the Voluntary contraction（バリスティックストレッチによる最大随意収縮への急性的効果）
黒　田　一　平	インターネットスラングの認知言語学的考察
古　賀　裕　紀	色弁別プライミング課題を用いた色字共感覚における文字と共感覚色の連合様式の研究
酒　井　陵　吾	Effects of Ginger Extract on p70 S6 Kinase in Fat Skeletal Muscle（ラット骨格筋における生姜抽出物の p70 S6 キナーゼに対する影響の検討）
田　中　美　都	視覚的注意の意図的制御と注意キャプチャとの関係
田　中　陽　次	Investigating the Applicability of Surface Electromyography to Iliopsoas Muscle during Gait（腸腰筋における表面筋電図法の適用可能性の検証）
田　辺　弘　子	Pu-erh tea extract activates Akt and induce Glucose transport in rat skeletal mucle（ラット骨格筋におけるプーアル茶抽出物のAkt活性化と糖輸送促進効果）
津　田　諭　志	Coffee polyphenol caffeic acid but not chlorogenic acid increases 5’-AMP-activated protein kinase and insulin-independent glucose transport in rat skeletal muscle（ラット骨格筋におけるコーヒーポリフェノールのクロロゲン酸とカフェ酸による AMP キナーゼ活性化およびインスリン非依存性糖輸送促進効果の検討）
寺　山　　慧	関手的意味論による一階の理論の健全性と完全性について
中　桐　徹　也	異なる酸素濃度への曝露が酸化ストレス度に及ぼす影響
萩　生　翔　大	The region specificity of rectus femoris（大腿直筋の部位特異性）
藤　岡　俊　治	ゼブラフィッシュセロトニン作動性神経の GFP による可視化
宮　崎　雄　平	多角形によるタイリング

村　上　良　太	The Effect of Respiratory Muscle Training on Maximal Oxygen Consumption in Trained Individuals（鍛錬者の呼吸筋トレーニングが最大酸素摂取量に及ぼす影響）
森　　知　士	ウォーミングアップが運動パフォーマンスに与える効果の文献的検証
山　口　雄　輝	The Syntax-semantics Correspondence in English Double Object Constructions（英語二重目的語構文における統語と意味の対応）
吉　井　裕　八	H反射の強さのゆらぎと心理状態の関係

国際文明学系

伊　藤　剛　士	非嫡出子の差別をめぐる考察　―非嫡出子の相続に関する民法第900条の合憲性が争われた事例の考察を通して―
田　代　祐　一	尖閣諸島中国漁船衝突事件のゲーム論的分析
帖　佐　翔　人	A Normative Study on CSR（CSRの規範的検討）
西　谷　太　郎	利他的な決定を合理的に下す為の方法について
折　井　麻　紀	雇用型テレワークの普及における労働時間の可視化の必要性
蔭　山　尚　孝	離婚の経済学　～離婚件数の時系列分析～
金　井　三矢子	八代集中の和歌の題と歌材の変遷について　～古今集と新古今集を中心に～
丹　羽　　妙	京都市未来まちづくり100人委員会の可能性
平　瀬　靖　典	今後の日本の雇用体系のあり方について
古　野　愛　子	日本的経営の実態と可能性　―日本型ワークシェアリングは実現できるのか―
村　上　嵩太郎	資源紛争　―人口・需要増加による供給不足と資源ナショナリズム―
吉　本　浩　樹	公共性の見地からみる NPO バンクの現在と未来
秋　吉　美　穂	大学入試選考における Affirmative Action 再考　―2003年 Grutter 批判を中心に―
井　上　　周	京都大学吉田南構内における交通環境のモデル化
岩　澤　佑　典	新渡戸稲造と『武士道』　―日米から見た武士道―
大　崎　春　一	赤字財政下における日本の公債発行の妥当性に関する考察
小　野　　元	中山間地域等直接支払い制度実施状況について
河　本　勇　人	メトロポリターノバスリマはなぜ成功したのか
小　山　祐美子	未返還自転車の現状と返還料値上げに関する考察
作　山　哲　平	ニーチェにおける芸術概念について
佐　藤　　峻	貧困指標と日本人
下　家　大　典	格安航空会社をとらえなおす　～モダニティとの関連とグローバル化への影響～
新　庄　晃　平	生物多様性保全対策の経済評価　―固有種を配慮した琵琶湖の水位操作に関する CVM を事例として―
菅　原　聡　子	マニフェスト選挙における国民の役割
須々木　亮　祐	世界遺産登録がもたらす経済的価値
竹　上　智　己	貨幣論の考察　―マルクスとメンガーを手掛りに
田　中　いくみ	A・ホネットの承認論に基づく「歴史認識論争」の再検討　～公的論題に関する生活世界内の相互行為のあり方をめぐって～

富　澤　優　衣	三十六人撰
中　野　理沙恵	京都府「府民公募型安心・安全整備事業」における評価
中　原　一　弥	2・26事件後、如何にして、軍部は影響力を強めたのか。 1930年代の日本の政治・軍部・メディア等の観点から、その要因を考察する。
中　山　良　子	福沢諭吉の「独立自尊」と日本人　―果たして「一身独立」は日本人に要求できるものなのか―
西　嶋　正　信	毛沢東をどう評価するか
原　　尚　吾	日本地政学の国家戦略としての意義　―皇道精神としての側面から―
松　本　真奈美	これからの日本の国家安全保障
溝　口　　侑	日本において自転車は街と共存できるのか？　―京都市の事例を中心に―
山　下　　翔	日本における「中国共産党」に対する論調
渡　邊　裕　二	グローバリゼーションの中で変質した政治経済システムが引き起こした新たな貧困とその解決策としてのベーシックインカム
深　谷　麻　衣	観光地における飲食需要変動の要因分析　―清水寺周辺飲食店を事例として―

文化環境学系

廣　本　のどか	ヒロシマの記憶の継承を考える　―「爆心復元運動」及び「爆心復元地図」の再考を通して―
堀　部　　碧	「マジョリティ」としての連帯の在り方を問う　―パレスチナ / イスラエルをめぐる今日の世界から見えてくるもの―
稲　角　　暢	身体言語からなる調教と馬群の管理　―北海道十勝地方における事例から―
國　友　勇　冴	神戸の都市構造の変容　―大正、昭和初期を中心に―
小　西　修　司	「はっぱの町」で生きる　―徳島県上勝町における町民とよそ者の関わり―
社　本　沙也香	近代日本における書道教育の一側面　―文検習字科の検討を通して―
谷　口　稜　子	メルボルンの日本人　―16人の語りから見えてきた16通りのメルボルン生活―
中　切　悠　子	「ボランティア団体」の成立　―個人の意識と行動がいかに寄与するか―
永　里　　淳	山村集落における社会構造と社会生活
西　﨑　友　美	京都「寺(てら)並(なみ)」地域における寺院と街のつながり　―過去・現在の空間特性と住民交流の視点から―
芳　賀　文　絵	伝統の伝承　―奈良県生駒市高山茶筅の里における茶筅作りをもとに―
長谷川　　新	アートの楽園で生きる　―観光地化の進む直島における「住民」の志向と実践―
肥　後　　真	大正期『婦人公論』が目指した理想的生活とその限界　―新中間層の成立を背景に―
増　田　隆　秀	マリ共和国における定期市の地理学的考察
森　上　将　太	尾道市中心部（山手地区）の景観形成要素に関する考察　―傾斜地に立地した都市の一例として―
森　山　明　香	「歩くまち・京都」を目指す京都市の取り組みに関する考察
吉　野　雄一郎	ウクライナ・アイデンティティの形成　～19世紀文化闘争とそこに至るまで～

自然科学系

田　川　啓太郎	酸化物ブロック層を有する鉄砒素高温超伝導体 $Fe_2As_2Ca_6(Al,Ti)_4Oy$ の核磁気共鳴

石　橋　宣　史	Molecular evolution of cryptochrome genes in wild soybean（*Glycine soja*) in Japan （日本におけるダイズ野生種ツルマメのクリプトクロム遺伝子の分子進化）
植　田　　想	チンパンジーによる色と図形の象徴見本合わせの長期記憶保持
五　行　由　磨	新規二次元Ｘ線吸収分光法による電極内電位分析の測定
佐　野　　直	高効率太陽光発電のための波長変換薄膜材料の作製および光物性評価
島　田　康　伸	部位局在型銅蛍光プローブの開発
善　福　　章	京都盆地における大気の成層状態に関する研究　―比叡山観測を通して―
宮　澤　　悠	Differentiation of rhodopsin gene among Luciogobius species in diverse light environments（多様な光環境におけるミズハゼ属魚類のロドプシン遺伝子の分化）
三　好　　茜	かんらん岩の蛇紋岩化作用について：北海道神居古潭帯　岩内岳超塩基性岩体の例
望　月　陽　人	琵琶湖におけるウランの分布と動態
守　田　悠　三	フラクタル日除けを用いた樹冠遮断率の測定
八　木　春　樹	Population genetic structure of *Lysimachia mauritiana* (Primulaceae) between the Tokara Tectonic Strait in the Ryukyu Islands （琉球列島トカラ構造海峡を挟んだハマボッス（サクラソウ科）の集団遺伝構造）
山　田　俊太郎	Genetic diversity of symbiotic cyanobacteria in *Cycas revoluta* (Cycadaceae)（ソテツ（ソテツ科）に共生するシアノバクテリアの遺伝的多様性）

平成23年度

人間科学系

清　水　康　介	近代日本のブックデザイン史
青　澤　佑　樹	〈スタニスラフスキー・システム〉と演技についての新しい考察
大　野　　光	当事者の立場から考える不登校
武　井　綱　甫	アンドレイ・タルコフスキー映画における視聴覚的様式の研究
眞　部　和　也	ウィリアム・ジェイムズの『プラグマティズム』における気質についての考察
吉　田　一　弥	都市における演劇の位相について
秋　山　泰　弘	デカルトによる神の存在証明について
今　井　実菜美	身体と環境の関係　―包みこむ・躍る・「切り閉じる」
川　畑　朱　里	身近な国際化にむけた日記法の提案　―外国人研究者の受け入れに関するアクションリサーチ
嶋　　さやか	現代の日本における広告の変遷　～ブランドとメディアの可能性～
竹　中　悠　香	【自分にそぐわないような自分】を語るという体験
中　野　苑　香	「小さくて強いコミュニティ」の形成　―博多祇園山笠の事例研究から―
西　尾　今日子	ライトノベル主人公像に見る現代の若者
林　　翔　太	心的イメージとメンタルプラクティス　―心・身体・世界―
平　井　瑛　子	光琳芸術と京菓子の美　～光琳模様から～
藤　田　幸　一	『全体性と無限』における〈私〉について
朏　　めぐみ	共同作業としての「家族画」が持つ力　―家族構造療法の見地からの考察―

横井俊祐	女性ファッションの社会学的考察　―赤文字系雑誌の言説と語られる視線が20代女性読者に与える影響―
松尾　寛	David Hume の Essay「貿易の嫉妬」における商業・貿易活動と人間の自由に関する哲学的考察

認知情報学系

岡　敬二郎	プレゼンテーションの効果的手法について　～授業現場をプレゼンテーションと捉えて～
宇野真弘	レプリケーター方程式とその応用
瀬戸口　司	Java 中間コードに対する難読化を用いた識別情報埋め込み
田原裕子	日常言語における空間参照枠について　～京都の地理表現の考察を中心に～
松岡祐子	ゼブラフィッシュの TRP 遺伝子の網羅的単離
池本大騎	語彙の呈示条件が再認課題に与える影響
伊藤哉太	Gallic acid, an active ingredient of Pu-erh tea, acutely activates Akt in rat skeletal muscle （ラット骨格筋における没食子酸のAkt活性化作用に関する検討）
今川弘章	Synergistic co-activation in human bipedal standing （二足立位における制御ストラテジー）
入江祐輔	Cross-linguistic influence in English verb acquisition　―Analysis of Japanese learners' errors related to the argument structure（英語の動詞習得における母語干渉　―日本人学習者の項構造に関わる誤りの分析）
岩下大輔	空間一様なボルツマン方程式の解の一意性（マクスウェル型の場合）
岩永宇央	連結成分を利用した2値画像への情報埋め込み
内田健弥	The effect of a wear with dots for aeration on circulation and metabolism during running （ウェアの通気用ドットがランニング中の循環代謝応答に与える影響について）
大久保杏奈	英語の仮定法過去の多義性　―状態性・人称・話者の知識の観点から―
荻野陽平	Resveratrol acutely inhibits insulin-stimulated Akt phosphorylation in isolated rat skeletal muscle （ラット骨格筋におけるレスベラトロールのAkt抑制作用に関する検討）
小澤良祐	Relationship between heart rate and time perception during round trip （往復時の心拍と時間知覚の関係）
小幡晃一	小胞体ストレス応答性新規遺伝子 Leucine-rich repeat-containing 59 の機能解析
角野貴優	A threshold dose of heavy ion radiation that decreases the oxidative enzyme activity of spinal motoneurons in rats （ラット脊髄運動ニューロンの酸化系酵素活性を減少させる重粒子線の照射量）
金田拓巳	ヒト記憶過程における情動生成の効果に関する認知科学的研究
北川亜弥	IgA 腎症の一症例
木谷一登	Caffeine acutely modulates contraction-stimulated AMPK and Akt signaling in rat skeletal muscle （ラット骨格筋シグナル伝達における筋収縮とカフェインとの相互作用に関する検討）
久保　亮	ビールが血糖値に与える影響について
小林倫子	Effect of electrical muscle stimulation on prevention of young women with normal weight obesity （骨格筋電気刺激による若年女性の正常体重肥満防止効果の検証）
坂本祥太	南雲の一意性定理とその応用
寺川弘貴	喫煙の人体に与える影響
中村舞夢	Derivatives of reactive oxygen metabolites and biological antioxidant potential after exposure to hyperbaric oxygen （高気圧酸素への滞在が酸化ストレス度と抗酸化力に及ぼす影響）
西口美樹	経口血糖降下薬と降圧薬

平　井　　森	*In vivo* behavior of muscle-tendon complex in the human bipedal standing（立位時の筋腱複合体の動態）
平　井　理　紗	高次画像統計量の動物検出課題への有用性と回転による影響
方　城　素　和	Three-dimensional changes in intramuscular aponeurosis of rectus femoris revealed by ultrasonography（大腿直筋活動時の中央腱膜の変化）
毎　原　孝　平	朗読における、出身地の違いと聞き取りやすさの違い
松　村　雅　治	麻雀の局面に応じた鳴きの判定アルゴリズム
矢　澤　一　樹	パターン認識の概要および押弦制約付きギター演奏自動採譜システムの実装
山　田　麻友美	Protein expression levels of organic cation transporters (OCTs) in rat skeletal muscles（ラット骨格筋における organic cation transporter（OCT）の蛋白質発現量に関する検討）
山　田　雄　一	英語の抽象名詞における冠詞の用法について　―有界性・定性の付与とその例外―
吉　田　えりな	Effect of exposure to hyperbaric oxygen on diabetes-induced cataracts in mice（高気圧酸素がマウスの糖尿病性白内障に及ぼす影響）
米　田　　舞	SHIV-MK38 *env* 遺伝子における中和抵抗性獲得に関連する因子の検索

国際文明学系

加　藤　邦　太	違憲審査制と裁判所の役割
谷　川　　透	福島第一原発事故に伴う食品の放射能汚染についての消費者の行政に対する信頼
寺　田　恵　子	牛肉の放射性物質汚染問題下での消費者の牛肉選択基準　―大学生に対する選択実験より―
中　野　友加里	日本の安全保障における日米同盟の意義
七蔵司　万里子	トラウトマン工作
池　崎　　緑	限界質量モデルによる環境配慮行動の分析
板　垣　雄　太	大衆社会論の地平から見る専門家知識　―専門分化した知識から統合された知識へ―
伊　藤　昇　平	望ましい解雇規制の在り方とは　―手続規制を中心として
梅　垣　荘　太	確かな価値観の必要性とその可能性を探る　―現代の病に打ち勝つために―
大背戸　　淳	行政への民間導入に関する考察
大　槻　浩　之	江戸時代に培われた労働倫理と後世に受け継がれた「勤勉さ」　―日本の近代化をひもとくパースペクティブ―
菊　地　直　子	間接差別禁止規定の現状と展望　―アメリカとイギリスとの比較から―
窪　田　　頌	義鎮初期の大友氏権力構造　―小原鑑元を中心に
小　池　克　弥	歴史を「物語る」ということ
白　谷　久　美	女性のワークライフバランスと子育て支援の在り方
谷　山　広　展	在日問題を考える
豊　田　智　夏	和辻『風土』に見る日本的人間の特殊性
花　園　真　理	西谷啓治とニヒリズム
原　田　康　史	『参加民主主義におけるジャーナリズムの役割と倫理』　―市民に議論の場を提供するコミュニタリアン・ジャーナリズムへの転換―
前　川　貴　郎	日本におけるワーキングプアの実態と格差の解決策

松　浦　菜々美	日本の介護・看護分野への女性外国人労働者導入における将来的な課題と対応策
松　原　　久	コミュニティに愛着は必要か　―空間と共同性―
山　田　伊　織	福島原発事故の諸問題に対する国民の意識・関心　―テキストマイニングによるアンケート自由回答の析―
吉　岡　　資	国家の成立と国家承認の効果をめぐる対立構造の批判法学的分析

文化環境学系

井　上　慎　平	ツイッター上で構築されるソーシャル・キャピタル
生　方　友理恵	現代日本の狩猟
枚　本　友　里	ホンモノの国際交流活動と地域の多文化共生：京都市伏見区青少年活動センターでのサラダボウル project を例に
中　山　由美子	「血液型」性格診断と関わる　―信じる人々、信じない人々―
浅　田　静　香	大量消費社会におけるごみ減量実践　―「捨てる」ことへの抵抗―
飯　塚　　淳	アイデンティティ基盤としての場所と風景　―東日本大震災津波被害地域における空間と場所意識の変容―
大　原　健　之	東アジアとりわけ我が国で格安航空会社の成長が遅れた要因の研究及び格安航空会社の現在の特徴の発見
玉　置　紗　芸	叡山電気鉄道の敷設が洛北の開発に果たした役割
藤　井　隆　宏	京都北山の磨丸太産業をめぐる研究

自然科学系

薄　井　寛　子	琵琶湖から分離された新規シアノバクテリアの光質適応
成　田　隆　造	Vertical Distribution and Abundance of *Acaryochloris* spp. at the Center of Lake Biwa（琵琶湖湖心の鉛直方向における *Acaryochloris* spp. の量的分布）
服　部　恭　也	賀茂川に棲息するオオサンショウウオの生態について
相　磯　侑　花	イオン交換法を用いたマグネシウム二次電池ポリアニオン系正極材料の作製と反応機構解明
會　津　康　平	高効率太陽光発電のための透明導電性波長変換材料の作製と物性評価
井　上　梨佳子	軽元素で構成された有機分子性結晶の構造と気体吸蔵特性に関する研究
大　山　　純	有機電解液を用いたリチウム空気電池における酸素還元反応機構の解明
金　井　眞知子	「天狗の麦飯」微生物群集における物質フロー解明
神　田　　航	ミカヅキモによる硫酸バリウムの特異的生物濃縮
北　原　龍之介	^{87}Rb 原子を用いた1次元ボースガス及びその集団励起状態の生成・観測
小早川　祐　実	1950年から2009年までの気象庁震度観測記録の解析
櫻　井　亮　介	FeAs 系高温超伝導体の NMR
佐々木　和　子	散逸な系における量子力学　―密度演算子の時間発展と相空間表示―
佐　藤　佳世子	2011年東北地方太平洋沖地震による大阪堆積盆地の長周期地震動
正　田　　佑	琵琶湖に陸封された海浜植物ハマゴウの遺伝構造
白　石　巧　充	高い水素貯蔵率を有する多環式芳香族化合物の合成と水素化／脱水素化触媒反応の研究

高　岡　昭　平	液晶性ビラジカル化合物の合成と磁性に関する研究
田　中　　涼	機能性キノリノン系配位子を有する新規イリジウム錯体の合成とその触媒性能
津　田　裕　介	古細菌 Thermoplasma acidophilum の AFM を用いたゲノム構造解析
都　築　高　志	古座川における落葉供給とハムグリユスリカ類による落葉利用の季節パターン
日根野　貴　晶	^{87}Rb 原子気体の BEC 生成及びその超流動・Mott 転移の観測
安　田　さっこ	人工湧昇流による海洋肥沃化
山　﨑　　碧	新規時間分解型金属イオン蛍光プローブの開発、および機能評価
米　田　有　佑	Phylogeography of Vaccinium vitis-idaea (Ericaceae) in the Japanese Archipelago（日本列島におけるコケモモの系統地理）

平成24年度

人間科学系

伏　木　　桜	キタノ映画、マカロニ・ウエスタンから映画について考える
高　橋　和　人	大学生における自己嫌悪について
戸　嶋　祐　貴	デリダの手紙から
坪　井　大　地	ファイヤアーベントの ‘Anything goes’ 再考
朝　倉　正　弥	罪人統治機能としての刑罰と監獄　―フーコー『監獄の誕生』より
上　杉　明　理	いじめの深刻化を防ぐために必要なこと　―いじめの可視性を高めるための学校の隠ぺい体質の改善―
加　藤　義　之	描画を用いた大学生の「生」のイメージに関する調査
佐々木　恵　梨	アリストテレスの悲劇論とポピュラー音楽のカタルシス　～カタルシスを引き起こす詩作～
徳　原　靖　也	武道における「型」についての考察
深　澤　景　光	高坂正顕の「宗教的情操」　―「畏敬の念」から「積極的諦念」へ
真　鍋　崇　志	外部支援者が被災地域に生きる人々と語りあうこと　東日本大災害　～岩手県野田村における現場研究　震災 1 年目と 2 年目における野田村民の語り
安　藤　勝　哉	ドゥルーズの哲学
今　村　拓　道	職業としてのパフォーミングアート　―プロの大道芸人の事例から―
伊　村　優　里	「風景を共有できる空間」における住民自治　―鳥取県智頭町：地域振興協議会の事例―
大　原　玲　奈	模倣における自己と他者の関係性についての精神分析的考察
奥　岡　航　平	現代日本における規範遵守の動き
河　野　宏　明	学童保育における子どもの育ち
小　島　三　季	被災地復興に外部支援者によるまちづくりワークショップがもつ意義　―岩手県野田村のシャレットワークショップを事例として―
小　寺　郁　実	言語表現を介した爆笑の発生条件に付いて
近　藤　武　尊	「承認不安の時代」における行為選択について
雑　賀　広　海	剣戟映画『るろうに剣心』におけるアクション映画史上の革新性の分析
坂　口　量　子	「世界」に関する考察：バークリを手がかりに
佐　藤　亮　太	現代日本が生み出した “ファッションオタク” という処世術

中　上　洋　介	現代における人生相談
秦　野　貴　生	音楽と心
濱　田　有里枝	体験談から見るひきこもり　～新聞紙の内容分析から
増　田　洋　佑	Twitter 上の流言・都市伝説
三　浦　拓　馬	『知覚の現象学』における相互主観性の検証
柳　田　真　弘	自己開示と自尊感情及び対人関係の枠組みの変容について　―「受け止められる」という観点から―
山　本　崇　弘	自傷行為における精神力動の考察
渡　部　友　紀	就職活動を行う女子学生の「生きづらさ」

認知情報学系

藤　瀬　靖　寛	日本語アスペクト研究史　―アスペクト概念と素性―
高　田　康　穂	Morphological Observation of Songbird Embryo（鳴禽類胚の形態学的観察）
竹　原　正　之	連用形転成名詞の基盤と転成可能性の条件
木　村　洋　輝	静止立位時のフィードフォワード制御の予測因子
小　村　一　樹	視覚探索課題と主観報告を用いた精神集中の研究
斉　藤　さやか	糖尿病患者における血中脂肪酸と合併症の関連についての研究
杉　浦　信太郎	全身運動に於ける下肢の観察が上肢の皮質脊髄路興奮性に与える影響
野　北　明　寛	離散数理ファイナンス
三　澤　大　悟	Relation between viscoelasticity around the ankle joint and postural sway in quiet standing（静止立位時における、足関節周りの粘弾性と姿勢重揺との関連）
山　北　浩　平	食欲が皮質脊髄路興奮性に与える影響
渡　邊　拓　也	英語のイディオムにみられる定名詞句についての考察
飯　村　大　智	意識的な発話のコントロールへの注意が吃音者の文章理解に及ぼす影響
石　原　　馨	モナドを用いた手続き型プログラミング言語の実装
大　谷　ま　ゆ	動きベクトルの推定とエッジを考慮した色伝播に基づく動画カラリゼーション
岡　本　　彩	学生デモに見るケベック州の高等教育とケベック・アイデンティティ
岡　本　麻　里	SF-36 を用いた糖尿病患者における生活満足度に関する研究
川　崎　遥　奈	常用漢字の共感覚色に関する研究：データベースの作成と探索的分析
川　端　あずさ	Identification of multi-directional postural control in humans based on muscle synegies（筋シナジーに基づく多方向への姿勢制御の解明）
久保田　啓　司	自己運動に対する注意が運動の学習に与える影響
杉　本　　光	競争相手と目標の高さがエピソード記憶に与える影響に関する研究
芹　澤　康　浩	Leucine enhances contraction-stimulated AMP Kinase and Akt phosphorylation in rat skeletal muscle.（ロイシンは筋収縮によるラット骨格筋 AMP キナーゼと Akt の活性化を増強する）
高　木　啓　太	記憶更新課題を用いた視覚性ワーキングメモリの性質の検討
田　嶋　みどり	日本漫画の擬音語・擬態語　―認知言語学の観点から
立　永　真由子	高齢糖尿病患者における生活機能の測定

田　中　友　喜	視覚意識から抑制された刺激が視覚性短期記憶に与える影響
徳　増　雄　大	Inhibition of the Serotonin Synthesis Enzyme, Tph1b, Results in Shortened Body in Zebrafish Embryo.（セロトニン合成酵素Tph1bの阻害はゼブラフィッシュ胚において体の短縮を引き起こす）
富　永　仁　志	共同作業を通じての対人的不安と認知傾向の変化について
中　島　敬　之	学習指導要領の変遷とそれに伴う語彙数の通時的観測
能　勢　亜　衣	糖尿病医療費の増加とその抑制について
宣　本　花　凛	自己と他者に関連付けられた情動的な記憶についての検討
藤　井　亮　輔	オートマトンの圏論による基礎付け
藤　島　七　月	カオス力学系とフラクタル
町　田　雄一郎	認知的な視点から見た伏字機能についての一考察
松　永　健　太	Relative contribution of knee joint torque to postural stability（立位安定性に及ぼす膝関節トルクの貢献）
森　田　那　月	A new Method of Electrical Muscle Stimulation Induced Breast Enlargement（骨格筋電気刺激を利用したバストアップ方法の考察）
山　本　章　史	インクレチン製剤の血糖コントロールに及ぼす影響
山　元　さゆり	24時間自動行動下血圧測定（ABPM）による血圧日内変動の解析　～生活習慣の改善と疾患リスクの軽減～
山　脇　真　里	糖尿病患者の体組成：サルコペニアと肥満
横　井　　郁	The effect of autonomic nervous system on postural control（姿勢制御に自律神経系が与える影響について）
吉　井　隆　浩	遺伝子改変マウスを用いた特定の脳神経細胞集団の活性化による記憶の人工的再生
若　林　宏　光	A short bout of stair climbing / descending exercise ameliorates postprandial hyperglycemia in type 2 diabetes mellitus.（短時間の階段昇降運動は 2 型糖尿病患者の食後高血糖を緩和する）

国際文明学系

平　野　草　也	スポーツ倫理とリベラリズム　―ドーピング問題を通して―
十　亀　了　郁	デモクラシーの歴史的考察とその現代的意義　―見落とされた共同体の価値・理念・行為様式を取り戻すために―
松　岡　　愛	日本・ドイツ・スウェーデンにおける優生思想の実践の比較
吉　本　信　頼	介護現場の労働環境の改善に向けた考察
揚　妻　悟　史	「教育の機会均等」の観点から考察するアメリカの学生支援制度
足　立　悠　輔	中国共産党最高指導層の考察　―歴史と昇進ルート　中共14期大会（1992年）から18期大会（2012年）を中心に―
生　橋　政　徳	日米比較から考える日本のオープン・ガバメントの課題と対策
岡　　希　美	教職員の労働環境について
奥　田　俊　介	世論と外交政策の関係性　―ケネディ政権のベルリン危機政策分析を通して―
柿　木　美智子	BBC　―戦間期と戦時期における国民統合―
梶　田　英　里	商店街活性化に必要なことは何か　―京都市の事例から考える―
加　藤　雄　大	企業の環境経営推進要因　―環境経営度調査を用いた実証分析―

假屋　　譲	地熱発電拡大における初期投資費用
川合直也	投資信託の純資産額によるリスク引き下げを通したバンドワゴン効果
菊池　　隆	植民地主義の中の言語政策　L.ソシュール「*Psychologie de la colonisation francaise*」を通じて
須野田　　哲	日本の送電網の現状と展望　―分散型電源時代にむけた広域運用
高橋まどか	エリザベス朝期イギリスにおける私掠船の合法性の要因
竹田明香	地球環境大賞が企業パフオーマンスに与える影響　～成長性・収益性・市場シグナルの観点から～
玉井勝浩	NPO 法人の地域分析の決定要因　―政令指定都市を事例として―
中川拓朗	Immigrants from Hong Kong to Vancouver : Why they had to move, and their educational level in Vancouver（香港からバンクーバーへの移民、その背景と移民地での教育レベル）
名越　　恵	太平洋島嶼国の植民地化と独立の特異性　―イギリスとフィジーの関係を中心に―
濱田俊之	美術館の日米比較　―財務諸表分析を中心に―
原　　優子	中国の大学入試
福原綾菜	「第三者の審級」概念を用いたナショナリズムの理論的考察
益城裕司	2009年衆議院総選挙における政治的リクルートメントの考察
森　　淳希	「保護する責任」の履行確保と国際的コンセンサス　―2011年リビア内戦への介入を例に―
諸江和佳奈	映画「トラ・トラ・トラ！」に見るその製作意図と公開当時の作品の位置づけについて　―日米双方からの検証を通して―
脇本千尋	廃棄物行政と生活系ごみ排出量の関連性について　―大阪府下の自治体を事例として―
渡辺大士	駒田信二と鹿地亘と OSS　―情報史にみる日中戦争の断面―

文化環境学系

馬谷　　修	Algerian Crisis and Criticism of Nationalism in Ahlam Mustaghanimi's *Fauda al hawas*（*Chaos of the Senses*）（アフラーム・ムスタガーネミーの『感覚の混沌』におけるアルジェリアの危機とナショナリズムへの批判）
袴田春香	〈民衆抵抗〉を生きる　―占領下パレスチナ ビルイン村の非暴力直接行動の可能性―
安達千李	災害の民族誌、それ以前のこと　―2011年3月11日以来の経験から
坪井朋子	"食" から浮かびあがるイスラーム
初見　　翔	「理想郷」の生活者　―新しき村に生きる―
村山　　豪	日本をめぐる外国人労働者　―フィリピン人を事例に―
石崎麻依	農産物直売所が生産者に果たす役割　―新潟市北区を事例に―
小林由果	京の食文化と生活を支えた水資源としての地下水
佐藤陽一	コムデギャルソンのジェンダー規範を揺さぶる際のアプローチ方法の体系化
柴田泰秀	ツーリングライダーによる道の駅利用実態を踏まえた整備方針の検討
寺岡郁夫	近畿地方における砂岩の採石と地質
森　　雅之	京都大学時計台前広場の変遷

自然科学系

井村綾子	緑藻 *Botryococcus braunii* の生育に与える糖類添加効果

後藤隆志	イワシ群れの速い情報伝達速度の測定
近藤望	マグマオーシャン固結後のマントル —液相成分分化についての仮定と計算、再現実験
武元佑紗	両親媒性有機ラジカル化合物の合成
田邊真由美	液晶分子 3OCB の相転移挙動について
畑中修平	光格子による原子波回折
松尾諒	山霧の発生について　—デジタルカメラを用いた定点観測—
村田瑞記	核磁気共鳴法による量子スピンXY型三角格子反強磁性体 $CeZn_3P_3$ の研究
若林智美	Identification of *GIGANTEA* and polymorphisms of *E1* and *GIGANTEA* in *Lotus japonicus*（ミヤコグサにおける *GIGANTEA* の同定と *E1*, *GIGANTEA* の種内多型）

平成25年度

国際文化学科

伊藤玄	英語知覚動詞構文に関する考察

人間科学系

大島淳也	消費行動にみる若者の特性
副島孝仁	『利巧主義論』における快楽の質について　—J. S.ミル功利主義の特徴—
水野光	近年の若年女性の専業主婦志向に垣間見える一元的ジェンダーフリー社会志向へのアンチテーゼ
山原碧	A Study on the Problem of Evil in *Wuthering Heights*: In Comparison with *the Book of Numbers*（『嵐が丘』における「悪」についての考察　—『民数記』との比較から—）
林紗記	ドキュメンタリー映画『寮に住む』　—自主制作映画の方法論的考察—
新井翔太	B'z 哲学の構築　—現実はいかに乗り越えられるか？　歌詞解釈から導出される現代思想的世界観—
植田彩佳	都市と田舎の「共育」関係をつくる NPO 活動：「阪神・智頭 NPO センター」の事例
有年敏樹	九鬼周造の恋愛論
梅谷麻帆	若者の仕事意識の変化　—〈やりたいこと〉志向の現れとその実態
岡崎有紗	シュルレアリスム芸術との比較にみる統合失調症患者の絵画芸術における無意識の現れ
片山秀	パンクを読み解く　—芸術という視点から—
河村稀琳	J. S. ミルの『自由論』について　—二つの自由の同一性とその条件—
北村奈加	Jane Austen's Messages in *Persuasion*（*Persuasion* に描かれたJane Austen のメッセージについて）
木下紗央理	学習性障害を抱える子どもへの学習支援：「アジール親子塾」の事例
栗田寛子	「関係性」へのまなざしと執着　—腐女子と二次創作やおいの考察から—
栗本花織	世論とメディアの社会学的考察
嶋ゆりか	観光地バリにおける伝統芸能の現代的様相　—観光産業への適応とそれをとりまくバリ社会—
竹内彩帆	社会的排除の視点から捉えるセックスワーク
谷川嘉浩	デューイ宗教論の批判的検討
田村隆	インターネット上における反社会的な行為の告白に関する社会学的考察
鳥居寛	QOL 復興を目指す地域見守り活動　～岩手県野田村の事例～

中　川　公　貴	人間存在の持つ意味とは何か　～「他」への志向性から「意味」について考える～
中　田　信　人	The Prerequisites for Surprise in Detective Fiction: What Dose the Puzzle Game Need in *Trial and Error* by Anthony Berkley ？（探偵小説における驚きの必要条件　―アントニー・バークリーの『試行錯誤』のパズルゲームは何を必要とするのか）
橋　井　峻　佑	バイリンガル教育の理想的な開始時期
花　澤　想　平	特撮についての美学的研究
林　　志　保	セックスワーカーを労働者と認める必要性
伴　　友　太	“On the Very Idea of a Conceptual Scheme” についての考察
堀　内　翔　平	人間理性は普遍的条件下では普遍的行動をとるか？
溝　口　千　尋	年齢・世代を超えた自然との溶け合い：「大阪自然教室」の事例
三　宅　達　良	住民と外部支援者の協同による復興まちづくり：岩手県野田村の事例
山　本　　翼	現代文化における身体性の回復　―美しさと醜さのあいだに立ち現れる「かわいさ」―
吉　森　輝司郎	インターネット上の笑い表現の変化の社会的考察　～wという表現に注目して～

認知情報学系

新　津　由希也	The Relationship Between Electrical Muscle Stimulation and Stretch for Chronic Low Back Pain（慢性腰痛に対するストレッチと筋電気刺激法との関係）
小　林　恒　平	PGC-1 α and FOXO1 mRNA levels of the soleus and plantaris muscles in rats after hindlimb unloading（後肢懸垂によるラットヒラメ筋および足底筋の PGC-1 α と FOXO1 mRNA の発現量の変化）
八　杉　耕　平	現代日本語の接頭辞「大（オオ）―」について
由　見　　諒	サルコペニアに対する運動介入について
池　田　惇一郎	球技経験が物体の自由落下運動の知覚に及ぼす影響
井　上　拓　也	北海道方言の「ラサル構文」に関する認知言語学的考察
内　田　雄　介	活動交替の発現に対する上位中枢由来の入力の貢献
河　崎　優　子	A Study of Foreign Language Classroon Anxiety:The Relationship between EFL Learner Anxiety and Writing Performance（外国語学習における学習者の教室内不安に関する研究　―学習者の不安とライティング能力の関係に焦点を当てて―）
北　尾　悠　也	参照点能力から見る漫才の笑い
白　木　善　英	周期的および離散的予備動作が運動パフォーマンスに及ぼす影響
関　谷　　流	ルビテキストに関する認知言語学的考察
田　中　和　宏	コンピュータゲームでのモンテカルロ木検索と Connect 6 のコンピュータプレイヤ実装の試み
前　田　結　衣	糖尿病患者における血中ビタミン B_1, B_2, C 濃度についての研究
吉　田　光　希	Salicylate acutely activates 5’AMP-activated protein kinase in rat skeletal muscle（サリチル酸によるラット骨格筋 AMP キナーゼの急性的活性化）
青　山　悠　太	A Novel Rearing Method for Sexual Maturation of Zebrafish Within 50 Days Post-Fertilization（受精後50日で性成熟を可能にする新しいゼブラフィッシュ飼育方法）
稲　月　あかり	小型魚類ゼブラフィッシュの行動に対する抗うつ剤フルオキセチンの効果
井　上　優　子	既知の人物の連想が顔記憶の記銘に与える影響についての研究
大　森　悠　希	Effects of Microgravity on the Mouse Triceps Brachii Muscle（微小重力への曝露がマウス上腕三頭筋に及ぼす影響）

越　智　宣　之	Analysis of features of living prey evoking predatory behavior from pygmy squids（ヒメイカの捕食行動を引き起こす獲物の特徴解析）
樺　木　　純	部分的色相マッチング法のコンピュータ実装：基本色と色覚型の関係分布への展開
鎌　倉　裕　介	視覚探索時の眼球運動に背景の構造が及ぼす影響
新　垣　ほのか	健忘症患者における作話現象に関する検討
杉　田　彰　子	認知プロセスに即した明示的リスニング教育について
田　中　未　来	現代社会におけるジェンダー表現の考察
谷　口　智　子	ミトコンドリア病モデル生物作成のための DNA 編集技術の開発
冨　山　玲　子	ジャグリング経験の有無と多物体追跡課題成績の関係
土　手　しきほ	顔記憶における記銘方略の違いが想起に与える影響の解明：健常若年成人と健常高齢者の比較
長谷部　泰　子	Effect of Speed Difference of Same Load Exercises on Metabolism（同じ負荷の運動のスピードの違いが代謝活動に与える影響）
早　尾　早　紀	視覚性ワーキングメモリの保持における注意の切り替えに関する検討
東　　亮　太	顔の情動情報が視覚的統計学習に及ぼす影響
福　田　瑞　穂	Identification of the gait transition in human based on muscle synergies（筋シナジーを捉えた相転移の解明）
福　原　早　紀	Effect of Belt-Type Skeletal Muscle Electrical Stimulation on Waist Circumference（骨格筋電気刺激による腹囲減少効果の検証）
守　屋　夏　実	非侵襲な心拍数測定法の開発とその応用
山　崎　英　治	Stiffness ellipse control of human standing（下肢終端位置の粘弾性による水平面での立位制御）

国際文明学系

飯　郷　　徹	源氏物語における「世」のあり方
加　藤　達　也	『指輪物語』に見る「魔法使い」の物語での機能
川　上　　翔	現代におけるヘンリー・ミラー　―『北回帰線』に見られる拒絶と受容―
森　　英　章	有期雇用改革　―労働契約法改正について―
中　島　頌　太	ノマドブームの背景とフリーエージェントに関する考察
森　本　　篤	日本における雇用システムのあり方　―ギャップイヤーを切り口として―
吉　川　智　美	ルワンダ内戦・ジェノサイドの原因と再発の予防
奥　村　政　哉	奈良県橿原市における定住促進型観光政策の実現に向けて
川　嶋　康　徳	北方領土の問題解決に向けて　―北方領土返還運動原点の地、根室を訪れて―
佐　藤　耕　一	総合人間学部の未来を考える　―行動経済学的視点によるカリキュラム分析に基づいて―
塩　入　裕　子	労働党政権下における英国のシティズンシップ教育　―多文化共生社会の形成をめざして―
時　政　和　輝	朱子学・藤樹学・素行学における『大学』解釈の差異について
中　山　平　祐	シンガポールにおいて―党優位制が維持されている原因とは何か？　―民主化移行論から見た考察―
廣　海　浩　平	金融危機はなぜ繰り返すのか
皆　川　聡　美	マス・メディアによる展覧会事業　範囲の経済性の分析

森田英典	日米安保体制の与える弊害とその核心である日米地位協定の考察
山岸　充	日本経済団体連合会による倫理憲章が高学歴層の学生の就職活動・学業に与える影響と意義
山本哲史	プリウスのブランド価値　ヘドニック法による推計
宇仁伸吾	関西経済の可能性　―文化的中枢管理能力の観点から―
大城　咲	被害者の主観を判定基準とすることの困難性について　―セクシャル・ハラスメント、児童虐待の事例から―
荻原みなみ	中小企業で働く女性たちのワーク・ライフ・バランス（仕事と子育ての両立）実現のために
川合秀治	名古屋市における新しい住民自治　―地域委員会について
川口　峻	韓国「進歩派」メディアの北朝鮮報道変化　―月刊誌『マル』の場合―
川﨑兼人	盤珪と西洋近代哲学　―自己認識の実像―
北戸明良	知られざるスパイ Pick Hovans とそのネットワーク
古賀愛子	新聞報道における情報源の観点から見る、東日本大震災発生直後の報道の検証
小室美奈恵	アフガニスタンにおける平和構築のジェンダー主流化　―人間の安全保障の再構築を目指して―
齋藤光史	百万遍手づくり市における新しい公共　―定期市開催による市民社会の強化―
白土悠平	今後のミャンマーの外国直接投資による開発戦略
鈴木佳穂	愛知県豊田市におけるブラジル人生徒への進学支援の現状と課題
樽本杏里	高等教育入学選考における新たなアファーマティブ・アクションの提言
西岡沙季	Support for Persons with Autism Spectrum Disorder in America　―Focused on Their Stage of Transition to Adulthood―（アメリカにおける自閉症スペクトラム障害者支援　―大人への移行期間に焦点を当てて―）
福田ゆり子	埼玉県の中小企業の国際化のために行政がすべきこととは　―グローバル人材育成センターの可能性―
松岡孝明	第 2 次世界大戦後から冷戦初期にかけてのアメリカの外交政策とソフト・パワー　―Voice of Ameirca の活動を通して―
松本　昇	アジア通貨統合に向けてのロードマップと課題
村上允俊	マルクス・宇野弘蔵の恐慌論
矢持　力	アメリカにおける新旧 SDS の平和意識の比較　―反戦運動を通じて―

文化環境学系

笠木　拓	子どもとつどう場　―地域子育て支援の現場から―
丸谷愉以	1925年から1945年の日本の農村における住生活改善の取り組み　―雑誌『家の光』に現れる記事属性の傾向から―
佐藤　愛	日本社会を生きるヤング・ムスリマ　―個人および集団としての「ライフ」
范　凱翔	現代に生きる中国帰国者たちのエスニシティ
伊藤奏美	なぜ「ユダヤ国家」にとどまるのか　―反シオニスト・ユダヤ知識人の思想的抵抗
勝又阿暁	練習場所のあり方とその移転をめぐって　―交響楽団と学生集会所・プレハブを題材に―
権藤拓樹	富山と Freiburg の都市中心から見た環境
中野悠希	ロシア語の前置詞 u と主題の関わりについて

自然科学系

弓　山　やよい	人工的にα-カロテンを蓄積させた *Synechocystis* sp. PCC 6803 の研究
浅　井　悠　志	ミトコンドリア標識能を有する亜鉛蛍光プローブの開発
妹　川　陽　香	Salt tolerance of wild radish *Raphanus sativus* L. var. *raphanistroides*（Makino）Makino （大根野生種ハマダイコンの耐塩性）
大　谷　　響	無機酸性河川域における化学成分の分布と動態
音　石　　遼	振動する光格子中におけるボース凝縮体の臨界速度の観測
金　光　浩　志	シングル・マルチモードレーザーを用いたダブル光双極子トラップによる BEC の生成
鈴　木　新　人	代謝中間体であるγ-カロテンを蓄積させた *synechocystis* sp. PCC 6803 形質転換体の解析
田　中　雄　飛	イリジウム錯体触媒を用いた第一級アルコールの脱水素的酸化によるカルボン酸合成
出　口　　確	一本鎖 RNA の構造の可視化解析
道　久　真理絵	阿蘇火山火砕流堆積物中のアパタイトの揮発性元素組成
日　岡　　惇	石灯籠の建立・修復・再建年代及び破損状況から見た歴史地震の影響
松　崎　乃里子	赤色長残光を示す Cr^{3+} 添加透明結晶化ガラスの作製と光学特性評価
森　　有　彌	ジペプチド結晶が発現する気体吸着特性に関する研究
山　口　昌　太	フラクタル日除けによる遮断蒸発の観測
山　中　祐　治	周期的微小重力型重力波検出器の開発
吉　成　崇　宏	マグネシウム二次電池オリビン型正極の反応機構

平成 26 年度

人間科学系

村　上　翔　太	若者の人間関係とスマートフォンについての研究　―SNS の働きに注目して
安　田　達　也	質問紙による質的調査を用いたヒッチハイクにおける利他行動と恩への報い方の検討
伊　藤　和　人	「キャラ化」する現代　～若者の感性とネット社会のコミュニケーション～
井　上　裕　太	J.S. ミル『自由論』について　危害原則の批判的検討
荻　野　悠　一	アルフレッド・エア『言語・真理・論理』をめぐって
久　保　紀　貴	スポーツと平和との関わりについて
千　葉　遼　介	「空気」を形成する日本人的パーソナリティーの数量化
秋　本　　茂	現代の感染症と社会不安
東　　里帆子	夫婦関係の満足度を高める要因について　～「修復」という観点から～
江　盛　咲　子	ビルドゥングス・ロマンとしての『クリスマス・キャロル』：スクルージの改心における愛とお金の意義
大　澤　夏　実	やおい二次創作を楽しむ女性
小　島　　燎	音楽の社会的意味　～3.11 の被災地における音楽活動～
近　藤　真　帆	「感じられる自己」の探索　語り合い法と粘土制作を用いて
佐　藤　彰　洋	人々は何を見て在特会に加担するのか　～在特会会員数増加化と各種情報媒体における登場頻度との比較から～

佐藤　温	『魔法にかけられて』から見るディズニーの新たな主張
辻本裕子	ファッション雑誌『CanCam』における「かわいい」
戸田叶子	食とアートのイベントを軸とした地域活性化の取り組み　―京都府亀岡市の事例
永山はるか	就職活動における女性の服装の変化に関する考察
原岡友里	『ハリー・ポッター』シリーズにおける「代理母」をめぐる考察
藤井慎太郎	Emily Brontë's Conflict in *Wuthering Heights*: With a Focus on Heathcliff's Life（『嵐が丘』におけるエミリー・ブロンテの葛藤　―ヒースクリフの生を通して―）
藤森伯文	わざ習得の過程についての研究　～助言はどのように生かされるのか～
松尾昂平	身体の病への西洋医療と代替医療のアプローチ　～病気への受動的マインドから積極的マインドへの招待～
眞鍋公希	特撮とリアリティ　―ウルトラマンを題材とした言説分析とその考察
三村希祥	SNS の普及による日常のイベント化
三吉貴大	〈バズワード〉の社会学的考察　―〈Web2.0〉と〈集合知〉の言説分析を通して―
向井大介	二つの団体を中心とした過疎地域の活性化への取り組み　―山口県長門市向津具半島の事例
若林　感	要介護者中心の介護はなぜ行われるのか
渡邉大貴	美容整形の広告分析：なぜ、ためらってしまうのか？

認知情報学系

永久保達也	Behavior of muscle fiber during upright standing with rapid perturbation（外乱を用いた立位時の筋線維の動態）
鈴木大河	Two short bouts of stair climbing/descending exercise attenuate postprandial hyperglycemia in people with type 2 diabetes mellitus（短時間の2回の階段昇降は2型糖尿病患者の食後高血糖を緩和する）
大山翔平	自己描写に用いる動物メタファーに関する認知言語学的分析
糟野新一	AR（拡張現実）を用いたゾム立体の展示の実践
小林翔太	「声がふれる」のメタファー構造　―竹内敏晴の「話しかけのレッスン」考察
須川恭至	英語前置詞 into の多義性についての考察
住田　亘	アミノ酸摂取が骨格筋タンパク質代謝に及ぼす影響
中村俊夫	低温飼育によるヤマネの骨格筋での酸化系酵素活性の変化
中村優佑	精神疾患モデルゼブラフィッシュの網羅的行動解析
溝畑尚也	Quantification for the muscle direction wish maximum contribution to endpoint force exertion（終端力発揮への筋の最大貢献方位の定量）
横田睦波	ベルト電極式骨格筋電気刺激法のインターバルトレーニング型刺激パターンによる運動効果の検討
安達瑛翔	垂直星型フラップを持つ平面テッセレーション折り紙
岩渕　稜	心室拡大を呈する小型魚類ゼブラフィッシュ変異体の心拍数の解析
大谷和弘	方位知覚再現課題における頭部回転と知覚精度との関係
大月弘太郎	メタボリックシンドロームを発症するラットの骨格筋における軽度高気圧酸素の影響
蟹澤侑子	Analysis of Functions of Alzheimer's Disease-Related Protein TIP60 Using Zebrafish（ゼブラフィッシュを用いたアルツハイマー病関連タンパク質 TIP60 の機能の検証）

河　野　安里佳	人工プロモーター配列を用いた転写メカニズムの解明
楠　田　友妃菜	caspase の切断予測とその検証
小　林　咲里菜	軽度高気圧酸素への滞在は疲労からの早期回復を期待できるか
柴　田　柚　香	前頭葉に障害を持つ児童の研究
嶋　　隼　輝	遠隔記憶における要素と時間的距離との関係に関する研究
正　木　かおり	日本語の文脈指示詞の研究　―物語におけるコ・ソの選択について―
須　田　智　晴	Gradient-Hamiltonian Decomposition について
関　根　圭　一	Galk acid acutely stimulates protein synthesis in rat skeletal muscles（没食子酸はラット骨格筋の蛋白質合成を促進する）
高　木　啓　雄	Muscle synergy of human vertical jump（ヒトの垂直跳びにおける筋シナジー）
田　中　愼　吾	ゼブラフィッシュ頭部誘導メカニズムの解明
冨　田　真　吾	Quantification of Impedance Ellipse in Human Standing（立位中における粘弾性楕円の定量）
新　原　成　華	広告表現に関する認知言語学的分析
西　田　光　治	Comparison of muscle synergies for running between different foot strike patterns（筋シナジーの観点から見た走行動作のつま先接地と踵接地の比較）
松　本　佳那子	視覚にかかわる表現の新規用法について
水　谷　早　希	運動様式と被験者の違いが食欲に与える影響
室　谷　直　希	日本の高等教育における「グローバル化」　―「スーパーグローバル大学等事業」の分析を通して
矢　野　泰　樹	創造性が記憶に与える影響
吉　田　弘　生	物体の大きさと音色の感覚間協応に関する検討
渡　部　　崇	強化学習の俯瞰と FX 取引を例とした実験

国際文明学系

物　井　佳　奈	千葉県柏市における地域医療の未来　～在宅医療の推進に向けて～
小　幡　洋　平	戦後共産主義に教化され帰国した日本人兵士について
神　戸　信　昭	「自由」の概念と宗教的人格との関係　―キリスト教と禅との比較―
小　林　拓　水	ホームレスに対する市民の意識形成に関する実証的研究　―京大生のアンケート分析から―
佐　伯　　真	国内競馬における戦力バランスと投票行動の関係性　― 2 つのアプローチによる分析
坂　田　善太郎	アントウェルペンから見る「大分岐」
白　川　拓　人	NPO が日本で普及するには何が足りないか
谷　　紀　俊	1870年代におけるビスマルクの教育政策について
谷　崎　則　之	賦課方式医療保障制度という理念の下での医療費削減策
古　谷　健　人	コモディティ市場における歴史に支えられたブランド価値による打開策の検討
山　本　裕　貴	Cycling Policy and Street Design in Kyoto City　―Cyclists' Preference and Effective Policy Making―（京都市における自転車政策と道路のデザイン　―自転車利用者の性向と効果的な政策）
岩　木　雅　宏	国力論　―「力」の哲学的考察より―
請　川　　玄	行動ターゲティング広告の進化ゲーム理論分析と回帰分析

方　山　愛　子	総合型地域スポーツクラブの継続的な運営を支える要因　―兵庫県下 6 クラブのケーススタディから―
瓦　林　典　也	地方空港活性化における LCC、リージョナル・ジェットの役割
須　崎　翔　太	宇都宮市 LRT 計画への反対運動の背景的要因
多　田　千　鶴	「アジア的価値」の再考から検討する、国家と個人のあり方
トン　クイナン	農民工の教育格差とそれに対する打開策　～上海地区を中心に～
細　田　文　武	泰山封禪　―とくに宋真宗のそれについて―
三　浦　麻由香	「宴席詠雪月梅花歌一首」について
村　上　絢　一	今堀日吉神社における中世年中行事の復元的研究
室　伏　崇　伸	精神障害の業務上・外認定　保険給付の支給段階化の提案
森　　政　貴	京都市バスの営業係数が改善した要因の分析
安　見　光　平	訴訟上の和解に対する考察　―「訴訟行動論調査」に見る当事者の立場からの和解―
吉　川　　元	京都市における学校跡地利用に関する実態調査
米　澤　里　紗	行動経済学を利用した経営戦略
渡　辺　あかね	カール・ポランニーについて
檜　垣　　浩	米西戦争と新しいアイデンティティーの発見

文化環境学系

田　中　佑　太	高山樗牛の美と道徳
岩　沢　真梨絵	近代京都と社交ダンス
植　田　　嶺	根拠地としてのシンガポール　―19世紀初頭のイギリス植民地政策において―
高　坂　　魁	人々は京の「口」をどう捉えたか
竹　林　朋　子	修学旅行における学びの提供者　～京都市を例に～
豊　泉　奈緒子	個人レベルの日韓関係における韓国文化理解　―韓国在住の日本人結婚移住女性を中心に―
鳴　尾　翔　太	「島」と「町」の対立構造とその克服　―「原発反対の島」祝島における「自然」の位置―
松　田　優　拓	週末業者の修験道　―神峯山寺修験の会の事例から―

自然科学系

土　佐　悠　生	一次元クーロン系の研究
下　中　大　也	高温超伝導体 $La_{2-x}Sr_xCuO_4$ の準粒子構造の研究
岡　島　美　咲	植物から放出される反応性微量成分の総炭素濃度測定手法の開発
團　塚　康　祐	紫外光 UVA を単一光源として生育する微細藻類の分離
秦　　大二郎	Phylogeography of *Therorhodion camtschaticum* based on the sequences of nuclear loci （核 DNA 遺伝子座の塩基配列情報に基づくエゾツツジの系統地理）
井　川　桃　子	可動サンゴと寓居ホツムシの賃貸共生
栢　菅　朋　哉	コバルト錯体触媒を活用するアルコールの酸化反応に関する研究
中　井　康　平	酸性河川における pH 変動と化学成分の動態

松　野　佑　成	通性嫌気性真核生物 *Brevimastigomonas anaerobica* におけるミトコンドリアゲノムの縮退進化と低酸素に対する遺伝子転写制御
松　本　智　也	酸化チタン光触媒を用いた置換ベンゼンへの選択的芳香環アセトニル化反応
村　田　美　咲	カンラン岩中の硫化鉱物における強親鉄性元素の不均質分布
矢　原　竜　馬	中温型有機ハイドライド燃料電池の開発
山　﨑　啓　也	核膜孔複合体を介した双方向の分子輸送機構の解明
吉　田　圭　汰	光分解反応による RO_x（OH, HO_2, RO_2）ラジカル生成能の包括的な評価

平成27年度

人間科学系

吉　井　穂　高	精神障害者と人権
松　木　順　平	人肉食とその語りの分析
山　中　千　佳	結婚観と家族観の変容　―夫・妻としての意義―
足　立　朋　也	射精のジェンダー学　―射精への意味付与と嫌悪感を分析する―
太　田　亮　介	高校生と地域住民の「共育」を目指す高校教師のライフヒストリー
尾　﨑　　純	『知覚の現象学』における言語論と対話の可能性
川　北　天　華	The Motif of ‘The Modern Prometheus’ in *Frankenstein* : Childbirth and Authorship for Mary Shelley（『フランケンシュタイン』における「現代のプロメテウス」のモチーフについて：メアリー・シェリーの出産と創作）
田　中　　匠	起源を語る物語に対する精神分析的視点からの解釈
西　尾　太　樹	Saki の幼年期の境遇からみる、‘Sredni Vashtar’ の読解、および彼の同性愛からみる ‘The story of St. Vespaluus’ と ‘Gabriel Ernest’ の読解
二　宮　　望	ヴァルター・ベンヤミンにおける視覚性について
村　上　　岳	東日本大震災におけるボランティアネットワークの組織論的考察　～チーム北リアスの活動研究を通して～
吉　田　　純	芸術における非物質的なものについて
吉　田　奈　穂	英国におけるシティズンシップ教育の実践
大　村　俊　彦	震災復興から地域活性化へ　～野田村における民泊事業のエスノグラフィーを通して～
風　間　　司	現代社会における「コミュニケーション」の理想と現実
鹿　野　亜由利	何が保育者を支えるのか　―「困難」と「支え」の関連性に焦点を当てて―
吉　川　将　平	日本のハロウィン・ブームが表す現代社会　―1980年代におけるクリスマス・バレンタインデーとの比較考察から―
桑　原　　愛	日本における巡礼とツーリズム　―伊勢参りを例に―
澤　田　晃　平	生権力とリーダーシップについて
中　元　洸　太	トマス・リードの知覚理論における「判明ではない知覚」について
中　山　祐　貴	伝承遊びにおける精神分析学的考察
堀　部　映　理	音楽によって伝わるものとは何か　―ベートーヴェンにおける「失われたもの」に着目して―
三　枝　茉　央	『π』にみられるアロノフスキー　創作の根源
山　下　瑳弥子	教員の過重労働と地公災基金公務外認定処分取消訴訟の分析

山　森　実　希	フッサール初期時間論における二重の志向性と時間の構成について
米　田　　剛	訪日外国人旅行者のゲストハウス需要　―京都市を事例に―
渡　　洋　輔	アーレントの活動概念について

認知情報学系

三　浦　祥　敬	企業内の理念の浸透とソーシャルキャピタルの関連性
新　井　真理子	共感覚的比喩表現に基づく音のイメージに関する考察
窪　田　敦　之	反応の抑制が価値駆動的な注意捕捉に与える影響
清　水　雄　哉	日本の英語教育の現状に対する考察
立　石　真之祐	認識を基にしたオクシモロンの分類と分析
中　原　　匠	画像解析に基づくモノの仮想楽器化手法
松　木　結美歌	Repeated short bouts of stair climbing/descending exercise after meal improve glycemic control in subjects with type 2 diabetes mellitus（食後に反復して行う短時間の階段昇降運動は 2 型糖尿病患者の血糖コントロールを改善する）
松　下　大　祐	カテゴリーと新規表現の認知言語学的分析　―具体例としてのラーメンを用いて―
吉　川　光　則	道徳的感情が顔記憶に与える影響
石　田　育　子	英語中間構文の使用に関する認知言語学的考察
伊　藤　篤　希	ソシオメトリック・ステータスの対人行動への反映： 文化心理学的検討
今　仲　　正	「LINE」会話の終結部に見られる現象についての考察
上　野　貴　史	画像認識のための Convolutional Neural Network における fine-tuning の一手法
宇　都　秀　太	Subject Scrambling under Negation（否定辞下における主語のかき混ぜ）
岡　本　直　宏	音の快・不快情動を司る脳の情報処理
春　日　悠　生	福岡県久留米市方言の終助詞「タイ」の意味
上　村　太　一	仮想空間において高度推定を行った際の実際の高度と推定高度の関係
近　藤　七　海	共感と記憶の相互作用とその個人差に関する検討
東海林　卓　人	Brown and Levinson（1987）のポライトネス理論の再考　―“Rationality”, ポジティブ / ネガティブの二方向性、「フェイス・リスク見積もりの公式」の観点から―
千　原　正　寛	頂点代数と KZ 方程式
辻　　隆　史	特徴ベースの注意が単眼視覚情報に与える影響
辻　　直　樹	他者の顔の記憶における、自己と社会的報酬の相互作用に関する検討
内　木　正　隆	深層学習における最適化理論
中　里　　真	Fractal-like fluctuation in muscle synergy activity during human walking（歩行における筋シナジーのフラクタル変動）
中　村　博　文	型付入計算周遊
庭　瀬　裕　子	自伝的記憶と結びついた感情に記憶想起時の気分が与える影響
橋　渡　智　也	視野内のフレームの傾きがダーツ投動作に与える影響
長谷川　　卓	学問としての笑いと現代の漫才との比較　―チュートリアルの「仮想的漫才」考察

本　美　亮　祐	Unloading-induced atrophy and decreased oxidative capacity in the soleus muscle of rats are improved by pre-and post-conditioning with mild hyperbaric oxygen（無負荷によって生じるラットのヒラメ筋における筋萎縮と酸素能力の低下は、その前後の軽度高気圧酸素への滞在で改善できる）
圓　山　　圭	日本語「言いさし文」の分類について　―省略に注目して―
村　岡　ひかる	情動が予定記憶に与える影響とその個人差に関する検討
山　下　開　地	運動パフォーマンスに影響する要因の文献研究

国際文明学系

安　藤　穂　高	サラブレッドと他のヨーロッパ軽種馬の比較考察
楠　　洋　平	日本的雇用慣行制度の機能不全から生じる諸問題の解決へ向けて
水　内　　樹	謡曲「定家」の形式
今　任　英　信	証券民主化運動以降の個人持株比率低下の要因分析
岩　本　浩　市	生協における着席行動の解明
大　柳　　慧	近代世界システムにおけるオランダと日本
加　地　　誠	派遣労働を「新しい働き方」として再定義できるか　―労働者派遣法改正による変革
小　林　謙　太	熊凝歌の背景　―憶良の文芸意識―
長　村　実　香	中央競馬における各馬の主観的勝率と客観的勝率の関係性の考察およびその活用
成　瀬　圭　将	行政による地域猫活動の支援はどうあるべきか　～京都市まちねこ活動支援事業を事例として～
深　田　健　吾	有り得べき別の社会の可能性を構想するために　―時枝誠記の「辞」概念を用いて
前　木　秀　光	渋沢栄一の論語観　―仁についての比較・考察―
向　島　　徹	ジョセフ・グルーの天皇観　―日本占領をめぐる外交において
森　岡　花　梨	治安維持法と「転向」　―平沼騏一郎と小林杜人をめぐって―
横　山　　凜	日本人の宗教的な意識に関する実証的研究　～大学生に対するアンケート調査から～
渡　辺　真知子	美的感覚における日本人の白人コンプレックスについての分析
秋　山　大　樹	チベットはいかにして国際的関心事となったか
岩　尾　夢　香	バレンタインデーの社会的損失
内　山　登紀子	全体主義の誘惑　―前ファシズム期ドイツにおける「空気」についての考察―
江　連　沙　織	日本と中国の近代歴史教育の比較　―日中歴史教科書問題の観点から―
麻　植　文　佳	久坂葉子の自殺要因に関する考察
小　川　秀　人	近代住宅の保存及び継承の新たな方法の可能性について　―塩屋の旧ジョネス邸を事例として―
河　嶋　裕　輝	妊娠による軽易業務転換を契機とする降格の違法性に関する最高裁判決の検討
木　下　皓　司	プトレマイオス朝末期の対ローマ関係　―軍事力を媒介に―
小　崎　勇　周	出生行動選択における相対所得仮説の検証研究
清　水　博　匡	木材輸入に対する余剰分析
高　取　諒　輔	宮城県浦戸諸島の島民が求める政策　～浦戸一体化計画～
田　中　裟　椰	Obergefell v. Hodges 判決の民主主義的正当性に関する考察　―「司法審査と民主主義」論から―

寺　島　和　志	バブル経済から見たこれからの社会の進むべき方向
野　尻　　勢	ステルスマーケティングに対する関係性明示義務規制を日本に導入することの是非
秦　　一　貴	長時間労働是正に向けて　～年次有給休暇制度改革への提案～
濱　﨑　優　太	就職活動の不思議の経済学
藤　井　太　郎	「グローバル化は21世紀の流れである」という見方について考えてみる
堀　田　華　絵	韓国にはなぜキリスト教信者が多いのか
前　田　健太朗	「尊厳死法案」の検討　―論点の整理と評価の試み―
間　野　　祐	石油産業におけるCSRガバナンス　―政府・オイルメジャー・NGOの協調と対立
萬　野　　彩	キャラクタービジネスによる地域振興の可能性をさぐる
武　藤　　稔	ふるさと納税における返礼品制度に対する評価
村　山　俊　紀	介護離職問題の解決と介護休業制度　―育児介護休業法第29条の義務規定化の提案―
森　下　　舞	地域振興イベントの継続的開催　―京都府伊根町の伊根博覧会を事例として―
保　島　卓　充	AIIBと中国の未来
山　内　葉　月	ホワイトカラー労働の特徴と、これからの労働時間規制
山　岸　将　暉	「行政の政治的中立性」論の規範的・経験的検討　―1990年代の政治変動前後を対象に―
山　下　浩　輝	大学を通じた学卒者の地域就職定着化
山　本　文　香	貨幣追求の倒錯性と価値の形態　―資本の定式としてのW－G－W’の可能性―
由　藤　聖利香	地域発展を目指した六次産業化のあり方とは　―京都府南丹市美山町の美山牛乳を事例に―

文化環境学系

市　川　森　彦	なぜ「特攻」で平和を訴えるのか　―新聞投書にみる「特攻」の継承―
岡　村　さくら	寛容の縮図　―コンタクト・インプロヴィゼーションの一側面として―
佐　竹　秀　太	居住地としての京都市　―大学生の住環境―
中　島　徹　哉	企業のスポーツ支援に関する研究
山　本　紘　平	〈パレスチナ〉に帰る　―イルラエルに生きるパレスチナ人LBTQの思想的地平
井　上　　緑	放射能と共に生きる　―放射能を「気にする」人、「気にしない」人 の分断
太　田　明　宏	日本における西洋の食文化の受容　～『女子大学講義』と『家庭週報』を通して～
大　竹　　碧	1980年代から2000年代における地方移住の傾向変化　―メディア分析と滋賀県長浜市の移住者の語りを手掛かりとして―
北　西　諒　介	施設名称に着目した地名利用に関する考察
吉　良　和　也	日本の大都市圏の郊外における社会増減の分類とその考察
近　藤　結　衣	六甲アイランドの持続可能性
平　山　朋　実	日本における韓国プロテスタント教会　―その民族主義的性格に着目して―
室　田　定　政	京都「寺町・御幸町」における古着店集積と古着文化
山　本　裕　子	近代における滋賀県の風光利用策

自然科学系

川　原　圭　貴	高温超伝導体における非整合スピン相関
瑞慶覧　長　空	鉄系超伝導におけるフェルミ面縮小効果
高　島　真　弘	液晶性棒状分子 3OCB の結晶化および相転移について
広　田　　翔	波を推進力とする動力の開発
丸　山　恭　平	医療応用を目的とした六方晶窒化ホウ素の合成、化学修飾及びその評価
綾　仁　荘　子	コオロギ（*Nisitrus sp.*）の摂食選好性を利用したオオバギの非アリ防衛強度の評価
大　島　七　海	Characterization of caesium accumulation in wild radishes （大根野生種ハマダイコンにおけるセシウム蓄積特性の解析）
小　林　沙　織	円運動を行うボース・アインシュタイン凝縮体の生成
高　橋　大　樹	Molecular phylogeny and taxonomic implications of Asarum（Aristolochiaceae）based on ITS and matk sequences （ITS 領域と matK 領域に基づくカンアオイ属（ウマノスズクサ科）の分子系統と分類学的考察）
田　中　寿　樹	イリジウム錯体触媒を用いたセルロースからの水素生成反応に関する研究
沼　尾　優　希	ラセミ体医薬品の優先富化現象
藤　井　富　秀	レーザー分光法を用いたオキシダント・エアロゾル生成を駆動する大気ラジカル（HOx）連鎖反応系の解明
山　中　壱　朗	フェニルアラニンとグリシンから構成されるジペプチド誘導体の合成、結晶構造、および気体吸着特性に関する研究

平成 28 年度

人間科学系

雪　野　敦　典	『パターン』とは別の仕方で
平　原　健　太	ジゼール・ブルレ『音楽創造の美学』における「形式」に関する考察
鈴　木　麻有子	青年期における恋愛様相の考察
馬　場　雄一朗	引きこもる人の心はどのようにして変わるか
緒　方　　惇	「あがり」の現象学的研究
三　好　奈　巳	宮崎駿作品における女性の描写
井　口　智　博	福島第一原発事故の「復興」言説に見るリスク社会の不安
板　本　慎　司	ミルの功利主義について
門　間　ゆきの	関係を生み出す地縁技術　―東北タイ、カオボンのカティップ（竹籠）づくりの事例―
黒　河　雅　樹	『オリバー・ツイスト』におけるオリバーの主体性をめぐる考察
坂　根　衣璃子	青年期の母娘関係について：「上下関係」と「横の関係」の観点から
笹　嶋　淳　史	何のために生きるのか　―幸福論の再考―
添　島　直　希	京大アメフト部における世代性の意識の変容過程について
孫　　智　男	バークリー哲学における「常識」
高　岡　風　太	海外ボランティアに向かう若者の語りから見る現代的な自己とその志向性　―「脱文脈化志向」の検証と考察―

高　木　　遊	『関係性の美学』からコンテンポラリーアートをみる
徳　永　　陸	Kipling の短編 “The Wish House” 考察　―Grace と Token の関係性を中心に―
望　月　裕　紀	留学経験が若者のモラトリアム心性に与える影響について
吉　田　森　生	不登校児童にとっての不登校体験とは
秋　山　和　慶	メルロ=ポンティの他者論　～行動において現れる他者
吾　妻　真　典	1960年代から1990年代までにおける「高校球児らしさ」の分析　―『朝日新聞』の記事を対象として
池　田　知　愛	ドヴォルザークの序曲『オセロー』について
磯　部　有　珠	大阪教育大学付属池田小学校児童殺傷事件の被害者は事件をどう受け止めているのか
稲　垣　智　子	「客いじり」における笑いの効果
稲　荷　思　歩	Cognitive Distortions in Dickens’s *Great Expectations*（ディケンズの『大いなる遺産』における認知の歪み）
上　野　元　希	アメリカのポピュラー音楽シーンと楽曲チャート Billboard Hot 100についての社会学的考察
柿　井　秀太郎	ブランクーシの彫刻について
加　藤　悠　花	境界例心性を持つ大学生の実態に迫る
神　谷　侑　世	伝統文化の継承を軸にした地域活性化に関する考察　―尾鷲市の事例研究
神　田　弘　文	カント『純粋理性批判』における構想力の認識論的位置づけについて
阪　本　雅　也	現代の英雄に関する精神分析
髙　島　悠　里	学童期のルール遊びの変容とそこから見える育ち
武　部　沙　愛	海外滞在時の心理についての研究
多　田　拓　歩	バルーンアートが作る人々の「繋がり」　～バルーンアーティストによるアクションリサーチ～
長谷川　菜　月	高齢者サロンにおけるつながりの再検討　―京都市左京区におけるフィールド調査より
目　代　貴　大	知覚の構造　―メルロ=ポンティ『知覚の現象学』読解を通じて―
森　口　　勲	妖怪をみる
諸　岡　敬　人	若者のコンサマトリー化とアルコール離れについて
八　木　茜　里	バークリ哲学におけるものの存在の公共性について
吉　原　隆　仙	レヴィナスと歓待性　―道徳実践へ導く哲学の考察―
渡　邊　友　浩	テレビ視聴率についての社会学的考察　―その捉えられ方の変化を中心に
大　谷　昭　宏	中上 健次の「路地」　―「父殺しの不可能性」と「差別」

認知情報学系

大　沼　慶　寿	摂食障害患者における分配行動　―社会的相互作用に着目した検討―
高　田　祐　也	方向性のメタファー「左右」「前後」「縦横」について
石　丸　　聖	動的な視覚情報が身体の傾き知覚に及ぼす影響
北　林　綾　子	色彩に関する共感覚的形容について
島　田　雄　午	HMDとHand-Tracking デバイスを用いた仮想空間内における Web ページ閲覧手法の開発
田　口　勝　弥	液体に喩えられるものの認知様態　―放出系動詞に着目して―

田坂晃一	On the Optional Infinitives in Child Language Development（幼児の言語発達初期段階における随意的不定詞（Optional Infinitives）の出現について）
鳥越地子	日本語補助動詞テシマウと英語 get 受動における話者の感情表出
西尾允孝	マジックによるだまされやすさの個人差の検討
青木恒	音響特徴量 MFCC 値を用いた楽曲間類似度の考察　―楽曲推薦システムの開発に向けて―
淺桐祐	プレゼンテーションの話者の位置が聴者の脳活動におよぼす影響
飯阪宗麻	Support Vector Machine と それによる Man-in-the-Middle 攻撃の検知手法について
井上翔太	言語景観に関する一考察：京都市内の商店における多言語表示を中心として
植本圭哉	性格特性に関する形容詞の記憶とその感情評価に対して他者との社会的関係性が与える影響
牛尾響	関連性理論に基づく文芸批評言語の分析
大代誠志	ペンの色が色字共感覚者の書字に与える影響
岡田晃	Functional muscle synergies during standing in perturbation（外乱立位中における機能的筋シナジーの考察）
勝又槙子	ガイドブックにみられるカテゴリーの認知的分析
加藤大智	恥の感情を伴う自伝的記憶の特徴とその個人差に関する実験心理学的研究
川北拓弥	関数解析による数理最適化
紀平直人	The comparison of kinematic and muscle synergies in the various speed conditions（多速度帯における筋シナジーと運動学シナジーの比較）
芝原隆善	意味役割の教師なし学習について
清野菜美恵	ヘッドマウントディスプレイを用いた仮想現実における新たな行動実験環境の提案
高田晴夏	英語の「ドシンドシンと歩く」動詞の比較
髙森諒	周辺視野に呈示された画像エッジの優位性が眼球運動の方向に与える影響
豊田祐輔	歩行と走行の相転移における筋線維の動態
土井寛人	Preferred direction of muscle synergy in multi-directional postural control in humans（ヒトの多方向の姿勢制御における筋シナジーの至適方位の測定）
中山花穂	文章構造の理解を助ける色彩デザイン　―明度差の利用―
長澤勇貴	Destination memory と Source memory の関係性に関する実験心理学的検討
西藏亜佳音	ニット生地の高次質感認知に及ぼす染色法と構成色の効果
原田貴将	軽度高気圧酸素が論理的思考力へ与える影響
樋藤篤	深層学習と強化学習のコンピュータ将棋への応用の考察
福田晴奈	積木課題を通した乳幼児の発達
藤春祐紀	競技かるたにおける決まり字音節の直前音認知についての考察
松下貴之	プログラムの難読化を利用したステガノグラフィの一手法

国際文明学系

森祐太	長時間労働の現状分析と対策
神岡秀治	マルクスにおける「労働の価格」の実践的意義

モンタニョ ミチェル ルイス
雇用保険二事業の整理合理化により生じる予算を失業等給付に充てる可能性

金　子　世玲那　森林による土石流災害低減の可能性の評価

酒　井　　肇　「幸せの国」の若年失業　～ブータン王国の「歪な失業」とその背景～

関　口　一　騎　柄谷行人『世界共和国へ』再読　―議論の整理及び批判と現実的方策としてのブロックチェーン

中　嶋　　樹　Hedonic 価格関数を用いた美術品価格の統計分析

服　部　昌　紘　「原発マネー」が活用されない原因についての考察　―福井県おおい町を事例として―

廣　川　悠　貴　行政訴訟制度と私人の権利利益保護

溝　渕　克　仁　GDP とは異なる指標による社会進歩幸福度の測定方法　―社会進歩指標に注目しながら―

横　田　　洋　京都学派の歴史哲学　～西田幾太郎から西谷啓治へ～

稲　田　昂　弘　日本の現代社会と他者

大　野　峻　介　政策導入要因が公立中高一貫教育に与える影響　―京都市の 2 校を比較して―

香　川　敬　哉　日本の格差をどう是正するか　～ピケティを参考にして～

小　丸　真　志　養蜂および野生ポリネーターの農業生産への貢献度　―佐渡島を事例として―

近　藤　裕　哉　ミャンマーにおける新規教育ビジネスの考案

斎　藤　　航　デフレの研究：議論の整理と今後の課題

多　田　裕　也　オリンピックの商業化に関する歴史的考察及び原因の解明

富　木　香　奈　白拍子の芸能の実態とその魅力

西　山　浩太郎　競馬からみる人間の不合理性

松　澤　健太郎　GHQ／SCAP による対日占領政策　―検閲問題を中心に―

宮　平　和　人　The Japanese Occupation of Hong Kong : The Strategic Importance of Hong Kong and the Details of the Japanese Military Rule（日本占領下の香港　―その戦略的重要性と日本軍政の詳細）

渡　部　純　也　ドーピング違反の現状と国際比較

和　田　　萌　フランスの共和国理念としてのライシテについて

文化環境学系

砂　田　哲　宏　ベトナム・メコンデルタにおける塩水遡上

申　　大　樹　それぞれの一線を守る　―大阪西成／釜ヶ崎の生活誌から―

本　望　菜穂子　できるようになるとは何なのか　―煎茶道における身体的学び―

湊　本　泰　行　ポスト新韓流時代の韓流ファンにおける韓国認識の分析

石　野　陽　子　村井家住宅普請帳「家普請材木諸品買方并入用帳」に関する研究

小　国　里　菜　「身体が覚えている」ことを考える　―吉田剣鉾保存会における鉾差し技術の習得を事例として―

齋　藤　駿　介　戦時期仙台における防空都市計画　―建物疎開を通した都市の変容と継承―

谷　山　佳　南　現代日本社会における個人の意識と身体のあり方について

中　垣　智　晴　地域おこし協力隊が住民の主体性を生み出す仕組みづくり

奈　良　美和子　定住人口・交流人口の再考と「関係人口」の意義　―京都府和束町における実践から―

三　好　志　尚　　中世鹿児島の景観変遷　―守護所と港の関係から―

盛　本　悠　人　　鉄道駅が都市の構造変容に与えた影響とその過程について　―福山を中心として―

山　村　陽　子　　ともに創り出す遊興　―京都・花街におけるお茶屋遊びのエスノグラフィ―

山　脇　　謙　　場所の意味の転換についての考察　―『道頓堀川』を通して

渡　邉　安　紗　　パリ・オペラ座バレエとバレエ・リュスの相互作用　―グローバルな総合芸術

自然科学系

古　田　風　彦　　発達段階の異なる稚魚の分離シミュレーション

有　保　秀　徳　　UV－A単色光を利用して生育する藻類の多様性と光合成活性維持の仕組みに関する研究

板　垣　義　綱　　高速原子間力顕微鏡を用いたアクチン重合核形成機構の解明

今　城　葉　月　　ブルネイ・ダムサラーム国において分離された新規単細胞緑藻の分類学的考察

岩　戸　彰　平　　京都におけるオオサンショウウオの交雑問題

荻　野　奈緒子　　ガン光線力学療法への応用に向けたグラフェン　―光増感剤複合体の合成およびその構造の評価

北　川　裕　貴　　混合アニオン化合物の作製と価電子帯制御による機能発現

近　藤　香　澄　　礫浜潮間帯におけるミズハゼ属 2 種のミクロハビタットと食性

坂　上　小百合　　クラスリン依存的エンドサイトーシスにおけるタンパク質の機能解析

高　　裕太郎　　白金パラジウムコアシェル触媒の温度依存性評価

中　島　瑞　貴　　人口甘味料を基体とするキセロゲルの気体吸着特性に関する研究

中　舛　理　玖　　Phylogenetic positon of a bulbil producing *Tricyrtis* species（Convallariaceae）estimated by geonome-wide SNP analysis（ゲノムワイド SNP 解析によるむかごを形成するホトトギス属植物の系統的位置づけ）

浪　花　晋　平　　酸化チタン光触媒を用いた可視光照射下でのピリジンとシクロヘキサンの選択的直接クロスカップリング

花　川　洋　輔　　ラセミ体医薬品の共結晶化が優先富化現象に及ぼす影響

早　川　　諒　　シアノバクテリアにおける遺伝子発現抑制系の開発

平　畠　諒　大　　イリジウム錯体触媒を活用する高難度物質交換反応の開発

宮　本　志　信　　京都北郊の里山生態系における潜葉虫群集とその動態

柳　瀬　友　朗　　地表付近の大気乱流における浮力効果の考察　―熱対流乱流の室内実験研究―

平成 29 年度

人間科学系

出　口　陽　介　　ゲーミフィケーションの社会文化的意義

頴　川　光　樹　　ジル＝ドゥルーズと限界の哲学について

今　田　朱　音　　『PUCK』から見る宝塚とシェイクスピア

岳　川　祐　輔　　新型うつ病と現代社会

福　井　彩　音　　かわいい文化の来歴と国際化から考察するハローキティ人気の背景

池　崎　仁　美　　愚痴っぽさはどこで生じるのか

井　藤　大　貴　　学習塾が国の行政の管理下におかれるまでの変遷

井上　　尭	フリーターのメディア表象の変遷について
上田源嗣	視聴者の主観的評価から見る「つまらないバラエティ」の実態
河村雅裕	グローバル女子京大生のキャリア観
河野幹志	部活動顧問の過重負担に関する新聞記事の論調の変遷について
小西菜月	音楽史のなかのミュージカル　―音楽と言葉、アメリカ合衆国とキリスト教―
藤沢ひかり	日本の若者は超常現象をどのように受容するか
浅野早紀	父と子の『嵐が丘』
石井純哉	女性がアイドルになる意味　―ライブアイドルの「承認」と自己呈示―
伊藤香奈	育児雑誌『ひよこクラブ』にみる現代の育児する家庭像
井野聡美	「百合」映画における「少女性」　―空間、時間、異性―
江田遼太郎	地域資源活用による地域の活性化の在り方
梶本雄一朗	「溶け合う身体」を促し活かす組織づくり　―カンボジア小学校建設プロジェクトPumpitを事例として―
川上翔司	病気をもつ人々についての社会学的研究
河野立樹	テレビの「やらせ」からみえる「受け手」と「送り手」の変化
菅野優子	「教育先進国」とは何か　―フィンランド教育の表象をめぐって―
倉田紘顕	『ハリー・ポッターと賢者の石』の映画化における戦略
小泉大樹	なぜツッコむのか？　―ゴフマンの儀礼を参考に―
里井惇志	炎上に対する特定の SNS 内での反応の変遷とその理由について　―ユーザーが発信した情報を中心とした考察―
下野宗大	トーマス・マン『トーニオ・クレーガー』におけるダンスをめぐって　―アンデルセン『人魚姫』のダンスと比較しながら―
西川明伸	映画監督小林啓一のピン送りの美学
野崎祐人	Agatha Christie's of Narrative in Her Detective Novels（アガサ・クリスティの探偵小説における語りの技法）
服部憲悟	『悲劇の誕生』における「理論的人間」についての考察　―「ソクラテス的なもの」対「ディオニュソス的なもの」―
花木汐梨	文学作品における精神医学　―夢野久作『ドグラ・マグラ』の先進性と独自性―
濱田明日郎	アンリ・ベルクソンの哲学と映像技術
藤本優実	アーティスト主催の音楽フェスについて
古市秀和	嫌韓問題を問い直す　―嫌韓の「受け手」に関する議論に着目して―
松村真仁	「自発的な復興」を生むメカニズム　―熊本県阿蘇郡西原村の事例より―

認知情報学系

佐藤友規	Effect of a stair climbing-descending exercise program at a high intensity level on blood glucose excursions in a healthy young man（１人の健常男性において高強度階段昇降運動プログラムが血糖値変化に及ぼす影響）
犬飼裕貴	Palmatine acutely stimulates 5'-AMP-activated protein kinase in C2C12 skeletal muscle cells（C2C12 骨格筋細胞においてパルマチンは急性的に 5'-AMP 活性化プロテインキナーゼを活性化する）
飯泉　　諒	外乱立位における姿勢安定性へのライトタッチの効果

高見大地	視覚探索における時間割引
西田駿輝	NIRS を用いた小脳の測定
俣野のぞみ	フランスの教育におけるポジティヴ・アクション　アメリカのアファーマティヴ・アクションと比較して
浅原祐太	Gallic acid does not acutely stimulate 5'-AMP-activated protein kinase or Akt in C2C12 skeletal muscle cells （C2C12 骨格筋細胞において没食子酸は急性的に 5'-AMP 活性化プロテインキナーゼ及びAktを活性化しない）
池田智美	Adaptation of Muscle Synergy in Balancing Task（姿勢制御課題における筋シナジーの適応）
石垣伊織	新聞投書における文体・表現とジェンダー認識
緒方悠介	日常会話における、関西地方の方言「知らんけど」表現のもつ意味・役割
加藤すみれ	DNA 修復にかかわるタンパク質の生理機能
古賀あゆみ	罪悪感を伴う自伝的記憶において行為の有無が与える影響
小林周平	Kinect による立位分析
迫　裕太	思春期児童の不安を自他認識からみた検討
白川　健	重み付け結合法を用いた脳情報デコーディング
高田遥香	Effects of mild hyperbaric oxygen on peripheral blood flow and skin temperature （末梢血流および皮膚温に対する軽度高気圧酸素の影響）
瀧澤明希	Twitter に見られる「笑い」表現　および絵文字、顔文字の特徴
田中咲妃	Effects of mild hyperbaric oxygen on unloading-induced atrophy and decreased oxidative capacity in the soleus and plantaris muscles of rats （無負荷によって生じるラットヒラメ筋および足底筋の萎縮と酸化能力の低下に対する 軽度高気圧酸素の影響）
多米友紀長	閾下報酬刺激が視覚的注意に及ぼす影響
茶圓将司	長時間のトレーニングによる筋シナジーの変化
長江悠介	名刺における評価と記憶の関係
那波弥人	有理関数のファトウ集合上の複素力学系
西　優花	画像のメモラビリティや眼球運動と記憶想起の関係
野口真生	霊長類におけるメタ認知の定量的評価
芳賀浩太郎	Effects of Japanese-style diet on insulin-stimulated Akt phosphorylation and gluose transport activity in rat skeletal muscle　—in comparison with Western-style diet （日本食摂取がラット骨格筋のインスリン刺激時のAktリン酸化と糖輸送活性に与える影響　—西洋食摂取との比較による検討）
林　剛大	正二十四胞体による四次元空間充填の超平面切断として得られる三次元空間充填について
原澤恒太	Motor Control of Backward Walking （後ろ向き歩行の運動学的制御）
日野遼人	Coq 上で実装されたHoare論理を用いたプログラムの検証
平田　歩	他者からの期待が記憶に与える影響についての実験心理学的検討
福田　睦	幼児期における自己信頼性と他者尊重性の発達連関
森　葵	TRPVI 発現神経細胞の可視化
山田将也	色彩語の由来に見られる日本と西洋の文化差
吉田　幸	髪型の類似性が顔の印象に与える影響とその個人差に関する実験心理学的研究

国際文明学系

赤　坂　宣　明	生命侵害障害における逸失利益の定義
三　宅　大　樹	オランダの東インド貿易戦略と技術的科学の発展 1595―1629
柳　沼　昂　也	大伴 家持「陳私拙懐一首」について
高　木　裕　樹	日本の経済停滞と格差の拡大に関する考察
長谷部　　祐	日本の競争力と雇用を取り戻すための税制度改革
佐　藤　基　史	マラヤの脱植民地化過程におけるイギリスの目標と脅威（1945―57）
尾　崎　龍　平	ジョージ・W・ブッシュ政権のネオコン政治家と対テロ戦争
賀　来　沙樹子	他者を「エンパワーメント」にすることの意味と問題点に関する考察　―インドと日本 2 つの路上生活者支援における「価値の相克」を巡って―
加　藤　　翼	「食べること」から世界へつながる　～農本主義の限界を超えて～
河　野　知　樹	「ハンナの戦争」を読む　―彼女は何を思い、何を語ったか―
髙　橋　優　直	神戸市北野地域における安藤忠雄設計の建築物が周辺地価に与える影響
寺　岡　寛　曜	クリストファー・ノーラン監督作品の変遷とその背景
西　村　佳弥子	イギリス東インド会社の資本主義成立における役割
東　　衛　志	現代海賊問題と国際政治　―現代海賊問題の示唆した主権国家体制の限界―
宮　原　耀　一	英国学派による事例研究の試み　―スエズ戦争を題材に―
森　口　裕　介	世代別投票率が財政分配に与える影響　―パネルデータを用いた実証分析―
五十嵐　　捷	幸せにつながる働き方とは　―職務満足度から考える―
市　丸　雅　啓	第四次産業革命が雇用に与える影響
宇　野　浩　隆	アジア中所得国における農業問題　―タイにおける農業政策の転換と農工間格差―
折　田　　唯	19世紀フランス社会学から考える人口と経済の関係
加　藤　智　也	小林秀雄『本居宣長』論
髙　山　貴　之	火事への対応と貴族社会　―小右記を中心に―
澤　田　真　吾	B リーグの入場者数の決定要因に関する研究
塩　田　温　子	2030年の技術発展と日本の労働生産性の向上
反　町　駿　介	国際通貨国の覇権と内包する通貨圏衝突リスク　―ポンド体制とドル本位制の比較検討―
田　崎　公　正	人々に選ばれる日本の山々　―最適輸送理論により描かれる日本の山の魅力―
田　幡　玲央那	第二次世界大戦期の日本の地理的世界観　―カール・ハウスホーファーが与えた影響―
長　澤　孝　将	大祓詞「金木」考
根　木　明日希	アマルティア・センによる厚生経済学の再構築からみるケイパビリティ・アプローチの可能性
林　　真　彩	戦争とインフレーションの総合的研究　～第二次世界大戦期の日本を中心に～
三　枝　桃　子	多様な働き方を選択できる社会の実現に向けて　―仕事と育児の両立を中心に―
村　岡　　英	特色ある公立大学の地域貢献　―秋田県の国際教養大学を事例として―
森　江　建　斗	ウェストファリアの言説と国際関係理論発展との相互関係性

安　野　早紀子	父親になる過程において公共が果たすべき役割は何か　―父親の教育性育成支援から見る自治体の両親学級に関する考察―
横　内　亮　太	万葉集三八七〇番「紫乃粉滷乃海」の考察
米　谷　友　利	経済成長要因における「文化」の評価を再考する

文化環境学系

平　野　泰　隆	日本酒のブランド・イメージとブランド戦略の比較と考察　―「伏見の清酒」を事例に―
中　村　多　伽	祇園におけるホステス文化
吉　永　由　香	大宰府門前町のイメージについて　―商業空間の変遷から―
大　塚　香　苗	原発城下町、敦賀の変遷について
上　良　智　子	府中城下町の空間構造とその形成過程
新　妻　直　志	労働の非苦役化　―京都の人力車夫の仕事を事例に―
羽　部　浩太朗	宿場町の近代都市化　―浦和・大宮を事例に―
平　松　宏　基	長浜市中心市街地における空地の位置づけと変遷に関する研究
深　谷　拓　未	イタリア人とジェンダー　―日常生活に見る女性の支配と男性の忍耐―
舟　橋　知　生	ネパール・バクタプルにおける町家の外観意匠の変化に関する研究　～震災復興にみられる伝統意匠に着目して～
森　田　眞　苗	日用品と贅沢品　―棕櫚製品を扱う京都の荒物屋を事例に―

自然科学系

坂　上　大　志	京都鴨川水系のニレ科樹木集団における孤立化の遺伝的影響
小　野　夏　樹	レーザーフラッシュポンプ・プローブ法によるエアロゾル化学への挑戦　―HO_2ラジカルの取り込み速度を決定する要因の解明―
佐　藤　　宰	京都における交雑オオサンショウウオの齢構成と個体群動態に関する研究
中　川　悟　志	4.0 GPa下での NMR 測定　―定荷重式高圧下 NMR 装置の開発―
中　窪　真　史	二次元角柱周りの流れに関する数値計算方法の比較
中　坪　真　希	森の中と外における気温と水蒸気量の関係性について及び大気中の水蒸気の移動について
永　井　夏　織	経験的グリーン関数法を用いた2016年鳥取県中部の地震の震源モデルの推定
菱　谷　眞一郎	酸化チタン光触媒によるピリジンとベンゼンのクロスカップリング反応
三　好　雄　大	根毛細胞壁の力学的特性の解析

(2) 修士論文題目一覧
平成4年度

人間・環境学	石井素子	社会科学の方法論としての発生的構造主義の可能性
人間・環境学	井戸啓介	視覚系における方位選択性機構の色度情報による解析
人間・環境学	井上雅仁	遅延リーチング課題実行における前頭連合野の役割
人間・環境学	内山純蔵	関東地方の縄文時代後期における漁撈活動の展開： 骨角製漁撈具の隆盛と外海性漁撈
人間・環境学	浦山慎一	視覚初期過程の数理モデル： 線型性・非線型性の解析
人間・環境学	大草知裕	病院情報システムにおけるコンピューターヒューマンインターラクション評価法における研究
人間・環境学	片田珠美	分裂病者における象徴化と排除： 母親殺害の精神病理
人間・環境学	兼重　努	中国少数民族トン族の地域構造の研究： 公益活動における協力関係の分析から
人間・環境学	小林博行	有機界における個体性の概念とその理論体系： エルンスト・ヘッケル『一般形態学』を中心に
人間・環境学	佐々木重洋	東北地方・『カマガミ』仮面に関する人類学的研究
人間・環境学	菅井紫野	古代中国表意文字における意味と記号の変遷についての一考察
人間・環境学	杉山直樹	分子集合体の微環境とその反応論的意義
人間・環境学	関山直広	グルタミン酸性シナプス伝達に及ぼすプロスタグランジンE_2（PGE_2）の効果（パッチクランプ法による解析）
人間・環境学	瀧口信一郎	BianchiIX宇宙の振舞いは Chaotic か?
人間・環境学	立澤史郎	A Study on Population Dynamics of Mageshika Deer (*Cervus nippon mageshimae*；CERVIDAE) （マゲシカ（*Cervus nippon mageshimae*）の個体群動態に関する研究）
人間・環境学	田中未知	小中学校における時間の感じ方と自己受容度に関する研究
人間・環境学	田村有広	インスタントンと摂動の高次効果
人間・環境学	内藤栄一	Motor related potential with motor imagery and stop signal paradigm in human（ヒトにおける運動イメージ及びストップシグナルパラダイムに伴う運動関連電位）
人間・環境学	橋本　崇	神話理解の哲学的基礎： シェリングとオットーの神話哲学を手がかりとして
人間・環境学	橋本誠夫	新規ヘテロ環化合物の合成とその分子認識化学への応用
人間・環境学	原　隆二郎	スペースシャトルを利用した宇宙放射線の遺伝的影響の研究
人間・環境学	福永拓也	ヒトT細胞白血病ウイルスの遺伝子進化系統解析
人間・環境学	藤原　学	空間表現に見られる建築的場所の構造に関する研究
人間・環境学	増田匡裕	恋愛関係における排他性の社会心理学的研究
人間・環境学	松本啓二朗	ハイデガーの哲学に即した「哲学すること」の考究
人間・環境学	水野顕子	GC box 結合因子 BTEB の HIV-1 LTR への作用
人間・環境学	村田晴路	情報化に対する受容態度の分析
人間・環境学	柳沢貴司	キェルケゴールにおける生成と罪：『不安の概念』を中心にして

人間・環境学	山本華子	放射線抵抗性・非抵抗性ヒトメラノーマ細胞における癌遺伝子の変化
人間・環境学	和田拓治	コムギ葉緑体遺伝子 psbD/C の光による転写調節機構の解析
人間・環境学	李　長波	日本語指示詞の指示機能と指示体系のメカニズム

平成5年度

人間・環境学	水流尚志	ハイデッガーの前期思想に於ける真理論
人間・環境学	内藤可夫	ニーチェにおける権力への意思と認識
人間・環境学	新田智弘	ハイデッガーにおける言葉と真理の問題
人間・環境学	田中明子	女性主体の形成と創造性： 新しい「筋書き」づくりをめぐって
人間・環境学	亀崎直樹	アオウミガメ *Chelonia mydas* の頭骨の地理的変異に関する研究
人間・環境学	奥野慎治	クラウンエーテルの合成とその金属イオンおよび分子認識能に関する研究
人間・環境学	福山敬介	機能性ポリアミン化合物の合成と物性に関する研究
人間・環境学	春日井潔	エゾアカガエル *Rana pirica* の相対成長および地理的変異
人間・環境学	見澤康充	個体発生に伴うヒダサンショウウオ *Hynobius Kimurae* 頭骨の形態変化
人間・環境学	飯田卓	沿岸水産資源の利用と管理に関する生態人類学的研究：北海道日高地方のコンブ採取の事例分析
人間・環境学	平野みゆき	大都市圏の内部構造： 主として郊外の小売業・商圏・購買行為からのアプローチ
人間・環境学	吉田幸雄	わが国における住民表示方法に関する研究：Geocoding system 構築の立場から
人間・環境学	吉村郊子	薪炭林の利用と管理に関する生態人類学的研究： 備長炭生産地南部川村の事例
人間・環境学	中田宏明	4次元数式モデルの建築的特性と応用に関する研究
人間・環境学	大浦宏邦	社会的興味空間の時代的変遷について： 雑誌記事内容の定量的分析による研究
人間・環境学	水島郁子	ドイツにおける疾病時の賃金継続支払に関する法的考察
人間・環境学	中西雅子	在日外国人と日本人の対人的フラストレーション状況における言語反応
人間・環境学	馬立久江	老年期における対人交流と自己概念
人間・環境学	益田圭	被差別部落をめぐる周辺住民の関わり方と意識の現代的特徴
人間・環境学	右京久美子	温受容ニューロン温度受容チャンネルの解析
人間・環境学	白木琢磨	Nicotinic Acetylcholine Receptors in Neurons of Nucleus Tractus Solitarius（延髄弧束核におけるニコチン性アセチルコリン受容体を介した信号伝達）
人間・環境学	梶谷真司	ハイデガーにおける存在と死の連関
人間・環境学	斉藤渉	J.G.ヘルダー『言語起源論』について： “言語の人間起源説”の再検討
人間・環境学	熊谷了	倒木におけるアンモニア菌の発生に関する研究
人間・環境学	岡本啓	低圧性低酸素に対する骨格筋の酵素化学的適応
人間・環境学	檜垣浩之	非中性電子プラズマ閉じ込めに対する電磁ポテンシャル配置の効果
人間・環境学	小林誠一	有機金属化合物を活用する多窒素複素環化合物への炭素官能基導入法の開発

人間・環境学	葛西奈津子	超持久運動が生体に及ぼす影響について：トライアスロン競技後の疲労に関する研究
人間・環境学	黒澤義明	多義性解消過程における発話意図の理解とその役割
人間・環境学	黒田航	接続表現の諸相：言語のアルゴリズム論的な理解に向けて
人間・環境学	氏原真美	ヤマアジサイをめぐる化学生態学的研究
人間・環境学	桑田岳夫	HIV-1/SIVMAC キメラウイルスの作成及びサル感染実験
人間・環境学	安田佐知子	京都府美山町芦生原生林のフロラ調査による自然環境の解析
人間・環境学	斉藤裕子	天然水中に溶存する生理活性有機化合物の分布と移動に関する研究：カルボキシル基を有する各種有機化合物の濃縮捕捉法と同定法
人間・環境学	荒井里栄子	The Petrogenesis of Hamada Nephelinite（浜田ネフェリナイトの成因について）
人間・環境学	井上央	Generation of Felsic Magma with Largescale Pyroclastic Flows at the Aira Caldera, Southern Kyushu, Japan（姶良カルデラにおける大規模火砕流を伴う珪長質マグマの成因について）
人間・環境学	藤田裕	クーリングフローが銀河団の鉄の分布に与える影響
人間・環境学	北村晃司	光合成光科学系Ⅱにおける電子移動調節
人間・環境学	角山雄一	葉緑体 psbD/C 遺伝子クラスターにおける光応答性転写調節因子の同定
人間・環境学	木本尚実	DNA methylation status of promoter region of O^6-methylguanine-DNA methyltransferase gene associated with its expression in cultured human tumor cells
人間・環境学	藤河佳代	Analysis of DNA repair activity in Xeroderma Pigmentosum cells and Chromosome Mapping of the XP-C gene（色素性乾皮症細胞のDNA修復能の解析と染色体マッピング）
人間・環境学	高橋晶子	分子間相互作用と反応環境制御に関する研究
人間・環境学	古谷健	多官能性分子環境の反応論的研究：グリシジル系化合物のケーススタディ

平成6年度

人間・環境学	足利直哉	ハイデガーにおける存在論と歴史との関連について
人間・環境学	安部浩	日常的実存は時間性から根拠づけられるのか：ハイデガーの『存在と時間』における時間性に基づく実在論的分析の問題
人間・環境学	阿武賢	K-Ar dating of the Setouchi Volcanic Rocks: Constraints on the Timing and Duration of Rotation of Southwest Japan arc
人間・環境学	飯村敦子	カント哲学における有限性の構造：力の概念を中心に
人間・環境学	五十嵐良	求核性化学種の関与する溶媒環境相互作用
人間・環境学	猪倉孝夫	自己関係性と矛盾：思惟の無限性をめざして
人間・環境学	井口修	非一様宇宙における長波長近似
人間・環境学	石井源久	正則図形の発散移動による空間充填形態
人間・環境学	遠藤晃	処方入力ヒューマン・インターフェースの定量的相互比較
人間・環境学	大平晃久	地理的想像力の構造に関する試論
人間・環境学	大本純子	高等植物の内部環境における有機酸の消長：酒石酸合成経路における炭素鎖開裂反応に関する研究

人間・環境学	越智幸一	語の恣意性と必然性に関する発達心理学的研究： 幼児期における語の恣意性の獲得と語の必然性の発達的受容
人間・環境学	金子　愛	子実体の成長過程における光と重力の影響： 特に下方から光を照射した場合
人間・環境学	川上広長	ジェスチャーの詩的機能とコミュニケーションにおけるその位置づけについて
人間・環境学	川村浩之	Renormalization Group Analyses for Nucleon Spin Structure Functions
人間・環境学	木村信也	Phenotypic rescue of ultraviolet light hypersensitivity of human xeroderma pigmentosum cells by introducing a mammalian DNA photolyase gene（哺乳動物の光回復酵素遺伝子導入によるヒト色素性乾皮症細胞の紫外線高感受性の回復）
人間・環境学	倉石一郎	マイノリティーにおける《現実》へのとらわれと乗り越え： 在日韓国・朝鮮人のライフ・ヒストリー分析から
人間・環境学	黒田明義	Thermodynamic Properties of Continuous Spin Antiferromagnets on Kagome Lattice（篭目格子上の反強磁性連続スピン系の熱力学的性質）
人間・環境学	小林久泰	シメジモドキの菌根に関する形態学的研究
人間・環境学	小山哲春	現代日本語の終助詞と発話機能： 言語とコミュニケーション・スタイルの関係についての一考察
人間・環境学	郷田直一	ネオンカラー現象にみられる明暗系と色系の相互作用
人間・環境学	佐川眞理子	神経性食思不振症患者にみられる女性性の象徴化の障害について
人間・環境学	笹土隆雄	メダカ ES 様細胞の分化誘導およびメダカ胚への導入
人間・環境学	七條達弘	つつきの順序生成のメカニズム： 闘争回避の一形態
人間・環境学	菅　幹生	高速撮影法を用いた心臓 MRI におけるモーションアーチファクトのコンピュータシュミレーションによる解析
人間・環境学	武久　盾	Genomic and phylogenetic analysis of HIV in Ghana（ガーナにおけるHIVの分子系統解析）
人間・環境学	武村健太	雇用情勢と人口構造からみた東北地方の地域構造
人間・環境学	田中　悟	芳香族分子の構造および電子状態： 電子をとりまくミクロな環境へのアプローチ
人間・環境学	田中　亨	海洋付着生物忌避活性物質の合成と探索に関する研究
人間・環境学	田中寛子	Molecular systematics of Japanese brown frogs（日本産アカガエル類の分子系統学的研究）
人間・環境学	田宮　元	メダカ（*oryzias latipes*）尻鰭重複突然変異体（*Double anal fins: Da*）を用いた脊椎動物背腹軸形成の発生学的および遺伝学的研究
人間・環境学	丹埜昭一	日本人乳癌患者における p53 遺伝子の変異
人間・環境学	徳岡　徹	生殖器官の構造解析によるトウダイグサ科の分類システムの研究
人間・環境学	豊田　淳	The Ironic Mechanism of Angiotensin II in Neurons of Nucleus Tractus Solitarius（弧束核ニューロンに対するアンギオテンシンII（AII）の作用機構）
人間・環境学	中野昌宏	貨幣システムの根拠と生成：再帰的構造化に関する試論
人間・環境学	中平洋一	コムギ葉緑体 psbD/C 遺伝子クラスターの光応答性とそのプロモーター構造の解析
人間・環境学	永田素彦	災害イメージの間主観的基盤： 昭和57年長崎大水害についての会話分析
人間・環境学	南部雅美	ガリレオの運動論と自然探求の方法
人間・環境学	野上雅浩	含硫黄ジアザクラウンエーテル類の合成とその金属カチオン捕捉に関する研究

人間・環境学	原口佳和	含窒素複素環化合物の立体選択的合成に関する研究
人間・環境学	樋口実	ガラス中の希土類イオンの配位子場と光学遷移確率
人間・環境学	深田智	Toward a Systematic Treatment of There-Constructions: From a Cognitive Point of View
人間・環境学	星田尚司	光合成光化学系II電子伝達系の光阻害とその再活性化
人間・環境学	細川浩	Cloning and Expression of Neuron Specific Cationic Amino Acid Transporter（神経細胞特異的塩基性アミノ酸輸送体のクローニング及び特性解析）
人間・環境学	桝矢桂一	超越論的対象とは何か 『純粋理性批判』論考
人間・環境学	松永敦子	失語症患者における同音異義語処理について
人間・環境学	水田忍	1次元投影像を用いた頭部3次元医用画像の高速マッチングシステムに関する検討
人間・環境学	村澤真保呂	フロイトの神経症論における法の問題
人間・環境学	八ツ塚一郎	社会的表象に関する理論的考察と実証的検討：「中国」の社会的表象をめぐって
人間・環境学	山澤陽平	非中性電子プラズマの静電モード波の励起と減衰に関する実験
人間・環境学	山下満左裕	Phylogenetic analyses of primate T-cell leukemia/lymphotropic virus type I（PTLV-I）（霊長類T細胞白血病ウイルスI型の分子系統解析）
人間・環境学	山本洋紀	錐体反射色過程における順応機構の研究
人間・環境学	吉野太郎	Study of Magnetic Properties of One Dimensional S=1/2 Trimer System（一次元 s=1/2 スピン3量体の磁気的性質）
人間・環境学	渡辺理江	Claning and expression of hamster phospholipase C-β1 cDNA（ハムスターホスホリパーゼ C-β1 cDNA 及び発現に関する研究）
人間・環境学	和田信也	量子崩壊で生じる真空の三包の構造について
人間・環境学	後藤誠	前頭連合野ニューロンの同側性・反対側支配の研究
人間・環境学	藤田聡	均衡・矛盾・発展： ヘーゲル「意識経験の学」とピアジェ「発生的認識論」の比較試論から
人間・環境学	水野しのぶ	マックス・ウェーバーの「エートス」論： プロテスタンティズムと儒教の比較研究を中心に
人間・環境学	森永壽	山村過疎地域における活性化運動が住民に与えた影響について
人間・環境学	出口智恵子	日本の学生におけるアニミズムの検討
文化・地域環境学	天野太郎	寺内町の形態復原と変容系列に関する歴史地理学的研究
文化・地域環境学	荒木俊之	若者の消費者行動に関する地理学的研究： 京都市に通学する高校生・大学生を例として
文化・地域環境学	有木宏二	写真の思考： 安井仲治論
文化・地域環境学	安藤広	The Cauchy problem for Schrodinger type equations with degeneracy（退化したシュレディンガー型方程式の初期値問題）
文化・地域環境学	石山睦	形象のめざめ： W.ベンヤミンの二つの契機をめぐる考察
文化・地域環境学	糸井高士	重-重希土類 Er-Y 合金，重-軽希土類合金Ho-La合金の磁気構造
文化・地域環境学	岩間亜希子	平滑筋細胞の増殖における phosphatidylinositol 3-kinase の役割
文化・地域環境学	上田真由美	血圧値および高血圧有病率，血清脂質に及ぼす閉経の影響： WHO CARDIAC Study

文化・地域環境学	江　村　　公	シュプレマティズムに関する試論： 粉々にすること・平面・エコノミー
文化・地域環境学	笈　田　映　一	Methodological approach on interactive modulations of cardiac autonomic network in the case of isometric（等尺性運動による，心臓自律神経系相互作用動態解明のための方法論的研究）
文化・地域環境学	大　山　修　一	植生に対する人為インパクトの把握と環境モニタリングについて： ザンビア北部・ミオンボ林帯における事例
文化・地域環境学	岡　野　　靖	$ZnCl_2$-NaCl および $ZnBr_2$-NaBr 溶融塩系でのタングステンの電析
文化・地域環境学	小　笹　　直	対称性分子の不斉変換反応に関する研究
文化・地域環境学	金　谷　美　和	展示における異文化表象： 日本民芸運動をめぐって
文化・地域環境学	北　村　佳恵子	核磁気緩和によるハルデン系化合物（$(CH_3)_4$ NNi（$NO_2)_3$ の励起状態についての研究
文化・地域環境学	久　保　利永子	牛を飼う石切工： 19世紀北西ウェールズにおける石切工の生活と労働
文化・地域環境学	小　市　洋　太	光学活性 β-ラクトン類の合成に関する研究
文化・地域環境学	小　杉　一　正	遷移金属酸化物の合成と物性
文化・地域環境学	貞　好　康　志	インドネシアにおける華人同化主義の制度化： プラナカンの「同化論争」（1960）に照らして
文化・地域環境学	佐　野　　亘	政治システムにおける選挙の役割： 選挙制度改革との関連で
文化・地域環境学	新　熊　隆　嘉	枯渇性資源の量と質の経済分析： 鉱山における基本ルールのもつ経済的合理性
文化・地域環境学	左右田　直　規	独立初期マラヤの言語問題をめぐる政治力学： 民族紛争規制の構造について
文化・地域環境学	宗　宮　章　子	黒田麹盧訳『利盧薛陀三喜多引』の成立と意義： 明治啓蒙期翻訳の一考察
文化・地域環境学	高　橋　美和子	助動詞『つ』『ぬ』の意味
文化・地域環境学	戸　所　理　栄	On *the Scarlet Letter* : Hester's Transformation（『緋文字』論：ヘスターの変身）
文化・地域環境学	中　野　雄　介	タンザニア南西部における在来農業の農業生態学的研究： Nyamwanga のシコクビエ栽培を中心に
文化・地域環境学	中　村　宣　雄	遷移金属酸化物の合成と物性
文化・地域環境学	長　崎　誠　人	日本の新宗教におけるカリスマ： 大本教の場合
文化・地域環境学	長　津　一　史	サマの漁撈活動の実体と環境観
文化・地域環境学	永　原　順　子	祭儀の能楽と再会： 大本教における謡曲『西王母』の場合
文化・地域環境学	端　健　二　郎	ヘビーフェルミオン物質 YbSb の異常磁性
文化・地域環境学	橋　田　貴　之	Hermite 行列の空間に付随する Gauss 和の一般化
文化・地域環境学	八　田　和　嗣	共有資源管理における制度的側面
文化・地域環境学	平　岡　潤　子	正常血圧および脳卒中易発症高血圧自然発症ラット由来腎メサンギウム細胞におけるエンドセリン受容体遺伝子の発現調節
文化・地域環境学	藤　井　明　子	アメリカ合衆国の韓国系移民と他のマイノリティの関係に関する一考察： ロサンゼルスのコリアタウンを通して
文化・地域環境学	藤　井　康　博	固体の状態図的研究
文化・地域環境学	船　津　義　嗣	伸長流動場におけるポリスチレンスルホン酸ナトリウム水溶液の挙動

文化・地域環境学	堀　口　良　一	明治初年の日本の近代化における宗教と国家： 明治五年のヨーロッパにおける島地黙雷の木戸孝允とレオン・ド・ロニーとの接触を手掛かりとして
文化・地域環境学	牧　野　哲　征	半導体 PbI_2 結晶および $Pb_{1-x}Cd_xI_2$ 混晶における励起子分子生成過程の分光学的研究
文化・地域環境学	松　村　有希子	核磁気緩和によるハルデン系化合物Ni（$C_2H_8N_2$）$_2$ NO_2（ClO_4）における励起状態の不純物効果の研究
文化・地域環境学	松　本　千　穂	雌性脳卒中易発症ラットにおける食塩感受性高血圧原因遺伝子の検索
文化・地域環境学	眞　野　京　子	助産学はポストサイエンスたりえるか：中世から近代へ，主体の喪失を軸に
文化・地域環境学	源　　聡	固体物質の計算機シュミレーション
文化・地域環境学	宗　田　悟　志	核磁気共鳴法による三角格子反強磁性体 $RbNiCl_3$ の逐次相転移の研究
文化・地域環境学	吉　村　公　志	酸化物と水溶液反応
文化・地域環境学	渡　部　佳　右	気相状態からの物質合成
文化・地域環境学	周　　立　傑	明末清初における内河路瓦爾喀の老土部落
文化・地域環境学	李　　仁　子	文化の移築とアイデンティティの生成：大阪の在日韓国・朝鮮人の墓の分析から
文化・地域環境学	KWANTIEDA THEERASAWATEE	Charoen Pokphand Group（CP）: The Supportive Factors to its Rapid Growth（ヂャハン ポーカーパン グループ：その急成長の発展要因）
文化・地域環境学	ベネット・ディビット	日本の学校教育における社会化の「聖なる天蓋」
文化・地域環境学	冲　永　荘　八	W.ジェイムズにおけるリアリティーと宗教の問題

平成７年度

人間・環境学	伊　藤　さとみ	中国語の存現文の機能的分析
人間・環境学	伊　藤　裕　行	複官能性分子の反応環境と反応速度制御因子の研究
人間・環境学	猪　俣　雅　紀	コンディヤックの哲学と信仰
人間・環境学	上　原　浩　嗣	キーホール法を利用した高速MRシネ撮影に関する検討
人間・環境学	榎　瀬　良　美	Selection of Viral Population by Intravaginal Infection of Simian Immunodeficiency Viruses in Macaque Monkeys
人間・環境学	大河内　郁　雄	Asymptons in the gauge field theory（ゲージ理論におけるアシンプトン）
人間・環境学	太　田　隆　司	歪んだ多重結合を有する化合物の付加環化反応
人間・環境学	岡　田　美恵子	水辺の植物ヨシ類の葉身より分離される菌類相とその推移
人間・環境学	岡　本　雅　史	階層的発話解釈モデルによるアイロニー発話の了解および解釈プロセスの分析
人間・環境学	小　河　繁　彦	脳卒中易発症高血圧自然発症ラットにおける骨格筋の組織化学的特性
人間・環境学	片　山　淳　一	チューリップのミクロソームによる除草剤の代謝と立体選択性
人間・環境学	桂　　秀　樹	N-長鎖アルキルマレイミドを用いた [4+2] π 付加環化反応
人間・環境学	門　屋　秀　一	カントにおける美学と目的論
人間・環境学	金　尾　昌　美	糖類の含水金属酸化物に対する吸着挙動の構造科学的体系化： 天然水中に溶存する生理活性有機化合物の分布と移動に関する研究
人間・環境学	亀　山　敦　之	処方オーダーシステムのヒューマンインターフェースにおける学習過程の量的評価：ポイント・アンド・セレクトにおけるマウス操作とキーボード操作の比較

人間・環境学	川口直樹	戦前大都市における廃棄物処理体系の整備
人間・環境学	喜多恵美子	戦後の日本における芸術運動について
人間・環境学	木下恭子	日本語のコピュラ文と名詞句の意味解釈
人間・環境学	小林徹	光合成光化学系II構成蛋白質の大量発現系を利用した機能解析
人間・環境学	後藤寛	発話の認知プロセスにおいて指輪ジェスチュアの果たす役割について
人間・環境学	斎藤圭司	Numerical Study on the Basis of Statistical Mechanics for Quantum Systems（量子系における統計力学の基礎に関する数値的研究）
人間・環境学	佐藤淳子	光合成光化学系II遺伝子群の光転写制御の動的挙動解析
人間・環境学	繁田朗	モノ，ビス及びトリスクラウンエーテルの合成と金属イオン捕捉能
人間・環境学	清水司	同時色対比機構に関する研究
人間・環境学	末崎英之	溶液反応環境の再検討とその反応制御過程の研究
人間・環境学	角大輝	Rational Semigroup における安定領域での極限関数と Julia 集合の連続性
人間・環境学	瀬川智子	フォルミルベンゾインドリジンを用いるボルフィリン合成
人間・環境学	高木康彦	HTML（Hyper Text Markup Language）を用いた診療支援システム
人間・環境学	高倉浩二	Function of DNA methylationin the promoter region of O^6-methylguanine-DNA methyltransferase gene in caltured human tumor cells（培養ヒト癌細胞における O^6-メチルグアニン-DNAメチルトランスフェラーゼ遺伝子のプロモーター領域におけるメチル化の機能）
人間・環境学	高崎久子	Eu，Dy共ドープ SrAl204 蛍光体の長残光特性
人間・環境学	竹林晃子	伝統芸能の復活と再生：「四国こんぴら歌舞伎大芝居」を例として
人間・環境学	田中裕喜	コミュニケーションと人間形成：デューイのコミュニケーション論
人間・環境学	動山勝宏	不法行為裁定における利益衡量：厚生経済学的視点と法的視点
人間・環境学	中西真知子	社会科学基礎論と近代社会：再帰性は我々をどこへ導くか
人間・環境学	長井正博	水圏の自然浄化に対する溶存の役割とその構造化学的体系化
人間・環境学	波多野豊平	14族有機金属化合物を活用する新規反応の開発
人間・環境学	平田浩一郎	ブラックホールの半古典的取扱いとその数値的解析
人間・環境学	本田恵理	ニホンアマガエル（*Hyla japonica*）の鳴き声に関する研究
人間・環境学	増田貴彦	文化心理学的アプローチによる他者行動推論プロセス再考：Correspondence Bias の普遍性の検討
人間・環境学	松浦広明	テトラチアフルバレン骨格を有する新規カチオンラジカル塩の合成及びその電子状態に関する研究
人間・環境学	三牧幸代	癌抑制遺伝子 p53 欠損マウス細胞のマイクロサテライト配列不安定性について
人間・環境学	持田睦	「乏しき時代」の空間：ハイデッガーとリルケをめぐって
人間・環境学	守岡太郎	遺伝的アルゴリズムにおける性能改善
人間・環境学	山崎先也	慢性成人病の発症および合併疾患とライフスタイルの関連性
人間・環境学	路次美紀子	低次元量子スピン系における量子ゆらぎと秩序構造
人間・環境学	若畑健	現象学的存在論の可能性： ハイデガーの存在概念をめぐって
人間・環境学	江口洋子	逆向健忘の症状論的分析： 視覚性遠隔記憶検査の意義

人間・環境学	田中孝之	圧縮性及び非圧縮性オイラー流の特殊解
文化・地域環境学	秋山裕之	地域社会と子ども： 竹富島の事例
文化・地域環境学	安代浩士	高血圧自然発症ラット（SHR）の糖代謝に及ぼす魚油の効果
文化・地域環境学	板坂真季	髪型と身体認識の関連性： ブルキナファソ西部の女性の事例から
文化・地域環境学	伊藤聡子	“Doubles” in Mark Twain’s Works : Mark Twain and America in the Late Nineteenth Century（マーク・トウェインの作品にみられる「分身」たち：マーク・トウェインと19世紀末のアメリカ）
文化・地域環境学	伊藤のぞみ	ジャーナリズムにおける革新官僚像： 新体制運動をめぐる知識人の動向との関係
文化・地域環境学	乾由紀子	須田国太郎研究： 戦争期の風景画と「日本」
文化・地域環境学	王柳蘭	タイ北部における雲南系移民の植物利用と医食文化
文化・地域環境学	岡本正明	スハルト期インドネシアの対外政策，80年代前半における変容： 対外政策の原則 Bebas Aktif の持つ意味をふまえて
文化・地域環境学	河内将芳	中世末京都における仏教・寺院・教団と民衆： 戦国期法華教団をめぐるその社会的結合
文化・地域環境学	川村清志	民謡の成立と展開： 近代日本における国民文化の創出の事例として
文化・地域環境学	喜多康夫	国際司法裁判所の訴訟参加制度の機能と限界
文化・地域環境学	窪田好男	京都市の政策形成過程と政策評価
文化・地域環境学	酒井正治	工業用水リサイクルの経済分析
文化・地域環境学	定兼知行	核磁気緩和による S=1/2 一次元 Ising 型反強磁性体 $CsCoCl_3$ の非線形励起の研究
文化・地域環境学	佐藤修一	ハルデンギャップ系磁性体の核磁気共鳴
文化・地域環境学	清水政明	漢喃対訳『佛説大法父母恩重教』にみる字喃について： 15世紀ベトナム語音韻体系再構成へのいくつかの貢献
文化・地域環境学	杉中薫	酸素反応の有機合成への利用に関する研究
文化・地域環境学	住森公子	交代行列の空間に付随する Gauss 和の一般化
文化・地域環境学	高田理紀	リソース論からみた子ども研究： 幼稚園における環境・主体の動態的相互関係の分析から
文化・地域環境学	高村真也	未知空間におけるパスプランニング・アルゴリズムについて
文化・地域環境学	高谷暁和	酸化物系の合成と結晶構造解析
文化・地域環境学	竹森秀彦	工業化学物質規則の経済的側面： 化審法の経済的合理性
文化・地域環境学	田中信行	篭目格子反強磁性体 $NaFe_3(OH)_6(SO_4)_2$ の磁性と NMR
文化・地域環境学	田中良己	高分子ゲルの破断面に現れるパターンの解析
文化・地域環境学	千葉喜久江	儀式殺人伝説
文化・地域環境学	塚田浩	BO-C_{10}TCNQ 伝導性 LB 膜の電子スピンに関する実験的研究
文化・地域環境学	時岡恭平	光学活性含ヘテロ原子化合物の合成と利用に関する研究
文化・地域環境学	中川尚子	古代芸能の変質： 倭舞をめぐって
文化・地域環境学	西嶋泰史	Effects of muscle contractions on beat-by-beat measeured hemodynamic parameters and cardiac-locomotor coupling during cardiac cycle（心周期分画における筋収縮のタイミングが心臓循環系変数及びカップリング現象に及ぼす影響）

文化・地域環境学	西　山　昌　秀	競合する相互作用をもつ磁性体の磁性と NMR
文化・地域環境学	服　部　裕　之	Comparative Epidemiological Studies on Japnanese Elderly in Hawaii and Japan（高血圧と栄養について）
文化・地域環境学	廣　岡　泰　典	合金の磁性と中世子回析：$NdCO_2Si_2$ の高圧下中性子回析
文化・地域環境学	福　島　寧　子	血管平滑筋細胞における phosphatidylinostitol-3-kinase の活性化機構について
文化・地域環境学	藤　井　弘　章	龍燈伝承にみる聖地のシンボリズム
文化・地域環境学	前　田　晃　一	ミシェル・フーコー論：『汚辱に塗れた人々の生』を中心に
文化・地域環境学	三　村　　享	無定型状態を含む物質合成：直流アークプラズマジェットにおける反応活動種の二次元分布の検出
文化・地域環境学	宮　路　淳　子	縄文時代の西日本における植物利用について： 食糧貯蔵と生業形態との関わりを中心にして
文化・地域環境学	村　元　俊　亮	サイザルプランテーション跡地における土地利用とその持続性： タンザニア・モロゴロ州・イラカラ村におけるケーススタディ
文化・地域環境学	山　崎　充　彦	法規範と政治的現実： ヴァイマル憲法の危機をめぐるカール・シュミットとヘルマン・ヘラー
文化・地域環境学	山　本　淳　子	心を辿る歌集：排列・構成から読む『紫式部集』
文化・地域環境学	吉　武　康　栄	Investigation of motor unitrecruitment and impulse firing patterns by means of sound mygram frequency spectral analysis（筋音周波数スペクトル解析による運動神経単位の動因様式ならびにインパルス発射様相に関する研究）
文化・地域環境学	吉　田　恭　子	Narrative Salvation through plurality in *the Tidewater Tales* by John Barth（John Barth の The Tidewater Tales における複数性を通じた語りによる救済）
文化・地域環境学	芳　村　公　嗣	不定比化合物のキャラクタリゼーション
文化・地域環境学	Ngun　Aye　Aye	東亜青年連盟（ビルマ）、1942〜1945
文化・地域環境学	郭　　艶　春	雲南省少数民族の環境保全思想と技術： タイ族に関する民俗環境観の実態
文化・地域環境学	高　　明	動物モデルにおける糖尿病原因遺伝子の検索
文化・地域環境学	Rangsima, Boonsinsukh	古今和歌集論： 四季と恋のふれあい
文化・地域環境学	Ponte, Dale Jeffery	山間集落における儀礼と環境
文化・地域環境学	Van,　Do　Minh	ベトナムにおけるドイモイ（刷新）政策の研究
文化・地域環境学	Bermejo, Rosalia Medina	人間を見据えた画家・鴨居玲に関する考察
文化・地域環境学	佐　藤　知　久	AIDS/HIV とともに生きる人々の自己実現： ニューヨークにおけるヴィデオ・アクティヴィズムの戦略とレトリック
文化・地域環境学	島　上　宗　子	ジャワの農村開発におけるデサ行政と住民を組織活動： ジョクジャカルタ特別区グヌン・キドゥル県カランレジェッ行政村を事例として
文化・地域環境学	将　積　　睦	自然環境調和型作物生産の試行
文化・地域環境学	中　村　　恵	ペーター・ハントケの後期作品における文体
文化・地域環境学	藤　本　　武	エチオピア西南部マロの農耕と作物分類に関する民俗植物学的研究
文化・地域環境学	水　野　　侯	民話の形態論的分析： シャーマニズムと「米福粟福」
文化・地域環境学	宮　崎　直　人	マラルメにおける無
文化・地域環境学	村　瀬　ひろみ	女性の小屋空間から見た社会関係の人類学的研究： トゥルカナの事例より

文化・地域環境学	渡　辺　　純	イスラーム都市における民衆娯楽の文化人類学的研究：パキスタン・ラホール旧市街におけるケンカ凧あそびをめぐって
文化・地域環境学	平　井　克　尚	W.ベンヤミン「言語一般および人間の言語」の再検討：固有名の主題を中心に
人間・環境学	平　川　哲　浩	カント哲学における〈単なる理性〉とその限界における道徳・宗教の問題

平成8年度

文化・地域環境学	相　原　茂　樹	近衛篤麿　―その思想形成と思想構造―
文化・地域環境学	梁　根　千夏子	Die Kunst und das Leben in “Maler Nolten”（『画家ノルテン』における芸術と生）
文化・地域環境学	池　田　寛　子	Passion in Yeats Late Love Song Series（イエイツの後期恋愛詩群における「パッション」）
文化・地域環境学	井　尻　　楽	カンディンスキーの抽象絵画への過程　―ミュンヘン時代の理論と実践について―
文化・地域環境学	市　川　昌　広	サラワク州ベンコン川流域村落における生態利用の変遷と社会経済的背景
文化・地域環境学	上　野　勝　之	古代神祇祭祀の成立と構造　―神の機能・作用と祭祀形態を中心に―
文化・地域環境学	神　岡　和　雄	ヘビーフェルミオン反強磁性体 CePdA1 の核磁気共鳴
文化・地域環境学	川　合　一　郎	奈良盆地における水防と村落社会　―構堤をめぐる水論を中心として―
文化・地域環境学	川　端　　牧	糸満の魚売り　～価値を生み出す民俗知識～
文化・地域環境学	北　田　裕　行	律令制下における井戸祭祀の研究
文化・地域環境学	黒　谷　茂　宏	現代ドイツ語の機能動詞結合における機能動詞・前置詞・名詞の相互関連　―stellen, setzen を中心に―
文化・地域環境学	坂　田　昌　平	黒龍江省朝鮮族の居住空間に関する研究　―寧案市瀑布村でのフィールド・ワークから―
文化・地域環境学	里　井　香　奈	ヒルデガルト・フォン・ビンゲンの visio（幻視）にみられる病因と癒し
文化・地域環境学	城　田　　愛	踊り継がれるエスニシティー：ハワイにおけるオキナワン・ボン・ダンスに関する舞踊人類学的研究
文化・地域環境学	菅　　利　恵	Der Wandel des Bildes von der Familie auf der Bühne des späten 18. Jahrhunderts. ―Zur Darstellung der Figur des Vaters in den Familienschanuspielen Ifflands（18世紀末の舞台における家族像の変化　―イフラントの家庭劇にみる父親像）
文化・地域環境学	高　梨　克　也	日常生活場面における「説明」の発生状況と影響の分析
文化・地域環境学	高　橋　宗　士	各系統ラットにおける脂肪前駆細胞の分化能について
文化・地域環境学	玉　置　昌　哉	プラズマを用いる材料合成と機構
文化・地域環境学	玉　田　知　子	脳卒中易発症ラットにおける低コレステロール原因遺伝子の検索
文化・地域環境学	戸　田　　充	基底一重項磁性体 $CsFeCl_3$ における核磁気緩和気候の研究
文化・地域環境学	中　川　　清	脳卒中易発症性高血圧自然発症ラット（*SHRSP / Izm*）の培養腎糸球体メサンギウム細胞における増殖性の検討
文化・地域環境学	中　村　みどり	人間性の欲するもの　―マスロー欲求階層論再考―
文化・地域環境学	中　村　有　里	ニーチェ『ツァラトゥストラはこう語った』試論　―語られざる根本思想「永遠回帰」をめぐって―
文化・地域環境学	縄　田　浩　志	なぜウシに母子同名の固有名が呼びかけられるのか？　―スーダン東部バニー・アーミル族における搾乳管理からみた人間・家畜関係の事例分析―

文化・地域環境学	波佐間　逸　博	トリに賭ける　北部九州 X 市の闘鶏
文化・地域環境学	橋　本　文　華	「水」をめぐる共同体　風土論からみた村落の生活
文化・地域環境学	服　部　雅　典	電活物質の合成と物性
文化・地域環境学	濱　田　　陽	チャペル・ウエディングの研究
文化・地域環境学	濱　本　聡　子	「移動の島」の女たち・その生活世界の展開　―マカッサル海峡島嶼部における社会的動態の研究―
文化・地域環境学	林　　嘉　行	β-ラクトン類の不斉分子変換に関する研究
文化・地域環境学	藤　井　　裕	有機分子磁性体 m-MYPNN^{+}・X^{-} (X=CLO_4, BF_4) 塩の ’H の核磁気緩和
文化・地域環境学	細　田　明　宏	日本の人形芝居における「儀礼」と「演劇」　―拍手はいつ起こるのか―
文化・地域環境学	真　下　知　士	遺伝的モデルラットを使用した高血圧遺伝子の検索
文化・地域環境学	山　口　修　一	コメ市場開放の政策決定過程
文化・地域環境学	山　田　仁　史	太陽の射手　―日本・台湾と周囲諸民族における「太陽を射る話」の比較研究―
文化・地域環境学	山　本　利恵子	非核兵器地帯における核搭載鑑の領海通航
文化・地域環境学	吉　田　昌　三	遷移金属化合物の合成と微細構造　―Pd 蒸着 Si（111）基板表面の STM 観察
文化・地域環境学	吉　田　直　人	心拍変動のスペクトル解析
文化・地域環境学	謝　　丹　素	瀋陽の都市形成過程　―清代都城と植民都市の並立構造の成立―
文化・地域環境学	MARK　ROWE	現代の葬式から見る仏教　―経済・葬儀屋・最近の動向という観点から捉え直す―
文化・地域環境学	伊　藤　公　一	第一次世界大戦後における東西文明の接触　―アンドレ・マルローのアジア体験と『西欧の誘惑』―
文化・地域環境学	光　沢　　隆	Metaphors as Wish-Fulfilments: A Reading of Wordworth’s Poetry（願望充足としてのメタファー　―ワーズワースの詩に対する―解釈）
文化・地域環境学	橋　爪　博　幸	南方熊楠の神社合祀反対運動　―その動機と目的―
文化・地域環境学	林　屋　裕　子	日本史における茶のあり方についての一考察　―医薬品としての茶の系譜―
文化・地域環境学	平　田　秀　嗣	アフリカの都市民のグループ・アイデンティティに関する人類学的研究　―ケニア、ナイロビにおける乗合バス「マタトゥ」の事例より―
文化・地域環境学	藤　田　　渡	なぜ木を植えるのか　―環境への適応としてのワンナカセート―
文化・地域環境学	吉　川　義　子	Silence in *Dubliners*: The Ending of ‘The sisters’ and ‘The Dead’（『ダブリンの人びと』における沈黙　―「姉妹」と「死者たち」のエンディングについて）
文化・地域環境学	武　部　浩　子	リルケのフランス語による詩作
文化・地域環境学	中　村　泰　子	Sea Imagery in Sylvia Plath（シルヴィア・プラスにおける海のイメジャリー）
人間・環境学	相　沢　直　宏	チコガニ *Ilyoplax pusilla* De Haah のウェイビングディスプレーの時間的相互作用
人間・環境学	相　澤　義　高	Contributions of subducting sediments in arc magma genesis（沈み込み帯マグマへの堆積物の寄与）
人間・環境学	青　山　拓　生	テトラチアフルバレニル基をもつ分子の電子構造の研究
人間・環境学	石　田　美　紀	映画的リアリズムの一形態　ロベルト・ロッセリーニとネオレアリズモ
人間・環境学	石　野　秀　明	＜自己性・他者性＞交叉―その様式の発達論　―生後5ヶ月から1歳半の子どもの関与観察を通じて―

人間・環境学	石本志高	FEIGIN-FUNKS 表示と N=4 SU(2)k 超共形代数の研究
人間・環境学	稲田明理	CAMP を介するインスリン遺伝子発現調節機構の検討
人間・環境学	乾　泰一郎	Xenopus（6-4）光産物光回復酵素遺伝子のクローニング
人間・環境学	井上かおり	高齢化社会における地域医療の先駆的事例　―京都市西陣地区のフィールド研究―
人間・環境学	井上健一	スターによるゾノヘドロンの構成とその充填
人間・環境学	植田誠子	α2 受容体を介するインスリン分泌抑制における分泌顆粒上 Gi 蛋白の直接的制御機構の存在について
人間・環境学	内田浩明	カントに於ける自我の諸相
人間・環境学	大浦　貢	ガラスにおける硫黄の溶解性に関する研究　―芒硝を清澄剤として使用した場合―
人間・環境学	大坪和明	The restriction of HIV-1 repleicaion in monkey cell.（サル細胞における HIV-1 の複製抑制）
人間・環境学	小笠原　啓	新規ポルフィリンの合成とその物性に関する研究
人間・環境学	尾本義和	14族有機金属反応剤を用いる含窒素複素環への炭素基導入法の開発
人間・環境学	金本勝一	有機機能性分子の電子スピンダイナミクスに関する研究
人間・環境学	河井伸介	インフレーション宇宙における再加熱過程のくりこみ群による摂動解析
人間・環境学	黒江ゆり子	食逸脱行動を呈する糖尿病患者への心理的アプローチ
人間・環境学	児玉一宏	A Cognitive Approach to Dativization　―With Special Reference to Periphrastic Verbal Constructions（与格交替現象への認知的アプローチ　―迂言的二重目的語構文を中心に―）
人間・環境学	後藤禎仁	ピロロシクロプテンの合成と反応
人間・環境学	後藤義典	超対称ゲージ理論における双対性と超対称性のダイナミカルな破れ
人間・環境学	白瀧秀平	VRML を用いた仮想カルテ庫案内モデルの構築
人間・環境学	杉野春日子	中枢温度受容ニューロンのイオン機構
人間・環境学	杉山立志	変異導入による光合成光化学系II　電子移動における PSII－L タンパク質の機能解析
人間・環境学	鈴木ひろみ	宇宙環境の生物作用　―重粒子線と重力変化の影響―
人間・環境学	関根小織	E.レヴィナスにおける全体性と主体性
人間・環境学	千家弘行	カルシウム摂取と持久性運動負荷に対する骨格筋ミトコンドリアの形態的反応
人間・環境学	総田純次	問いとは何か
人間・環境学	谷口延子	微小不均一分散系に見られる特異的化学反応の構造化学的類型化　―高分子化合体による酸素酸の識別―
人間・環境学	椿　玲子	モードに関する一考察　―モードの創造性とは―
人間・環境学	椿田貴史	象徴化の過程における性と存在の問い
人間・環境学	花田光彦	空間周波数変化検出器の時空間特性解析
人間・環境学	林　寿信	日本型雇用慣行の労資協調体制
人間・環境学	原　そよか	前頭連合野ニューロン間の相互作用と機能的類似性との関係
人間・環境学	平井利明	水田に生息するカエルの食性に関する研究

人間・環境学	福島達臣	二課題遂行時における注意と認知の変化：事象関連電位を用いた研究
人間・環境学	古川　博	桂離宮論の論　―不在の朱塗り大橋をめぐって―
人間・環境学	法忍考子	トウモロコシcab-ml 遺伝子の組織特異的発現を制御しているシス、トランス因子の解析
人間・環境学	満武巨裕	医師の診断に関する国際比較研究
人間・環境学	向　英里	膵β細胞での sulfonylurea 剤に対する二次無効の分子機構　―細胞内糖代謝障害の意義―
人間・環境学	安江美和	幼児期における「自分」の領域　―2歳前後の子どもの保育園での観察から―
人間・環境学	保田紀子	膵β細胞でのインスリン分泌機構に及ぼすphosphatidy-Linositoo-3-kinaseの影響について　―Wortmanninを用いた検討―
人間・環境学	吉田宏之	磁気共鳴を用いた溶液内微環境の研究　―置換トリプチセンラジカルの構造と挙動―
人間・環境学	米田章登	コムギ葉緑体 psbD 遺伝子の光応答転写に関わるシス配列の同定
人間・環境学	VINCENT CLAIRE	日本に於ける精神分析の歴史
人間・環境学	LAI QUEE FOONG	脱植民地国家におけるメディアとネーションの形成　―マレーシアを事例として―
人間・環境学	岡本文人	フロイトのメタ・サイコロジー： 精神現象の説明の試み
人間・環境学	小関彩子	ベルクソンにおける自由行為の問題
人間・環境学	鞍田　崇	空間の経験　―ハイデガーにおける身体性の問題―
人間・環境学	坂本慎一	自由主義経済思想家としての初期渋沢栄一
人間・環境学	神野照敏	企業の本質　―企業の契約のネクサスとして解消しうるか？―
人間・環境学	若生　秀	テクスチャー境界線検出における色情報の役割
人間・環境学	成田英宏	アイオノマー中のイオンクラスターにおける分子環境論
人間・環境学	山本博子	昇華に関する一考察　―ラカン的解釈によるフロイト再読―

平成９年度

人間・環境学	青木宣明	超弦理論の非摂動的側面と M（atrix）Theory
人間・環境学	青柳雅之	非中性電子プラズマの断面構造
人間・環境学	朝倉美香	変法運動前後の儒学教育の変遷：康有為の教育思想を中心に
人間・環境学	網干雅仁	ある種の非線形常微分方程式の解の分類
人間・環境学	植木正二	電子スピン共鳴による遷移金属錯体の電子状態の研究
人間・環境学	大栗　究	白金族元素から考える南太平洋海洋島玄武岩の起源物質について
人間・環境学	岡澤　慎	The study of Melanocyte Differentiation using Melanoma Cell Lines（悪性黒色腫由来株を用いた色素細胞の分化の研究）
人間・環境学	数原美紀	時空のゆらぎとその反作用
人間・環境学	加茂わかな	メディアとグローバリゼーション
人間・環境学	木島義文	基板上薄膜の熱膨張測定
人間・環境学	小谷　賢	システムの衰退するとき：ウィーン体制の脆弱性とクリミア体制
人間・環境学	小林尚之	ゼンマイ（原始薄嚢シダ類）の卵形成に関する形態学的研究

人間・環境学	新地　綾	「重さ」の身体的経験と言語の相互関係
人間・環境学	菅野　晋	新規クラウンエーテルの合成と金属イオン捕捉能に関する研究
人間・環境学	杉本和彦	マルチタスク・GUI 環境下におけるリアルタイム計測・制御：生理実験アプリケーションの開発
人間・環境学	鈴木貴之	オキサミド置換体を配位子とした銅二核錯体のキレート構造と磁気的性質
人間・環境学	関　敬一郎	分裂文の談話機能： All new sentence の場合
人間・環境学	園田桂子	各国の外交政策に関する実証研究： 国連総会における投票行動の数量的分析を基にして
人間・環境学	鷹合孝之	交通流の 2 レーンモデルとその統計法則
人間・環境学	高田義之	本居宣長思想の哲学的研究： 神道思想と「ものの哀れを知る」論
人間・環境学	高山史乃	グローバルコモンズをめぐる交渉過程： その理論と実践
人間・環境学	竹綱宏行	歪んだ多重結合を有する化合物の付加環化反応
人間・環境学	玉田龍太朗	フィヒテ初期知識学における「感情」・「障害」・「物自体」 —『全知識学の基礎』（1794/95年）を中心に
人間・環境学	鶴井由佳	ワーキングメモリー課題中の前頭連合野ニューロンの機能相互作用
人間・環境学	中野雄喜	光合成光化学系ⅡL蛋白質が関わる電子移動部位の決定
人間・環境学	仲本康一郎	力学的形容詞の認知言語学的考察
人間・環境学	中安達也	有機ケイ素反応剤を活用する新反応の開拓に関する研究
人間・環境学	信友建志	歴史を語る主体の精神分析的考察： フロイトの「事後性」概念を手がかりに
人間・環境学	芳賀信斉	未知空間におけるパスプランニング・アルゴリズム
人間・環境学	播磨成明	6・4光回復酵素の諸特性の同定
人間・環境学	坂　信広	Calmodulin-dependent protein kinase Ⅳ による CRE =BP1（ATF2）活性化機構の検討
人間・環境学	平原武志	病院の三次元モデル化とウォークスルーシミュレーションによる評価
人間・環境学	朴　鐘哲	両眼相対視差による傾き知覚形成過程の研究
人間・環境学	松島文子	日本の住宅に関する地域構造論的研究
人間・環境学	三上真理子	草間弥生の芸術：水玉模様とミニマル・アート
人間・環境学	三宅正浩	有機金属化合物の反応と構造に関する研究
人間・環境学	宮崎恭行	キメラウイルス感染サル血清による様々なサブタイプの HIV-1 株に対する中和活性
人間・環境学	宮脇一真	効率よく germline transmisson する gestric inhipitory polypeptide（GIP）receptor 欠損 ES 細胞の樹立
人間・環境学	森　彩子	子どもと「ともに生きる」ことに関する一考察：ある施設における実践を通して
人間・環境学	森　崇	包接ホスト格子の微妙な変化がおよぼす結晶構造および物性への影響
人間・環境学	森川一也	Cloning and characterization of chloroplast б -factors（葉緑体 б 因子のクローニングと機能解析）
人間・環境学	森山博由	Analysis of recombination sites in HIV-1subtype A/G recombinants（HIV-1 サブタイプ A/G リコンビナントの組み換え部位の解析）
人間・環境学	矢口浩子	無意識的罪責感に関する精神分析的考察： 自我の同一性の成立をめぐって

人間・環境学	安井　聡	トリイソプロピルベンゼフェノン誘導体のUV照射により生成するラジカルの電子構造
人間・環境学	吉田恭子	ブーバーにおける人間の対話的生
人間・環境学	史　歌	戦後における華人団体（エスニック・グループ）の変遷
人間・環境学	張　運紅	日本と中国の心疾患の発症原因と予後調査についての検討
人間・環境学	李　西華	肉蓯蓉（cistanche salsa）の筋代謝への影響
人間・環境学	劉　晨	大学病院における外来処方オーダーエントリーシステム導入が及ぼした影響に関する定量的評価
人間・環境学	小池直弘	都市におけるオープンスペースの重要性
人間・環境学	藤田　けんじろう	Systematic Position of Neuradaceae Based on Additional Analysis of *rbcL* Sequences, Floral Anatomy, and Embryology（rbcL の塩基配列の解析，花の解剖学，胚発生学的研究に基づいたネウラダ科の分類学的位置）
人間・環境学	松本寿弥	日本における自己批判的バイアス： 自己向上理論の検討
人間・環境学	小谷　泉	失語症患者における文の復唱の検討： 理解との関係
人間・環境学	野村文宏	フッサールの形相的還元の根本的動向
人間・環境学	末冨　浩	エドモンド・バークの政治哲学　―『崇高と美』を手がかりに―
文化・地域環境学	浅井晶子	“Das apollinische” in der “Frohlichen Wissenschaft” von Nietzsche： ニーチェの「悦ばしき知」における「アポロ的なもの」
文化・地域環境学	天野健作	「森林レジーム」の要因分析： 意志決定の所在と原則
文化・地域環境学	石井美保	越境するラスタファリアンズ：タンザニアにおける社会宗教運動の展開
文化・地域環境学	石毛彩子	国分寺の維持経営：東国国分寺跡の分析を中心にして
文化・地域環境学	石田尚子	The Universality of The Crucible with relation to McCarthism（「クルーシブル」における普遍性　―マッカサーシズムとの関連―）
文化・地域環境学	石橋　郁	『新撰和歌』巻四の配列構造
文化・地域環境学	伊藤民代	SHRSP/Izm 由来培養平滑筋細胞における誘導型 nitric oxide synthase（iNOS）の発見
文化・地域環境学	上　英俊	Assessment of cardiac autonomic nervous activities by means of ECG R-R interval power spectral analysis and cardiac depolarization-repolarization process（心拍変動及び心筋脱分極・再分極時間の定量化）
文化・地域環境学	上野敬太	脳卒中易発症ラット（SHRSP）における低コレステロール原因遺伝子の探索
文化・地域環境学	岡田　直	近代の都市空間における鉄道駅の研究： 福岡（博多）を事例として
文化・地域環境学	金作　整	ソフトプロセスによる酸化物合成とキャラクタリゼーション
文化・地域環境学	神谷綾子	ホスピス入院患者の遺族をめぐる一研究： 日本バプテスト病院の事例から
文化・地域環境学	香山聡子	妙善公主伝説考： 宝巻文学と女性をめぐって
文化・地域環境学	河田幸視	外海産トラフク延縄漁業の資源経済学的研究
文化・地域環境学	小暮律子	材質および成形技法からみた古代ガラスの流通に関する研究
文化・地域環境学	小林　知	カンボジアにおける農村社会研究の展望　―『スヴァイ』を中心に―
文化・地域環境学	島岡良之	二重スピン鎖系化合物 K $CuCl_3$ の核磁気共鳴
文化・地域環境学	善治千恵美	Autonomic nervous activity and diet induced thermogenesis in obese women（肥満女性における自律神経活動及び食事誘発性熱産生）

文化・地域環境学	高尾美穂	生物多様性条約における「人類共通関心事」概念と主権的権利の調和
文化・地域環境学	高野泰志	Hemingway and the Theme of Childbearing（ヘミングウェイと出産テーマ）
文化・地域環境学	外山修三	ある種の非線形常微分方程式の解の漸近挙動
文化・地域環境学	中原敏典	核磁気共鳴法による容易面型の異方性をもつハイゼンベルグ三角格子反強磁性体 $CsVBr_3$ の研究
文化・地域環境学	永島明子	マリー・アントワネット蒔絵コレクション： 明治期万国博覧会出品作品の源流
文化・地域環境学	楢和千春	方向認識の非対称性とことばの意味の拡張：「まえ」を中心に
文化・地域環境学	丹羽結花	町屋をめぐる年中行事から見た都市： 京都中心部の生活空間
文化・地域環境学	野澤元	Emily Dickinson's Meter and Use Punctuation: A Quantitative Study（エミリーディキンスンの韻律とパンクチュエーションの用法：定量的研究）
文化・地域環境学	信田千佳	身体部位の冠する慣用表現について： メタファーとメトニミーの関係を中心に
文化・地域環境学	藤岡和佳	「ふるさと」の変容とその背景に関する調査・研究： 現代のふるさと観の土台としての自然
文化・地域環境学	藤澤茂樹	事前整列性測度・順部分列数（SSS）と順部分列数最適な整列 アルゴリズム・SSSSort の提案
文化・地域環境学	前田直子	国内法の条約適合性確保義務の性質： ヨーロッパ人権条約のイギリスにおけ国内的実施に関する評価
文化・地域環境学	増田聡史	キラル含ヘテロ原子化合物の合成と利用に関する研究
文化・地域環境学	待鳥崇	ワーグナーの反ユダヤ主義的美学
文化・地域環境学	三浦綾子	ブラジル日系人に対する栄養疫学的研究
文化・地域環境学	水野春奈	海洋付着生物に対する忌避活性化合物の合成及び探索
文化・地域環境学	森本多麿喜	カゴメ格子反強磁性体： ジャロサイト化合物の磁性と NMR
文化・地域環境学	門田園子	E.W. ゴドウィンのジャパニズム： 19世紀末英国デザイン研究
文化・地域環境学	山崎陽	「総合的資源管理」としての環境アセスメント制度： ニュージーランドの環境アセスメント制度をモデルとした一考察
文化・地域環境学	山本早知子	第三帝国の娯楽映画： オペレッタ映画「la Habanera」に内包される国民統合の可能性に関する考察
文化・地域環境学	吉橋久美子	京都市における児童公園： その歴史と現在
文化・地域環境学	蘇暁玲	五代閩国と福建の発展： 割拠政権による地域開発に関する研究
文化・地域環境学	石山元浩	構文木変形による日本語文推敲支援システムの研究
文化・地域環境学	岩田晶子	都市における業者介入型結婚式の発展過程： ジャカルタ在住ミナンカバウの事例から
文化・地域環境学	江口佐和子	インヂネシアのキリスト教リヴァイバルにみる「都市型」宗教の出現
文化・地域環境学	大野明子	「ドリーミングの現在」： オーストラリア・アボリジニの民族的アイデンティティをめぐる現代的局面
文化・地域環境学	大山晃司	縄文時代の瀬戸内地域における水産資源の応用： 江口貝塚出土の動物遺存体の分析を中心として
文化・地域環境学	古村学	言語を超えた共同体： バタイユの内的体験を通して
文化・地域環境学	佐藤竜二	サルトルにおける言語表象の問題： フラシス・ポンジュとの関連において
文化・地域環境学	西山太郎	計画される「パブリックアート」： 公共空間への美術作品の導入に関する一考察

文化・地域環境学	畠中昌教	歴史的なツーリズム都市の形成に関する研究： 日本とスペインの比較に向けて
文化・地域環境学	平田　正	クラス項を用いたオブジェクト指向言語の計算モデル
文化・地域環境学	山口　威	カリカチュアの実践者ボードレール： ジャーナリズムから詩的創造へ
文化・地域環境学	河田　学	虚構作品の存在論的考察
文化・地域環境学	武智陽子	近世和泉国沿海部集落の形成とその特質
文化・地域環境学	中野　篤	協調の発生にエージェント間の通信を必要としない機構についての研究
文化・地域環境学	長山智香子	明治初期ジェンダー秩序の編成： 森有礼の「妻妾論」と男女同権
文化・地域環境学	橋本淳治	予備校の成立を通してみた近代日本の中等教育の歴史

平成10年度

人間・環境学	安部明美	ある女性の出産・育児体験とその関係力動の場
人間・環境学	荒木賢一	開示性・真理・学　～『存在と時間』におけるロゴス概念について～
人間・環境学	石川剛也	持久戦の確率ゲーム論的考察
人間・環境学	石川智子	ショウジョウバエ青色光受容体タンパク質の解析
人間・環境学	伊藤暢康	生体弾性を表現する VR モデルを用いたシュミレーションシステムの構築
人間・環境学	井上千春	中華人民共和国建国に至るまでの中国共産党の対外政策
人間・環境学	今村彰生	尿素散布土壌に発生する菌根性担子菌の生態学的及び生理学的研究
人間・環境学	宇多　浩	知覚における意味の発生論
人間・環境学	大蔵定之	Origins of HTLV-I in South America and Pacific Ocean.（南米および太平洋に広がる HTLV-I の起源）
人間・環境学	大塚直子	出来事としての芸術：ドゥルーズの時間論
人間・環境学	岡　定紀	輝度と色の知覚的な分離・統合過程の研究： 時間・空間的な分離・統合現象の解析
人間・環境学	加唐丈裕	新規クラウンエーテルの合成と金属イオン補捉能に関する研究
人間・環境学	加藤　誠	文書分類におけるキーワードとその文脈ベクトルの抽出
人間・環境学	金子　誠	不飽和結合部位をもつクラウンエーテルの合成とその反応に関する研究
人間・環境学	木村伸也	ビニルポルフィリンのディールスーアルダー反応
人間・環境学	河内山隆紀	A study of pure motor learning: behavioral and neuroimaging analysis with positoron emission tomography using a two-ball rotation task.（健身球による純運動学習課程の行動学的及び脳機能画像解析）
人間・環境学	小山和哉	バリオン密度ゆらぎによる構造形式
人間・環境学	齋田浩見	Black Hole Rediation with High Frequency Dispersion（高周波分散がある場合のブラックホール輻射）
人間・環境学	関　穣慶	Complex Manifolds F-theory（複素多様性と F-理論）
人間・環境学	高畠淳子	ドイツ雇用保険制度における一考察： 失業手当と退職手当の調整を中心に
人間・環境学	高水　徹	日本語の量・程度表現に関する認知言語学的分析
人間・環境学	田上裕子	Dichotic Monitoring Test における意識的注意と Ear advantage の関係について

人間・環境学	田中久子	Wortmannin, an inhibitor of PI3-kinase, promotes insulin secretion through a cAMP-dependent pathway in isolated perfused pancreas.（PI3-kinase 阻害剤（ワートマニン）は cAMP を介する系でインスリン分泌を促進する： 膵灌流用いた検討）
人間・環境学	田中正人	有機ケイ素化合物を活用した不斉反応の開発
人間・環境学	谷井安代	The Semantics of Adjectives : A Study in the French Adjectival Position（形容詞の意味論： フランス語追加形容詞の位置に関する研究）
人間・環境学	壇上　恵	ある自閉的傾向をもつ子どもの対人世界の様態
人間・環境学	伝　優子	自閉性発達障害における視点変換能力の検討： 心的表象の視点と基準枠という観点から
人間・環境学	西川完途	オオダイガハラサンショウウオの地理的変異の研究
人間・環境学	橋本智津子	意志の形而上学とブラフマン
人間・環境学	弘中靖子	キラルなニトロキシドラジカル合成法とそのキラル常磁性液晶合成への利用
人間・環境学	藤田志具麻	都市パターンのフラクタル性図形的定量化に関する研究： 京都府下の都市をモデルとして
人間・環境学	松岡弥生	ウエーブレット解析を用いた医用画像の空間周波数セグメンテーション
人間・環境学	松田友彦	固体表面の化学活性に立脚した分離分析法の研究
人間・環境学	松本隆彦	虚偽応答における行動学的解析
人間・環境学	水谷圧吾	超対称性を持たない弦理論における宇宙定数の消滅
人間・環境学	村上正行	コンピューター支援語学教育の教育効果の評価と認知科学的考察
人間・環境学	森田吉彦	東アジア国際政治の再編と論理： 日清修好条規の意味と「近代」
人間・環境学	安原二良	Differential Localization of the Rhodopsin and the Na/K-ATPase subunits in Drosophila Photoreceptor Cells.（ショウジョウバエ光受容体細胞を用いた膜蛋白質局在化機構の研究：ロドプシンとナトリウムポンプをマーカーとして）
人間・環境学	山口　哲	超弦理論における Ads 空間の超重力理論と境界上の共形場理論の対応について
人間・環境学	吉田　晋	オプション価格決定におけるボラティリティ推定の逆問題
人間・環境学	吉村成弘	Na/K-ATPase におけるイオン輸送の分子機構キメラ分子による解析
人間・環境学	KHAMMUANG KWANNUT	身体部位に関する言語表現の意味拡張： タイ語と日本語の比較を中心に
人間・環境学	黒木ゆみ	受身文に関する日・仏語の対照研究
人間・環境学	高村夏輝	「数学の諸原理」における表示関係の形而上学的条件について
人間・環境学	松本庄司	段層型ニューラルネットワークへの自己回復層の導入
人間・環境学	三角真之助	抱える環境と子どもの発達　―ウィニコットの早期母子関係理論に関する考察―
人間・環境学	梶川和行	自閉症への精神分析的アプローチ
人間・環境学	進藤三佳	A Cognitove Analysis of Metaphorically Extended Concepts Based on Bodily Experience. : A Case Study of Temperature Expression（身体経験を基盤とする隠喩的拡張概念の認知的分析：温度表現の場合）
文化・地域環境学	上石　聡	生体触媒の有機合成への利用に関する研究
文化・地域環境学	安部健二郎	カラムジンの西欧旅行とその意義づけ：『ロシア人旅行者の手紙』について

文化・地域環境学	岩　井　秀　典	Transgenic Approach toward Leptin Biology : Creation and Analysis of Transgenic Mice Overexpressing Leptin, a Model of Obesity-Related Hypertension and Metabolic Diseases（レプチンの生物学に対する発生工学的アプローチ：肥満に伴う高血圧症や代謝異常症の病態モデル動物としてのレプチン過剰発現トランスジェニックマウスの開発と解析）
文化・地域環境学	岩　谷　彩　子	ジプシーのペンテコステ派キリスト教への改宗をめぐる一考察
文化・地域環境学	岩　谷　洋　史	村落の空間構造に関する一考察： 滋賀県菅浦の事例をもとにして
文化・地域環境学	大　友　　文	『グリム童話』受容における語りの力： 巌谷小波と口演運動
文化・地域環境学	小坂田　裕　子	自由権規約に基づく報告制度の発展とその問題点： 第40条4項の「一般的性格を有する意見」の解釈をめぐって
文化・地域環境学	鹿　島　理律子	日本におけるパンの概念の変遷： 16世紀から現在まで
文化・地域環境学	嘉　戸　一　将	井上毅における明治国家と正統性・合理性
文化・地域環境学	嘉　戸　尚　子	上代日本語における助詞ヲの係助詞性と意味
文化・地域環境学	見　目　佳寿子	池間島漁民文化考： 人とカツオの民俗世界
文化・地域環境学	佐久間　将　実	DC アークプラズマ法による鉄窒化物合成の試み
文化・地域環境学	笹　本　恭　子	『源氏物語』の翻訳： 六条御息所像をめぐる一試案
文化・地域環境学	佐　藤　泰　子	近代医療における「看取り」： その実態と課題
文化・地域環境学	神　野　　恵	伐採斧の出現とその背景： 先史社会の「用途」論
文化・地域環境学	清　井　昭　彦	ソフトプロセスによるBi複合酸化物合成の試み
文化・地域環境学	関　根　由　布	閉経に伴う血圧上昇に対する大豆食の影響
文化・地域環境学	高　井　たかね	明代の家具使用にみえる一意識： 飲食場面における卓配列と分割・組み合わせの指向
文化・地域環境学	高　峰　卓　也	高温型プロトン導電体の非平衡電気化学的研究
文化・地域環境学	田　邊　充　式	W-3 系不飽和脂肪酸の循環器疾患における影響に関する疫学的研究
文化・地域環境学	田　邉　由美子	関東地方における縄文時代後期の交易・交流の一様相： 特に南房総地域と三浦半島・東京湾沿岸地域との関係について
文化・地域環境学	谷　口　光太郎	気候変動枠組条約京都議定書における「衡平」の確保： 温室効果ガス排出削減手法としてのEUバブル方式の分析
文化・地域環境学	谷　本　美穂子	分子軌道計算による風化メカニズムに関する研究： シリカ－酸性溶液への応用
文化・地域環境学	津　澤　美可子	『紫式部日記』の一性格： 装束記事をとおして
文化・地域環境学	富　田　泰　弘	豊臣期の城下町プランに関する歴史地理学的研究
文化・地域環境学	冨　益　ゆ　き	『哀れなハインリヒ』： 少女の言動について
文化・地域環境学	中　畠　俊　彦	『明史』道学伝立伝問題について
文化・地域環境学	畠　山　歌　子	帝政ロシアにおける貴族の家庭教育
文化・地域環境学	藤　原　敬　介	動詞の自他の区別に関する一考察： 現代ドイツ語を中心に
文化・地域環境学	布　施　将　夫	軍事と鉄道： ドイツの日本に対する影響についての考察
文化・地域環境学	前　木　由　紀	「ヒュプネロトマキア」考： ヴェネツィア文化におけるイメージと言語の一側面
文化・地域環境学	牧　野　光　琢	資源管理型漁業の制度効果分析： ズワイガニ漁業を例として
文化・地域環境学	真　野　祐　子	女性誌『婦女界』をめぐって： 1920年代における「近代女性」のライフスタイル

文化・地域環境学	三　澤　政　樹	グスタフ・マーラーの音楽にみる悲劇の図式： 19世紀の芸術における悲劇と祭りの親縁
文化・地域環境学	宮　辻　　綾	The Menstrual Cycle and Thermoregulation: The role of female hormones and autonomic nervous activity（性周期と体温調節： 女性ホルモンおよび自立神経活動の作用）
文化・地域環境学	安　田　宜　仁	ストーリーを持った文書群の検索
文化・地域環境学	山　本　芳　華	地方自治体の環境マネジメントシステム構築の分析と意義
文化・地域環境学	湯　淺　俊　昭	Assessment of blood pressure regulation process in diabetic patients with different degree of autonomic neuropathy.（糖尿病性自立神経障害患者における血圧調節過程の評価）
文化・地域環境学	吉　田　雅　子	中国16-17世紀における輸出用染織品について： 刺繍ベルベットを中心に
文化・地域環境学	和　田　　浩	古代壁画の保存科学的研究
文化・地域環境学	王　　雷	都市郊外の開発に伴う地域変容の研究： 神戸と哈爾濱を事例として
文化・地域環境学	関　　心	元の裁判劇における幽鬼の特質
文化・地域環境学	張　　新　軍	中国の核不拡散政策に対する米中原子力平和利用協力協定の影響： 米中交渉及び米国連邦議会決議案の検討
文化・地域環境学	SILVIA TARTARINI	漢字について　―非漢字文化圏の研究者からみた漢字に関わる諸問題
文化・地域環境学	朴　　基　勲	介護保険と低所得高齢者： 京都市を事例に
文化・地域環境学	JANTRA JANTIMA	日本語形容詞「あまい」の意味拡張と広告における多義的使用の分析： 英語〈sweet〉及びタイ語〈wǎan〉と対照しながら
文化・地域環境学	Punwichai Lakkana	タイの教科書に見えるタイ国家イデオロギー（1921-1990）
文化・地域環境学	冲　永　隆　子	ターミナル・ケアの確立過程に基づく精神的援助の在り方： 二つの緩和ケア病棟の事例を中心に
文化・地域環境学	木　村　圭　祐	澤野忠庵： その背教と思想
文化・地域環境学	野　本　貴　之	容器包装リサイクル法の効果分析
文化・地域環境学	林　　香　織	弥生時代における動物利用の展開
文化・地域環境学	林　嵜　伸　二	カフカの物語『歌姫ヨゼフィーネあるいは鼠族』と《民族の日記づけ》としての小文学について
文化・地域環境学	比留間　洋　一	北ベトナム村落のリーダーシップに関する文化人類学的考察
文化・地域環境学	宮　崎　理　枝	1630年ボローニャのペスト流行時にみる法令、裁判民衆行動
文化・地域環境学	倉　橋　充　禎	アドルノの「キルケゴール」論における「美的なもの」の力
文化・地域環境学	西　　真　如	近代国家の成立と「民族」の生成： エチオピア南部におけるグラゲ商人の移住史から
文化・地域環境学	野　崎　恭　夫	アルフレート・デーブリーン「ベルリン・アレクサンダー広場」における「物語作者」の概念について
文化・地域環境学	平　松　英　人	近世初頭京都におけるえた支配の構造
文化・地域環境学	松　川　和　枝	19世紀後半イングランド東北部プルシティブ・メソディストの女性説教者： 制度化されなかった宗教活動
文化・地域環境学	松　本　　直	北魏における北族官僚の産業経営
文化・地域環境学	三　瓶　智　章	アニメ「少女革命ウテナ」論

環境相関研究	赤畑　渉	SIV のヌクレオキャプシド蛋白質中の Zn フィンガーモチーフの機能の解析と HIV-1 との比較
環境相関研究	浅利琢磨	気相成長ダイヤモンド薄膜の電界電子放出特性
環境相関研究	板倉史明	「伊藤大輔研究　―戦中期から占領期における映画作品の生成研究」
環境相関研究	一宮正義	半導体における偏光2光子励起法を用いた励起子間相互作用の研究
環境相関研究	伊藤慎二	コムギ葉緑 RNA ポリメラーゼ δ 因子の概日リズムによる発現挙動の解析
環境相関研究	岩田達也	ラン藻 *synechocystis* sp. PCC6803 を用いた光化学系II PsbL タンパク質の機能解析
環境相関研究	岡村英幸	Phylogenetic analysis by mitochondrial ND5 genes of Fagus gall midge（Diptera : Cecidomyiidae）.（ミトコンドリア遺伝子ND5領域によるブナタマバエ類（双翅目：タマバエ科）の系統解析）
環境相関研究	工藤浩司	Volatiles in melt inclusions from French Polynesian HIMU basalts
環境相関研究	黒宮一太	「ナショナリズム論」再考：ナショナリズム分析のための新たな枠組みの提示
環境相関研究	坂元正樹	Jone Dee の *Propaedeumata Aphoristica* における天体からの放射物に関する考察
環境相関研究	柴山桂太	自由・富・秩序： ハイエク・ケインズを手がかりに
環境相関研究	林　敬子	葉緑体形質転換技術の開発
環境相関研究	張田裕之助	湖沼における酸素酸アニオンの分布と動態
環境相関研究	藤井仁子	成瀬巳喜男と日本映画の十九三〇年代： トーキー移行期の諸問題
環境相関研究	藤井信彰	Bi, Sb を含む複合バナジウム酸化物の水熱合成
環境相関研究	前川和俊	3次元複素数空間の2次多項式自己同型の力学系
環境相関研究	正清宣行	日本における金融商品会計： 公開草案と会計機能に関する検討
環境相関研究	森川　亮	〈時空間不連続仮説〉について： ゼノンのアポリアから見た時空間
環境相関研究	山品友美	The Uniqueness of John Cassavetes's Films：Ani-Hollywood Films（ジョン・カサヴェテスの映画の特異性　―ハリウッド映画―）
アフリカ地域研究	桐山睦子	交通流の 2 レーンモデルとその統計法則
アフリカ地域研究	飯島道郎	都市流入者の「スス講」依存性：ガーナ・アデンタ地区における「スス講」
アフリカ地域研究	飯田優美	ンザニアにおける学校教育の普及と地域住民の取り組み　―キリマンジャロ州サメ県における学校新設の事例を中心に
アフリカ地域研究	宮本直美	マダガスカル、ベレンティにおけるワオキツネザルの未成熟個体の社会関係

平成11年度

人間・環境学	足立　渡	フラクタル集合の Hausdorff 測度について
人間・環境学	鮎川利幸	マイクロポーラー流体におけるアインシュタインの粘度式
人間・環境学	有光奈美	否定性を含む肯定文の諸相： 認知語用論の観点から
人間・環境学	有賀のり子	電気化学的手法を併用するモリブデンブルー法の改良研究
人間・環境学	石井敬子	選択的注意と感情的発話の理解： 文化心理学的検討
人間・環境学	稲田龍成	視覚マスキング効果の誘発電位計測による研究
人間・環境学	上坂浩実	アカゲザル由来 SIV/SHIV 感受性T細胞株の樹立

人間・環境学	内田 由紀子	文化と自己システム： 日本における思いやりの文化慣習と暗黙の自己愛着
人間・環境学	梅村 舞子	かたちにおける均質性とその時間的変化
人間・環境学	圓戸 恭子	カスミサンショウウオの繁殖生態に関する研究
人間・環境学	大倉 得史	「アイデンティティ」再考
人間・環境学	大園 哲也	水圏に生滅する有機物質の赤外並びにラマン分光学的研究
人間・環境学	岡田 章宏	新規1,2,3： トリアジン誘導体の合成
人間・環境学	小田 涼	談話モデルによるコピュラ文の解釈
人間・環境学	小野 文生	〈倫理的〉主体生成の人間形成論： ブーバーとレヴィナスのあいだで
人間・環境学	加賀 賢治	慢性低酸素曝露に対する骨格筋のミオシン重鎖アイソフォーム発現の変化
人間・環境学	米田 宣幸	肘関節屈曲力および伸展力の増大・減少における筋電図活動
人間・環境学	國仲 寛人	The analysis of the coefficient of restitution for the two-dimensional elastic disk（2次元弾性体のはねかえり係数の解析）
人間・環境学	桑原 尋己	ドゥルーズ哲学における潜在性の概念： 表象＝再現前化批判から新しいものの生産の理論へ
人間・環境学	古賀 純子	ベルクソンの『創造的進化』における美学
人間・環境学	小林 百合	ゼブラフィッシュ光回復酵素 / 青色光受容体の解析
人間・環境学	佐野 雅之	AdS 超対称性の部分的破れ
人間・環境学	志原 伸幸	The association between Triip64 Arg polymorphism of the β3-adrenargic receptor and autonomic nervous activity（β3アドレナリン受容体変異（Triip64 Arg）と自律神経活動の関係）
人間・環境学	竹田 和良	条件性遅延眼球運動課題に関連したサル前頭連合野のニューロン活動
人間・環境学	橘 肇	微小重力およびX線照射と骨格筋の MHC isoform 発現
人間・環境学	田中 浩也	高次元図形を媒介としたデジタルデザイニングの研究： 情報・建築空間の構築を前提として
人間・環境学	玉井 尚彦	A Scalar Approach to Restrictions on the English Resultative Construction（「段階性」から見た英語結果構文の制約）
人間・環境学	玉田 昌志	束縛された分子環境下における常磁性種のESRに関する研究
人間・環境学	辻 秀之	軸配位子がもたらす Ni^{2+} シクラム塩の電子状態に関する研究
人間・環境学	常包 昌宏	多変量解析の起源とその諸評価に関する考察
人間・環境学	戸田 剛文	バークリーの議論における二つの観点
人間・環境学	中西 之信	「言葉の世界」と失語症者、その関係について： 精神分析の言語論による考察
人間・環境学	中村 将司	官能基を有するシクロペンタジエニルイリジウム錯体の合成と構造に関する研究
人間・環境学	濱田 太郎	新規有機金属（イリジウム）複核錯体の合成と構造ならびに触媒機能に関する研究
人間・環境学	原田 陽介	Evolution of Primate Lentiviruses in Central Africa: Moleculer Characterization of Simian Immunodeficiency Viruses（SIVs）from Mandrill Monkeys（中央アフリカにおける霊長類レンチウイルスの進化：新しい SIVmnd（マンドリル免疫不全ウイルス）の解析）

人間・環境学	稗田美香	Significance of C-terminal cytoplasmic tail in the function and sorting of muscarinic acetylcholine receptor.（ムスカリン性アセチルコリン受容体の機能および細胞内輸送における受容体カルボキシル末端細胞内部位の重要性）
人間・環境学	平山　順	宇宙放射線及び重力変化の生体への影響
人間・環境学	前川　愛	モンゴルにおける近・現代の都市研究
人間・環境学	松田純治	Effects of spaceflight and recovery on rat spinal motoneurons innervating hindlimb and perineal muscles.（宇宙飛行およびその後の回復がラットの後肢筋ならびに会陰筋を神経支配する脊髄ニューロンにおよぼす影響）
人間・環境学	間中信之	テトラジン誘導体とアルケン類及びアルキン類との反応
人間・環境学	三浦英之	優先富化現象に関する研究
人間・環境学	光田展隆	Gene regulation of H^+-PPase and its biological significance in pollen development.（H^+-PPase 遺伝子の発現制御機構及び花粉発達におけるその重要性について）
人間・環境学	宮脇ゆう子	運動錯覚を用いた四肢の位置・動きに関する研究
人間・環境学	守田知代	The development of the visual capabilities explained by the anatomical changes in the visual system（視覚系の解剖学的変化から見た視覚能力の発達過程）
人間・環境学	山根元子	カスルレーと英国外交
人間・環境学	吉田健太郎	位相的場の理論による QCD の再定式化のクォーク閉じ込め
人間・環境学	出口雅也	言語現象への PDP 的アプローチ
人間・環境学	重田　謙	『哲学探究』の規則論
人間・環境学	田中佳子	看護におけるケアリング概念の研究
人間・環境学	多見谷聡裕	セオドア・ルーズベルトにとっての人口問題：少子化，出生力格差，人口移動をめぐる政治・戦略論的考察を中心として
人間・環境学	細木美枝	精神科デイケアにおける境界例の治療と支援：精神分析的観点から見た
人間・環境学	池内　綾	等角写像の半群による研究
人間・環境学	清水桃香	APEC のレジーム理論からみた分析： 情報通信産業分野を中心に
人間・環境学	藤林富郎	A Study on Gestures with L.1&L.2（第一言語と第二言語にともなうジェスチャーについての一考察）
文化・地域環境学	天野真佐理	Effects of Exercise on the Physical and Mental Health : Changes in Body Composition, Blood Lipid, Autonomic Nervous System, Mood States and Climacteric Symptoms（運動が身体的および精神的健康に及ぼす影響：身体組成，生化学，自律神経，気分，更年期障害の変化）
文化・地域環境学	生田和宏	古代末から中世初期における集落遺跡の再検討
文化・地域環境学	池田武史	Effects of sesamin and caffeine ingestion on antioxidant defences, lipid oxidation and autonomic nervous activity in humans.（セサミンとカフェインが生体の抗酸化作用，脂質代謝及び自律神経活動動態に及ぼす影響）
文化・地域環境学	板垣知子	愛宕信仰の歴史民俗学的考察： 愛宕山と山麓集落
文化・地域環境学	井上靖志	エジプトにおける古環境の変動： 花粉分析をもとにして
文化・地域環境学	牛田　宣	石川三四郎の思想と生涯
文化・地域環境学	岡　美穂子	近世初期長崎豪商の対外経営戦略： 二代目末次平蔵とマカオ・オランダ商館
文化・地域環境学	海田思子	人麻呂における物と心の交渉： 述語動詞の共有に着目して
文化・地域環境学	春日　匠	国境の経験： 小笠原の民族誌的問題と地政学的意義

文化・地域環境学	空閑佐智子	開発途上国における生活習慣病の危険因子の解析： アフリカタンザニアにおける比較検討
文化・地域環境学	向田卓	ガンマ MnO_2：特性評価の試み
文化・地域環境学	小原丈明	都市再開発事業に関する地域形成論的研究： 大阪における市街地再開発事業の事例から
文化・地域環境学	小森聡	行政と住民とのパートナーシップの構築に向けて： 滋賀県彦根市における「夢京橋キャッスルロード整備事業」を手がかりに
文化・地域環境学	酒井尚子	酵素を用いた分子変換に関する研究
文化・地域環境学	相良未木	高血圧性疾患の薬物治療と栄養： 高齢者の降圧治療軽減に関する基礎的検討
文化・地域環境学	佐竹裕哲	ハンナ・アーレントの「権威」の概念について
文化・地域環境学	柴田智弘	C_2-対称性ピロリジンから誘導される光学活性ニトロキシドラジカルの合成
文化・地域環境学	島薗洋介	精霊祭祀の微視的構造： フィリピン・レイテ島北西部における tambalan について
文化・地域環境学	朱鳳	『開国図志』における新概念と新語についての考察
文化・地域環境学	関根真保	上海のユダヤ人
文化・地域環境学	高田佳代子	Moholy-Nagy の光空間調節器： 空間の変容と芸術家の社会参加
文化・地域環境学	高橋典子	萬葉集における序詞の関係構造：「の」による連接を中心に
文化・地域環境学	谷敢司	アメリカ新保守主義派知識人の闘争：「近代社会」の保守主義
文化・地域環境学	徳尾健司	A possible world semantics for quantum logic based on graded accessibility relations（到達可能性関係を多値化した可能世界意味論による量子論理の研究）
文化・地域環境学	中谷理恵子	脳卒中発症と高コレステロール血症： 高血圧抑制機序に関する基礎的検討
文化・地域環境学	中溝聡	例祭日変化から見た日本人の新暦観
文化・地域環境学	中村敦子	Eine ungewöhnliche Frau und ein geistliches Spiel : Dietrich Scherngergs >Ein schön Spiel/Von fraw Jutten<（女教皇と宗教劇： ディートリッヒ・シェルンベルク作ユッテンシュピールの意図を探る）
文化・地域環境学	西山晶子	16世紀後半北イタリアの芸術理論と宗教： ガブリエーレ・パレオッティの絵画論とカルロ・ボッロメーオの建築論を中心に
文化・地域環境学	八反裕太郎	祇園祭礼図屏風の考察： 京博本を中心に
文化・地域環境学	北房美紀	江戸時代前期小袖意匠の変遷について： 雁金屋関連資料を中心に
文化・地域環境学	林信長	ニーチェにおける形而上学の問題をめぐって： ハイデガー・Gドゥルーズのニーチェ論
文化・地域環境学	藤井裕之	弥生時代木材の樹種選択と製材技術に関する諸問題： とくに板材について
文化・地域環境学	藤井芳和	EFFECTS OF SMOKING CESSATION AND AEROBIC TRAINING ON CARDIOPULMONARY FUNCTION（禁煙と有酸素性トレーニングによる呼吸循環器系の機能的変化）
文化・地域環境学	松尾英徳	分子軌道計算による風化メカニズムに関する研究：かんらん石への応用
文化・地域環境学	松嶋健	啓蒙と明治期における近代奇術の誕生
文化・地域環境学	矢野誠	地球温暖化防止に向けた開発途上国支援のための資金メカニズム： 地球環境ファシリティーを中心として

文化・地域環境学	ALADJOVA IRENA ENEVIA	『我輩は猫である』とその続編： パロディーとメタフィクションを中心に
文化・地域環境学	Anna Gabrielle Levine	Deciphering Domestic Waste Policy in Japan : Predicaments and Potential Solutions（日本の家庭ゴミ政策：考察と提言）
文化・地域環境学	CRYNS FREDERIK	江戸後期におけるブールハーフェ医学思想の受容： 坪井信道『万病治準』を中心に
文化・地域環境学	呉　　怡　嫻	台湾歌仔戯からみた幕表戯
文化・地域環境学	CHAVALIN AVETANANT	/cai/ と気： タイ語と日本語の対照的研究
文化・地域環境学	蘇　　明　明	魏晋南北朝の喫茶風習に見る神
文化・地域環境学	EA　DARITH	東アジアの陶磁器： クメール陶磁器の考古学的自然科学的研究
文化・地域環境学	董　　運　發	馮友蘭研究：中国人として初めて中国哲学史を書いた彼の思想形成とその時代との関わりについて
文化・地域環境学	李　　春　子	ニソの杜と住民生活の変容： 大島半島の事例を中心に
文化・地域環境学	陸　　越	仏教文化と漢語語彙について
文化・地域環境学	劉　　焱	東大阪市における機械金属工業の生産連関とその空間構造
文化・地域環境学	阿　草　成　実	Reconsidering *Breakfast at Tiffany's* and Cold War Culture（冷戦期の文化を通しての『ティファニーで朝食を』再考）
文化・地域環境学	鬼　丸　武　士	19世紀シンガポールと香港におけるイギリス植民地支配の比較研究： 調整と秩序維持
文化・地域環境学	下　平　尾　直	近代〈下層〉文学史： プロレタリア文学の「前史」をめぐって
文化・地域環境学	高　柳　陶　子	大将軍八神社神像群について
文化・地域環境学	樽　本　周　馬	アルフレッド・ジャリの小説における語りの構造
文化・地域環境学	椿　谷　友　希	神戸のインド人コミュニティ： ディアスポラ・ネットワークの一拠点として
文化・地域環境学	真　崎　恵　子	バリ島のガムラン・ゴン・クビャールの形成過程： 音楽的・歴史的背景
文化・地域環境学	飯　田　美代子	16 世紀ドイツ施療院について： 精神病者と施設処遇の関わり
文化・地域環境学	風　戸　真　理	モンゴル国の牧民の遊動と家畜管理： 人と家畜の離合集散
文化・地域環境学	戛　山　真　紀	ヒジャーブ：現代カイロ女性のヴェール　―イスラーム女性にとって覆い隠すことの意味
文化・地域環境学	佐々木　　淳	紀伊大島須江のイセエビ漁における資源管理
文化・地域環境学	住　川　由希子	アメリカ合衆国のホームスクーリング擁護団体に見る市民ロビイストの養成とその展望
文化・地域環境学	戸　井　晴　美	「ヒステリー研究」としての精神分析
環境相関研究	浅　沼　直　樹	大都市におけるエネルギー消費とヒートアイランドについての研究
環境相関研究	飯　澤　　功	岩屑なだれ物理挙動解明の為の粉体層上における動摩擦係数測定
環境相関研究	池　淵　一　平	京都の近代都市政策における周囲三山の眺望が反映される過程について
環境相関研究	岩　長　祐　伸	ハロゲン化鉛結晶における励起子の電荷分離と緩和過程の研究
環境相関研究	鵜　飼　大　介	文字使用の社会学

環境相関研究	大島行雄	Lower Exicited States of Isolated Xanthone: Characteristics of Electronic Eigenstates（孤立キトサン分子の低励起状態：電子固有状態の特性について）
環境相関研究	大野裕之	チャップリン映画の生成過程研究
環境相関研究	木邑奈美	琵琶湖における物質の循環機構： 沈降粒子による除去と輸送
環境相関研究	小谷早稚江	Minimal Feature Checking（最小素性照合）
環境相関研究	佐川昭子	Concordia Discors : Elizabethan Harmony and Dionysiac Mysteries in Shakespeare's *A Midsummer Night's Dream*（コンコルディア・ディスコルス：シェイクスピアの『夏の夜の夢』にみられるエリザベス朝的調和とディオニユソス秘儀）
環境相関研究	佐々木真一	時間分解分光法を用いたアナターゼ型二酸化チタンにおける発光過程の研究
環境相関研究	塩田勇樹	透明固体中の Er^{3+} の 4f 電子遷移による非線形光学吸収現象
環境相関研究	菅井聡子	本居宣長の京都遊歩：『都考抜書』と『在京日記』にみる京都経験
環境相関研究	田原大輔	ポリエチレンテレフタレートの構造形成と光散乱
環境相関研究	土田祐平	光合成光化学系Ⅱの pH 変化に応答する電子移動制御機構
環境相関研究	西原立	実双曲面上の離散スペクトル
環境相関研究	華岡光正	Role of nuclear : encoded factors in transcriptional regulation of plasted genes（葉緑体遺伝子の転写抑制における核コード因子の役割）
環境相関研究	林貴啓	生命を見つめる哲学を求めて： ベルクソン・ホワイトヘッド・ヨナスの三者を導きに
環境相関研究	船津景子	R.M.RilkeのA.Rodin体験： A.Rodin 芸術への洞察と受容
環境相関研究	本多美奈子	近代の一思考： ヘルダーリンにおける「存在」構想と描出の試み
環境相関研究	村山晴彦	企業信用と資本主義経済： ヴェブレン『営利企業の理論』を中心に
環境相関研究	森本佳延	画像からの二次元物体描出の研究
環境相関研究	吉浦由記	アメリカ連続テレビドラマ番組の受容をめぐる視聴者と社会的ネットワークの研究
環境相関研究	張暁茜	Demythologizing the Sanctuary of Southern Values（南部価値神話の解明）
環境相関研究	川口明彦	負性抵抗のある流れ
環境相関研究	北田理惠	L'exploitation et la reception des films à travers la presse francophone : le cas de la Suisse romande au moment du passage du muet au parlant（フランス語圏映画言説における受容と興行の諸問題　―トーキー移行期におけるスイス・フランス語圏の事例研究―）
アフリカ地域研究	弘中千絵	沖縄県渡名喜村における食生活に関する人類学的研究： 特に海産物の利用について

平成12年度

人間・環境学	青木滋之	ロックの科学哲学： 科学者の「下働き」としてのロック哲学
人間・環境学	秋山尚志	Construction of new HIV-1/SIV chimeric viruses having HIV-1-derived *pol* and *env* genes and experimental infection to rhesus monkeys（HIV-1由来の pol および env 遺伝子を有する HIV-1/SIV キメラウイルスの作成とそのサル感染実験）
人間・環境学	安藤創一	異なる運動動作による CUD（Crossed-Uncrossed differnce）と周辺視野反応時間のトレーニング効果
人間・環境学	碓井智子	空間認知表現と時間認知表現　～マエとサキの認知言語学的考察～
人間・環境学	大島明子	平面性ニトロニルニトロキシドの合成と物性

人間・環境学	岡野利彦	有機ケイ素化合物を用いる含窒芳香環への炭素基の不斉導入法に関する研究
人間・環境学	尾崎純子	自己の無化への不安とその対処： 自律の過程に即して
人間・環境学	片山淳史	結晶中希釈スピンの電子スピン緩和における置換基の効果
人間・環境学	金　賢得	Statistical properties inelastic Lorentz gas（非弾性ローレンツガスの統計的性質）
人間・環境学	木本行俊	モニミア科の生殖器官の構造の多様性と進化の研究
人間・環境学	栗田泰生	弦理論から見た Hawking 輻射
人間・環境学	小林晋平	AdS/CFT 対応の拡張と揺らぎの起源について
人間・環境学	齋藤布美子	8-キノリノール部位を有するフェロセン誘導体の合成，構造，機能に関する研究
人間・環境学	佐藤恵子	4次元正胞体の展開パターンの研究
人間・環境学	三瓶明希夫	非中性プラズマを用いた二次元渦運動の実験的研究
人間・環境学	清水辺　大	非平衡熱場ダイナミックスにおける Boltzmann 方程式
人間・環境学	下野智史	キラルなニトリニルニトロキシドラジカルの合成と物性
人間・環境学	十河暁子	モクマオウ科における受精様式とその進化
人間・環境学	竹村太地郎	Natural infection with the third type of STLV among wild baboons in Ethiopia.（エチオピアに生息する野生ヒヒにおける第3型 STLV の自然感染）
人間・環境学	中島愛子	精神分析過程における感情の取り扱いに関する研究： 特に言語による象徴化との関連において
人間・環境学	仁木千晴	意味プライミング効果と半球優位性
人間・環境学	橋本健志	低圧と運動に対する心筋および骨格筋のミオシン重鎖アイソフォーム発現の変化
人間・環境学	林　めぐみ	妊娠過程における初産婦の心理の諸様相： 3人の女性の語りを通して
人間・環境学	馬場倫行	骨格筋ミオシン軽鎖アイソフォームのシークエンス解析による同定
人間・環境学	平井太郎	感情が認知反応に与える影響
人間・環境学	福田　斎	ゼブラフィッシュ period 遺伝子の解析
人間・環境学	藤田雄飛	アンデンティティと根源的社会化
人間・環境学	古川茂豊	イリジウム錯体を用いる触媒的水素移動反応に関する研究
人間・環境学	松下晴彦	凍結保存試料中における溶存ケイ酸の縮合反応に関する研究
人間・環境学	三崎健太郎	優先富化現象を誘起する多形転移のメカニズムの解明
人間・環境学	三宅在子	Quantification and Genetic Analysis of Infectious Viruses at Developed AIDS Stage in Monkeys Infected with a chimeric Simian/Human Immuondeficiency virus（SIV/HIV-1キメラウイルス感染サルの AIDS 発症期における感染性ウイルスの定量と遺伝子解析）
人間・環境学	宮本百合	文化と社会的推論： 態度帰属と判断材料の記憶についての検証
人間・環境学	森下卓也	ディールス-アルダー反応を用いた新規機能性ポルフィリンの合成
人間・環境学	森下美恵子	フッサールのモナド論における primordial 領域の潜在性について： 生きられるべき空間のために
人間・環境学	矢島尚登	粉体層における断層の応用解析
人間・環境学	山口久美子	分子骨格中のねじれを利用した超分子構造の制御
人間・環境学	山下剛徳	老化の指標としての肺機能の縦断的評価

人間・環境学	吉村広志	AdS ブラックホールにおける準正規振動
人間・環境学	山田実加	高脂肪食が膵β細胞機能に及ぼす影響
人間・環境学	米持和幸	ハイデッガーの思惟における「物」
人間・環境学	渡辺由美子	A Comparison of Working Memory-Related Activity Between Primate Prefrontal and Thalamic Neurons（作業記憶に関連したサル前頭連合野・視床ニューロン活動の比較）
人間・環境学	徐　麗明	糖尿病性腎症の成因に関する研究： 血行動態の果たす役割
人間・環境学	金　善美	談話モデルによる韓日指示詞の指示領域の比較分析
人間・環境学	呂　佳蓉	日本語のオノマトペの大系に関する一考察： 事態認知の観点から
人間・環境学	阿津川智洋	fMRI による視覚的運動情報処理過程の研究
人間・環境学	長田洋一	キェルケゴール哲学における主体性の問題
人間・環境学	鈴木貴彦	後期ヴィトゲンシュタインの言語哲学
人間・環境学	田村岳洋	行為指示型の発話の形式と機能
人間・環境学	南　秀聡	フランス語代名動詞の受動用法と中立用法
人間・環境学	北澤　健	近代教育史における国民国家論の再検討
人間・環境学	田沼弘光	ハイデガーにおける隠された他者
人間・環境学	舟木徹男	親鸞浄土思想の精神分析的理解の試み
文化・地域環境学	荒川雅人	リチウムマンガン酸化物の低温湿式合成： リチウム二次電池用正極活物質の合成と特性
文化・地域環境学	石関　亮	オートクチュールのメディア戦略：ジャン＝ポール・ゴルチェのオートクチュール参入に関するモード雑誌の記事をめぐって
文化・地域環境学	井上綾子	アメリカ日系移民社会に於ける「永眠の地」の選択とアンデンティティ： 追悼行事と香典帳にみるつきあいと納骨先の歴史的変遷を通じて
文化・地域環境学	井上卓哉	野生食用植物の採集・利用活動からみる山と人間： 長野県秋山郷における山菜・キノコ等を対象に
文化・地域環境学	植前康平	新規な C_2 対称性ニトロキシドラジカルの合成とその物性
文化・地域環境学	植村哲士	廃棄物最終処分場の閉鎖及び閉鎖後管理費用に関する米国公会計基準の紹介と日本の維持管理積立金制度との比較
文化・地域環境学	太田陽子	知的財産取引における競争促進政策の意義：平行輸入を巡る知的財産権法適用事例
文化・地域環境学	落合理恵子	De la pastorale dramatique à l'opéra : La transformation de la représentation de l'amour
文化・地域環境学	加藤花子	中性末期イタリア中部における女性神秘家の幻視体験：アンヘラ・フォリニョとカテリーナ・シエナを例に
文化・地域環境学	金子宗徳	「日本主義」文學序論： 日本浪漫派の再検討を目指して
文化・地域環境学	北岡幸代	アルトゥア・シュニッツラー： 人間存在の解放を見据えて
文化・地域環境学	木村浩之	The Pursuit of the Idea of America in the Naked and the Dead（「裸者と死者」におけるアメリカ性の追及）
文化・地域環境学	神山直樹	免疫抑制作用を有する現状デプシペプチド Stevastelin B の全合成研究
文化・地域環境学	佐伯智広	大臣家の成立： 徳大寺を中心に

文化・地域環境学	佐々木　秀　樹	Enhancement of Human Energy and Glucose Metabolism by Means of Electrical Stimulation（筋電気刺激によるエネルギー代謝、糖代謝の亢進）
文化・地域環境学	佐々木　喜　則	メズスコピック分子磁性リング Fe10 の磁性と NMR
文化・地域環境学	佐　藤　木綿子	伝統文化とジェンダー規範の表象と実践： 沖縄県久高島における祭祀とオナリ神信仰をめぐって
文化・地域環境学	新　熊　有加里	「言葉の花輪」：コンラートフォン・ヴェルツブルグの『黄金の鍛冶』を読む
文化・地域環境学	新　明　邦　俊	ストリート・レベルの行政職員の倫理的ディレンマ　―婦人相談所を事例として―
文化・地域環境学	塚　根　浩一郎	気相状態からの物質合成： 直流アークプラズマによるハイドロカーボンの分解
文化・地域環境学	永　井　成　美	Influence of obesity and physical activity on autonomic nervous system function in school children
文化・地域環境学	長　沼　さやか	東アジアの家船居住
文化・地域環境学	沼　　友　和	環境保護を目的とした貿易制限措置に対する GATT 20条の機能と限界：アメリカ・シュリンプケースを中心として
文化・地域環境学	野　村　佳　代	フランツ・カフカの語り方
文化・地域環境学	平　尾　聡　美	脳卒中における抗酸化物質及び生体内酸化還元機構の関与
文化・地域環境学	藤　原　辰　史	ナチ期農民の〈変身〉過程： 化学肥料とトラクターの普及のなかで
文化・地域環境学	前　川　卓　英	核磁気緩和によるハルデンギャップ系 TMNIN の量子多体効果の研究
文化・地域環境学	松　田　英　介	プロトン伝導性セラミックスの電気化学特性評価
文化・地域環境学	皆　本　智　美	A Study of Emily Brontë's *Wuthering Heights* : Remenbrance and Recollection（エミリ・ブロンテの『嵐が丘』研究：リメンブランスとリコレクション）
文化・地域環境学	向　井　順　子	ハンス・バルドゥンズ・グリーンと魔女
文化・地域環境学	安　井　奈穂美	生活習慣病の危険因子としての高血圧および肥満とその相互作用に関する研究
文化・地域環境学	吉　田　裕　子	『萬葉集』における「夢」のとらえ方について
文化・地域環境学	崔　　水　晶	朝鮮通信使の見た対馬： 十七、十八世紀
文化・地域環境学	呉　　雅　婷	元雑劇における士人と妓女の恋愛劇について
文化・地域環境学	Leonard　Gómez	The use of Bamboo Architecture: A comparative analysis of the use of bamboo in Japanese and Colombian Domestic Architecture（住宅建築に生きる「竹」日本とコロンビアの比較研究）
文化・地域環境学	Raquel Carolina Silvia	A study on Japanese media : A Comparative Analysis of editorial Stances regarding Accident at JOC（日本のマスメディアについての一研究　―JOC 東海の臨界事故に関する比較社説分析）
文化・地域環境学	坂　井　和　範	日本の古代都城と運輸体系
文化・地域環境学	仙　崎　裕　右	ドイツ語の進行表現について
文化・地域環境学	松　尾　　亮	書くことの対話性： 大学受験小論文指導を題材に
環境相関研究	秋　道　花　織	京都市におけるニュータウンの考察： 洛西ニュータウンにみる郊外住宅地の過去・現在・未来
環境相関研究	今　井　隆　介	ディヴィッド・クローネンバーグ研究： 映画における身体の自己了解
環境相関研究	大　澤　　浄	清水宏研究： スタジオシステムにおける映画作家の芸術的達成

環境相関研究	大松好子	現代日本の葬送にかんする一考察：「葬送の自由をすすめる会」の事例を中心に
環境相関研究	久多里俊輔	水圏における天然有機物質の分布と動態　―琵琶湖でのアミノ酸組成とその季節変動―
環境相関研究	斎藤武士	Identification of magnetic minerals carrying NRM in a pyroclastic-flow deposit: implication in the low-temperature magnetic component（火砕流堆積物の NRM を担う磁性鉱物の同定、低温成分への関与）
環境相関研究	繁宮悠介	Variation in population structure and copulation frequency of *Clithon retropictus* along a river（イシマキガイにおける個体群構成と交尾頻度の流域間比較）
環境相関研究	篠原雅武	クリストファー・アレグザンダー論：都市に於ける公共空間の成立過程について
環境相関研究	杁山友茂	形態・生態・分子系統からみたミミズハゼ属魚類の適応放散
環境相関研究	椿井勝裕	近代京都における水利用の変遷： 田中・吉田地区についての考察
環境相関研究	牧野雅子	強姦被害者の中絶に関する一考察
環境相関研究	林　英明	Tm^{3+} イオンドープ透明結晶化ガラスの 1.4 μm 帯発光特性： 波長多重通信用光増幅器の設計
環境相関研究	福田健太郎	スパック法による Al_2O_3-Y_2O_3 系非晶質膜の物性と構造に関する研究
環境相関研究	矢ケ崎　響	アナターゼ型二酸化チタンにおける光励起電子正孔対の緩和ダイナミクス
環境相関研究	山本善彦	特異な結晶構造を有する αCoY_3O_8 の Liイオンとの電気化学的相互作用
環境相関研究	和田伸一郎	仮想化技術のリアルな現象学のために
環境相関研究	宮川五十雄	ツリフネソウへの訪花をめぐる昆虫3種間の採餌行動の比較
環境相関研究	森末治彦	出生前診断、wrongful life 訴訟における自己決定権の社会性
環境相関研究	福島智子	臨死患者の医療とケアイタリアにおける自己決定権の社会性

平成13年度

人間・環境学	飯田信介	「公設・住民営」の新しい地域医療システム構築過程に関する研究　～京都府美山町の事例～
人間・環境学	池田真典	アンドレ・ジードの病跡学的研究　～フロイト、及びラカンの精神分析に依拠して～
人間・環境学	宇賀神秀樹	SHIV 感染防御能獲得サルにおける特異的キラーT細胞の誘導と解析
人間・環境学	恵本健亮	エターナルインフレーションと宇宙初期特異点について
人間・環境学	北田　亮	Involvement of posterior parietal cortices in integration of tactilestimuli moving on fingers; An fMRI study（触覚刺激による体性感覚機能の研究）
人間・環境学	鬼頭克征	1,2,4,5-テトラジンとアルケン及びアルキンとの Diels-Alder 反応
人間・環境学	河野淑子	イクソナンテス科の生殖器官の発生と進化についての研究
人間・環境学	越野泰昭	クモ膜下出血に伴う脳血管攣縮の血管収縮因子と内皮細胞由来のシクロオキシゲナーゼおよび 5-リポキシゲナーゼ代謝産物の関連性　―ラットクモ膜下出血モデルの脳底動脈を用いた実験―
人間・環境学	小西嘉典	ヒトの跳躍動作における踏切角度及び跳躍高の制御機構
人間・環境学	佐久間秀謙	アメリカの対イラン外交の「はじまり」
人間・環境学	笹岡健太	フッサール現象学における意識および自我の自己関係性
人間・環境学	嶋田有希子	養護学校における音楽の授業を考える　―即興を重視したある授業実践から―

人間・環境学	杉原理文	京都北山産タゴガエル2型について
人間・環境学	住友秀充	The law of Iterated Logarithm for Wavelet's Series（ウェーブレット級数に対する重複対数の法則について）
人間・環境学	田熊邦郎	ナフタレン励起三重項状態のパルス ESR による研究
人間・環境学	武井紀英	ミニサテライト配列における放射線誘発突然変異生成のメカニズムの解析
人間・環境学	田中暁紀	溶媒を用いない有機反応
人間・環境学	谷内勇介	ヒト視覚野における色・明暗情報処理過程の fMRI による研究
人間・環境学	富永篤	福岡県産ブチサンショウウオ *Hynobius naevius* の変異
人間・環境学	中川政治	日本の山岳地帯におけるイタドリ（*Reynoutria japonica* Houtt.）の葉緑体 DNA 多型とその植物地理学的考察
人間・環境学	中熊大英	ビス（ジメチルホスフィノ）メタンとヒドリドで架橋されたイリジウム二核錯体の合成、構造とその機能に関する研究
人間・環境学	長瀬美香	Long-term beneficial therapeutic effect of voglibose, a potent intestinal alpha-glucosidase inhibitor in spontaneous diabetic GK rats.（2型糖尿病モデル GKラットに対する α-グルコシダーゼ阻害剤 "ボグリボース" の長期投与による影響）
人間・環境学	中山法子	N-fold supersymmetry and quasi-solvability in one-dimensional quantum mechanics（1次元量子力学における N重超対称性と準可解性）
人間・環境学	名倉映乃	含窒素芳香環への炭素基の新規導入法に関する研究
人間・環境学	梨本洋志	被子植物ガリア目における胚発生学的考察
人間・環境学	成田泰士	片側性・両側性運動刺激に対する MT +野神経機構に関する研究
人間・環境学	西川和香	Effects of Decreased and Increased Neuromuscular Activity on Cell Body Size and Oxidative Enzyme Activity of Soleus and Plantaris Motoneurons in Rats.（神経筋活動の抑制あるいは増加がラットのヒラメ筋および足底筋の細胞体サイズと酸化系酵素活性におよぼす影響）
人間・環境学	布居久美子	Beneficial effect of T-1095, a selective inhibitor of renal Na^+-glucose cotransporters, on metabolic index and insulin secretion in spontaneously diabetic GK rats.（2型糖尿病モデルGKラットに対するNa^+-グルコース共輸送担体阻害剤 "T-1095" 投与によるインスリン分泌への影響）
人間・環境学	野澤元	行動と認知の言語理論：意味論と発話行為論の統合へ向けて
人間・環境学	馬場秀司	ゲージ理論に基づくスピン物理の研究
人間・環境学	濵善昭	ガダマーの「対話の解釈学」とは何か　―『真理と方法』における「遊び」と「対話」の概念を手がかりに―
人間・環境学	東村知子	通信制高校に通う生徒の卒業資格取得をサポートする「学校」における教育実践
人間・環境学	肱黒貴志	ある養護老人ホーム利用者にとっての〈家族〉
人間・環境学	宮下隼也	高分解能中性子位置検出器の開発
人間・環境学	宮本直和	等尺性収縮時における下腿三頭筋の電気的および機械的活動
人間・環境学	村上照機	水圏に溶存する微量化学成分の固液分配平衡に関する研究　―複合吸着剤の組成と吸着特性の相関について―
人間・環境学	森香奈絵	フランス語の不定名詞句と否定
人間・環境学	山添博史	松平定信対露外交に見られる対外秩序観の「近代性」

人間・環境学	山田 真希子	Analysis of R-R interval variability during emotional processing of affective picture stimuli : a new methodological approach to neuroscience of emotion（情動画像刺激下におけるR-R間隔ゆらぎの検討：情動の神経科学への新しい試み）
人間・環境学	山元 一成	9族遷移金属錯体触媒を用いる含窒素複素環の合成に関する研究
人間・環境学	吉積 巳貴	Sustainable Society の創造に向けての実践と課題　―グローバルレベルでの諸プロジェクトの検証を通して―
人間・環境学	李 在鎬	「構文」の意味的動機づけに関する認知言語学的考察　他動詞文のゆらぎ現象を中心に
人間・環境学	井手 あかね	変遷疾患の一例にみられた書字障害の検討
人間・環境学	内山 智子	ベルクソンの知覚理論における精神の働き　―知覚における自由の観点から―
人間・環境学	梅原 麗	分析的真理再考　―クワインの見解をめぐって
人間・環境学	鈴木 智子	認知的不協和現象の文化心理学的分析
人間・環境学	橘 知之	都市における地域通貨の「機能」と「体験」に関する研究　―京都市内の地域通貨「京都レッツ」を事例に
人間・環境学	恒川 直樹	保育の両義性に関する一試論　―保育者のかかわりに感じられる〈あそび〉―
人間・環境学	坪井 伸樹	レヴィナスの他者論について
人間・環境学	西脇 麻衣子	古典力学系における解曲線上を動くラグランジュ面の横断性について
人間・環境学	吉田 和史	漂流する思考と出来事　―リオタールの思想における領域変換
人間・環境学	江木 公一	宗教地域に関する比較地域構造論的研究　―大阪平野周縁部を中心として―
文化・地域環境学	池田 あいの	Reinheit, Sauberkeit へのカフカの固執と嫌悪
文化・地域環境学	伊藤 理恵	音の不確定性と秩序への意志　―ピエール・ブーレーズとジョン・ケージの比較にもとづく現代音楽論の試み
文化・地域環境学	井原 聖	ドイツ語の分離前綴りがもつ意味用法の拡張性について　―auf-動詞、an-動詞の場合―
文化・地域環境学	上松 圭	近世中期の浄瑠璃・歌舞伎にみる異国人像　―謀反人たる朝鮮人の出現過程―
文化・地域環境学	梅田 亜由美	諷刺画にみるフランスの帝国意識　―G. Bigot “Old England in the Far East” “Old England in China” への一考察―
文化・地域環境学	大谷 晃文	細菌由来銅アミンオキシダーゼの立体識別と利用
文化・地域環境学	岡田 悟	十七世紀後半における幕府のキリシタン禁制と東アジア
文化・地域環境学	岡部 宗吉	ヴィンチェンツォ・ガリレイの音律論　―数の論理と聴覚のはざまで―
文化・地域環境学	笠尾 育宏	吉野川第十堰改築事業における専門的判断と社会的合意
文化・地域環境学	河目 直之	ゼオライトの結晶構造と陽イオン分布　～天然モルデナイトとその銅（Ⅱ）イオン交換～
文化・地域環境学	薫田 晶子	国連憲章上の「自衛権」に基づく対テロ武力行使の正当性　―緊急避難法理の適用可能性を中心に―
文化・地域環境学	小池 郁子	アフリカ、ヨルバの神々を求めて：アフリカ系アメリカ人の宗教・文化実践
文化・地域環境学	江 建	類似性と想像力　―認識に関わる隠喩（メタファー）―
文化・地域環境学	小柴 健	ナノクラスター分子磁性体 Mn_{12}-Acetateの^{55}Mn NMR
文化・地域環境学	小山 俊樹	大正・昭和期の「憲政常道」論

文化・地域環境学	左　古　将　規	都市の教会をめぐる〈共同体〉の生成　―韓国におけるキリスト教徒の宗教実践と社会生活をとおして―
文化・地域環境学	志　村　真　幸	湖水地方－イギリスの理想風景の成立　―湖水地方の観光地化過程におけるスイスイメージ―
文化・地域環境学	杉　政　周　之	ヨーロッパの自画像　―ヴァリニャーノ『天正遣欧使節記』再読
文化・地域環境学	中　原　　計	弥生時代における鍬製作技法の変遷
文化・地域環境学	西　尾　友　志	ソフトプロセスによる新規 Bi 塩基性複合酸化物の合成
文化・地域環境学	西　山　里　美	Circadian variation of diet-induced thermogenesis（食後熱産生における日内変動）
文化・地域環境学	橋　本　和　也	日本近代読書階級の形成と崩壊
文化・地域環境学	畑　　百合子	歌をもつ人々　―サーミの伝統的声楽表現「ヨイク」をめぐる社会関係―
文化・地域環境学	姫　野　輝　英	商品先物市場の動向と機能の解明
文化・地域環境学	福　島　涼　史	スコラ的正戦論における正当原因の判定　―独立国家の並存とトマス・アクィナス、ビトリア、スアレスの理論―
文化・地域環境学	藤　井　祐　介	中井正一論　―技術・集団・〈委員会〉―
文化・地域環境学	松　井　　寿	日本の洋装下着と女性の身体　―1920～1930年代の雑誌記事を手掛かりに
文化・地域環境学	松　村　圭一郎	土地をめぐる中央と地方の相克：エチオピア西南部・コーヒー栽培農村における土地所有の歴史から
文化・地域環境学	松　本　健太郎	ロラン・バルトにとって、写真とは何か
文化・地域環境学	望　月　幸　治	アジスアベバにおける都市スラングの民族誌　―言語人類学的研究―
文化・地域環境学	森　本　将　史	新規二官能性ニトロキシドラジカルスピンラベル剤の合成と応用
文化・地域環境学	山　村　仁　朗	文末を構成する「のだ」の述語性
文化・地域環境学	山　本　茂　樹	世界観の研究と中国の近代化　～李卓吾をめぐって～
文化・地域環境学	和　田　壮　史	帝政末期ロシアの探訪記者、ギリャロフスキーのパーソナリティ
文化・地域環境学	TRENSON STEVEN F.H.	請雨経法の研究　―その日本的実施と歴史―
文化・地域環境学	李　　雯　文	Women Living between the Church and the State　―A Case study of Catholic Women Religious in Contemporary Rural China（教会と国家の間に生きる女性たち　―現代中国農村社会におけるカトリック修道女の一事例から―）
文化・地域環境学	劉　　阿	古代中国の壁画・塑像に関する保存科学的研究
文化・地域環境学	KAEWKITSADANG PATCHA	日本語とタイ語における感情表現について　―ジェスチャー的感情表現を中心に―
文化・地域環境学	JANKOWSKA BOGNA	宮沢賢治「土神ときつね」小論
文化・地域環境学	鵜　飼　敦　子	準備された「偶然」の美　―エミール・ガレにおける高島北海の影響をめぐって
文化・地域環境学	大　塚　周　夫	田村隆一論　―戦中詩から戦後詩への移行を中心として―
文化・地域環境学	高　木　　司	在米資産返還期成会と戦後在米凍結資産返還運動について
文化・地域環境学	成　山　亜　矢	個人情報保護法制の国際的調整の意義　―1995年EUデータ保護指令における「十分な保護」条項の果たした役割―
文化・地域環境学	牧　野　糸　音	書簡集にみられるイエズス会の「教化」活動　―「エヴォラ版（1598年）」収載の数点の書簡を手掛かりに―

文化・地域環境学	増田和也	水辺をめぐる複合的自然利用　～スマトラ東海岸・プタランガン社会の事例から
文化・地域環境学	吉村真由美	高血圧性疾患の遺伝的素因と栄養　―モデル動物の遺伝学的解析及びコメ胚芽の栄養が及ぼす影響―
文化・地域環境学	小野﨑みどり	サン＝テグジュペリ『夜間飛行』のナレーション
文化・地域環境学	橋本鉄平	顔の歴史社会学　―表象文化からみた近世日本―
文化・地域環境学	藤本透子	子育てと成長儀礼をめぐる女性たちの選択　―カザフスタン共和国アルマトゥ市の事例から―
文化・地域環境学	山元一浩	選挙事務の効率化
環境相関研究	岡田直樹	贈与論的身体論　―社会システムの基礎理論へむけて―
環境相関研究	久高將司	An Analysis of *The Deer Park*（ビルドゥングズロマンとしての作品、『鹿の園』の分析）
環境相関研究	児玉英明	国際資本移動の変容と資本取引の自由化における順序問題　～1990年代の通貨・金融危機を事例として～
環境相関研究	小林利行	$CsPbCl_3$ 結晶における励起子状態の変化と相転移の相関についての研究
環境相関研究	須田恵理子	粉体層上での剛体の滑走における動摩擦に関する研究
環境相関研究	妹尾裕彦	グローバリゼーションのコントロールと非国家的権威としてのグローバル・パワーの台頭　～S・サッセンのグローバリゼーション論の再検討を通して～
環境相関研究	髙橋そよ	サンゴ礁海域における漁撈活動と自然認識　―沖縄県伊良部島佐良浜漁民の漁撈活動を事例として―
環境相関研究	瀧村淳	カンコノキ属と種子食性ホソガ類の共種分化
環境相関研究	玉岡剛	通信波長帯域における Tm^{3+}-Lu^{3+} 共ドープテルライトガラスの発光特性　～エネルギー移動における Lu^{3+} イオンの効果～
環境相関研究	林奈々	「キッチュの構造　－消費社会が生み出した意図せざる欲望関係」
環境相関研究	坂東君香	潜葉性ミバエ類の潜孔様式
環境相関研究	藤岡篤弘	1930年代における日本の映画館と年少観客に関する映画学的研究
環境相関研究	松田史	奈良・平安期における遺棄葬の一考察
環境相関研究	妙木忍	A Dynamic Approach to Participial Clauses in English（英語の分詞節に対する動的アプローチ）
環境相関研究	森田健司	日本における公私
環境相関研究	森村麻紀	映画と窃視　―映画前史の見世物、初期映画における「鍵穴映画」、そして古典映画『裏窓』における覗き行為の考察―
環境相関研究	吉田寛郎	水圏における人為起源有機物質の分布と動態
環境相関研究	脇谷草一郎	水圏における各種マンガン酸化物及び鉄酸化物の吸着特性
環境相関研究	トカンブラド	現代日本人の宗教意識　―意識調査からの一考察―
環境相関研究	中田淳子	海洋熱塩循環の多重解に関する研究

平成14年度

人間・環境学	相原祐	時間とその様態　―『純粋理性批判』の時間論―

人間・環境学	赤尾雄一郎	Effects of Voluntary Running Exercise during Growth and Adulthood on Bone Metabolism of Senescence Accelenated Mouse Prone 6（成長期および成熟期における自発的走行運動が老化促進モデルマウス（Prone 6）の骨代謝におよぼす影響）
人間・環境学	浅野晶子	Effects of Hyper- and Hypogravity on Rat Neuromuscular Systems（微小重力および加重力に伴うラット神経・筋の可塑性）
人間・環境学	有田　恵	癌という病の関係発達における意味　―患者とその家族の語りを通して―
人間・環境学	居垣紗織	Prefrontal Activity Related to Self-Selection Task（遅延自由選択課題に関係した前頭連合野ニューロンの活動）
人間・環境学	伊熊直彦	キラル分子磁性材料の研究
人間・環境学	池田誠慈	日本産アオガエル属 Genus Rhacophorus の遺伝的分化
人間・環境学	石谷治寛	近代生活の光景　―パリの都市改造、視覚メディア、風景画
人間・環境学	岩本恵美子	A Constructional Approach to Color Adjective-Noun Phrases: An Exploration of Semantic Compositionality in Adjective-Noun Construction（色彩形容詞＋名詞表現に関する構文論的研究　―形容詞＋名詞表現における意味的合成の解明―）
人間・環境学	上尾真道	精神病構造と視の領野 あるいはアール・ブリュット以降の理性
人間・環境学	植野仙経	遺伝カウンセリングについての精神分析的研究
人間・環境学	宇梶　卓	催眠と精神分析　―〈他者〉のありようをめぐって―
人間・環境学	大内田　裕	I feel your hand moving.: Viewing someone's hand action activates observer's contralateral somatosensory cortices（他者手運動観察時の体性感覚野の活動）
人間・環境学	大脇真紀	ロジウム錯体触媒の水素移動能を利用した新しい触媒反応系の開発
人間・環境学	奥田泰広	「光栄ある孤立」論の再検討　―ソールズベリー外交の本質を問い直す
人間・環境学	海邉健二	琉球弧における被子植物の地域的分化　―特にスダジイとアジサイ属について
人間・環境学	金丸敏幸	形式名詞の多義性に関する認知言語学的考察　～「ところ」の分析を中心に～
人間・環境学	河尻尚人	アレンの付加環化反応に関する研究
人間・環境学	川村　匡	文化と知覚　～線と枠 図形を用いた検討～
人間・環境学	菅野優美	Born-Again Braneworld: An Effective Action Approach（新生ブレーンワールド：有効作用による解析）
人間・環境学	倉田薫子	ニューカレドニアにおけるNepenthes vieillardii Hook.f. の種内分化
人間・環境学	小早川睦貴	視覚認知における部分的特徴の統合過程に関する神経心理学的研究
人間・環境学	齋藤耕太	文化と互恵性
人間・環境学	鈴木菜緒子	Maturity-onset diabetes of the young（MODY）mutations in hepatocyte nuclear factor（HNF）-1α and HNF-1β affect the expression of α-glucosidase（sucrase-isomaltase）.（肝細胞転写因子（HNF）-1α および HNF-1βにおける、若年発症タイプの家族性糖尿病（MODY）の変異は二糖類水解酵素スクラーゼ、イソマルターゼの発現に影響する。）
人間・環境学	鈴木麻貴子	The effects of pathogenic SHIV infection on the thymus and the intrathymic T cell progenitors in monkeys（強毒 SHIV 感染による胸腺組織及びT前駆細胞への影響）
人間・環境学	關　誠	巨文島事件におけるイギリスの極東戦略
人間・環境学	高橋克欣	フランス語の未来時制に従属する半過去　―アスペクト・視点・叙実性―
人間・環境学	田中宗明	非対称戦略をもつ繰り返しゲームの最適戦略

人間・環境学	多門啓子	Nicotinic Acethylcholine Receptor and Insulin Secretion in Rat Islets of Langerhans（ラット膵ランゲルハンス島におけるニコチン受容体とインスリン分泌）
人間・環境学	中村文子	視線・シンボル・ジェスチャーによる共同注意の認知神経機構
人間・環境学	西橋　毅	Research on cerebral vasospastic factor in rat experimental SAH（ラットクモ膜下出血モデルにおける脳血管攣縮因子に関する研究）
人間・環境学	能田洋平	「フェノール誘導体と DPPH との水素原子引き抜き反応のダイナミクス及び溶液中二種ラジカル共存 ESR スペクトルの新規分離法」
人間・環境学	橋本　梓	供犠のモデルとしての彫刻　―アルベルト・ジャコメッティのシュルレアリスム期についての―考察
人間・環境学	橋本敏宏	Reaction time is changed depending on the intensity of transcranial magnetic stimulation during premovement period（運動前期間における経頭蓋磁気刺激の強度に依る反応時間の変化）
人間・環境学	花阪文宏	新しい有機イリジウム錯体の合成と構造及びその機能に関する研究
人間・環境学	日比野愛子	バイオテクノロジーの社会的受容に関する国際比較研究　―新聞記事の分析及び政治的言説の分析を通じて―
人間・環境学	藤原康之	Cox 過程を用いたデフォルト可能性のある証券の価格
人間・環境学	保志場文香	QCD における Axial Anomaly とグルーオン偏極
人間・環境学	堀内励生	Development of DNA vaccine using SHIV having IL-2 gene, which produces non-infectious virions（非感染性ウィルス粒子を産生する IL-2 遺伝子組み込みフルゲノム SHIV を用いた DNA ワクチンの開発）
人間・環境学	松野さやか	カール・ヤスパースの『哲学』における「限界状況」と「交わり」について　―「両極性」の原理に即して―
人間・環境学	溝渕敬大	ラセミ体のアミノ酸・ジペプチド誘導体の結晶構造と結晶多形に関する研究
人間・環境学	宮澤洋晃	フェノールオリゴマーの化学　～その基本的性質と協同効果
人間・環境学	森下可奈子	第二言語の学習と教授
人間・環境学	山内久美子	動的刺激と静的刺激におけるワーキング・メモリの分離可能性について
人間・環境学	山口　尚	スピノザの『エチカ』における自然の根本構造
人間・環境学	山路俊樹	有機ラジカルの電子スピンダイナミクスに関するパルスESRによる研究
人間・環境学	山本謙一郎	主観的輪郭線知覚の脳内表象に関する研究
人間・環境学	山本正明	水圏における生理活性有機物質のケイ酸塩鉱物に対する吸着現象
人間・環境学	吉田　剛	円筒境界を有する渦糸系の運動
人間・環境学	華　春	Shakespeare's Dramaturgy in *Hamlet*（『ハムレット』におけるシェイクピアの劇作術）
人間・環境学	下和田加奈	The examination of effects of endocrine disrupting chemicals（bisphenol A and nonylphenol） on insulin secretion from rat pancreatic islets through estrogen receptors and of possible machanisms.（エストロゲン受容体を介した内分泌攪乱物質のインスリン分泌への影響とそのメカニズムの検討）
人間・環境学	出口優木	Sloppy identity について
人間・環境学	長友文史	反復・断片・マチエール　ジョルジョ・モランディの静物画の論理
人間・環境学	横田友子	Alzheimer型痴呆における注意機能の検討： dual taskを用いて
人間・環境学	川口美紀	女性性の曖昧さと女性性の運命についての考察
人間・環境学	嶋本慶太	ハンナ・アーレントにおける思考　―政治的悪との関わりにおいて―

人間・環境学	井上昌哉	ルチアーノ・ベリオ論
文化・地域環境学	青木三陽	Wolfram von Eschenbach の宮廷叙事詩 Parzival
文化・地域環境学	赤羽秀信	新規ニトロキシドラジカルの合成とスピンラベル剤としての応用
文化・地域環境学	泉　小波	S=1/2　1次元結合交替系分子磁性体 F5PNN の核磁気緩和
文化・地域環境学	岩本　修	SNCC（学生非暴力調整委員会）に見るブラックナショナリズムとアフリカ系アメリカ人の反ユダヤ主義の構図　―公民権運動の急進化に関する一考察―
文化・地域環境学	桂　由起	清代民衆版画における滑稽・諷刺図像の解読　―清末市井の視覚と笑い―
文化・地域環境学	金澤英樹	Growth of huge olivine crystal and its EDS analysis（カンラン石巨晶の育成と EDS 分析）
文化・地域環境学	北村尚斗	リン酸塩系高温型プロトン伝導体の合成と特性評価
文化・地域環境学	木原　真	広島における都市の変容　―交通網整備との関連を中心に―
文化・地域環境学	熊谷瑞恵	家庭からみる麦食文化圏の主食概念　中国新彊ウルムチにおけるウイグル族の事例から
文化・地域環境学	黒田嘉彰	IRAはなぜ武装解除を開始したのか？　～シン・フェイン党の発展とジェリー・アダムズ～
文化・地域環境学	小門　穂	フランスにおける胎児をめぐる状況について
文化・地域環境学	志賀　崇	いわゆる「氏寺（私寺）」論の再検討　―郡衙周辺寺院の分析から―
文化・地域環境学	白幡俊輔	ルネサンス要塞設計理論の変化と役割　～フランチェスコ・ディ・ジョルジョ・マルティーニの軍事技術とその歴史的意味～
文化・地域環境学	田尾幸子	創られる子どもの成育環境　―三重県答志島の日常づきあいが生む場面から―
文化・地域環境学	竹田佳彦	過疎化集落の存続に向けて　―地域資源に関する一考察
文化・地域環境学	竹中梨紗	革命期ロシアにおける森林保護
文化・地域環境学	綱島　謙	日本古代の情報伝達　―駅制衰退後と歴史的変遷―
文化・地域環境学	内藤真帆	Tutuba 語の音韻に関する考察　―フィールドデータに基づいて―
文化・地域環境学	中野晶子	国連機関によるテロリズム対処の意義と限界　―ロッカビー事件の容疑者引き渡しをめぐる一連の過程を素材として―
文化・地域環境学	西矢貴文	「葦津耕次郎の思想形成」
文化・地域環境学	平野　佳	ドイツ語の過去表現に対する時称選択基準
文化・地域環境学	福家崇洋	老壮会の「共同」
文化・地域環境学	古谷尚子	明治初期越前大野における初等教育　―吉田拙蔵『静斎日誌』を手がかりに―
文化・地域環境学	星野靖枝	ベンガル飢饉（1943年）における植民地政府の対応
文化・地域環境学	宮西香穂里	ダブル・アウトサイダーを生きる　―横須賀米海軍男性と結婚した日本人妻たちの生活誌とネットワーク形成―
文化・地域環境学	森田　暁	気相-液相-固相界面におけるプラズマ反応　―Al-Ti 合金と活性 CH4-H2 ガス反応―
文化・地域環境学	安田泰明	ニコライ・トルベツコイとロシア・ユーラシア主義の誕生
文化・地域環境学	養父昌平	Gait analysis: focus on the trajectory of the second sacral vertebra and the human center of gravity（人間の体重心および第二仙椎軌道に注目した歩行分析）

文化・地域環境学	山内　玲	Narrative Formation of Race in William Faulkner's *Absalom, Absalom!*: Suppression, Complicity, and Resistance（ウィリアム・フォークナー『アブサロム、アブサロム！』における物語行為と人種生成：抑圧・共謀・抵抗）
文化・地域環境学	山浦　可奈子	The Study of delayed onset of muscle soreness（遅発性筋痛に関する研究）
文化・地域環境学	山口　幸治	The effect of sesamin on smoking related diseases（セサミンが喫煙関連疾患におよぼす効果）
文化・地域環境学	山下　知子	中国残留婦人における〈満州の記憶〉　ある中国残留婦人の語りから
文化・地域環境学	山下　真由美	呉春筆「白梅図」屏風　～俳諧との関連から
文化・地域環境学	渡邉　登紀	時間の中の田園　―歸去來兮辭論
文化・地域環境学	韓　燕麗	日本と香港を越境する映画とその歴史
文化・地域環境学	焦　従勉	貿易摩擦と民間団体主導の官民協議モデル　―ネギなど農産品3品目に対する暫定的セーフガードの事例研究
文化・地域環境学	陳　捷	漢字における対称思想
文化・地域環境学	程　菲菲	内的宗教への道　―シュライアーマッハー宗教学の再検討
文化・地域環境学	任　力	The New Artistic Expression on Cultural Interaction　―Cai Guoqiang and Chinese Contemporary Art.（文化に影響する新しい芸術的な表現　―蔡国強と中国の現代アート）
文化・地域環境学	金　賢善	スポーツにおける日本人の他者認識とナショナル・アイデンティティ　―2002 FIFA World Cup　Korea / Japan をめぐる日本のスポーツ言説を中心に―
文化・地域環境学	魯　炳浩	吉野作造の時勢論の構造
文化・地域環境学	サラオール　エムレ	Political and Legal Factors in the Revision of Status-of-Forces Agreements: A Comparative Analysis of Japan and Germany（駐留軍地位協定の改定をめぐる法的・政治的要因　―日独の比較研究）
文化・地域環境学	浮田　真理子	Ethnic Language Education: The Case of Japanese Americans in San Francisco（言語継承の教育：サンフランシスコの日系人の場合）
文化・地域環境学	尾堂　美穂	ベル・エポックにおけるベネディクティーヌ社の宣伝活動　―ブランド・イメージ醸成の変遷―
文化・地域環境学	河野　貴樹	宮崎の都市形成と変容
文化・地域環境学	駒木　麻実	古ザクセン語 Heliand の基礎的考察　―山上の説教を中心に―
文化・地域環境学	駒田　大輔	二十世紀新アニミズム　―稲垣足穂「一千一秒物語」のモチーフと構成
文化・地域環境学	鯖江　秀樹	剽窃と逸脱　―ウンベルト・バルバロの「生」を読み解く―
文化・地域環境学	髙松　美和	Heartrate variability during sleep onset（入眠期における心拍変動解析）
文化・地域環境学	牧野　直史	WTO 紛争処理手続における多数国間環境協定（MEAs）の地位　―GATT20 条と SPS 協定との相違を中心に
文化・地域環境学	髙木　雅惠	プロスペール・メリメにおける視覚の問題あるいは歴史感覚　―1840年を中心にして―
環境相関研究	石川　雄久	明治期京都における東山の整備について　―明治34年の東山公園計画を中心として―
環境相関研究	稲田　扇	循環型社会における企業の責任と日本の環境会計　～現状とこれから向かうべき方向～
環境相関研究	木下　貴文	日常的行為の構造　―インターフェースの社会理論―
環境相関研究	佐々木　淳也	陸水における主要・微量元素分布の地域比較研究

環境相関研究	髙谷　幸	関係性の構想力　～ある NPO の試みから
環境相関研究	立花　徹	新規タングステン酸塩ガラスの作成と熱的特性
環境相関研究	田中一嘉	資本主義社会と社会運動論の共犯についての論与　―メルッテ研究者の社会運動論を事例として―
環境相関研究	濵走秀人	楕円曲線による素数判定
環境相関研究	古川邦之	Eruption styles of the Yamakogawa Rhyolite in central Kyusyu　―Mode of spatter eruptions for rhyolitic magma―（中部九州山甲川流紋岩の噴火様式　―流紋岩質マグマにおけるスパター噴火―）
環境相関研究	楊井怜子	欧州統合過程下の EU 難民政策　―ヨーロッパは難民を受け入れるのか
環境相関研究	山尾裕美	ガラス転移点付近での架橋ゴムのレオロジー
環境相関研究	山﨑恭子	Flowering phenology and anthophilous insect community in a grassland ecosystem at Mt.Yufu.（由布岳草原における開花フェノロジーと訪花昆虫群集）
環境相関研究	綿貫陽子	桜島火山 大正噴火における溶岩流に関する研究
環境相関研究	木田敬貴	エルンスト・ルビッチュのサイレント・コメディー映画　―ベルリンからハリウッドへの喜劇性の変容―
環境相関研究	小玉嗣人	明治20年代京都の道路政策　―第四回内国勧業博覧会と道路整備―
環境相関研究	北條竜太郎	戦後啓蒙と動員
環境相関研究	中西公子	Semantic Interpretations of Floating Quantifiers with respect to Subjects and Predicates（主部と述部に関する遊離数量子の意味解釈）

平成15年度

人間・環境学	青木　順	強く磁化された純電子プラズマ渦運動の高精度画像計測法の開発
人間・環境学	蘆田裕史	モードの改革 / 改革のモード： 未来派における衣服についての一考察
人間・環境学	石岡　学	シンボルとしての「健康優良児」： 戦前期健康優良児表彰事業にみる子どもへの眼差し
人間・環境学	石松美沙	NK 活性が SHIV 感染に与える影響の解析
人間・環境学	伊藤　悠	芸術と自由： オノ・ヨーコを通して
人間・環境学	岩中伸壮	Study on the fiber type distribution of skeletal muscles in rats with type 2 diabetes mellitus（2型糖尿病ラットにおける骨格筋繊維分布についての研究）
人間・環境学	上田竜平	第二次大戦期における中国共産党の対外宣伝工作：対米接近の観点から
人間・環境学	江口　建	時間性の次元における「認識」と「存在」の根源的構造： フッサール中期時間論の観点から「ベルナウ草稿」を手がかりに
人間・環境学	河合里永子	歴史都市京都における「みどり」の存在形態とその歴史的展開
人間・環境学	川勝惠理	二次述語としてのフランス語描写構文
人間・環境学	川島正次郎	絶滅危惧植物キブネダイオウの保全に関する研究： 外来種エゾノギシギシとの交雑と生息条件の比較からの考察
人間・環境学	河原田　篤	加振した容器内での散逸粒子における平衡定常状態
人間・環境学	岸　彩子	Infinitif de narration に擬似現場への密着性
人間・環境学	許田重治	日華植物区系におけるユリ科ホトトギス属の系統進化と絶滅危惧種の保全に関する研究： 特にスルガジョウロウホトトギスについて
人間・環境学	久保田　徹	日本産ヒキガエル属の頭骨の変異について

人間・環境学	倉持正胤	日本の都市におけるコンベンション施設に関する研究
人間・環境学	黒田生子	人口内耳の装用と聴覚の臨床： 装用者の ‘生（Life）’をめぐって
人間・環境学	國部雅大	両手同時ポインティング中の眼球運動制御
人間・環境学	小山　真	pTN89 プラスミドにおける極低周波変動磁場による突然変異への影響
人間・環境学	齋藤尚紀	アカゲザルと他サル種における CDld の解析
人間・環境学	嶋田容子	母子間コミュニケーションにおける乳児の声と母の耳： 聴覚の変容に関する仮説
人間・環境学	杉原佳次	不定元を含むストリーム計算の実現
人間・環境学	曽我之泰	非中性プラズマ渦構造形成における自発的分岐とトルク駆動効果の実験的研究
人間・環境学	高尾知則	ストリームによる実数計算の意味論
人間・環境学	武井智彦	Adaptive　control of human cortico-spinal excitability for involuntary movments ecoked by transcranial magnetic stimulation（経頭蓋磁気刺激による誘発運動に対する皮質脊髄興奮性の適応的調節
人間・環境学	竹本聖隆	誘発電位法による形態知覚課程の研究： 対称性の効果の分析
人間・環境学	崔　春浩	認知言語学における「習慣性」の概念の批判的検討： コードスイッチングの問題を中心に
人間・環境学	鶴谷奈津子	Asperger 症候群1例における身体表象機能に関する神経心理学的検討
人間・環境学	中王子　聖	ひらいた傷　南米チリ　ピノチェト軍政による拉致・行方不明者を抱えた家族達の心像
人間・環境学	中島徳郎	Renewing concept of motor homunculus： Kinestheric processing in multiple motor areas（ヒト脳運動関連領域における運動感覚情報処理の体性局在、及び運動制御機能との対応）
人間・環境学	中島裕介	『知覚の現象学』に於ける身体的実存について
人間・環境学	長住香絵	Functional analysis of dominant-negative type hepatocyte nuclear factor (HNF)-1α using transgenic mice　—In the study of the expression control of α-glucosidase (sucrase-isomaltase)（トランスジェニックマウスを用いたドミナントネガティブ型肝細胞転写因子（HNF）-1αの機能解析）
人間・環境学	中邨勇一	Short-rate モデルと HJM モデルとの互換性および債券オプション理論への応用
人間・環境学	西村直人	誘発電位法による視覚マスキング効果の研究
人間・環境学	新田統昭	遅延眼球運動課題に関係した前頭連合野主溝領域のニューロン活動
人間・環境学	根岸俊輔	Dimengional Reduction を用いた高温格子 QCD
人間・環境学	野々川　満	CP*イリジウム錯体を用いる炭素　—水素結合の活性化に関する研究
人間・環境学	馬場英俊	言葉と国家：政治と法を中心に
人間・環境学	平川律子	有機ケイ素化合物を用いる2位置換ピリジンのα－アリル化反応とその利用に関する研究
人間・環境学	福住英美子	並列論理型言語への変換による関数型言語の並列拡張
人間・環境学	藤井　健	CP*イリジウム錯体の水素移動を活用した含窒素複素環の触媒的合成に関する研究
人間・環境学	船越宏二郎	正12角形から導かれる準周期的パターンの研究
人間・環境学	細田　耕	水溶液中における生体関連物質の層状複水酸化物に対する吸着現象の構造化学
人間・環境学	前田青広	fMRI による視覚マスキングの研究

人間・環境学	増田慎也	成長期における overload に伴うラットヒラメ筋の筋繊維横断面形状の変化および dystrophin の動態について
人間・環境学	松枝啓至	『省察』における「分析（Analysis）」： デカルトの方法論に関する一考察
人間・環境学	松永哲郎	Associaton of C825T polymorphism of G protein β3 subunit with autonomic nervous system activity in young, healthy Japanese（日本人における G protein β3 subunit C825T 遺伝子型と自律神経機能の関連について）
人間・環境学	宮形佳孝	屋久島におけるニホンヒキガエルの繁殖生態
人間・環境学	村上しづか	Research on endogenous factors on induction of vasospasm after SAH in rat basilae artery —Signaling process（PLC and PLA_2), NOS and K^+ channel system（ラットのクモ膜下出血モデルにおける脳血管攣縮の影響因子に関する研究 —PLC, PLA_2, NOS, K^+ channel 関連因子の関与）
人間・環境学	村田正太郎	R.シュタイナー思想における一考察
人間・環境学	村松和美	導電性高分子ポリチオフェン誘導体の鎖間及び鎖内に生成したキャリアの ESR
人間・環境学	矢澤真幸	長期寒冷暴露及び冬眠に伴う心筋・骨格筋の適応： 組織化学的・生化学的解析から
人間・環境学	安原和也	「なぞなぞ」の認知言語学： 現代日本語の「二段なぞ」作成の謎に迫る
人間・環境学	梁瀬日奈	カリックスアレーン誘導体による環境汚染物質の除去に関する研究
人間・環境学	薮中津介	優先富化現象に分子・結晶構造の影響と結晶多形転移に関する研究
人間・環境学	山村翼	Studies on pulsatile insulin secretion in the perfused pancreas : Using the KKAy mouse with Type 2 diabetes（膵灌流法による拍動性インスリン分泌の検討 2 型糖尿病モデル KKAy マウスを用いて）
人間・環境学	李終姫	歴史的景観の認識とその保存： 京都市内の住民によるまちづくり，特に建築協定地区を中心に
人間・環境学	王愛民	Investigation on cerebral-vasospasmogens in experimental SAH of rat-involvement of cyclooxygenase and lipid peroxidation process（ラットのクモ膜下出血モデルにおける脳血管攣縮因子に関する研究： シクロオキシゲナーズおよび脂質過酸化の関与）
人間・環境学	顧寧	Glucose-depedent regulation of sucrase-isomaltase（SI）activity by HNF-1 in human cancer cell（Caco2）（スクラーゼ・イソマルターゼ（SI）活性のグルコース依存性調節における HNF-1 の役割）
人間・環境学	鄭美松	日本の短期大学確立過程における女子高等教育論
人間・環境学	Ronen Keren	舞踏概念と製作者の土方巽
人間・環境学	市岡実幸	京城の近代：公園を中心として
人間・環境学	上村宏樹	児童養護施設の子どもの生を支えること： 現場の実践を通して
人間・環境学	金自成	建国期における北朝鮮の対中・対ソ関係
人間・環境学	木村俊孝	富と所得の分布に対する経済物理学的アプローチ
人間・環境学	小紫亮平	N重超対称性の構造と分類
人間・環境学	堀川和嗣	中期フッサールにおける世界概念について
人間・環境学	李貞子	Cp*イリジウム錯体を用いる低環境負荷型触媒反応系の開発
人間・環境学	中村トモエ	ベルクソン著『物質と記憶』における記憶について
人間・環境学	松井文子	住民参加のまちづくりによる日本型エコミュージアムの考察： 滋賀県甲良町を事例として
人間・環境学	森崎鋭光	頼山陽の住まいに関する研究

人間・環境学	和田悠里	“The Tuning Method” and “The Switching Method” —Phoneme Instruction in French Teaching（「チューニング法」と「スイッチング法」 —フランス語教育における音素指導）
文化・地域環境学	伊藤亜希子	連体形を承ける「なり」の語法：「源氏物語」を中心に
文化・地域環境学	今成文郎	スピン5/2と1/2をもつフェリリング分子磁性体 $[Mn(hfac)_2NITPh]_6$ の磁性
文化・地域環境学	内田真由美	アミン酸化酵素の立体識別機構解明に関する研究
文化・地域環境学	片桐優	The Fatal Failure of a Romantic Hero —A Study of *Tender Is the Night*（ロマンティックな英雄のあやまち —Tender Is the Night 研究）
文化・地域環境学	片嶋智之	カップリング反応を用いたヌクレオシド関連化合物の合成研究
文化・地域環境学	加藤希理子	エックハルトにおける「一性」
文化・地域環境学	萱野有美	アウト・アウト： 戦中・戦後のイタリア美術状況をめぐって
文化・地域環境学	川原慎一	S=1/2 量子かごめ格子反強磁性体における磁気フラストレーションの研究
文化・地域環境学	河原秀樹	水溶液を反応場とするリチウムマンガン酸化物の合成と評価
文化・地域環境学	北島栄儀	科学技術政策における意思決定の合理性と裁判：「もんじゅ」高裁判決を踏まえて
文化・地域環境学	北島幸典	La-P-O 系新規プロトン伝導体の創製
文化・地域環境学	木村哲也	Mechanomyogram to Assess Motor Unit Fusion Property during Sustained Isometric Contraction（筋音図を用いた等尺性持続的筋収縮における運動単位 fusion 特性の検知）
文化・地域環境学	高坂恭司	Human Responses of cardiac Autonomic Nervous System to body postural change（体位変化に対する心臓自律神経系の応答）
文化・地域環境学	小島恭美	「売る男」と「買う女」 —女性向け性感マッサージをめぐって—
文化・地域環境学	薦田奈美	意味変遷モデルによる意味変化の共通プロセスの追及
文化・地域環境学	城月周	地域漁業協定と国連公海漁業実施協定との不整合： 一貫性のある保存管理措置と漁業資源の配分の観点から
文化・地域環境学	高橋信之	希土類ホウ酸塩におけるプロトン伝導性の評価
文化・地域環境学	高原純一	一般化された合金型ポテンシャルエネルギーを持つシュレディンガー作用素の固有関数の局在化について
文化・地域環境学	田村うらら	都市定期市におけるやりとりに関する経済人類学的研究： トルコ共和国 イズミルの事例より
文化・地域環境学	恒木健太郎	よそ者たちの取引所： ヴェーバー・ゾンバルト論争の死角
文化・地域環境学	渚みを	裁判権免除対象者に対する刑事責任追求の可能性： ピノシェ事件と逮捕状事件を手がかりに
文化・地域環境学	野沢悠子	北海道・縄文時代遺跡から出土した赤色漆塗り様糸に関する考古科学的研究
文化・地域環境学	林信蔵	日本の西欧化、カフェの日本化：永井荷風、佐多稲子、林芙美子による文学表象を中心として
文化・地域環境学	前田哲史	Acute and Chronic Effects of Progressive Exercise Training on Physical and Mental Health（漸増負荷トレーニングが身体・精神的健康に及ぼす急性および長期的影響）
文化・地域環境学	松倉寿	スピノザ主義者としての初期シェリング
文化・地域環境学	松本郁子	日露交渉の深層 —太田覚眠をめぐって－
文化・地域環境学	丸山真史	中近世における水産資源の利用とその変遷

文化・地域環境学	宮　﨑　紀　子	京都府長岡京市における市民農園の展開と役割：農家開設型のいわゆる「貸し農園」に着目して
文化・地域環境学	山　根　俊　彦	桃山時代における錺金具
文化・地域環境学	山　本　達　也	ディアスポラのパフォーマンス：インド・ダラムサラムの Tibetan Institute of performing Arts を事例に
文化・地域環境学	山　本　友　紀	フォルムの「詩学」：カッサンドルにおけるポスター作品とタイポグラフィの総合的研究
文化・地域環境学	横　道　　誠	ローベルト・ムージルの「新しい人間」
文化・地域環境学	AVIMAN GALIT LIZA	Zenga and The Master Zen Painter　—Sengai Gibon（禅画とその巨匠　—仙涯義梵）
文化・地域環境学	ANDERSON　JAMIE	Addressing Donor Concerns in Adult-to-Adult LDLT : Informed consent, safety of living Donors, and Donor Survey Methodology（成人間 LDLT におけるドナーの直面する問題の解決へ：インフォームドコンセント，生体ドナーの安全性，ドナーアンケートのあり方）
文化・地域環境学	于　　晨　光	「徒然草」論
文化・地域環境学	ALI VOLKAN ERDEMIR	ピエール・ロチと近代の東洋女性：『アジャデ』と『お菊さん』の比較研究—
文化・地域環境学	GUERRERO PLAZA RAUL	新聞から見た「差別問題」：日本とスペインの比較研究
文化・地域環境学	黄　　炫　敏	「中間派」と「嶺南画派」の狭間：京都国立博物館所蔵「須磨コレクション」から見る民国期の広東画壇
文化・地域環境学	KOU　　VET	カンボジアにおける青銅鏡の基礎的研究：クメール王朝の資料を中心に
文化・地域環境学	孫　　郁　雯	宮崎駿アニメにおけるヒロイン像の解読
文化・地域環境学	程　　顥	台湾におけるナショナル・アイデンティティと外省人問題
文化・地域環境学	FADI HANNA TOHME	Experiencing nature in the city : The garden as a link between man and nature（都市の自然の体験：人間と自然をつなぐ庭）
文化・地域環境学	林　　惠　美	台湾人妻の生活実態から見る適応過程：ある台湾人妻の実例から
文化・地域環境学	LONG HWUI MIAN	Conceptualizing ‘Frames’ in Policymaking: A Case Study of Kyoto municipal waste policy（政策形成における「フレーム」の概念化の試み：京都市一般廃棄物政策を事例に）
文化・地域環境学	大　場　さ や か	「満州映画」とは何だったのか：娯楽とプロパガンダの狭間
文化・地域環境学	金　子　　潤	土地資源の慣習的分割相続をめぐる動態的考察：フィリピン・ベンゲット州B村の事例から
文化・地域環境学	坂　本　健一郎	イングランドにおける－by 地名について
文化・地域環境学	柴　田　大　輔	再組織／コラージュする花田清輝：創作理論と運動組織との桎梏からの出発
文化・地域環境学	橋　本　秀　一	Re-viewing Henry Jame’s *The Ambassadors*（ヘンリー・ジェイムズ「使者たち」論）
文化・地域環境学	福　田　亜　紀	The First Person in the Poems of Emily Dickinson（エミリ・ディキンソンの詩における一人称）
文化・地域環境学	藤　田　麻　衣	サーカス：近代の祝祭空間　—道化の機能を中心として—

文化・地域環境学	森　岡　大　智	norm shift 概念の検討，及び，言語学における適応： 小説の登場人物印象に対するテクスト配列順序効果の視点から
文化・地域環境学	森　田　瑞　穂	「精神の道具」としての写真：大辻清司の写真における表現と思考の軌跡
文化・地域環境学	米　田　隼　人	ナノスケール分子磁性体 V_{15} の核磁気共鳴と核磁気緩和
文化・地域環境学	熊　谷　哲　哉	神経・言葉・身体：ダニエル・パウル・シュレーバーの言語世界
環境相関研究学	赤　樫　祐　樹	バイカル湖における物質の化学動態
環境相関研究学	稲　葉　大　祐	Study on the Nonradiative decay processes of the Lower Exited States: Benzaldehyde-derivatives supersonic jets（低励起状態における無輻射緩和過程に関する研究：超音速ジェト法によるベンズアルデヒド誘導体へのアプローチ）
環境相関研究学	内　田　俊　輔	タングステン酸塩ガラスの熱膨張特性： Y_2O_3-ZrO_2-WO_3-Al_2O_3 系ガラス
環境相関研究学	梅　谷　和　弘	微気圧計の製作と大気の微気圧観測
環境相関研究学	逢　坂　美　苗	芝居と観客の受容について：William Shakespeare『十二夜』を中心に
環境相関研究学	大　城　てぃいだ	近世京都の名水
環境相関研究学	加　藤　拓　郎	現代における地価・地代問題の考察
環境相関研究学	川　合　悠　一	オゾン酸化による異常高原子価鉄イオンを含む酸化物薄膜の作製と物性
環境相関研究学	川　北　　篤	コミカンソウ亜科における絶対送粉共生系の起源と進化
環境相関研究学	佐　藤　一　進	エドマンド・バークと保守することの「理念」：現代的理解にための序論
環境相関研究学	高　岡　友　康	CS_2CdI_4,Rb_2CdI_4 における Mn 中心の発光と構造相転移
環境相関研究学	楢　木　祐　介	液体クロマトグラフ：接触分析法による Fe（Ⅱ）, Fe（Ⅲ）同時定量法の開発と、天然水への適用
環境相関研究学	羽　藤　広　輔	書と建築：建築家白井晟一の書堂「雲伴居」にみる〈書く〉場所
環境相関研究学	林　　智　信	貨幣の比較社会学
環境相関研究学	平　田　知　久	サド，カント，パスカル：「近代的」主体をめぐって
環境相関研究学	藤　田　隆　訓	Effect of angle strain on-π conjugated system and the structure of aliphatic ring in jet-cooled aromatic cyclic ketones（ジェット冷却された芳香族環状ケトンの π 共役系，脂肪族環の構造に対する角度ひずみの影響）
環境相関研究学	藤　本　龍　児	現代的個人主義と〈宗教的なるもの〉： 個人の規範意識を支える〈宗教的なるもの〉についての考察
環境相関研究学	三　澤　範　子	活動弁士研究：映画産業形成期における言説分析
環境相関研究学	山　田　由　美	仏教のターミナル・ケア　―マレーシアのビハーラ運動事例を中心に―
環境相関研究学	山　本　ゆかり	郊外住宅地発生以前における住宅地の形成過程とコミュニティ空間の生成：神戸・住吉村を事例として
環境相関研究学	李　　暁　慧	「孝」思想に踏まえた中国の高齢者扶養
環境相関研究学	仲　村　卓　栄	システムからスタイルへ：実践としての知を目指して
環境相関研究学	原　田　史　博	ヴァルター・ラーテナウ：科学者か？文学者か？
環境相関研究学	古　澤　利　信	新宗教における救済観の構造分析：「生長の家」研究
環境相関研究学	森　　俊　樹	CMC 空間における「コミュニケーション秩序」
環境相関研究学	和　﨑　聖　日	タシケントの「乞食」に関する人類学的研究：ポスト・ソビエト期における再イスラーム化と女性

平成16年度

共生人間学	浅野庸子	入院している子どもの世界　―小児がんの子どもとのかかわりを通して―
共生人間学	石井達也	前期メルロ＝ポンティの他者論　―〈生きられた独我論〉を越えて
共生人間学	石川眞美	Attitudes toward Foreign Language Learning at Kyoto University: With Special Reference to Autonomous Learning（自律学習の視点から見た京都大学における外国語学習に対する意識）
共生人間学	稲葉大介	Spatial perception by the internal representation of arm（腕の内部表象による空間知覚）
共生人間学	井上健介	引きこもりのメカニズムと支援に関する一考察　～精神分析的視座から～
共生人間学	岩渕善道	『純粋理性批判』超越論的分析論における権利問題
共生人間学	上野康平	n 次元複素射影空間上の有限群の作用と可換な有理写像の構成
共生人間学	上本雄一郎	岡倉天心の受容史にみる文化ナショナリズムの系譜
共生人間学	榎木　奨	復古王政期フランスにおけるリベローの挑戦　～F・ギゾーの政治思想と選挙戦略
共生人間学	大木美智子	ルネ・マグリットとマルセル・ブロータス　－現代芸術における自己参照性の終焉
共生人間学	岡本真由美	University Students' Lexical Acquisition and Attrition in English as a Foreign Language.（大学生の外国語語彙知識の習得と減少）
共生人間学	岡安裕介	まれびとの回帰　―日本における動態構造論―
共生人間学	加藤志織	PENNA（ペン）とPENNELLO（絵筆）、VISIONE（視覚）と TATTO（触覚）　―PIETRO ARETINO エクフラシス分析
共生人間学	川元康彦	写真と消費社会　―同人誌『プロヴォーク』にみる、写真メディアの変容―
共生人間学	境原塊太	ベルクソンにおける仮構機能
共生人間学	佐野奈緒子	立位姿勢における安定限界の足圧中心分析
共生人間学	大傍正規	溝口健二『愛怨峡』　―サイレント的な視覚表現とその映画史的意義
共生人間学	辻村優英	亡命チベット人社会の宗教社会学的研究
共生人間学	寺西哲平	弱正則表象の擬微分作用素に対する Fefferman-Phong 不等式
共生人間学	戸田潤也	カントにおける意志の自由について
共生人間学	冨田啓祐	The analysis of familial intrahepatic cholestasis 1（FICI）gene as a hepatobiliary transporter function.（肝胆輸送としての家族性肝内胆汁うっ滞 1（FIC1）遺伝子の解析）
共生人間学	永田由香	構文－文法に基づく他動詞文の分析　―日本語の使役移動構文を中心に―
共生人間学	中西佳世子	Hester as Admirable Witch（賞賛すべき魔女ヘスター）
共生人間学	西森未和	寒冷環境に対する骨格筋の生理学的適応　―単一筋線維ミオシン重鎖アイソフォームの解析―
共生人間学	野原　真	Leptin transgenic mice の単一骨格筋線維の収縮・代謝特性
共生人間学	羽倉信宏	Seeing and feeling my hand movements in the cerebellum : Integration of vision and kinesthesia when humans perceive limb movements（小脳で、自分の手を見ながら動きを感じる：自己の手運動知覚時の視覚と筋感覚の統合について）
共生人間学	浜野寛子	助数詞の意味拡張に関する認知言語学的考察　―助数詞「本」を中心に
共生人間学	番　浩志	遮蔽物体の補完に関わる大脳皮質低次視覚野活動の解析　―fMRI 研究―

共生人間学	広川朋也	カラー画像に対する知覚均等色空間に基づいた大容量データハイディング
共生人間学	藤井陽奈子	現代社会における消費者教育の課題
共生人間学	堀川　茜	〈子ども〉と〈大人〉を生きる青年たち　―家族についての語りから見える関係発達―
共生人間学	牧瀬英幹	死を取り巻く無意識の精神分析的考察　～正岡子規の事例をもとに～
共生人間学	増田将伸	対話における質問表現　―相互行為の観点から―
共生人間学	真継和子	看護におけるケアリングの実践と課題　―リハビリテーション期にある患者と看護師のケアリング体験から―
共生人間学	丸山英幸	存在の意味への問いにおける循環構造と学的解釈　―『存在と時間』に定位して
共生人間学	山嵜章裕	話し手の主観的態度を反映する言語表現の認知言語学的研究
共生人間学	山崎徳子	つながったと思えること　―障害児保育の場の<感性的なコミュニケーション>を記述する―
共生人間学	山田陽介	The Relationship between Segmental Bioelectrical Impedance and Physical Function in the Elderly（高齢者における部位別生体電気インピーダンスと身体機能との関係）
共生人間学	山中奈月	Effects of hyperbaric exposure with high oxygen concentration on blood pressure and skeletal muscle property in spontaneously hypertensive rats（高気圧・高濃度酸素への曝露が自然発症高血圧ラットの血圧と骨格筋の特性に及ぼす影響）
共生人間学	山本佳世子	文学による死生観の教育　―高校の国語科における自殺予防教育の可能性―
共生人間学	山本哲也	回転及び並進の運動手掛かりによる奥行き知覚に関する fMRI 研究
共生人間学	横山慶一	指タッピングにおける間隔および発揮力の揺らぎの解析
共生人間学	吉永麻里子	喫煙の糖代謝およびインスリン分泌動態に及ぼす影響に関する研究
共生人間学	渡邉　慶	眼球運動方向の決定に関わる前頭連合野神経機構
共生人間学	渡邉岳夫	Beat-by-Beat Analysis of Cardiovascular Control during Exercise（運動中における循環系制御の拍動毎解析）
共生人間学	鄭　愛松	Effect of kampo on autonomic nervous activity as evaluated by power spectral analysis of HRV and cardiac depolarization-repolarization process（漢方が自律神経活動に及ぼす影響について ～心拍変動パワースペクトル解析と心筋脱分極－再分極過程による検討）
共生人間学	朴　瑞庚	韓国語母語話者の日本語発音学習における自己モニタリングの効果
共生人間学	BRATANA BRATANOVA	Zatoichi：the Representation of The Blind Swordsman.（『座頭市』における盲目の剣客像）
共生人間学	万　礼	第3言語習得に及ぼす第2言語の影響について　―中国語母語話者の日本語可能形式の習得を例に―
共生文明学	青木　一	慶陵壁面に記された契丹文字について
共生文明学	有元志保	Voiceful Nature and Restless Characters －The Continuity of William Sharp and Fiona Macleod in His/Her Novels（「声」をもつ自然と揺らぎを内包する人間　―William Sharp/Fiona Macleod の小説における連続性）
共生文明学	五十野健史	現代社会における監視の批判的検討　―「他者から見られるということ」の社会的意味の再考を通じて―
共生文明学	伊藤恵一	Brendan Behan の The Quare Fellow における観客反応の操作
共生文明学	井面　舞	「一遍聖絵」における形象化の論理

共生文明学	今田勝規	意志と理性としての国家　―カールシュミットとレーニン―
共生文明学	大野直樹	ウィリアム・ドノヴァンの情報機関構想
共生文明学	岡山祐子	ゲオルク・ビュヒナーの文学における革命と神の摂理
共生文明学	梶丸岳	プイ山歌のコミュニケーション論　―歌・詩・対話のはざまで―
共生文明学	川上陽子	歓待論のために
共生文明学	菊池智子	公共衛生の確立と近代水道の開設　―十九世紀上海租界を中心に―
共生文明学	椹木健一	行政による情報公表と損害賠償・損失補償
共生文明学	柴田悠	適応概念の歴史
共生文明学	白取智彦	北日本における古代防御性集落の様相
共生文明学	新藤伸恵	ロシア極東における Самосознание の形成　―Дальневостчнико（極東人）の自意識―
共生文明学	高原浩子	現代モンゴルの都市部における物資の流通　―輸入物資を中心として―
共生文明学	長田菜々	都市公共空間における監視カメラとジェンダー
共生文明学	西井美幸	ヘルダリン・ルネサンスの萌芽　―文献学者ヘリングラートの新解釈がもたらしたパラダイム転換―
共生文明学	伴めぐみ	ノン・ルフルマン原則適用範囲の検証　―国境または領域外にいる庇護申請者の扱いを中心に―
共生文明学	比嘉夏子	豚の価値が体現されゆく過程　―トンガ王国ファトゥム村の事例にみる家畜豚の儀礼的利用とその評価
共生文明学	平岩貴比古	日露戦争期・国内収容所におけるロシア兵捕虜への識字教育問題
共生文明学	藤岡真樹	冷戦初期 M. I. T における人文・社会科学部の設置と「冷戦的大学」の出現
共生文明学	水越絢子	19 世紀末イギリスの娯楽産業における子どもたち
共生文明学	水野映美	国家の義務の性質によるヨーロッパ人権条約第8条に関わる権利の種別化　―ヨーロッパ人権裁判所判例分析―
共生文明学	宮本和歌子	江戸川乱歩「人でなしの恋」に関する考察
共生文明学	向井直己	W.ベンヤミン『ドイツ悲劇の根源』における認識の問題
共生文明学	山田裕英	移民の宗教と国家とのアイデンティティの衝突　～フランスにおける公教育の政教分離より～
共生文明学	山田有佳	日常性の再構築　―ポスト社会主義／ポスト紛争社会における女性の NGO 活動―
共生文明学	山元宣宏	古文学派と隷書
共生文明学	ANDREA YURI FLORES URUSHIMA	The Representation of the future city in the OSAKA, EXPO 70.（未来都市として大阪万国博覧会.）
共生文明学	王冠	大慧宋杲の看話禅について
共生文明学	王仁	大阪大都市圏における郊外住宅地域の形成と変容に関する研究　―箕面市を事例として―
共生文明学	朱炎	「中国帰国青年」の自己アイデンティティにめぐる考察　― カルチュラル・アイデンティティを中心に
共生文明学	張黎	「遊仙窟」和訓の畳語語彙についての考察

共生文明学	陶　盈	大宅壮一における「無思想」 ―その大衆とのかかわり
共生文明学	杜　鳳亭	衛生植物検疫措置をめぐる政策選択の可能性 ―EC 牛肉ホルモン事件における「予防原則」と「予防的観点」の考察から―
共生文明学	BAIBIKOV ELENA	Foreign Spouses in Cross-cultural Marriage: A Case Study of Russian Wives in Japan（国際結婚において外国人配偶者 ―日本におけるロシア人妻をめぐって）
共生文明学	劉　賢	字形を中心とした繆篆の諸相
共生文明学	林　春吟	日本植民地時代の台湾における地図に関する研究
相関環境学	安部　潤	KK-Ay II 型糖尿病モデルマウスに対する亜鉛 ―ジチオセミカルバゾン（Zn-DTS）錯体の経口投与での血糖値降下作用に関する検討
相関環境学	生田大穣	X線回折法による超高圧変成岩鉱物の研究
相関環境学	伊藤寛治	広域分布種ヒメアマガエルの分類と生物地理
相関環境学	大西将徳	Lorentz モデルによる大気の散乱断面積
相関環境学	小川雅弘	Gravitational Lensing of Gravitational Waves（重力波の重力レンズ）
相関環境学	奥原進一郎	優先富化現象を誘起する新しい溶媒アシスト型固相多形転移のメカニズム
相関環境学	奥山雄大	種間交雑のパターンと送粉様式から見たチャルメルソウ属の多様化
相関環境学	小倉太一	中期フッサール現象学におけるノエマ論
相関環境学	小澤龍馬	静電場と重動力を組み合わせた新しい非中性プラズマトラップの研究
相関環境学	川原俊紀	[60] フラーレンの位置選択的な化学修飾に関する研究
相関環境学	岸　佑季	新規鉛フリー透明ナノ結晶化ガラスの創製と赤外→可視変換特性
相関環境学	北口晴康	水圏における栄養塩元素の長期変動とその相関性について
相関環境学	久澤啓子	古紙廃棄物から合成した多孔質物質とその応用
相関環境学	小林知里	The alternative tactics in leaf roll-construction of Cycnotrachelus roelofsi.（エゴツルクビオトシブミの揺籃作製における代替戦術）
相関環境学	島田知彦	ボルネオハヤセガエル属に関する分子系統学的研究
相関環境学	嶋本祐子	沖縄県西表島における Bidens pilosa var. radiata（Asteraceae）の制御を目的とした保全生物学的研究
相関環境学	田久朋寛	環境リスク削減の自発的アプローチ ―シックハウス症候群対策における業界団体と情報開示の役割
相関環境学	茶谷俊介	新規光学活性ニトロキシドラジカルの合成とそのスピンラベル剤としての応用
相関環境学	照沼幸恵	東アジアと北米に隔離分布する植物の系統進化 特にオウレン属とイワウチワ属について
相関環境学	半井重行	グローバル化と政治イノベーション ―経済システムにおけるインターフェイス（界面）概念との関わりで―
相関環境学	西原　健	外部回転電場を加えられた非中性プラズマ系の運動量についての検討
相関環境学	原田礼忠	Molecular Phylogenetical Analysis of HIV-1 in Republic of Congo － Expansion of genetic diversity and identification of novel recombinant forms －（コンゴ共和国におけるHIV-1の分子系統解析 ―HIV-1の新しい組み換えウイルス群の出現と多様性の拡大―）
相関環境学	樋口倫也	光合成アンテナ系における分子構築の分光学的解析 ―カロテノイドを中心として
相関環境学	藤井　渉	金融的不安定性理論の再評価 ―1980年代後半以降の日本経済を事例に―

相関環境学	町田裕史	植物色素定量による水圏生物量の推定
相関環境学	水田真之	擬似核接種による結晶多形転移の制御： 優先富化現象の誘起と阻害
相関環境学	牟田哲郎	アイソタクチックポリプロピレンの結晶化における核剤効果
相関環境学	森本和也	層状複水酸化物（LDH）に対する生体関連物質の吸着特性とその構造化学的考察
相関環境学	山崎晋平	前期ハイデガーに於ける日常性と不安の連関
相関環境学	山崎裕史	広帯域光通信用Uバンド光アンプ材料としてのErドープガーネット結晶の作成と光物性
相関環境学	山崎裕輔	イリジウム錯体を用いた触媒的炭素　―炭素結合生成反応の開発に関する研究
相関環境学	山本昌由	[60]フラーレン誘導体によるフェノール性内分泌撹乱物質の光分解に関する研究
相関環境学	吉岡賢二	S＝1/2カゴメ格子反強磁性体Cu-titmbの核磁気共鳴
相関環境学	吉村慶介	高分子の摩擦におけるメカニズム
相関環境学	紀　旭	Influence of experimental SAH（subarachnoid hemorrhage）on nicotine-induced contraction in rat basilar artery（ラット脳底動脈におけるニコチン収縮に対する実験的クモ膜下出血の影響）
人間・環境学	窪谷　純	Tremaine系列自己重力多体系における熱統計力学的議論
人間・環境学	坂本里沙	作家としての生とフィクションの可能性　―大江健三郎『万延元年のフットボール』についての精神分析的考察―
人間・環境学	田中綾音	パレスチナをめぐる状況とその分割案・和平案への影響
人間・環境学	西岡文維	Rock magnetism and paleomagnetism of deformed rocks in the Mt.Riiser-Larsen area, Enderby land, East Antarctica（東南極エンダービーランド、リーセルラルセン山地域における変形岩の岩石磁気・古地磁気）
人間・環境学	服部有希	アルベルト・ジャコメッティの後期彫刻　―1935年の断絶をめぐって―
人間・環境学	東　琴衣	有機半導体の電子状態と物性に関する研究
人間・環境学	萬谷治子	都市空間における「緑」の定性的評価手法に関する考察
人間・環境学	村田智子	理想的な身体　―なぜわたしたちは痩せることにとり憑かれるのか
人間・環境学	柳川玄永	ブレーンワールド・インフレーションとQuintessence, その体系と制限について
人間・環境学	山田吉英	超対称量子力学とその拡張
人間・環境学	山中大輔	世界性の分析にみられるハイデカーの現象学的方法の優位性　―デカルトの哲学との対決を手引きとして―
文化・地域環境学	伊藤久美子	英語における『存在文』によって導入される名詞句の定性に関する考察　―情報ステータスの観点から―
文化・地域環境学	今井貴予	公共事業の評価とリスクマネジメント　―リアルオプション法の適用可能性―
文化・地域環境学	申　玉芹	「ナシ」を語末とする形容詞　―「ナシ」の否定性をめぐって
文化・地域環境学	福田裕大	初期蓄音機の文化史
文化・地域環境学	村橋　勳	社会に刻まれた鍛冶の「わざ」　―エチオピア西南部の職能集団ギイツィの事例から
文化・地域環境学	森川　妙	「白粉」から「知恵の美」へ　―1920年代『資生堂月報』に見る新しい女性像と化粧観
文化・地域環境学	山本安藝	ハリウッド・インディアン像の解読　―西部劇の中の表象をめぐって―

環境相関研究	小島 恵美子	第一次大戦とデュルケム　―デュルケムにおける共同体志向
環境相関研究	小西 賢吾	祭りの維持にみる理念とゆらぎ　―秋田県角館町の事例から―
環境相関研究	佐古 孝義	ろう文化にみるアイデンティティの「戦略」の可能性
環境相関研究	和田 浩	山形国際ドキュメンタリー映画祭の諸相

平成17年度

人間・環境学	安田 浩之	色素体シグマ因子と光波長に応答した葉緑体遺伝子発現
環境相関研究	松澤 佳子	1970年代とジェンダー　―「専業主婦化」と「連合赤軍事件」の対比を通して―
共生人間学	岩田 馨	ロラン・バルトの「新しい学」　―思考の技法としての「アマチュア」の視点
共生人間学	松原 万容	フランス語における再帰構文受動的用法の意味論的研究
共生文明学	榎本 大祐	ヴィクトリア朝イギリスにおける「ごみ問題」
共生文明学	鈴村 綾子	「女のため」のポルノグラフィー　～女性向けアダルトビデオをめぐって～
相関環境学	佐藤 博厚	Diocotron 不安定性による電子プラズマ密度分布の特徴的変形に関する研究
共生人間学	許 慧穎	中国高齢者のサクセスフル・エイジング関連要素について　―SOC, PIL, QOL スケールを用いて
共生人間学	近藤 あき	脳機能イメージング法による色知覚の空間比較過程に関する研究
共生人間学	戸田 智和	幻想文学の射程　―ミヒャエル・エンデにおける現実と非現実
共生人間学	野口 亮	ラカンの精神分析における科学の概念に関する研究
共生人間学	藤野 裕己	「性別」という視点が隠蔽するもの　―ジェンダー研究批判として―
共生文明学	加藤 裕美	熱帯雨林における定住狩猟採集民の生計戦略　―ボルネオ・シハン社会における食物資源の獲得と消費―
共生文明学	児玉 夏子	「保護」される野良ネコ　―ローマにおけるガッターレの日常活動から
共生文明学	田中 丈二	アレグザンダー・ハミルトンの政治思想とアメリカ建国　―古典的共和主義の受容と近代への適用
共生文明学	津田 愛子	舞踊芸術の可能性を拓く　―ジャン・コクトーのバレエ作品
共生文明学	中森 千尋	階層化するラスタコミュニティのゆくえ　―エチオピア・シャシャマネにおける「帰還後」の現実と相克―
共生文明学	錦織 承平	奄美大島南部・潜水追込網漁　―集団がつくりだす漁撈技術を考える―
共生文明学	橋本 摩美	漱石の我執と則天去私について
共生文明学	細見 昌史	17世紀前半におけるスペイン帝国の盛衰と貿易政策の変化　～ガレオン貿易を中心に～
共生文明学	安田 奈々子	近世後期商家における「家」の奉公人　―三井越後屋を中心に―
共生文明学	Eleanor Robinson	日英関係における相互認識の軌跡
相関環境学	高橋 秀明	磐梯火山の火山防災と火山教育の研究
相関環境学	山口 哲洋	Cp*イリジウム錯体触媒の水素移動能を活用する炭素　―炭素結合生成反応の開発
共生人間学	STROIA OLIVIA VANESA	テレビ CM を通してみた外国像　―日本とルーマニアの比較研究―

共生人間学	高木麻由美	A Variant Form of the Melodramatic Structure in *Wuthering Heights*: The Representation of the Holy（『嵐が丘』における変形されたメロドラマ的構造　―聖なるものの提示―）
相関環境学	上野若菜	Ti4O7 における 金属絶縁体転移の光学的研究
共生文明学	辻井宏仁	都心部立地のマンションおよびその居住者に関する地理学的考察　―京都市を事例として―
共生人間学	金　秀貴	ニーチェの系譜学
相関環境学	柳原啓見	紫外線照射における NBS1 フォーカス形成と機能ドメインの解析
共生人間学	三好正彦	障害児の放課後生活の場としての学童保育
共生人間学	森　容子	The study of insulin secretion　～Using β-cell specific Mn-SOD knockout mouse～（インスリン分泌機構に関する研究　～β細胞特異的 Mn-SOD ノックアウトマウスを用いて～）
相関環境学	伊藤　文	京都市における都市気象の解明　～多点観測による都市部と郊外の気温と熱慣性の比較～
共生文明学	陳　暢	マイノリティの言語使用と儀礼実践にみるエスニシティ　―中国雲南省シーサンバンナのアカ族の集落を事例に
共生文明学	許　燕華	中国朝鮮族の韓国での出稼ぎ及びその生活世界　―ミハのライフ・ヒストリーから
共生人間学	井上智子	初期新高ドイツ語の接続詞 wenn, wann, ob についての歴史的考察
共生人間学	梅沢祐子	Women and Races in *Dombey and Son*（『ドンビー父子』における女性と人種）
共生文明学	工藤藍子	山林資源利用にみるテリトリー性　―山形県西置賜郡小国町小玉川地区を事例として―
共生文明学	荻田ひかり	平安時代における葬送と供養
共生文明学	徐　玉子	忘れ去られた女たち　―韓国京畿道における米兵相手の売春女性をめぐって―
相関環境学	伊藤早織	Smc 5-6 複合体関連因子ヒト Radb2 の機能解析
共生文明学	渡辺　文	「芸術家」のうまれるとき　―フィジー、オセアニア・センターの現代芸術活動を事例に―
相関環境学	亀田勇一	形態比較・分子系統解析によるオキナワヤマタカマイマイ種群の分類学的再検討および生物地理
共生文明学	平松一恵	オーストラリアヴィクトリア州中山間部における土地利用の変容と観光地域の形成
共生文明学	山口直人	買物行動が集まる時間の変化と地域性　～京阪神大都市圏を対象として～
相関環境学	平山　祐	各種二官能基性ラベル剤の合成とトロポニン C への応用
相関環境学	有賀友美	アミノ酸・ペプチド誘導体の結晶多形と多形転移に関する研究
共生人間学	松田有司	クロール泳における 1 サイクル中の速度変動
共生人間学	柴田慎士	防災・災害救援活動における市民参加　―災害 NPO の役割とその変遷―
共生文明学	藤井俊之	自由と非同一性　―アドルノの否定弁証法を巡って―
相関環境学	舟橋修一	フェリリング分子磁性体 Mn6R6 の合成と NMR 測定によるスピンダイナミクスの研究
共生文明学	池田瑞恵	「性」を変える　―現代日本における性同一性障害モデルの普及とトランスジェンダーの経験―
共生文明学	上田淳史	蜀漢政権に対する二、三の視点　―軍府と益州豪族に関して―
共生人間学	竹内　靖	ビル・ヴィオラのヴィデオアート作品研究

共生人間学	池田智子	構文理解における注意のシフトの影響について
相関環境学	渡部祐子	カスミサンショウウオの食性に関する研究
相関環境学	土屋泰三	東南アジア熱帯産チョウ類にみられる警告色に関する生態学的研究
共生人間学	利根有紀	Arthur Miller's dramaturgy in *The Crucible*（*The Crucible* におけるアーサー・ミラーの劇作術）
共生文明学	益満まを	辻蘭室文書の書誌的考察
相関環境学	石橋孝一	アザカリックスアレーンの新規合成法の開発に関する研究
相関環境学	松井佳彦	層状複水酸化物（LDH）に対する生体関連物質の吸着特性
共生人間学	福田健太	サル前頭連合野内における介在ニューロンの分布に関する研究
相関環境学	中本拓也	アミン酸化酵素の反応性と立体選択性に関する研究
共生人間学	高橋尚子	日本におけるテーラワーダ仏教実践者の回心プロセスと世界観　―ライフヒストリーを利用して―
相関環境学	内田幸明	常磁性有機化合物の合成と物性
共生文明学	下羅裕子	日韓同形異議漢字語の変遷
共生文明学	陳　怡君	20世紀台湾における客家女性の変貌　～六堆のある一家族女性三世代のライフヒストリーから～
共生人間学	鬼頭　修	接頭辞 over- の多義に関する認知的アプローチ
相関環境学	于　海涛	気候変動対策における中日協力　―中日間の共同実施活動（AIJ）プロジェクトの事例研究
共生人間学	中　伊万里	亀井文夫研究
共生文明学	大胡知世	TRIPS 協定での強制実施権の変質　～特許国内実施との関係を中心に～
共生人間学	北垣芳彦	ランダム面モデルに対するAnderson局在・表面状態密度関数の連続性について
共生人間学	杉山博昭	15世紀フィレンツェにおける聖史劇　―テクスト・上演・観客―
共生人間学	吉住美保	The Frontal Systems Behavior Scale 前頭葉機能に関する行動評価尺度（FrSBe）の標準化と信頼性、妥当性の検討
共生人間学	宋　昌代	英語動詞 have の多義性に関する認知言語学的考察　―本動詞用法を中心に―
共生文明学	VERES BALINT ATTILA	Looking Backward : Hungarian Americans' loyalty to a Nineteenth Century Myth（過去を振り返って　―ハンガリー系アメリカ人の19世紀神話への忠誠）
共生文明学	金　成愛	遣唐使に纏わる日唐外交について　―《入唐求法巡礼行記》を中心に
相関環境学	DONCHEV KRASIMIR BORISOV	MORPHOMETRIC STUDY OF THE JAPANESE BROWN FROG（ニホンアカガエルの計量形態学的研究）
共生人間学	岡本源太	表象しえないものに抗する痕跡　―時間の混淆、同一なるものの変奏―
相関環境学	中村恭介	相同組換え修復における NBSI の機能解析
相関環境学	堤　久恵	精神障害高齢者の所得と需要の相関関係から見る現行医療福祉政策の評価
共生文明学	中島啓勝	「文明」を語ることについて　～文明論者としてのノルベルト・エリアスを中心に～
共生文明学	佐々木太郎	アメリカの対中共政策　―30～40年代の米中関係におけるインテリジェンス活動の観点から―

共生文明学	川崎修良	京町家保存再生意識・思想についての研究　―1970年代以降を対象に―
共生人間学	日塔理恵子	ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ作「福者ルドヴィカ・アルベルトーニ」について
相関環境学	島田幹男	ほ乳類細胞におけるクロマチン免疫沈降法の DNA 二重鎖切断修復解析への応用
共生人間学	渡邉浩一	カントの能力論　―『純粋理性批判』に於ける想像力の位置を巡って―
相関環境学	松岡永久	キラルピロリジンホストの合成に関する研究
相関環境学	大久保智司	日本および Palau 沿岸における Acaryochlovis spp. の分布と遺伝的多様性
共生人間学	田中崇博	Effects of Strength Training via Low-Frequency Electivical Muscle Stimulation（低周波筋電気刺激による筋力トレーニング効果）
共生人間学	松井沙矢子	初修フランス語学習者の動機づけに関する研究　―フランス語学習に対する意識の変化―
共生文明学	田村朋美	歴史的石造建造物の保存に関する科学的研究　―カンボジア・西トップ寺院を題材に―
相関環境学	丹羽佳人	レーザー干渉計型高精度角度変動モニターの研究開発
共生文明学	長村祥知	後鳥羽院政期在京武力の研究
共生文明学	松村真衣子	京都旧浄土寺村の祭祀空間について
相関環境学	榎　洋一郎	Cp*イリジウム錯体触媒を用いるアルコールによるアミンの低環境負荷型 N-アルキル化反応の開発
相関環境学	岡本朋子	Floral scent composition and its ecological role in obligate pollination mutualism between Glochidion trees（Phyllanthaceae）and Epicephala moths（Gracillariidae）（カンコノキ属植物（コミカンソウ科）と送粉者ホソガ（ホソガ科）の絶対送粉共生系における、花の香りの構成とその生態学的役割）
共生文明学	劉　志偉	『手耳葉口伝』の証歌について
共生文明学	池上　作	近代民衆宗教の伝播と地域社会　―復祭届に見る金光教の地域的展開の分析を中心に―
共生文明学	家原圭太	都城における住まいの構造と変遷　―平城京を中心に―
相関環境学	西澤篤志	宇宙背景重力波の観測へ向けて
共生文明学	青木真里	朝鮮半島南部地方における伝統的民家の空間構成に関する考察　～全羅南道青山島を事例に～
共生文明学	辻　浩和	院政期における後鳥羽芸能の位置　～後白河芸能との関係を中心に～
共生人間学	勝浦眞仁	障碍を抱える子どもが「主体的」に生きる　～関わり合う体験を通して～
相関環境学	堀口治子	白色光源用希土類蛍光体の作成と積分球による発光特性評価
相関環境学	小山公平	始源的シアノバクテリア Gloeobacter violaceus PCC 7421 の酸素発生系と光化学系Ⅱ集光性タンパク質に関する研究
共生文明学	安藤哲郎	都と外側のあいだにある空間への意識　～平安京の事例を中心に
相関環境学	陳　家瑀	日本の災害対応初動体制の初歩的な探求　―震災対策を中心に
共生人間学	銭　玥	日本語論文における語彙に関する研究　―経済学系学術雑誌を例として―
共生人間学	菊地直子	A study of the skeletal muscles on the pathophysiological significance in diabetic rats（糖尿病モデル動物における骨格筋の病態生理学的意義）
共生人間学	横森大輔	文法における語用論的動機づけに関する認知的研究　―接続助詞の拡張用法を中心に―

共生文明学	松岡哲平	パチンコの社会史
共生文明学	生田奈緒子	投資協定における公共目的条項の意義と課題　―NAFTA 11章の「環境」紛争事例分析―
共生文明学	山口佳美	東シベリア・極東開発における第2次カムチャツカ探険（1733-1743）の意義
共生人間学	清原夏樹	Effect of Experimental Blood Flow Restriction on Human Autonomic Nervous System Activity（血流阻害が自律神経活動に及ぼす影響）
共生文明学	籔田有紀子	レナード・ウルフと急進主義
共生文明学	高田彩子	葛藤のはざまに生きる宗教文化　―大阪における在日コリアンの世代交代と韓国・朝鮮寺の現在―
共生文明学	辰巳唯人	郊外空間の成立期における写真の役割　―近代日本のアマチュア写真家による郊外風景の生産―
共生文明学	山口大輔	西條八十のアルチュール・ランボー研究　―その伝記的事象への関心をめぐって
共生文明学	田中郁也	『六書故』に引く孫愐『唐韻』について
相関環境学	浅井千穂	Cp*イリジウム錯体触媒の水素移動能を活用する低環境負荷型合成反応の開発
相関環境学	鈴木隆史	西南日本新第三系、北但層群および鳥取層群における古地磁気学的研究 ～日本海の拡大形成期における西南日本回転運動の過程に関する考察～
共生人間学	岩田真紀	Semantics of the English Present Perfect: From the Viewpoint of Psychological Proximity and Subjective Construal of a Situation（英語現在完了の意味：心理的近接性と事態の主観的把握の観点から）
共生人間学	須賀睦美	著作権制度と芸術作品
相関環境学	橋爪宣弥	渦糸の結晶化とその崩壊における背景渦の寄与に関する実験的研究
相関環境学	玉置奈菜	分子系統からみたミミズハゼ族（Luciogobius）魚類の適応放散
相関環境学	井上英俊	始原的シアノバクテリアGloeobacter violaceus PCC 7421 における光化学系 I 複合体のタンパク質化学的解析
共生人間学	採澤和正	宗教紛争の全体的理解：発生プロセスと宗教の役割の解明
共生人間学	阿部将伸	大地と存在者　―ハイデガーの「大地」の解明
相関環境学	深澤嘉伯	Analysis on systemic distribution of high and low pathogenic SHIV during the early phase intrarectal infection（強毒、弱毒 SHIV 粘膜感染初期の全身臓器におけるウイルス動態の解析）
共生人間学	河原大輔	デイヴィッド・リンチ作品における身体的マニエリスムと古典的映画文法の差異化
相関環境学	上山真理	琵琶湖における湖底堆積物からの栄養塩溶出機構
相関環境学	鍛治亮佑	量子スピンカゴメ格子磁性体の核磁気緩和
相関環境学	高橋禎憲	イリジウム二核錯体を用いる有機分子の炭素　―水素結合活性化に関する研究
共生人間学	戸田貴久	射影空間における凸概念について
共生人間学	大谷直輝	A Cognitive Approach to English Phrasal Verbs　－A case of *come up*－（英語句動詞に関する認知言語学的考察　―*Come up*を中心に―）
共生文明学	大野哲也	「自分探し」の旅という神話を超えて　―アジアにおける日本人バックパッカーの調査から―
共生人間学	朴　白順	健忘症例における自伝的エピソード記憶の検討
相関環境学	別府将暁	酸化チタン薄膜の蒸着と光触媒作用
共生文明学	張　小蜜	魏晋における人物評価　―劉邵の『人物志』の研究

共生文明学	川口夏織	平林たい子「鉄の嘆き」 —「水」のイメージ—
共生人間学	LEE SHZH CHEN	Learner Attitudes Toward L2 and L3 Learning in Japan : An Investigation of Freshmen at Kyoto University.（日本人学習者の L2 及び L3 に対する態度：京都大学一年生の実例）
相関環境学	正木一嘉	キラル有機常磁性液晶の合成と物性に関する研究
共生文明学	北川雅子	スペイン分割協定にみる勢力均衡の試み
相関環境学	佐藤詩織	本邦河川水質の特性と地域間格差
共生人間学	大谷めぐみ	視覚 —固有感覚間の空間的一致が視覚情報処理に及ぼす影響
相関環境学	柿沼景子	火成岩による酸性水の中和に関する環境化学研究
相関環境学	前田哲宏	水圏に溶存する有機物の吸着現象に関する研究 —水酸化鉄（Ⅲ）への吸着とC・N・P 比との関連性—
共生人間学	幸野里寿	終末期における精神的変化の理解に向けて
共生文明学	徐向前	『台湾青年』の台湾ナショナリズムの展開 —『台湾青年』で語った「台湾人」の排斥と包摂によって
相関環境学	井上和久	阿蘇火山における大規模噴火をもたらしたマグマ溜まりの形成プロセス
共生人間学	芹沢春香	Vocabulary Knowledge and Vocabulary Learning Strategies: A Study of Japanese University EFL Learners（語彙知識と語彙学習ストラテジー —日本人大学生英語学習者を対象として—）
共生人間学	PAUL PATRASHCU	Shakespeare's *Cymbeline* as Christian Allegory —A Study of Dramatic Creation（キリスト教的アレゴリーとしての『シンベリン』 —劇的創作の研究）
共生人間学	西野由起江	女性名称に関する言語表現 ～ジェンダー・スタディーズの視点から～

平成18年度

文化・地域環境学	加藤尚子	ハンナ・アーレントにおける政治的思考
文化・地域環境学	鈴木敬寛	『犬子集』における「上古俳諧」の位置づけ
人間・環境学	吉田泰格	解離性健忘の発現機序に関する神経心理学的考察
共生文明学	小原広太郎	リデル・ハートの理論における政治と軍事の連関
共生文明学	三島武之介	セオドア＝ローズヴェルトと門戸開放政策
共生人間学	橋本政好	間主観的アプローチによるカウンセリングの一考察
共生文明学	飯田美樹	カフェという場のダイナミズム ～20世紀前半のモンパルナスをめぐって～
共生人間学	舩木宏高	Asyntactic Study on the Verb Particle Constructions: Exploring Aspectual and Functional Particles（不変化詞動詞構文の統語的研究：アスペクト・機能的不変化詞について）
共生文明学	山内詞保子	水資源に対する国家の管理権限 —Azurix 対アルゼンチン事件の検討を中心に—
共生文明学	三浦結	ミシェル・フーコーにおける主体性の概念について
共生文明学	土本麻紀子	骨董の値はどう決まるのか —京都A店の戦略から—
共生人間学	山本真理子	アメリカ中絶問題への討議倫理的アプローチ
共生文明学	矢野可奈子	テータたちが語るパレスチナのハストリーズ —剥奪・排除・表象に対する挑戦として—

共生文明学	関　大輔	GATT/WTO 体制における地域貿易協定の地位と整合性確保　―政治的機関と司法的機関の関係を中心に―
共生人間学	奥村洋介	可約有理写像の複素力学系
共生人間学	中田浩司	16世紀から18世紀のフランスにおける教育思想と人間形成のイデー
共生人間学	武田宙也	ミシェル・フーコーの思想における〈他なるもの〉のあらわれについて
共生文明学	大城佳子	現代農村における〈カミサマ〉と信者集団の組織過程　―鹿児島県・桜島の事例より―
相関環境学	阿部のぞみ	生殖補助医療と法的親子関係
共生文明学	花岡大幹	「大大阪」形成期の都市美運動
共生人間学	水野恵子	English Language Curricula and Syllabi in Seven Major Japanese Universities（日本の主要七大学におけるカリキュラムとシラバス）
共生人間学	高木夏子	フリーターとニートの社会学的考察
共生人間学	綱井勇吾	A study on the development of word meaning : A psycholinguistic perspective（語彙の意味発達に関する研究　―心理言語学的観点から―）
共生人間学	藤井真樹	他者を主体として受け止める　―「共にそこにある」こととして―
共生文明学	内山正太	家屋と土地を巡る世帯戦略とその限界　～インドヒマラヤ・スピティ地方の事例を通じて～
共生人間学	石田美岐	がん患者が主体性を発揮するための支援　京福滋の乳がん患者会でのアンケート調査に基づいて
共生人間学	笹尾洋介	Assessing Japanese learners' English vocabulary knowledge : an effect of test format on size estimates（日本語学習者の英語語彙知識の評価　―語彙サイズ推定に対するテスト形式の効果―）
共生人間学	石黒雄一	管楽器と身体の交錯　―複合性の系譜学のために
相関環境学	松田健太	Construction of R5 single tropic virus and X4 single tropic virus using dual tropic SHIV-KS661 as a backbone
共生人間学	山城博幸	気づきを伴わない視覚刺激の視覚情報処理過程の fMRI 研究
共生文明学	納屋内高史	古代における動物資源利用の研究　―浜松市伊場遺跡出土の動物依存体を中心に―
共生文明学	天野三恵子	天平十二年東国行幸の再評価　―伊勢国壱志群河口について―
相関環境学	矢部智恒	生理活性有機物の縮合ケイ酸への吸着現象とその構造化学的解釈
共生人間学	窪田裕典	SNS におけるコミュニケーション分析　―CMC 空間での自己と他者―
相関環境学	谷野順英	2－ヒドロキシピリジン－イリジウム 錯体触媒を用いるアルコールの脱水素型酸化反応
相関環境学	吉川夏彦	ハコネサンショウウオ（*Onychodactylus japonicus*）の遺伝的変異
共生文明学	松下桃子	農村女性の生活史的考察　―「家」の生きぬき戦略
共生文明学	木下雄太	諸葛亮の北伐について
共生人間学	竹内みちる	産むことと育てることの切り離しをめぐる家族規範について　―NPO 法人「環の会」の事例より
共生人間学	丸山梨佳	Effects of fatty acids on insulin secretion（脂肪酸のインスリン分泌に及ぼす影響）
共生文明学	小林哲也	「他なるもの」への憧憬と予感　―青年期ベンヤミンの思考の特異性―

共生文明学	吉田　愛	イギリスの日刊エッセイにみる人間をめぐる知
共生文明学	小川妙子	アルベール・カミュにおける不条理とヒューマニズム　―戯曲『カリギュラ』を中心に―
相関環境学	澁谷吉紀	広帯域通信光増幅器用 Er^{3+} イオンドープ $Ce_{1-x}Y_xO_{2-8}$ 固溶体結晶の光物性
共生文明学	木村　純	環境倫理思想の批判的検討
共生人間学	中川奈津子	Reference and Metaphor in Copular Sentences : An Attempt to Describe Metaphor in terms of Extended Mental Space Theory（コピュラ文における指示と比喩：拡大メンタル・スペース理論による比喩記述の試み）
共生人間学	猪狩もえ	Neurotoxic and neuropsychotoxic effects induced by co-administration of MDMA and methamphetamine in rodents.（MDMA とメタンフェタミンの同時投与によるげっ歯類への神経毒性および精神毒性）
共生人間学	小野寺由美	The Structure of Characters' Glances in *Middlemarch*（*Middlemarch* における登場人物の視線の構造）
共生人間学	伊藤慎哉	野球のバント動作における時間的・空間的身体制御
共生人間学	長瀬沙弥香	プレゼンテーションにおける発話音声の特徴と印象評価　―生命科学専攻の日本学生を対象とする ESP―
共生人間学	澤田　淳	認知的基盤に基づく日本語の構文現象の理論的・実証的研究　―授受構文の文法構造と構文構築のダイナミズム―
相関環境学	青木　玄	ミトコンドリア DNA 塩基配列からみたトウホクサンショウウオ（Hynobius lichenatus）の遺伝子的変異
相関環境学	中島千博	Transport processes based on the Boltzmann equation.（ボルツマン方程式に基づく輸送現象）
共生人間学	年岡智見	英語の二重目的語構文に関する認知言語学的研究　―CHARGE/COST イヴェントを中心に―
相関環境学	渡部泰正	レシオ測定用亜鉛蛍光プローブの開発
共生人間学	園　知子	「知的公共圏」の理論的可能性　―京都学派への空間的アプローチに基づいて
共生人間学	尾崎禎亮	高齢者の歩容変化に関する筋骨格モデルを用いたシュミレーション
共生人間学	布施木　誠	音楽家の病跡学的研究　モーリス・ラベルの病理と創造性
共生人間学	青野裕香	Knowledge of English V-N Collocations in Japanese University Students（日本人大学生における英語の動詞と名詞の連語知識）
相関環境学	飴村尚起	黒球温度のスケール依存性と放射環境
共生人間学	羽鳥隆英	内田吐夢監督作品研究　―映画テクスト分析と言説分析を中心に
共生人間学	若林玲奈	The Effect of Peer Feedback on EFL Writing： with a Focus on Japanese University students（ピアフィードバックがEFLライティングに及ぼす影響：日本の大学生に焦点を当てて）
共生人間学	小林希代江	特異な Asperger 障害の1例における小脳機能に関する神経心理学的検討
共生人間学	馬　嘯	Water-Soluble Mulberry Leaf Extract Rapidly Activates 5' AMP-Activated Protein Kinase in Skeletal Muscle.（水溶性桑葉抽出物による骨格筋 5' AMP-Activated Protein Kinase の急性活性化）
共生文明学	杉原絢子	平安神宮成立期の建築意匠について
相関環境学	栗本篤臣	葉緑体 DNA とマイクロサテライト解析に基づくイワウチワ（Shurtia unitlora イワウメ科）の系統地理
共生人間学	松田直子	猫の忠義

共生人間学	奥田芳和	命名の動機づけに関する認知言語学的考察　―商品名の分析を中心に―
共生人間学	音上修子	ホラージャンルにおける19世紀的背景とトポスの変容　―ワーナー・ブラザーズ蝋人形シリーズを中心に―
共生人間学	高安真理子	英文ライティングにおける「誤り発見能力」と「誤り修正能力」測定法の検討　―レベル分けテスト開発を目指して―
共生文明学	永島　寧	日欧交流の架け橋　英人ウィリアムアダムスがもたらしたもの　－洋式船を中心として
共生人間学	申　英姫	Non-Effectiveness of input Enhancement as Seen in the English Middle Construction（英語中間構文で見た入力増強法の非有効性）
相関環境学	作田祥介	都市の「農」をめぐるステークホルダー間の論理の差異とその架橋
相関環境学	久木原　博	DNA 鎖間架橋応答におけるユビキチン化制御機構
共生文明学	市澤泰峰	平安京の都市構造の歴史的変化　―京都盆地における平安時代遺跡の検討を通して―
相関環境学	河井洋輔	不安定な非中性プラズマにおける乱流・渦運動を介した秩序構造形成過程の実験的研究
共生文明学	小野澤泰子	19世紀における英国人旅行家を通して見たマレー半島の殖民都市の風景と人々　―マラッカ、ペナンの景観を事例に―
共生文明学	小川博之	芸術活動のためのひとつの試論　―ゲーテの芸術観をもとに―
共生人間学	波来谷史代	詩歌における直喩の様相
共生人間学	大植健司	Negative Termによるクエリ拡張
共生文明学	PAKHOMOV OLEG	National and Ethnic: Comparative Study on Japanese Koreans and Russian Koreans young people ethnicity and culture（国家とエスニックグループの相互関係：在日朝鮮人と在ロシア朝鮮人の比較研究、特に若者のエスニシティーと文化を中心に）
相関環境学	山中美幸	日本産＋サミズキ属（マンサク科）の系統と集団の遺伝構造
共生文明学	神本秀爾	「文化を担う人々」の葛藤　―エチオピア、アフリカ国際会議派ラスタファリアンの生業の変化―
相関環境学	増井麻美	光による概日リズム制御：培養細胞を用いた光受容体の解析
相関環境学	菅江清信	フラーレン誘導体によるフェノール性内分泌撹乱物質の光分解機構に関する研究
共生人間学	進矢正宏	歩行中の予測不可能な踏み外しに対する姿勢制御活動
共生人間学	廣瀬智士	運動可能性判断の脳内神経機序
相関環境学	太田陽介	芳香族ジアミジン化合物の DNA 二本鎖切断損傷応答への影響の解析
共生人間学	藤井進也	ドラム奏者の手の機能的左右差に関する研究
共生人間学	池野絢子	芸術と生の狭間で　―「アルテ・ポーヴェラ」の成立をめぐって
共生文明学	福西加代子	呉市大和ミュージアムの人類学的研究　―博物館に関わる人々の意見と活動を中心に―
相関環境学	合田祐子	マレイル酢酸還元酵素のＸ線結晶構造解析
相関環境学	小野耕作	揚力を利用した翼型係留気球の開発
共生人間学	MARIA LUCIA CORREA	三島由紀夫の『金閣寺』について精神分析的読解
共生文明学	中川真太郎	私人の行為の国家への遡及的帰属　―問題点と今後の展望―

共生人間学	高嶋由布子	知覚動詞の認知言語学的研究： 感覚モダリティにおける行動的側面と身体的制約の観点から
相関環境学	古賀啓一	日本のバイカモ亜属における遺伝的構造と保全について
共生人間学	藤林真美	Acute Effects of Sleep Deprivation on Physical and Mental Health（一過性の睡眠不足が身体・精神的健康に及ぼす影響）
共生文明学	阿不都熱西提　阿不都勒提甫	言語選択とアイデンティティの転換
共生文明学	廣藤紀子	中近世における瀬戸内地方の動物遺存体　―漁労を中心に―
共生人間学	雪丸尚美	Incorporation critical thinking into EGAP reading（批判的思考の一般学術目的の英語の読解への組み込み）
共生文明学	山﨑雄史	Garvey movement conjunctional with the local and global contexts.（グローバルな文脈とローカルな文脈の接合点としてのガーヴェー運動）
共生文明学	山内熱人	帰郷移民を生み出し、支える村の人間関係：メキシコ、オアハカ州のサポテコ人村落の事例から
共生人間学	浅野直樹	精神分析の主体概念から見る現代若者の様相　―「フリーター」、「ニート」、「おたく」をめぐって―
共生文明学	西川純司	大正・昭和初期の都市空間におけるガラスの経験
相関環境学	佐藤惇	核小体タンパク nucleolin の H2AX との相互作用と損傷応答における役割
共生人間学	前川直哉	近代日本の学生男色とヘテロセクシズム
共生人間学	周笑英	English collocations from an ESP perspective : a focus on research papers in international chemistry journals（特定目的英語の視点からの英語コロケーション研究　―化学分野の学術論文に焦点を当てて―）
共生人間学	寺尾佳子	18世紀末フランスにおけるメスメリスム受容の土壌　―不可視なものの物質性をめぐって
相関環境学	久田旭彦	圧力誘起超伝導体 β-Ago. 33V2O5 の 51V NMR からみた局所的電子状態
共生文明学	菅原健志	アーサー・バルフォアと国際連盟
共生人間学	伊藤恒雄	現代日本でがん治療に携わる鍼灸師の実践と意識　―鍼灸師への聞き取り調査と質的研究を用いて―
共生人間学	上田祥行	視覚と触覚による新奇な 3 次元物体の学習における視点の効果
共生人間学	田中齊太郎	Relationship with Rating of Perceived Exertion and Biosignal　～Toward Development of Practicable Exercise Prescription～（自覚的運動強度と生体信号との関係　～やりとげられる運動療法を目指して～）
相関環境学	加納聖士	量子フラストレートかごめ格子磁性体 Cu-titmb の異常磁性の研究
相関環境学	田邉祐介	含窒素複素環カルベン配位子を有する Cp*Ir の分子内炭素－水素結合活性化に関する研究
共生人間学	小田桐匡	系列動作障害に対するアイカメラを用いた視線分析
相関環境学	佐藤祐介	ガラス－ポリマー間の摩擦の測定と接触表面の観察
共生文明学	池田篤史	芸能としての音楽実践　―ニュージーランド、マオリ、ローカルなカパハカを事例に―
相関環境学	出﨑美佳	クマリン骨格を有するレシオ型蛍光プローブの研究
共生文明学	大原俊一郎	ヴィルヘルム＝シュティーバーと情報史研究　―19世紀中葉のドイツ情報史―
共生文明学	LUBNA OMAR	Analysis of faunal remains recovered from the Leuant during the Early Neolithic（新石器時代のレバントから発見された動物の骨の遺物に対する分析）

共生人間学	丸山　明	精神療法と意志　～オットー・ランクが問う、もう一つの力～
相関環境学	折笠有基	In-Zn 系酸化物のスパッタ蒸着と熱電気特性
共生人間学	北浦寛之	加藤泰研究　―ワイドスクリーンにおける奥行きを利用した映画の演出について―
共生文明学	武　海艦	福沢諭吉における文明の受容と創成　―『文明論之概略』を中心に
共生文明学	芳野　舞	オーブリー・ビアズリー作『ヴィーナスとタンホイザーの物語』に見られる対立的概念の混交・価値観の転倒
相関環境学	半田千尋	東南アジア熱帯雨林におけるアリー半翅目－植物相互作用系　～森林ギャップの効果～
共生文明学	河西瑛里子	スピリチュアルな日常を生きる　―英国グラストンベリーのヒーリング実践と女神運動を事例に―
相関環境学	宗　陽香	紅色光合成細菌の色素タンパク質複合体中におけるカロテノイドの機能とその基礎となる分光特性の解析
共生人間学	張　雲婷	過疎地域活性化運動による住民および地域社会の変化　―鳥取県智頭町の「ゼロ分のイチ村越し運動」の事例
共生人間学	岩野麻衣	ジャズの <場> における相互行為
共生文明学	加茂泰輔	ジョン・ローの批判的再検討　～経済学の崩壊と再生に向かって～
共生人間学	尾崎真佐子	自己音声の聴覚及び視覚情報の提示が音韻習得に及ぼす効果　―目標音との差異の意識化（consciousness-raising）
共生文明学	ANDREW CLIFFORD ELLIOTT	Travel and Conquest in Isabella Bird's *Unbeaten Tracks in Japan*.（イザベラ・バードの『日本奥地紀行』に見る「旅」と「征服」をめぐって）
共生人間学	尾垣和幸	総合保育はいかにあるべきか　―「相手を“わかる”」という視点からの一考察―
相関環境学	三井仁美	ケイ酸塩鉱物と層状複水酸化物に対する有機分子吸着現象の構造化学的体系化
共生人間学	佐藤真理恵	仮面の彼岸　―古代ギリシアにおけるプロソポンの表象をめぐって
相関環境学	奥住　聡	遷音速流を用いた疑似ブラックホールに関する研究（ブラックホール物理の実証実験へ向けて）
共生文明学	彭　暁如	台湾における「客家戯」の野外上演　―「松興」と「貴鳳」両劇団を対象として
相関環境学	尾野　光	近代化遺産の保存及び再利用・再活用に向けての制度の構想　―北海道旭川市に残る近代建築調査を事例に―
共生文明学	宮﨑三世	太宰治「道化の華」論　―本文回帰の重要性. 道化は誰か？
相関環境学	池田　啓	日本列島高山帯におけるミヤマキンバイ（バラ科）の系統地理
共生文明学	宮崎瑞季	鎌倉国宝館・十二神将立像の年輪年代法的研究　―年輪年代法の日本美術史における必要性とその展望―
共生人間学	吉田大志	身体の形成　―身体化についての試論―
共生人間学	田﨑亜弥	アトム・エゴヤンにおける記憶と視線の問題　―テープ・家族・民族
相関環境学	松本大吾	オオバギ *Macaranga*（トウダイグサ科）を餌資源として利用する植食性昆虫の種構成に関する研究
共生文明学	川合秀幸	議会制民主主義下における情報機関の民主的統制
相関環境学	河嶋良明	環状配位子を有するニッケル錯体の電子状態と酸化還元挙動に関する研究

平成19年度

共生文明学	安藤　文	ヨーゼフ・ロートにおける「書類」と「コスモポリタン」
共生文明学	藤江　真佐子	The Sublime in William Wordsworth's *The Prelude*（1805）（ウィリアム・ワーズワース『序曲』1805年版における崇高）
共生人間学	村田　稔彦	井筒俊彦と竹内敏晴　―対話のドラマを索めて―
共生文明学	橋本　博人	都市と農村の間で　―大地の芸術際サポートスタッフ『こへび隊』の事例より―
共生文明学	浦　奈穂美	イースター島モアイ像の保存科学的研究
共生文明学	山野　香織	プロテスタント系キリスト教化に伴う飲酒空間の変容　―エチオピア西南部コンタ特別群の事例から―
共生文明学	斎藤　知里	The Violation of Public and Private Spheres in Elizabeth Gaskell's *North and South*（エリザベス・ギャスケルの『北と南』における公的領域と私的領域の侵犯
共生人間学	梅本　和弘	アメリカ映画史の脱臼　―新たな「初期映画」研究の地平
共生人間学	松原　誉史	離散ウェーブレット変換に基づくデジタルシグネチャーの新手法
共生人間学	前川　文	バロックにおけるローマ都市の変容：教皇による街路網計画を中心に
共生文明学	小川　仁	シピオーネ・アマーティの宗教政治思想　『日本奥州国記』（1615）と手稿をてがかりに
共生文明学	佐々木　思郎	知識人の社会参加の可能性　サルトル理解を通して
共生人間学	風間　明日香	退行療法が探る潜在意識　―事例収集による再検討―
共生文明学	賀　金	唐代知識人の「遊侠」のイメージ　―唐代伝奇小説を中心に
共生文明学	崔　善今	京都国際学園における教育の新たな試みと課題
共生人間学	鮫島　輝美	近代医療によって失われた「医師の姿」　―京都・西陣の地域医療の事例を通じて
共生文明学	竹本　遥子	現代トロール漁業における漁師の戦略　―スウェーデン西海岸多島海地域の事例から―
共生人間学	横田　仁	メルロ＝ポンティの時間論　―知覚と反省の関係をめぐって
共生文明学	鈴木　さくら	地中海がはぐくんだもの　―ル・クレジオの自伝的作品を中心に―
共生文明学	李　賢美	在日韓国人2世の国籍維持に見る帰属意識　―金さんのライフ・ヒストリーを中心にして―
共生文明学	川口　朋子	京都における建物強制疎開の実態
共生文明学	今井　久美子	アイルランドの「総力戦」経験　―第一次大戦期アイルランドにおける募兵活動
共生文明学	坂﨑　広志	慢性統合失調症者のグループホームにおける相互行為分析
共生人間学	マスワナ　紗矢子	Towards the Development of an English Writing Course : An ESP Genre Analysis of Research Articles in Medicine, Engineering, and Economics（英語ライティングコース開発に向けて　―医学・工学・経済学分野における研究論文の ESP ジャンル分析―）
共生文明学	市野　陽子	能楽における空間表現　―道行、名所教えを中心に―
共生文明学	SIGAL　OLENA	「日本とウクライナの民話、伝説から見る自然観・人生観」
相関環境学	三輪　紀子	Ataxia-Telangiectasia 関連 AOA3 細胞における DNA 損傷応答機構の解析
共生文明学	澤田　裕子	小野宮第の継承について

共生文明学	是枝邦洋	なぜサルを殺すのか　―外来ザル駆除事業にみる保全生態学の自然観と当事者の実践―
共生文明学	束　洪芬	日本所蔵「珍珠塔」に関する考察
共生人間学	津田麻梨子	A study of some factors associated with insulin secretion　～clock genes and GLP-1 secretion～（インスリン分泌に関する因子の研究　～時計遺伝子・GLP-1分泌～）
共生文明学	松本仁美	近世初期京都の生活行動空間　―『隔蓂記』の分析を中心として―
共生文明学	廖　莉莉	「調和論」における儒学観　―杜亜泉の試み
共生人間学	土屋真司	投球動作が投球分布に与える影響　～制球力のヒミツを探る～
相関環境学	早瀬善彦	レオ・シュトラウスにおける政治的なものの位置
共生人間学	新家　梓	『論理哲学論考』における哲学と言語の限界
共生文明学	SUGANDHI AISHWARYA SURESH	THE ODCOMBIAN LEG STRETCHER THOMAS CORYATE AND HIS DEPICTION OF INDIA（オドコンブのトーマス・コリヤットと彼のインドについての記述）
相関環境学	岡本優紀	アルキル化 DNA 損傷修復におけるナイミーヘン症候群タンパク NBS1 の役割
共生文明学	李　涓	中国におけるオンラインナショナリズムに関する分析　―「トヨタ自動車広告」事件をめぐる対日言説を中心に
共生人間学	友澤宏之	北野武映画と「距離」の問題
共生人間学	土屋智行	慣用的意味と形式的制約に関する認知言語学的考察　―身体部位詞「顔」「目」「手」を含む動詞慣用句を中心に―
相関環境学	宮口雄人	DNA修復タンパク質 MRE11 の阻害法とその効果
共生人間学	中野研一郎	日本語における認知モードの共時的・通時的階層性の分析　―認知言語類型論の基礎原理―
共生人間学	前田絢子	生き残る看護 “婦”（ナース）イメージ・・・現場との落差と揺らぐ評価　～20代を中心とした看護師及び一般人への聞きとり調査から～
共生文明学	津山孔明	福田恆存における「文化」の意味　―「政治」と「文学」の関係を考える手がかりとして―
共生人間学	小林かおり	ミヒャエル・エンデ著『はてしない物語』に見るファンタジーの重要性と危うさ
共生文明学	橋本周子	フランス革命直後の「美食」について　―グリモ・ド・ラ・レニエール『食通年鑑』を中心に
相関環境学	若松俊彦	環状ニッケル錯体を用いた新規タンパク質蛍光ラベル化剤の開発
相関環境学	青木潤珠	希土類 3b 遷移金属ペロブスカイト類似構造を有する固体酸化物型燃料電池カソード材料の結晶構造解析と酸素還元反応
共生人間学	久山雄甫	マルシリオ・フィチーノのスピリトゥス論　―<気とプネウマ>研究序説―
共生人間学	高橋顕也	情報社会の包括的分析枠組みへの理論社会学的アプローチ　―「システム-アーキテクチャ分析」の構築へ向けて―
相関環境学	近藤美麻	5f 電子系三角格子反強磁性体 UNi4B の核磁気共鳴
相関環境学	小川　藍	マレイル酢酸還元酵素のX線構造生物学的研究
相関環境学	川添和英	東アジア島嶼部におけるクマバチ属とクマバチコナダニ属の相互作用及び共種分化
共生人間学	小川典子	日本語指示詞の認知言語学的研究　―ソ系指示詞の脱文脈化・間主観化を中心に―

共生人間学	石川りえ	精神分析理論によるシュレーバー症例の再検討あるいは病因論としての「内的崩壊と世界の再構築」モデル
共生人間学	福島　豪	フリーターになるという選択
共生人間学	増田要平	重六角錘フラクタルの立方体近似の数独的色付けの数え上げ
相関環境学	三井麻未	放射線損傷応答におけるヒストン H2AX の特異的修飾の役割
共生人間学	米田繭子	英語の三基本形に働く類推の作用について　―弱変化に移行した英語強変化動詞を中心に―
共生人間学	熊澤伸悟	R内に2つの臨界点を持つ実係数3次多項式の Julia 集合とその Hausdorff 次元
相関環境学	初村裕英	ナイミーヘン症候群患者細胞とその原因遺伝子 Nbsl 欠損マウス細胞の解析
共生文明学	田中佑一	「地域言語・少数者言語のための欧州憲章」の意義と限界　―「地理的区画」を持つ言語と持たない言語の区別を中心に―
共生人間学	田中暁生	メタ記憶に関与する神経機構の解明に向けた行動課題の検討
共生文明学	森　友紀	アパルトヘイト撤廃後の南アフリカ社会における葛藤と変化
共生人間学	和崎光太郎	明治後期における〈修養〉論の史的研究
共生人間学	ANDREAU JORGE MARIO	Top-down signal From Lateral Prefrontal Cortex in Memory Retrieval : Behavioral and Neural Study（記憶検索における前頭連合野外側部からのトップダウン信号：行動科学および神経科学的研究）
共生人間学	牧　亜紗子	日本人耐糖能正常群におけるインスリン感受性に関する研究
共生文明学	西田あすか	現代アメリカにおけるインテンショナル・コミュニティー　―60年代以降のコミュニティー・ムーブメントを中心に―
共生人間学	車　愛順	情報ネットワーク社会における著作権問題
共生文明学	大久保友博	Translation Studies : A.F.Tytler and His Inflexible Principles of Translation（翻訳研究： A. F. タイトラーと『翻訳原論』の理論の頑迷性）
相関環境学	三井裕樹	Phylogeography of the genus Ainsliaea（Asteraceae）in the Sino-Japanese region and adaptation to a riparian environment, with special reference to A. faurieana on Yakushima Island（日華植物区系に分布するモミジハグマ属（キク科）の系統地理と屋久島に生育するホソバハグマの河川環境への適応）
共生人間学	渡邉大祐	Expression of ABCA2 increases extracellular and cellular amyloid beta peptide levels accompanied by an enhanced stability of amyloid beta precursor protein in HEK293 cells.（HEK293 細胞における ABCA2 の発現は、アミロイドベータ前駆体タンパク質の安定性促進を伴って細胞内外のアミロイドベータペプチドレベルを上昇させる）
相関環境学	原田充啓	牛放牧における外部経済効果の評価　～仮想トラベルコスト法の応用による接近～
共生文明学	松岡知華	「源氏物語葵絵巻」の研究
相関環境学	島野英治	末端に p-ハロゲン置換フェノキシ基を有するアンモニウムイオンの優先富化現象
相関環境学	川越頌子	アンモニウム塩を窒素源とするアルコールからの環境調和型アミン合成法に関する研究
共生文明学	太田由佳	本草家松岡恕庵の著作活動
共生人間学	国本　亮	micro RNA による制御遺伝子ネットワークの推定
共生文明学	相良素子	戦後日本における美術館空間：美術館運営と建築家
共生人間学	姫野　諒	1910年から現代までのフランケンシュタイン映画作品に関する歴史的考察

共生人間学	MARIYA ABLIZ	ウイグル語マルチメディア CALL 教材のための予備調査及びその実装
相関環境学	門垣裕之	溶存ケイ酸の縮合反応に関する研究
共生人間学	唐池浩平	Effect of Intraoperative Glucose Infusion on Postoperative Insulin Sensitivity in Rat Skeletal Muscle（術中グルコース投与が術後インスリン感受性に及ぼす影響 ―ラット骨格筋における検討）
共生人間学	松本幸治	Effects of Postprandial Electrical Muscle Stimulation on Metabolism in Obese People（食後の筋電気刺激が肥満の人々の代謝に及す影響）
共生人間学	西原多賀子	Sydney Carton as a Romantic Hero in *A Tale of Two Cities*（『二都物語』におけるロマンチック・ヒーローとしてのシドニー・カートン）
相関環境学	倉石典広	シロアゴガエルとその近縁種に関する系統分類学的研究
共生人間学	山内朋樹	「ベルクソン美学における共感の構造」
共生文明学	有村芳恵	南北朝内乱における和平交渉　～特に北朝・南朝・幕府間を中心に～
共生人間学	小黒雅貴	画像の特徴量とキーワードに基づく類似画像検索システム
相関環境学	鈴木有希子	ミニマル・アートにおける鑑賞者と芸術作品の位置　―メルロ＝ポンティの空間論を中心に―
共生文明学	岡崎伊紗	ヴァルター・ベンヤミンにおける収集家について
共生人間学	梁　貞模	日本の大学における初修外国語としての韓国語教育　―カリキュラム開発研究の観点から―
相関環境学	稲垣智史	関西圏における、複数空港の運用制度設計　―「政策の速度」からの考察―
共生人間学	清水瑶平	High-fat diet impairs contraction-stimulated glucose transport in isolated rat skeletal muscle（高脂肪食摂取による収縮誘発性骨格筋糖輸送の阻害作用 ―ラット単離筋における検討）
相関環境学	大津嘉高	シアノバクテリアにおけるふたつの光化学系へのエネルギー分配に関する分光学的解析
相関環境学	秋月康秀	オゾン酸化による $La_2CuO_{4+\delta}$ の合成とキャラクタリゼーション
相関環境学	姫野　愛	HIV-1 抗原含有成分解性ナノ粒子のアカゲザルにおける免疫誘導能および SHIV 攻撃接種に対する感染防御能の評価
共生人間学	駒田安紀	アトピー性皮膚炎患者の寛解過程における病気観　―教育入院患者の語りより―
共生文明学	阿部美香	浮世絵にみる江戸の人々の風景観　～「名所江戸百景」を用いた一考察～
共生人間学	塩見香保里	近代日本における女性の自己学習機会　―女性向け講義録の世界―
共生人間学	大橋良浩	幻肢と病態失認への鏡の影響　～障害への関心度を通して～
相関環境学	奥山慶子	アイソタクチックポリプロピレン溶液のゲル化と結晶化
共生文明学	藤原伸広	京都市堀川整備事業における都市水辺空間の再構成について
相関環境学	春木秀仁	膜タンパク質の選択的蛍光ラベル化を指向した二官能基性ローダミン分子の開発
相関環境学	平塚絵美	フラーレンの光増感作用を利用したフェノール性内分泌撹乱物質の可視光分解に関する研究
共生人間学	松本亜希子	Effects of Voluntary Running Exercise under Low- and High- oxygen Environment on Skeletal Muscle in Rats（異なる酸素濃度環境下での自発的走行運動によるラットの骨格筋への影響）
共生文明学	戸丸優作	江戸後期におけるオランダ語地理書翻訳の研究　―P.J. プリンセン『地理学実習』を中心に―

共生人間学	新田　篤	明治・大正期の日本文学におけるフロイト受容　―芥川龍之介と内田百閒―
相関環境学	平井智昭	固体高分子形燃料電池カソードにおける三相界面のモデル化と電極触媒の耐久性および理論的解析
共生文明学	李　洪章	在日朝鮮人＝日本人間「ダブル」のアイデンティティ・ポリティクス　～「戦略」としてのハイブリディティ～
相関環境学	馬場陽子	有機無機複合吸着剤による生活関連化学物質の吸着特性
共生文明学	塚本明日香	宋代の住宅
共生文明学	銭廣承平	ベルクソンの生命観の現代的意義　―『創造的進化』を糸口に―
共生文明学	中谷和人	障害をもつ人びとの「芸術 / アート」はいかに語りうるのか　―施設における創作・活動の現場から
相関環境学	吉田博明	In-situ XAFS を用いた Pt / C 触媒の電子・局所構造解析による粒子サイズ効果および劣化機構の解明
相関環境学	村上　岳	希土類添加蛍石固溶体析出透明結晶化ガラスの作製と光機能発現
相関環境学	平野祐介	『倫理学と価値論講義』における中期フッサールの価値論についての考察
共生文明学	石原三輪子	『寒山拾得』論　―鷗外・芥川・井伏　3人の作品から―
相関環境学	松木崇司	カスミサンショウウオ（Hynobius nebulosus）の生活史に関する研究
共生人間学	勝原洋二	バスケットボールのドリブル動作における運動制御
相関環境学	大久保忠浩	The morphological and ecological characteristics of larvae of Arhopala lycaehids on Macaranga trees in Borneo（ボルネオ島におけるオオバギ属植物を奇主とするArhopala属シジミチョウ幼虫の形態的、生態的特徴）
共生人間学	堀　晋也	大学におけるフランス語教育への自己決定理論の応用可能性　―内発的動機づけと成績との関連性―
共生文明学	麻生修平	Oscar Wilde's *The Picture of Dorian Gray* and the Victorian Morality.（『ドリアン・グレイの肖像』とヴィクトリア朝の道徳）
共生文明学	趙　芙蓉	「ほんもの」と「にせもの」という言説の間で生きるシャマン　―中国内モンゴルのホルチン地域の事例より
相関環境学	鍛治稚明	凝着説から見たガラス・ポリマー間の摩擦力と接触面積
相関環境学	石川美恵子	Establishment of an adherent cell line highly sensitive to feline immunodeficiency virus（FIV）: development of a new assay system to quantitate FIV（ネコ免疫不全ウイルス（FIV）に高感受性の付着系細胞の樹立　―新規ウイルス感染価定量法の開発－）
相関環境学	櫻井一樹	断層近傍の岩石磁気学的情報の変化　―新潟県南部六日町断層を例に―
相関環境学	時田　智	アザカリックス[5]アレーンの合成、構造、及び気体吸蔵に関する研究
共生人間学	長谷川　聡	EFFECT OF ELECTRICAL MUSCLE STIMULATION FOR PREVENTION OF MUSCLE ATROPHY IN PATIENTS WITH KNEE CRUCIATE LIGAMENT RECONSTRUCTION AT EARLY STAGE（膝十字靭帯再建術後症例に対する骨格筋電気刺激による術後早期の筋萎縮予防効果）
共生人間学	大島貴匡	ヴィトゲンシュタインにおけるメタ哲学
共生人間学	川上大介	親子関係における青年期アイデンティティ確立の過程について　～青年との語り合いを通して～
共生人間学	加藤花子	日本語の否定呼応表現の意味・機能的研究　―「誰も」「何も」に関して―
共生文明学	今井宏一	K.Jaspers の政治思想と政治教育観　―H.Arendt との比較を踏まえて―
共生文明学	渡　寛法	国威回復論視点からみた戦後日本のドミニカ移民政策

共生人間学	秋山　励	保存と継承の両立　―世界遺産制度から―
共生文明学	石井和也	都市における消費と居住の現代的展開
相関環境学	喜田泰史	高い水素移動反応活性を有するイリジウム錯体触媒の合成と環境調和型反応における利用
共生文明学	石澤将人	ニーチェの教養理念について
共生文明学	臼田桃子	磯辺行久における環境認識と表現　―芸術と環境計画の狭間で―
相関環境学	竹川慎吾	日本の市民像　―戦後社会の変革主体をめぐって―
相関環境学	斎藤　洋	Cp*イリジウム錯体触媒を用いたアルコール類の脱水素型酸化反応に関する研究
共生人間学	KOBATA TABITHA SATOMI	The Influence of Preschool Education on Character Development : Toward an Understanding of the Functions of Makoto no Hoiku（幼児の人格形成における幼稚園教育の影響　～「まことの保育」が果たせる役割をめぐって～）
相関環境学	嵯峨根多美	リング反強磁性体のスピンダイナミクス
相関環境学	中山洋一	ラセミ体の 2,5-Bis (3-hydroxy-phenyl)-2,5-dimethylpyrrolidine の光学分割
相関環境学	澤村　恵	シダ植物と胞子食昆虫の相互作用系　―胞子形成フェノロジーと胞子食昆虫群集―

平成20年度

相関環境学	高橋健一	TILLING 法を用いたメダカ放射線感受性変異体の同定
共生文明学	谷　美奈	「人間」の「両重性」（duplicité）について　～三木清『パスカルにおける人間の研究』を通して～
共生文明学	薛　末子	ヴラディスラヴィチ使節団とキャフタ条約交渉
共生人間学	張　伶華	日本の対外政策からみた中国語教育の変遷　―中国語教科書にあらわれる文字表象の政治性―
共生文明学	越智香予	売買春と生きる地域社会　―日本の事例から
共生人間学	玉岡　愛	高校家庭科教科書の言説分析と教科再編への試案　―学習者を拘束する権力作用の可視化とそこからの脱却をめざして―
共生人間学	成田　翼	平面分割の数え上げとシューア関数
共生人間学	許斐建志	精神分析における欲動の理論と神経症の原因についての研究
共生人間学	山川　仁	バークリにおける神の存在と実在物
共生文明学	田多井俊喜	「性同一性障害」として語られた主観性と生活世界の社会学
共生文明学	白神小鈴	脱シオニズムへの意識形成　～イスラエルの NGO. Zochrot スタッフのライフストーリーから～
共生文明学	黄　玉芬	中国古典演劇における「聟女」物語の展開についての一考察　―呂蒙正物語をめぐって―
共生文明学	武田龍樹	俗人篤信家の仏教実践とその社会関係　―現代カンボジア東部村落部を事例に―
共生文明学	小田直史	ベンヤミンが捉えたアレゴリカー・ボードレール　―ベンヤミンのバロック論を踏まえて
共生人間学	片山　拓	短距離走における左右対称性　―キネマティクスによる検討―

共生人間学	宮崎 真由子	Learner Motivation for EFL Writing based on Eccles's Model of Expectancy-value theory：Focusing on Japanese University Students（期待価値理論のEcclesモデルに基づくEFLライティング学習者の動機づけ：日本人大学生に焦点を当てて）
共生文明学	金 晶	日本語、中国語の再帰代名詞について
共生人間学	市川 暢子	The Recovery of Wholeness：A Study of Silko's *Ceremony*（全体性の回復：シルコーの『儀式』について）
共生文明学	劉 守軍	宇都宮徳馬の平和思想の形成　―戦前・戦中における動きを中心に
共生文明学	石原 祥雅	中世ドイツのミンネザング　～ラインマルとヴァルターに関する一考察～
共生文明学	渡辺 貴規子	「近代家族」の表象　―エクトール・マロ『家なき子』『家なき娘』をめぐって―
相関環境学	廣川 祐司	現代における伝統的コモンズの再興　―草津温泉に見るコモンズと市場の融合―
共生文明学	高 潔	中国近代都市のグランド・デザイン　―20世紀前半の上海を中心に
共生文明学	荒巻 史枝	東アジアにおける経典見返絵の研究　―栗棘庵蔵宋版法華経を中心に―
相関環境学	松本 結実	紫外線損傷応答におけるNBS1複合体の機能解析
共生人間学	柳卒 麗子	英語のto目的節の位置における談話機能の違い
共生文明学	高橋 玲央	カール・ポランニーから見た「社会」と「自由」
共生人間学	CALBERT GRAHAM	Self-regulation in French language learning : Exploring the relationships among cognitive-motivational orientations, learner's strategy use and performance in a hybrid CALL environment.（CALL環境におけるフランス語習者の自己制御と成績との関係性について）
共生人間学	岡本 英也	接地中の膝・足関節の屈伸動作と走動作、下肢筋厚、競技パフォーマンスの関係
共生文明学	塚口 淳子	蘭学時代における西洋食文化の受容　―『厚生新編』を中心として―
共生文明学	菱田 弘毅	The Role of the Fools in *As You Like It*（『お気に召すまま』における道化の役割）
共生人間学	山田 浩	Vocabulary learning strategies of Japanese EFL learners：With special reference to word frequency（日本人英語学習者の語彙学習方略　―語彙の出現頻度と関連して－）
相関環境学	池田 知嘉子	Cp*イリジウム錯体を用いた含窒素複素環の可逆的脱水素化　―水素化触媒反応系の開発
共生人間学	太田 ふみ野	前置詞の非空間的意味の動機づけに関する認知言語学的考察　―鉛直性を表す前置詞の *over* と *under* の比較を中心に―
相関環境学	沖 成昭	有機ラジカルイオン液晶の合成と物性
共生人間学	都留 恵美里	ブラジル性と〈食人〉の思想　―タルシラ・ド・アマラルの絵画作品とオズワルド・ヂ・アンドラーヂの『食人宣言』から―
共生文明学	松田 景介	南蛮・紅毛膏薬書の研究　―富士川文庫本を中心に－
共生人間学	寺崎 知之	時間・空間表現の認知言語学的考察　―両義的把握モデルに基く語彙の分析―
相関環境学	寺本 智草	粘土鉱物に対するアミノ酸類の吸着特性とその構造化学的考察
共生文明学	金 仙花	近代的生命観の誕生とナショナリズムの展開
共生人間学	密井 浩	Support Vector MachineによるBlogのフィルタリング： 超平面からの距離を用いた訓練データの選択

共生人間学	栗原俊秀	娼婦の笑いから考えるルネサンスの笑い　―ピエトロ・アレティーノ　Sei giornate をめぐって―
共生人間学	堀内　愛	変奏するセルフ・ポートレイト　―写真における自己表象を中心に
共生文明学	坂井礼文	主体の終焉論に関する考察　―フクヤマ、コジェーヴ、フーコー―
共生人間学	村田直史	電子文字コミュニケーションにおける第三項に関する研究
相関環境学	西浦聖太郎	白色固体光源用希土類含有セラミックス蛍光体材料の作製と光機能発現
共生人間学	星　伸博	ホワイトヘッドと形而上学批判
共生人間学	赤松裕訓	Effect of low-frequency electrical stimulation on brain-derived neurotrophic factor（低周波電気刺激が脳由来神経栄養因子に与える影響）
相関環境学	竹中　誠	氷中で進行する縮合反応とその観測法の研究
共生文明学	VERDE MIGUELANGEL	ARE ULTRANATIONALIST STATES TOTALITARIAN? THE PERVERSION OF DEMOCRACY AND NATION-BUILDING（超国家主義は全体主義なのか　―民主主義と国家形成の曲解）
共生文明学	SHASHNINA OLGA	TRANSFORMING LOOKS AND IDENTITY : ROLE OF COSMETIC SURGERY IN CONTEMPORARY JAPANESE SOCIETY.（容姿とアイデンティティーの変容：現代日本社会における美容整形の果す役割）
共生人間学	東田大志	セリー化するパズル・非セリー化するパズル　―アイオーンとクロノスの間に
共生文明学	鹿島真人	シュトラウスにおける理性と啓示
共生人間学	相良孝徳	フロイト・精神分析理論の再構築　―我われはいかにして対象を愛するのか
相関環境学	松田善行	放射線損傷応答機構における MRE11 / RAD50 / NBS 1 複合体の役割
共生文明学	大竹伸平	国際刑事裁判所（ICC）への付託形式の変容とその意義　―紛争発生地国による自己付託の分析を通して―
相関環境学	立花圭一朗	固体高分子形燃料電池における電解質膜劣化機構の解明
相関環境学	堀池麻里子	サルエイズモデルにおける経口投与による多剤併用療法の確立
相関環境学	伊森洋一郎	機能性ピリジン系配位子を有するCp*イリジウム錯体の合成とアルコールの触媒的脱水素型酸化反応
相関環境学	小松原充夫	Cp*イリジウム触媒を用いるN-アルキル化反応を利用したアミド類及びポリアミン類の合成
相関環境学	須藤正彬	コナラ林における葉上ダニ群集の時空間動態
共生人間学	李　裕美	トランス＝シネマ： グローバル時代における映画と観客性の変化
相関環境学	岸本尚也	アルミニウム－空気二次電池用負極のイオン液体中での充放電挙動
共生人間学	山田あさ子	学校における自治に関する考察　―規則と討議を中心に―
共生人間学	GEORGIOU GEORGIOS	Teaching English as a foreign Language（TEFL）in Japan.　―A contrastive study between Greece and Japan―（日本における外国語としての英語教育（TEFL）　―ギリシャと日本の比較研究―）
共生人間学	今田容康	「ツール」としての「民主的な集団」　―日教組における生活指導観の変遷からの一考察―
相関環境学	伊吉祥平	Development of novel fluorescent sensors for monitoring intracellular behavior of heavy metal ions（各種金属の細胞内挙動を可視化する新規蛍光センサーの開発）

共生人間学	車　畢玉	日本語母語話者の中国語発音問題点
共生人間学	井岡瑞日	19世紀末フランスにおける「家族教育」像　―週刊誌 *La Famille* が描く中間階層家族を中心として―
共生文明学	大澤耕史	ユダヤ教における二人の魔術師　―その伝承と背景―
共生文明学	吉田亞矢	W.H.Auden's Vision of the Sea： A Study of Visual Poetry（W.H .オーデンの幻視(げんし)た海：視覚詩の一研究）
共生文明学	四方美紗希	『多情多恨』の可能性　―結末の方法―
共生文明学	梅本響子	「共和国」の問題としてのFemale Genital Cutting　―フランスにおける規制・予防・治療から―
相関環境学	村上直彰	ピリドネート配位子を有するCp*イリジウム錯体触媒を用いたアルコールによるアミンの効率的N-アルキル化反応
共生人間学	田中良昂	相互作用空間における規範の言説　―公共圏論を引いた「空気」論の再構成
相関環境学	柳原明日輝	ナノサイズ制御 TiO_2（B）の構造解析と電極特性評価
相関環境学	田中　学	緑藻アミミドロの多核栄養細胞から遊走子への細胞構造変化と細胞骨格の動態
相関環境学	鈴木克明	新規なキラル有機ラジカル液晶の合性と物性
共生文明学	山岡　瞳	鎌倉時代の公家政権と西園寺家
共生文明学	飯田由幸	W.G.アームストロングの起業活動　―水圧駆動技術の開発を通して
共生人間学	高木　勇	A Cognitive Approach to the Anacoluthia Phenomenon in English ： Semantic and Pragmatic Motivations for "There-Amalgams"（英語の破格構文への認知的アプローチ： Thereアマルガムの意味論的・語用論的動機付け）
共生文明学	根本　豪	聖書テクストの解釈・伝承・否認の一位相　～「ババ・バトラ14b～16b」におけるヨブおよびヨブ記の表象から～
共生人間学	亀田菜央子	Impact of phase between muscle contraction and cardiac systole on blood pressure and stroke volume during electrical muscle stimulation therapy（電気刺激運動療法における筋収縮と心収縮のタイミングが血圧・心拍出量に及ぼす影響）
共生人間学	川本　徹	アンソニー・マン映画の風景表象分析
共生文明学	金　知英	日本語の反事実的条件表現に関する考察
相関環境学	伊奈稔哲	希土類 3d 遷移金属ペロブスカイトの酸素欠陥と電気化学特性の相関関係
相関環境学	根本潤哉	河川における溶存ケイ素の地球化学的動態
共生文明学	小田雄一	料理のなかに〈かくされたもの〉　―ユダヤ教の食事規定カシュルートにかんする一考察
共生人間学	郭　琳玲	A genre analysis of research articles in the field of applied linguistics : With special reference to abstract and introduction sections.（応用言語学分野における学術論文のジャンル分析　―要旨と序論に焦点を当てて―）
共生文明学	許　之威	地域日本語教室に関する言語社会学的考案　―二つの参与観察事例から
共生文明学	蓋　姍姍	遺伝資源の出所開示における不遵守の法的効果　―WIPO における EU 提案を中心に―

共生文明学	冨谷　周	「残された者たち」のトランスナショナリズムと社会変容　―ミクロネシア連邦・ポーンペイ島の事例より―
共生人間学	江川達郎	Caffeine acutely activates 5'AMP-activated protein kinase and increases insulin-independent glucose transport in rat skeletal muscles（カフェインによる急性のラット骨格筋 5'AMP-activated protein kinase 活性化とインスリン非依存性糖取り込みの亢進）
共生文明学	谷口浩史	院政期・中世京都周縁部の景観変遷に関する研究　―鴨東地域の遺跡情報を中心に―
共生人間学	富永晶子	ドイツ語母語話者と日本人学習者におけるフット間の韻律的リズム調整
共生文明学	高　悦	神戸華僑のネットワークとアイデンティティに関する研究　―社会組織としての帮派をめぐって―
相関環境学	中村美紀	新型係留気球の空力特性
共生文明学	高尾眞臣	島地黙雷
共生人間学	ARIPOVA KAMOLA	上田万年の国語思想　―西洋言語学に影響を受けた言語学者としての上田万年―
共生人間学	木下　咲	同性愛嫌悪の精神分析的考察　―アメリカのゲイ・バッシング事件を通して―
相関環境学	滿岡直之	急冷アイソタクチックポリプロピレンの熱処理による光透過率の変化
相関環境学	後藤龍太郎	Selective flower abortion by Glochidion acuminatum（Phyllanthaceae）against excessive oviposition by its seed-parasitic pollinator Epicephala moth（Gracillariidae）（種子食性送粉者の過剰産卵を罰するウラジロカンコノキの選択的中絶）
共生文明学	西村木綿	「ユダヤ社会主義」としてのブンド　―リトアニア・ポーランド・ロシアのユダヤ人労働者総同盟「ブンド」における民族理論の発展―
共生人間学	伏見裕子	出産の近代化に関する一考察　―香川県伊吹島を事例として―
共生文明学	松本尚子	中世前期における京都の都市空間　―寺社文書を中心として―
相関環境学	高居邦友	人工多能性幹細胞（iPS 細胞）における放射線DNA損傷応答の解析
相関環境学	松本圭佑	マンガンスピネル型化合物の電子・局所構造と相間イオン移動反応解析
相関環境学	寒河江瑠里	DNA 修復因子 MRN 複合体の中心体維持における機能の解析
共生人間学	玉元孝治	The syntactic derivation of the middle and other constructions by the covert modality heads　（非顕在的なモダリティ主要部による中間構文等の統語的派生）
共生人間学	筒井あづみ	A Study of *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*：from Burlesque to Social Criticism（*A Connecticut Yankee in King Arthur's Court* についての研究：バーレスクから社会批判への移行）
共生人間学	河田　淳	慈悲の境界線：〈慈悲の聖母　Madonna della misericordia〉図像をめぐる一考察
共生人間学	坂野逸紀	シーンの瞬時的カテゴリ認識における上位レベルの優位性に関する研究
相関環境学	上田純平	次世代フォトニクスデバイスとしての希土類イオン添加波長変換材料の創製と光物性評価
相関環境学	松井一祐	アザカリックス[7]アレーンの合成、結晶構造および気体吸蔵に関する研究

共生文明学	渡辺恭彦	廣松渉の実践と連帯
共生文明学	千垣内麻衣	萬葉挽歌における死者のゆく道について
共生文明学	阿部優香	カンボジアにおける伝統染織復興にかかわる人々
共生人間学	西村　敦	ラッセルにおける表示の理論の研究
共生人間学	伊藤喬範	他者との関わりの中でアイデンティティ形成を営むための効果的な配慮のあり方
共生人間学	宮田　薫	現代社会における自然災害の意味と災害救援のあり方
共生人間学	宇津亮太	フェイント刺激のタイミング及び確率が左右選択反応移動動作に及ぼす影響
共生人間学	尾島眞奈美	The Drama Education in England（イギリスにおける演劇教育）
共生文明学	牛　孟洋	日本で学ぶ中国人の自己アイデンティティの再構築
共生文明学	森山貴仁	アメリカの市民社会と個人化　－1960年代のカリフォルニア郊外における草の根保守の台頭と変容－
相関環境学	岩間世界	優先富化現象：新しい多形転移様式とアミノ酸への応用
共生人間学	李　羽喆	中国人日本語学習者の漢語学習における自信度と理解度について　―中国の大学生を対象とした調査結果から―
共生人間学	奥井　遼	「開かれた身体」を求めて　―嘉納治五郎と植芝盛平にみる近代身体教育史
共生文明学	土肥杏子	Memory and Representation： Analysis of Post-War Hiroshima　（記憶と表象　―戦後ヒロシマの分析―）
共生人間学	竹林美佳	快を表現するニューロンは前頭連合野に存在するか
共生人間学	備瀬　優	The Syntax of the No-da Construction： Its Biclausal Structure and Derivation as Clefting　（「のだ」構文の統語論： その複文構造と分裂文としての派生）
共生人間学	名田　元	超現実数上の計算可能性について　―加法に関する考察－
共生人間学	張　凱彦	小説の必要　―〈川端康成の小説〉というコンセプトからの発見
共生文明学	嵇　礼頴	魏晋南北朝における薄葬風習に関する一考察　―正史の記述を中心として
共生人間学	田中亜以子	快楽の政治学　―夫婦を単位とする性規範がもたらしたこと
共生人間学	前田隆介	物体をベースとした視覚表象の更新に無意識刺激が与える影響
相関環境学	野田明日香	Long-term isolation of the coastal plant Calystegia soldanella（Convolvulaceae）at ancient Lake Biwa（古代湖琵琶湖に生育する海浜植物ハマヒルガオの長期的隔離）

平成21年度

共生人間学	松山あゆみ	フロイトとメランコリー　―愛と憎しみのアンビヴァレンツ―
共生文明学	望月直樹	入港国監督（PSC）による船底塗料の規制　―2001年の船舶の有害な防汚方法の規制に関する国際条約（AFS条約）の意義と限界―
共生文明学	宋　玉梅	中国系アメリカ人の「忠誠」　―Jack Tai.Youngの活動（1910-1949）を事例として―
共生人間学	奥垣内　健	音韻・形態論への認知言語学的アプローチ　―使役表現を中心に

共生文明学	橋本　章	新たな生業選択と日常性の維持　―中国四川省甘孜蔵族自治州理塘県チベット族冬虫夏草採集者の事例から―
共生人間学	佐々木素晴	イギリスにおける学校体罰への態度について： 19世紀中葉以降における公教育を中心に
相関環境学	中村仁美	多様性を保持した新規サル / ヒト免疫不全ウイルス構築法の開発
共生文明学	秋山結衣子	幸田露伴『幽情記』論　―中国の詩話に拠って―
共生人間学	西山幹枝	Task analysis for Japanese EFL textbooks : an application of the Littlejohn model （日本人学習者向け英語教科書のタスク分析　―リトルジョンモデルの応用―）
共生文明学	赤星拓郎	欧州人権条約上における差別的表現規制の変容　―報道の自由に関する事例を中心に―
共生文明学	劉　葯	小川可進の遺著『喫茶辨』に見る煎茶
相関環境学	森　涼子	奈良県吉野川のカビ臭原因シアノバクテリアの同定と解析
共生文明学	東城義則	象徴化された生態資源に関わる人びとのつながりと葛藤　―天然記念物「奈良のシカ」をめぐる「保護」の実践・運動から
共生人間学	櫻井　拓	『アンチ・オイディプス』における機械と欲望　―フェリックス・ガタリの思想から
共生人間学	高尾知憲	旧村単位の住民自治システム構築運動： 智頭町山形地区の事例
共生人間学	大村昂太郎	ハイデガーにおける方法としての哲学　―存在の問いを問う者と『存在と時間』―
共生人間学	沖川達哉	The effect of citrulline on QT interval（シトルリンが QT 間隔に及ぼす効果に関する研究）
共生人間学	米倉　深	電子情報化する怪物　～思想としてのサイボーグ技術～
共生文明学	古阪　馨	地域文化としての能　―佐渡島と〈中央〉―
共生人間学	奥野元子	ストレス関連疾患に対する「瞑想」の有効性について
共生人間学	津田洋子	フランス語の voila 構文と ilya 構文　―現象文の談話機能―
共生人間学	吉岡綾子	色字共感覚における文字と共感覚色の連合様式の研究
共生文明学	杜　艶華	中国古代における白という字に関する考察
相関環境学	下村智典	均質空間論　―その序論的考察―
共生人間学	曹　ミリ	在日朝鮮人小説の世代論に関する批判的考察　―『1945年夏』『凍える口』『由熙』の解釈共同体を中心に―
共生文明学	後藤圭孝	人工内耳の文化人類学的研究
相関環境学	山田朋彦	Adaptive radiation of gobies in the interstitial habitats of gravel beaches accompanied by body elongation and excessive vertebral segmentation（体の伸長と脊椎骨数の増加を伴う礫間間隙性ミミズハゼ類の適応放散）
共生文明学	朴　眞煥	徴兵拒否運動の人類学的研究　―韓国、「戦争のない世の中」の事例から―
相関環境学	横尾宏治	固体高分子形燃料電池形状規制電極及びその場 X 線吸収分光法を用いたカソード触媒劣化挙動の解明
共生人間学	久保　圭	日本語の否定接頭辞に関する認知言語学的分析

共生文明学	北山聡佳	小学校書写教育における「や」の字形考察
共生文明学	滝井健嗣	The Progress of Souls : A Study of Whitman's *Leaves of Grass*（魂の前進　―ホイットマンの『草の葉』の研究）
共生文明学	百木　漠	近代における「労働」の変容　―アーレントとマルクスの労働思想比較から
相関環境学	堀口将志	就農形態の多様化にみる農業の変容　―新規就農者の動向を中心に―
共生人間学	丁子博司	監視技術による主体の変容についての社会学的考察　―監視批判に向かって―
共生人間学	陳　蕾	視覚探索時の注意の制御スタイルにおける文化の影響
相関環境学	川原諒子	水溶性Cp*イリジウム錯体の合成と環境調和型有機合成反応への応用
共生人間学	櫻場厚浩	サッカーのインサイドキックにおける助走速度がボール速度制御に及ぼす影響
相関環境学	宮田香織	核磁気共鳴法によるヘビーフェルミオン三角格子反強磁性体 UNi_4B の研究
相関環境学	朱　明文	Cp*イリジウム錯体触媒を用いたアンモニウム塩とスルホンアミドのアルコールによる高原子効率的N-アルキル化反応
共生人間学	三神　優	Role of oxygen concentration in adiponectin expression in 3T3-L1 adipocyte（脂肪細胞におけるアディポネクチンに及ぼす酸素濃度の影響）
相関環境学	小野浩平	アザカリックス [5] アレーンの新規合成法、結晶構造、およびSTP条件下での気体吸蔵に関する研究
共生人間学	木林　望	与那国方言の 'ŋa' の機能と中心格標示体系
共生文明学	片畑咲耶	Eliot's Way of Telling in *The Waste Land* ―The Spiral Structure of Repetition and Reinforcement（『荒地』におけるエリオットの語り方　―反復と増強のらせん構造）
共生文明学	西尾理恵	文学作品に見るもみじの描かれ方
共生文明学	Bhatte Pallavi Kamlakar	SILENT ECHOES FROM RAJ TO SWARAJ : TRANSNATIONAL AND DIASPORIC CONTRIBUTIONS TOWARDS THE INDIAN INDEPENDENCE MOVEMENT（静かな山彦：ラージからスワラージへ　―インド独立運動におけるトランスナショナルとディアスポラの役割）
共生人間学	島貫香代子	Quentin, Shreve, and the Sense of Belonging in William Faulkner's *Absalom, Absalom !*（ウィリアム・フォークナーの『アブサロム、アブサロム！』におけるクエンティンとシュリーヴの帰属意識に関する考察）
相関環境学	辰巳健一郎	鉄系高温超伝導体 $LaFeAsO_{1-x}F_x$ の高圧下核磁気共鳴
相関環境学	大坂昌也	イリジウム触媒を活用する可逆的脱水素化 / 水素化反応系の開発
共生人間学	松野泰大	心理物理学的逆相関法を用いた探索非対称性の生起過程の検討
相関環境学	藤井頌子	大分県由布市に分布する陸上表層堆積物の岩石磁気学的特性
共生文明学	山中美潮	Separate from Whom ?　The Anti-Segregation Movement of Creoles of Color in New Orleans in the 1890s（誰から引き離されるのか　1890年代ニューオーリンズにおけるクレオール系黒人の反人種隔離運動）
共生文明学	役重善洋	内村鑑三・矢内原忠雄におけるシオニズムと植民地主義　～近代日本のオリエンタリズムとパレスチナ / イスラエル問題～
相関環境学	佐藤衆一	フラストレート系パイロクロア格子反強磁性体 $Cu_2(OH)_3Cl$ の NMR による研究

共生人間学	馬場貞行	Cross-Correlation Analysis between Fluctuations in Spinal Cord Reflex and Blood Pressure（脊髄反射と血圧変動の相互相関に関する検証）
共生人間学	今泉千春	問いかけとしての道徳　―ジャンケレヴィッチの道徳哲学における人間理解とその要請―
共生文明学	高屋佐保子	ミシェル・トゥルニエにおける日本庭園の表象　―『メテオール（気象）』を中心に―
共生人間学	小石原加奈	フッサールによる心理学主義批判の検討　―エルトマン批判を一例とする―
共生人間学	小原一樹	セルフエージェンシー感が生じる対象の観察経験が運動干渉に及ぼす影響
共生文明学	吉岡亮太	神社と祭に関する歴史地域構造論的研究
共生人間学	谷口真穂	色字共感覚における文字と色の連合の生起過程　～新奇漢字を用いた検討～
共生人間学	劉　瑩	初級日本語学習者の動機づけの変化に関する研究　―中国人大学生を対象とした調査結果から―
共生文明学	上野大樹	デモクラシーの思想伝統における主権論的契機の再検討にむけて　―ルソーとトクヴィルを中心として―
相関環境学	八木俊輔	スメクタイト型ケイ酸塩粘土と層状複水酸化物型粘土に見られる内部層の吸着特性について
共生人間学	宮本俊朗	Passive muscle contractions with electrical stimulation lessen postprandial hyperglycemia in type 2 diabetes（電気刺激による他動的筋収縮が2型糖尿病患者の食後高血糖を軽減する）
共生文明学	堂元禄之	ムラの常識再考　―宮本常一の生活誌にみる〈他性〉と「生き方」
共生人間学	北村麻美	日本の在宅ホスピスにおける現状と課題　―地域医療連携の構築に向けて―
共生文明学	高野吉一	Keats and Nature's Law : His Development of Negative Capability in *Endymion, Hyperion* and 'To Autumn'（キーツと自然の法　－*Endymion, Hyperion*, 'To Autumn' における消極的能力の発展）
共生人間学	高　暁霞	日本人中国語学習者の自律性を育成するために動機づけを高める方法の考察　―期待×価値理論に焦点を当てて
相関環境学	淺岡由佳	広帯域光通信用ビスマスドープガラスの作製と光物性評価
共生人間学	永友文子	Skeletal muscle characteristics of rats with metabolic syndrome.　－Effects of high-fat diet and exercise－　（メタボリックシンドロームラットにおける骨格筋の特性　―高脂肪食と運動の影響―）
相関環境学	横山幸久	動的光散乱法による非晶性高分子の緩和過程の研究
共生人間学	孫　士梅	中国の大学における日本語学習者の動機づけに関する一考察　―自己決定度の学年差を中心にして―
相関環境学	椿　玲未	Diversification of the epifaunal pterioid bivalves caused by colonization to living substrata.（生物基盤への進出によって引き起こされた表在性ウグイスガイ上科二枚貝の多様化）
共生人間学	玉井潤野	Logic and Ethic in Thomas Pynchon's *Vineland*（トマス・ピンチョン作『ヴァインランド』における論理と倫理）
共生人間学	芦塚あおい	意味痴呆症例を中心とした意味記憶の神経心理学的検討

相関環境学	岸本利久	科学リテラシー向上を目的としたアウトリーチ方法の構築　―中学理科入試問題を用いた事例－（Construction of outreach methods to improve scientific literacy　－case study of junior high school entrance examinations on science.）
共生人間学	金　光成	日本語複合動詞に関する認知言語学的考察
共生人間学	原　圭佑	現代における夢語り共同体の可能性　―ベダムニ族の夢語りに関する精神分析学的考察から―
共生人間学	浅田智子	Effects of Macronutrient Composition on Ghrelin and Appetite（食事組成がグレリン及び食欲に与える影響）
共生文明学	畢　亜楠	「随園食単」から見た中国の飲食文化　―儒教文化の影響に関する一考察
共生人間学	杉山さやか	日本語のコンナ類・コウイウ類に関する談話的研究
相関環境学	坂口辰徳	キラル有機常磁性イオン性液晶の合成と物性に関する研究
相関環境学	河野康治	都市防犯研究
共生人間学	中垣良祐	フーコー言説理論期の研究　―『知の考古学』を中心に―
共生人間学	澤井　努	石門心学と「心の習慣」　―宗教現象学的な視座から―
相関環境学	和田好平	シェブレル系二次電池正極材料の作製と分光学的手法による解析
相関環境学	白川喜一	湖岸部における流入水の影響評価と栄養塩元素の動態に関する研究
共生文明学	二條絵実子	「あふみ」、掛詞としての発展
共生人間学	森　彩子	Effects of periodically short- and long-term hypoxia for type 2 diabetes（短期間・長期間における断続的低酸素曝露が2型糖尿病におよぼす影響）
共生文明学	佐々木幸喜	安部公房『箱男』成立考
共生人間学	岸本督司	アドルフ・ロースの建築と思想　―その素材観を中心に―
相関環境学	重　陵加	中心市街地活性化の取り組みのなかで見直される日常性についての考察～滋賀県長浜市中心市街地を事例として～
共生人間学	ADAM TUYEN LE	日本とオーストラリアにおけるニュースソース・記者間関係をめぐる考察　―中川財務相とブログデン自由党党首の事件を通じて―
相関環境学	小林　慧	雷放電と電磁波
共生人間学	山崎　誠	中国広東方言の歴史的考察　―音韻変化を中心に―
共生人間学	山田将功	談話におけるほめに対する返答の分析　―ライトネス理論の立場から―
共生人間学	宮坂淳介	光学式 Motion Capture システムを用いた上肢挙上動作における肩甲帯の三次元動作解析
相関環境学	菊谷大祐	酸化物正極/固体電解質界面の制御による全固体リチウム二次電池の高出力化
共生人間学	杉本真子	「内面への道」としてのヘッセ『シッダールタ』　―敬虔主義に対する抵抗と超越の試み―
相関環境学	橋本一将	湖沼における溶存有機炭素の濃縮捕集法について
共生人間学	小松浩之	「入念さdiligenza」のレトリック　―16世紀後半のイタリアにおける絵画理論と制作―
相関環境学	浦田　翔	電子・局所構造解析に基づくコアシェル化低白金新規触媒の開発

共生人間学	宇仁和人	『ヨーロッパ共通参照枠』における外国語教育の概念の言語間の翻訳移行は可能か　―フランス語版、英語版および日本語訳における評価に関する概念と専門用語の比較対照―
共生人間学	MUNKHJIN ANARA	精神分析の社会論： 社会についてのフロイト思想を巡って
共生人間学	根無一信	ライプニッツにおける実体の存続の二重性　―「協働」概念による解釈の試み―
共生文明学	溝口　瑛	魏晋南北朝時代の官僚処罰制度「除名」について
相関環境学	小林一隆	レゾルシノール水酸化酵素のX線結晶構造解析
相関環境学	李　京恩	韓国の葬礼様式の計量経済分析
共生人間学	菊野雄一郎	課題間相関と遺伝子多型解析を用いた視覚的注意機能の個人差に関する認知遺伝学的研究
共生人間学	木下量平	Relationship between Usual Lifestyle Activity and Thermogenic Sympathetic Response　（日常生活活動と熱産生関連交感神経反応との関係性）
共生文明学	郭　偉	中国の人民代表大会制度　―その選挙制度を中心に
相関環境学	谷川喜彦	琵琶湖，長浜沖の堆積物コア（BIW07-3,4,5）の古地磁気・岩石磁気学的研究
共生文明学	伊藤侑希	魏晋南朝期の禅譲革命における様式とその淵源
共生人間学	穆　迪	中国人日本語学習者の名詞と動詞の共起表現知識　―自由産出課題からのデータに基づいて―
共生文明学	龍　瀟	中国における中産階級の登場とその発展傾向　―フィットネス・クラブ調査を基に
共生人間学	上原信太郎	運動前短時間の体性感覚刺激による運動技能向上と運動学習の促進
共生人間学	亀谷亮輔	動作の経験が認知反応の早さに及ぼす影響
共生人間学	陳　恒義	On Becoming and Being ‘Native’ : L2 Learner’s Belief about Ultimate Attainment and Native Speakership（第二言語学習における最終習得到達点とネイティブ話者に関する学習者ビリーフの考察）
共生人間学	王　勇	中国青少年のインターネット依存　―コミュニケーションの移行から「家族」を考える
共生人間学	小嶋ちひろ	Shakespeare’s dramaturgy in *Julius Caesar*（『ジュリアス・シーザー』におけるシェイクスピアの劇作術）
相関環境学	劉　福全	水圏における主要有機リン化合物としてイノシトールリン酸　―極低濃度リン酸の定量法の開発―
共生人間学	森　明弘	現存在と存在と無　―前期ハイデガーにおける不安と無の分析を手がかりにして―
相関環境学	Amir Hamidy	Phylogenetic and taxonomic relationships of frogs in the genus Leptobrachium　（ウデナガガエル属の系統分類学的関係）
共生文明学	榮　加菜子	アフリカ人権委員会によるクローバック条項の「発展的解釈」　―通報事例の検討を中心として―
相関環境学	鎌田諭紀	数値シミュレーションを用いた魚群のダイナミクスと統計的性質の考察及び観察との比較

相関環境学	中瀬悠太	Life History and Host Utilization Pattern of a Strepsipteran Parasite on the Blissine Bugs Living under Dwarf Bamboo Leaf Sheaths（ササの葉鞘下に生息するナガカメムシの寄生者ナガカメネジレバネの生活史と寄主利用様式）
相関環境学	白川佳徳	蛍光性希土類錯体を用いた亜鉛センサーペプチドの開発
共生人間学	衣笠弥生	アントネッロ・ダ・メッシーナの形成と「リングァ・フランカ」
共生人間学	三澤秀徳	英語形容詞構文の認知言語学的研究
共生文明学	松江大吾	フッサールの近代科学批判　―「態度」の変容とギリシア的合理性―
共生文明学	大久保美紀	規則としての現代アート、その表現をめぐって　―ソフィ・カル芸術のコンセプトとアーカイブ
共生人間学	溝口佑爾	自己言及と継起的言及の循環について　―N. ルーマンにおける自己言及の二重性―
共生文明学	奥村元	第二次世界大戦期ドイツ国防軍情報機関の極東におけるインテリジェンス活動
相関環境学	浅見智子	琵琶湖湖底・極表層堆積物の磁気的特性の研究
相関環境学	旭史悦	フルオレセイン含有環状配位子を利用した新規環境応答型金属錯体の構築
共生文明学	中園涼子	京都市南部三川合流地帯における土地利用と廃棄物処理
共生人間学	加藤靖代	破裂子音の先行音節及び後続母音の差異が有声・無声破裂音の産出に与える影響　―中国語北方方言を母語とする日本語学習者のレベル別比較―
共生人間学	沈孝蓮	鈴木清順監督作品研究
共生文明学	大和槙	先島諸島における先史時代の漁撈活動　―遺跡から出土した魚類遺存体を中心に―
共生文明学	Victor Hugo Ma Villatoro	ラテンアメリカにおけるクリーン開発メカニズム　現在の状況と将来のレジームへ向けての可能性
相関環境学	吉川禄助	Risk analyses about contamination of endogenous retroviruses in live attenuated vaccines for companion animals（伴侶動物用弱毒生ワクチンへの内在性レトロウイルスの混入による危険性の解析）
共生人間学	陳穎	四川大震災被災地におけるコミュニティー復興に関するアクターネットワーク論的考察
共生文明学	永井理恵	縄文時代の動物利用　―佐賀県東名遺跡における骨角器製作を中心に―
共生人間学	中森弘樹	失踪者の家族社会学
相関環境学	田代大志	NMR と NQR による量子スピンかごめ格子反強磁性体 $Rb_2Cu_3SnF_{12}$ の磁性の研究
共生人間学	田内真惟人	ヒト前頭眼野におけるトポグラフィックマップ： fMRI 研究
相関環境学	筒井めぐみ	ナイミーヘン症候群の原因遺伝子産物 NBS1 における進化的保存領域の検索とその機能解析
共生人間学	松下悠人	ローベルト・ムージルにおける虚数　―『特性のない男』第2部35・36章と『愛の完成』―
共生文明学	清水美幸	イギリス17世紀後半－18世紀前半におけるスーパーナチュラル　―道徳とスーパーナチュラル―

平成22年度

共生人間学	清水　巌	中性的表象は特権的たり得るのか　―手塚治虫作品におけるクロスボーダー表現―
共生人間学	相見大輔	H.Arendtにおける「社会的なるもの（social realm）」と「悪の凡庸さ（banality of evil）」の関係について　―「活動（action）」を中心に―
共生文明学	高田奈緒	19世紀オランダ園芸界における日本趣味　―オランダ王立園芸協会（1858～1862）を中心に―
共生文明学	津田祐可子	フランスにおける「日本庭園」の受容　―日仏文化交流に関する一考察―
相関環境学	津高絵美	都市における自然保護と市民活動　―はり半跡地問題の一考察―
共生人間学	孫　海月	「精神作業所」の歴史的変遷と社会復帰の効果に関する考察
共生人間学	高橋暁彦	フランス語音声の聞き取りについて　―聴覚音声学の観点から―
共生人間学	埜　美智子	ゲームとデュシャン　―1920-30年代の非芸術的実践を中心に―
共生人間学	佐藤順平	ロベール・ブレッソン研究　～映画のナラティヴをめぐって～
相関環境学	白江祐介	食料需要と関連環境負荷の経済分析
相関環境学	富永真太郎	ボース・アインシュタイン凝縮体を用いた音のブラックホールモデルによる数値解析
共生人間学	櫻井真理	グリルパルツァーとメデーア神話　―『金羊皮』をめぐって―
共生文明学	小寺　敦	国立アメリカ・インディアン博物館の成立と先住民展示　―先住民の現代と“Survivance”をめぐって―
共生文明学	岩瀬繁信	柳田国男と近代　―「都会熱」と同情
共生文明学	加藤隆史	基地をめぐる「暴力」と対抗する共同性　―沖縄県東村高江における人々の取り組みとネットワークの事例から
共生人間学	利根川由奈	マグリットの引用とその特異性に関する一考察　―シュルレアリスムの制作手法の観点から―
共生人間学	三浦雅子	近代日本における衛生行政と「花柳病」へのまなざし
共生文明学	南　佳葉	ハーレム・ルネサンスにおけるネラ・ラーセン　―『パッシング』分析を中心に―
共生文明学	中村優公	高校歴史教科書の記述における武士政権の成立　―研究動向との比較―
共生人間学	山根美奈	イタリアにおける移民の考察
相関環境学	大畑拓司	Prevalence of koala retrovirus（KoRV）infection in koalas reared in Japanese zoos and biological characterization of KoRV（日本の動物園におけるコアラレトロウイルス（KoRV）感染調査ならびにKoRVの生物学的性状解析）
共生文明学	慈　明子	「新音楽」の敗北　―アドルノにおける作曲主体と社会状況―
共生文明学	長谷川 アリスン 江実	日系アメリカ人若年層におけるハワイ意識と祖国性　―オアフ島の事例より―
共生文明学	金子典生	「平均的アメリカ人」と「アメリカン・ウェー」に関する一考察　―『ミドルタウン』をめぐる言説分析を中心に―
相関環境学	片山裕美子	太陽光エネルギー有効利用を目指したPr添加蛍光体の作製と光物性評価

共生文明学	金　汝卿	祖国とは何か。 ～在日脱北者のオーラルヒストリーからみる祖国／ネイション
共生文明学	蓮尾浩之	人間の「自律」をめぐる批判的考察 ―カントの「愛の義務」による可能性―
相関環境学	田中一将	Production of high dense and spin-polarized atomic gases by 3D lattice cooling and optical pumping （光格子中での偏光勾配冷却および光ポンピングによる高密度・スピン偏極原子気体の生成）
共生文明学	前田侑輝	香川県における有機農業経営の地理学的研究
共生人間学	山下大地	異なる速度における横方向の移動様式と生理学的特性
共生人間学	亀山峻彦	生下時体重と生活習慣病に関する研究
相関環境学	日向亮輔	デングウイルスにおける Single-round 感染系の開発
共生文明学	呉　若■	豊島与志雄「蠱惑」論
共生人間学	孟　書琪	「大陸の花嫁」という人生選択 ―戦時下における女性向けの満洲移民の宣伝に着目して
相関環境学	澤田浩幸	フタバガキ科に含まれるタンニンによる対植食者化学防衛能の種間比較
共生人間学	望月　圭	意思決定に係る前頭連合野神経機構の研究
共生人間学	宅野智子	認知言語学から見た使役・受身の通時的・共時的分析 ―英語の have 構文を中心に―
相関環境学	岸本希実洋	琵琶湖から分離した新規単細胞緑藻の分類学的研究ならびに Geminella 属の分類学的再検討
共生人間学	中岡翔子	グスタフ・マイリンク 初期短編をめぐって
共生文明学	大松義明	ハイデッガー『存在と時間』における他者論についての考察
相関環境学	上吉川泰佑	ビーズを用いた ES 細胞の三次元培養に関する研究
共生人間学	木本幸憲	名詞の可算性・非可算性の諸相 ―認知言語学のアプローチ―
共生人間学	齋藤隼人	逆接続の談話・テクスト的アプローチ ―but, however の事例を中心に
相関環境学	藤田泰久	新規組換え技術による CCR5 指向性 clade C HIV-1 株由来 env 領域を持つ SHIV の作製および生物学的性状の解析
相関環境学	吉田哲也	機能性キレート配位子を有する Cp* イリジウム錯体触媒を用いた第一級アルコールの脱水素的酸化反応
相関環境学	高取惇哉	群集構造の比較による「天狗の麦飯」微生物塊の産地間の差異に関する研究
相関環境学	村田貴拓	フブスグル－バイカル流域における物質の化学動態
共生人間学	花岡　慧	後期中英語における集合的複数の研究 ―*The Canterbury Tales* より ‘al’ / ‘a1le’ を伴う表現を中心に―
共生人間学	熱衣汗古麗　艾合提	Motivational Differences between Monolinguals and Bilinguals in the Context of English as a Foreign Language： A case study in Xinjiang Uyghur Autonomous Region（英語を外国語として学習するコンテクストにおけるモノリンガルとバイリンガルの動機づけの違い： 新疆ウイグル自治区における事例研究）
共生人間学	浅井　健	ステガノグラフィのツールを隠すステガノグラフィの手法

相関環境学	荒井　裕	フラクタル周りの流れ
共生文明学	趙　輝	福沢諭吉の対外観　―脱亜論をめぐって
相関環境学	山元雅信	時間分解イメージングを指向した金属蛍光センサーの開発
相関環境学	増田仙一	地表面付近の鉛直温度分布と熱輸送
共生文明学	金　瑛	記憶の社会学と哲学　―アルヴァックスとベルクソン
共生人間学	崔　美淑	東洋医学における母子関係の見方と精神分析
共生人間学	西　崇文	エドアルド・キオッソーネと近代日本
共生人間学	藤井慶輔	Estimation of prediction mechanism for observers of quick change of direction based on the 3D inverted pendulum model　(3次元倒立振子モデルを用いた方向転換走における観察者の予測メカニズムの推定)
共生人間学	李　琦	Feature-based versus space-based access to internal representations in visual working memory　(視覚性ワーキングメモリの内的表象への特徴又は空間に基づくアクセスの比較)
共生人間学	渡邉洋平	ドゥルーズと思考の問題　―プラトニスムの転倒再考―
共生文明学	米澤隼人	鎌倉時代の内裏造営　―中世国家財政の研究―
共生文明学	松浦哲郎	コミュニティメディアの人類学的考察　―トロントの公営住宅団地の事例から―
共生人間学	Tiwuk Ikhtiari Wahyuningtiyas	日本語条件文の時間関係による文の連結　―接続助詞「ト」を中心にインドネシア語との対照
共生人間学	侯　佳奕	日本における孔子学院から見た中国の対外言語教育政策　―言語普及機関の存在意義への再考
相関環境学	荒木美英	始原的シアノバクテリア *Gloeobacter violaceus* PCC 7421 の形質転換系の開発
相関環境学	上城貴嗣	マグネシウム二次電池正極材料の電気化学特性評価
共生文明学	原　亜由美	「キッチン」再考　―「えり子さん」と「七月七日に」の「母さま」
共生文明学	鈴木祥一郎	正岡子規の「写生」　―建築制作論の形成に向けて
相関環境学	久保田健朗	^{13}C-NMR による有機三角格子反強磁性体 E+Me_3Sb [Pd(dmit)$_2$]$_2$ のスピン液体状態の研究
共生人間学	古川真宏	世紀末ウィーンの芸術と精神医学：分離派と病の表象
共生人間学	井上英子	主観的集中と時間知覚の相関について
共生人間学	金津将庸	fMRI activity in topographic areas of intraparietal sulcus reflects visual short-term memory capacity　(視覚性短期記憶容量を反映した頭頂間溝のトポグラフィック領域の fMRI 応答)
相関環境学	中堤貴之	新規その場観察手法を用いたリチウムイオン二次電池正極／電解質界面構造の解明
相関環境学	小笠原　誠	磁気光学トラップされたルビジウム原子気体の動的圧縮とその諸性質
共生文明学	金　旻貞	木造文化財の彩色調査に対するテラヘルツ波・ミリ波の応用
相関環境学	阪辻和希	ポリスチレンのエンタルピー緩和と記憶効果

相関環境学	菅原可奈子	Phylogeography of *Aesculus turbinata* and *Pterocarya rhoifolia* based on genefic analyses and ecological niche modelling.（遺伝的解析と生態ニッチモデリングに基づくトチノキとサワグルミの系統地理）
共生人間学	酒詰悠太	『存在と時間』における <世界性の分析> が持つ意味についての考察
相関環境学	江頭幸士郎	ミトコンドリアDNAに基づくタゴガエル・ナガレタゴガエルの系統分類学的研究
共生人間学	川上　淳	Impact of High Intesity Interval Exercise on cardio-respiratory function and peripheral oxygen utilization（高強度インターバル運動が呼吸循環機能および末梢酸素利用に及ぼす影響）
相関環境学	今城拓也	ガラスビーズに固定化した〔60〕フラーレンによるフェノール性内分泌撹乱物質の光分解に関する研究
共生人間学	豊川祥隆	エルンスト・マッハにおける「表象」と「要素」についての考察　―要素一元論の解釈をめぐって―
共生人間学	北田優方	Washback Effects of Vocabulary Achievement Tests on Vocabulary Knowledge（語彙到達度テストが語彙知識に与える波及効果に関する研究）
共生文明学	姚　嘉音	神仙道化劇考　―神仙道化劇の形成と『元刊本』を中心としてみた八仙についての再考
共生文明学	光保謙治	災害の記憶と自己像の構築・提示　―東京都三宅村の噴火災害を事例に―
共生文明学	孫　思佳	越劇「女子小生」のジェンダー論的一考察　―「女子小生」の成立を中心として
共生人間学	高須万祐子	格体系の弱化に伴う低地ドイツ語の統語的特徴　―低地ドイツ語の分析的特性―
相関環境学	森　祐子	優先富化現象：エピタキシャル転移を用いた多形転移様式の制御とアミノ酸への応用
共生人間学	城尾恵里奈	Effects of Supplementation Product GFO on Ulcerative Colitis（機能性食品GFO による潰瘍性大腸炎の改善効果）
共生文明学	樋笠逸人	高御座成立論　―古代におけるその思想と構造の変遷過程―
共生文明学	湛　波	都市とサブカルチャー　―「秋葉原」の形成と変容を巡る地域論的研究―
共生人間学	田口かおり	近代イタリアにおける絵画修復の諸問題　―セッコ・スアルドとウリッセ・フォルニの技法書を中心に―
共生人間学	下岡純一郎	The Relationship among Lifestyle, Autonomic Nerve System Activity and Physical Characteristics in University Students（大学生における生活習慣、自律神経活動および体組成の関連性）
相関環境学	日野賢次郎	光異性化を示すビラジカル液晶性化合物の合成と物性
共生人間学	中野雄史	転移作用素のスペクトル構造の解析による確率安定性の研究
共生人間学	植田真由	曖昧になる境界　―河瀬直美における映画の論理
共生人間学	佟　占新	「道徳」の特設経緯　―「教科」と「時間」をめぐって―
共生文明学	安部淳子	大正期新中間層の教育意識　―『主婦之友』の分析を通して―
共生人間学	細越響子	Effects of visual information on listening comprehension : The perspective of listening strategies　（視覚情報が聴解に与える効果に関する研究　―聴解方略の観点から－）

共生文明学	開　信介	第二回世界短編小説コンクールにおけるマッカーシズムおよび翻訳に関する問題
共生人間学	張　又華	日本語アスペクトに関する認知言語学的研究　―補助動詞の分析を中心に―
共生人間学	岡田彩希子	精神分析における欲動の体験と言語活動の構造に関する一考察　―夢・描画・現代美術―
共生文明学	阿久根　晋	17世紀ラオスにおけるイエズス会日本管区の布教
共生人間学	宮嶋健人	Continuous Clustering Coefficients for Weighted and Directed Networks（重み付き有向ネットワーク用の連続性のあるクラスタリング係数）
共生文明学	須藤秀平	ドイツ・ロマン派と破壊の精神　―シュレーゲル、ノヴァーリス、クライスト
共生人間学	黄　啓徳	Chronic effect of electrical muscle stimulation on physical function for elderly people（高齢者に対する継続的な筋電気刺激が身体機能に与える影響）
共生文明学	南　葉菜子	ホフマンスタールの散文作品における言語観について
共生人間学	Gonzalez, Irene	増村保造映画研究：女性表象を中心に
相関環境学	小林一星	本邦河川水質の現況と近過去からの変容
共生人間学	中川祐二	反応持続時間分化強化におけるニホンザルの行動解析
共生人間学	田口慎也	日本語指示詞の時間表現に関する認知言語学的考察
共生文明学	柳田明進	海洋出土鉄製遺物の腐食に及ぼす埋蔵環境の影響
共生文明学	松原　史	繡いの近代　―明治期輸出工芸刺繡の文明交流史的研究―
共生人間学	高橋麻由	学校教育における生命倫理　―「臓器移植」の授業実践
相関環境学	石山　真	アスパラギン酸異性化酵素のX線結晶構造解析
共生人間学	小谷祥代	現代社会における笑顔の機能分析
共生文明学	佃　麻美	中央アンデス高地のアルパカ牧畜における実践と生計戦略
共生文明学	田島吉章	「生身」「御入定」信仰成立論　―弘法大師による高野開創及び生身入定を伝える偽書群と縁起説の生成を巡って
共生文明学	安彦文靖	日本語教育初級教科書の文型分析　―「初級」段階への批判的視点から―
相関環境学	川崎博之	ヒドリドイリジウム錯体の脱水素反応による新規キレート錯体の合成とその触媒機能
相関環境学	小椋裕介	琵琶湖底堆積物（BIW08-Bコア）から得られた90～150kaの磁気特性変動と古地磁気記録
相関環境学	仲宗根咲子	マクロファージにおける霊長類レンチウイルス出芽様式の超微形態学的解析
相関環境学	水川友章	フェノキシメチル基を有する TPA 四座配位子の銅一価および二価錯体の構造と反応性
相関環境学	和田達也	膵島移植のための、X線照射細胞を用いた新規表面修飾法に関する研究
相関環境学	中野達也	鉄系高温超伝導体 $LaFeAsO_{1-x}F_x$ 及びその周辺物質の高圧下を含む核磁気共鳴実験
相関環境学	山中美果	DNA 修復因子 FANCD2 による中心体維持機構の解析

共生人間学	山本真史	到達把持運動における把持運動再組織化に関する研究　―対象物までの距離と運動時間の影響―
共生人間学	金　海仙	グローバル化に伴う「中国朝鮮族アイデンティティ」の再構築　―狭間の文化の同化―
相関環境学	藤澤　有	両親媒性有機ラジカル化合物の合成とその磁性粒子の物性
相関環境学	神田啓司	白金／パラジウムコアシェル触媒の合成法の確立とその電気化学特性
共生文明学	池本健太郎	リモートセンシングデータ分析を利用した上海市の市街地拡大過程の把握
共生人間学	須川まり	京都現代劇映画史　序論
相関環境学	清水加耶	アリ植物オオバギを寄主とする植食性昆虫の食草利用様式
共生人間学	中川萌子	現存在の存在における〈他〉　―主観主義克服の試みとしての前期ハイデガー
共生人間学	荒木真徳	ラクロスの投球動作における上肢および体幹のキネマティクス的研究
共生人間学	鈴木茉莉緒	雑音下の発話におよぼす自己および対話者からのフィードバックの影響に関する研究
相関環境学	阿部瑞紀	還元型フルオレセイン骨格を基盤とする生体金属蛍光プローブの開発
相関環境学	山下和也	交叉型光双極子トラップを用いた ^{87}Rb 原子気体の蒸発冷却
共生人間学	張　琳	学術論文データベースに基づいた日本語の一般学術語彙に関する研究　―文系・理系の6分野を中心にして―
共生人間学	守谷　航	精神医学・精神医療における精神分析の役割　―アメリカ精神医学・医療と日本精神医学・医療の比較から
相関環境学	木谷友美	都道府県別パネルデータを用いた貯蓄額および貯蓄率の地域差の要因分析
共生人間学	関　周次郎	『存在と時間』における他者と自己
共生人間学	臼井杏奈	J. ピアジェと生態心理学　―発達にかんする生物学的アプローチの比較―
共生人間学	劉　驫	日本語の文脈指示詞「この」と「その」について　―談話モデル理論による分析をもとに
共生人間学	庄司礼絵	Evaluation of Anti-inflammatory Effects of Tocotrienol on Adipocyte（トコトリエノールの脂肪細胞における抗炎症作用の検討）
共生人間学	野島那津子	コミュニケーションの困難性に関する一考察　―痙攣性発声障害の事例から―
相関環境学	渡部和幸	シアノバクテリア *Acaryochloris marina* MBIC11017 の光化学系Ⅱの分光学的解析と分子生物学的手法による試料調製法の開発
相関環境学	海渕朋未	4f 電子系パイロクロア磁性体イジング系 $Dy_2Sn_2O_7$ とハイゼンベルグ系 $Gd_2Sn_2O_7$ のスピンダイナミクス
相関環境学	小野良章	DNA 修復における NBS1 と RNF20 の相互作用の解析
共生人間学	神澤克徳	日本語の転移修飾への認知的アプローチ
相関環境学	仲原　敬	競馬市場の効率性の検証
共生文明学	萩原卓也	女子プロレスのスポーツ人類学的研究　―レスラーの痛みの経験とジェンダー―
共生文明学	梁　恩慧	文言文の廃止についての再考　―敬意表現を中心に

共生人間学	多田　哲	16世紀ドイツ南西部における書記法の問題
共生人間学	大関尚人	〈個人〉から〈イデオロギーの主体〉へ、そして〈彼方の主体性〉にむけて
相関環境学	岩田不二雄	電解質中のマグネシウムイオンの導電挙動と界面酸化還元挙動の解明
共生人間学	中田智也	英語の外置構文について　―主語名詞句の定性制約をめぐって―
共生文明学	飯塚真弓	ヒンドゥー寺院司祭集団にみる浄不浄・神々の世界・ジェンダー　―南インド・チダンバラムのディークシタルを事例に―
相関環境学	宮田和志	ヒドロキシ基を配したアザカリックス〔4〕アレーンの合成に関する研究
共生人間学	FEDOROVA ANASTASIA	亀井文夫ドキュメンタリー映画論：「他者」表象と「自己」表現の問題を中心に
共生人間学	滝澤祥子	スウェーデンの移民に対する言語政策　―グローバル化と多文化主義の間で

平成23年度

共生文明学	関　健次郎	マダガスカル中央高地におけるクーバの製造と販売に関する人類学的研究
共生人間学	古山俊介	欧州市民のための電子図書館政策における言説の変遷　―文化遺産電子化の「文化・社会的側面」と「経済的側面」
共生人間学	佐藤圭一郎	映画監督・石田民三の伝記的研究
共生文明学	松田朋也	「共苦（Mitleid）」概念の批判的継承　―後期M.ホルクハイマーのショーペンハウアー論より―
共生人間学	劉　茵之	変容する移民とコミュニティへの想像力　―上海の日本人ネットワークをめぐって―
共生文明学	楊　若威	1960年代末の中国外交政策の転換：「米中接近」の資料から再考する
共生文明学	再田昌弘	「自己の在処」をめぐる試論　～西田哲学の再考を契機として～
共生文明学	鶴田宜江	歌が繋ぐ過去と未来　―ラトビア共和国アルスンガ村における合唱団の民族誌―
相関環境学	野田官嗣	シアノバクテリア *Acaryochloris marina* MBIC 11017 でのレポーター系の開発
共生文明学	大森健雄	近代における日中文人画観の考察　―陳師曾と大村西崖を中心に―
共生人間学	仲間　絢	バンベルク大聖堂の騎馬像と聖母像　―雅歌のイメージ・プログラムとして
共生文明学	孫　広	インターネット社会と日中関係　―中国インターネット社会における対日言論とナショナリズムを中心に―
共生文明学	江原等子	閾を生きる　―南インド、チェンナイの第三ジェンダーの人々をめぐって―
共生文明学	金原裕美子	動物遺存体に残る傷痕の研究　―金属器と石器の判別を目指して―
共生文明学	小野公祐	オルテガの「教養・慣習・国家」論
共生文明学	中屋敷千尋	北インド・チベット系社会における選挙の人類学的研究
共生人間学	王　文力	中国における「協同学習」の実践について　―日中比較の視点から―
相関環境学	遠藤祥多	京丹後市エコエネルギーセンターを通じた循環型社会の形成に対する支払意志額の要因分析
共生文明学	山内由賀	19世紀フランスにおける宗教と女子教育　―1852年の聖心会「指導要領」を中心に見るその一側面

共生文明学	宋　偉男	カール・シュミットのリヴァイアサン　―主権概念のペルソナ主義的転回
共生人間学	越山悠人	Effect of Chinese herbal medicine on autonomic nervous activity as evaluated by power spectra analysis of HRV（生薬を含む内服薬が自律神経活動に及ぼす影響の心拍変動パワースペクトル解析による評価）
共生文明学	秦　玲子	ニュージーランド・マオリのタトゥー、モコの復興　―彫師たちの語りと実践をめぐって―
共生文明学	呂　嘉瑜	中国国民政府の対独政策についての一考察
共生文明学	岩坪玲加	ウラジーミル・ナボコフ『カメラ・オブスクラ』（『ラフター・イン・ザ・ダーク』）　―翻訳に見る祖国ロシアと未知の国アメリカ―
共生人間学	谷口善紀	Voluntary Exercise with Simultaneous Electrical Muscle Stimulation for Enhancement of Muscle Metabolism（随意運動と電気刺激の同時併用）
共生人間学	洲崎竜弥	地域活性化運動における地域内結合と地域間ネットワークの表裏一体性　―京都市花背地域の事例―
相関環境学	田中結依	機能性ビピリジン系配位子を有する新規イリジウム錯体の合成と含窒素複素環の触媒的脱水素化 / 水素化反応への利用
共生人間学	坂口友弥	Reflexive Construction in Romansh Sursilvan　―A study of the syntactic loss of reflexives ―（ロマンシュ語スルシルヴァン方言における再帰構造　～再帰の統語機能の消失について～）
相関環境学	岡本繁樹	土壌中の芳香族化合物分解に関与する酵素遺伝子の探索
共生人間学	横井川美佳	幼児期における両手交互開閉操作と自己認識および実行機能の発達連関
共生人間学	上村昂史	ドイツ・ルール地方の地域語における前置詞について　―融合形に関する考察―
共生文明学	橋本信誉	ヴィクトリア朝ロンドンにおけるItalian slave children　―子どもの搾取の一側面とイギリス社会の反応―
共生文明学	平伴裕美	瓜の貢納にみる中世大和　―『大乗院寺社雑事記』を中心に―
共生人間学	佐藤健太郎	デイヴィッド・クローネンバーグ映画研究　―エクスプロイテーションからの脱皮と、精神の視覚的形象化をめぐって―
共生人間学	赤塚京子	「デザイナー・ベビー」議論からみる新優生学　―遺伝子操作の「自由」と「平等」の問題―
相関環境学	久山数典	優先富化現象のアミノ酸・ジカルボン酸共結晶への拡張に関する研究
共生人間学	日高悠登	ビハーラの実際と展望　―僧侶の活動と教育を中心として―
共生文明学	村上慧次郎	キグチに追われる人々　―韓国全羅南道の霊光グルビ産業の文化人類学的研究―
共生文明学	張　立言	晩唐詩人魚玄機　―魚玄機と李商隠の愛情詩の比較
共生人間学	仙石　祐	電子透かしに基づいた著作権とプライバシーを保護できるデジタルコンテンツ取引の方法
共生人間学	川西　慧	Student revisions in EFL writing： Effects of self-review training（英語ライティングにおける書き直しに関する研究　―自己修正訓練の効果―）
共生人間学	中馬隼人	英語複合名詞の理解・使用のメカニズムについての認知言語学的考察　―N+V-ing 型と N+N 型の比較を中心に―

相関環境学	吉田兆志	硫黄含有配位子を用いた銅一価錯体の機能評価
共生人間学	大島里詠子	Metformin-induced activation of 5'AMP-activated protein kinase in isolated rat skeletal muscle（ラット単離骨格筋におけるメトホルミンによる AMP キナーゼの活性化に関する検討）
相関環境学	梶原伸吾	新規ニトロキシドビラジカル化合物の合成と物性
共生人間学	丹羽初穂	カナダ・ケベック州における言語教育政策の変遷　―「言語への安心感」の形成と英語教育の相関性について―
相関環境学	清水剛志	ナノ $LiCoO_2$ 粒子の界面構造と電極特性評価
共生人間学	宮地雄也	Effect of electrical muscle stimulation on gut peptides and appetite（骨格筋電気刺激が消化管ホルモンと食欲に与える影響）
共生人間学	志築諒太朗	英語量化詞と話者の評価の関係に関する研究　―オンラインレビュー記事コーパスを用いて
共生人間学	井上卓也	フロイト「心理学草案」における認識論的問題
相関環境学	赤岡一志	金属錯体を基盤とした生体関連物質の高感度検出プローブの開発
相関環境学	大前陽一	量子スピンXY型三角格子反強磁性体 $CeZn_2P_3$ における磁気秩序の研究
共生文明学	永盛明美	The Poet as a Bird-Watcher ： Thomas Hardy's Pessimism / Meliorism（探鳥者としての詩人：トマス・ハーディの悲観論/改善論）
共生人間学	北村教行	ベンサムの功利主義とエンティティ論
共生人間学	長田かおり	Mechanism underlying the control of the index finger（人差し指の制御メカニズム）
相関環境学	下妻史乃	中途停滞水域の形成による河川水質の変容
相関環境学	マセセ　タイタス　ニャムワロ	鉄系ポリアニオン系正極材料へのリチウムイオンの挿入・脱離機構の解明
共生人間学	夏目麻衣子	低地ドイツ語の言語政策と話者の意識
共生文明学	中山輝樹	京都市における商業用途の屋外広告物の規制・誘導についての研究
共生文明学	李　群	元雑劇『楚昭王疏者下船』の改編をめぐって
共生文明学	李　娜	女性の経済活動と性別役割分業　―中国蘇北地区卜都（BuDu）村の事例研究―
相関環境学	松田惇志	Genetic structure and diversity of nine Asarum species endemic to the Amami Group（奄美群島における9固有種のカンアオイの遺伝構造と遺伝的多様性）
共生人間学	地蔵繁範	Classroom research on high school students' listening ：Are they utilizing what they have learned?（高校生のリスニングに関する教室研究　―学習した内容は活かされているか―）
相関環境学	寒澤　慎	銀ナノ粒子局在型表面プラズモン着色を用いた新規ガラス材料の創製及びEu添加蛍光体の光学特性評価
共生文明学	伊丹明彦	田中義一内閣期における対中政策と対ソ政策の連関　―満州鉄道問題を中心に―
共生人間学	王　文萱	竹久夢二とどんたく社同人による人形製作活動

共生文明学	小泉尚子	遠くの他者への責任について　―「救済責任」の可能性
共生文明学	MILNE DANIEL JEROME	REPRESENTATIONS OF JAPAN AND KYOTO IN ENGLISH-LANGUAGE GUIDEBOOKS（英語の観光ガイドブックにおける日本または京都の表象）
共生人間学	姜　■　穎	青年後期に来日した留学生の文化的アイデンティティの変容　―中国人留学生を対象にして
共生人間学	喬　彬	観光立国における留学生観光ボランティアガイドの可能性について　―京都府在住留学生の観光ボランティア意識調査から―
共生文明学	杜　鵑	日本の「80後」の中国人留学生の就職に関する意識について
共生人間学	柿添康大	parabolic renormalization の invariant class に属する関数について
相関環境学	堤　俊二	鉄系超伝導体 $CaFe_{1-x}Co_xAsF$ 及び $LaFeAsO_{1-x}H_x$ の核磁気共鳴測定
共生人間学	佐藤友一郎	ダンディズムの流動性と社会性
共生人間学	種村一識	Effects of coffee intake on gastric motility and autonomic nervous activity in young healthy volunteers（コーヒー摂取がヒトの胃運動および自律神経活動に与える効果の検討）
相関環境学	大門徹也	Mg 二次電池正極ポリアニオン系化合物の特性評価と反応機構の解明
共生人間学	王　岩	中国の日本語教科書に見られる日本「文化」とその変遷
相関環境学	東　広之	Historical range shift of Japanese endemic genus Schizocodon based on phylogeographic analyses（系統地理解析に基づく日本固有イワカガミ属の歴史的分布変遷）
共生文明学	花川真子	平安から鎌倉時代にかけての女性の寺社参詣と参籠
共生人間学	樋口洋子	系列的に現れる物体の位置と形態の潜在学習
共生文明学	徳永　悠	Between the Undocumented and the Society ：Volunteer Activities of La Hermandad Mexicana Nacional in California, 1960s-1980s（非合法移民と社会の間で　―1960～1980年代カリフォルニア州における La Hermandad Mexicana Nacional のボランティア移民支援活動）
共生文明学	岸山　碧	物性測定に基づく古墳壁画漆喰の変質過程の推定
相関環境学	高橋大輔	ハロゲン基を有するアザカリックス[5]アレーンの合成に関する研究
相関環境学	平栗　翔	機能性含窒素多座配位子を有する新規イリジウム錯体の合成と触媒的脱水素化反応への利用
共生人間学	黒木英梨子	Resveratrol activates 5'AMP-activated protein kinase in isolated rat skeletal muscle（ラット単離骨格筋におけるレスベラトロールによる AMP キナーゼの活性化に関する検討）
共生人間学	山口久美子	ドイツ語の Schwa に関する音韻論的考察
共生文明学	峠田彩香	金子みすゞの童謡　―雑誌『赤い鳥』・北原白秋からの影響
共生人間学	仲西博紀	視覚意識抑制下に呈示される視覚刺激が視覚記憶に与える影響
共生文明学	佐藤有華	明治から昭和戦前期にかけての京都鴨東地区の産業と市街化
共生人間学	臼田泰如	依頼を目的とする談話の構築に関わる要因に関する考察　―関連性とポライトネスの観点から―

共生文明学	張　珊茹	明清時代における昆曲の関公戯の発展と変容について　―「綴白裘」の「刀会」を中心として
共生人間学	杉田紗綾可	借用語の意味変化モデルの構築　―ドイツ語、イタリア語、英語を例証にして―
共生文明学	末木淳子	1960年代以降のアフリカンアメリカン児童文学　―ヴァージニア・ハミルトンをめぐって―
共生人間学	崔　玲艶	オノマトペに関する対照言語学的一考察　―川端康成の『雪国』とその中国語・韓国語訳を資料として―
相関環境学	阿曽悟郎	白色 LED 用蛍光体と無機フォトクロミック材料の作製および発光・着色特性
相関環境学	小林佑次	白金パラジウムコアシェル触媒の酸素還元反応活性と触媒表面構造の相関解明
共生人間学	小田千香子	話者に対する既知性が音声の知覚に与える影響
共生人間学	佐々木裕則	なぜやる気が低下するのか　―スチューデント・アパシー論の批判的研究―
共生人間学	高橋裕美	架空の報酬情報が選択行動に及ぼす影響の検討
共生文明学	上野莉紗	道州制をめぐる地域論的研究
相関環境学	松村実咲	大学教育の質と学生の所得：ネームバリューを考慮した教育効果の推定
共生人間学	日高佑郁	Towards the development of academic listening comprehension：An investigation of effective pre-learning vocabulary tasks（アカデミックリスニング技能の育成に向けた語彙学習　―効果的なタスクの研究―）
共生人間学	後藤遥介	筋の選択、および運動タイミングの決定時における、皮質脊髄路の興奮性についての研究
共生人間学	川上夏林	認知と談話の観点によるフランス語の部分の与格構文の分析　―対格構文との他動性の比較をめぐって―
共生文明学	今川世詩子	滋賀県長浜市におけるまちづくりに関する研究　―庭園調査からコミュニティ形成への展開―
相関環境学	細見　卓	耐熱性アスパラギン酸ラセマーゼの構造と耐熱機構の解析
共生人間学	河合直樹	高校数学教科書の言説分析　～学習者を主体とした新しい教科書の構想
相関環境学	舟津尚子	シアノバクテリア *Acaryochloris marina* MBIC11017 の α-カロテン合成酵素遺伝子に関する研究
相関環境学	波多野　諒	新規高機能カチオン性錯体の合成と含窒素複素環化合物の触媒的脱水素化反応
共生人間学	李　子帆	Effects of Dxygen Supplementation on Hypoxia or Glucotoxicity-induced Dysfunction in Insilin-secreting beta cells（膵 β 細胞における糖毒性または低酸素による機能障害に対する酸素供給の有用性についての検討）
共生人間学	笠島靖夫	Renormalization による Small Cycle Property の研究
共生文明学	高屋奈穂	カントリーミュージックとナッシュビル　―「ミュージックシティ」の誕生と変遷―
相関環境学	水野雄介	ミトコンドリア DNA に基づくモリアオガエルの系統遺伝学的研究
共生文明学	山本拓也	W・ベンヤミンの技術についての考察
相関環境学	村上順一	DNA 2本鎖切断修復因子を指標とした α 線細胞照射影響ライブイメージングシステムの開発

共生文明学	蒋　　騰	洋ファーストフードの大衆化から見る改革開放中国の変化　―上海におけるマクドナルドとケンタッキー・フライド・チキンの現地調査を中心として
相関環境学	大西恭弘	サーモパイルを用いた平均放射温度センサの作製
共生人間学	山田峰大	映画監督森田芳光の作家論的考察
共生文明学	薗田章惠	ビクトリア朝後期の執事について　―自伝、文学作品を通して―
相関環境学	大槻達郎	Demographic history of the coastal plant *Lathyrus japonicus*（Leguminosae）landlocked in Lake Biwa, an ancient freshwater lake（古代淡水湖琵琶湖に陸封された海浜植物ハマエンドウ（*Lathyrus japonicus*）における集団動態の歴史）
共生人間学	安　　在珉	固定を表す他動詞の認知言語学的考察　―日本語「はめる」と韓国語「KKIUDA」の比較を中心に―
共生人間学	小松原哲太	修辞理解のメカニズムに関する基礎的研究　―転義現象の分析を中心に―
共生文明学	森下　　翔	科学的「安定性」を生きる　―測地学者の民族誌―
共生文明学	澤西祐典	芥川龍之介におけるバーナード・ショー受容
相関環境学	嶋田研志郎	強酸性温泉から分離された新規単細胞緑藻3株の分類学的考察
共生文明学	積田俊雄	経済学的自然観の研究への一考察　―ルネサンス期の魔術思想と労働観の変容をめぐって
共生文明学	上　　なつき	明代後期の「宴」に関する一考察　―『金瓶梅』中の女性が楽しむ宴会を中心に―
相関環境学	井上貴義	機能性ビピリジン系配位子を有する水溶性イリジウム錯体触媒を用いた糖類の脱水素化反応に関する研究
共生人間学	佐藤龍一郎	ヤン・ファン・エイク《ロランの聖母》に関する一考察　―下絵の改変をめぐって富と煉獄の観点から―
相関環境学	川村渥史	リチウムマンガン層状岩塩型酸化物の酸素不定比性と電気化学特性
共生人間学	伊藤　　薫	オクシモロンの修辞的機能に関する認知言語学的考察
共生文明学	林　　春元	日本社会が在日コリアン定着地のまちづくりに及ぼした影響　―京都市南区東松ノ木町を事例として―
相関環境学	呉　　詩勤	陸水の化学特性の評価に関する研究
相関環境学	陣出　　真	蔵王火山、五色岳火砕岩中の火山弾を用いた過去1500年間の地球磁場変動の推定
相関環境学	山本貴之	有機ラジカルゲル化剤の合成と磁性超分子ヒドロゲルの性質
相関環境学	中村幸平	火山を保有する都市における都市防災・まちづくりについて
共生文明学	羅　　太順	マックス・ヴェーバーの『法社会学』における法実証主義　―自由法論、歴史法学派、自然法思想を手掛かりに―
相関環境学	高濱優宏	全光学的手法による ^{87}Rb 原子のボース・アインシュタイン凝縮の生成
共生人間学	上田壮志	ネット社会における「評価」というメディアについて
共生人間学	畑中　　啓	テオ・アンゲロプロス映画研究　―ロングテイクの「時間」による社会と個人の新しい表象方法分析

共生文明学	李　愛蘭	コリアタウンの誕生　―大阪市生野区におけるホストの実践をめぐって―
共生人間学	北村譲崇	「実感」としての自尊感情　―自分の「かけがえのなさ」をめぐる青年との語り合いから―
共生文明学	浅井航洋	永井荷風「かたおもひ」の研究
相関環境学	末次健司	Diverse interactions of heterotrophic plants with autotrophic plants, mycorrhizal / saprotrophic fungi and pollinators（従属栄養植物が独立栄養植物や菌根／腐朽菌、送粉者と織り成す多様な相互作用）
相関環境学	相島光太郎	グリーンフォトニクス応用を目指した Ce,Yb 添加ガーネット結晶の作製および波長変換特性評価
共生人間学	旦部辰徳	佐藤春夫、稲垣足穂における「微視」と「瞥視」　―大正期文学に見る眼差しの二相―
相関環境学	小林大記	機能性 N, O-キレート配位子を有する新規イリジウム錯体の合成と脱水素化反応における触媒活性
共生人間学	井上　聡	三島由紀夫の文武両道
共生人間学	武田良美	Effect of Water Drinking Habit on Eating Behavior and Mental Health（飲水習慣が食行動とメンタルヘルスに与える影響）
共生文明学	陳　煜	中国江南地域における都市プランの歴史地理研究
共生人間学	笠根　唯	Two Leviathans ：Hobbes's Leviathan in Melville's *Moby-Dick*（二つのリヴァイアサン　―メルヴィルの『白鯨』におけるホッブズのリヴァイアサン―）
共生文明学	鄭　瑶	1910年代の在日中国人留学生　―周恩来を中心に―
共生文明学	庄　声	満洲人の読書生活について　―漢籍と漢文化を中心に―
共生文明学	佐藤　悠	万葉集後期相聞歌の発想と表現
共生人間学	金澤　悠	ラクロス競技における1対1に関する研究

平成24年度

共生人間学	津田裕之	視覚性ワーキングメモリにおける物体表象の容量と精度に対する符号化過程の影響
共生人間学	石井実穂	ニーチェの『ツァラトゥストラ』における「子ども」　―否定性を介した肯定の思想―
共生文明学	中西麻由美	マイモニデス『迷える者の導き』における、神の実存、単一性、非有体性における諸論証について　ムタカッリムへの反駁を中心に
共生文明学	松木一也	転回する自己実現　―『夜と霧』から『7つの習慣』へ
共生人間学	鈴木伸尚	フェルナン・ウリの教育論
共生文明学	高橋景子	男勝負の文化人類学的研究　―隠岐の島町旧五箇村における村相撲をめぐって
相関環境学	坂本皆子	髻山の『天狗の麦飯』の微生物群集構造解析
共生文明学	大林大祐	上代特殊仮名遣の再検討　―訓仮名の振舞からの考察
相関環境学	澤　剛生	ボース凝縮気体の観測と解析
共生文明学	北川了次	イタリア性を求めて　―北イタリア・クレモナにおけるヴァイオリン職人の民族誌―

共生人間学	林　潤平	近代日本における「自然」概念の成立過程　―加藤弘之の「自然」概念に注目して
共生文明学	川本直美	現代メキシコ西部村落におけるカルゴ・システムと教会の関係
共生人間学	後藤直樹	ハビトゥスから身体の古層へ　―身体の社会性と前社会性を巡る考察―
共生文明学	小板橋侑子	絵画史料にみられる煎茶のイメージ
共生文明学	高垣政雄	トランスセクシュアルの臨床人類学的研究
相関環境学	植島豪久	機能性配位子を有するイリジウム錯体触媒を用いた第一級アルコールの水素移動型酸化反応
共生人間学	保田巳範	フランツ・カフカの作品における構造の崩壊と再構造化のプログラム　―“In der Strafkolonie”を中心として
共生人間学	高野俊幸	緩和定数付き Support Vector Machine によるクラス分類問題の学習
共生人間学	安東賢太郎	レオス・カラックス映画研究　撮影技法の探究と独創的人間心身表象をめぐって
共生文明学	方　草燕	三木清の「東亜協同体」論における普遍性と特殊性　―1937年～1944年―
共生人間学	兒玉朋子	ジョルジュ・ド・ラ・トゥール ≪妻に嘲弄されるヨブ≫の再考　―悔悛する者としてのヨブ
相関環境学	大沢洸司	酵母 Sld3 ホモログ Treslin の機能解析
共生文明学	朴　智顕	人称代名詞「우리［ウリ］（我々・私たち）」から見た韓国的主体性についての研究
共生人間学	張　博鈞	写真からの顔認識と目の形状特徴解析によるベストショットの選択手法
共生人間学	尾崎正典	The effect of electrical muscle stimulation on β-endorphin secretion（骨格筋電気刺激がβエンドルフィンの分泌に及ぼす効果）
共生人間学	周　静	異文化間コミュニケーション能力の育成からみた中国の日本語教育
共生人間学	日高利泰	1960年代の少女誌における恋愛の主題化と「少女」の性的身体
共生文明学	佐野文哉	ろうあ者の差異・境界・コミュニケーション　―手話サークルの参与観察から―
相関環境学	古屋姫美愛	人工樹冠による樹冠遮断蒸発の解析
共生人間学	増井秀樹	「親になる」ことの発達心理学：一人の若者の立場から
共生人間学	有森由紀子	1990年代西部劇研究　―レザーストッキングの系譜とその変容―
共生人間学	山元智怜	ニーチェ中期思想の成立過程　―認識を手がかりとして―
共生文明学	棚田史彦	本質実在論としての西田哲学
共生人間学	津田諭志	Coffee polyphenol caffeic acid but not chlorogenic acid increases 5’-AMP-activated protein kinase in rat skeletal muscle（ラット骨格筋におけるコーヒーポリフェノールのクロロゲン酸とカフェ酸による AMP キナーゼ活性化の検討）
相関環境学	清水　俊	有機分子性結晶の気体吸蔵特性に関する理論的解析と予測
共生文明学	陳　静	Doing Sociology in His Own Way : On Features and Reasons of Charles Dickens’s Depiction of Crimes in His Early Works（ディケンズの犯罪描写：その特徴と理由　―早期の作品をめぐって）

共生人間学	相原健志	社会性を伴う運動の観察に関わる神経機構
共生人間学	押田友太	ヌーヴェル・ヴァーグ映画作家ジャック・リヴェット中期作品研究　―舞台演劇技法と古典的ハリウッド映画技法へのオマージュ、またはそこからの革新的乖離技法―
相関環境学	宮澤浩人	グリオーマ幹細胞における DNA 修復能の解析
相関環境学	渡邉恵里	Pd(dmit)$_2$ 系三角格子反強磁性体におけるスピン液体と量子臨界現象の^{13}C-NMR による研究
共生人間学	田辺弘子	Postural control of à terre and relevé as a fundamental standing of classical ballet（クラシックバレエの基本立位であるア・テールとルルヴェの立位制御）
共生人間学	黒澤雅恵	指示理論の考察から見えてくる言語あるいは言語と人間の関係にかんする一考察
相関環境学	森　伸一郎	その場放射光測定によるリチウムイオン二次電池正極／電解質界面現象の解明
相関環境学	木林　理	ミカドギセル属の近縁種間で見られた遺伝的・生態的分化
相関環境学	富本英輝	太陽電池高効率化のための希土類添加セラミックス材料の作製とその波長変換特性
共生人間学	孫　昊	中国語発音学習 CALL システムの開発研究
相関環境学	松坂純輝	アンチドット型光格子中における原子気体のダイナミクス
共生文明学	越坂裕太	宣長の思想にひそむもの　―「天」との関わり方を通して―
共生文明学	金　京燕	咸錫憲の「シアル」思想における論理構造　―「シアル」の主体性と宗教性の分析を中心に―
共生文明学	何　嘉	越境する家族　―日本に定住した中国人家族の生活世界から考える
相関環境学	山田俊太郎	Phylogeography of Cycas revoluta in the Ryukyu Islands : north-south differentiation and genetic diversity variation in the island arc（琉球列島におけるソテツの系統地理：島弧における南北分化と遺伝的多様性の変異について）
相関環境学	五行由磨	蓄電池合剤電極における断面方向反応分布の支配因子解明
共生人間学	苗　璇	The Reception and Transition of *On the Road* in China　―An Analysis of 4 Chinese Translations（中国の『*On the Road*』　―4つの翻訳から見る受容と変遷）
相関環境学	宮澤　悠	Adaptive differentiation of rhodopsin gene in *Luciogobius* and *Gymnogobius* gobies inhabiting diverse light environments（多様な光環境下に生息するミミズハゼ属およびウキゴリ属魚類のロドプシン遺伝子の適応的分化）
共生文明学	ALBERTO HIKARU SHINTANI	World War Ⅱ as Seen in Life Records of Japanese in Brazil: A Study of Diaries, Newspapers and Radio Broadcasting（ブラジル在住日本人の生活記録から見た第二次世界大戦　―手記、新聞、ラジオ放送を手掛かりとして―）
共生人間学	吉井裕八	Dynamic profile of motor unit discharge in human（運動単位発火の動的性質）
共生人間学	紀之定真理恵	トーマス・マンの芸術家像の転換　ワーグナーと『ヴェルズングの血』をめぐって
相関環境学	濱田和優	京都盆地から得られた堆積物コア中の大阪層群海成層 Ma5 に対する古地磁気・岩石磁気学的解析；氷期－間氷期変動に伴う海水準変動による堆積物の堆積環境変化と磁気特性変動との対応の検討

共生文明学	FREY URSZULA	The Influence of Institutional and Social Factors on the Work Life Balance of Working Women During the Last 15 Years of the 20th Century —Comparison between Japan and Belgium（1980-90年代の働く女性のワーク・ライフ・バランスに与える社会的・制度的影響 —日本とベルギーの比較）
相関環境学	西村龍彦	ドリアガエル種群（Limnonectes doriae group）の系統関係と各種の種内変異
共生人間学	吉松覚	エルゴンの傍らに／エルゴンを超えて —デリダの芸術論における固有性批判について—
共生人間学	延田リサ	日本の美的表現に関する社会記号論的アプローチ —茶道のマルチモーダル・オーケストレーション—
共生人間学	萩生翔大	Identification of muscle synergies based on motor output（運動出力を捉えた筋シナジーの解明）
共生人間学	高橋真理子	A Comparative Analysis of Tag Questions in Four Asian Englishes: A Corpus-Based Approach（4つのアジア英語における付加疑問文の比較研究 —コーパスに基づくアプローチ—）
共生人間学	北尾翔平	Effects of electrical muscle stimulation on muscular hypertrophy and Insulin-like Growth Factor-1（IGF-1）（骨格筋電気刺激が筋肥大及びインスリン様成長因子1（IGF-1）に及ぼす影響）
共生文明学	小舟みなみ	中近世の西日本出土イヌ資料について
共生人間学	林智昭	英語動詞派生前置詞の文法化に関する認知言語学的考察
共生文明学	中本朝海	石門心学の歴史地理学的研究 —京都近代公教育への底流—
相関環境学	八木春樹	Population genetic structure of Lysimachia mauritiana（Primulaceae）in the Ryukyu Islands（琉球列島におけるハマボッス（サクラソウ科）の集団遺伝構造）
共生文明学	杉本雅美	シュテファン・ツヴァイクと良心 —「世界市民思想」、「敗北主義」、「精神の自由」の考察—
共生文明学	宍戸夏実	平安時代における〈高坏〉の器名の変遷
相関環境学	三井浩司	銅－価蛍光プローブによる細胞内オルガネラ局在性の評価
相関環境学	前田壮宏	高速時分割測定を用いた二相反応系正極の非平衡相転移挙動
共生人間学	岸淵薫	Effects of Ia afferent activity on alternate muscle activity（Ia求心性活動が協働筋の活動交替に与える影響）
共生人間学	宮崎雄平	ペンローズタイリング上のセルオートマトン
共生人間学	鄭華玉	中国語母語話者の日本語学習におけるシャドーイングの効果について
共生文明学	稲葉瑛志	「仮象」への攻撃 —エルンスト・ユンガーの初期の作品における群集像—
相関環境学	杉分隆介	優先富化現象の医薬品への応用に関する研究
相関環境学	石橋宣史	Genetic study of flowering time variation in Legume model plant *Glycine max* and *Lotus japonicus*（開花期多様性を持つマメ科モデル植物ダイズ、ミヤコグサの遺伝学的研究）
相関環境学	尾崎敏司	シンジオタクチックポリプロピレンのメゾ相からの結晶化過程
相関環境学	相澤俊博	金属を内包するフラーレンの分子磁性
共生文明学	長島雄毅	近世後期京都における商家奉公人の供給地域 —平野屋遠藤家を事例として—

共生文明学	矢野芳昭	The Protest of African-American Literature against Racism before the Civil Rights Movement Era: A Study of *Native Son* and *Invisible Man*（公民権運動前のアフリカン・アメリカン文学による人種差別に対する抗議　『アメリカの息子』と『見えない人間』の研究）
相関環境学	伊藤　航	機能性配位子を有する水溶性イリジウム錯体触媒を用いる水溶媒中でのラクトン化反応
相関環境学	岡本光弘	大きなπ電子系を持つ分子錯体の分子磁性
共生人間学	村上良太	Effects of different exercise form on gut hormones and appetite（運動様式の違いが食欲調節ホルモン及び食欲に与える影響）
共生人間学	寺山　慧	Computational adequacy and universality of calculi of bottomed sequences for real number computation（実数計算のための不定元入り文字列計算のコンピュテーショナルアディカシーと普遍性について）
共生人間学	秦　怡	視聴覚メディアを用いた初級日本語学習の有効性
相関環境学	仲上　翼	高機能性ビピリジン系配位子を有するイリジウム錯体を用いた触媒的脱水素化反応
共生人間学	筧　菜奈子	ジャクソン・ポロックにおける無意識の表象　―文字的図像をめぐって―
相関環境学	三好　茜	Two-stage serpentinization reactions triggered by silica addition: petrology and mineral chemistry of Iwanai-dake ultramafic rocks, Kamuikotan belt, Hokkaido, Japan（北海道神居古潭帯岩内岳超塩基性岩体におけるシリカの付加による２段階の蛇紋岩化作用）
共生人間学	小西洋平	第二帝政期における共済組合と医療
共生人間学	谷口永里子	フランス語の受動態の機能について　―談話情報構造の観点から―
共生人間学	村井昂介	複数の人間関係データベースに基づくコミュニケーションがもたらす自己意識への影響　―SNS を中心に―
共生文明学	李　亜欣	日中伝統演劇における「残酷の美」について　―歌舞伎と京劇を中心として
相関環境学	大西啓太	両親媒性キラル有機ラジカル化合物の合成と磁性に関する研究
共生文明学	松崎哲也	縄文時代の東北地方における漁撈活動の特色
共生人間学	李　曦	複合動詞の多義性に関する認知言語学的研究　―日本語「V＋出す」と中国語「V＋出（chū）」の対照分析―
共生文明学	徐　来	『双下山』の明、清代における変遷　―テキストの継承関係と舞台上演を中心に
相関環境学	押田至雅	共有結合形成能を有する部位局在型亜鉛蛍光プローブの開発
共生人間学	木本早耶	不気味な表現のデジタル化　―デイヴィッド・リンチ映画における人間関係の表象研究
共生人間学	古賀裕紀	文字－質感共感覚のケーススタディ
相関環境学	吉田祐理佳	放射線照射細胞を用いた膵島の効率的なカプセル化に関する研究
相関環境学	大木宜子	Genetic diversity and population structure of the Japanese endemic Tricyrtis species in section Brachycyrtis（日本固有のホトトギス属ジョウロウホトトギス節における遺伝的多様性と集団構造）

共生文明学	TEN VENIAMIN	歴史・社会構造から見るサハリン朝鮮人のディアスポラ形成　―サハリンの島嶼性（Insularity）を踏まえて―
共生人間学	菅谷友亮	形容詞の意味構造の多様性に関する基礎研究　―結合性・スケール性・時間性の観点から―
共生人間学	島村幸忠	Ⅴ．ジャンケレヴィッチのノスタルジー論　―『不可逆なものとノスタルジー』を中心として―
相関環境学	道合裕基	小川未明作品における「異界」
共生人間学	黒田一平	言語の創造性と制約に関する認知語用論的考察　―日本語の略語と関連現象を中心に―
共生文明学	孫　暁晨	戦後の丸山眞男における「国民的主体性」について　―「否定的独立」と「絶対的帰依」の間
共生文明学	森上将太	近世城下町長浜の水路が規定する町割に関する研究　―絵画史料と現地調査による分析を通して―
共生文明学	幅　亮太	ランドスケープから見た伝統都市の再読　―「山河襟帯」都市としての岐阜町を事例に―
共生文明学	亀ヶ谷憲史	室町幕府と鎌倉府の政治関係　―足利義持・義教期を中心に―
共生文明学	李　静	新羅の花郎における儒・道・仏・巫の影響
共生人間学	加藤由崇	Effects of Task Repetition on Speaking Fluency, Accuracy and Complexity in an EFL Setting（外国語としての英語の学習環境における発話の流暢さ・正確さ・複雑さに与えるタスク反復の効果）
相関環境学	山根美子	The ecology and species diversity of megadrile earthworms revealed by DNA barcoding（DNA バーコーディングを用いたミミズ類の生態と多様性の解明）
共生人間学	西内亮平	ヒュームにおける信念と必然性
相関環境学	望月陽人	陸水域におけるウランの分布と動態
共生人間学	松下哲也	Gallic acid, an ingredient of Pu-erh tea, acutely activates Akt in rat skeletal muscle（プーアル茶成分没食子酸はラット骨格筋Aktを急性的に活性化する）
共生人間学	山田　唯	Muscle tendon interaction in triceps surae during box jump（ボックスジャンプ中における下腿三頭筋の筋腱相互作用）
相関環境学	森　拓弥	新規多価カチオン二次電池正極材料の電気化学挙動と反応機構解明
共生人間学	古川　萌	「すでに死せる人びとの名誉のために」　―記憶の建築としてのヴァザーリ『芸術家列伝』
相関環境学	増井　駿	希土類パイロクロア結晶に基づく新規透光性セラミックスの作製方法に関する検討
共生文明学	鈴木　薫	地方自治体の政策決定過程における議会と行政の関係について　―京都市基本計画をめぐって
共生人間学	大喜祐太	ドイツ語における es gibt 存在表現の語用論的分析
共生人間学	清水千恵	外国語としての日本語の文法知識が文体の使い分けに与える影響について　―中国人日本語学習者からのデータに基づいて
共生人間学	劉　雁	中国草の根 NGO による震災救援活動　―「9・7昭通市彝良県地震救援共同行動」プロジェクトの事例研究

共生人間学	芝本里美	Twitterを利用した英語の語彙習得に関する研究
共生文明学	國友勇冴	A Cartographic Study of European-made modern maps of Japan: Detailed analysis of Knipping's map（西欧製近代日本図の地図学史研究　―クニッピング図の詳細検討に焦点をおいて―）
共生人間学	井岡詩子	インファンティアの芸術論　―ジョルジュ・バタイユにおける芸術のトポス
共生文明学	康　陽球	在日コリアン男性と日本人女性の結婚　―関西在住16人のライフストーリーの分析から
共生人間学	足立隆門	大日本武徳会の「武徳」論と剣術論の変遷
相関環境学	金山太知	数値シミュレーションを用いた魚群のダイナミクス
共生人間学	河野　亘	知覚動詞の意味拡張に関する認知言語学的研究　―連結的知覚動詞構文を中心に―
共生文明学	西薗有加利	泉鏡花『尼ヶ紅』論
共生人間学	小島道子	精神分析理論における主体の概念の意義　―その起源と本質に関するラカンの探究
共生文明学	齋藤祐実	Resegregation of American Public Schools and the Changing Racial Discourse: Charlotte-Mecklenburg Schools, North Carolina, 1969-2002（アメリカ公立学校の再人種分離化傾向に見る、人種概念の変容：1969年～2002年のノースカロライナ州シャーロット・メックレンバーグ学校区を事例として）
相関環境学	呉　ハナ	Polymorphisms in functional core domains of photoreceptor genes among wild *Lotus japonicus*（Fabaceae）in Japan（日本の野生ミヤコグサにおける光受容体遺伝子の機能的に重要なドメインに存在する多型）
相関環境学	笹　健太郎	Po-210 α 線源を用いた DNA 二重鎖切断修復関連因子の挙動解析に関する研究
共生文明学	鳶野記子	漱石の修辞技巧　―『虞美人草』における提喩の機能―
共生人間学	宇佐美達朗	非－倫理的な倫理としての個人の平等　―ランシエールにおける esthetique をめぐって
共生人間学	劉　刘妮	日本語と中国語の「来る」と "来" の対照研究
相関環境学	森　健太	ナイロン612の正と負の球晶と結晶構造の温度変化
共生人間学	王　楽	「絆」としての痛み　―「痛み」を巡る文化的考察
共生文明学	SZABÓ ZSUZSANNA	芥川龍之介の〈狂人語り小説〉　―『二つの手紙』と『河童』を中心に―
相関環境学	猪原崇生	5f 電子系 XY 型三角格子反強磁性体 UNi_4B の核磁気共鳴法による研究
共生人間学	佐野泰之	メルロ＝ポンティにおける語る言葉と語られた言葉の問題　―受容的側面からの考察―
共生人間学	山田拓弥	日本語の活用体系に関する認知形態論的分析
共生人間学	森　洋貴	利き手の違いが模倣課題中の反応時間に及ぼす影響
共生文明学	姜　海日	東アジアにおける「孝」思想の政治化　―北朝鮮の「社会政治的生命体」論からの考察
共生人間学	田村有香理	日本の学校における校則と子どもの自律についての考察

共生人間学	工藤人生	Faulkner's Narrative Techniques in Italics　—A Study of *Light in August*（イタリックにみるフォークナーの語りの技法　—『八月の光』を中心に）

平成25年度

共生人間学	中村匡希	シカゴ学派の人間生態学と新都市社会学の理論対立　—何故、都市の見方が変わったのか—
共生人間学	川野夏実	翻訳における明示化傾向の語用論的研究　—目標テクストにおける明示化ルールの把握—
共生人間学	高橋 ヌーハ 彩	Living in Harmony　— Linking Biodiversity Conservation and Human Livelihoods（自然と調和した暮らしを求めて　—生物多様性の保全と人間の暮らしの接点）
共生文明学	廖　佐恵	江戸時代の日本における清朝陶磁の受容に関する一考察
共生文明学	趙　富蘭	ホルチン沙地の土地利用と共同体の動きに関する人文地理学的研究　—中国内モンゴルのホルチン沙地における半農半牧村落の事例より
共生文明学	永渕剛介	自己解体と生への反転　—H.ショーのメスカリン実験の解読—
共生文明学	片倉真理	今和次郎の生活学
共生文明学	鶴原麻美	米国地方紙にみるアラブ系アメリカ人の表象の変遷　—9・11事件前後の比較を通して—
共生文明学	栗岡紀佳	学生下宿の変遷に関する研究　—京都大学地域を題材として—
共生文明学	宮下芙美子	開発実践の交渉とネットワーク　—ウガンダ小農村におけるゴマ栽培プロジェクトを事例に—
共生人間学	水谷　藍	1920年代アメリカにおけるモダンガールをめぐる言説　—ニューヨークタイムズ紙の記事を中心に—
共生文明学	中原理恵	幸田露伴の笑い話について
共生人間学	由浅啓吾	メルロ＝ポンティの自由論
共生文明学	作山哲平	晩年ゲーテと近代の概念
共生人間学	福田安佐子	ポストヒューマニズムと諸相　—「人間に似たもの」についての考察を通じて—
共生人間学	常盤有未	ラーメンブランドの形成プロセスに関する考察　—当事者間の社会関係資本に着目して—
共生人間学	生田隆芳	「論理哲学論考」のパラドックスにおける非決然的解釈の優位性
共生人間学	田中陽次	A New Technique of Glycogen Loading Regimen : Involuntary Exercise with Skeletal Muscle Electrical Stimulation and High-Fat Diet Contribute to Fat Adaptation（グリコーゲンローディングの新手法　—骨格筋電気刺激による不随意運動と高脂肪食の併用が脂質代謝亢進への適応に貢献する）
共生文明学	張　セイヒ	Wildean Rhetoric in His Four Comedies（四つのコメディーにおけるワイルド式レトリック）
相関環境学	清水貴之	Ce^{3+} 添加逆ガーネット蛍光体の電子物性と蛍光特性評価
共生文明学	板垣雄太	アクセル・ホネットの連帯についての一考察　—コンフリクトを基礎づける価値共同体的連帯—
共生人間学	黒須慎吾	探索成績の課題間相関を指標とした探索非対称性の生起メカニズムの検討

相関環境学	酒徳唱太	2次元光格子面内におけるボーズ気体の振る舞い
共生人間学	下梶健太	ジェイムズ・アイヴォリー映画作品研究　―小説と映画のアダプテーション性における英国への憧憬技法―
相関環境学	篠田達昭	バイオイメージング応用を目指した長残光蛍光体の作製及びその蓄光現象
相関環境学	松本翔吾	Induction of chlorophyll f production in a cyanobacterium strain KCl under the condition of self-shading（自己遮蔽条件におけるシアノバクテリアKCl株のクロロフィル f 合成誘導）
共生文明学	川崎弘朝	基地と生きる地域社会　―米海軍佐世保基地における日本人従業員を事例として
共生文明学	芳賀由都紀	中世前期常陸国の武士
共生文明学	張　詩雋	観光と宗教　―中国チベット自治区ラサにおけるタンカの文化人類学的研究―
共生人間学	松波　烈	ゲーテの叙事詩『アキレーイス』のヘクサメタ研究
相関環境学	野坂卓史	偏光現象を題材とした実験に基づく科学入門教育教材の開発研究
相関環境学	周　慧	アフラトキシン B1 誘発 DNA 損傷修復における NBS1 の役割
相関環境学	堀　陽祐	中温領域における正極材料 Li_2FeSiO_4 の電気化学特性と結晶構造変化
共生人間学	山本純也	オリヴィエ・アサイヤス監督の『夏時間の庭』を中心にした映画作品分析　―アサイヤスにおけるシチュアシオニスム考察
共生文明学	鈴木啓峻	トーマス＝マンの Literat 概念について
共生人間学	秋山泰弘	デカルトにおける自己の存在とその認識
共生文明学	高瀬鎮磨	FSAプロジェクトと『ライフ』　―その相互関係と1930年代アメリカ写真史における意義―
共生人間学	中村舞夢	軽度高気圧酸素への滞在が安静時代謝に及ぼす影響
共生文明学	呂　亭玉	Oscar Wilde’s Mastery in Using Stage Effects and Symbolism（ワイルドのドラマツルギー・舞台効果とシンボリズム）
相関環境学	金井眞知子	CARD-FISH を用いた「天狗の麦飯」の群集構造解析
相関環境学	炭谷竜大	観測とシミュレーションとの比較による魚群のダイナミクス
共生文明学	松田和貴	出土木製遺物の水中保管時における劣化に及ぼす種々の環境因子の影響
相関環境学	加納孝太郎	ice line 近傍における氷ダストの凝縮・昇華による成長
共生文明学	藤井隆宏	二重の社会空間に生きる　―中国福建省土楼の住民生活をめぐって―
共生文明学	窪田　頌	戦国期大友氏の権力構造
共生文明学	花園真理	西谷啓治の「虚無の立場」における宗教的要求
共生文明学	浦上彩音	土佐光吉と近世初期風俗画
相関環境学	高岡昭平	液晶性ビラジカル化合物の合成と磁性に関する研究
相関環境学	川原康寛	日本本土産アオガエル類の系統分類学的研究

共生文明学	SMITH MICHAEL RYAN	The rumor-mitigating mechanism of Social Capital during the Tohoku Disaster（東北大震災における社会資本の働き）
共生文明学	木山智帆	近世初期日本におけるキリスト教と一向宗
相関環境学	櫻井亮介	鉄系高温超伝導体 $LaFeAsO_{1-x}H_x$ の核磁気共鳴実験
相関環境学	都築高志	水中潜葉虫ハスムグリユスリカの多様な水没葉の利用
共生人間学	山本悠人	主観的偶然性と情報社会　―リスク社会における心性をめぐる社会学的考察―
共生人間学	時　若洋	On the unified movement analysis of Chinese Passeves and their Linearization（中国語受動文の移動に基づく統一的分析とその線形化について）
相関環境学	寺脇智紀	銅触媒アジドーアルキン付加環化反応を加速する新規水溶性配位子の開発
共生人間学	木谷一登	Protein expression of signaling molecules regulating glucose and protein metabolism in rat skeletal muscle（ラット骨格筋における糖・蛋白質代謝制御に関わる情報伝達分子の蛋白質発現に関する検討）
共生人間学	小林倫子	The study of the Relationship between the Desire for Slimness and Visceral Fat Accumulation among Young Women（若年女性のやせ願望と内臓脂肪蓄積との関連性の検討）
相関環境学	西田　聖	Po-210 α 線源を用いたヘリウムイオン照射影響　―細胞ライブイメージングの開発
共生人間学	荻野陽平	Resveratrol suppresses protein and glycogen synthesis in rat skeletal muscle.（ラット骨格筋におけるレスベラトロールの蛋白質・グリコーゲン合成抑制作用に関する検討）
共生人間学	張　園媛	在日中国人の意識変容　－新老華僑と新来日中国人をめぐる考察―
相関環境学	中居　司	コアシェル構造を用いた固体高分子形燃料電池用触媒の設計指針の構築
共生文明学	内野　クリスタル　紀美	Excavating Shadows　―Japanese American subjectivity and the Geopolitics of a Hibakusha Memory（面影の採掘　―日系アメリカ人の主観性と被爆者の記憶に基づくジオポリティクス）
相関環境学	前川貴則	ミスマッチ修復機構におけるナイミーヘン症候群蛋白 NBSI の役割
相関環境学	谷川　透	京都市における長時間営業店強盗事件とその要因
共生人間学	岡野真裕	Entrainment on Human Quiet Standing Fluctuation（ヒトの静止立位動揺における引き込み現象）
相関環境学	黒石景友	Ce^{3+} 添加ガーネットセラミックスの電子構造制御による超長残光特性の発現
共生人間学	柴田優里	現代人の身体観　―アイプチ・メザイクを事例に―
相関環境学	大山　純	ペロブスカイト型酸化物の酸素不定比性と酸素還元、酸素発生反応活性
共生文明学	小林永規	W．ベンヤミンにおける〈中断〉の思考
共生人間学	武　小云	英語を媒介とした日本語複合動詞の習得　―中国語母語話者を対象として―
相関環境学	香山貴彦	動的な ESR スペクトルの解析
相関環境学	谷口暢子	無励起光型イメージングを指向した長残光蛍光体ナノ粒子の開発

共生文明学	井上彩織	地域住民による自治活動の持続的運営に関する研究　―京都市粟田学区を中心として―
相関環境学	田村竜一	機能性含窒素複素環カルベン配位子を有する新規イリジウム錯体触媒の合成と水溶媒中での脱水素的変換反応の開発
共生人間学	平井瑛子	九鬼周造における芸術論　―日本の美的理念について―
共生人間学	久保　豊	An Analysis of the Significance of Japanese Home Movie through Consideration of the Relationship between the Filmmakers and the Subjects（映画撮影者と被写体の間における人間関係性の考察によるホーム・ムーヴィーの意義分析）
共生人間学	山田麻友美	The cellular mechanism of metformin-induced glucose uptake in isolated rat skeletal muscle（ラット単離骨格筋におけるメトホルミンの糖輸送活性メカニズムに関する検討）
相関環境学	佐野隼人	機能性ビピリドナート配位子を有する新規ルテニウム錯体触媒の合成とアルコールの脱水素的酸化反応における活用
共生文明学	津田拓人	「全体性」をめぐる葛藤　―R.ムージルのエッセイ的思惟におけるモデルネの問題性
共生文明学	楊　柳	居酒屋とその常連客に見る独居中高齢者の文化人類学的研究
共生人間学	ABRAHIMOVICH YULIYA	日本語複合動詞とロシア語接頭辞 vy-, za-, ot- 付加動詞の対照言語学的分析の試み
共生文明学	大形　綾	『イェルサレムのアイヒマン』再考　―ハンナ・アーレント、もしくはあるユダヤ人女性の肖像―
共生人間学	坂本祥太	Wasserstein 計量を用いた運動論的 Fokker-Planck 方程式の解の構成
共生文明学	湯　笑	川劇「白蛇伝」の変遷
共生人間学	金田拓巳	ヒト記憶過程における情動生成の効果に関する fMRI 研究
相関環境学	佐々木皓平	親水性チャネルを有するジペプチドの合成、結晶構造、および気体吸蔵特性
共生文明学	藤田幸一	『法王庁の抜け穴』と『新動物心理学』　―アンチームの科学研究に関する記述を中心として
共生人間学	小澤良祐	Physiopsychological approach to the return trip effect : Why the return trip seems shorter ?（往復効果の生理心理学的検討　―なぜ帰り道は短く感じられるのか）
共生人間学	水須詩織	近代日本における「表情」の諸相
共生人間学	方城素和	Three-dimensional changes in rectus femories muscle architecture during contractions（筋収縮時における大腿直筋の筋構造の三次元的変化）
相関環境学	酒井翔太	琵琶湖における Acaryochloris spp. の時間的・空間的分布と遺伝的多様性
相関環境学	立園裕美	傾斜型表面培養法による油脂蓄積微細藻類バイオマス生産の効率化
共生人間学	羅　雅楠	京都における擬洋風建築
共生人間学	TERZI　INNA	女性が主導する東日本大震災からのコミュニティ復興　―ボランティアとの協同を通じた農村コミュニティの活性化に向けて―
共生文明学	玉置紗芸	近代京都の都市空間における私鉄交通網の起終点に関する研究
共生人間学	藤井　陸	視覚性ワーキングメモリ表象における物体特徴の抑制と神経機構の解明

相関環境学	佐々木　和　子	有機導体におけるディラック電子の安定化条件
共生人間学	石　川　真　帆	iPS 細胞由来の生殖細胞・胚をめぐる倫理的議論　―iPS 細胞の道徳的地位を中心に―
共生人間学	尾　島　智　子	A Study of Earnest Hemingway's Early Short Stories　―In Consideration of the Phonetic Aspects（アーネスト・ヘミングウェイ初期短編作品研究　―音声的側面を考慮に入れて）
相関環境学	今　田　弓　女	Origin and diversification of the bryophyte-feeding snipe flies（Diptera: Rhagionidae）（コケ植物食のシギアブ科の起源と多様化）
相関環境学	吉　原　朋　弘	細胞内生理活性物質の時間分解検出を指向した蛍光性希土類錯体の開発
相関環境学	白　石　巧　充	機能性配位子を有するイリジウム錯体触媒の高性能化と可逆的脱水素化／水素化反応における利用
共生文明学	巫　　靚	日本帝国崩壊直後の在日中国大陸籍者と台湾籍者の移動：占領期を中心としたその諸相（1945～50年）
相関環境学	安　藤　明　博	2次元光格子中のボース気体の相図の探索
共生人間学	岩　永　宇　央	論文・キーワードネットワークの可視化を利用したサーベイ活動・発想支援システム
相関環境学	米　田　　舞	CCR5 かつ中和抵抗性の新規 SHIV の開発と解析
共生人間学	吉　田　千　裕	デーブリーン『ベルリン・アレクサンダー広場』におけるモンタージュ
共生人間学	水　谷　忠　央	自閉症スペクトラム障害者における運動と視覚性記憶との関連性について
共生人間学	藤　井　達　也	アッバス・キアロスタミ作品研究　―虚構世界と現実世界との混淆、フレーム内／外を越境する視線、音、そして風景―
共生人間学	孫　　詩　雨	学歴による社会移動と格差形成　―日中学歴社会比較の視点から
共生人間学	劉　　迎　春	カラチン王妃を通じて見る「毓正女学堂」　―日露戦争から辛亥革命期まで―
共生人間学	芦　田　祥　世	日本人留学経験者の語りから見る異文化間能力の表象
共生文明学	林　　文　子	フランス復古王政期の決闘
共生文明学	KELEURIDZE　NINO	日本語におけるカタカナ言葉の普及とその原因　―グローバリゼーションの観点から―
共生文明学	山　本　みなみ	頼朝死後の鎌倉幕府と北条氏
共生人間学	釜　屋　憲　彦	ヒト記憶過程における過去と未来への思考を媒介する神経基盤
共生人間学	高　野　　梓	Constipation and its association with lifestyle and physiological characteristics in young women（若年女性における便秘とライフスタイルおよび生理学的特徴との関連）
共生文明学	松　井　臣　央	京都の歓楽街におけるクラブ・ホステスの感情労働　―顧客との相互作用という視点から―
共生人間学	清　水　依　子	幼児期における手指把握操作と実行機能の発達連関
相関環境学	小　林　昌　登	機能性ビピリジン配位子を有するイリジウム錯体触媒を用いた糖類ならびに多価アルコール類からの水素生成
共生文明学	袁　　典	1920年代青島における労働運動

共生文明学	鈴木隆志	滋賀県長浜市旧長浜町域における都市構造に関する研究　―水系の調査を通して―
共生文明学	豊田智夏	社会と個人の存立について　―ジンメルと和辻の比較を通して
相関環境学	奥田　恒	世界の貧国に対する寛容のリベラリズムのアプローチ　―クカサスの政治理論を手がかりに
相関環境学	酒向慎之介	固体酸化物型燃料電池における固体・気相界面の反応機構の解明
共生人間学	大久保杏奈	仮想的な世界とテンス・アスペクトの関係について　－英語仮定法過去を中心に－
共生人間学	平井　森	In vivo quantification of viscoelasticity in human（生体内におけるヒト粘弾性の定量）
共生人間学	清水詩子	受動回転に対する再現方法と再現精度の関係
共生人間学	伊藤哉太	Gallic acid induces insulin-independent activation of insulin signaling in rat skeletal muscle.（ラット骨格筋における没食子酸のインスリン非依存的インスリンシグナルの活性化に関する検討）

平成26年度

共生文明学	井本はるな	和辻倫理学における「存在」の構造について
共生文明学	近藤晶生	ハイエクの自由論における保守主義的方法と「革新的伝統」
共生文明学	王　思韵	「副末升場」の再考
相関環境学	乾　智香子	タンニンによる化学防衛の最適性に関する研究　―オオバギ属アリ植物Macaranga beccarianaにおける個体間・個体内変異―
共生人間学	川東龍貴	文化外交からみた日仏文化交流機関の起源　―東京フランス学院の計画から関西日仏学館の設立まで―
共生人間学	眞部和也	『信じる意志』における「根本的経験主義」
共生文明学	中野志穂	段玉裁『説文解字注』における会意と形声及び部首について
共生文明学	橋本有加	Male Supremacy in *The Faerie Queene*: Spenser's images of women and sovereigns（*The Faerie Queene*における男性の優位性　―Spenserの描く女性と為政者）
相関環境学	西山由利子	日本列島におけるササの潜葉虫相と潜葉虫各種の潜孔様式
共生人間学	施　一鳴	From Silence to Voice　―A Study of *The Joy Luck Club*（沈黙から発声へ　―「ジョイ・ラック・クラブ」研究）
共生文明学	武田惇志	Deconstructing and Reconstructing National Identity in Jesús Colón's Diasporic Discourses against Racism（ナショナル・アイデンティティの解体と再建　―レイシズムに抗するヘスス・コロンのディアスポラ的言説―）
共生文明学	王　美栄	改革開放以降の中国若者の公民意識と民主意識　―ネット民主について―
共生人間学	吉田暁絵	ルネサンスの《受胎告知》　―建築空間と観者との関係から―
共生人間学	佐藤実紗	The Functions of Mother-Daughter Relationship in the Principal Theme of *Pride and Prejudice*（『高慢と偏見』の中心的テーマにおける母娘関係の作用）
共生人間学	小泉珠代	The relationship between word definition ability and paraphrasing strategies in EFL learning（英語学習における語の定義能力とパラフレーズ方略との関係性について）

共生人間学	石黒加那	ジョン・デューイの共同体論
共生人間学	飯田美紅	シュティフターの『森の小道』における「変身」のモチーフをめぐって
共生文明学	陳　暁梅	中国農村におけるガバナンス構造の変遷研究　―陝西省咸陽市礼泉県を事例として―
共生人間学	伊藤弘了	小津安二郎映画における特異な空間設計および人間精神表象の連関性について
共生人間学	宮崎和人	CMC における秘密への配慮の必要性
相関環境学	田中翔二郎	プロピレン水素化反応における担持白金触媒の担体と白金粒子サイズの効果
相関環境学	佐藤万純	融剤法により調製したチタン酸塩光触媒の形状と二酸化炭素還元活性の相関
共生文明学	張　是宗	「長寿・養生の聖地」についての文化人類学的考察　―中国南西部巴馬をめぐって―
共生人間学	橋本伸二	Phase-free Syntax：Transfer α（フェイズなしのシンタックス：α 転送）
相関環境学	WONG SATO AKIRA ARMANDO	Pollinator-attracting function of showy sterile flowers in Hydrangeaceae and Adoxaceae.（アジサイ科とレンプクソウ科における装飾花の送粉者誘引機能）
共生人間学	斎藤幹樹	容認性判断に関わる認知的要因　―認知文法的観点からの分析―
相関環境学	田所大輔	ポリトリメチレンテレフタレートの成長速度測定による中間相の存在検証
共生人間学	崔　■	映画監督今村昌平論　―根源の探求―
共生文明学	會沢一真	文壇復帰後の鴎外作品におけるリルケ受容の諸相
共生人間学	丌　唯唯	An Analysis of Tasks in EFL Textbooks in China（中国における「外国語としての英語」の教科書のタスク分析）
共生人間学	長沼剛史	フランス語の指示形容詞を用いた総称文の統語と意味　―談話モデルの観点から―
相関環境学	久保健治	多層 Dirac 電子系における輸送現象
共生文明学	栗村亜寿香	ロールズ『正義論』再考　―偶然性に関する直観の位置づけ―
共生人間学	辻田那月	The link between depression and diet or exercise（うつと食事・運動との関連）
共生人間学	劉　烜暢	越境するアニメーション　―中国における日本アニメの受容をめぐる考察―
共生人間学	富永仁志	集合的な失敗が包括的認知傾向に与える影響について　―協同演奏課題を用いた検討―
共生文明学	原　優子	中国の農民工子女の義務教育問題　―上海を中心に―
相関環境学	大野智輝	クロロフィル f 産生シアノバクテリアにおける蛍光特性の多様性
共生人間学	瀧田奈穂子	ディズニー・アニメーションにおけるヒロイン像の革新性の研究
共生人間学	貫井　隆	『存在と時間』における「本来性」と「非本来性」の関係
共生文明学	岩佐厚太郎	ソシュールとマルクス　―言語と貨幣をめぐって―
共生人間学	杉本　光	他者との社会的関係性によって変化する記憶記銘時の神経活動

共生人間学	石原　馨	Myhill-Nerode の定理の圏論的表現とその応用
共生文明学	佐藤稜介	戦国初期における室町幕府と寺社勢力
共生人間学	MARCIO MAKOTO NISHIDA	The Acute Effects of Belt electrode Skeletal muscle Electrical Stimulation（B-SES）on Myokines Plasma levels.（ベルト電極式骨格筋電気刺激法による筋由来ホルモン濃度への一過性効果）
共生人間学	古田章人	「排除型社会」における「炎上」についての考察
相関環境学	春木達郎	中温作動型有機ハイドライド燃料電池の構築
共生人間学	鈴木大地	Implementing Communicative Language Teaching in Japan： Classroom teachers' interpretations of government policy for English education（日本におけるコミュニカティヴな言語教育の実施に向けて：教師による英語教育政策の解釈）
共生人間学	渡邊健太	「ニート」という言葉の考察
共生人間学	山元さゆり	The Categorization of Ingestive Appetite and the Analysis of those Circadian Rhythm （食欲の分類とそのリズムの解析）
共生人間学	柳田真弘	関係性から探る道徳教育の可能性　―「居場所」をつくる小学校のエスノグラフィーから―
相関環境学	日笠有利	ヒドロキシ基を配したポルフィリン誘導体の合成、結晶構造、および気体吸着特性に関する研究
共生人間学	田中　俊	現象学的エポケーにおける中立性変様の働きについて
共生人間学	菊池　隆	植民地主義の文明観、人間観、教育観　―L. ソシュール「Psychologie de la colonisation française」を通じて―
共生人間学	中島敬之	外国語教育におけるe-ラーニング利用に関する一考察
共生人間学	須田珠生	初等学校校歌への期待　―文部省、学校、作詞家・作曲家の三者の立場から―
共生人間学	宣本花凛	自伝的推論が記憶に与える影響とその脳内機序の解明
共生人間学	山脇真里	The effects of Belt electrode Skeletal muscle Electrical Stimulation（B-SES）on Irisin plasma levels.（骨格筋電気刺激の血中アイリシン濃度に与える影響）
共生人間学	川端あずさ	Identification of postural control based on muscle synergies.（筋シナジーに基づく姿勢制御の解明）
共生人間学	山田勝哉	自己分析と主体化
共生人間学	西尾貴広	物体質感の視覚性長期記憶
共生文明学	宋　瀟	王から天皇へ　―日本、中国における尊王思想の比較研究を中心に―
相関環境学	花咲晃平	ボース・アインシュタイン凝縮体の局在化にともなう位相ゆらぎ
共生人間学	小川陽香	英語の描写構文に関する構文文法論的分析
相関環境学	武元佑紗	メタルフリーキラル有機磁性ソフトマテリアルの開発
共生人間学	楊　蕊寧	日本語母語話者の中国語鼻音韻母の産出と知覚における特徴　―先行子音が破裂子音の場合―
相関環境学	籔内由貴	スイッチング機能を付与した長残光蛍光ナノプローブの開発

共生人間学	町田奈緒子	Effects of concept mapping on writing skills in EFL learning（外国語としての英語学習におけるライティング技能に及ぼす概念マップの効果）
相関環境学	岡　希美	「新規学卒者の採用・選考に関する倫理憲章」の改定による就職活動時期の後ろ倒しがもたらす「採用内定」・「採用内々定」の法的意味への影響について
相関環境学	井村綾子	寒天培地上での生育速度を指標とした微細藻類株の選抜
相関環境学	古川翔一	新規水溶性 NH Cイリジウム錯体触媒を用いたアンモニア水を窒素源とするアミン合成法の開発
共生人間学	赤桐　敦	19世紀末中国における民衆への言語教育観の変化　―盧戇章と『万国公報』上の論説、梁啓超への影響を中心に―
相関環境学	竹内智亮	金属添加酸化チタン光触媒を用いた炭化水素のシアノメチル化反応
共生人間学	佐々木英晃	Out の動詞不変化詞構文の多義性に関する認知言語学的分析　―英語教育の観点から―
相関環境学	若林智美	Comparison of genetic background of flowering time variation among Lotus Japonicus in Japan based on whole-genome sequences.（全ゲノム配列を使った日本産ミヤコグサの開花時期多様性に関わる遺伝的背景の比較）
共生人間学	梁　悦	宝塚少女歌劇における「恋する青年」をめぐる力学　―1910年代から1930年代前半までを中心に―
共生人間学	GOH SHU LI	Investigating the sociocultural accounts of SLA through the TL interactions of Japanese EFL learners using the MMORPG Torchlight.（第二言語習得研究における社会文化的アプローチSLAを通じてトーチライトと言う大規模多人数同時参加型オンライン RPG MMORPG に日本語母語話者が対象言語TLを相互交流の中で使用することを取り調べる。）
相関環境学	石原潤一	白金パラジウムコアシェル触媒の酸素還元反応活性支配因子の解明
共生人間学	金田伊代	ターミナルケアにおける神職の可能性
相関環境学	下坪拓也	アミノ酸から合成される NTA 配位子を用いた高 His-tag 親和性配列の探索
相関環境学	小西英史	On the quasi-stationary states in the Hamiltonian mean field model（ハミルトニアン平均場模型における準定常状態について）
共生人間学	邱　旭元	日本語と中国語の四字熟語に関する意味論的・統語論的研究
共生人間学	小林和之	ジョン・ロックの数と無限
共生人間学	三浦拓馬	レヴィナスの他者論についての考察
共生文明学	吉田守伸	東日本大震災をめぐる記憶の布置
共生人間学	伊藤良平	ジョージ・ブレクトのイヴェント・スコア　―1950～60年代の活動に見るその形成と発展―
共生文明学	吉村美和	民族浄化の記憶　―コソボにおけるアルバニア人の視点から―
共生人間学	芹澤康浩	Salicylate-induced activation of 5'-AMP-activated protein kinase in rat skeletal muscles（ラット骨格筋におけるサリチル酸によるAMPキナーゼの活性化に関する検討）
相関環境学	原　大樹	近年における犬殺処分数減少の実態と要因解明
共生文明学	森　咲花	宋版『仏国禅師文殊指南図讃』の研究　―大東急本の検討および日本における受容と変容をめぐって―

共生人間学	岡部亜美	無生物主語を伴うHAVE構文の特徴　―西ゲルマン語間の比較を通して―
共生文明学	十亀了郁	中江兆民の「君民共治」論の検討
相関環境学	久野真央	ゲノム編集酵素によるファンコニ貧血原因遺伝子FANCAのノックアウト細胞作製
共生文明学	陳　馳	平安時代における観月の受容と変容
共生文明学	王　怡然	清末の杭州と日本　―開港理由と貿易実態を中心に―
共生文明学	安達千李	死者とつながる　―東日本大震災後の社会空間における「霊」と「故人との出会い」について―
共生文明学	奥田俊介	ケネディ政権の対アフリカ・パブリック・ディプロマシー　―教育外交を例として―
共生人間学	横井　郁	The effect of autonomic nerve activity on motor output（運動出力に及ぼす自律神経活動の影響）
相関環境学	記虎日香里	サラノキ属の高木Shorea guadrinervisに営巣するアリ類に関する生態学的研究
共生人間学	王　菲嫣	日中比較から見る現代青年の友人関係の特徴について
共生人間学	藤田亜弓	スペイン語接続法の伝達機能に関する認知的研究
共生人間学	中谷　森	鈴木忠志演出『リア王』の考察　―メタシアターの翻案とその手法―
共生人間学	田丸歩実	形容詞化とメタファー性に関する認知的研究　―英語の名詞派生形容詞を例に―
相関環境学	相川卓哉	イリジウムと機能性配位子の協働触媒作用に基づくメタノールの効率的脱水素化反応
共生人間学	木村英莉子	話し言葉についての一考察　―疑問付加語句をもとに―
相関環境学	浅野　郁	ボルネオ島低地フタバガキ混交林において連続して発生した2回の一斉結実に対する果実食性昆虫の反応
共生文明学	稗田尚人	藤原道長の別業について　―別業経営の目的と道長の政治―
共生人間学	川本美希	戦前のフランス語教育に見られる受信型外国語教育　―明治・大正期の第三高等学校を中心に―
相関環境学	盛田陽子	ラセミ体の医薬・アミノ酸の優先富化現象
共生人間学	服部浩二	タイプステート付きコルーチンによるプログラミング
相関環境学	陳　科政	全固体系リチウム二次電池における反応律速過程の解明
共生人間学	藤原征生	映画監督・稲垣浩による1943年版ならびに1958年版『無法松の一生』の音響と映像の構成についての比較分析研究
相関環境学	中原裕喜	新規無機太陽電池のための金属酸化物の作製とその光電物性評価
共生人間学	福間加代子	世紀末を映す肖像　―グスタフ・クリムトの肖像画をめぐって―
相関環境学	家弓朋広	パイロキセン型結晶構造を有するMn蛍光体における赤色長残光の発現
共生人間学	雑賀広海	映画における成龍（ジャッキー・チェン）という男の身体研究
共生人間学	叶　好秋	住民による政策立案システムに関する研究　―鳥取県智頭町：百人委員会の事例―
共生文明学	足立亮祐	フリードリヒ・ルートヴィヒ・ヤーンのトゥルネン運動　―その理想と現実―

共生人間学	藤井亮輔	2モード・グラフにおけるクラスター係数について
相関環境学	橋本篤典	ガーネット組成を有するガラス及びセラミックス蛍光体の蓄光残光特性
共生人間学	李　白	日本語母語話者による中国語単音節語の分析　―そり舌音 |zh|、|ch|、|sh|、|r| と歯茎音 |z|、|c|、|s| 及びその後続母音を対象として―
共生人間学	佐近一翔	The effect of acute heat stress on signal transduction pathway associated with glucose metabolism in skeletal muscle.（急性熱ストレスが骨格筋の糖代謝関連シグナル伝達に及ぼす影響）
相関環境学	服部将司	マグネシウム二次電池負極反応機構の解明と活性向上
共生人間学	原　塁	武満徹の創作に関する一考察　―シェーンベルク及びケージとの関わりから―
共生人間学	SCORUS OANA LOREDANA	日本文化における間（ま）の構造　―回遊式庭園をめぐって―
相関環境学	近藤　望	Major element composition of the missing reservoir: Implication for the early Earth differentiation（失われた貯蔵庫の主成分元素組成と初期地球の分化）
共生人間学	藤木恵里	現代日本における「目力」の諸相
共生人間学	林　元寧	EFL Learner task-based interaction in the commercial MMORPG Game Torchlight 2（外国人英語学習者の商業オンラインゲーム Torchlight 2 における課題学習相互作用の考察）
共生人間学	嶋﨑　絢	The instruction of connected speech features for improving EFL learners' listening skills（英語聴解力の育成を目的とした音声変化の指導）
共生人間学	安藤勝哉	ドゥルーズ哲学における速度の概念について

平成27年度

共生文明学	廣田洋夫	アンボイナの虐殺　―その日本史、東洋史そして西洋史からのアプローチ
共生文明学	中川大二郎	17世紀イングランドにおけるジェントルマン教育と学問の受容変化　―コンダクト・ブックを手がかりにして―
共生文明学	魏　安然	Beyond Light and Shadows：US-China and Japan-China Relationship in 1998 Reflected in Two Transnational Films（光と影を越えて　―2つの国際映画に投影された1998年の米中・日中関係―）
共生人間学	宮田　渚	ジョルジュ・バタイユの闘牛をめぐる考察　―恍惚の交流：闘牛士、牡牛、観衆
共生文明学	金　ソニア	在韓「在日コリアン・韓国系アメリカ人」の逆移民者たち　―移動から「ハイブリディティ」と「ディアスポラ」を考察する
共生文明学	合原織部	野生の反乱：土地を守る山村住民と山で闘う猟師たちの民族誌　―宮崎県椎葉村を事例に―
相関環境学	豊澤宗史	「道の駅」の経済波及効果
共生人間学	野村敦子	画商アンブロワーズ・ヴォラールと画家たち　―近代と現代の狭間で
共生文明学	寺岡郁夫	ウクライナの総合的地域区分　―州の共通性に着目して―
共生人間学	石田友里	宗教改革期アントウェルペンの版画と書物　―キリスト教印刷物におけるイメージの役割―
共生人間学	高橋　純	ジョン・ロック『統治二論』における抵抗権について

相関環境学	中村仁哉	ホスト単結晶の空孔中に固定したラジカル分子の ESR 測定
共生人間学	小泉嘉輝	“Like, yet Unlike” : A Study of Jack London’s Literary Protest against Animal Writers（「似て非なるもの」－ジャック・ロンドンによる動物物語作家に対する文学的抗議の研究）
共生人間学	平井佑未子	古高ドイツ語の動詞接頭辞 bi- が付与する意味についての考察
共生人間学	松永健太	The relationship between intermittent muscle activities and joint accelerations; interactions between multi body segments during quiet standing（静止立位時の多リンク間相互作用における間欠的筋活動と関節加速度の関係）
共生人間学	中道和輝	Williams 症候群者における社会的認知特性が顔記憶に及ぼす影響に関する検討
共生人間学	末續鴻輝	不連続な目標形を含む、1次元盤面におけるハラリィの一般化三並べ
共生人間学	岩室汰一	主観的経験の伝達における言語的客体化の諸相　―オノマトペ・直喩による痛み表現を事例に―
相関環境学	河口尚登	Hドープ La1111 系超伝導体の高圧下相図：圧力による反強磁性相の消滅
相関環境学	浅井悠志	グリシンとフェニルアラニンを基体とするジペプチドN末端保護体の合成、結晶構造、気体吸着特性に関する研究
相関環境学	田口晃治	ディスコティック液晶性ビラジカル化合物の合成と磁性に関する研究
相関環境学	小澤亜耶	The genesis of carbonatite as an inorganic concentration of phosphorus（無機的なリンの濃集過程としてのカーボナタイト生成過程の解明）
共生人間学	岡本直美	女子大学生の死生観に関する報告と考察　―15年間の授業前調査データが示すもの―
共生人間学	樋田智美	言語学、心理学、音楽学、神経科学からみる SLA 研究への学際的考察：言語的能力と音楽的能力の相互作用
共生人間学	川上　陽	大学生における運動部活動への参加動機と精神的健康度との関連
共生文明学	晏　榕梓	Iターン移住者の文化人類学的研究　―高知県の山村の事例から―
共生人間学	鎌倉裕介	シーンの意味と構造が眼球運動に与える効果　―写真画像とノイズ画像の比較研究―
共生人間学	神田真里	発達障害に対するステレオタイプとその影響診断の有無に着目して
共生人間学	中村未樹	観光空間におけるハラール認証表示　―ハラールはだれのためのものか―
共生人間学	西岡かれん	Transcending Borders : A Comparative Study of *Pylon* and *The Tarnished Angels*（境界を越える　―『標識塔』と『翼に賭ける命』に関する比較考察）
共生文明学	権藤拓樹	1870年以降のミュンスターにおける都市化と旧市街
相関環境学	豊村一期	機能性配位子を有する新規遷移金属錯体の設計ならびに合成と触媒的脱水素化反応における活用
共生人間学	横川拓海	Dehydroepiandrosterone activates AMAP kinase and regulates GLUT4 and PGC-1α expression in C_2 C_{12} myotubes（C_2 C_{12} 骨格筋細胞において、デヒドロエピアンドロステロンは、AMP キナーゼを活性化し、GLUT4 ならびに PGC-1α の遺伝子発現を制御する）
共生人間学	伴　友太	フレーゲにおける言語の「論理的欠陥」について　―不飽和な概念と飽和な対象―

共生文明学	川野正嗣	ユンガーにおけるニヒリズムの克服　―「惑星的動員」と「森への亡命」―
共生文明学	劉　天野	中心市街地における商業分布の日中比較研究　―長春市と京都市を例として ―
共生文明学	杉山裕紀	村上春樹『スプートニクの恋人』論
共生文明学	上田貴美	坂口安吾の歴史関連作品における先行文学作品の受容
共生人間学	勝間田智佳	月経痛に対する軽度高気圧酸素の効果
共生人間学	美濃部貴子	Mark Twain's Mysterious Strangers and Humor in *The Mysterious Stranger Manuscripts*（『ミステリアス・ストレンジャー・マニュスクリプト』におけるマーク・トウェインのミステリアス・ストレンジャーとユーモア）
共生人間学	白木善英	Effects of visual information around the target on motor planning process in dart-throwing task.（標的周辺の視覚情報がダーツ投矢課題における運動計画過程に及ぼす影響）
相関環境学	杉谷和哉	「よそ者」としての自治体職員　―大阪府能勢町の事例を手がかりとして―
共生人間学	許　多	「満洲国」時代における日本語普及政策下の日中両言語の接触実態　―接触言語としての「協和語」に対する考察をめぐって
共生人間学	溝上瑛梨	Hierarchical Voices：the Viewpoint of Free Indirect Speech in English（階層的な声：英語における自由間接話法の視点）
共生人間学	岡久太郎	誤解から見る発話理解過程　―記述的研究と理論的研究との接合に向けて
共生人間学	吉田響子	The Change of the Heroine's World View Reflected in the Astronomical Representations of *Tess of the d'Urbervilles*（『ダーバビル家のテス』の<天体の表象>に見られる女主人公の世界観の変容
相関環境学	武藤清明	日本産両生類の卵に共生する単細胞緑藻の多様性
共生文明学	田中健太	「オールド・ファーム」とは何か　―フットボールのダービーマッチから見る19・20世紀のグラスゴー
共生人間学	篠原沙羅	トランシルヴァニア・ザクセン語における auch の並列接続詞的用法に関する考察：言語接触の観点から
共生文明学	時政和輝	山鹿素行思想の全体像　―その思惟構造と一貫性についての考察 ―
相関環境学	岡本大督	高分子配向非晶からの結晶化
共生文明学	西薗厚徳	法律社会制度の観点から捉えるオンデマンド労働の現状分析　―Uber, Airbnb, クラウドソーシングを事例に
共生文明学	進藤翔大郎	戦後日本を舞台とした米ソ情報戦の幕開け　―引揚・復員を視座として―
共生文明学	高倉ニルス	日本沿岸漁業における海洋資源管理と漁民信仰　―京都府伊根町を事例として―
共生人間学	松坂茉衣子	スパイク・リーのブラック・コミュニティへの眼差し　―『スクール・ディズ』、『ゲット・オン・ザ・バス』を中心に
共生人間学	中村薫平	「ネット右翼」の言説分析　― 蹉跌のナショナリズム
共生人間学	劉　幸	中国における「第三の消費文化」に関する一考察　―「文芸スタイル」現象を中心に―

相関環境学	郡司未佳	細胞周期チェックポイントタンパク質 Rad 9 のリン酸化依存的な相互作用ネットワークの解析
共生人間学	浅野龍平	情動刺激を用いた閾下プライミングが顔記憶へ及ぼす影響
相関環境学	伊田尚馬	リチウムイオン二次電池合剤電極における反応分布解析
相関環境学	大谷和史	中温型溶解塩を用いた $LiFePO_4$ 相変化挙動解明
相関環境学	川原崎　悟	金属添加酸化ガリウム光触媒を用いたメタン転化反応
共生人間学	森本　光	A Book against "Unity"：The Rationale of Poe's *The Narrative of Arthur Gordon Pym*（「統一性」に反する書物　―ポーの『アーサー・ゴードン・ピムの物語』の原理）
共生文明学	町田耕一	武者小路実篤「人間万歳」論　―知識と思想と社会の交わり―
共生文明学	竹鼻千尋	モーリス・ブランショにおける主体の放棄　―身体的死の観点から―
共生人間学	伊集院　悠	エドワード・ヤンの映画様式　―多元的映画空間のメカニズム―
相関環境学	亀岡慎一郎	Genetic structure of Hepatica nobilis var. japonica, focusing on within-population flower color polymorphism（ミスミソウの集団内花色多型に着目した集団遺伝構造解析）
共生文明学	韓　知延	李御寧の初期「韓国文化論」に関する研究　―創造された「韓国」とその主体性―
相関環境学	道久真理絵	Analytical investigation of partitioning behavior of F, Cl, H_2O between apatite and melt inclusion from pyroclastic flow deposits of Aso volcano（阿蘇火山火砕流堆積物中のアパタイトーメルト間の F, Cl, H_2O の分配挙動に関する分析と考察）
共生人間学	小國有紀子	ドイツ語における心態詞の文法的機能に関する研究
共生人間学	柴田芽衣子	物体に内在する色特徴が共に記憶された形特徴の知覚に及ぼす影響
共生人間学	内田雄介	Strategies for synergistic muscles during prolonged motor task（長時間の運動タスクにおける協働筋の制御ストラテジー）
共生文明学	杜　之岩	砂岩製文化財の劣化に及ぼす環境因子の影響　―七本官軍基地にある下浦砂岩製墓石を例として―
相関環境学	中村隆司	自動車の排気ガスの総 OH 反応性と反応性微量成分濃度測定及び高 NO 濃度における OH 反応性測定手法の開発
共生人間学	吉中真優	Effects of formulaic sequence instruction on Japanese EFL learners' listening comprehension（チャンクに焦点を当てた指導が日本人EFL学習者のリスニング能力に与える影響）
相関環境学	蔭山　智	有機導体における局在モーメント効果
共生文明学	楊　雯	江戸時代後期の漢詩文における「和習」の考察　―『月瀬記勝』を中心に
共生人間学	桑原　彩	前頭葉損傷を持つ児童の遂行機能の評価へのアプローチ
共生人間学	熊切俊祐	顕著性とアンサンブル情報の視覚探索における効果の比較
共生文明学	合志信之介	マックス・エルンスト作品にみられる初期映画の諸相　―「ダダ・マックス・エルンスト展」を手掛りに

共生人間学	曲　光鈺	Time interval estimation during passive whole-body rotation（身体の受動回転が時間間隔の見積りに及ぼす影響）
相関環境学	今西洋裕	中温作動型有機ハイドライド燃料電池の基礎研究
共生人間学	吉岡　宏	表層の深淵　―パロディとアンチ・クライマックスの系譜学
相関環境学	吉川和挟	地方自治体における行政訴訟に対する行政の応答
共生人間学	佐々木　良	No Phase but Labeling／Transfer（ラベルによるフェイズ理論への試み）
相関環境学	後藤良輔	2次元光格子中における原子の局在と遍歴
相関環境学	名倉康太	メタルフリー有機磁性ナノエマルションの調製と磁性
共生人間学	吉川真未	認知文法の観点から見る響鳴
相関環境学	岩浅拓也	ボルネオの熱帯雨林に生息するアリグモの食性：安定同位体分析による解明
共生文明学	鈴木梨少	An American Skater? Kristi Yamaguchi, Midori Ito, and the Struggle For Japanese American Integration at the 1992 Olympics（アメリカンフィギュアスケーター1992年アルベールビルオリンピックのメディア表象に見る日系アメリカ人の同化）
相関環境学	田中雄飛	機能性配位子を有するイリジウム錯体触媒を活用した環境調和型カルボン酸合成法の開発
相関環境学	桶谷龍成	金属ポルフィリン結晶の水素貯蔵特性に関する理論的および実験的研究
共生人間学	有年敏樹	「すい」に関する一考察　―初期島原における遊興の美学―
共生人間学	坂本輝世	Applying Toulmin's argument model to English writing instruction（英語ライティング指導におけるトゥールミン論証モデルの適用）
共生人間学	井上優子	脅威刺激が情動誘発盲に与える影響
共生人間学	花澤想平	スーパー戦隊シリーズにおける悪役の役割
共生文明学	村上允俊	宇野段階論の方法論的再検討　―三段階論のなかの段階論―
共生人間学	許　粟侖	Women in *Tender Is the Night* : from "Daddy's Girl" to Dominant Women（*Tender Is the Night* における女性たち　― "Daddy's Girl" から Dominant Women へ）
共生人間学	村井幸輝郎	交差するユダヤと西欧　―シャルル＝ヴァランタン・アルカンの再考に向けて
相関環境学	岡林　輝	1次元反強磁性体におけるスピン輸送現象
共生人間学	大森悠希	Effects of mild hyperbaric oxygen on skeletal muscle of rats with metabolic syndrome（軽度高気圧酸素によるラットのメタボリックシンドロームへの影響について）
相関環境学	水場翔大	常温メタン水蒸気改質反応におけるタンタル酸ナトリウム及びチタン酸ナトリウム光触媒の構造活性相関
共生人間学	梅原克佳	ミシェル・フーコーの知の考古学について　―考古学と現在の診断の問題―
共生文明学	松岡孝明	グローバリゼーションと世界政治の構造　―英国学派国際関係論の視点から―
共生文明学	川﨑兼人	資本と商品流通　―論理による歴史の解明―
共生文明学	林　紗記	撮影者は何を撮るようになるのか？　～ 新潟県十日町市における自主制作映像をめぐって～

共生人間学	高橋一馬	Instructive Themes in *Gulliver's Travels*（『ガリヴァー旅行記』における教育的主題）
相関環境学	福尾奈央斗	水を電子源とした二酸化炭素還元反応におけるチタン酸カルシウム光触媒の構造活性相関
相関環境学	徳田洋介	水分解反応におけるチタン酸カリウム光触媒の助触媒効果と構造活性相関
共生人間学	片桐亜古	ルイジ・パレイゾン「形成性の理論」における一考察
共生人間学	竹村藍	Effects of background distance on kinematics of upper limb movements（上肢到達運動における背景の遠近が及ぼす影響）
相関環境学	金光浩志	二次元アンチドット型光格子中を流れる BEC の不安定性
共生文明学	GURENKO ANDRII	本居宣長の「道」思想に関する考察　～神の道に従って生きるとは何か～
共生文明学	龐岩博	地球観測衛星データを用いた移動経路推測の事例研究　―最小コストパスモデルに基づいて―
共生人間学	DE ALMEIDA BELEM IGOR EMANUEL	AFFECT IN TWO COLLECTIVIST CULTURES : JAPAN AND BRAZIL（集団主義文化における感情：日本とブラジルの比較）
相関環境学	橋本奈民子	新設中途停滞水域とその周辺域における水質変動
共生人間学	井寺利奈	The Veiled Handshake : A Study of *Wuthering Heights*（覆い隠された握手―『嵐が丘』の一考察）
共生人間学	谷川嘉浩	ジョン・デューイ宗教的経験論の解明　―Common の問題をめぐって―
相関環境学	石井承子	細胞融合による高機能肝癌細胞の樹立
共生人間学	日置瑶子	クリストとジャンヌ＝クロードの芸術活動における美と喜び　― 1960年代以降を中心に
共生人間学	木伏紅緒	Characteristics of muscle synergies in human walking（ヒトの歩行における筋シナジーの特性の解明）
共生人間学	樺木純	2色覚者の色の見えの多面的分析：言語課題と非言語課題を用いた検討
共生人間学	中川公貴	青年期の対人関係における、自己のあり方をめぐる葛藤
相関環境学	永野祐大	ジオールの触媒的脱水素化による効率的ラクトン合成法の開発と水素発生系への展開
相関環境学	小林貴宣	その場軟Ｘ線吸収分光法を用いた高容量リチウム過剰系正極の電子構造解析
共生人間学	井上拓也	〈場所〉を表す言語表現に関する研究　―アイヌ語の場所表現を事例に―
相関環境学	吉成崇宏	相境界を制御した二相系電極材料におけるトポケミカル反応の速度論的解析
相関環境学	小川祥大	水素による二酸化炭素還元反応における担持白金触媒の粒子径及び担体の影響
共生人間学	峯知里	課題非関連な刺激特徴と報酬の連合が価値駆動的に注意を捕捉する
相関環境学	淺見一喜	結晶場およびバンドギャップ制御による黄色ガーネット長残光蛍光体の創製
共生文明学	吉田崇志	クール・ブリタニア：国家ブランディングにおける政治とメディア
相関環境学	山本紳太郎	光電子分光法によるペロブスカイト型バナジウム酸化物の電子状態の研究

共生人間学	瀬良万葉	ローベルト・シューマン《楽園とペリ》考　―「新しいジャンル」の成立、展開、音楽的意義
相関環境学	弓山やよい	代謝工学によりカロテノイド組成を改変したシアノバクテリア Synechocystis sp. PCC6803 の解析

平成28年度

共生人間学	飯野顕志	開かれた仏教を目指す僧侶の試み　―若手僧侶の活動を事例に―
共生人間学	松本光生	高齢者における生きがいと終活についての研究　―納得の行く最期を迎えるための支援について―
共生文明学	Ma Beini	中国古代哲学思想から考える中華伝統文化の伝承
共生人間学	戸嶋祐貴	超越の手前で　―触覚、襞、物質
共生人間学	古賀野直樹	『存在と時間』における理解概念について
共生人間学	西村綾夏	「文体パロディ」から見る文体の構造　―「村上春樹風に」を例に―
共生文明学	藤井萌子	カナダ・北西海岸芸術学校における民族芸術と「先住民性」の生成
共生文明学	勝又阿暁	日系商店集積地の形成と発展　―デュッセルドルフ・インマーマン通り周辺を事例に
相関環境学	岸本伊織	日本の優勢樹種から放出される揮発性有機化合物の包括的な評価　―化学分析と OH 反応性測定―
共生人間学	檀朋美	サブカルチャーの発展における文化的企業の役割　―同人誌文化の隆盛―
共生文明学	石黒徹	儒者福沢　―日本の近代化と儒学的思惟―
共生文明学	久我彩乃	三島由紀夫「班女」論　―マルグリット・ユルスナール「沼地の対話」との比較をとおして
共生文明学	藤野志織	集団的な自動記述の批判的継承：シュルレアリスム・グループ解散後の実験を例に
共生人間学	志田雅美	現代女性と「不妊症」　―フェミニズムの視点から
共生人間学	新井翔太	アイオーン　―ファイナンス理論によるドゥルーズ時間概念の再構築と、それが拓く新たな哲学的可能性―
相関環境学	音石遼	2次元光格子中のボース凝縮体のバリスティックな振舞い
共生文明学	八重樫惟	サイバー攻撃の抑止に関する考察　―K.ウォルツの核抑止理論の応用―
相関環境学	後藤隆志	霧箱観察と線量測定にもとづく放射線教育の研究
共生文明学	矢持力	マイケル・ウォルツァーの介入論の研究を通じた jus ad vim の再考
相関環境学	小林大晃	生体イメージング応用を目指した深赤色残光蛍光体の作製及び特性評価
共生文明学	須賀佳澄	「超管理国家」に迎合する人々　―シンガポールにおける日常生活と逸脱
共生文明学	中田安曇	People's Voices in the Works of Ralph Vaughan Williams（レイフ・ヴォーン＝ウィリアムズの作品における人々の声）
共生人間学	徳岡樹	ハイデッガーの芸術論における「世界と大地」の問題
共生文明学	劉青	朱権養生思想研究　―『活人心』の仙術と医術

相関環境学	梶田舜平	メタノール水溶液からの長時間継続的な水素製造を可能にする新規触媒系の開発
共生人間学	今井晨介	異分野融合の促進に資する研究者ネットワークと学術分野の文化指標の分析と可視化
相関環境学	渡辺有人	オペランド軟X線吸収分光法によるリチウム過剰系正極の充放電反応機構の解明に基づく酸素レドックス反応の応用
相関環境学	秋場俊佑	硫黄を含むジペプチド化合物の合成、結晶構造、及び気体吸着特性に関する研究
共生文明学	BLONDEL JULIE SAKURA	20世紀前半における外国語教育改革のひとつの試み　―ルイ・マルシャンの「直接読解」と「図解入り直観法」をめぐって―
共生文明学	陳　冰妍	唐の『順宗実録』について
相関環境学	安藤加菜子	「仕事と子育ての両立支援政策」において政策対象者はどのように想定されているか　―内閣府男女共同参画局「仕事と子育ての両立支援策に関する専門調査会」議事録の分析より―
相関環境学	天沼創一朗	水を電子源とした二酸化炭素還元反応のための銀修飾層状チタン酸塩光触媒の開発
共生文明学	藤井慎太郎	『恐るべき子供たち』 *Les Enfants terribles* における姉弟の理想：現実・運命に関する考察を通して
共生文明学	谷口晴彦	農業用水をめぐる行政支援と用水汚濁の地域差　―光明池土地改良区を事例に―
共生文明学	周　皓夫	呉越国の経済開発について
共生人間学	勝野綾奈	色覚の遺伝子型と表現型の対応関係に関する認知遺伝学的研究
共生文明学	河内高志	生活としての政治　―石川三四郎の思想―
共生文明学	新田宏子	古代山陽道駅家の再検討　―土器から見て―
共生人間学	岸本真樺	生活保護制度における「教育」と「福祉」の問い直し　―教育扶助、高等学校等就学費を中心として―
相関環境学	加藤　梓	C_{60} 炭素ネットワークに固定された酸素分子が示す三重項状態の決定
共生人間学	槇　奈央	自閉スペクトラム症における立位保持
共生人間学	田中陽子	自然災害における宗教者の役割　～キリスト者の活動を中心に～
共生文明学	邵　天澤	立ち往生： 中国・西独「ベルン会談」をめぐる国際政治史 1964年
共生人間学	大野真澄	水平方位の記憶・再現の正確性は頭部の能動的な回転に影響される
相関環境学	尾原禎幸	光触媒によるシクロヘキサンとベンゼンの選択的直接クロスカップリング
共生人間学	魚住千晶	NHKテレビフランス語講座における「文化」の分析　―「テレビでフランス語」（2010年-2015年）を調査対象として―
相関環境学	新庄紗枝	全固体リチウムイオン二次電池における電極内反応分布解析
相関環境学	宗定暁之	リン酸鉄化合物におけるリチウムイオンおよびマグネシウムイオンのトポケミカル反応機構解析と特性評価

相関環境学	三浦篤史	新規キラル有機ラジカル液晶性化合物の合成と磁性に関する研究
相関環境学	加藤愛梨	薄膜モデル電極を用いた表面窒化 $LiFePO_4$ 正極の反応速度論解析
共生文明学	呉　雨 ■	『紅楼夢』劇における王熙鳳像
相関環境学	保田晃太郎	無機 EL 素子への応用を目指した希土類添加ペロブスカイト蛍光体の作製及び光物性評価
相関環境学	宮野　隼	希土類添加ガーネット長残光蛍光体の作製と電子トラップ解析
共生人間学	小倉息吹	パウル・クレーにおける抽象の問題　―中間領域の観点から
共生人間学	中村あゆみ	時間知覚と記憶の時間的順序判断における加齢の効果とその個人差
共生文明学	宇野榛華	“Pictures in our eyes to get Was all our propagation”:Mannerism, Neoplatonism, and John Donne’s Emblematic Language（「絵姿を目に映すことこそ我らの繁殖」　―マニエリスム、ネオプラトニズムとジョン・ダンの寓意的言語―）
共生人間学	陳　巧香	中国都市部におけるコミュニティ創造に向けた住民ネットワークの形成　―政策的・歴史的考察と事例研究
相関環境学	伊東賢介	気体試料中の反応性微量成分の総炭素濃度測定手法の開発および OH ラジカル反応の HO_2, RO_2 収率測定手法の開発
相関環境学	齋藤弘平	軟X線吸収分光法を用いた硫化物系正極材料の電子構造変化の解明
相関環境学	福本佳織	融剤法で調製したチタン酸ストロンチウム光触媒による可視光下水素生成反応
共生人間学	近藤真帆	＜病った私＞が＜育つ＞場としてのデイケア　―居場所型デイケアの積極的意義について―
共生人間学	陳　斯童	The role of visual information in the teaching of English pronunciation（英語音声指導における視覚情報の役割）
共生人間学	東根智樹	An Action Research on Instruction of Postmodification: The Hierarchical Teaching Method Based on the Lexical Approach（後置修飾の指導に関するアクションリサーチ：語彙中心アプローチに基づく階層的指導法）
相関環境学	川上朗彦	中和抵抗性かつ CCR5 指向性の新規 HIV-1rmt の構築
相関環境学	小寺健二朗	光電子分光による Ru, RuO_2 ナノシートの電子状態の研究
共生文明学	大門美穂	多民族・多宗教社会の文化人類学的研究　―マレーシアのタミル・ムスリムをめぐって―
共生人間学	小野瑞貴	英語受動文での前置詞の選択に関する考察
共生文明学	史　羽茜	城鎮計画の展開とその問題点　―江蘇省揚州市を事例として―
共生人間学	細田隆史	3.11 以降の社会運動参加者たちの、インターネット空間における言説分析　―「路上」という語に関する分析
共生文明学	孫　玥辰	中国の民間葬儀において上演される芸能についての一考察
共生人間学	PEARCE DANIEL ROY	A conversation analysis of interaction in the team-taught EFL classroom（英語のティームティーチング授業における会話分析　―教師間の相互作用に焦点を当てて）
共生人間学	西田光治	Modular Control of Human Running（ヒトの走行動作におけるモジュール式制御）

相関環境学	大西菜月	強酸性水系, 酸川　―猪苗代湖における化学成分の動態
相関環境学	平田和樹	アントラセンを基体とする多孔性有機結晶の調製と気体吸着特性に関する研究
相関環境学	野添翔悟	Landscape genetics of Patrinia triloba var. takeuchiana on Mt.Aoba, Fukui Prefecture.（福井県青葉山におけるオオキンレイカの景観遺伝解析）
相関環境学	松本智也	金属添加酸化チタン光触媒を用いたアミンとカルボニル化合物からのワンポットヘテロ環化合物合成
相関環境学	吉田真人	電子供与性の高い機能性配位子を有するイリジウム錯体の合成と脱水素化反応における触媒活性の調査
共生人間学	小室ひかり	The effect of teacher feedback on learners' explicit and implicit knowledge of English singular personal pronouns in the Japanese EFL context（英語の人称代名詞についての学習者の明示的知識と暗示的知識に与える教師フィードバックの影響　―日本の EFL 環境において―）
共生人間学	永井宥之	日本語のエビデンシャリティについての研究　―「－ている」を事例に―
相関環境学	牧　遼明	青色蓄光可能な橙色長残光蛍光体 $Ca_3Si_2O_7$: Eu^{2+}-Ln^{3+} の試料作製および電子移動機構の解明
共生人間学	冨田真吾	Viscoelasticity in Human Standing（立位中の粘弾性特性）
相関環境学	藤原研司	常温メタン水蒸気改質におけるチタン酸カルシウム光触媒の高活性化
共生文明学	周　思敏	崎門学派の鬼神論　―朱子学思想の継承と変容―
相関環境学	渡辺太樹	プロピレン水素化反応における担持白金触媒の金属粒子径効果
共生文明学	松田優拓	祈る場所の生成　―在家修験者と修行の場の関係
相関環境学	湯川　巧	引力相互作用するボース・アインシュタイン凝縮体の生成
共生文明学	村上絢一	室町・戦国期における寺院領主の変容と「地下」の統制　―山門領近江国葛川を事例に―
共生人間学	関根圭一	Effects of gallic acid on protein and glycogen synthesis activity and related signaling molecules in rat skeletal muscle（没食子酸がラット骨格筋の蛋白質、グリコーゲン合成活性と関連情報伝達分子に与える影響）
共生人間学	妹尾萌生	フランチェスコ１世・デ・メディチのストゥディオーロに関する一考察
共生文明学	余　瑞云	村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』論　―クミコの「心」と「身体」の分裂―
相関環境学	星野敦至	マンガン賦活マグネトプランバイト型蛍光体の作製と配位座標モデルを用いた消光機構の解明
共生人間学	松山のぞみ	映画『トレインスポッティング』における大衆音楽の効果
共生文明学	関口咲子	ユダヤ教神学校とユダヤ・ミュージアムの歴史的考察　―「マサダ」と「ホロコースト」の表象を中心に―
共生人間学	ORE ARROYO RAMIRO JORGE	Accessing to Quechua-language Education in Lima, Peru: Difficulties Encountered as a Quechua-language Learner（ペルーリマ市におけるケチュア語教育へのアクセス：ケチュア語学習者として直面する困難）
共生文明学	李　章元	最古の囲碁書『忘憂清楽集』について一考察
共生人間学	遠藤太良	「モランディ神話」再考　―批評言説との関わりから

相関環境学	山口貴久	炭素ケージに内包された複数の金属イオンが示す高スピン状態の決定
相関環境学	松野佑成	通性嫌気性真核生物 Brevimastigomonas longa に見られる新奇ミトコンドリア関連オルガネラに関する研究
共生人間学	劉　　穎	The Quest of Innermost Continuity: A Study of the Structuring and Wording in *The Sun Also Rises*.（自己統一への探求：「日はまた昇る」における描写と構造を中心に）
共生文明学	金澤　　大	共闘する人間とニワトリ　―現代フィリピンの事例から―
相関環境学	楊　　晨	Study on NOx Storage on Cobalt-Titanium Oxide Catalysts in an Oxidative Atmosphere（酸化雰囲気中におけるコバルト-チタン酸化物触媒上での NOx 吸蔵反応に関する研究）
共生人間学	TAYLOR PAMELA MARIE	VAST AND INCOMPREHENSIBLE : CONVERGENCES AND DIVERGENCES IN THE EMOTIONS OF AWE AND HORROR（壮大さと不可解さ：畏敬・畏怖の念と戦慄感の共通性と差異からの検討）
共生人間学	栗田華奈	低気圧環境が血圧に及ぼす影響について
相関環境学	堀之内龍一	Dust devil に関する理論的考察：原理的モデルの構築
共生文明学	岩木雅宏	市場社会と民主制　―ポランニー理論の視角
共生人間学	吉田弘生	書体と音声の感覚間協応に関する検討
共生人間学	渡部　　崇	制約付き MDP に対する強化学習課題の PAC 的性質について
共生文明学	山根直子	尾崎翠研究　―「第七官界彷徨」と「こほろぎ嬢」を中心に―
共生文明学	竹林朋子	修学旅行における地域の役割　―鹿児島県を事例に―
共生人間学	真鍋公希	〈特撮〉の歴史社会学　―視覚性・卓越化・社会的分化―
共生人間学	藤森伯文	大学生のクラブ活動再考　―個々人の模索過程の語りから―
共生文明学	丸山倫幸	19世紀アメリカの幼稚園運動における『共感的教育』の重要性：超絶主義思想、女性教育の文脈でのエリザベス・ピーボディの教育観を中心にして
共生人間学	打田篤彦	地域共同体の共有価値と社会関係資本についての考察　―京都府の自治体を中心に―
相関環境学	和田智勝	含窒素複素環の可逆的脱水素化/水素化に基づく有機ハイドライド水素貯蔵システムの開発
相関環境学	堀江悠希	オペランド X 線吸収分光法を用いた燃料電池用 Pt/C 触媒における酸素還元活性の温度依存性評価
共生文明学	三浦麻由香	「宴席詠雪月梅花歌一首」と家持の孤独
相関環境学	丁　　然	細胞外マトリックスが筋芽細胞分化へ与える影響
共生人間学	I-TING HUAI-CHING LIU	Situational Marginalization and Hikikomori Risk in Japan（社会経済的疎外がひきこもりリスクに与える影響）
相関環境学	王　　思斉	ニホンジカによる農作物被害とレジームシフト

共生人間学	王　昱媛	Effects of Japanese-style diet on the major signaling molecules and lipidomic profile in rat skeletal muscle　—in comparison with Wetern-style diet（日本食がラット骨格筋の主要情報伝達分子及び脂質プロファイルに与える影響　—西洋食との比較による検討）
共生文明学	CHAILUNJIAFU SIQIN	中国西北部における土地被覆変化に関する研究　—伊寧市及びその周辺地域を事例に—
共生人間学	藤田　遥	On the Emergence of Human Language: With Special Reference to the Origins and Evolution of Lexical Items（人間言語の出現について：語彙項目の起源と進化に焦点を当てて）
共生人間学	宮崎聡子	英語進行形についての通時的考察　—行為解説用法の出現を中心に—
相関環境学	井川桃子	Accommodation-transportation mutualism between mobile corals and corallum-inhabiting sipunculans / pagurians（可動サンゴとそこに棲み込むホシムシ・ヤドカリとの宿貸し・牽引共生）
共生人間学	呂　雨珊	現代中国語の新語における日本語からの借用語について
共生文明学	銭　佳輝	衛星画像と GIS 技術を用いた干燥地域における古代灌漑システムの解明　—且末（チェルチェン）を事例に—
共生人間学	向井大介	地域活性化活動における規範的影響　—新しいスタイルのエスノグラフィをもとに
共生文明学	楊　暁丹	現代日本の都市祝祭におけるご当地キャライベント　—ひこにゃんの事例を中心に—
共生人間学	行木耀平	「グローバル人材」の政策過程　—計量テキスト分析による質的カテゴリーの形成と言説的制度論の理論を用いて—
共生人間学	佘　楚玫	Teacher beliefs toward task-based language teaching in the Chinese EFL context（タスク中心教授法に対する教師の信念　—中国のEFL環境において—）
共生文明学	財津浩之	南シナ海の対立と中国の対外行動：国際政治理論の観点からの分析を踏まえて
共生文明学	向　楠	「女性の起業」についての文化人類学的研究　—中国トゥチャ族の事例をめぐって—
相関環境学	辻　晶子	イリジウム触媒を用いたメタノールによるアミンの効率的 N-メチル化法の開発
共生人間学	加藤　遼	英語形容詞の単独後置修飾用法に関する研究
共生人間学	呉　晨	日本語母語話者の中国語学習者による軽声音節の知覚特徴
共生人間学	白野真理	アニメーションにおける技術革新とキャラクター身体への芸術的影響
共生人間学	牧野広樹	フリッツ・イェーデの音楽観における共同性　—第三帝国期以前の著作を中心として—
相関環境学	矢原竜馬	フッ化物イオンシャトル型全固体二次電池における電極/電解質界面反応速度の支配因子解明
共生人間学	須田智晴	Helmholtz-Hodge分解によるベクトル場の解析
共生人間学	山岡睦美	視覚性短期記憶における特徴の平均値の計算メカニズム
共生文明学	成　高雅	中国正骨術の日本的受容　—『骨継療治重宝記』を手がかりに
共生文明学	臧　魯寧	「姑獲鳥伝説」の研究

共生人間学	楠田 友妃菜	パーキンソン病に対する軽度高気圧酸素の効果
共生人間学	高田 翔	ヴァルター・ベンヤミンにおける両極性の問題系
共生人間学	松田 健太郎	アニメーション映画における教育　～ディズニーアニメを中心に～
相関環境学	吉村 由多加	エチオピア洪水玄武岩を用いた 30Ma 頃の地球磁場変動の解析
共生人間学	王 莅	Integrating Exploratory Practice into Collaborative Learning : A Case Study of an EAP Class in Japan（協働的学習に探索的実践の組み入れ　―日本での EAP クラスからの案例を中心に）
共生人間学	朱 美霖	日本語教育における類義語間の語種の使用に関する考察　―日本人大学生と中国人日本語学習者の比較を中心にして―
共生人間学	久保田 裕斗	「共に学ぶ」実践のエスノグラフィー　―不利益・必要・包摂をめぐる政治という視点から―
共生人間学	高木 啓雄	Muscle synergy of vertical jump（ジャンプ動作における筋シナジー）
共生文明学	檜垣 浩	デュプイ・デ・ローメの基礎的研究　―19世紀のスペイン人外交官

平成29年度

共生人間学	青山 悠太	心房拡大を呈するゼブラフィッシュ変異体 tomato の解析
共生人間学	中田 信人	The Narrator in *When We Were Orphans* : Why Does the Detective Distort the Fact ？（『わたしたちが孤児だったころ』の語り手　―何故探偵が事実を歪めるのか？）
共生人間学	山崎 雅広	クロソウスキーの病跡学　―ニーチェ、忘却、そしてロベルト―
共生人間学	若林 感	認知症介護における〈尊厳〉とは何か
共生人間学	劉 天嬌	マルチリンガル雑誌『孔子学院』にあらわれた「中国」の多面性　―雑誌の内容分析を中心に―
共生人間学	髙山 勉	直観主義不動点論理におけるプログラム抽出とその実装について
共生人間学	伊藤 篤希	Leaders in Interdependent Contexts Suppress Nonverbal Assertiveness: A Multilevel Analysis of Japanese University Club Leaders' and Members' Rank Signaling（相互協調的文化における社会的地位と非言語行動の関係）
共生人間学	岡田 晃	ナビエ－ストークス方程式の解の解析性について
共生人間学	姚 明遠	"Escape" in Salinger's Works: A Study of *The Catcher in the Rye* and *Nine Stories* (サリンジャーの作品の中における "Escape"　―『ライ麦畑で捕まえて』と『ナインストーリーズ』研究)
共生人間学	舩橋 巧	Solving stochastic PDEs on a torus （トーラス上の確率偏微分方程式に対する解法理論）
共生人間学	鈴木 裕貴	旧軍港呉から見る「被爆地」の戦後史　―1950年代の地域紙『中国日報』に着目して
共生人間学	浅井 優	結婚に繋がる「出会い」についての考察
共生人間学	佐藤 雅也	語用論的前提に関する実証的研究　―言語情報と視覚情報を対象として―
共生人間学	中元 洸太	トマス・リードにおける「知覚の直接性」の研究

共生人間学	圓山　圭	日本語の話し言葉における節単位末表現　―テの分類について―
共生人間学	春日悠生	情報提示の発話の類型　―日本語文末詞の用法記述にむけて―
共生人間学	西村隆佑	後期ジンメルの歴史哲学　―相克する「歴史」と「生」のゆくえ
共生人間学	中里　真	Motor control for Human Walking in Various Planets and Moon（太陽系惑星と月面における歩行制御の解明）
共生人間学	井上優大	談話における焦点に関する認知文法的考察
共生人間学	本美亮祐	Mild Hyperbolic Oxygen Improves Decreased Oxydative Capacity of Spinal Motoneurons Innervating the Soleus Muscle of Rats with Type2 Diabetes（軽度高気圧酸素が糖尿病ラットにおける脊髄運動ニューロンの酸化系酵素活性に及ぼす影響）
共生人間学	中原　匠	紙の冊子とスマートフォンを用いた MR 書籍
共生人間学	辻　隆史	単眼の特徴情報に対する注意は異なる眼にある特徴には波及しない
共生人間学	田渕紗都	メディアディスコースに現れた帰国子女表象の解読　―入試試験制度との関連を視野に入れて―
共生人間学	三笠雅也	境界例の身体性　―小精神病の現象学的考察を手掛かりに―
共生人間学	三枝茉央	1960年代の日本における「動的な手持ち撮影」　―記録的手法の理論と技術の変遷―
共生人間学	藤道宗人	質感の視覚性ワーキングメモリに関する fMRI 研究
共生人間学	長畑友見菜	戦前における日本漫画の美学的考察　―欧米からの影響の検証を通して
共生人間学	裘　潔	A Study of Silence in *The Age of Innocence*（*The Age of Innocence* における沈黙の考察）
共生人間学	荒木真衣	転移学習を指向した調値に基づく声調モデルの提案
共生人間学	田中悠介	言語的共感の理解過程に関する実証的研究
共生人間学	下村滋美	アーニョロ・ガッディ作《聖十字架物語》壁画連作における一考察
共生人間学	加藤寛子	視覚性短期記憶における長期記憶からの情報検索の影響
共生人間学	LO CIGNO STEFANO	イタリア映画におけるポライトネスの語用論的な分析とその外国語教育への応用
共生人間学	小笠原由記	彼女たちが会いに行く理由　―女性ライブアイドルの女性ファンの質的調査による考察―
共生人間学	内木正隆	金融生成モデル
共生人間学	宮下祥子	否定の文法化　―ドイツ語の副詞 kaum を例に―
共生人間学	尾﨑　純	M．メルロ=ポンティにおける「対話」概念の検討
共生人間学	村岡ひかる	外傷性脳損傷患者における重症度が認知機能と日常生活上の問題に与える影響の検討
共生人間学	近藤七海	他者への共感における腹内側前頭前野と右側頭頭頂接合部の役割が顔の記憶に関する神経機構に与える影響
共生人間学	田中安里佳	数量概念につながる要因の検討　―乳幼児縦断研究を通して―

共生人間学	川北天華	The Power of Vision in *Jane Eyre*: A Study of Charlotte Brontë's Imaginative Expression（『ジェーン・エア』における vision の力　―シャーロット・ブロンテの想像力の表現についての研究―）
共生人間学	神原一帆	分類関係へのコーパス基盤アプローチ
共生人間学	岩田沙恵子	エピソード記憶の記銘における時間や場所の文脈情報の処理に関する皮質－海馬間ネットワーク
共生人間学	上野貴史	ステガノグラフィへの敵対的訓練の適用
共生人間学	庄司　真	Control of trailing leg in obstacle crossing movement.（跨ぎ動作における後続脚の制御）
共生人間学	CHEN　Yijun	A Longitudinal Study of Requests: An Analysis of Pragmatic Development in L2 Japanese（行為要求表現に関する縦断的研究：日本語学習者の語用論的能力の発達過程について）
共生人間学	久保　陽	Adaptation to external and internal stimulation in bipedal system.（二足立位システムにおける外的および内的刺激への適応）
共生人間学	宇都秀太	Grammatical, Semantic and Conceptual Explanations for Unaccusativity（非対格性に対する文法的・意味的・概念的説明）
共生文明学	佐藤　愛	在米ディアスポラ詩人スヘイル・ハンマードにおける「パレスチナ」　－記憶の継承、ブラック・アメリカ、そしてパレスチナ人になること
共生文明学	楊　大為	奄美大島におけるカトリック教会と信者についての文化人類学的考察
共生文明学	一戸恒人	亜極北の島における生業活動と空間　―セント・ローレンス島のシベリア・ユピックを事例に
共生文明学	黄　建富	プロテスタンティズムの禁欲と資本主義の貨幣　―ヴェーバー・テーゼを修正する―
共生文明学	吾郷光広	動物性を利用する　―精肉店から再考する脱動物化
共生文明学	長井優希乃	インド・デリーにおける女性メヘンディ描きの実践　―「装い」とインフォーマルセクター労働をめぐる主体性・身体・アイデンティティ―
共生文明学	永井文也	先住民族の土地権原をめぐる裁判における人類学者の役割　―カナダ・チルコーティンの事例から
共生文明学	藤原豊一	高度成長期以降の我が国における旅行形態の変容についての考察　～鉄道による団体参詣輸送を視点として～
共生文明学	島田有紗	「加齢と男性性　―自営漁業従事者を事例として―」
共生文明学	米田　剛	京都市嵐山における観光消費の変遷と現在　―ガイドブックと GPS ロガーによる分析―
共生文明学	鄭　琪	近代中国厦門市における上水整備事業に関する研究　―1920～1945年を中心に―
共生文明学	秋山大樹	袁世凱政権期のチベット問題　―1913年のチベット選挙を中心に
共生文明学	三宅香帆	万葉集における「歌語」の萌芽
共生文明学	水上　優	エチオピア西南部アリにおける鍛冶職人の技法
共生文明学	銭　正枝	岡倉天心の初期「東洋」認識に関する研究　～東京美術学校における「日本美術史」の講義を中心に～

共生文明学	寺門　泉	景観法における景観整備機構制度の利用の現状と活用の可能性に関する研究
共生文明学	天野沙綾	The Re-formation of Japanese Image by People-to-People Exchanges from Bakumatsu to the Meiji Era　—Through Japanese Missionary and International Exhibitions—（幕末から明治にかけて人的交流による日本イメージの再形成　—日本使節団と国際博覧会—）
共生文明学	李　暁セン	From Politics to Literature　—The Reception of Oscar Wilde's Plays in China（政治から文学へ　—中国におけるオスカー・ワイルドの劇作品の受容について）
共生文明学	井上浩樹	G.K. チェスタトンの政治と文学　—分産主義の視角から—
共生文明学	的場敦也	『愛のわざ』の「人間的な愛」を支えたもの　—レギーネ、ミカエル、そしてキェルケゴール
共生文明学	藤井太郎	「鎖国」形成期日本の政治経済思想　—脱グローバリゼーションの原点—
共生文明学	劉　敬徳	朔方軍の解體と河中節度使の「自立化」　—八世紀後半期について
共生文明学	PAPAI ESZTER VERA	日本の子どもをめぐる死生観　—「七つまでは神のうち」言説における観念の関係性の分析
共生文明学	劉　振業	憩いの場における老人の主体構築　—中国における星光老年の家の文化人類学的研究—
共生文明学	酒井佑陶	エドマンド・バークの政治思想　—『崇高と美』から『省察』へ—
共生文明学	藤井佐由里	露出展示遺構の劣化に及ぼす硫酸カルシウムの影響
共生文明学	杉本大樹	The Innocence Extended Forever: The Tragic Aspect of J.M.Barrie's *Peter and Wendy* and *Mary Rose*（永遠化された無垢　—J.M.バリーの『ピーター・アンド・ウェンディ』と『メアリー・ローズ』における悲劇的側面—）
共生文明学	黄　冬姝	明代の女性はいかに演劇を見たか　—絵画から見た明代の女性観客席
共生文明学	恩田佳代子	Two Ways of Looking at a Literary Polemic: Samuel Daniel's Poetics and Politics in *A Defence of Ryme*（文学論争の2つの見方　—『押韻の擁護』におけるサミュエル・ダニエルの詩と政治）
共生文明学	文　斗卓	「世間」の視座から見た「ゼロ年代世代」における「個性」と「キャラ」の二重構造
共生文明学	尾池彩子	出土鉄製遺物の局部腐食に対して埋蔵環境が及ぼす影響
共生文明学	松本侃太	摂関期における内裏警固とその武力
共生文明学	北西諒介	地域活動の展開と地名の使用　—千里ニュータウン再生の取り組みを中心に—
共生文明学	渡邊春菜	ダム建設にみる農村集落の変容に関する研究　—奈良市月ヶ瀬地区桃香野集落の空間と社会の変化を通して—
共生文明学	張　楚	幸田露伴『幽情記』論　—成立から女性像へ—
共生文明学	GUI MINGYUE	都市を生きる　—北京における「外地人」についての文化人類学的考察
共生文明学	土谷　輪	魔除け都市の構造　—京都の魔除け「ちまき」と「鍾馗さん」を巡る人類学的考察—
共生文明学	古川大悟	古代日本語における「可能的表現」　—上代特殊語法ズハについて—

共生文明学	林　白簫	奈良時代の五保と在地社会
共生文明学	濱野千尋	現代ドイツにおける動物性愛者たちの文化人類学的研究
共生文明学	渡　洋輔	教育者としてのブルクハルト
共生文明学	西村一真	萬葉集における「譬喩歌」　―「託馬野に生ふる紫」（三九五歌）を例として―
共生文明学	林　紅伶	金大中の対日認識の変容過程　―原則主義、実用主義、共生主義を中心に
共生文明学	孫　嘉寧	前近代中國における虎患對策について
共生文明学	池上慶行	多民族・多文化状況の実際　―オーストラリア・メルボルンの NPO レストランにおける共同性―
共生文明学	傳　瑶	隋代における避諱の特徴　―墓誌銘を中心として
共生文明学	阿部　愛	阪神間の園芸文化とイメージ　―明治から昭和初期の果樹園芸の視点から―
共生文明学	細川真由	不戦条約とフランス外交：戦争違法化をめぐる「理想」と「現実」1925-1928年
共生文明学	楊　峻懿	清末民国期の水産学校と人材育成　―日本の農商務省水産講習所から中国の水産学校へ―
共生文明学	王　琪薇	中国における農業の企業参入の発展　―麻城市の菊花産業を事例に―
相関環境学	奥本卓也	ニホンザルによる農作物被害の発生要因
相関環境学	栢菅朋哉	ジフェニルメチル基を有する機能性ピリジン系配位子の合成と触媒化学的展開
相関環境学	下中大也	Self-energy analysis of the high-*Tc* cuprate superconductor $La_{2-x}Sr_xCuO_4$（銅酸化物高温超伝導体 $La_{2-x}Sr_xCuO_4$ の自己エネルギー解析）
相関環境学	中谷康平	ロジウム錯体固定化触媒の開発とシリル化反応への応用
相関環境学	村田大輔	電子エネルギー移動を利用した生体イメージング用近赤外残光蛍光体の開発
相関環境学	谷利爵公	Basic Studies for Developmentof the “Stealth Vector”（ステルスベクター開発に向けての基礎研究：ヒト内在性レトロウイルスWのエンベローブ蛋白質の発現を増大させるシスエレメントによるレンチウイルスベクターの力価改善）
相関環境学	原田昌弥	圧力誘起電子構造変化による残光蛍光体の光学特性変化
相関環境学	三宅裕也	ノギス型新規ホスト分子の合成とカーボンナノチューブ抽出特性の評価
相関環境学	吉村雅子	オオサンショウウオ属2種および交雑個体の形態比較
相関環境学	陳　俊峰	完全従属栄養性緑藻類の葉緑体に関する研究
相関環境学	山下瑳弥子	給特法に着目した教育職員の労働時間法制の分析
相関環境学	宮川蘭奈	カキ養殖に森林が与える影響の計量経済分析
相関環境学	篠田瑞生	ボルネオ島における低湿地の市街地化がオオバギ属2種 Macaranga pruinosa と M. pruinosa と M. gigantea の交雑に与える影響
相関環境学	諸永知里	メタルフリー磁性ナノエマルションの調製とそのMRI造影能
相関環境学	濱口直也	高濃度水溶液中におけるリチウムイオン二次電池正極界面反応の速度論解析
相関環境学	小野田光貴	イリジウム錯体触媒によるアルコール類の高原子効率的変換反応の開発と応用

相関環境学	折口直輝	梯子格子銅酸化物 $Sr_3Ca_{11}Cu_{24}O_{41}$ における圧力誘起超伝導
相関環境学	徳永貴之	カルシウムスタネート蛍光体の真空基準束縛エネルギー図の構築と発光特性
相関環境学	安齊亮彦	融剤法により調製したチタン酸カルシウム微結晶による二酸化炭素の光触媒還元
相関環境学	竹内正俊	高圧下 NMR による $LaFeAsO_{1-x}H_x$ の量子臨界現象の研究
相関環境学	高保健太	水分散性の向上を目的とするポリグリセロール修飾ダイヤモンドサブミクロン粒子の合成条件の検討とその生物医療応用
相関環境学	豊岡源基	新しい機能性配位子を有する金属錯体合成の試みならびにメタノールによるアミンの触媒的メチル化法の開発
相関環境学	川原圭貴	3OCB の結晶化過程について
相関環境学	岩崎芳紀	多層ディラック磁性体 $EuMnBi_2$ の磁気輸送現象
相関環境学	大久保多恵	システインを基体とするジペプチド化合物の合成, 結晶構造, および気体吸着特性に関する研究
相関環境学	近藤裕幸	多様な染色体数変異を持つ豪州産キク科 Brachyscome lineariloba complex の系統進化解析および集団動態解析
相関環境学	有澤彩也香	ゲノム編集による DNA 損傷応答経路における FANCM の機能解析
相関環境学	王　涵	イリジウム錯体触媒を活用する水素製造法ならびに脱水素的酸化反応の開発
相関環境学	田中寿樹	天然資源由来の有機分子の触媒的脱水素化を基軸とする水素製造ならびに有機合成
相関環境学	今井一之	全固体フッ化物イオン二次電池における固体電解質／アノード界面反応の速度論的解明
相関環境学	川本雅人	擬一次元系 $Ca_{1-x}Y_xV_2O_4$ の金属絶縁体転移近傍の電子状態の研究
相関環境学	高橋大樹	Relative contributions of neutral and non-neutral processes to clinal variation in calyx lobe length in the series *Sakawanum*（*Asarum* : Aristolochiaceae）（カンアオイ属サカワサイシン節（ウマノスズクサ科）における萼裂片長の地理的勾配に対する中立的進化過程と自然選択の影響）
相関環境学	笠川智哉	アントラセンを基体とする金属有機構造体の合成に関する研究
相関環境学	高橋勝國	高エネルギーX線回折と二体相関関数解析を組み合わせた燃料電池用 Pt カソード触媒の劣化機構解析
相関環境学	桑原雅人	イリジウム錯体触媒を用いる環境調和型酢酸合成法の開発と各種カルボン酸合成への展開
相関環境学	瑞慶覧長空	λ - $(BETS)_2$ $Fe_xGa_{1-x}Cl_4$ における反強磁性と超伝導の理論的研究
相関環境学	北崎　翔	クロロフィル f 産生シアノバクテリアにおける光エネルギー移動機構の多様性
相関環境学	清水嶺之	脱水素化性能に優れたイリジウム錯体触媒の固定化手法の探索
相関環境学	伊東洋二	担持ニッケル光触媒を用いたメタンドライリフォーミング
相関環境学	香取就美	FANCJ 遺伝子のゲノム編集によるファンコニ貧血分子機構の解明
相関環境学	森島凡乃	イリジウム錯体触媒の水素移動能を活用するアルコールによるアミンの低温 N-アルキル化

相関環境学	北口雄也	全固体フッ化物イオン二次電池における金属/金属フッ化物二相境界移動挙動
相関環境学	師　光明	Overconfidence in Shanghai Stock Market（上海株式市場における自信過剰）
相関環境学	山守瑠奈	ウニの巣穴の同居者群集と、笠型の巻貝ハナザラの住み込み共生
相関環境学	萩原広道	幼児初期の言語発達における「胚性詞」の研究：初期言語の可塑性と分化多能性に着目して
相関環境学	金　海元	韓国における地方分権改革とその促進要因　―済州特別自治道の事例を対象に―
相関環境学	田畑奎太朗	ジヒドロピリジン系化合物の優先富化の発現に関する研究
相関環境学	高橋裕貴	担持金属触媒を用いたベンゼンとエチレンからの気相スチレン直接合成
相関環境学	山中壱朗	フェニルアラニンを基体とする有機分子性結晶の気体吸着特性に関する研究
相関環境学	植元　晶	軟X線吸収分光法を用いた硫化物系正極材料の充放電機構の解明
相関環境学	長谷川隆斗	有機修飾シリカを担体に用いた金触媒の調製とシリル化反応への応用
相関環境学	山本梨乃	operando X 線吸収分光法を用いた高容量正極における配位子電荷移動挙動の解明

(3) 博士論文題目一覧

平成7年度

人間・環境学	片田珠美	分裂病者における象徴化と攻撃性
人間・環境学	内藤栄一	ヒトの運動プログラム抑制過程および持続運動の中断過程に関する生理学的・行動学的解析
人間・環境学	橋本　崇	現実性の形而上学
人間・環境学	原　隆二郎	ヒト細胞におけるDNA修復反応と転写反応の相互作用の解析
人間・環境学	水野顕子	Mutations of HIV-1 nucleocapsid protein produce non-infectious virus particles ― Application to the development of a new AIDS vaccine―（HIV-1ヌクレオカプシド蛋白質における変異は非感染性ウイルス粒子を産生する　―新しいエイズワクチン開発への応用―）
人間・環境学	飯田博一	分子認識化学を指向した新規複素環化合物の合成とその動的挙動
人間・環境学	川村淑子	遷移金属イオンの分子環境と錯形成の構造的研究
人間・環境学	許　權	Reproductive Structure and Phylogeny in Lauraceae (Laurales)（クスノキ科（クスノキ目）における生殖構造と系統）
人間・環境学	李　南方	Mevalonate availability regulates vascular cell proliferation and vascular reactivity（血管平滑筋細胞増殖と血管反応性に対するメバロン酸の調節作用）

平成8年度

人間・環境学	下田　玄	Origin of the Setouchi Volcanic Rocks in SW Japan Arc: Constraints from Pb-Nd-Sr isotope Geochemistry（西南日本に産する瀬戸内火山岩類の起源：Pb-Nd-Sr同位体地球化学からの制約）
人間・環境学	佐々木重洋	カメルーン南西部、エジャガム社会の仮面文化に関する人類学的研究
人間・環境学	小澤真一郎	光合成光化学系Ⅱ複合体における電子移動調節　―PSⅡ‐Lタンパク質の役割―
人間・環境学	大浦宏邦	事後的均衡解解析による秩序問題へのアプローチ
人間・環境学	梶谷真司	世界内存在の現象学　―ハイデガーとシュミッツ―
人間・環境学	亀崎直樹	日本産ウミガメ類の自然史に関する研究
人間・環境学	齋藤　渉	W.v. フンボルトの言語論における言語と有機体の類比性について
人間・環境学	白木琢磨	Endothelin; Synthesis and Activity（エンドセリン；合成と活性）
人間・環境学	内藤可夫	後期ニーチェの根本思想
人間・環境学	藤田　裕	Mutiphase Chemical Evolution in Elliptical Galaxies（楕円銀河における多相化学進化）
人間・環境学	香西克彦	「風景なるもの」について　―建築論からの考察
人間・環境学	吉本浩和	ハイデガーと現代の思惟の根本問題

平成9年度

人間・環境学	角山雄一	Studies of Molecular Mechanism of Light Regulatory Transcription of Chloroplast Genes（葉緑体遺伝子における光応答転写の分子機構の研究）

人間・環境学	檜垣浩之	Linear and Nonlinear Electrostatic Oscillations in Nonneutral Electron Plasmas（非中性電子プラズマにおける線形および非線形静電振動）
人間・環境学	柳沢貴司	キェルケゴールの宗教哲学　―「キリスト者に成る」という問題を中心にして―
人間・環境学	西田佐知子	Revisional study of neotropical *Beilschmiedia* species (Lauraceae) with special reference to leaf anatomy（新熱帯のクスノキ科アカハダクスノキ属に関する分類学的検討と葉の解剖学的研究）
人間・環境学	遠藤晃	病院情報システムの定量的評価に関する研究
人間・環境学	川村浩之	核子スピン構造関数における級数補正と高次ツイスト演算子のくりこみ
人間・環境学	黒田明義	イジング異方性をもつ籠目格子反強磁性体の異常強磁性相
人間・環境学	郷田直一	輪郭と色の知覚における異種情報の統合に関する研究
人間・環境学	上野寛子	東アジア産アカガエル類の分子系統学的研究
人間・環境学	徳岡徹	Embryology of Euphorbiaceae: characteristics and systematic implications（トウダイグサ科の生殖器官の形態　―その特徴と分類学的意義―）
人間・環境学	星田尚司	Role of PSⅡ-L protein on the electron transfer at donor side of photosystem Ⅱ reaction center complex（光合成光化学系Ⅱ酸化側電子移動における PSⅡ-L タンパク質の機能の解明）
人間・環境学	細川浩	A study of neuron specific cationic amino acid transporter rCAT3（神経特異的塩基性アミノ酸輸送体 rCAT3 の研究）
人間・環境学	桝矢桂一	カントにおける現象とフェノメナ
人間・環境学	山下満左裕	Studies on the Phylogeny of HTLV-Ⅰand STLV-Ⅰ: the origin, evolution and dissemination in the world（HTLV-Ⅰ とSTLV-Ⅰ に関する分子系統学的研究：起源、進化および世界における流布）
人間・環境学	渡邊理江	糖尿病発症関連分子の同定・発現・機能解析
人間・環境学	和田信也	New treatment of the non-perturbative effect（非摂動論的効果を扱う新しい手法の研究）
文化・地域環境学	笈田映一	心拍数制御機構の「加速－減速模型」
文化・地域環境学	冲永荘八	禅と宗教経験
文化・地域環境学	端健二郎	NMR Study of the Heavy Fermion compounds Yb-monopnictides（核磁気共鳴法を用いたヘビーフェルミオン化合物 Yb モノプニクタイドの研究）
文化・地域環境学	平岡潤子	新しい脂肪組織由来ホルモン・レプチンの生理的および病態生理的意義の解明
文化・地域環境学	牧野哲征	PbI_2 における励起子ポラリトンの相互作用と緩和過程
文化・地域環境学	道原明宏	脳卒中易発症ラットのコレステロール合成低下に関与するメバロン酸二リン酸脱炭酸酵素の生化学的研究
文化・地域環境学	GOH PEK CHEN	The Dilemmas of the Semiconductor Industry in Malaysia（マレーシアにおける半導体産業のジレンマ）
文化・地域環境学	小林厚子	生体内の無機結晶性固体の研究
文化・地域環境学	柴田真志	Exercise prescription on the basis of electroencehalogram, electromyogram, and electrocardiogram analyses（生体信号解析に基づく運動処方）
人間・環境学	李勇	七配位分子環境下における特異な$3d_2$2電子状態を持つクラウンエーテル銅（Ⅱ）錯体の研究
人間・環境学	小田伸午	筋出力における運動制御機構
人間・環境学	大谷芳夫	知覚的運動情報の検出過程と運動情報の相互作用に関する研究

平成10年度

人間・環境学	江見圭司	Microscopic Environmental Stuies on Solute-solvent Interaction by Using Pulsed ESR and CW-ESR（パルスESRおよびCW-ESR分光法を用いた溶質－溶媒間相互作用の微環境論）
人間・環境学	﨑田智子	Reporting Discourse in English : Discourse, Cognition, and Consciousness（英語における伝達話法のメカニズム　―談話・認知・意識の視点から―）
人間・環境学	中平洋一	Circadian Clock-Regulated Transcription of the psbD Light-Responsive Promoter (psbD LRP) in Wheat Chloroplasts（生物時計によるコムギ葉緑体psbD 光応答プロモータ（psbD LRP）の転写制御）
文化・地域環境学	新熊隆嘉	非同質的鉱山企業の意思決定と金属資源価格の相互作用に関する研究
文化・地域環境学	中村博武	宣教と受容　―明治期キリスト教の基礎的研究―
人間・環境学	榎瀬良美	Virological analysis in mucosal transmission of simian immunodeficiency viruses in macaque monkeys　～ Animal model for heterosexual transmission of HIV ～（サル免疫不全ウイルスのマカク属サルへの粘膜感染におけるウイルス学的解析　～ヒト免疫不全ウイルスの異性間感染のための動物モデル～）
人間・環境学	大河内郁雄	摂動論とバレー法
人間・環境学	小河繁彦	生活習慣病の発症と骨格筋の組織化学的特性との関連性
人間・環境学	桂　秀樹	新規複素環化合物の合成と反応ならびにその物性
人間・環境学	門屋秀一	カント第三批判と反省的超越論的主観性　―美学部門と目的論部門の体系的統一のために―
人間・環境学	佐藤淳子	Studies of Selective Activation of Plastid Promoters in Higher Plants（高等植物における葉緑体遺伝子プロモーターの選択的活性化についての研究）
人間・環境学	角　大輝	Dynamics of rational semigroups and Hausdorff dimension of the Julia sets（有理半群の力学系とそのジュリア集合のハウスドルフ次元について）
文化・地域環境学	郭　艶春	雲南における少数民族の環境文化に関する研究　―人と森林との関係を中心に―
文化・地域環境学	河内将芳	中世近世移行期における都市社会史の諸相　―16世紀京都を中心に―
文化・地域環境学	高　明	生活習慣病の遺伝・環境因子に関する研究
文化・地域環境学	田中良己	ゲルの破壊
文化・地域環境学	塚田　浩	Anderson Localization Effects on Nuclear Spin Relaxation in Charge-Transfer Complexes of BEDO-TTF（BEDO-TTF系電荷移動錯体の核スピン緩和現象に与えるアンダーソン局在の効果）
文化・地域環境学	RANGSIMA BOONSINSUKH	『小野小町集』全評釈と小町歌の研究
文化・地域環境学	山本淳子	『紫式部集』の研究
文化・地域環境学	吉武康栄	Muscle Contractile Properties Investigated by Electromyography, Soundmyography, and Near Infrared Spectroscopy（筋収縮特性の電気生理学・エネルギー代謝的解明）
人間・環境学	Al-Khateeb Arwa Moh'd Rashed A.	An Integrated Model for Accessing Patient Information Using IC Cards and Internet（IC カードとインターネットを使用した、患者情報へのアクセスを目的とした統合的モデルに関する研究）
人間・環境学	Mboudjeka Innocent	The Pol and Env Gene Diversity of Human Immunodeficiency Virus Type 1 (HIV-1) from Central Africa: Evidence of Two New Emerging HIV-1 Subtypes in Cameroon（中央アフリカのヒト免疫不全ウイルス1型（HIV-1）の pol,env 遺伝子の多様性：カメルーンで新しく出現した2つの HIV-1 サブタイプの証明）

文化・地域環境学	佐土井　有　里	Skill Formation in Malaysia: The Case of Auto Parts Industry（マレーシアの自動車部品産業における技能形成）
文化・地域環境学	宋　　榮　柱	脳卒中易発症ラットのインスリン感受性に関する研究　―運動トレーニングと水溶性食物繊維の効果―
文化・地域環境学	松　本　珠　希	Etiology of Human Obesity　―The interrelationship among leptin, autonomic nervous system and the β_3- adrenergic receptor in obese and non-obese young woman―（ヒト肥満成因メカニズムの探求　―若年肥満・非肥満女性におけるレプチン・自律神経活動動態・β_3アドレナリン受容体の相互関係―）
人間・環境学	李　　長　波	日本語定称指示詞の歴史的研究
人間・環境学	林　　敦　子	失読における短呈示下の処理障害に関する研究
文化・地域環境学	大　山　修　一	市場経済化にともなう焼畑農耕社会の変容をめぐる生態人類学的研究　―ベンバ社会の事例―
人間・環境学	横　田　澄　司	大都市生活者の消費構造に関する研究　―社会心理学的アプローチによる―
人間・環境学	加　藤　幹　郎	古典的ハリウッド映画の構造と歴史　―ジャンルの生成とヘイズ・コード―

平成11年度

人間・環境学	安　部　　浩	「現」　―そのロゴスとエートス
文化・地域環境学	佐　野　　亘	経済学的政治制度設計論の射程
文化・地域環境学	松　本　千　穂	モデル動物を用いた高血圧原因遺伝子の検索・同定
文化・地域環境学	山　崎　充　彦	議会制の危機　―ドイツ・ヴァイマル時代の議会制論議―
人間・環境学	杉　山　裕　子	水圏における有機炭素の分布・移動・形質変化に関する研究　―琵琶湖とその流入河川を対象として―
人間・環境学	石　井　源　久	多次元半正多胞体のリソッドモデリングに関する研究
人間・環境学	徳　舛　富由樹	DNA-Protein Interactions Studied by Atomic Force Microscopy（原子間力顕微鏡によるDNA　―蛋白質相互作用の解析）
人間・環境学	王　　偉　彬	1950年代日中両国外交政策の形成と展開　―「政経分離」と「政経不可分」に関する研究―
人間・環境学	中　島　　剛	Petrogenesis of Calc-Alkaline Andesites in the Setouchi Volcanic Belt, SW Japan（西南日本、瀬戸内火山帯に産するカルクアルカリ安山岩の成因）
人間・環境学	松　本　絵理子	視覚性注意障害と視覚認知障害　―アルツハイマー病（AD）例における検討―
人間・環境学	足　達　哲　也	糖尿病における糖の吸収と排泄に関する研究
人間・環境学	宇　井　雅　博	Protection of Macaques Vaccinated with Gene-Deleted HIV-1/SIVmac Chimeric Viruses (SHIVs) Having HIV-1 Env against a Gene-Intact SHIV: a Potential of Live-Attenuated Vaccines for AIDS（HIV-1 Env を持つ遺伝子欠損 HIV-1/SIVmac キメラウイルスによる SHIV に対する感染防御：ヒトエイズ弱毒性ワクチンとしての可能性）
人間・環境学	Gert Jakobus van Tonder	On the modelling of local symmetry in early primate vision（霊長類視覚初期過程における局所的対称軸の役割のモデル化に関する研究）
文化・地域環境学	神　田　　知	The Impact of Environmental Factors on Human Physiological Functions（生活環境因子が生理的機能に及ぼす影響）
人間・環境学	相　澤　義　高	Experimental determination of elastic wave velocity in rocks and minerals at high pressures and temperatures（高温高圧下における岩石及び鉱物の弾性波速度の決定）

人間・環境学	金本勝一	Study on The Dynamical Electron Spins in Conjugated Conducting Polymers（共役導電性高分子内の動的電子スピンに関する研究）
人間・環境学	黒江ゆり子	慢性疾患におけるアドヒアランス Adherence に関する研究
人間・環境学	後藤義典	Partial Breaking of Global Supersymmetry in Linear and Nonlinear Models（線形、非線形模型における大局的超対称性の部分的破れ）
人間・環境学	花田光彦	自己運動知覚における視覚運動情報処理に関する研究
人間・環境学	平井利明	水田に生息するカエル類の食性
文化・地域環境学	中川清	脳卒中易発症性高血圧自然発症ラット由来細胞を用いた発症及び合併症の研究
文化・地域環境学	真下知士	高血圧、脳卒中、動脈硬化の遺伝的素因解明に向けて　―モデル動物を用いた遺伝学的解析―
人間・環境学	井戸啓介	対比・同化現象の解析による運動視機構の研究
人間・環境学	井上雅仁	空間位置情報の作業記憶における前頭連合野の役割
人間・環境学	杉山直樹	分子集合体の微環境とその反応論的意義に関する研究　―芳香族求核置換反応の反応機構解析―
人間・環境学	甲田直美	談話・テクストの展開のメカニズム　―接続表現と談話標識の認知的考察―
人間・環境学	岡本啓	低酸素環境適応の骨格筋の組織化学的解析
人間・環境学	黒田航	Foundations of Pattern Matching Analysis　―A New Method for the Cognitively Realistic Description of Natural Language Syntax（パターン一致分析法の基礎　―自然言語の統語の記述に実在性をあたえるための新たな手法）
人間・環境学	見澤康充	ヒダサンショウウオの自然史的研究

平成12年度

文化・地域環境学	李愛俐娥	社会変動下にある少数民族の適応に関する実証的研究　―カザフスタンにおける朝鮮人社会を事例として―
文化・地域環境学	戸田充	Study of Magnetic Excitation in Singlet-Ground-State Magnets $CsFeCl_3$ and $RbFeCl_3$ by Nuclear Magnetic Relaxation（核磁気緩和による基底一重項系磁性体 $CsFeCl_3$ と $RbFeCl_3$ の磁気励起の研究）
人間・環境学	飯田卓	マダガスカル沿岸漁民ヴェズにおける市場経済の受容　―その生業と家計経済に関する人類学的研究―
文化・地域環境学	藤田渡	森を食うこと、森を守ること　―「囲い込み」を越えて―
人間・環境学	大草知裕	脳磁場計測によるヒトの形態視知覚に関する研究
人間・環境学	倉石一郎	語り（直し）の実践としての人間形成　―日本社会の朝鮮人マイノリティにおける「自己」の構成をめぐって―
人間・環境学	山崎先也	筋活動における骨・筋代謝の連関
文化・地域環境学	藤井裕	NMR Study on Organic Radical Antiferromagnets on *Kagomé* Lattice and Distorted *Kagomé* Lattice（かごめ格子および歪んだかごめ格子をもつ有機ラジカル反強磁性体の核磁気共鳴法による研究）
文化・地域環境学	李仁子	移住者の「故郷」とアイデンティティ　―在日済州道出身者の移住過程と葬送儀礼からみる「安住」の希求―
人間・環境学	王志英	命令・依頼表現における中国語と日本語の対照研究
人間・環境学	小関彩子	ベルクソン哲学における自我論の二義性の問題
人間・環境学	鞍田崇	中期ハイデガー研究　―空間へ

人間・環境学	総田純次	精神病理的現象の病理性について　―精神病理学の方法論的問題に寄せて―
文化・地域環境学	山本茂樹	近衞篤麿　―その明治国家観とアジア観
文化・地域環境学	玉置昌哉	熱プラズマによる純チタンの窒化処理と反応機構に関する研究
人間・環境学	坂　信広	Functional Analysis of Gene Transcriptional Regulation in the Pancreatic β-cells（膵β細胞における遺伝子転写調節の機能的解析）
人間・環境学	森川一也	Regulation of Plastid Gene Transcription by Sigma Factors and Sigma Factor Binding Proteins（シグマ因子及びシグマ因子結合タンパク質による葉緑体転写制御）
人間・環境学	矢口浩子	Biological Effects and Psychosocial Implications of Electromagnetic Fields（電磁場の生物学的影響及び心理社会的影響に関する研究）
人間・環境学	李　西華	Alterations in Histochemical and Biochemical Properties of Cardiac and Skeletal Muscles to Endurance Exercise Following Myocardial Infarction in Rats（持久性運動に対する心筋梗塞ラットの心筋および骨格筋の組織化学的・生化学的特性の変化）
文化・地域環境学	上　英俊	Non-Invasive Assessment of Human Cardiac Autonomic Nervous System : Basic and Clinical Applications（ヒト心臓自律神経活動の非観血的評価　―基礎及び臨床への応用―）
文化・地域環境学	金作　整	ソフトプロセスによる遷移金属酸化物合成とキャラクタリゼーション
人間・環境学	Wichase Khonsue	Age determination of Asian ranids by skeletochronology（骨切片法によるアジア産アカガエル科の年齢査定）
人間・環境学	Iouri Leonidovich Kozyrev	Study of AIDS pathogenesis using infectious molecular clones of simian/human immunodeficiency chimeric viruses.（サル／ヒト免疫不全ウイルス感染性分子クローンを用いたエイズの病態解析）
文化・地域環境学	小杉武史	Neutron Diffraction Studies on the Higher Order Magnetic Structures of Rare Earth Metal, Ho, Tb-Y and Tb-Er Alloys, and Compound, $TbRu_2Ge_2$ under Extreme Conditions（希土類金属 Ho、Tb-Y、Tb-Er 合金、および $TbRu_2Ge_2$ 化合物の極端条件下中性子回折による高次磁気構造の研究）
文化・地域環境学	野口孝則	脳虚血時の病態生理と神経細胞死の制御　―脳卒中易発症高血圧自然発症ラットを用いた研究―
人間・環境学	金子　愛	Responses of Hymenomycete Fruit-bodies to Light and Gravity : Growth Straight Downward in Light from Below（帽菌類子実体の光と重力に対する反応　―真下からの光照射に対しては真下にまっすぐ成長する―）
人間・環境学	中野昌宏	起源の論理　―精神分析学的社会理論への序説
人間・環境学	松本雅美	ガリレオ的自然探求の成立基盤　―歴史的及び現象学的観点からの考察
人間・環境学	山澤陽平	Nonlinear Phenomena in the Excitation of the Axisymmetric Electrostatic Waves in a Nonneutral Electron Plasma（非中性電子プラズマ中での軸対称静電波の励起における非線型現象）
人間・環境学	山本洋紀	計算論的ニューロイメージングシステムの開発と視覚研究への展開

平成13年度

文化・地域環境学	西山昌秀	NMR Study of Kagomé Lattice Antiferromagnets, Jarosites, $RFe_3(OH)_6(SO_4)_2$ [R=K, NH_4, Na, Rb]（かごめ格子反強磁性体ジャロサイト $RFe_3(OH)_6(SO_4)_2$ [R=K, NH_4, Na, Rb]の NMR）
文化・地域環境学	Alexander Bennett	「武士道」の定義の追求
文化・地域環境学	定兼知行	Dressing法の拡張とその格子可積分系への応用
人間・環境学	七條達弘	進化モデルによる合理的選択理論の再構成

文化・地域環境学	尾張　睦	異郷の中の故郷　―ヴァルター・ベンヤミンにおける幼年時代の意味について―
文化・地域環境学	近藤まり	Philippine Corporate Management : The Case of A Cement Plant（フィリピンの企業経営　―セメント工場の事例―）
人間・環境学	内田浩明	カントの自我論　―理論理性と実践理性の関係に留意して―
文化・地域環境学	市川昌広	サラワク州バコン川流域のイバン村落における生態資源利用に関する研究
人間・環境学	宮崎恭行	Analyses of sensitivity to antibody-mediated neutralization and induction of neutralizing antibodies to HIV-1 Env by simian/human immunodeficiency virus-macaque model（SHIV-サルモデルを用いた HIV-1 Env の中和抗体の感受性と誘導能に関する解析）
文化・地域環境学	上田未紀	Magnetic Properties and Quantum Tunneling of Magnetization in Fe8 Molecular Nanomagnet（ナノスケール分子磁性体 Fe8 の磁気的性質と磁化の量子トンネル現象）
人間・環境学	赤畑　渉	DNA vaccination of macaques by full genome plasmids which produce noninfectious virus particles（アカゲザルを用いた非感染性ウイルス粒子を産生するフルゲノムプラスミドによる DNA ワクチンの開発）
人間・環境学	石川智子	Zebrafish 概日時計制御における Cryptochrome の役割
人間・環境学	大倉定之	Multiple Origins of HTLV-1 in South America（南アメリカに拡がる HTLV-1 の多起源説）
人間・環境学	岡　定紀	視覚誘発電位（VEP）計測によるヒトの形態知覚過程の研究
人間・環境学	小山和哉	Brane World Cosmology（ブレーン世界における宇宙論）
人間・環境学	齊田浩見	Hawking radiation in an expanding unvieres（膨張宇宙内のホーキング輻射）
人間・環境学	関　穣慶	Discrete Torsion and Branes in M-theory and their Mathematical Aspects（M理論におけるディスクリート・トーションとブレーンとそれらの数学的側面）
人間・環境学	伝　優子	視空間操作における頭頂連合野の役割
人間・環境学	山口　哲	共形場理論による弦理論のコンパクト化
人間・環境学	吉村成弘	Nano-biology of the Gene: Application of Nano-technology to the Structural and Functional Analysis of the Gene（遺伝子のナノバイオロジー：ナノテクノロジーによる遺伝子の構造・機能の解析）
文化・地域環境学	Silvia TARTARINI	A Study of the Evolution of Writing in China and Japan　―From Oracle Bones to the Digital Age―（中国と日本における文字使用の変化について　―甲骨文字からデジタル時代まで―）
環境相関研究	岩田達也	Mutational Analysis of the Role of the PsbL Subunit in Photosystem Ⅱ Complex（変異導入による光化学系Ⅱ複合体の PsbL サブユニットタンパク質の機能解析）
環境相関研究	前川和俊	Dynamics of birational maps of complex projective spaces（複素射影空間の双有理写像の力学系）
人間・環境学	西村謙司	臨終の住まいの建築論的研究　―浄土教建築を通して―
人間・環境学	美澄幸弘	高圧環境における不斉ニトロアルドール反応に関する研究
人間・環境学	樂木章子	乳児院の子どもたちをめぐる集合体に関するグループ・ダイナミックス的研究
人間・環境学	根岸裕子	脳血管障害および高血圧におけるヒドロキシルラジカルの関与
人間・環境学	水谷健一	本態性高血圧の成因解明に向けて　―モデル動物を用いた分子病態学的解析―
人間・環境学	深田　智	The Cognitive Basis of Semantic Extension in Natural Language　― With Special Reference to Conceptual Metaphor and Metonymy in English（自然言語における意味拡張の認知的基盤　―英語の概念メタファーとメトニミーを中心に―）

人間・環境学	佐藤義之	レヴィナスの倫理　―「顔」と形而上学のはざまで―
文化・地域環境学	林　行夫	東北タイ農村における実践仏教の生成と変容　―ラオ人社会の宗教民族誌―

平成14年度

人間・環境学	長井正博	縮合ケイ酸の分析化学並びに環境化学的研究
人間・環境学	植木正二	多電子系遷移金属錯体における電子状態と配位結合に関する研究
人間・環境学	佐川眞理子	女性の神経症とその精神病理　―精神分析学的観点からの接近―
文化・地域環境学	藤本　武	エチオピア西南部マロ社会における農耕の多様性とその構築に関する文化人類学的研究
文化・地域環境学	窪田好男	日本型政策評価とその可能性
人間・環境学	Saif Ali Musa	The Impact of Relations between NGOs and Govermental Institutions on Relief Activities: A Case Study of Malnourished Children in Internally Displaced Persons Camps in the Sudan（NGOと政府機関のネットワーキングが救援活動に与える影響：スーダン国内避難民キャンプにおける栄養不良の子どもの事例研究）
文化・地域環境学	石井美保	精霊たちのフロンティア　―ガーナ南部のココア開拓移民地域における宗教実践の変容―
人間・環境学	LEPP ZSOLT	Studies on Preferential Enrichment: Synthesis, and Crystallographic and Computational Analyses.（優先富化現象に関する研究：合成、結晶構造解析、計算による解析）
人間・環境学	藤原　学	「建築的構成」について　―谷崎文学にみられる建築的事例をめぐって―
文化・地域環境学	藤井弘章	日本人とウミガメをめぐる環境民俗学的研究
人間・環境学	兼重　努	西南中国、トン族の民族文化に関する動態的研究　―鼓楼・風雨橋を中心に―
文化・地域環境学	濱田　陽	諸宗教・無宗教の共存　―インターレリジアス・エクスピアリアンスの仮説―
人間・環境学	伊藤清一	非中性プラズマによる渦糸の二次元運動の実験的研究
人間・環境学	岡本雅史	アイロニー発話の認知的分析：発話理解とコミュニケーションの統合モデルに向けて
文化・地域環境学	秋山裕之	グイ・ブッシュマンの子どもの対人関係と近代化による影響に関する人類学的研究　―ボツワナ共和国カデ地区及びニューカデ地区の事例―
文化・地域環境学	川村清志	近代日本における故郷表象の動態と文化概念の節合　―石川県鳳至郡門前町七浦地区1915～2000―
文化・地域環境学	宮路淳子	Transition of economic basis and social organization in the Jomon period with respect to environmental archaeology　―Viewpoints from plant food exploitation and storage ―（縄文時代の経済基盤および社会構造の変遷に関する環境考古学的考察　―植物性食料開発と食料貯蔵の視点から―）
人間・環境学	山本雅子	「時」に関わる文法形式の認知的意味　―テンス・アスペクトとパースペクティヴ―
人間・環境学	千家弘行	骨格筋・心筋ミトコンドリアの形態的適応　～運動・低酸素・カルシウム摂取制御からの観察～
文化・地域環境学	縄田浩志	乾燥熱帯の沿岸域における人間・ヒトコブラクダ関係の人類学的研究　―スーダン東部、紅海沿岸ベジャ族における事例分析から―
人間・環境学	野村文宏	現象学と法哲学　―現象学の法への適用の問題―
人間・環境学	今村彰生	Dynamics of Ammonia Fungus Community Viewed from Fruitbody Production and Mycorrhiza Formation（子実体形成と菌根形成からみたアンモニア菌群集の動態）

人間・環境学	田　上　裕　子	聴覚的注意における神経心理学的機構に関する研究
人間・環境学	橋　本　智津子	ニヒリズムと無の思想　―ショーペンハウアー／ニーチェとインド思想―
文化・地域環境学	牧　野　光　琢	我国における資源管理型漁業の特質に関する実証研究：京都府沖合底曳網漁業を例として
人間・環境学	富　田　広　美	主観検出の科学的方法とその哲学的考察
人間・環境学	Hew　Soon　Hin	A STUDY ON THE EFFECTIVENESS AND USEFULNESS OF AGA AND IVF IN JAPANESE COMPUTER-ASSISTED LANGUAGE LEARNING（JCALL）（日本語の CALL における「動画グラフィックシステム」と「音声瞬時視覚化フィードバックシステム」の有効性と実用性）
人間・環境学	石　井　敬　子	コミュニケーション様式と情報処理の文化的差違
人間・環境学	内　田　由紀子	文化と自己システム　―幸福感と自己知覚における検討―
人間・環境学	大　倉　得　史	「語り合い」のアイデンティティ心理学
人間・環境学	志　原　伸　幸	The association of candidate genes of obesity with autonomic nervous system activity（肥満候補遺伝子と自律神経活動の関係について）
人間・環境学	竹　田　和　良	空間性ワーキングメモリーに関連した前頭連合野の情報処理機構の研究
人間・環境学	平　山　　順	Functional and structural analysis of vertebrate cryptochromes（脊椎動物クリプトクロームの機能及び構造解析）
人間・環境学	守　田　知　代	Neural substrates of human color perception revealed by the McCollough effect（マッカロー効果を用いたヒト色知覚に関わる神経機構の解明）
人間・環境学	吉　田　健太郎	Supermembrane and Matrix Model on the PP-wave Background（PP 波背景上における超メンブレインと行列模型）
文化・地域環境学	天　野　真佐理	EFFECTS OF EXERCISE TRAINING, AGING, GENDER AND MENTAL STRESS UPON CARDIAC AUTONOMIC NERVOUS FUNCTION（身体トレーニング、老化、性差、精神的ストレスが心臓自律神経機能に及ぼす影響に関する研究）
文化・地域環境学	Frederik　Cryns	宇田川玄真の神経観　―「遠西医範」・『医範提綱』の文献学的研究
文化・地域環境学	Chavalin　Svetanant	心のあり方を表現する語彙の対照研究　―日本語とタイ語の場合―
文化・地域環境学	李　　春　子	東アジアにおける杜の信仰と持続　―台湾、日本、韓国の比較を中心に―
環境相関研究	岩　長　祐　伸	Spontaneous Dissociation of Excitons in Lead Halide Crystals（ハロゲン化鉛結晶における励起子の自発的な対分解）
文化・地域環境学	LINDA　MASSAKO　UENO	Effects of aging and regular exercise upon baroreflex sensitivity and cardiac autonomic activities（老化及び習慣的な運動が圧受容体感受性と心臓自律神経に及ぼす影響）
人間・環境学	鵜　沢　報　仁	Aspects of Dilaton Dynamics（ディラトン動力学の様相）
人間・環境学	金　　鍾　喆	Nucleophilic Addition Reactions to Carbonyl Compounds under High Pressure Environment（高圧環境におけるカルボニル化合物の求核付加反応）
人間・環境学	MARINA　MAGDALANE　ALOIS　NJELEKELA	The Pathogenesis of Lifestyle Related Diseases in Developing Countries: Results From CARDIAC Study in Tanzania.（発展途上国における生活習慣病の成因に関する研究　―タンザニアにおける WHO 循環器疾患予防国際共同研究の結果）
文化・地域環境学	福　間　良　明	「辺境」に映るナショナリティ　―「日本」という空間の融解／再構築―
環境相関研究	小　山　　暁	高分子構造形成の分子動力学シミュレーション

文化・地域環境学	Anka Veronika Badurina	Creating Gendered Television Advertisements: Anthropological Studies in a Japanese Advertising Agency（ジェンダー化されたテレビ広告の生産過程：日本の広告代理店における人類学的研究）
文化・地域環境学	高田　明	南部アフリカのサンにおける社会的相互行為の発達に関する研究
人間・環境学	山中高史	アンモニア菌の増殖機構　―動物の排泄物や死体の分解跡地が浄化される過程に関する実験菌学的研究
人間・環境学	永田素彦	地域計画・災害復興をめぐるコミュニティ・コンフリクトに関するグループ・ダイナミックス的研究
環境相関研究	吉田　智	Hardness and Fatigue of Inorganic Glasses in Dry and Humid Environments（乾燥および湿潤環境下における無機ガラスの硬度と疲労）
人間・環境学	江本正喜	映像環境が人間に与える影響とその評価に関する影響
人間・環境学	菅　幹生	磁気共鳴画像装置による変動周期の短い対象の計測に関する研究　―心拍動による画像歪みの評価と高速撮影法の開発ならびに強制振動を利用した弾性率の計測法―

平成15年度

文化・地域環境学	柴田哲雄	汪精衛南京政府の研究
人間・環境学	藤本大輔	ラセミ結晶の新しい光学分割減少（優先富化）のメカニズムの解明と一般化
人間・環境学	光田展隆	Identification and Characterization of Plant-Specific Novel Transcription Factors, AtVOZ1, 2 Containing a Novel DNA Binding Motif（新規 DNA 結合モチーフを持つ植物特異的転写因子 AtVOZ1, 2 の単離と解析）
人間・環境学	大平晃久	場所をめぐる意味に関する研究　―構築主義的立場から―
環境相関研究	一宮正義	GaN とその混晶におけるキャリア再結合過程と一軸性応力効果
文化・地域環境学	佐藤知久	HIV と他者性：合州国ブルックリンの事例から
人間・環境学	児玉一宏	A Usage-Based Approach to the Emergence of Early Linguistic Constructions ― From a Cognitive Perspective ―（認知的視点から見た用法基盤的アプローチによる子どもの構文習得研究）
文化・地域環境学	玉田知子	血液中微量無機成分分析法の開発とその健康科学への応用
文化・地域環境学	橋爪博幸	南方熊楠の思想　―「事の学」の可能性―
文化・地域環境学	濵元聡子	島嶼間移動をめぐる社会史的地域研究　―〈しま〉模様の海―
人間・環境学	小谷　賢	イギリス外交政策の源泉　―1940-41年におけるイギリスの対日政策とインテリジェンス
人間・環境学	玉田龍太朗	フィヒテのイェーナ期哲学の研究
文化・地域環境学	高野泰志	In Pursuit of the Natural Body: Hemingway's Struggle with Conflicting Values in His Life and Works（「自然」な身体を求めて：ヘミングウェイの作品と人生における相矛盾する価値観との戦い）
文化・地域環境学	橋本淳治	帝国大学への入学試験における受験資格制限の緩和とその帰結　―〈傍系出身者に対する一つの考察〉とその正否の検証結果―
人間・環境学	Bahadir Pehlivanturk	'Small Worlds' of Overseas Chinese : A Networks Science Approach（華人ネットワークの'スモール・ワールド'：ネットワーク科学の観点）
文化・地域環境学	張　新軍	"Inalienable Right" of Peaceful Use of Nuclear Energy and Multilateral Nuclear Export Control: Constructivism in Reading the Riddle of Treaty Interpretation（原子力平和利用における『奪いえない権利』と多国間核輸出規制　―構成主義（Constructivism）から読み解く条約解釈の謎―）

文化・地域環境学	朴　基　勲	日本の高齢化社会への対応に関する研究　―高齢者の経済的能力の多様性を中心に―
人間・環境学	國　仲　寛　人	Theoretical and Numerical Studies of Inelastic Impacts of Elastic Materials（弾性体の非弾性衝突に関する理論的及び数値的研究）
人間・環境学	小　林　百　合	概日リズム振動機構におけるゼブラフィッシュcryptochrome遺伝子の機能解析と発現制御機構の解析
文化・地域環境学	朱　　鳳	モリソンの『華英字典』に関する一研究　―その百科全書的な特徴およびヨーロッパ漢学史における位置づけについて
人間・環境学	徳　尾　健　司	Extended Quantum Logics（拡張された量子論理）
文化・地域環境学	和　嶋　隆　昌	Micro-porous Materials Synthesized from Paper Sludge Ash at Low Temperature, and its Chemical Mineralogy（低温環境における製紙スラッジ焼却灰から合成した多孔質物質とその鉱物化学）
文化・地域環境学	趙　　成　甲	淀川の河川環境政策決定過程に対する新制度論的考察
人間・環境学	三ツ井　直　樹	メディアアートにおける表現形式の変容に関する研究
人間・環境学	秋　山　尚　志	Construction of New Simian/Human Immunodeficiency Chimeric Viruses (SHIVs) towards a Better Animal Model for HIV-1 Infection in Humans（新規 SIV/HIV-1 キメラウイルス (SHIV) の作製　―より良い HIV-1 感染動物モデルの構築にむけて―）
人間・環境学	安　藤　創　一	Psychophysiological Research on Reaction Time for the Peripheral Visual Field（周辺視野の反応時間に関する生理心理学的研究）
人間・環境学	金　　賢　得	Local Nonequilibrium Effects in Kinetic Theory　―The Boltzmann Equation―（気体分子運動論に見る局所非平衡の効果　―ボルツマン方程式―）
人間・環境学	栗　田　泰　生	CFT description of three-dimensional Hawking-Page phase transition（3次元ホーキング・ページ相転移の共形場理論による記述について）
人間・環境学	小　林　晋　平	弦の場の理論による不安定D-brane系の動的記述
人間・環境学	三　瓶　明希夫	Experimental Study of Formation of a Vortex Crystal Cell in a Nonneutral Plasma（非中性プラズマにおける渦結晶形成の実験的研究）
人間・環境学	竹　村　太地郎	Studies on the Phylogeny of Primate Retroviruses: the Origin, Evolution and Possibility of Zoonotic Transmission（霊長類レトロウイルスに関する分子系統学的研究　―起源・進化とサル／ヒト種間感染の可能性―）
人間・環境学	仁　木　千　晴	物体の意味記憶の半球優位性に関する認知神経心理学的研究
人間・環境学	橋　本　健　志	「心筋・骨格筋の形態と代謝・収縮特性との協関」　～ミオシン重鎖アイソフォーム解析から～
人間・環境学	渡　辺　由美子	Functional role of the mediodorsal nucleus of the primate thalamus in working memory（作業記憶におけるサル視床背内側核の機能的役割）
文化・地域環境学	Leonardo Gomez	Reconsidering Vernacular Japanese Architecture for Sustainable Ecological Design（日本の伝統的な建築再考　―持続可能なエコデザインのために―）
文化・地域環境学	永　井　成　美	THE ROLE OF AUTONOMIC NERVOUS SYSTEM IN CHILDHOOD OBESITY（小児肥満発症・進展に自律神経が果たす役割）
環境相関研究	齋　藤　武　士	Magnetic petrology of Yufu volcano and Unzen volcano, Japan（由布火山と雲仙火山の磁気学的・岩石学的解析）
環境相関研究	繁　宮　悠　介	Evolution of colour polymorphism in neritid snails（アマオブネ科巻貝類における色彩多型の進化）
環境相関研究	和　田　伸一郎	メディアのポテンシャルとその理解　―表象の近代からテレプレゼンス
人間・環境学	足　立　　崇	「住まい」の場所秩序に関する建築論的研究　―台湾ヤミ族の「住まい」をとおして―

文化・地域環境学	浜田　拓	NEUROMUSCULAR AND METABOLIC RESPONSES TO ELECTRICAL STIMULATION OF HUMAN SKELETAL MUSCLE（ヒト骨格筋電気刺激における神経・筋、代謝応答）
文化・地域環境学	Jerrod Ernest Hansen	CULTURE, SELF, AND STUDY ABROAD : THE EFFECTS OF LIVING IN CANADA AMONG JAPANESE HIGH SCHOOL STUDENTS（文化と自己と留学の関わり：日本人高校生におけるカナダ留学生活の効果）
環境相関研究	畑　啓生	Algal farms in coral reefs: intensive management by territorial damselfish and the effects on benthic community（サンゴ礁の中の藻園　―なわばり性スズメダイによる集約的管理とそれが藻類・ベントス群集に及ぼす影響―）
文化・地域環境学	江村　公	ロシア・アヴァンギャルドの形成と展開　―再現表象から構成へ、そして表象へ
アフリカ地域研究	岩井雪乃	タンザニア・西セレンゲティ地域における自然保護政策と住民の生活実践の変容
人間・環境学	河崎　靖	Graphematische Untersuchungen zu den Heliand-Handschriften　―am Beispiel des dentalen Konsonantensystems（古ザクセン語叙事詩『ヘーリアント』の書記法的研究）

平成16年度

人間・環境学	任　和子	慢性疾患患者の心理社会的ストレスに関する研究
人間・環境学	信友建志	歴史認識の精神分析的考察　―歴史認識論としての精神分析―
文化・地域環境学	島岡良之	Microscopic Study of the Magnetization Platearus in NH_4CuCl_3 by 15N-NMR（NH_4CuCl_3 における磁化プラトーの15N-NMRを用いた微視的視点からの研究）
人間・環境学	伊藤さとみ	現代中国語に見られる単数／複数／質料の概念
人間・環境学	野島直子	寺山修司における創作活動と精神分析
文化・地域環境学	小野原教子	ファッションと衣服の記号学的研究
文化・地域環境学	山崎茂雄	芸術文化支援と公共政策　―市民社会の合意形成に向けた文化支援システムをめざして―
人間・環境学	宇多　浩	知覚と志向性　―フッサール現象学における知覚理論
人間・環境学	金　善美	韓国語と日本語の指示詞の直示用法と非直示用法
文化・地域環境学	井尻　樂	1910年代前後の日本におけるカンディンスキー像　―カンディンスキー芸術の受容と紹介―
人間・環境学	石田美紀	ファシスト政権下イタリア映画の自己形成における「白」の視覚　―批評用語「白い電話」をめぐる諸問題
人間・環境学	椿田貴史	人間形成における象徴の意義　―フロイトに始まる象徴論の展開―
文化・地域環境学	池田寛子	W.B.Yeats: Irish Folklore and Nationalism（W.B.イェイツ　―アイリッシュ・フォークロアとナショナリズム）
人間・環境学	仲本康一郎	認知意味論に基づく属性表現の意味解釈のメカニズム：エージェント指向の意味論の構築へ向けて
人間・環境学	尾谷昌則	自然言語に反映される認知能力のメカニズム　―参照点能力を中心に―
人間・環境学	塩野谷紀聖子	母親隔離飼育を行ったラットの摂食行動及び不安反応行動解析
人間・環境学	河内山隆紀	機能的磁気共鳴画像法における体動関連成分の補正に関する研究
文化・地域環境学	宮崎理枝	疫病時下の都市住民の制度受容に関する一考察　―トローネ裁判記録の証言にみる1630年ボローニャの事例から―

文化・地域環境学	中村英夫	Development of a measurement system for motor unit activity by surface EMG signal decomposition（表面筋電図デコンポジションによる運動単位活動計測システムの開発）
人間・環境学	来田宣幸	Go/Nogo 反応時間課題を用いたヒトの運動制御機構の研究
人間・環境学	戸田剛文	バークリーの非物質主義的哲学　―観念論と記号論的世界観―
人間・環境学	青木滋之	ロックの観念説　―自然主義の観点から―
人間・環境学	下野智史	光学活性な有機常磁性物質の合成と物性に関する研究
人間・環境学	三宅在子	Virological analysis in various tissues of simian/human immunodeficiency virus-infected macaque monkeys（SIV/HIV-1キメラウイルス感染ザルの各種臓器におけるウイルス学的解析）
環境相関研究	福島智子	治療という名の予防　―自覚症状がない糖尿病患者を対象とした「治療」の社会学的分析
文化・地域環境学	張　莉	中国古代における「五感」に関する文字の考察
文化・地域環境学	原野葉子	Poetica Pataphysica　―ボリス・ヴィアンにおけるパタフィジック的想像力について―
人間・環境学	富永篤	ブチサンショウウオの系統分類学的研究
人間・環境学	中山法子	N=2 Supersymmetric Sigma Models and Supergravity Solutions（N=2 超対称シグマモデルと超重力解）
人間・環境学	馬場秀司	偏極仮想光子構造関数における高次ツイストおよび標的質量効果
人間・環境学	東村知子	正規の学校教育の周辺に存在する教育活動に関する研究
人間・環境学	宮本直和	Estimation of Changes in Muscle Contractile Properties at Various Joint Angles by Mechanomyography（筋長変化に伴う筋収縮特性の評価　～筋音図信号を用いて～）
文化・地域環境学	Patcharaporn Kaewkitsdang	身体変化の描写による感情表現　―日本・タイの対照研究の観点から―
文化・地域環境学	松村圭一郎	土地所有と富の分配をめぐる人類学的研究　―エチオピア西南部・コーヒー栽培農村の事例から―
文化・地域環境学	松本健太郎	記号論とメディア論の架橋を目指して　―「言語」と「装置」の媒介作用・延長作用に関する一考察
人間・環境学	Osama Abu Zied Nogid El Nour	Development Projects Implemented by NGOs for Internally Displaced Persons in Sudan : Implications of IRC Project Cycle Management（スーダン国内避難民に対する NGO による発展援助プロジェクトに関する研究）
人間・環境学	中島光一	Electron spin resonance investigations of β-tricalcium Phosphate（β型リン酸三カルシウムの電子スピン共鳴に関する研究）
文化・地域環境学	神山直樹	Synthesis of Nucleoside Derivatives Directed toward Clarification of Glucose Metabolism Activation（糖代謝活性化機構解明を目指したヌクレオシド誘導体の合成）
環境相関研究	小野俊介	Optical Properties and Gain Characteristics of Erbium-Doped Fiber Amplifier（エルビウムドープ光増幅器の光物性と光増幅特性）
文化・地域環境学	東谷護	新たなるポピュラー音楽文化の創出　―占領期日本の進駐軍クラブにおける「アメリカ」との対峙
文化・地域環境学	渠　昭	切り絵のイコノロジー　―民間芸術に見られる中国人の自然観を探る―
文化・地域環境学	藤原辰史	ナチス・ドイツの有機農法　―「自然との共生」はなぜ「民族の抹殺」に荷担したのか―

平成17年度

文化・地域環境学	河田　学	フィクションとは何か
人間・環境学	山下剛徳	老化度を制御するプライマリ老化因子の探索に関する研究
人間・環境学	北田　亮	fMRI studies of the human cortical somatosensory system（ヒトの大脳皮質における体性感覚システムのfMRI研究）
人間・環境学	石野秀明	保育の場での関与的観察に基づく自己の探求：ライフサイクルの二重性と発達
人間・環境学	進藤三佳	Semantic Extension, Subjectification, and Verbalization（意味拡張・主体化・動詞化）
文化・地域環境学	岩谷彩子	南インドの商業移動民ヴァギリの生活実践と信仰変容　―ミメーシスの文化人類学に向けて―
文化・地域環境学	吉田雅子	中国で制作された欧州意匠の輸出用染織品の研究　―日本に舶載された16～17世紀の作例に関して―
環境相関研究	張田裕之助	暖季における湖沼の塩基性化と微量酸素酸アニオンの動態変化
文化・地域環境学	川端　牧	糸満における海と魚の民族誌　―ウミンチューとアンマーの自然を読む知識―
人間・環境学	大塚直子	ドゥルーズのシステム　―芸術作品の機能をめぐって
環境相関研究	黒宮一太	ネイションとの再会
環境相関研究	山崎浩司	解釈主義的社会生態学モデルによる若者のセクシャルヘルス・プロモーション：性的に活発な高校生のコンドーム使用促進のための要因探索および対策・援助検討型研究
環境相関研究	林　貴啓	脱構築から再構築へ　―もうひとつのポストモダニズムの可能性を探る―
文化・地域環境学	福島涼史	正戦論とその秩序　―戦争観変遷のスコラ的考察―
文化・地域環境学	乾　由紀子	炭鉱写真絵葉書の効用　―イングランドおよびウエールズの石炭産業を主題とする初期写真絵葉書
環境相関研究	満武巨裕	病院情報システムのデータを用いた医療の経営と質の分析
文化・地域環境学	信田千佳	The Comparison between Japanese Compound Verbs with “～*Ageru*” and English Verb-Particle Constructions with “～Up”（日本語の複合動詞後項「～あげる」と英語の不変化詞 “～Up” の比較）
環境相関研究	板倉史明	映画に見る戦前の米国日系移民
文化・地域環境学	小原丈明	都市再開発の展開と意義　―大阪の事例を中心として―
文化・地域環境学	蘇　明明	唐代の文人と喫茶　―唐詩を中心に考察する
人間・環境学	占部千由	砂山形成過程におけるゆらぎのダイナミクス
文化・地域環境学	小坂田裕子	国際人権法における多文化主義　―可能性と課題―
人間・環境学	清水辺　大	非摂動繰り込み群による有限温度・密度 QCD の相構造の研究
人間・環境学	藤田雄飛	人間形成とメルロ＝ポンティの思想　―身体への書き込みとポストモダン言説―
人間・環境学	鍾　翀	東南中国における地域社会の形成とその構造に関する歴史地理学的研究　―浙江省東陽県北江盆地の宗族社会を中心に―
文化・地域環境学	筒井　裕	山岳を祀る神社の運営組織とその信仰圏に関する研究　―近現代の山形県大物忌神社を事例として―
人間・環境学	山田真希子	The role of the amygdala and the orbitofrontal cortex in social cognition : implications for social dysfunction in schizophrenia（社会認知における扁桃体と前頭葉眼窩面の役割：統合失調症の社会障害の解明）

共生人間学	韓　燕麗	ナショナル・シネマの彼方にて　―中国系移民の映画とナショナル・アイデンティティ―
共生人間学	小早川　睦貴	物品使用障害の神経心理学的研究　―身体と行為対象の相互作用という観点から
共生人間学	橋本　敏宏	経頭蓋磁気刺激法の脳機能に対する干渉効果・促進効果の究明
共生人間学	日比野　愛子	バイオテクノロジーの社会的受容に関する国際比較研究
共生文明学	Emre SARAOGLU	Target States' Engagement With and Tactics Against International Alliances: North Korea's Tactics vis-à-vis the U.S.- South Korea Alliance（同盟・対象国との相互作用および対象国による対同盟政策　―北朝鮮と米韓同盟との関わりを事例として―）
相関環境学	倉田　薫子	ニューカレドニアにおける *Nepenthes vieillardii* Hook.f. (Nepenthaceae) の種内分化
相関環境学	焦　従勉	日中通商交渉のメカニズム
相関環境学	西橋　毅	クモ膜下出血後の脳血管攣縮に関する研究　―バソプレシンに対する収縮応答性の上昇と内皮細胞依存性収縮の関与―
相関環境学	古川　邦之	Geology and Petrology of Silicic Volcanism in Extensional Plate Convergent Zone（プレート沈み込み帯の引張応力場における珪長質火山活動の地質学と岩石学）
相関環境学	堀内　励生	Development of DNA vaccine using full genome plasmids which produce non-infectious virus particles（非感染性ウイルス粒子を産生するフルゲノムプラスミドを用いた DNA ワクチンの開発）
共生人間学	赤澤　千春	生体肝移植術を受けた成人レシピエントの術後精神症状の発症に影響する要因分析
共生文明学	金　麗實	映画と国家　―韓国映画史（1897-1945）の再考
相関環境学	Cristina Corina Trandafir	Study on Participation of Arginine Vasopressin and Leukotrienes in Development of Cerebral Vasospasm after Subarachnoid Hemorrhage（クモ膜下出血後の脳血管攣縮における arginine vasopressin と leukotrienes の関与に関する研究）
共生人間学	黒田　生子	聴覚障害者の生と臨床実践の在り方
人間・環境学	菅井　紫野	漢字における意味機能の有縁的発達　―〈手の記号〉と〈足の記号〉を中心に―
文化・地域環境学	串田　秀也	会話における参加の組織化の研究　―日本語会話における「話し手」と「共―成員性」の産出手続き―
文化・地域環境学	金谷　美和	布がつくる社会関係　―インド・グジャラート州カッチ県の染色業者カトリーの事例より―
相関環境学	伴　正和	Ⅰ型アレルギー反応の即時相及び遅発相に作用する新規アレルギー疾患治療薬の合成研究
共生人間学	髙石　鉄雄	自転車運動に対する身体適応および日常的自転車使用による健康づくりの可能性
文化・地域環境学	宮脇　幸生	辺境の構築　―エチオピア国家支配に抗する少数民族ホールの生存戦略―
文化・地域環境学	王　柳蘭	「難民」から「華」人への道　―戦乱と越境に生きる北タイ人雲南人の民族誌

平成18年度

共生人間学	稲田　扇	2型糖尿病患者の医療費と QOL の研究
相関環境学	花阪　文宏	イリジウム含窒素複素環カルベン錯体の創製とその構造・触媒機能並びに反応性に関する研究

人間・環境学	今田 絵里香	「少女」というジェンダー・アイデンティティ　―『少女の友』における意味世界と読者―
文化・地域環境学	岡 美穂子	近世初期の長崎とマカオ　―日本関係南欧史料の分析から―
人間・環境学	呂 佳蓉	擬音語・擬態語の比喩的拡張の諸相　―認知言語学と類型論の観点から―
共生文明学	魯 炳浩	吉野作造と丸山眞男　―「民本主義」と〈永久革命〉、その交錯と分裂―
文化・地域環境学	城田 愛	エイサーにみるオキナワンたちのアイデンティティ　―ハワイ沖縄系移民における「つながり」の創出―
人間・環境学	岡村 英幸	P型 ATPase スーパーファミリーの分子進化と生物のマクロ進化の相関
文化・地域環境学	風戸 真理	モンゴル国牧畜地域における政治経済変化と遊動的牧畜　―社会主義から市場経済への移行のなかで―
共生文明学	金 賢善	サッカー言説における日本の他者像と自己認識
共生人間学	八ッ塚 一郎	阪神大震災を契機とする社会変動の構図とその展開に関する集団力学的研究
人間・環境学	有光 奈美	日・英語の対比表現と否定のメカニズム　―認知言語学と語用論の接点―
環境相関研究	田原 大輔	Light scattering from polymer spherulites in crystal growth simulation（結晶成長シミュレーションにおける高分子球晶からの光散乱）
文化・地域環境学	山本 明美	『バイアーノの修道院』(1892)　―著者考証と「イタリアニスム」―
環境相関研究	篠原 雅武	空間の政治理論　―公的なるものの条件についての探究
人間・環境学	内山 智子	ベルクソンにおける選択と自由
人間・環境学	森 香奈絵	「不定名詞句の意味論　―英語・フランス語を対象とした多様な意味解釈の統一的分析―」
文化・地域環境学	河目 直之	X-ray analysis of a new super-structure of natural mordenite and structure determination of two synthetic crystals（天然モルデナイトの新しい超構造のX線解析と二種の合成結晶の構造決定）
人間・環境学	小山 俊樹	憲政常道と政党政治　―近代日本の二大政党論における「理念」と「戦略」―
文化・地域環境学	Steven TRENSON	平安時代真言密教祈雨儀礼の歴史的批判的研究　―十一世紀後半～十二世紀初頭における祈雨儀礼の変遷と醍醐寺―
共生人間学	有田 恵	＜生涯発達心理学＞から捉える死　―末期癌患者との対話から―
相関環境学	金澤 英樹	Synthesis of large single crystals of pure forsterite and Fe, Mn and Cr doped forsterites, and their optical properties　（純粋なフォルステライト、及び鉄、マンガン、クロミウムを添加したフォルステライトの単結晶合成とその光学物性測定）
共生文明学	星野 安治	Dendrochronology of Japanese beech (Fagus crenata BI.) on the eastern Honshu Island, Japan（本州東部におけるブナの年輪年代学）
共生人間学	辛 基玉	Effects of Exercise and Nutrition upon Cardiac Autonomic Nervous System and Energy Metabolism（心臓自律神経及びエネルギー代謝に対する運動と栄養の効果）
相関環境学	梅谷 和弘	大気圧の広帯域スペクトルと気象現象
共生人間学	松永 哲郎	Association of genetic variation in the G-protein, adrenoceptor, and renin-angiotensin system with autonomic nervous function（Gタンパク質、アドレナリン受容体、レニン－アンジオテンシン系における遺伝子多型と自律神経機能との関連解析）
相関環境学	川村 紀子	Early diagenetic effects on magnetic properties of marine sediments（海底堆積物の磁気特性に及ぼす初期続成作用の影響について）
相関環境学	曽我 之泰	外部回転波と結合した非中性プラズマの輸送と構造形成

相関環境学	川北　篤	Origin and evolution of obligate pollination mutualism in the Phyllanthaceae-*Epicephala* association（コミカンソウ科－ハナホソガ属間における絶対送粉共生系の起源と進化）
相関環境学	石松美沙	Construction of a novel SHIV having an HIV-1-derived protease gene and its infection to rhesus macaques: a useful tool to conduct in vivo efficacy tests for protease inhibitors（HIV-1 のプロテアーゼ遺伝子を組み込んだ新規 SHIV の作成とそのサル感染実験　―抗 HIV-1 プロテアーゼ阻害剤の in vivo 評価に有用なツールの創出）
共生人間学	木村哲也	SURFACE MECHANOMYOGRAM FOR APPLIED PHYSIOLOGY（筋音図に関する応用生理学的研究）
共生文明学	Ali Volkan Erdemir	The Japanese View of Turkey during the *Meiji* Era: A Study Focused on *Torajiro Yamada*（明治日本におけるトルコ観　―山田寅次郎を中心に）
相関環境学	齊藤尚紀	Studies on CD1d-NKT system conserved among species: Importance of primate models for human disease analysis（種属間で保存された CD1d-NKT 細胞抗原提示系の解析：ヒト病態解析における霊長類のモデルの重要性）
相関環境学	元原麻貴子	Influence on thymopoiesis of simian and human immunodeficiency virus infection.（サル・ヒト免疫不全ウイルスが胸腺細胞新生に及ぼす影響）
共生人間学	武藤百合	アトピー性皮膚炎患者の体験世界　―共に生きる生活をめぐって―
共生文明学	松本郁子	日露交流史における太田覚眠の思想と行動
相関環境学	小山　眞	Genotoxic Effects of Extremely Low Frequency Electromagnetic Fields and Radiofrequency Radiation（極低周波電磁場および高周波曝露による遺伝毒性への影響）
共生人間学	顧　寧	Effects of mutant HNF-1α and HNF-1β identified in MODY3 and MODY5 on the sucrase-isomaltase and dipeptidylpeptidase-Ⅳ gene expressions（MODY3、MODY5で確認された変異型の HNF-1α、HNF-1β がスクラーゼ・イソマルターゼ及びジペプチジルペプチダーゼ遺伝子発現に与える影響）
共生人間学	杉原佳次	グレイコードの性質を用いた画像処理に関する研究
共生文明学	木下　昭	エスニック学生組織からみる「祖国」　―フィリピン系アメリカ人にとってのフィリピン、そしてアメリカ―
相関環境学	青木　順	強磁場中に孤立した非中性プラズマの熱平衡現象に関する実験的研究
共生文明学	松田　清	洋学の書誌的研究
共生人間学	中村　治	洛北岩倉における精神病者預かりの伝統の形成と消失

平成19年度

文化・地域環境学	前木由紀	北イタリア人文主義におけるイメージとテクスト　『ポリフィロの愛の戦いの夢』を中心に
共生人間学	大内田　裕	他者の視覚運動情報を利用した運動制御メカニズムの研究
共生人間学	中王子　聖	ひらいた傷：ピノチェト軍政による行方不明者を抱えた家族達の心像
人間・環境学	森田吉彦	日清修好条規の研究　日本・中華帝国・西洋国際社会の三角関係と東アジア秩序の二重性
文化・地域環境学	川村文重	ディドロにおける科学的認識論、思考、テクストの内的連関　―『ダランベールの夢』の事物の多層的な象徴性を通して
文化・地域環境学	菅　利恵	ドイツ市民悲劇における自己形成のテーマ
環境相関研究	鵜飼大介	文字認識の近代

人間・環境学	碓井智子	Cognitive Time Model: With Special Reference to Temporal and Spatial Phenomena in Natural Language（認知時間モデル：自然言語における時間表現と空間表現を中心に）
人間・環境学	山添博史	ロシア帝国のアムール川流域進出における極東情勢と欧州秩序、1847－1860年
文化・地域環境学	志村真幸	愛犬趣味の誕生　―近代化する社会における純血と雑種の問題
文化・地域環境学	李　雯文	重層的社会空間としてのカトリック村　―中国陝西省におけるカトリック村落についての文化人類学的研究
共生文明学	内藤真帆	ツツバ語の記述的研究
共生文明学	福家崇洋	戦間期日本社会運動試論
共生人間学	松枝啓至	デカルトの「方法」をめぐって　―デカルトの「観念」理論と「分析」理論―
共生文明学	孫　郁雯	ヒーローの文化的境界線　―第二次世界大戦後における日米台マンガ・ヒーローの比較研究（1945－1973）
共生文明学	程　顥	台湾におけるナショナル・アイデンティティの変容とナショナリズムの形成　―台湾における国家認同と族群問題―
共生人間学	武井智彦	霊長類の上肢運動制御機構に関する生理学的解析
共生文明学	藤本龍児	多元社会における公共宗教　―1970年代以降のアメリカの諸思想と宗教
共生人間学	Gan Sheuo Hui	The Concept of Selective Animation: Dropping the “Limited” in Limited Animation（セレクティヴ・アニメーション　―リミティッド・アニメーションを「限定」から解放する）
共生人間学	上野康平	Symmetries of Julia sets in higher dimensions（高次元におけるジュリア集合の対称性）
共生人間学	山川義徳	FROM BRAIN TO BUSINESS　脳の環境適応戦略から企業の環境適応戦略を紐解く
相関環境学	島田知彦	ボルネオハヤセガエル属に関する系統分類学的研究
共生人間学	羽倉信宏	Sensing hand movement from visual and kinesthetic information　―Neuronal correlates of multisensory processing in estimating the location of hand―（視覚と運動感覚情報を用いた手位置知覚：多感覚情報を用いた手位置推定の脳内機構）
共生人間学	鄭　愛松	Effect of Kampo and CoQ10 on cardiac autonomic nervous system in healthy subjects（漢方薬とCoQ10が健常者の自律神経活動に及ぼす影響）
相関環境学	奥山雄大	Diversification of the genus *Mitella* (Saxifragaceae) and allies driven by pollination specialization and interspecific hybridization（送粉様式の特殊化と種間交雑がもたらしたチャルメルソウ類の多様化）
相関環境学	林　英明	Material Design of Rare Earth Doped Glasses for WDM Amplifiers（波長多重光増幅器用希土類ドープガラスの材料設計）
共生文明学	山元宣宏	秦漢時代の書体の諸相
相関環境学	紀　旭	Study on the pharmacological nature of nicotine as a risk factor of subarachnoid hemorrhage（クモ膜下出血の危険因子であるニコチンの薬理学的性質に関する研究）
相関環境学	大西将徳	AOZORA: Elemental Processes of the Blue Sky; Light Scattering, Atmospheric Transport, Heat Adjustment（青空　―青空の基礎過程〈光散乱、大気輸送、熱調節〉）
共生文明学	Tina Vesselinova Peneva	The invention of *Wagyu* beef and contemporary meat-eating practices in Japan: An anthropological study of Omi beef production and consumption（現代日本における食肉文化と「和牛」という「創られた伝統」：近江牛の生産と消費についての研究）

共生人間学	渡邉　慶	意思決定に関与する前頭連合野神経機構の解明
相関環境学	小林知里	Diversification and adaptive significance of maternal plant-manipulation behaviors in Attelabidae（オトシブミ科における植物加工行動の多様化と適応的意義）
相関環境学	生田大穣	In situ X-ray structure analysis and identification of minerals on a glass thin section（顕微鏡ガラス薄片上の鉱物のX線構造解析と同定）
相関環境学	山田吉英	超対称量子力学とその拡張
相関環境学	吉富志津代	多文化共生社会における新渡日外国人自助組織形成プロセス　―兵庫県の事例から考察する具体的施策―
共生文明学	Elena Baibikov	Translator-Target Text Relationship: Reading Japanese Translations of Chekhov's Letters to His Wife（翻訳者と翻訳テクストとの相互関係：チェーホフ「妻への手紙」の日本語訳を読んで）
共生文明学	Andrea Yuri Flores Urushima	Nishiyama Uzô and the Expo 70 'model core of a future city': genesis and meaning（西山夘三と1970年日本万国博覧会における未来都市のコアモデル：起源と意味）
共生人間学	番　浩志	レチノトピー表象を有するヒト大脳皮質低次視覚野における空間的・時間的な視覚文脈の処理：fMRI 研究
相関環境学	堀口雅弘	Development of Structurally Selective Preparation Methods of Organic Crystals by Controlling the Polymorphism or the Arrangement of Guest Molecules（結晶多形制御またはゲスト分子の配列制御による構造選択的な有機結晶作成法の開発）
文化・地域環境学	久保利永子	登山はいかにして成立したのか：ヴィクトリア中期におけるスポーツとしての登山概念の構築
文化・地域環境学	永原順子	能における物狂の研究　―宗教学的見地から―
共生人間学	岩本　忠	英語強変化動詞の研究
相関環境学	越川昌美	天然水に溶存する元素の自然濃度とその変動を支配する要因について
相関環境学	西川完途	Systematic study on *Hynobius boulengeri* and *H. stejnegeri*（オオダイガハラサンショウウオとベッコウサンショウウオの系統分類学的研究）

平成20年度

人間・環境学	関　敬一郎	英語の中間構文形成と動詞クラス：二重イベント構造の観点から
文化・地域環境学	関根真保	戦時上海における日本のユダヤ人管理システム　―1943年5月18日設置の「上海ゲットー」をめぐる一考察―
共生文明学	陳　捷	甲骨文字に見える商代信仰の研究　―神權、王權と文化の交わり―
共生文明学	Fauconnier Brice	Le processus de formation de «l'espace discursif marxiste»: autour de Yamakawa Hitoshi, Fukumoto Kazuo et Tosaka Jun（「マルクス主義的言説空間」の形成過程　―山川均、福本和夫、戸坂潤をめぐって）
相関環境学	山田圭子	Aseasonal and Supra-annual Patterns in Long-term Fluctuations of a Chrysomelid Assemblage in a Southeast Asian Rainforest（東南アジア熱帯雨林におけるハムシ群集の長期個体数変動様式）
環境相関研究	上野正恵	ウィルダネス概念とフィリア仮説に基づく環境リテラシー
人間・環境学	李　在鎬	用法基盤モデルに基づく日本語の構文研究
人間・環境学	玉井尚彦	The Syntax-Semantics Interface of Change-of-State and Change-of-Location Expressions: From a Derivational Viewpoint（状態変化・位置変化表現の統語・意味インターフェイス　―派生的観点から―）

文化・地域環境学	小池郁子	西アフリカ、ヨルバの神々をもとめて　―アフリカ系アメリカ人のオリシャ崇拝運動―
環境相関研究	髙橋そよ	サンゴ礁資源利用に関する人類学的研究　―沖縄・佐良浜の事例から―
共生人間学	上本雄一郎	『霊界物語』に見る大本教の民衆性　―出口王仁三郎の近代批判―
文化・地域環境学	布施将夫	鉄道と軍事から見た合衆国形成史　―南北戦争から第一次大戦までを中心に―
環境相関研究	森田健司	武士道と日本近代思想形成史　―「公共性」の日欧比較思想研究にむけて
人間・環境学	佐藤泰子	終末期患者のスピリチュアルペインへの臨床的アプローチ　―「苦しみの構造」に着目して―
人間・環境学	稲田雅美	ミュージックセラピィの実践におけるセラピストのあり方についての研究　―精神分析の関係理論を踏まえて―
環境相関研究	飯澤功	Urban Heat Island Circulation（ヒートアイランド循環）
文化・地域環境学	福岡千珠	アイルランド語復興と「アイルランド人」自己意識の変容
人間・環境学	野澤元	フレームモデルに基づく言語理解と言語生成の認知的分析
共生人間学	石谷治寛	レアリスムと幻視　――九世紀フランスの調和と自由をめぐる芸術と美学
共生人間学	上尾真道	人間の科学と精神分析　―幻想の横断―
共生人間学	山内玲	William Faulkner's Fiction and Questions of Southern Whiteness（ウィリアム・フォークナーの小説とアメリカ南部における白人性の諸問題）
共生文明学	奥田泰広	イギリスにおける対外戦略の形成システムの変容　―国家戦略とインテリジェンスの相互作用（1902－1939年）
共生文明学	呉宛怡	明清時代の女性と演劇
共生文明学	Raúl Guerrero Plaza	Power, Media and Minorities: The *Gitano* and *Dōwa* Issues in the Spanish and Japanese Press during the 1990s（権力、メディア、マイノリティーの関係についての一考察　―1990年代のスペインの新聞におけるロマの扱いと日本の新聞における同和問題の扱いの比較を通して）
共生文明学	林信蔵	ゾライズムの射程　―永井荷風の初期作品をめぐって
共生人間学	増田慎也	Adaptation of cytoskeletal and sarcolemmal proteins for functional requirements ―new information for the development of fatigue resistance in skeletal muscle―（機能的要求に対する細胞骨格および筋細胞膜タンパク質の適応　―骨格筋の耐疲労性の発達に関する新たな知見―）
共生文明学	山本達也	伝統／現代を生きるディアスポラ　―北インド・ダラムサラのチベット難民舞踏集団TIPA を事例に
共生文明学	山本友紀	脈動する「オブジェ」と「色彩」　―フェルナン・レジェの創作活動の軌跡―
共生人間学	中村雅子	地域コミュニティ活動支援と情報共有のための情報システム・デザイン　―社会-技術的ネットワーク形成の観点から見た情報システム構築と運用―
共生文明学	黄明月	東北アジア創世神話に關する比較研究
共生人間学	山田陽介	高齢者の身体組成と身体活動量の簡便で精確な推定法：二重標識水法を用いた検証
共生人間学	中島暢美	ディブリーフィング・ワークの研究　―看護学生の臨地実習におけるディブリーフィング・ワークの心理教育的意義―
共生人間学	辻村優英	苦しみという名の贈りもの　―ダライ・ラマ14世における思いやりと普遍的責任―
共生文明学	張黎	『遊仙窟』語彙と和訓についての研究　―複音節語を中心に―
共生人間学	三好正彦	学童保育の多角的研究　―児童福祉的側面と人間形成論的側面からの考察

相関環境学	内田幸明	Studies on Magnetic, Electric, and Optical Properties in the Condensed Phase of Nitroxide Radicals（ニトロキシドラジカルの凝縮相における磁気・電気・光学的性質に関する研究）
相関環境学	平山　祐	Development of Protein Modifying Molecules and Colorimetric Metal Ion Sensor（種々のタンパク質修飾分子の開発と比色型金属イオンセンサーの開発）
共生文明学	益満まを	赤外線画像解析による『世界四大洲新地図帳』の書誌的研究
相関環境学	西澤篤志	Search for cosmological gravitational-wave background at high frequencies（高周波数帯における宇宙背景重力波探査）
相関環境学	丹羽佳人	JASMINE 計画のためのレーザー干渉計型望遠鏡ジオメトリーモニターの開発
相関環境学	深澤嘉伯	Virological and immunological analysis of systemic lymphoid tissues in the early phase of simian-human immunodeficiency virus infection（サル／ヒト免疫不全ウイルス感染初期での全身リンパ系組織におけるウイルス学および免疫学的解析）
相関環境学	松下京平	社会関係資本と環境ガバナンスの双方向性因果に関する研究
相関環境学	島田幹男	Inactivation of the Nijmegen breakage syndrome gene NBS1 leads to excess centrosome duplication via the ATR/BRCA1 pathway（DNA 修復タンパク NBS1 の ATR/BRCA1 経路を介した中心体複製機構の解析）
相関環境学	石橋孝一	窒素原子を配した大環状かご型化合物の合成と物性に関する研究
共生文明学	劉　志偉	「姉小路式」テニヲハ論の研究
相関環境学	岡本朋子	Chemical composition and ecological role of floral scent in moth- and midge-pollinated plants（蛾媒花とキノコバエ媒花における花の匂いの化学成分と生態学的役割）
共生人間学	吉住美保	The Frontal Systems Behavior Scale 前頭葉機能に関する行動評価尺度の日本語版の開発と応用　―統合失調症における社会行動障害に関する病識
共生文明学	Helena Grinshpun	‘My Cup’ of Coffee: Analyzing Starbucks as a Social and Cultural Space in Japan and in Israel（コーヒーを「マイカップ」で　―日本とイスラエルにおける社会的・文化的空間としてのスターバックス―）
相関環境学	髙槇禎憲	ヒドリドで架橋されたイリジウム二核錯体による有機小分子の活性化に関する研究
相関環境学	小山公平	Characterization of the photosynthetic electron transfer chain of a cyanobacterium *Gloeobacter violaceus* PCC 7421 : Spectroscopic and biochemical studies（シアノバクテリア　*Gloeobacter violaceus* PCC 7421 の光合成電子伝達系に関する分光学・生化学的研究）
相関環境学	亀田勇一	Diversity and speciation mechanism of the land snail genus Satsuma (Camaenidae) endemic to the Japanese island arc（日本島弧固有の陸貝ニッポンマイマイ属（ナンバンマイマイ科）の多様性と種分化）
共生文明学	朱　銀花	日・中・韓三国の言語における動物文化の比較考察　―「馬」、「牛」、「犬」、「猫」にまつわることわざを中心に―
共生文明学	棚瀬滋郎	インドヒマラヤのチベット系諸社会における婚姻と家運営　―ラホール、スピティ、ラダック、ザンスカールの比較とその変化
文化・地域環境学	林　紀代美	日本の水産物流通に関する地域形成論的研究　―消費や発展基盤の変化に即した地位の確立に注目して―
文化・地域環境学	荒木俊之	現代日本における小売商業の立地変化に関する研究　―立地規制の影響を中心として―

平成21年度

人間・環境学	中西之信	失語症者における“「言葉の世界」へ戻る仕事”　―「話せない」／「話せる」とは如何なることか

人間・環境学	角田京子	統合失調症の両価性から観た主体の倫理的価値をめぐる構造論的問題
文化・地域環境学	上野勝之	平安貴族社会の宗教的心性とその変容　―夢観念と疾病認識―
文化・地域環境学	陸　越	女部漢字初探
共生文明学	西矢貴文	葦津耕次郎　―「国家神道」期における一神道人の軌跡―
共生文明学	宮西香穂里	沖縄における米軍兵士と日本人女性との結婚と家族生活　―軍隊の文化人類学に向けて―
人間・環境学	小田　涼	フランス語定名詞句の意味論　―指示対象の唯一性をめぐって―
文化・地域環境学	畠山歌子	18世紀ロシア貴族の教育文化　―国家勤務者のための教育とその変容―
共生人間学	山本佳世子	学校でいかに生と死を語るか　―「いのちの大切さ」を教えることをめぐって―
文化・地域環境学	前田直子	人権条約における個人申立・通報制度の発展と課題　―国際的実施と国内的実施の相乗効果による実効性確保―
環境相関研究	藤本透子	カザフスタンにおける儀礼の再活性化の人類学的研究
共生人間学	木原恵美子	構文現象への認知言語学的アプローチ　―同族目的語構文を中心に―
共生人間学	金丸敏幸	日常言語の意味拡張と主観性に関する認知言語学的分析　―用法基盤モデルの観点から―
共生人間学	鯖江秀樹	芸術と政治：ファシズム期イタリアの造形芸術とその思想に関する研究
共生人間学	山口　尚	物理主義とクオリア　ジャクソンの知識論証に対するひとつの応答
共生文明学	熊谷瑞恵	中国新疆ウイグル族の食べかたと住まいかたに関する人類学的研究　―女性のつきあいの場となる住居をめぐって―
共生文明学	白幡俊輔	軍事技術者のイタリア・ルネサンス　―火器と築城術の変遷：フランチェスコ・ディ・ジョルジョ・マルティーニからピエトロ・カターネオまで―
共生文明学	髙谷　幸	社会的連帯の再構築　―公共圏／親密圏としての移住者支援活動
共生人間学	國部雅大	The role of eye movements and fixation in the control of fast and accurate hand movements（素早く正確な手運動の制御における眼球運動および注視の役割）
共生人間学	岩中伸壮	Leucine modulates contraction- and insulin-stimulated glucose transport and upstream signaling events in skeletal muscle（筋収縮及びインスリンによる骨格筋糖輸送活性化とそのシグナル伝達におけるロイシンの調節作用に関する研究）
共生人間学	鶴谷奈津子	自己身体部位失認に関する神経心理学的研究
共生文明学	工藤泰子	近代京都と都市観光　―京都における観光行政の誕生と展開―
共生文明学	恒木健太郎	「大塚史学」の展開とその問題意識の変遷　―「他所者」としての「前期的資本」―
共生人間学	薦田奈美	意味変化現象の解明　―認知言語学的観点から見た意味変化―
相関環境学	田中　洋	Effects of an ant symbiont (Crematogaster difformis) of epiphytic ferns on herbivores and lianas on emergent trees in a tropical rainforest（熱帯雨林の林冠突出木に着生するシダ類の共生アリ（シダスミシリアゲアリ）が植食者とつる植物に及ぼす影響）
共生文明学	大野直樹	トルーマン政権下の CIA　―対ソ戦略の策定過程における CIA の役割―
共生人間学	牧瀬英幹	描画における「生」と「死」の問い　―創造性と病理に関する精神分析的研究―
共生人間学	山本哲也	ヒト奥行き知覚過程における多重性に関する脳機能イメージング法による研究
共生人間学	朴　白順	自伝的記憶の神経心理学的研究　―想起意識 Autonoetic consciousness を中心に―

相関環境学	Asheesh Shrivastava	Environmental Chemistry of Lake Biwa, Japan: general trend in the changes of water quality judged from the long-term variation and the characteristic distribution of nutritious elements（琵琶湖の環境化学　―栄養塩元素の長期変動と分布形態から見た水質変化の一般的傾向について）
相関環境学	河井洋輔	非平衡多粒子系の緩和過程を渦運動・乱流の両視点より構造解析する非中性プラズマ実験
相関環境学	中西貴之	Development of Eu(II) Doped Glass Ceramic Phosphors and Material Design for Solid-State Lighting（固体照明用 Eu^{2+} 付活結晶化ガラス蛍光体の開発と材料設計）
共生文明学	宮崎三世	太宰治「道化の華」論　―書く行為を主題化した小説について
相関環境学	藤田俊輔	Development of Rare Earth Doped Active Glass-Ceramics for White Light Emitting Diode and Optical Telecommunications（白色発光ダイオードおよび光通信用希土類含有アクティブ結晶化ガラスの開発）
相関環境学	吉川夏彦	ハコネサンショウウオの系統分類学的研究
共生人間学	廣瀬智士	脳内運動制御機構を利用した視覚情報処理
共生人間学	藤林真美	THE EFFECTS OF AUTONOMIC NERVOUS SYSTEM ACTIVITY ON MENTAL ILLNESSES（自律神経活動が精神障害に及ぼす影響）
共生人間学	馬嘯	Active Ingredient of Chinese Medicinal Plant Rapidly Activates 5'AMP-Activated Protein Kinase in Skeletal Muscle（中国由来薬用植物成分による骨格筋 5'AMP-活性化プロテインキナーゼの急性活性化作用に関する研究）
相関環境学	松田健太	*In vivo* analysis of a new R5 tropic SHIV generated from the highly pathogenic SHIV-KS661（強毒 SHIV-KS661 を基に作製した新規 R5 指向性 SHIV の in vivo 解析）
共生文明学	趙向華	英国における難民認定手続及び基準の厳格化とその課題
相関環境学	折笠有基	Material Design for Mixed Conducting Perovskite Type Oxide Cathodes of High Temperature Electrochemical Devices（高温電気化学デバイスにおけるペロブスカイト型混合導電体酸化物正極の材料設計）
相関環境学	奥村豊旗	Fundamental Studies of Lithium Ion Transfer for the Development of Next Generation Rechargeable Lithium Battery（次世代リチウム二次電池開発のためのリチウム移動過程の基礎研究）
相関環境学	池田啓	Vicariance history and adaptive evolution in the Japanese alpine plants elucidated by phylogeographic studies（系統地理解析によって解明された日本産高山植物の分布分断の歴史と適応進化）
相関環境学	奥住聡	Theoretical Modeling of the Charging and Structure Evolution of Dust Aggregates in Protoplanetary Disks : Possible Discovery of an Electrostatic Barrier Against Dust Growth（原子惑星系円盤における塵粒子集合体の帯電と構造進化の理論的モデル化：塵粒子成長に対する静電障壁の発見の可能性）
相関環境学	久田旭彦	擬一次元梯子格子物質 β-$Ag_{0.33}V_2O_5$ の局所電子構造と磁気秩序構造に関する研究
共生人間学	藤井進也	熟練ドラム奏者の最速リズム運動制御機構
共生人間学	進矢正宏	歩行中の踏み外しに対する姿勢制御活動
共生人間学	Maria Lucia Correa	MISHIMA YUKIO OR A LITERATURE OF THE ACT　―A PSYCHO-ANALYTIC READING―（三島由紀夫或いは行為の文学　―ひとつの精神分析的読解―）
共生文明学	Lubna Omar	Bronze Age Animal Economy in al-Jazira Area of North-eastern Syria（北東シリア al-Jazira 地域における青銅器時代の動物経済）
共生文明学	福田美穂	元代建築の史的研究　―宮殿配置を中心に―

文化・地域環境学	見平　典	司法積極主義の政治的構築　―アメリカの憲法秩序形成における司法と政治―
文化・地域環境学	勝盛典子	近世異国趣味美術の史的研究

平成22年度

共生人間学	石岡　学	戦前期日本における職業指導の展開と学校－職業の関係性　―「教育的営為」としての職業指導の成立―
共生人間学	竹内　みちる	現代社会における人生の始点と終点　―「できる」から「ある」への価値変換
文化・地域環境学	落合　理恵子	＜フェッラーラ牧人劇＞研究　ジラルディ＝チンツィオの『エグレ』からグァリーニの『忠実な牧人』まで
文化・地域環境学	佐伯　智広	中世前期の王家と政治構造
共生文明学	閻　淑珍	『黄帝明堂經』系統の繼承と變化　―六朝から唐代までの鍼灸資料を手掛かりに
共生文明学	佐藤　一進	理論と実践としての「統治の学」　―共和主義から保守主義へ
文化・地域環境学	池田　あいの	カフカと Volksmusik
共生文明学	青木　三陽	『パルツィヴァール』とドイツ中世盛期の宮廷文化
共生人間学	中西　佳世子	Hawthorne's Dual Narratives in His Four Romances: Providence and the Multiplicity of Its Literary Use（ホーソーンの4つのロマンスにおける二重のナラティヴ　―プロヴィデンスとその文学的機能の多様性―）
共生文明学	大野　哲也	冒険的な旅から冒険的な生き方へ　―アジアにおける日本人バックパッカーの「自分らしさ」の軌跡から―
人間・環境学	山根　元子	英国政治におけるバランス・オヴ・パワー　―カスルレー子爵の時代を例として―
人間・環境学	舟木　徹男	アジールの歴史からみた神経症　―病理的アジールとしての「空想」―
環境相関研究	増田　和也	森林をめぐる領有性の生成と重層的展開についての研究　―スマトラ、プタランガン社会における森林開発―
共生人間学	安原　和也	Conceptual Blending and Anaphoric Phenomena: A Cognitive Semantics Approach（概念ブレンディングと照応現象：認知意味論的アプローチ）
共生文明学	丸山　真史	近世の京都・大坂における食生活の特質と変遷
共生人間学	前田　青広	大脳視覚野の色情報処理機構と色アウェアネスに関する研究　―心理物理学的測定法および脳イメージング法による解析―
共生文明学	宮本　和歌子	江戸川乱歩研究　隠された主人公たちを表舞台へ
共生人間学	丸山　英幸	ハイデガーの論理学へ向けて
共生文明学	有元　志保	"The nostalgia for impossible things": William Sharp's Pursuit of an Alternative in His Life and in His Works（「存在しえないものへの思慕」　―ウィリアム・シャープの実生活と創作活動を通した理想の追求）
共生文明学	安藤　哲郎	認識・行動にみる平安貴族の歴史空間
共生文明学	長村　祥知	中世前期公武関係の研究
相関環境学	中村　恭介	Function of RNF20-dependent H2B monoubiquitination in DNA double strand break repair（DNA二重鎖切断における RNF20 依存的な H2B モノユビキチン化の機能）
共生文明学	金　永哲	「満洲国」期における朝鮮人満洲移民政策
共生人間学	岡本　源太	ジョルダーノ・ブルーノにおける人間の尊厳と生の多様性　―近代黎明のヨーロッパにおける〈生ける自然〉の帰趨

共生人間学	北垣芳彦	Generalized eigenvalue-counting estimates for some random acoustic operators（ランダムな音響作用素に対する一般化された固有値数え上げ評価）
共生人間学	渡邉浩一	『純粋理性批判』の方法と原理　―カントの批判的形而上学に関する概念史的研究
共生文明学	Andrew Clifford Elliot	Anglophone Travel Writing and the Japanese Interior, 1852-1899（英文旅行記における日本の内地（1852年～1899年））
共生文明学	村上桃子	『古事記』中巻末の構想に関する神話論的研究
相関環境学	倉石典広	Systematic Study on the *Polypedates leucomystax* Complex（シロアゴガエル複合群の系統分類学的研究）
共生人間学	建内宏重	股関節疾患患者における側方移動および歩行の運動制御
共生人間学	松本亜希子	Skeletal muscle fiber characteristics and plasticity to hyperbaric oxygen（骨格筋線維の特性と高気圧酸素に対する適応）
共生文明学	川口朋子	戦時下都市防空における建物疎開　―京都の事例を中心として―
相関環境学	三井裕樹	Ecological speciation at riparian habitats in perennials of the genus *Ainsliaea* (Asteraceae)（渓畔環境におけるキク科モミジハグマ属（*Ainsliaea*）多年草の生態的種分化）
共生人間学	清家理	医療ソーシャルワーク機能の実証的研究　―地域医療現場をフィールドに―
相関環境学	Toma Gabriel Nicolae	Cobalt-Catalyzed Carbon-Nitrogen Bond-Forming Reaction between Secondary Amines and N-Aromatic or Aromatic Chlorides（コバルト触媒を用いた2級アミンとN-芳香族あるいは芳香族クロライドの炭素－窒素結合生成反応）
相関環境学	青木潤珠	Studies on Electronic and Local Structure of Pt based Cathode Catalysts for Polymer Electrolyte Fuel Cells（固体高分子形燃料電池白金系カソード触媒における電子・局所構造に関する研究）
共生文明学	太田由佳	松岡恕庵本草学の研究
相関環境学	松木崇司	カスミサンショウウオの生活史
共生文明学	李文明	江戸後期西洋数学受容の文献学的研究　―『数理精蘊』を中心に―
相関環境学	中尾孝之	Studies on Point-Defect Structure of Solid Oxide Fuel Cell Materials and Their Electrochemical Properties（固体酸化物形燃料電池材料の点欠陥構造とその電気化学特性）
共生人間学	長谷川聡	CLINICAL APPLICATIONS OF ELECTRICAL MUSCLE STIMULATION（骨格筋電気刺激の臨床応用）
共生文明学	塩沢裕仁	後漢魏晋南北朝都城境域研究
共生人間学	水野千依	ルネサンスの図像における奇跡・分身・予言　―イメージ人類学的視座から―
文化・地域環境学	堀口良一	安全運動の思想史的研究　―蒲生俊文と安全第一の誕生―

平成23年度

共生文明学	南誠	「中国帰国者」をめぐる包摂と排除の歴史社会学　―表象と実践の境界文化の政治学―
共生人間学	柴田悠	再分配の社会学　―公的支出の効果と変革―
共生人間学	増田将伸	Question-responses in Japanese Interview Dialogues: Examination of *Doo*-type Q-word Questions（日本語インタビュー対話中の質問－応答　―「どう」型疑問語質問の研究―）

文化・地域環境学	鵜　飼　敦　子	「近代日本画」とジャポニスム　―高島北海とエミール・ガレを中心にみるその交流の一面
共生人間学	小　門　　穂	生殖に対する医学的補助と「親になる資格」　―フランス生命倫理法の基本原則―
共生文明学	瀬　本　阿　矢	転用と変容　―日本の女性詩人たちによるシュルレアリスム受容を中心に―
文化・地域環境学	坂　元　正　樹	オーディナリ型自転車の時代
共生文明学	田　村　うらら	市場経済と接合するものづくりの生活世界　―トルコ南西部絨毯生産の維持と変容―
共生人間学	中　西　美　貴	日本統治下における台湾先住民の近代経験　―北部台湾のタイヤルを中心に―
共生人間学	永　田　由　香	認知文法に基づく構文分析　―交替現象を中心に―
共生人間学	濱　野　寛　子	言語のカテゴリー化に関する認知言語学的分析　―助数詞の考察を中心に
相関環境学	柳　原　啓　見	NBS1 Recruits RAD18 via a RAD6-Like Motif and Regulates Translesion DNA Synthesis（RAD6 様モチーフを介した NBS1 による RAD18 の損傷部位へのリクルートと損傷乗り越え DNA 合成の制御）
共生文明学	Pakhomov　Oleg　JANKOWSKA	Reentered communities : Comparative study on ethnicity formation of Korean Diaspora in Russia, the United States and Japan（再参入コミュニティ：日本、アメリカ、ロシアにおけるコリアン移民のエスニシティ形成比較研究）
共生文明学	水　野　真理子	日系アメリカ人の文学活動の歴史的変遷　―1880年代から1980年代にかけて―
環境相関研究	末　冨　　浩	エドマンド・バークの政治思想　―『自然社会の擁護』および『崇高と美の観念の起源についての哲学的探求』を中心に―
文化・地域環境学	牧　野　雅　子	刑事司法におけるジェンダーの視点　性暴力被害者の保護から加害者の責任追及へ
文化・地域環境学	Bogna　Agnieszka	宮沢賢治　―レトリックとしての「相対性」
共生文明学	小　西　賢　吾	改革開放後中国のチベット社会における宗教の復興と存続に関する文化人類学的研究　―四川省のボン教僧院を事例に―
共生文明学	梶　丸　　岳	人類学的歌掛け論の研究　―中国貴州省の歌掛け「山歌」をめぐって―
共生文明学	林　　春　吟	日本植民地期台湾の地図に関する研究　―地図作製事業の検討を中心に―
共生文明学	川　上　陽　子	三島由紀夫「表面の思想」
共生文明学	Eleanor　Robinson	Nakai Hiromu: Meiji Statesman and Hero of Anglo-Japanese Relations（中井弘：ある日英関係の主人公）
相関環境学	大久保　智　司	Molecular microbial ecology of the chlorophyll *d*-contaning cyanobacteria *Acaryochloris* spp.（クロロフィル d を含むシアノバクテリアAcaryochloris spp. の分子微生物生態学的研究）
共生人間学	杉　山　博　昭	ルネサンスにおける聖史劇　―15世紀フィレンツェを中心として
共生文明学	辻　　浩　和	中世〈遊女〉の身分とその支配
共生人間学	澤　田　　淳	日本語ダイクシスの語用論的研究　―語用論的文法のアプローチ―
共生文明学	大　原　俊一郎	ドイツ正統史学の国際政治思想　―普遍的理念と外交的自律性をめぐる国際政治観―
共生人間学	堀　　晋　也	フランス語学習者の自律学習能力促進のための動機づけ研究
共生人間学	Jorge　Mario　Andreau	Neural mechanisms of executive control by the prefrontal cortex during memory retrieval processes in a pair-association task（対連合課題における記憶検索の実行制御に関わる前頭連合野神経機構）

共生文明学	武上真理子	孫文の科学思想　―「科学の時代」における哲学構築の歩み―
共生文明学	鄭　楽静	在日中国人社会の歴史と現状　―在日温州人を中心に
共生文明学	金　炳周	朝鮮後期邑治に関する研究　―水原華城と三南大路の関係を中心に―
共生人間学	Delbarre Franck	Pour la contextualisation de la grammaire du FLE au Japon: exemple de l'expression de l'état（日本における外国人向けのフランス語教育用の文法の文脈化：状態表現を例にして）
相関環境学	後藤龍太郎	Evolution and maintenance of obligate pollination mutualisms between *Glochidion* trees (Phyllanthaceae) and *Epicephala* moths (Gracillariidae)（カンコノキ－ハナホソガ絶対送粉共生系の進化と維持）
相関環境学	廣川祐司	環境保全の観点から見た総有的所有観の現代的意義
相関環境学	上田純平	Spectral conversion materials using rare earth and transition metal ions for green photonics（グリーンフォトニクスのための希土類・遷移金属イオンを用いた波長変換材料）
相関環境学	中村美紀	大気境界層の冷却メカニズム
相関環境学	堀池麻里子	Mesenteric lymph nodes harbor viral reservoirs that cause viral rebound in SIV-infected macaques upon cessation of combined antiretroviral therapy（SIV感染サルの腸間膜リンパ節に存在する抗ウイルス化学療法中止後のウイルスリバウンドを起こすリザーバーに関する解析）
共生人間学	蘇　米雅	中国・内モンゴルにおける環境保護政策と住民自治システム形成に関する実践研究
共生人間学	江川達郎	MULTIPLE EFFECTS OF CAFFEINE ON SKELETAL MUSCLE GLUCOSE TRANSPORT AND UPSTREAM SIGNALING EVENTS ―ACTIVATION OF 5'AMP-ACTIVATED PROTEIN KINASE AND SUPPRESSION OF INSULIN SIGNAL TRANSDUCTION―（カフェインによる骨格筋糖輸送およびその関連シグナルに及ぼす相互作用に関する研究　―AMPキナーゼ活性化とインスリンシグナル伝達抑制―）
共生人間学	戸田貴久	On Separation by Bipartitions and Related Geometric Problems（2分割による分離概念と関連する幾何問題について）
相関環境学	鈴木克明	キラル純有機ニトロキシドモノ及びビラジカル化合物の合成とそれらの液晶相中における特異な磁気物性に関する研究
相関環境学	岩間世界	優先富化現象を誘起する多形転移様式の系統化とラセミ化合物結晶への拡張に関する研究
相関環境学	伊奈稔哲	Study on Cathodic Reaction Mechanism of All Solid State Electrochemical Devices（全固体電気化学デバイスにおけるカソード反応機構の解明）
共生人間学	森　直久	想起による体験への接近　―社会文化的アプローチから生態学的想起論へ―
文化・地域環境学	永島明子	蒔絵の輸出と生産に関する史的研究

平成24年度

共生文明学	和崎聖日	ソ連解体以後のウズベキスタンにおける家族と相互扶助に関する人類学的研究
共生文明学	植村昌子	刃痕から見た建築生産技術　―飛鳥時代から鎌倉時代を中心に―
文化・地域環境学	久保洋一	19世紀後半イギリスの自治体共同墓地
共生文明学	渡邉登紀	陶淵明と「田園」　―型・時間・地域―
共生人間学	福田裕大	シャルル・クロの総合的研究　―科学的業績と詩的業績の架橋を目指して
共生文明学	渡辺　文	オセアニア芸術のうまれるとき　―アートの集合性をめぐる人類学的研究

共生人間学	大谷直輝	A Cognitive Analysis of the Grammaticalized Functions of English Prepositions: From Spatial Senses to Grammatical and Discourse Functions（英語前置詞の文法化した機能に関する認知言語学的分析：空間的意味から文法・談話機能へ）
共生人間学	橋本周子	グリモ・ド・ラ・レニエールと「美食家」の誕生　―フランス革命前後における食行為に関する研究―
共生文明学	金　晶	日本語と中国語の再帰代名詞について
文化・地域環境学	松嶋　健	現実のユートピア　―イタリアにおける精神医療の生態学的転回と制度化
共生文明学	熊谷哲哉	ダニエル・パウル・シュレーバーの言語をめぐる思考　―科学の時代における自己と世界―
共生文明学	阿部美香	歌川広重の抱いた風景観に関する試論
共生人間学	土田陽子	公立名門高等女学校にみるジェンダー秩序と階層構造　―県立和歌山高等女学校の事例から
共生人間学	岸　彩子	フランス語の直説法現在形の意味論　―様々な意味を生み出す解釈のメカニズム―
共生文明学	菊地大樹	中国先秦時代馬の動物考古学的研究
共生文明学	比嘉夏子	相互行為から生成する経済　―トンガ王国村落における贈与とふるまいの民族誌―
共生文明学	寺尾智史	液状化する社会における言語多様性継承　―比較コミュニケーション論からの可能性模索
共生人間学	近藤あき	物体視における特徴間相互作用に関する知覚的及び認知的検討
共生文明学	田村朋美	日本出土アルカリ珪酸塩ガラスの考古科学的研究　―弥生～古墳時代に流通したガラス小玉の再分類―
共生人間学	横森大輔	相互行為の中の文法　―日本語会話における副詞節構文の創発と秩序―
共生文明学	三島武之介	革新主義期アメリカにおける国家改革　―グローバリゼーションへの対応としての国家指導者層の創成
共生人間学	上田祥行	視覚と触覚を通じて形成される三次元物体の脳内表象の解明
共生人間学	羽鳥隆英	日本映画の大衆的想像力　―幕末映画と股旅映画の相関史
共生人間学	平野拓朗	教室における子どもの人格発達に関する研究　―ヴィゴツキーの心理システム論の観点から―
共生文明学	青山康高	言語帝国主義　―英語と世界制覇の夢と現実 Leviathan of English: Global Language as Global Conquest
共生人間学	北浦寛之	テレビ浸透期における日本映画の変革　―産業・テクノロジー・内容
共生人間学	高嶋由布子	言語の身体性と主観性に関する知覚表現の認知的研究
共生人間学	武田宙也	ミシェル・フーコーの美学　―生と芸術のあいだで
共生文明学	川崎修良	市街地景観制御制度と運用の研究　―景観法制定以降を中心に
共生人間学	土屋智行	定型表現を基盤とした言語の創造性　―慣用表現とことわざの拡張用法に関する社会・認知的考察―
共生人間学	小川典子	現代日本語指示詞の認知言語学的研究
共生人間学	新田　篤	日本近代文学におけるフロイト精神分析の受容
共生人間学	坂野逸紀	瞬間的な視覚情報処理の特性に関する研究

共生人間学	川本　徹	Representing the American Railroad and Monument Valley: Studies on the Invention and Future of the Cinematic Frontier（アメリカの鉄道とモニュメント・バレーを表象すること　―映画的フロンティアの創造と未来に関する研究）
共生人間学	依田　眞奈美	Henry Caldwell Cook and Drama Education in England
相関環境学	西浦　聖太郎	Preparation and Optical Properties of Rare Earth Doped Ceramic Phosphors for White Light Emitting Diode（白色発光ダイオード用希土類添加セラミックス蛍光体の作製と光特性）
共生人間学	竹林　美佳	視覚刺激に対する選好性の形成における前頭連合野眼窩部の役割
共生人間学	永友　文子	Effects of Mild Hyperbaric Oxygen on Lifestyle Related Disease in Animal Models（生活習慣病モデル動物における軽度高気圧酸素の影響）
相関環境学	Amir　Hamidy	Taxonomic studies of megophryid frogs of the genus *Leptobrachium*（ウデナガガエル属の分類学的研究）
共生人間学	上原　信太郎	運動学習の停滞に対する体性感覚刺激効果の解明
相関環境学	椿　玲未	Ecology and evolution of pterioidean bivalves symbiotic with filter-feeding sessile organisms（濾過食性固着生物と共生するウグイスガイ上科二枚貝の生態と進化）
相関環境学	佐藤　衆一	パイロクロア格子反強磁性体 $R_2(OH)_3Cl$(R=Cu, Ni) におけるフラストレート磁性の研究
相関環境学	吉川　禄助	Risk analysis of iatrogenic endogenous retrovirus infection by vaccination（ワクチン接種による内在性レトロウイルス医原性感染の危険性解析）
相関環境学	川原　諒子	水溶性遷移金属錯体の創製と水を溶媒とする環境調和型有機合成触媒系の開発
共生文明学	Romain Claude Jourdan	*Des ouvrages de géographie universelle dans le Japon du XVIIIe siècle : sources, structure et contenu.*（18世紀日本における世界地理書　―典拠、構造と内容）
共生人間学	金　光成	日本語複合動詞の評価的意味に関する認知言語学的分析
相関環境学	朱　明文	遷移金属触媒を用いる環境調和性に優れた高原子効率的炭素－窒素および炭素－炭素結合形成反応の開発
共生人間学	宮本　俊朗	CLINICAL APPLICATION OF ELECTRICAL MUSCLE STIMULATION FOR TYPE 2 DIABETES WITH EXERCISE INTOLERANCE（低運動耐容能を特徴とする2型糖尿病患者に対する骨格筋電気刺激の臨床応用）

平成25年度

共生人間学	山家　悠平	「解放」と「労働」の境界で　――九二〇－三〇年代の新聞記事にみる遊廓のなかの女性たちの抵抗と日常―
共生人間学	高原　純一	WEGNER ESTIMATES FOR GENERALIZED ALLOY TYPE POTENTIALS（一般化された合金型ポテンシャルに対するウェグナー評価）
共生人間学	大傍　正規	仏・露・日における無声映画の音　―初期フランス映画の受容研究―
共生人間学	山崎　徳子	自閉症のある子どもの関係発達　―「育てる－育てられる」という枠組みでの自己感の形成を中心に―
共生人間学	生田　泰志	クロール泳における泳速度の変化と筋活動の関係
共生人間学	阿部　将伸	存在論の解体から構築へ　―初期ハイデガーにおけるアリストテレス解釈
共生文明学	河西　瑛里子	女神運動から紡ぎだされるつながり　―イギリス南西部グラストンベリーにおけるオルタナティヴ・スピリチュアリティの文化人類学的研究―

共生人間学	島　貫　香代子	The Locus of Identity: Death, Genealogy, and History in William Faulkner's Works（アイデンティティの所在　―ウィリアム・フォークナー作品における死・系譜・歴史）
共生文明学	關　　誠	明治前期日本における情報活動と対外政策　―近代日本情報史研究序説―
共生人間学	朴　　瑞　庚	日本人学習者による韓国語の音声運用に関する研究　―学習者の動機づけと韓国語の音声運用上に見られる特徴―
共生文明学	坂　口　太　郎	鎌倉後期の王権と真言密教
共生人間学	井　藤　美由紀	いかに「死」を受けとめたか　―がん患者遺族の体験に学ぶ―
共生文明学	佐々木　太　郎	国際政治の見失われた次元　―対外政治工作の一類型としてのソ連の「影響力」工作―
共生人間学	大　山　万　容	複言語教育の日本における文脈化に関する研究
共生人間学	年　岡　智　見	英語構文体系の認知言語学的研究　―二重目的語構文と関連現象―
共生文明学	小　林　哲　也	W・ベンヤミンの思考の展開　―内的憧憬と外部空間―
共生人間学	山　城　博　幸	低次視覚野における視覚意識の持続・更新過程の fMRI 研究
共生文明学	Sugandhi　Aishwarya Suresh	DIMENSIONS OF EARLY MODERN TRAVEL CULTURE: IN THE WORKS AND LIFE OF THOMAS CORYAT（前近代における旅行文化の諸相　―トマス・コリヤットの著述と旅行を手がかりとして）
共生文明学	趙　　芙　蓉	シャマンとして生きる　―中国内モンゴルのホルチン・シャマニズムの再活性化の事例より
共生人間学	高　橋　顕　也	社会学的メディア理論の基礎　―システム理論と行為理論の総合の試み―
共生文明学	金　　秉　瑱	生活日記を通じた「住まい」の場所論的研究　―朝鮮の住宅「雲鳥楼」を中心に―
共生文明学	劉　　守　軍	宇都宮徳馬の思想史的研究　―言論と行動―
共生文明学	Bhatte Pallavi Kamlakar	VOICES OF THE WIND: CONVERGENCE OF DIVERSITY IN THE TRANSNATIONAL DOMAIN OF PURSE, HEADS AND IDEAS IN THE CONTEXT OF THE INDIAN FREEDOM STRUGGLE（インド独立運動における超領域的諸相）
共生文明学	上　野　大　樹	主権と自己統治の政治哲学　―近世英仏比較思想史からみた自由主義批判としての「人民主権論」の成立
相関環境学	中　瀬　悠　太	Manipulation of host behavior and host-associated diversification in strepsipteran insects（ネジレバネ目昆虫における宿主行動の操作と宿主が介在した多様化）
共生人間学	山　下　大　地	The mechanics of human sideways locomotion（ヒト横方向の移動運動の力学的特性）
共生人間学	田　口　かおり	保存修復の技法と思想　―チェーザレ・ブランディ（1906-1988）の介入倫理を軸として―
相関環境学	荒　木　美　英	Establishment of the gene transfer system for the primordial cyanobacterium *Gloeobacter violaceus* PCC 7421: Alteration of the chlorophyll biosynthetic pathway by metabolic engineering（始原的シアノバクテリア*Gloeobacter violaceus* PCC 7421での遺伝子導入系の確立：代謝工学によるクロロフィル生合成経路の改変）
共生人間学	FEDOROVA　ANASTASIA	Japan's Quest for Cinematic Realism from the Perspective of Cultural Dialogue between Japan and Soviet Russia, 1925-1955（ソビエト・ロシアとの文化対話から見た日本映画史におけるリアリズムの追求、1925-1955）

共生人間学	Jahedzadeh Shorblagh Behnam	日本語とペルシア語の構文並列の対照研究
相関環境学	清水加耶	Host plant use in the assemblage of herbivorous insects on Macaranga myrmecophytes（オオバギ属アリ植物に発生する植食性昆虫の寄主植物利用様式）
共生人間学	城尾恵里奈	The effects of nutrition intake on intestinal mucosal repair and metabolic regulation through gut hormones（栄養摂取の消化管ホルモンを介した腸管粘膜修復ならびに代謝調節に及ぼす影響）
相関環境学	片山裕美子	Optical and photo-electric studies on quantum cutting and persistent luminescent phosphors doped with rare-earth and transition-metal ions（希土類または遷移金属イオンを添加した量子切断および残光蛍光体における光物性および光電流特性に関する研究）
共生人間学	山本真史	鉛直方向への上肢運動の運動制御機構
相関環境学	阪辻和希	非晶性高分子のエンタルピー緩和と記憶効果
共生人間学	藤井慶輔	Cognitive and motor control mechanism for ballgame defenders in 1-on-1 defensive situation（球技の1対1における防御の際の認知・運動制御機構）
共生文明学	羽藤広輔	昭和期建築家による和室の可能性について　―白井晟一の事例を中心に―
相関環境学	庄　逸熙	Red to Near-Infrared Luminescent Materials Activated by Transition Metals for *in vivo* Imaging and Telecommunication Application（バイオイメージングまたは光通信応用を目指した遷移金属賦活赤色・近赤外発光材料に関する研究）
相関環境学	江頭幸士郎	Systematic studies of two Japanese brown frogs（日本産アカガエル二種の系統分類学的研究）
共生人間学	劉　驫	日本語と中国語の文脈指示詞の研究　―談話モデル理論からのアプローチ―

平成26年度

共生人間学	池野絢子	アルテ・ポーヴェラ　―戦後イタリアにおける芸術・生・政治
共生人間学	勝浦眞仁	“共にある” ことを目指す特別支援教育　―関係論から発達障碍概念を問い直す―
文化・地域環境学	山村仁朗	名詞句を構成する「の」の研究　―準体助詞「の」の文法性の再規定―
共生人間学	髙橋克欣	quand節に現れる半過去　―談話的時制解釈モデルによる分析
共生人間学	出口優木	フランス語の連想照応のメカニズム
共生人間学	平井克尚	監督エドガー・G・ウルマー研究　―マイノリティ映画作家の領域横断的映画遍歴におけるマイナー性の諸相―
共生人間学	川本彩花	近代音楽における芸術至上主義の形成　―ベートーヴェンを中心とした社会学的研究―
相関環境学	末次健司	Diverse interactions of heterotrophic plants with their hosts, pollinators and seed dispersers（従属栄養植物が宿主や送粉者、種子散布者と織りなす多様な相互作用）
共生文明学	籔田有紀子	レナード・ウルフの外交論　―国際連盟中心主義の変遷　1914年～1939年―
共生人間学	菊野雄一郎	遺伝子多型解析を用いたアセチルコリンの視覚認知に対する効果に関する研究
共生人間学	許　之威	成人移民への言語教育　―1945年以降の日本と台湾の場合―
人間・環境学	池田真典	ラカン派の精神分析的オリエンテーションに基づいた施設臨床の意義
共生人間学	利根有紀	The Tradition of the Vice and Shakespeare’s Villains in His Tragedies（ヴァイスの伝統とシェイクスピア悲劇の悪党たち）

共生文明学	藤井俊之	啓蒙と野蛮　―アドルノ美学における人間性の位置付け―
相関環境学	半田千尋	Ecological studies on coccids inhabiting nests of the plant-ants on *Macaranga* myrmecophytes（オオバギ属アリ植物の共生アリ巣に生息するカイガラムシについての生態学的研究）
共生文明学	徐　東帝	「京城都市構想図」に関する研究
共生人間学	鮫島輝美	現代社会における医療・看護・介護に関するグループ・ダイナミックス的研究
共生人間学	中野研一郎	言語における「主体化」と「客体化」の認知メカニズム　―「日本語」の事態把握とその創発・拡張・変容に関わる認知言語類型論的研究―
共生文明学	塚本明日香	中国正史の災異史料における建物用語の変遷
共生人間学	マスワナ　紗矢子	A Cross-Disciplinary Genre Analysis of Research Articles: A Focus on Rhetorical Structures（学術論文の分野横断的ジャンル分析　―修辞構造に焦点をあてて―）
共生人間学	小野智恵	ニュー・ハリウッド映画期におけるロバート・アルトマン監督作品に刻まれる反古典的様式の独創性　―1967年『宇宙大征服』から1967年『ビッグ・アメリカン』までの音声的・映像的実験によるナラティヴ全体の革新についての分析研究
共生人間学	坂井礼文	無神論と国家　―コジェーヴの政治哲学について―
共生文明学	渡辺恭彦	廣松渉の思想　―内在のダイナミズム―
共生文明学	小田直史	ベンヤミンの見たアレゴリカー・ボードレールの相貌
共生人間学	伏見裕子	香川県伊吹島における出部屋の存続と閉鎖のメカニズム　―社会および共同体の変化に関連づけて―
共生文明学	金　仙花	「破局」と「再生」としての反近代　―京都学派・日本浪漫派・アジア主義―
共生文明学	花輪由樹	郷土の教育に関する研究　―学校教育と「遊びの都市」を巡って―
共生人間学	溝口佑爾	情報化社会における災害ボランティアの一様態　―被災写真救済活動を事例として―
共生人間学	須川まり	日本映画史における観光都市京都表象分析研究
共生人間学	望月　圭	意思決定に係る前頭連合野神経回路網動態の解明
共生人間学	李　琦	Interactions between Visual Attention and Visual Working Memory（視覚的注意と視覚性ワーキングメモリの相互作用に関する研究）
相関環境学	渡部和幸	Development of a high-frequency *in vivo* transposon mutagenesis system for cyanobacteria and establishment of the forward genetic analysis of the Chl *d*-dominated cyanobacterium, *Acaryochloris marina* by use of the system（シアノバクテリアにおける高頻度な *in vivo* のトランスポゾンタギング系の開発およびその系を利用した Chl *d* を利用するシアノバクテリア、*Acaryochloris marina* における順遺伝学的解析の確立）
共生文明学	庄　声	ダイチン・グルン初期の言語生活と文化政策
相関環境学	東　広之	Evolutionary history of *Schizocodon* (Diapensiaceae), an endemic genus in Japan（日本固有属、イワカガミ属（イワウメ科）の進化史）
相関環境学	大槻達郎	Adaptive differentiation of *Lathyrus japonicus* (beach pea; Fabaceae) between coastal and freshwater environments based on genetic and ecophysiological analyses（遺伝学・生態生理学的解析に基づいた、海浜と湖岸に生育するハマエンドウにおける適応的分化）
共生人間学	河合直樹	実践共同体の変化と「他者性」創出　―数学教育と書道教室のアクションリサーチ
相関環境学	赤岡一志	錯体化学を基盤とした高感度蛍光プローブの開発

共生人間学	MANDAKH OYUNCHIMEG	英語及びモンゴル語の時制、アスペクトに関する対照研究
共生文明学	上　なつき	『金瓶梅』における住まいの諸場所の意味についての研究　―女性と宴会・儀礼との関係を通じて―
共生人間学	石川保茂	Blended learning in a university EFL course（EFL環境下における大学英語授業でのブレンド型学習）
相関環境学	山本健太郎	Design Principles for the Cathode/Electrolyte Interfacial Phenomena in Lithium Ion Batteries（リチウムイオン二次電池正極／電解質界面構造の解明と設計）
共生人間学	大島里詠子	Evidence for acute activation of 5'-AMP-activated protein kinase by metformin and salicylate in rat skeletal muscles（ラット骨格筋におけるメトホルミン及びサリチル酸による AMP キナーゼの急性的活性化に関する検討）
共生文明学	澤西祐典	芥川龍之介における海外文学受容について　―旧蔵書を通して見える風景―
相関環境学	Titus Nyamwaro Masese	Iron-based Polyanion Cathode Materials for High-Energy Density Rechargeable Lithium and Magnesium Batteries（高エネルギー密度リチウム及びマグネシウム二次電池用鉄系ポリアニオン正極材料の創製）
相関環境学	斎藤裕一朗	Regulatory mechanism of damage-dependent homologous recombination（DNA損傷量に依存した相同組換え修復制御機構の解明）
共生人間学	小松原哲太	レトリックと意味の創造性　―逸脱用法がもたらす表現効果の研究―
共生文明学	中生勝美	近代日本の人類学史：帝国と植民地の記憶
共生人間学	谷藤史彦	ルチオ・フォンタナとイタリア20世紀美術　―伝統性と革新性の問題―
共生人間学	西坂崇宏	Effects of Exposure to Mild Hyperbaric Oxygen on Skeletal Muscle Fibers, Epidermal Basal Cells, and Skin Pigmentation（骨格筋線維、表皮基底細胞、及び皮膚色素斑に対する軽度高気圧酸素への曝露の影響）
共生文明学	日高真帆	A Study of Oscar Wilde and Adaptations of His Works（オスカー・ワイルド及びワイルド作品の翻案に関する研究）

平成27年度

共生人間学	井岡瑞日	19世紀末フランスの中間階層における家庭教育像　―女性向け雑誌メディアを手がかりとして
共生人間学	中野雄史	Stochastic Stability of Partially Expanding Maps via Spectral Approaches（スペクトル解析による部分拡大写像の確率安定性について）
共生人間学	松田有司	クロール泳におけるストロークおよびキック動作のバイオメカニクス分析
共生人間学	前川直哉	近現代日本における「男性同性愛者」アイデンティティの受容過程
共生文明学	百木　漠	「労働」と全体主義　―「無限増殖運動」に抗するアーレント
共生人間学	松野さやか	ヤスパースの「実存」　―主観主義を超克する実存哲学―
共生文明学	藤岡真樹	冷戦初期のアメリカ合衆国の大学におけるソ連研究の編制過程に関する研究　―学知と冷戦の緊張関係に注目して
共生人間学	村田智子	文学的創造と「子供がぶたれる」幻想　―日本現代文学・サブカルチャーにおける幻想・倒錯・セクシュアリティの領域
共生人間学	日塔理恵子	「驚異」の探究：ジャンバッティスタ・マリーノ『ガレリア』と蒐集
共生人間学	伊藤恒雄	がん患者の苦痛に対する鍼灸治療の特徴とがん治療に関する鍼灸師の技術習得　―鍼灸師とがん患者への聞き取り調査と質的研究を用いて―
共生文明学	大久保友博	翻訳論から見た英国17世紀の翻訳者たち　―古典を訳した人間とその環境

共生人間学	王　文萱	竹久夢二の人形制作活動
共生人間学	丸山　明	日本の心理臨床実践における夢分析の有効性に関する精神分析的研究　夢を聞くこと・語ることによる精神分析的空間の生成とその治療作用について
共生人間学	秦　明子	ロレンツォ・デ・メディチの時代における詩と絵画
共生人間学	西村　敦	ラッセル哲学研究の諸相
共生人間学	奥野元子	禅的呼吸法によるストレス低減効果　―生理的指標（唾液アミラーゼ・血圧）と心理的指標（POMS・感想）による評価―
共生文明学	龍　瀟	西洋理論から見た社会安定の位相　―西洋型社会の中産階級理論を中心に
共生文明学	妹島治彦	『ビートン社の家政書』に関する研究
共生人間学	岡安裕介	日本という言語空間における無意識のディスクール
共生文明学	中村朋美	ロシア帝国の中央アジア政策　―19世紀前半の進出の諸相―
共生文明学	神本秀爾	ジャマイカと日本における「生き方」としてのラスタファーライの変容に関する文化人類学的研究
共生人間学	中川奈津子	Information Structure in Spoken Japanese: Particles, Word Order, and Intonation（日本語話しことばの情報構造：助詞、語順、イントネーションとの関連）
共生人間学	和崎光太郎	明治中後期における〈青年〉の成立と展開
共生人間学	東田大志	創造行為としての現代パズルの意義
共生人間学	寺﨑知之	日本語の時間表現に関する認知意味論的研究
共生文明学	大澤耕史	出エジプト記32章金の子牛像事件解釈に見る、古代・中世初期のユダヤ教とシリア　―キリスト教の比較分析
共生人間学	MUNKHJIN Anara	精神分析からみた歴史と社会　―モンゴルの歴史と文化と思想構造に関する考察―
共生文明学	佐々木幸喜	安部公房における科学と文学
共生人間学	都留恵美里	ブラジルの日系芸術家たちの軌跡　―共生と創造―
共生人間学	程　遠巍	中国と台湾における『ヨーロッパ言語共通参照枠』の受容
共生文明学	役重善洋	近代日本の植民地主義と非ユダヤ人シオニズム　―内村鑑三・矢内原忠雄・中田重治におけるナショナリズムと世界認識―
共生人間学	澤井　努	日本におけるヒト iPS 細胞研究に伴う倫理的諸問題の研究
共生人間学	岡田彩希子	精神分析における主体生成の過程とその起源をめぐる諸表象に関する研究
共生人間学	豊川祥隆	ヒューム哲学の方法論　―印象と人間本性をめぐる問題系―
共生人間学	利根川由奈	ベルギーの「象徴」としてのルネ・マグリット　―第二次世界大戦以降のルネ・マグリットとベルギー文化政策の関係についての考察―
共生人間学	渡邉洋平	ジル・ドゥルーズと哲学　―多様体の論理と実践へ―
共生人間学	塚本靖之	Strongly proper dyadic subbases and their domain theoretic properties（強整合的な二分的準開基とそのドメイン理論的性質）
共生文明学	李　孝善	日中韓三国の『續千字文』比較研究
共生文明学	上野莉紗	道州制をめぐる地域論的研究　―行政地域のスケールと階層構造に着目して―
共生人間学	COLLAZO Anja Maria	The Japanese Naming System ―Morphology and Semantics of Individual Names（日本の命名法　―個人名における構成と意味）

共生人間学	田辺弘子	Postural Control Mechanism of Human Bipedal Standing（ヒトの二足静止立位の制御メカニズム）
相関環境学	森　拓弥	Design principles of the cathode materials for multivalent cation batteries（多価陽イオン二次電池における正極材料の開発と設計指針）
共生人間学	萩生翔大	Muscle synergy for coordinating redundant motor system（筋シナジーに基づく身体運動制御）
共生人間学	張　潔	「不」が含まれる日中同形二字漢語について　―日中対照言語史的考察―
共生人間学	高橋真理子	A Comparative Study of Tag Questions and Invariant Tags in Asian Englishes: A Corpus-Based Analysis（アジア英語における付加疑問文と不変化タグの比較研究：コーパスに基づく分析）
共生人間学	寺山　慧	Vision-based Measurement Methods for Schools of Fish and Analysis of their Behaviors（動画像処理に基づく魚群の計測手法と行動解析）
共生人間学	後藤亜由美	Effects of acute heat stress on glucose metabolism and 5' adenosine monophosphate-activated protein kinase in skeletal muscle（急性的な熱刺激が骨格筋糖代謝と AMP キナーゼに及ぼす影響）
相関環境学	望月陽人	陸水域におけるウランの分布と動態ならびにその支配要因
共生人間学	株本千鶴	「死にゆくこと」の現代的変容に関する社会学的研究　―日本と韓国のホスピスの＜医療化＞をめぐって―
共生人間学	近藤浩代	Effects of exercise on capillary regression and inhibitory expression of angiogenic factors in the rat skeletal muscle of type 2 diabetes（2型糖尿病のラット骨格筋における毛細血管退行及び血管新生因子の発現抑制に対する運動の効果）
共生人間学	Cahya Widiyanto	Developing a Community Revitalization Movement Based on Reflective Dialog Using Engaged Ethnography（実戦的エスノグラフィを用いた自省的対話によるコミュニティ活性化運動の促進）
相関環境学	吉田寛郎	液体クロマトグラフィー質量分析による醸造過程代謝物の網羅分析法の開発と食品への応用
共生人間学	真継和子	超高齢社会における要介護高齢者家族支援に関する研究　―家族介護者の体験の記述とケア共同体構築の試み―
共生人間学	和泉美枝	褥婦の自律神経活動、身体組成、心理状態と超音波診断法の妊婦への心理的影響
共生人間学	神﨑範之	グルコサミン含有食品の膝関節機能および運動機能に対する有効性

平成28年度

相関環境学	石田裕樹	Generation of a neutralization-resistant CCR5 tropic SHIV-MK38 molecular clone, a derivative of SHIV-89.6（SHIV-89.6 の派生ウイルスである中和抵抗性かつ CCR5 指向性 SHIV-MK38 分子クローンの作製）
共生文明学	森岡優紀	叙述形式と東アジアの近代　―中国清末期に対する考察
共生文明学	西村木綿	ユダヤ人ブンドの文化的民族自治論とイディッシュ世俗学校運動（1897年～1939年）
共生人間学	根無一信	ライプニッツの創世記　―神と被造物の関係性についての形而上学
共生人間学	駒田安紀	アトピー患者の病因帰属にみる素人の知識の位置づけ　―医学的知識・言説との比較から―
共生文明学	Daniel Jerome Milne	Discourses of Japan in Anglophone Tourist Guidebooks: Transformations and Continuities Since the End of the 19th Century（英語の観光ガイドブックにおける日本の表象　―19世紀末から現代までの変遷と継続に注目して）

共生人間学	佐藤 真理恵	仮象のオリュンポス　―古代ギリシアにおけるプロソポンの概念とイメージ変奏
共生文明学	澤田 裕子	平安貴族社会における「家」成立過程の研究
共生人間学	山川 仁	バークリの非物質論と常識
共生文明学	渡辺 貴規子	『家なき子』、その原典と初期邦訳の文化社会史的研究　―エクトール・マロ、五来素川、菊池幽芳をめぐって
共生人間学	中森 弘樹	失踪の社会学　―親密性と責任の関係性についての試論
共生人間学	藤井 真樹	実感としての他者との「つながり」
共生人間学	中嶋 文子	新人看護師の職場適応への支援　―困難を乗り越える支えとなるもの―
共生人間学	戸田 潤也	カントの道徳的意思形成の理論
共生文明学	吉田 亞矢	So Much Depends Upon a “Variable Foot”：The Legacy and Conquest of ‘Free’ Verse in William Carlos Williams（ウィリアム・カーロス・ウィリアムズ：variable foot の考案と「自由」詩からの脱却）
共生文明学	山岡 瞳	中世前期公家政権と西園寺家
共生文明学	宋 玉梅	太平洋を越えて　―アメリカ華僑と中国政治（1900年－1949年）―
共生人間学	久保 圭	日本語接辞にみられる否定の意味的多様性とその体系的分類
共生人間学	張 又華	認知言語学の観点から見た日本語の文法化現象　―「テシマウ」形式を中心に―
共生人間学	中川 萌子	「徹底的に被投的な企投」　―ハイデガーの自己批判と問いの不断性
共生人間学	Tiwuk Ikhtiari	日本語の三つのタイプの「～は～が」構文とそのインドネシア語に対応する構文との関係について
共生文明学	金 瑛	記憶と社会　―モーリス・アルヴァックスの記憶の社会学をめぐって
共生人間学	本田 寛人	Effects of stair climbing-descending exercise for a short time after a meal onpostprandial hyperglycemia and glycemic control in people with type 2 diabetes（食後に実施する短時間の階段昇降運動が2型糖尿病患者の食後高血糖および血糖コントロールに及ぼす影響）
共生人間学	赤塚 京子	新優生学をいかに理解すべきか　―デザイナー・ベビー議論における「危害」からの検討―
共生文明学	齋藤 祐実	Localizing the Legacy of Martin Luther King Jr. in Post-Statehood Hawai‘i: Local Engagement with the Civil Rights Movement and the Development of the African American Movement on O’ahu（州昇格後のハワイにおけるマーティン・ルーサー・キング・ジュニアの「遺産」の伝播：ハワイ住民の市民権運動への関わりとオアフ島のアフリカ系住民の社会運動の分析を通して）
共生人間学	黒澤 雅恵	指示理論の枠組みに対する批判的考察
共生文明学	Frey Urszula	Working Women of Japan and Belgium as Seen Through Legislation and Media during the 80’s and 90’s（法律とメディアを通して見た80年代と90年代における日本とベルギーの働く女性）
共生人間学	濱田 大佐	色字共感覚における共感覚色の決定過程
相関環境学	韓 慶香	Lineage isolation maintained by natural selection despite ongoing gene flow in Japanese wild radish（遺伝子流動存在下で自然選択によって維持されている日本のハマダイコンの系統隔離）
共生人間学	坂本 祥太	Mathematical analysis of global solutions to the Boltzmann equation（ボルツマン方程式の大域解の数理解析）
共生文明学	COKER CAITLIN CHRISTINE	アフェクトの人類学　―暗黒舞踏における生成変化
共生文明学	衛藤 恵理香	『常陸国風土記』の方法　―包摂される歌謡の意義―

共生人間学	久保　豊	木下惠介におけるクィアな感性の探求　―1950年代の作品を中心に
共生人間学	近藤美佳	ベトナム語南部方言の形成過程に関する一考察
相関環境学	和田江美子	Catalytic reactions of organic compounds by titanium oxides and titanate nanotubes（酸化チタンおよびチタン酸ナノチューブを触媒とした有機化学反応）
相関環境学	許　健	Design of novel garnet persistent phosphors activated with lanthanide and chromium ions with tunable long persistent luminescence from visible to near infrared region（可視域から近赤外域まで波長可変な長残光蛍光を示すランタニドとクロムイオン賦活新規ガーネット長残光蛍光体の設計）
相関環境学	今田弓女	Diversity and evolution of the bryophyte-feeding insects in two early-diverging clades of Lepidoptera and Diptera（鱗翅目と双翅目の2つの初期クレードに属するコケ食昆虫の多様性と進化）
共生文明学	福浦厚子	交霊会におけるシャーマンの実践　―シンガポール華人系寺廟の文化人類学的研究
共生人間学	平田知久	東アジア・東南アジアにおけるインターネットカフェの比較社会学

平成29年度

共生人間学	小川　仁	シピオーネ・アマーティ研究　―慶長遣欧使節とバロック期西欧の日本像
共生人間学	藤井あゆみ	メランコリーのゆくえ　―フロイトの欲動論からクラインの対象関係論へ―
共生人間学	木本幸憲	A Grammar of Arta: A Philippine Negrito Langage
共生文明学	渡　寛法	学術文章教育における「知識変形モデル」に基づく学習支援
共生文明学	早瀬善彦	イデオロギーと政治哲学　―レオ・シュトラウスの政治哲学論―
共生人間学	細越響子	Development and Validation of Skill-Integrated Tasks in EAP Contexts:A Focus on Input Processing Facilitation（学術英語を対象とした技能統合型タスクの開発と検証　―インプット処理の促進に焦点をあてて―）
共生文明学	中屋敷千尋	つながりの文化人類学　インド・チベット系社会における親族と非親族をめぐって
共生人間学	樋口洋子	視覚的な規則性の潜在学習に関する実験心理学的研究
共生人間学	BELLEC, CHLOE ANNE HELENE	なぎなたの変遷に関する歴史社会学的研究　―武士の武器、女性の武道、そして国際発展―
共生人間学	田中亜以子	男たち／女たちの恋愛　―近代日本における「自己」のジェンダー化
共生人間学	加藤由崇	The Nature of Interaction in the Language Classroom：Towards Organic Collaboration Among Participants（言語授業における相互行為の性質　―参与者間の有機的な協働に向けて）
共生人間学	佟　占新	戦後日本における道徳教育の成立過程に関する史的研究　―修身科の廃止から「道徳」の特設まで―
共生文明学	柳田明進	埋蔵環境下における金属製遺物の腐食に関する研究
共生人間学	董　玉嵇	日本語母語話者の中国語音声習得に関する研究　―単母音、有気・無気子音、2音節語の声調を中心に―
共生人間学	神澤克徳	連体修飾構文の認知言語学的研究
共生人間学	佐野泰之	モーリス・メルロ＝ポンティの言語哲学　―「客観的思考よりさらに根本的な理解と反省」をめぐって―
共生人間学	筧　菜奈子	ジャクソン・ポロックの作品における形象と装飾
共生人間学	大喜祐太	語用論的観点から見たドイツ語存在表現　―*es gibt* 構文の分類と用法を中心に―

共生人間学	古川　萌	ジョルジョ・ヴァザーリと美術家の顕彰　―16世紀後半フィレンツェにおける記憶のパトロネージ
共生人間学	ABRAHIMOVICH Yuliya	日本語複合動詞における後項動詞とロシア語動詞接頭辞との対応関係について　―語彙的複合動詞を構成する「～こむ」「～でる」「～だす」「～たつ」「～たてる」の場合―
共生人間学	貫井　隆	「転回」の思想　―ハイデガーの思索の道に通底する中心的なモチーフについて―
共生文明学	喜多野　裕子	Dramatic Functions of Ballad Performances in Shakespeare's Tragedies（Shakespeare 悲劇におけるバラッド・パフォーマンスの劇的機能）
共生文明学	須藤　秀平	近代ドイツ文学における「フォルク」概念の諸相　―クライスト、ゲレス、アイヒェンドルフ
共生文明学	金　旻貞	彩色文化財の内部構造を可視化するためのテラヘルツ波イメージング法の応用研究
共生文明学	開　信介	久生十蘭作品の研究　―〈霧〉と〈二重性〉のモチーフを中心に
共生文明学	石田　曜	中国都市における余暇空間に関する人文地理学的研究
共生文明学	長島　雄毅	幕末・明治初期の京都における労働移動と労働市場　―奉公人の雇用を中心として―
共生文明学	金　京燕	咸錫憲思想における全体像研究の新視座　―「シアル思想」形成史の分析を中心に―
相関環境学	Wong Sato Akira Armando	Diverse adaptations to increase pollination success in zoophilous plants（動物媒植物が送粉成功を高めるための多様な適応）
相関環境学	山本　将也	Evolutionary history and conservation genetics of *Primula* sect. *Reinii* (Primulaceae), an endangered endemic primrose group in Japan（サクラソウ属コイワザクラ節の進化史とその保全）
相関環境学	武元　佑紗	メタルフリー磁性ソフトマテリアルの開発
相関環境学	野中　篤	混成電位による電気化学反応速度制御に基づくデバイスの高機能化
相関環境学	近藤　望	Major element composition of the Hadean crust: constraints from Sm-Nd isotope systematics and high-pressure melting experiments（冥王代地殻の主成分元素組成：Sm-Nd同位体系と高圧融解実験からの制約）
相関環境学	Akanksha Tyagi	Development of novel hybrid catalysis for carbon-carbon couplings by titanium oxide photocatalyst and metal cocatalyst （酸化チタン光触媒と金属助触媒による炭素－炭素結合形成のための新規ハイブリッド触媒の開発）

5．統　計

(1) 総合人間学部

学生数の推移

年度	男		女		計	
1993	112		21		133	
1994	223	(1)	44	(2)	267	(3)
1995	335	(3)	76	(3)	411	(6)
1996	455	(6)	110	(3)	565	(9)
1997	490	(6)	124	(4)	614	(10)
1998	495	(7)	135	(3)	630	(10)
1999	500	(5)	142	(3)	642	(8)
2000	505	(7)	142	(3)	647	(10)
2001	502	(5)	142	(2)	644	(7)
2002	490	(5)	158	(2)	648	(7)
2003	476	(5)	155	(1)	631	(6)
2004	460	(2)	165		625	(2)
2005	425	(2)	174	(1)	599	(3)
2006	415	(1)	173	(1)	588	(2)
2007	398	(1)	170	(1)	568	(2)
2008	390	(1)	168	(1)	558	(2)
2009	385		180		565	
2010	378		183		561	
2011	382		181		563	
2012	404		178		582	
2013	412		175		587	
2014	418		163		581	
2015	420	(1)	172		592	(1)
2016	425	(2)	167	(1)	592	(3)
2017	424	(2)	162	(2)	586	(4)

*(　) 内は留学生数で内数

入学者数の推移

年度	定員	一般入試			特色入試	合計	編入学
		前期		後期			
		文系	理系				
1993	130	55	56	22		130	
1994	130	58	56	20		134	
1995	130	57	55	22		130	
1996	130	57	56	21		134	2
1997	130	55	56	20		130	1
1998	130	57	57	21		135	4
1999	130	56	56	23		134	
2000	130	57	57	20		134	
2001	130	55	56	20		130	1
2002	130	56	56	22		134	1
2003	130	55	56	24		135	
2004	130	55	57	20		132	
2005	120	55	50	17		122	
2006	120	57	51	15		123	1
2007	120	68	56			124	1
2008	120	67	55			122	
2009	120	67	57			124	2
2010	120	67	56			123	2
2011	120	69	59			128	1
2012	120	69	58			127	
2013	120	68	57			125	1
2014	120	67	57			124	
2015	120	67	57			124	1
2016	120	65	54		5	124	
2017	120	65	55		3	123	
合計						3205	18

総合人間学部

転学部の推移

年度	転入	転出
1993	0	0
1994	0	2
1995	19	8
1996	25	7
1997	14	5
1998	15	5
1999	11	4
2000	8	5
2001	11	3
2002	14	2
2003	7	4
2004	10	5
2005	13	5
2006	10	5
2007	6	2
2008	8	2
2009	8	0
2010	3	1
2011	6	1
2012	8	2
2013	5	0
2014	6	2
2015	7	1
2016	8	0
2017	8	0
合計	230	71

留学生の推移

年度	国費留学	KUINEP	大学間学生交流協定
1993	0	0	0
1994	3	0	0
1995	3	0	0
1996	3	0	0
1997	1	6	0
1998	1	1	1
1999	1	4	1
2000	4	5	2
2001	0	1	3
2002	1	6	3
2003	0	13	2
2004	0	9	1
2005	2	10	1
2006	1	9	4
2007	0	5	7
2008	0	18	7
2009	0	25	8
2010	0	20	10
2011	0	20	5
2012	0	29	20
2013	0	10	14
2014	0	29	19
2015	1	29	18
2016	2	35	16
2017	1	54	15
合計	23	338	157

総合人間学部

卒業生の推移

年度	卒業生数	学科・学系別										
		人間学科	国際文化学科	基礎科学科	自然環境学科	計	人間科学系	認知情報学系	国際文明学系	文化環境学系	自然科学系	計
1996	89	25	15	28	21	89						
1997	130	46	24	33	27	130						
1998	126	46	23	29	28	126						
1999	130	41	22	33	34	130						
2000	138	55	25	29	29	138						
2001	133	56	17	33	27	133						
2002	142	48	35	26	33	142						
2003	135	45	27	26	37	135						
2004	151	51	40	29	31	151						
2005	133	50	30	18	35	133						
2006	142	12	9	11	7	39	30	19	26	9	19	103
2007	131	4	6	3		13	24	38	29	15	12	118
2008	123	1			2	3	28	28	37	13	14	120
2009	129						32	33	44	10	10	129
2010	127		1			1	31	27	38	17	13	126
2011	112						19	36	24	9	24	112
2012	122						31	41	29	12	9	122
2013	128		1			1	32	34	37	8	16	127
2014	113						28	35	28	8	14	113
2015	132						27	32	46	14	13	132
2016	134						42	35	24	15	18	134
2017	123						34	33	36	11	9	123
合計	2823											

総合人間学部

卒業生の進路

年度	卒業生数	進学				就職	その他
		大学院			他大学等		
		人間・環境学研究科	他研究科	計			
1996	89	31	11	42	4	38	5
1997	130	44	9	53	3	63	11
1998	126	37	19	56	2	56	12
1999	130	39	22	61	0	48	21
2000	138	40	18	58	2	61	17
2001	133	41	18	59	0	49	25
2002	142	34	30	64	1	51	26
2003	135	40	28	68	2	48	17
2004	151	42	27	69	2	57	23
2005	133	38	24	62	1	55	15
2006	142	38	20	58	3	68	13
2007	131	38	20	58	3	64	6
2008	123	51	0	51	2	66	4
2009	129	34	19	53	0	62	14
2010	127	32	22	54	0	60	13
2011	112	33	19	52	4	45	11
2012	122	32	14	46	2	57	17
2013	128	33	10	43	1	69	15
2014	113	36	7	43	1	61	8
2015	132	33	15	48	1	71	12
2016	134	31	17	48	1	70	15
2017	123	24	11	35	0	71	17
合計	2823	801	380	1181	35	1290	317

(2) 人間・環境学研究科

学生数の推移

年度	修士課程						博士後期課程					
	男		女		計		男		女		計	
1991	30	(1)	8	(0)	38	(1)						
1992	59	(1)	25	(0)	84	(1)						
1993	125	(1)	53	(3)	178	(4)	23	(3)	6	(1)	29	(4)
1994	183	(4)	79	(7)	262	(11)	41	(3)	17	(1)	58	(4)
1995	182	(4)	86	(7)	268	(11)	98	(5)	40	(5)	138	(10)
1996	171	(1)	103	(8)	274	(9)	141	(9)	72	(9)	213	(18)
1997	187	(4)	117	(9)	304	(13)	180	(13)	93	(13)	273	(26)
1998	197	(7)	120	(13)	317	(20)	173	(16)	106	(12)	279	(28)
1999	182	(5)	125	(15)	307	(20)	184	(17)	119	(17)	303	(34)
2000	188	(5)	108	(10)	296	(15)	184	(17)	143	(26)	327	(43)
2001	193	(7)	119	(11)	312	(18)	181	(16)	144	(28)	325	(44)
2002	206	(10)	130	(19)	336	(29)	175	(16)	133	(26)	308	(42)
2003	226	(10)	133	(28)	359	(38)	164	(16)	132	(24)	296	(40)
2004	204	(9)	159	(27)	363	(36)	173	(16)	134	(26)	307	(42)
2005	207	(12)	168	(24)	375	(36)	176	(13)	146	(29)	322	(42)
2006	207	(11)	158	(23)	365	(34)	185	(13)	139	(30)	324	(43)
2007	196	(11)	156	(33)	352	(44)	194	(13)	140	(24)	334	(37)
2008	208	(20)	142	(34)	350	(54)	188	(15)	140	(28)	328	(43)
2009	223	(17)	146	(39)	369	(56)	189	(20)	135	(24)	324	(44)
2010	224	(12)	151	(44)	375	(56)	184	(27)	142	(26)	326	(53)
2011	211	(15)	146	(46)	357	(61)	180	(21)	150	(28)	330	(49)
2012	189	(7)	139	(44)	328	(51)	180	(20)	148	(24)	328	(44)
2013	173	(9)	137	(37)	310	(46)	172	(15)	148	(31)	320	(46)
2014	194	(17)	126	(23)	320	(40)	153	(12)	137	(33)	290	(45)
2015	212	(20)	123	(31)	335	(51)	144	(13)	145	(39)	289	(52)
2016	215	(20)	136	(43)	351	(63)	158	(20)	139	(37)	297	(57)
2017	197	(16)	140	(36)	337	(52)	161	(25)	137	(44)	298	(69)

*( ) 内は留学生数で内数

人間・環境学研究科

修士課程 入学状況

年度	入学者		（内　訳）				専　攻　別					
	定 員	総 数	総合人間学部出身	留学生	社会人	その他	人数	総合人間学部出身	人数	総合人間学部出身	人数	総合人間学部出身
							人間・環境学		文化・地域環境学		環境相関研究	
1991	30	38		1	2	35	38					
1992	30	48		0	0	48	48					
1993	125	126		4	0	122	60		66			
1994	129	127		7	0	120	60		67			
1995	129	123		4	1	118	58		65			
1996	126	122		5	2	115	61		61			
1997	150	138	24	8	2	104	57	10	58	10	23	4
1998	144	138	44	12	0	82	59	22	52	12	27	10
1999	144	127	37	8	2	80	56	17	48	10	23	10
2000	144	136	40	7	1	88	55	13	57	19	24	8
2001	144	134	40	10	1	83	59	20	56	14	19	6
2002	144	158	41	19	0	98	76	23	55	12	27	6
							共生人間学		共生文明学		相関環境学	
2003	164	162	35	18	1	108	61	11	57	14	44	10
2004	164	169	45	18	6	100	67	18	57	16	45	11
2005	164	161	42	17	0	102	68	19	55	13	38	10
2006	164	164	40	17	3	104	62	21	52	10	50	9
2007	164	146	39	22	1	84	62	19	48	7	36	13
2008	164	164	40	25	14	85	73	23	47	8	44	9
2009	164	165	35	26	3	101	66	14	46	9	53	12
2010	164	166	37	27	11	91	71	22	49	7	46	8
2011	164	150	32	26	2	90	69	20	41	4	40	8
2012	164	140	35	21	11	73	60	18	38	7	42	10
2013	164	140	32	21	9	78	79	20	24	6	37	6
2014	164	151	35	15	7	94	68	17	40	10	43	8
2015	164	155	31	34	6	84	67	17	44	8	44	6
2016	164	158	34	26	4	94	56	21	47	6	55	7
2017	164	148	30	24	0	94	68	15	39	7	41	8
合計		3754	768	422	89	2475	1684	380	1269	209	801	179

人間・環境学研究科

修士課程修了者の進路

年度	修了者	進学			就職	その他
	(学位取得)	計	人間・環境学研究科	他研究科		
1992	31	28	22	6	2	1
1993	43	32	30	2	11	0
1994	111	67	62	5	38	6
1995	109	65	61	4	33	11
1996	104	64	62	2	29	11
1997	111	48	46	2	42	21
1998	128	69	69	0	42	17
1999	140	77	76	1	42	21
2000	110	50	49	1	50	10
2001	122	62	57	5	41	19
2002	125	69	62	7	39	17
2003	153	77	67	10	45	31
2004	145	65	67	0	50	30
2005	154	66	73	0	53	35
2006	149	77	73	4	49	23
2007	146	60	57	4	66	20
2008	136	60	56	4	61	15
2009	150	70	64	6	63	17
2010	161	71	70	1	78	12
2011	155	54	51	3	81	20
2012	152	59	55	4	67	26
2013	130	35	31	4	80	15
2014	130	55	53	2	63	12
2015	134	51	47	4	70	13
2016	151	37	36	1	87	27
2017	150	48	47	1	87	15
合計	3330	1516	1443	83	1369	445

人間・環境学研究科

博士後期課程 入学状況

年度	入学者				専攻別									留学生	社会人
	定員	計	進学	編入学	計	進学	編入学	計	進学	編入学	計	進学	編入学		
					人間・環境学			文化・地域環境学			環境相関研究				
1993	31	29	22	7	29	22	7							3	0
1994	31	32	30	2	32	30	2							0	0
1995	78	81	62	19	42	39	3	39	23	16				3	0
1996	78	82	61	21	41	27	14	41	34	7				7	2
1997	78	79	62	17	35	29	6	44	33	11				7	0
1998	75	63	46	17	24	17	7	39	29	10				3	1
1999	91	91	69	22	40	30	10	38	29	9	13	10	3	14	1
2000	85	95	76	19	40	32	8	39	30	9	16	14	2	14	2
2001	85	67	49	18	29	23	6	26	17	9	12	9	3	10	1
2002	85	65	57	8	25	23	2	30	25	5	10	9	1	7	0
					共生人間学			共生文明学			相関環境学				
2003	68	75	62	13	32	27	5	31	24	7	12	11	1	13	2
2004	68	80	67	13	36	32	4	30	25	5	14	10	4	14	1
2005	68	80	67	13	36	32	4	30	25	5	14	10	4	11	1
2006	68	85	73	12	44	42	2	30	23	7	11	8	3	12	3
2007	68	84	73	11	44	42	2	29	22	7	11	9	2	8	1
2008	68	75	57	18	33	26	7	32	24	8	10	7	3	15	8
2009	68	71	56	15	37	25	12	22	19	3	12	12	0	17	4
2010	68	82	64	18	40	31	9	25	20	5	17	13	4	17	11
2011	68	86	70	16	51	43	8	20	17	3	15	10	5	13	6
2012	68	69	52	17	36	27	9	24	19	5	9	6	3	12	14
2013	68	70	55	15	45	35	10	17	15	2	8	5	3	15	6
2014	68	50	31	19	23	13	10	19	15	4	8	3	5	15	6
2015	68	79	53	26	46	35	11	17	8	9	16	10	6	18	12
2016	68	70	49	21	37	28	9	20	13	7	13	8	5	13	18
2017	68	59	36	23	32	20	12	16	12	4	11	4	7	21	8
合計	1737	1799	1399	400	909	730	179	658	501	157	232	168	64	282	108

人間・環境学研究科

博士後期課程 学位取得状況

年度	課程博士	論文博士
1995	9	0
1996	11	1
1997	25	3
1998	28	2
1999	29	0
2000	30	0
2001	29	2
2002	48	5
2003	45	1
2004	41	1
2005	42	6
2006	41	2
2007	41	3
2008	52	3
2009	49	3
2010	41	3
2011	44	2
2012	48	0
2013	40	0
2014	46	4
2015	49	6
2016	37	2
2017	34	0
合計	859	49

博士後期課程 進路

年度	修了（学位取得）	研究指導認定退学	就職	その他
1995	9	3	1	11
1996	11	12	1	22
1997	25	25	25	25
1998	23	37	13	47
1999	19	35	24	30
2000	17	38	31	24
2001	24	44	8	60
2002	27	37	14	50
2003	34	34	24	44
2004	21	34	31	24
2005	25	42	7	60
2006	28	41	15	54
2007	27	45	47	25
2008	28	37	26	39
2009	26	47	40	33
2010	19	46	46	19
2011	14	44	27	31
2012	18	52	29	41
2013	22	47	39	30
2014	21	50	45	26
2015	19	43	33	29
2016	17	29	21	25
2017	13	47	25	35
合計	487	869	572	784

6．教員一覧（2018年4月現在）

・以下の教員一覧は、総合人間学部、人間・環境学研究科に在籍していた期間を示すもので、2018年4月時点のものです。

・1991～2011年度の『京都大学職員録』、2012～2018年度のリーフレット『京都大学大学院人間・環境学研究科』に基づいて作成しています。ただし、1997年度の『京都大学職員録』は入手できませんでしたので、この年の『学生便覧』に記載されている教員名簿を参照しました。

・年度途中での着任・退任の場合の記載は、2011年度までは『京都大学職員録』に、それ以降は『京都大学大学院人間・環境学研究科』に基づいています。

氏名	年度
あ	
青木伸好	1992～1993
青山拓央	2017～現在
青山秀明	1993～2002
赤尾栄慶	2006～2014
赤松紀彦	1993～現在
秋葉知温	1993～1997
浅川滋男	1994～2000
浅田健太朗	2002～2004
淺湫毅	2012～2013
	2018～現在
淺野潔	1992～2001
浅野耕太	2005～現在
足利健亮	1993～1998
足立匡義	2016～現在
足立幸男	1993～2007
阿辻哲次	1993～2016
アトモア, ヘンリー・フィリップ ATMORE, Henry Philip	2005～2006
安部浩	2000～2002
	2006～現在
天野太郎	1997～2003
雨澤浩史	1994～2006
荒井宏司	1994～1994
荒木茂	1993～1997
荒谷邦雄	1994～2000
蘭信三	1997～2007
有福孝岳	1992～2002
安藤和雄	1996～1997
安藤哲郎	2013～2013
五十嵐忠孝	1992～1997
五十嵐樹彦	2008～2014
池田和夫	1993～1993
池田克巳	1995～2001
池田寛子	2016～現在
池田浩士	1993～2003
池永満生	1992～2000
池野旬	1997～1997
池本幸生	1993～1997
石井美保	2013～現在
石川尚人	1993～現在
石川光庸	1993～2004
石坂恭一	1992～1998
石﨑寛治	1992～1993
石田明文	1993～2015
石原昭彦	1993～現在
石原秀樹	1993～1994
泉武夫	1999～2005
磯江景孜	1993～1994
五十棲泰人	1996～2005
市岡孝朗	2004～現在
市川光雄	1992～1997
伊藤淳子	1993～1994
伊東史朗	1994～1997
伊藤哲明	2007～2012

稲垣直樹	1993～2016
稲垣　稜	2004～2005
稲田伊久穂	1993～2002
今西英器	1993～2002
伊從　勉	1993～2014
岩井齊良	1993～1999
岩谷彩子	2015～現在
上　正明	1993～2002
上木直昌	1999～現在
上田純平	2012～現在
上田哲生	1993～2002
植松恒夫	1993～2002
鵜飼大介	2008～現在
宇佐美　誠	2013～現在
牛川喜幸	1994～1994
宇敷重廣	1992～2015
内田賢徳	1993～2011
内田由紀子	2012～現在
内本喜晴	2005～現在
内山智貴	2018～現在
海原　徹	1992～1998
上横手雅敬	1993～1993
江川達郎	2017～現在
江島義道	1992～2003
江田憲治	2004～現在
笈田映一	2001～2001
應地利明	1995～1997
大川　勇	1993～現在
大木　充	1993～2011
大倉敬宏	1993～2000
大倉得史	2009～現在
大河内隆之	2008～2011
大澤真幸	1997～2009
太田　出	2016～現在
太田　至	1993～1997
大谷晋一	1993～1998
大槻太毅	2016～現在
大畠トキ子	1993～2003
大原嘉豊	2014～現在
大東祥孝	1992～2009
岡　真理	2002～現在
岡　與志男	1993～1999
岡田温司	1993～現在
岡田敬司	1992～2012
小方　登	2001～現在
小川　侃	1992～2007
奥田敏広	1993～現在
小倉紀蔵	2006～現在
尾里建二郎	1993～1993
小澤　毅	2010～2013
小田伸午	1993～2010
愛宕　元	1993～2006
小野健吉	2010～2015
尾野照治	1993～2012
尾野善裕	2012～2013
	2015～現在
小畑史子	2004～現在
小山田　明	1993～現在
折笠有基	2011～2015

か

海田能宏	1993～1997
掛谷　誠	1993～1997
笠原晧司	1993～1995
風間計博	2012～現在
梶井克純	2012～現在
梶丸　岳	2017～現在
片桐　晃	1993～2004
勝又直也	2004～現在
桂山康司	1993～現在
葛山泰央	2000～2003
加藤信一	1993～2002
加藤立久	2011～現在
加藤　剛	1993～1997
加藤規弘	1998～1998

加藤　眞　1993〜現在
加藤　護　2001〜現在
加藤幹郎　1993〜2014
金坂清則　1996〜2011
金丸敏幸　2007〜現在
金子克哉　2001〜2016
金子守恵　2011〜2015
狩野博幸　1994〜2005
鎌田浩毅　1998〜現在
蒲池美鶴　1993〜2001
神川龍馬　2013〜現在
神谷之康　2016〜現在
川合葉子　1993〜1994
河上繁樹　1994〜2000
川北　篤　2007〜2009
川﨑辰夫　1992〜1994
河﨑　靖　1993〜現在
川島昭夫　1993〜2015
川端善明　1993〜1995
川本卓男　2008〜現在
カンスタブル, ジョン・ボーデン
CONSTABLE, John Bowden
1993〜1999
木上　淳　1994〜1998
木坂正史　1999〜現在
北畠能房　1993〜2002
北山　忍　1993〜2002
木下千花　2016〜現在
木下冨雄　1992〜1992
金　志玹　2013〜2014
木村大治　1997〜1997
木村　崇　1993〜2007
行者明彦　1993〜1997
ギルモア, アレクサンダー
GILMORE, Alexander 2007〜2009
際本泰士　1998〜2008
鯨岡　峻　1995〜2006
久代恵介　2004〜2011
2013〜現在
久保智康　2001〜2011
窪寺　茂　2004〜2008
倉石一郎　2014〜現在
倉橋和義　1998〜2007
栗原紀夫　1993〜1995
桒山智成　2010〜現在
神﨑素樹　2007〜現在
合田昌史　2013〜現在
髙津春久　1993〜1996
高妻洋成　2010〜現在
河野敬雄　1992〜2002
肥塚隆保　2003〜2008
小岸　昭　1993〜2000
小木曽　哲　2008〜現在
越野茂美　1993〜1995
児嶋眞平　1992〜1997
小島基洋　2012〜現在
小島泰雄　2011〜現在
小玉英雄　1992〜1992
小寺昭次郎　1993〜1993
後藤喬雄　1993〜2002
小西隆士　2008〜現在
小畠啓邦　1993〜1996
小林茂夫　1992〜1997
2000〜2011
小林純也　2015〜現在
小林恒明　1993〜1994
小原丈明　2007〜2009
小松賢志　2003〜2014
小松直樹　2015〜現在
小村　豊　2016〜現在
小山静子　2001〜現在
小山直樹　1993〜1997

さ

齋木　潤　2005〜現在
三枝裕美　1997〜2001
齋藤治之　2004〜現在
齋藤　裕　1993〜2002

齋藤嘉臣　2013～現在
佐伯啓思　1993～2014
酒井　敏　1993～現在
阪上雅昭　1996～現在
阪口翔太　2016～現在
坂本陽介　2015～現在
相良直彦　1992～2000
櫻井正一郎　1993～1998
櫻川貴司　1993～現在
笹尾洋介　2018～現在
佐藤博俊　2018～現在
佐藤雅彦　1996～2004
佐藤康彦　1993～1996
佐藤義之　1998～現在
佐野哲郎　1993～1993
佐野　宏　2012～現在
佐野光貞　1995～現在
佐野泰之　2017～現在
佐野　亘　2008～現在
沢田正昭　1994～2002
澤村　誠　1993～1999
椎名　隆　1991～1999
塩塚秀一郎　2012～2017
四日谷敬子　1993～2007
鴫原眞一　1993～1995
重田眞義　1996～1997
篠原資明　1994～2015
柴田　悠　2016～現在
柴山桂太　2015～現在
島崎　健　1993～2010
島田三郎　1993～1994
島田周平　1997～1997
島田真杉　1993～2008
清水重敦　2010～2012
清水扇丈　2015～現在
下坂　守　1994～1998
シャピロ, ジェローム・フランクリン
SHAPIRO, Jerome Franklin
1993～1993
白石　隆　1997～1997
新宮一成　1991～2015
新林卓也　2018～現在
水光雅則　1993～2007
菅原和孝　1993～2014
杉万俊夫　1993～2016
杉山勝之　1997～2002
杉山雅人　1993～現在
鈴木雅之　1993～2009
須田千里　1998～現在
スチュワート, ティモシー・ウィリアム
STEWART, Timothy William
2011～現在
角　大輝　2017～現在
瀬戸口浩彰　1998～現在
早田次郎　1994～2002
薗田　稔　1993～1999

た

大黒弘慈　2002～現在
多賀　茂　1993～現在
髙木紀明　2018～現在
髙阪　章　1993～1993
高崎金久　1993～2013
高澤淳夫　1993～1993
高田　篤　1998～2003
髙田　穣　2015～現在
髙橋　幸　2015～現在
髙槇三郎　1993～2000
髙橋　隆　1992～1997
髙橋弘樹　2001～現在
髙橋　眞　1993～1997
高橋正立　1992～1993
髙橋義人　1993～2008
高橋由典　1993～2015
髙村泰雄　1993～1997
髙谷　修　1993～現在

多喜正泰　2004～2013
田口　健　2002～2006
田口貞善　1992～2004
田口義弘　1993～1995
竹市明弘　1991～1996
武内　章　1993～1997
武末真二　1993～2002
武田宙也　2016～現在
竹本篤史　1994～1997
竹安邦夫　1995～2014
田地野　彰　2002～2017
立本成文　1994～1997
巽　好幸　1993～1997
田中耕司　1993～1997
田中二郎　1993～1997
田中真介　1993～1998
2003～現在
田中　喬　1992～1996
田中　淡　2003～2009
田中　仁　1993～1995
田中　禮　1993～1994
田中雅一　1993～現在
田部勢津久　1993～現在
田辺征夫　1999～2004
田邊玲子　1993～現在
谷　泰　1993～1996
谷口一美　2012～現在
玉田　攻　1993～2006
玉田芳英　2013～現在
玉田芳史　1993～1997
田村　類　1997～2017
ダルスキー, デビッド・ジュローム
DALSKY, David Jerome
2007～現在
旦代晃一　1993～1994
壇辻正剛　2003～現在
千坂　修　2015～現在

チャンドラー, ディヴィッド・ジョン
CHANDLER, David John
2000～2002
立木康介　1999～2006
立木秀樹　1998～現在
津江広人　2002～現在
塚原信行　2015～現在
月浦　崇　2011～現在
辻　正博　2007～現在
津田謹輔　1993～2012
土屋健治　1993～1994
土屋　徹　2003～現在
土屋由香　2017～現在
坪内良博　1993～1997
ディピエトロ, ケリー・アンソニー
DIPIETRO, Cary Anthony
2003～2004
ディブレクト, マシュー・ジョセフ
DE BRECHT, Matthew Joseph
2016～現在
デニー, ジョン・ティモシー
DENNY, John Timothy
2002～2004
テルフォードムーア, アントニー
TELFORD-MOORE, Antony
1997～1999
東郷雄二　1992～2016
東樹宏和　2012～2016
藤堂　剛　1995～1999
徳岡　徹　1998～2007
戸崎充男　2010～現在
戸田剛文　2005～現在
戸田三津夫　1991～1994
戸部　博　1992～1999
冨田博之　1993～2006
冨田恭彦　1993～2016
豊島喜則　1992～2000
豊田哲也　1994～1996
トラウデン, ディーター
TRAUDEN, Dieter　1993～現在

な

内藤栄一　1999～2005
内藤道雄　1993～1997

長尾　充　2002〜2002
中嶋節子　2006〜現在
永田素彦　2007〜現在
永友文子　2013〜2014
中西輝政　1995〜2011
永益英敏　1993〜1996
中村榮太郎　1993〜2004
中森誉之　2003〜現在
長屋政勝　1993〜2006
那須耕介　2013〜現在
奈良安雄　1994〜1996
南條浩輝　2016〜現在
難波洋三　2000〜2007
西井正弘　1993〜2009
西垣安比古　1999〜2014
西上　実　1994〜2011
西川完途　2001〜現在
西渕光昭　1997〜1997
西村健一郎　1992〜2000
西村三郎　1992〜1993
西村重夫　1994〜1997
西村　稔　2004〜2011
西本美彦　1993〜2003
西山　享　1993〜2002
西山教行　2005〜現在
西山良平　1993〜2016
西脇常記　1993〜2005
西和田公正　1993〜2002
丹羽隆昭　1993〜2007
ノイマン, ベルント
NEUMANN, Bernd　1993〜2007
野村　修　1993〜1993

は

灰野昭郎　1994〜1998
橋本史朗　1993〜1996
長谷川千尋　2014〜現在
畑　政義　1993〜2002
畑　安雄　2004〜2015
幡野恭子　1993〜現在
バッテ, パッラヴィ
BHATTE, Pallavi　2015〜現在
服部文昭　1993〜現在
花田禎一　1993〜2002
バニュウヴェンヌィズ, ブリュノ
VANNIEUWENHUYSE, Bruno
2002〜2004
馬場　基　2013〜現在
馬場正昭　1993〜2002
濱田啓介　1993〜1993
早川尚男　1996〜2002
林　達也　2004〜現在
林　哲介　1993〜2005
林　直顕　2002〜2010
林　直人　1996〜2002
ハヤシ, ブライアン・マサル
HAYASHI, Brian Masaru
1999〜2016
林　行夫　1995〜1997
林　幸信　1993〜1994
速水醇一　1992〜1995
速水正憲　1992〜2005
ピーターソン, マーク
PETERSON, Mark　2007〜現在
日置尋久　1997〜現在
飛鷹　節　1993〜1995
平野嘉彦　1993〜1996
廣戸　聡　2018〜現在
廣野由美子　2000〜現在
ファウザー, ロバート・ジョセフ
FOUSER, Robert Joseph
2002〜2005
深尾浩次　1993〜2001
福井勝義　1993〜2006
福井捷朗　1996〜1997
福岡和子　1993〜2009
福塚友和　2007〜2009
藤井道彦　1999〜2002
藤家龍雄　1993〜1993
藤木　明　1992〜1992
藤田糸子　2000〜現在

藤田健一　1997〜現在
藤田耕司　1996〜現在
藤吉　奏　2018〜現在
藤原直樹　2004〜現在
藤原　学　2000〜現在
舟橋春彦　2011〜現在
船橋新太郎　1992〜2015
船曳康子　2015〜現在
ブラッドショー, グレアム・エリック・ロナルド
BRADSHAW, Graham Eric Ronald
1993〜1996
古川久雄　1993〜1997
ベッカー, カール・ブラッドリー
BECKER, Carl Bradley
1993〜2016
細川　浩　2006〜現在
細田公則　1995〜2002
細見和之　2016〜現在
堀　智孝　1992〜2009

ま

マークス, エドワード・ダニエル
MARX, Edward Daniel
1997〜2001
前川玲子　1993〜2016
前川　覚　1993〜2012
前田成文　1993〜1993
増井正哉　2015〜現在
町田　章　1994〜1997
松井　章　1994〜2012
松井正文　1991〜2014
松浦　茂　1993〜2015
松江　崇　2017〜現在
松木敏彦　1993〜2002
松下和夫　2004〜2012
松島　征　1993〜2004
松田　清　1993〜2011
松田　哲　1992〜2002
松田英男　1993〜現在
松原孝治　1993〜2003
松村　潔　2000〜2004
松村圭一郎　2005〜2009
松村恵司　2006〜2008
松村道一　1993〜2012
松本　澄　1991〜2002
松本啓二朗　1994〜1998
松本卓也　2016〜現在
松本　眞　2000〜2001
間宮陽介　1993〜2012
丸橋良雄　1993〜2015
丸山圭藏　1993〜1999
三浦智行　1999〜現在
水口　学　2000〜2000
水嶋春朔　1994〜1994
水野一晴　1997〜1997
水野廣祐　1996〜1997
水野尚之　1993〜現在
水野眞理　1993〜現在
三谷惠子　1999〜2012
道坂昭廣　1999〜現在
道下敏則　1993〜2014
道籏泰三　1993〜2014
光谷拓実　1997〜2007
湊　小太郎　1992〜1996
三原弟平　1993〜2009
見平　典　2008〜現在
三室　守　2002〜2010
宮内　弘　1993〜1995
宮川禎一　2011〜現在
宮﨑興二　1992〜2003
宮下精二　1992〜1995
宮下英明　2002〜現在
宮本宗實　1993〜2002
宮本盛太郎　1993〜2002

宮本嘉久	1993〜2017
三好郁朗	1993〜2000
鞭　亨	1993〜1999
村井潤一	1992〜1994
村形明子	1993〜2003
村上真也	2000〜2001
村中重利	1993〜2008
村本由紀子	1998〜1999
メニル, エヴリーヌ MESNIL, Evelyne	1993〜現在
毛利明博	1992〜1997
元木泰雄	1997〜現在
守田貴弘	2017〜現在
森谷敏夫	1993〜2015
森成隆夫	2012〜現在
森本芳則	1993〜2015
モンベール, ジュヌヴィエーブ MOMBER, Geneviéve	1993〜1998

や

八木　保	1993〜1996
安井邦夫	1992〜2004
安田浩一朗	1996〜2003
矢野　暢	1993〜1993
山内　淳	1992〜2002
山内正敏	1993〜2002
山川　暁	2015〜現在
山口　巖	1993〜1997
山口　裕	1993〜1996
山口良平	1993〜2011
山﨑愛一	2000〜2002
山崎　健	2013〜現在
山下　清	1993〜2000
山下善也	2011〜2013
山田　勇	1993〜1997
山田孝子	1997〜2011
山田　誠	1993〜2008
山田　稔	1993〜1993
山中敏史	1995〜2008
山梨正明	1992〜2012
山村亜希	2015〜現在
山本　旭	2016〜現在
山本健太郎	2016〜現在
山本淳一	1993〜1995
山本利治	1993〜1995
山本直一	1993〜2002
山本英男	2006〜2017
山本洋紀	2001〜現在
山本行男	1993〜2014
家森幸男	1993〜2000
湯浅博章	1995〜1996
湯山哲守	1993〜2007
吉江　崇	2017〜現在
吉積巳貴	2013〜2017
吉田　純	2001〜現在
吉田　忠	1993〜1996
吉田鉄平	2013〜現在
吉田寿雄	2013〜現在
吉田彌太郎	1996〜1997
吉野雄二	1993〜1998
吉原久仁夫	1993〜1997
吉村成弘	2004〜現在
依田義丸	1993〜2011
米山俊直	1993〜1993
ヨリッセン, エンゲルベルト JORIβEN, Engelbert	1993〜2012

ら

ラローズ, ジャック LALLOZ, Jacques	1993〜2008
李　長波	1997〜2010
刘　隆健	1999〜2000

ルロワ, パトリス・アンドレ
LEROY, Patrice Andre 1999〜2001

レオン, ホアン・エンリク
LEON, Juan Enrique 1994〜2001

六反田　収　1993〜1997

ロングコープ, ピーター・ダンカン
LONGCOPE, Peter Duncan 2005〜2006

わ

若島　正　1993〜1994

若杉準治　2000〜2010

若野省己　1993〜1993

若松佑子　1993〜1993

渡邊久義　1993〜1996

渡邊雅之　1993〜現在

渡部　幹　2000〜2006

編集後記

京都大学総合人間学部、大学院人間・環境学研究科の設立25周年記念事業の一環として、本書、『25年のあゆみ』を上梓いたします。

総合人間学部、大学院人間・環境学研究科は、1869（明治2）年に設立された舎密局と洋学校をそのルーツとしており、第三高等中学校、第三高等学校を経て、新制大学のもとでは教養部として存続してきた前史をもっています。そして教養部改革の試みの中で、人間・環境学研究科は1991（平成3）年4月に京都大学における最初の独立研究科として、総合人間学部は1992（平成4）年10月に京都大学の10番目の学部として設置されました。明治初期からの歴史のうえに、総合人間学部、人間・環境学研究科が設立され、25年を閲したことには実に感慨深いものがあり、この記念誌を刊行できましたことを心から喜びたいと思います。

本記念誌には、まず写真として、教養部、設立時の総合人間学部や人間・環境学研究科、現在の総合人間学部棟と人間・環境学研究科棟を掲載しております。これらの写真を通して、長い年月の経過を少しでも感じていただけましたら幸いです。次いで、2018（平成30）年3月25日に開催しました記念事業の様子をお伝えしたいと思います。記念事業として、「総人・人環の教育経験から得たもの」と題したプレ・シンポジウム、山極壽一京都大学総長をはじめ、多くの方々にご臨席いただいた記念式典、「文理融合・連携の学際・教養教育がめざすもの」と題したシンポジウムを行いましたが、これらを誌上に再現いたしました。記念事業を通して、本学部・研究科が教育・研究を通して追究してきたものや、めざしている教育・研究の姿が、明らかになったと考えております。

また卒業生や修了生、名誉教授の方々に、本学部・研究科での教育・研究の経験が現在の生き方や仕事に与えた影響や、本学部・研究科での教育・研究の意義などについて寄稿を依頼しましたところ、多くの方々から原稿を頂戴いたしました。それらをすべて掲載させていただきましたが、懐かしい思い出話や、教育・研究に対する有益な示唆や励ましをいただいたことに、厚くお礼を申し上げる次第です。そしてこの間の本学部・研究科での教育・研究のありようを知るために、沿革、卒業論文・卒業研究や修士論文、博士論文の題目一覧、統計資料、教員一覧も掲載しました。これらを通して、この25年間の豊かな教育・研究のあゆみの一端をお伝えできるのではないかと考えております。

本記念誌の編集にあたっては、充実した内容に仕上げるべく、誠心誠意努力したつもりですが、限られた時間での作業であったために、至らぬ点も多々あるのではないかと危惧しております。どうかご海容のほどをお願いいたします。また本記念誌の編集のために、多くの方々から多大なご協力を賜りました。特に総務掛、大学院掛、教務掛、学系事務室、吉田南総合図書館のみなさんに深謝したいと思います。

2018（平成30）年9月
設立25周年記念誌編集委員会
委員長　小山　静子
委　員　石川　尚人
小島　泰雄
齋木　　潤
杉山　雅人
宮本　嘉久

25年のあゆみ
2018（平成30）年9月28日 発行
編集：設立25周年記念誌編集委員会
発行：京都大学総合人間学部、大学院人間・環境学研究科
京都市左京区吉田二本松町
印刷：津田印刷
京都市左京区岩倉中大鷺町14

Faculty of Integrated Human Studies
Graduate School of
Human and Environmental Studies
Kyoto University
2018